
オリ主のオリ主によるオリ主の為の原作ブレイク

rurata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリ主のオリ主によるオリ主の為の原作ブレイク

【Nコード】

N3155K

【作者名】

rurata

【あらすじ】

この物語は50%自己満足、50%妄想、そして120%ご都合主義でできています。なお、原作は最初からブレイクしまくり、キヤラは原作から懸け離れています。そして、テンションにより文体が変わるかもしれません。もしそういうのが不快と思っているのなら、今すぐ『戻る』を押す事を推奨します。以下、紹介文になります。

有りの仮起きた事を話すぜ。昨日風呂に入って寝て起きたら、俺は

死んでいた。なんと、神様の暇つぶしの為に殺されたと。始めは、それは、それはもう、頭に來たさ。でも、何かチートにしてくれるっていうし、『ネギま』に転生させてくれるっていうじゃん？ とりあえず前向きに生きて行こうと思う。ただ一つの思い残しは死ぬ前にパソコンのデータを消去できなかったことだ。

テンプレートと言つ名のプロローグ (前書き)

つい妄想が膨らんで勢いで書いたSSです。もしよろしければ読んで下さい。楽しんでいただけたら嬉しいです。

テンプレと言つ名のプロローグ

ガシ！ボカ！俺死んだ！スイーツ（笑）

・

・

・

って、おい！ いきなり死んでんのかよっ！

ていうか、俺どうやって死んだんだ？

確か昨日は普通に風呂に入ってから布団で寝た筈・・・

『おお、それはワシがやったんじゃ。』

はあ？！ 誰？ ていうか、俺の考えを読むな！

『ワシはお主の言うところの神様じゃ。存分に敬いたまえ。だから
考えも読むことができるのじゃ。』

神様だあ〜？

ハハハハ面白いこと言つね〜。あまりにも面白くて思わずアメ
リカ風に笑つちまったじゃねーか。

『面白いと言われてものう。本当の事じゃし・・・』

はいはい、じゃあ神様でいいよもう。

当然、神様ならこの状況が説明できるだろうな。

『無論、説明できるぞ。ずばり、お主は死んだのじゃ。』

これはやっぱり死んでるのか！？ やべー、俺のPCってアニメやエロゲとかでいっぱいじゃん！ 俺の恥が全世界に知られてしまう！
H A Z U K A S I ~ ~ ! ! !

『それは心配しなくてもいいぞい。どうせ隠れオタクの一人や二人、死んでも家族以外に誰も気にせんじやろう。』

はあ！？ 馬鹿言ってるじゃねえ！ 隠れオタクつつうたら表では普通に学生していてそれなりに外観を気にしてるんだよっ！！

つまり友達もそれなりにいるし、俺の死を悲しむ！（多分）

『多分って自分で言っとするではないか。』

そ・れ・が（無視）俺が隠れオタクだったって知ったらどうなる！

俺が変人に思っじゃねーか！！

はあ、鬱だ。死のう。

『もうすでに死んだるがな。』

それだよ、それ！

勝手に俺を殺すんじゃないやねえよ！ 一体何様のつもりだ！！

『神様。』

だあああああ！！！！！！！！！！

『どうした？ 随分興奮しとるようじゃが。』

当たり前だ！ 寝て起きたら死んでて、それがこんなふざけた神様の気まぐれだって知ったばかりなんだぞ！ これが興奮しないでいられるわけがあるか！

『まあまあ、取り敢えず落ち着くのじゃ。言っただじゃろ？ ワシはすぐく暇なんじゃ。じゃから、お主に色々と特典を付けて転生させてそれを見物する。精々ワシを楽しませてくれ。』

転生？ つまりはあれか？ 俺にチートオリ主になれと？

『うむ。そうじゃ。』

はあ・・・まあ、すでに死んでる見たいだし、それでもいいか。

『ふむ、物わかりがいいのう。』

だって、俺をこのまま生き返らせないつもりなんだろ？

『それはつまらんからの。』

なら、前向きに考えるしかねえじゃねえか。それに、みんな人生に一度はチートに憧れるんじゃないやね？

『そうかそうか。それはよかったのじゃ。』

俺のアパートが潰れたって事はパソコンも壊れてデータ無くなった
だろうし・・・

で、どんな特典を付けてくれんだ？ あと、どこに転生させるんだ？

『お主を吸血鬼にする。世界はお主の好きなネギまじゃ。』

お、まじ？ それってかなりチートだな。

『そして、吸血鬼の能力は型月、ヘルシング、そしてもちろんネギ
まの真祖に準ずる。その上、吸血衝動や作った死徒の血への依存症
も無くそう！ これで君の死徒はほとんど真祖と同じじゃな。君よ
りは弱くなるが、そこら辺の真祖よりはずっと強いぞ。あと、血を
吸っても死徒にさせるかはお主の選択に任せよう。どうじゃ？ す
ごいじゃろっ？』

おおー、パチパチパチ。

型月の真祖ってつまり星とのリンク、そしてほぼ無限の魔力？ そ
れに固有結界！

ヘルシングはあれか？ 血を吸った生き物の特徴を吸収するやつか
？ ということは吸えば吸うほど最強になる？

なんというチートｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

むふふふふ

『じゃあ、もういいかの？ いきなり原作前に転生させても、力に慣れていなくて何もできなくてもつまらんしのう・・・そうじゃな、大体原作開始の650年ぐらい前に転生させよう。では、送るぞ？ って、聞いとらん見たいのう。まあ、いいじゃろ。さっさと行け。』

ゲシ！

お、なんだこの穴？ どわーーーー、おーーーーちーーーーーる

『ちなみにお主のパソコンだ・け・は無事じゃったぞ！ ではの、期待しとるぞ！』

し-----に-----さ-----ら-----せ-----
・
・

テンプレートと言った名のプロローグ (後書き)

というわけで始めてしまいました。これからよろしくお願いします。

第一話：ある日、森の中で

あああああああああ~~~~~!!!!!!

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

「ぐえっ!」

.....

「いつてええええええええええええ!!!!!!」

体がめちやめちや痛い!

何か、周りは直径5メートルくらいのクレーターになってるし、もし俺が吸血鬼化していなかったら普通に死んでたんじゃねえ?

でも、流石は吸血鬼の体。五分もしたら痛みも引いて、起き上がった。

（うむ、どこだ、ここ?）

クレーターの壁をよじ登って外に出て辺りを見ると木がいっぱい。夜みたいで、あんまり遠く見えないが、その木は大分向こうまで続いているようだ。

（森っぽいな。）

そう言えば麻帆良に森があったな。もしかして、麻帆良学園の近く

か？

「取り敢えず歩いてみるか。街はどっちだ？ むんんん．．．まあ、
適当でいいか。いつかは街っぽいところに辿り着くだろう。」

問題は方向だが．．．おっ？ そこに丁度いい具合の木の棒が。

「よしっ！」

ふんっ！

木の棒を景気よく思いっきり上に投げた後、すぐに後悔した。

「吸血鬼の力、まじパネエっす。」

木の棒は空に上がったまま全然落ちてこねえ．．．

（飛行機飛んでないように！）

木の棒が飛んでる飛行機とかに当たらないように祈る。もちろん対象はあのクソ神以外。

「反省終わり！ ここは気を取り直してやり直すべきだな、うん。」
そして木の棒をもう一つ拾い、投げる準備に入り、そこで思いとどまる。

「今度は倒すだけにするか（汗）」

木の棒を立てて、そして手を離す。

手を離れた木の棒はゆっくりと倒れ、カランと言う音を立てて、数秒転がった後に止まった。

「あつちか。あつちは・・・西か？ いや、もしかして北？ まあ、どっちでもいいか。」

ていうか、太陽が出ていないのに方角が分かるほどサバイバルSK ILLI高くないだろう、俺。

とにかくあつちの方に歩こう。

そして一步を踏み出した時？？

バキッ！

「ぐはっ！」

さっき上に投げた木の棒が落ちて来て頭を陥没させた。

死。

チーン

残機（ ? 1 ）

・

・

・・・

数分後

「ふっかーーーーーっ！」

頭の怪我也すっかり治り、叫びながら飛び上がる。

まだズキズキと痛むが、少しすればそれも収まるだろう。流石吸血鬼！

「さて、出発するか！」

折角^{また}生き返ったんだ。楽しまなきゃ損だろ？

* * *

そして森で起きてから何日か経った。

そして俺はまだ歩いている。

「・・・・・・・・・・」

・・・

「・・・・・・・・つがああああ！ どんどんっ！ーーーーー！..... 街はど
つちだああああ！.....！」

もう我慢の限界だ！

吸血鬼だから食べなくても生きていけるが、つまらん！

このままだとこの森を潰してしまいそうだ（できるかは分からんが）
とにかく、街は愚か、人が通ったような道もない。どうすればいいんだよ！？

* * *

更に数日後。

「ふふふ・・・くくく・・・あつ、その妖精さん、楽しそうですね。もしよろしければ私めも仲間に入れて下さらないでしょうか？」

ヤバイ。早くどうにかしないと、こいつ駄目になるぞ（もう手遅れ感が否めない）

そして、もう歩きすぎて、体はなんともないのに、精神の疲労がリミットブレイクしそうな時、ふと森の開けた場所を見つけた。

「ふんふんふーん。あつ、このはなきれーい。おかあさまにもってかえろう。」

そこにいたのはこの世界に来てから俺が始めて会う人間（むしろ天使？）がいた。どうやら、少女のようで、ここへは一人で遊ぶ為に来たらしい。

歳は五歳ほどだろうか？ 腰まで続く、流れるような長い金髪で、ちよっと時代めいた白いフリフリのドレスを着ていた。鼻歌まじりに笑っている少女は花を集めて来ているらしい。

俺は決して口が付く人ではないが（と自分に言い聞かせている）、その光景はまるで絵画に見えて、思わず見とれてしまった。

ガサガサ

「ひっ?!」

彼女に見とれている間、藪に服を引っ掛けたらしい。少女は突然の音にビクつと体全部で驚いてこっちを見た。

「だ、だれ・・・?」

おずおず聞く少女の姿があまりにも俺の保護欲を刺激して、俺は気をつけていないと彼女を抱き上げて持ち帰りそうになっていた（犯罪です）

「あ、あの〜・・・」

おっと、俺が何も言わないから変に思ったようだ。ちなみに、星とのリンクのおかげでこっちの言葉はばっちしだぜ

「ああ、ごめんね、君があまりに可愛くてちよっと見惚れてしまったんだ。」

「かわっ・・・//」

可愛いと言われ、少女は頬を染めて俯いた。

ちよ、何この可愛い生き物!?

「あはは、それで、俺は遠くから旅で来たんだけど、ちょっと森で迷っちゃってさ。もしよかったら、街まで案内してくれないかな?」

「あのね、わたし、まちまでいつちゃだめっておとうさまとおかあさまにいわれてるの。」
と、申し訳なさそうに表情を暗くさせる少女。

(はう、その顔もイイ! でも、いたいけな少女を落ち込ませてどうするんだ!! 何か言うんだ、宗治!)

「全然大丈夫だよ! えっと、それじゃあ、君のお家に連れてってくれる? そこから一人で街まで行くから!」

そう言うと、少女はぱつと笑顔を咲かせて勢いよく頭を縦に振る。

「うん! おうちにあんないするよ! こっちだよ。」

そして俺の手を取り、ぐいぐい引っぱっていく。

「ありがとう。」

(でも、あんまり他人を信用するのも駄目だよ! お兄さん、ちょっと心配)

広場を後にし、少し歩くと、俺はまだ互いの紹介もしていなかった

ことに気がついた。

「ほんとにありがとね、助かったよ。そう言えばまだ自己紹介してなかったね。俺の名前は宗治。鳳姫・宗治^{ホウキ・ソウジ}。ソウジって呼んで。君は？」

「わたしのなまえ？ えーっとね、わたしはえばんじえりん・あとなしあ・きてい・まくだうえる！ ななさいです！」

(な、なんだってー！！！！！！！！！！！！)

こ、この天使のような少女が『闇の福音』になる、エヴァ様だと！
！！！！

「へ、へー。可愛い名前だね。君にぴったりだよ。えっと、ちょっと長いからエヴァちゃんって呼んでもいいかい？」

「(はう、またかわいっていわれた／＼)・・・うん、えばでいいよ。」

「そっか。じゃあ、よろしくね、エヴァちゃん。」

「うん！ よろしく、ソージ！」

(ぐはっ！ その笑顔は俺の心にクリティカルヒットだぜ！ 君は俺を萌え死させたいのか！ 俺のライフはもうゼロよ！)

第一話・ある日、森の中で（後書き）

主人公の名前が判明。鳳姫宗治です。はい、ダジャレです、すみません。

第二話：彼女の両親に会うのって緊張するよね

程なくして、俺たちは大きな屋敷（というより、これはもう小さな城だな）に辿り着いた。

「ほー、立派な家だね、エヴァちゃん。」

俺たちが家の前で立ち止まり、エヴァちゃんにそう言うと、彼女はくりくりの目をこちらに向けて笑った。

「えへへ、そうかな？」

エヴァちゃんは街まで行くのを両親に禁止されているらしい。だから、彼女は自分の家が普通の人たちとは大分違うのを知らないのだろう。まあ、それで彼女への感情がどうこうなるとか、そう言うのではないが。

「じゃあ、ここまで案内してくれてありがとう、エヴァちゃん。後はこの道を辿れば街に行けるでしょ？」

「えっ、ソージ、もう行っちゃうの？」

俺がここで別れるつもりでそう言うとエヴァちゃんは寂しそうな顔をしてこっちを見た。それに、心なしか彼女の手を握る力が若干強まったように感じた。

ズキューーーン

そ、その顔はやめて！俺はどうすればいいの！？

「あ、あー、別に急ぎじゃないから、すぐに行かなくてもいいよ。」

「ほんとう?!」

「うん、まあそうだけど、でも俺なんかを家に上がらせてもいいの？俺が言うのもなんだけど、俺ってかなり怪しくない?」

「ソージ、危ない人なの・・・?」

そして、またエヴァちゃんが不安げな顔をする。理由は先ほどとは違うが。

「も、もちろん、俺にはそんなつもりは無いよ！でも、お父さん達はそう思うかもしれない。俺の所為でエヴァちゃんが怒られるのを見たくないんだ。」

「そうなの?」

ほっとするエヴァちゃん。

「うん。」

そしてそれを見て俺もほっとする。

「だったらだいじょうぶだよ！おとうさまもおかあさまもすぐくいいひとだから。」

「そうなんだ。じゃあ、お家に入ろうか。」

「うん！」

それから俺たちは手を繋いだまま正面の扉を二人で開けた。

「おとうさま、おかあさま、ただいま。」

俺たちが家の中に入ると、エヴァちゃんは誰もいない玄関ホールから両親を呼んだ。それから少しして奥からコッソ、コッソ、と足音が聞こえてきて、三十路前の二人が出て来た。そして、娘が知らない男性と手を繋いで帰ってきた事を疑問に思っている顔をしていた。

「おかえり、エヴァ。その男は誰だね？」

「ただいま、おとうさま。えっとね、このひとはソージっていうの。あのね、ソージがもりでまよったときにあったの。それでここまでつれてきたけど、いえにあらせちゃだめだった……？」

不安そうに聞くエヴァちゃんを見て、お父さんは目に見えるほど戸惑った。

「い、いや、エヴァが彼の事を信じているのなら、きっと大丈夫なのだろう。だが、まずは私たちが話をしても良いかね？ もちろん、お前に何も言わずに彼を帰すことなどしないぞ。安心してくれ。」

「ほんとう？」

「もちろんだとも。そうだろう、君……えーっと、ソージ君だったかね？」

「はい……じゃあ、エヴァちゃん、俺はちょっとお父さん達と話

をするから、また後で会おうね。」

「分かった……」

俺がエヴァちゃんに後で会う約束をすると、彼女は渋々と手を離れた。その悲しそうな顔を見て少し罪悪感が湧いたが、これは未来のための犠牲だ！

（くつ、すまん、エヴァちゃん！　だが、これを乗り越えれば、俺たちの邪魔をするものがなくなるんだ！　分かってくれ！）

「じゃあ、また後でね、ソージ。絶対に帰らないでね、約束だよ？」

「ああ、約束だ。」

それから俺はエヴァちゃんと別れ、マクダウエル夫妻と一緒に応接間らしい場所まで行った。

* * *

応接間に入り、俺たち三人が座ると、どこかからメイドさんが現れて紅茶とスコーンらしきものを置いて来た。

（リアルメイドさんキターーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！）

やっぱりリアルメイドさんは違うな。なんちゃってメイドさんとは違い、どこか優雅さと気品を感じる。

俺がそうやってメイドさんに感心していると、お父さんが話しかけた。

「さて、まずは礼を言おう。うちのエヴァがあんなに人に懐くのも珍しくてね。少し嬉しいのだよ。」

「ええ、そうね。私たちは仕事や領の経営でいつも忙しいのですから、あの子には随分と寂しい思いをさせてしまっているわ。」

「いえいえ、私の方こそが礼を言うべきです。森で宛てもなく、何日も彷徨っている所をお嬢さんに助けていただいたのです。何のお報せもせずにお邪魔をしたことはすごく申し訳ないと思っています。」

「そう言っただけ俺は頭を少し下げ、できるだけ二人に好印象を残せるように努める。その甲斐もあってか、二人の表情は最初に会った時から和らいでいる。そして、迷っていたのが何日と聞いて、二人は目を開いて驚いた。」

「何日も迷っていたのかね？」

「まあ、それは大変ね。すぐに簡単なものを持ってこさせましょう。誰か！ 誰かいますか！」

「はい、奥様。ここに。」

（うお？！ あの執事、今どこから現れたんだ？もしかしてそういう執事スキルでもあるのか？）

「この方にすぐにご飯を出してください。」

「承りました。すぐに用意しましょう。」

そして現れた時と同じように突然消える執事。

「さて、料理を待っている間に君の話聞いてもいいかね？」

「はい。では、まずは自己紹介を。私はソウジ・ホウキと言う者です。ソウジと呼んで下さい。今は旅の途中ですが、この近くの森に入ってしまった、何日もの間、彷徨ってしまうと言う失敗を犯してしまいました。」

「ふむ、ソウジ君か。あまり聞かない名だな。その風貌と相まって考えると、遠くからの旅人と見受けられるが。」

「はい、その通りです。私は遙か東の地から来ました。」

「東と言うと、中国辺りか？」

「ええ、その近くですね。」

日本は中国の近くだよな？

「ほう、随分と遠くから来たのだな。」

「本当ですわね。」

「おっと、君にだけ名乗らせる訳にはいかんな。私はこの地の領主、ジオルジュ・マクダウェルだ。こちらは妻の……」

「アイリーン・マクダウエルです。以後お見知り置きをお願いしますわ。」

「いえいえ、こちらこそ。」

「娘のエヴァンジェリンとはもう知り合いだな。」

「はい、とても可愛らしいお嬢さんですね。」

「わっはっはっは。そうだろう、そうだろう。エヴァは世界一可愛い娘だ！ ソウジ君は分かってくれるか！」

「もう、あなただったら、また親バカ丸出しにしちゃって・・・」

アイリーンさんはジオルジュさんを宥めるが、俺は分かりますよ、ジオルジュさん。あれはもはやただの女の子じゃなくて、もっと素晴らしい何かだ！

「よしっ、君が気に入ったぞ、ソウジ君！ 君は旅の途中のようだが、それは急ぐのかね？」

「いえいえ、そんなことは無いですよ。ほとんどあてもなく、ただ気ままに旅をしているのですから。」

「そうか、そうか！ なら、しばらくはここに住む気はないかね？」

「あなた？」

「えっ？」

「良いではないか、アイリーン。ちょうどエヴァの相手をする人を探していたらう？」

「そうですが、少し急ぎすぎではないのですか？」

「なに、大丈夫だろう。ソウジ君と話して、彼の人となりはある程度分かったつもりだ。そして何よりあのエヴァの懐きようだ！エヴァの相手をするのなら他には何もいらんだろう。どうかね、ソウジ君？ やってくれるか？」

ちよつと待て、こんな美味しい話はあつていいのか？ 住む場所を提供してくれるだけではなく、仕事はエヴァちゃんのお世話係だとい？ 断言しよう。これで領かなかったらそいつは血も涙もない化け物だ！（俺は吸血鬼だが）

「こんな私でよければ、喜んでやりますよ！」

「おー、そうか！ いや、よかった、よかった。エヴァも喜ぶだろう。」

「ふふ、これからよろしくお願いしますね、ソウジさん。」

「はい！ こちらこそよろしくお願いします！」

「あー、だがエヴァは嫁にはやらんぞ。」

「はい？」

「もちろん、君だけではなく、誰にもうちの娘はやらんぞ……！」

「は、はあ……」

これはあれか？ 噂に聞く父親の常套句？

「気にしなくていいわよ、ソウジさん。これはジョルジュの発作見たいなものだから。」

「そうですか？」

「ええ、直に収まるはずです。」

「分かりました。」

まあ、アイリーンさんがそう言うのなら、その通りなのだろう。

俺はそう思い、ジョルジュさんの高笑いをBGMにいつの間にか（本当にいつ置かれたんだ？ やはり、執事の謎なのか？！）俺の前に置いてあったサンドイッチに手をつけた。

* * *

応接間での話の後、俺は森で付いた汚れを落とすべく、風呂を貸してもらえるのを頼んだ。その願いはすぐに了承されたが、この時代にちゃんとした風呂がある筈もなく、薪を節約する為にお湯を入れた桶とタオルを使って汚れを拭い去っただけだった。それでも、終わった後はすっきりし、桶の水を見たとき、人はこれほど汚れる事ができるんだなー、と感慨深く考えていた。

とにかく、俺がさっぱりして皆の所に戻ると、そこには夫妻に加えてエヴァちゃんが座っていた。すでに俺がここのお世話になると言う話を聞いたのか、彼女は満面に笑みを浮かべている。そして、俺の姿を見つけると??

「ソージー!」

俺の名前を大声で呼びながら抱きついてきた。

「よ、エヴァちゃん。」

「えへへー、ソージー。」

抱きついたエヴァちゃんの頭を撫でると彼女は猫のように目を細めて気持ち良さそうに笑った。

(ノォー………!)

それを見て、俺はエヴァちゃんをおもいつきり抱き上げる衝動をなけなしの理性で押さえ込んだ。

(ちよつと待つんだ、宗治! それはまだ早い! せめて一週間は待つんだ! いきなり馴れ馴れしすぎてジョルジュさんに恨まれたくはないだろう!?)

(しかし、大佐! この敵は強大です! いつまで持ち堪えられるか分かりません!)

(そんなことは分かっている! それでも耐えるんだ! 男だろう! それに見てみる、あのジョルジュさんの嫉妬にまみれた顔を!)

（大佐！）

と、俺が脳内で訳分からない問答をしているとエヴァちゃんは顔を上げて俺に話しかけた。

「ねえ、ソージ。これからはずっといつしよだよね？」

「ああ、ずっと一緒だ。」

「えへへ。わたしのはじめてのおともだち……」

（ぐふっ！ 大佐！ もう駄目そうです！ 防壁が決壊しそうです！）

（……）

（大佐？ 大佐！）

たいさのへんじがない。ただの（萌え死による）しかばねのようだ。

（大佐あああああああー！）

「どうしたの、ソージ？」

「い、いや、なんでもないさ、エヴァちゃん。これからよろしくな。」

「うん、よろしく、ソージ！」

第二話・彼女の両親に会うのって緊張するよね（後書き）

マクダウェル夫妻の名前、適当です。あと、エヴァパパ駄目すぎる。大佐は多分、もう出番がないでしょう。

第三話・そして（ほとんど）誰もいなくなった（前書き）

この話から微グロとシリアスが続きます。そう言うのに耐性がない人は読み飛ばして下さい。

第三話：そして（ほとんど）誰もいなくなった

マクダウエル家に世話になり始めてから二年経った。

この二年を表現するとしたら、『幸せ』の一言で事足りるぜ。

ふっ、純粹で無邪気の（萌え）戦闘力は凄まじかったぜ。暴走しなかった俺を褒めてもらいたい。

それでも、エヴァちゃんが夜に恐くなつて一人で寝られない時は一緒に寝てくれと頼まれたら断れなかったが、それは人として間違っていないよね？ 普通の反応だよな？

そして今日はずいに運命の日、エヴァちゃんの十歳の誕生日だ。今夜、誰かによつてエヴァちゃんは吸血鬼にされる。それによつて、エヴァちゃんはこれから600年以上、人から恐れられ、賞金稼ぎや『正義の魔法使い』に狙われる生活が続くのだ。俺にはそれが我慢できない！（俺の）エヴァちゃんにそんなつらい人生を送らせてたまるか！

そう言う訳で、俺はエヴァちゃんの吸血鬼化を阻止する計画しているのだ！ 残念だが、エヴァちゃんを狙っている人を割り出すことはできなかつた。だから、リスクもあるが、今夜エヴァちゃんが狙われた時、その場で犯人を殺す。エヴァちゃんが吸血鬼にならなければ原作はどうなる？ ネギの修行は？ 茶々丸は？ 茶々丸は好きなキャラだが、エヴァちゃんは今、ここで生きているのだ！ 原作？ 何それ、美味しいの？ そんな物、犬にでも食わしてやれ。

俺はエヴァちゃんを助けてやる！

「ソウジ、どうしたの？ 怖い顔しているよ？」

「何でもないよ、エヴァちゃん。お誕生日おめでとう。パーティーは楽しんでる？」

「うん！ プレゼントもいっぱいもらったよ！」

「おー、そうか？ それはよかったな。」

「え、えつとね、ソウジ……」

何か、探るように上目で俺を見るエヴァちゃん。

ははーん、なるほど。そう言えば俺はまだプレゼントを渡していなかったな。

「どうしたんだ、エヴァちゃん？」

「あ、あの、ソウジは……？」

「俺？ 俺がどうかしたの？（ニヤニヤ）」

「う……」

エヴァちゃんが何を言いたいのか分からないように惚けると、エヴァちゃんは涙目になって俺を見る。

可愛い幼女に涙まじりで睨まれることにもクるものがあるが、あんまりエヴァちゃんを弄って喧嘩になるのもなんだから、この辺で勘弁してやるう。何？ 弱い？ いいじゃねーか。いつもエヴァちゃんと一緒に居られる俺は勝ち組。負け組の癖みは受け付かんwww

WWW

「あはは、冗談だよ、エヴァちゃん。はい、俺からのプレゼントだよ。」

俺がエヴァちゃんに買ったのは彼女の青い目に似合うサファイアを使った可愛いペンダント。

「わあ、きれい〜！ ありがとう、ソウジ！」

「気に入ってくれたか、エヴァちゃん？」

「うん！ ソウジ、着けてくれる？」

「もちろん。じゃあ、ちょっと貸して。」

「はい。」

俺にペンダントを渡し、エヴァちゃんが背を向ける。ペンダントを着け易くするために髪を上げて、俺はその雪のような白い首筋に見惚れそうになったが、二年間でこういうシチュエーションに慣れた俺はそれに惑わされずにペンダントを着けた。

「はい、終わったよ。」

「ありがとう、ソウジ。ねえ、似合う？」

「ああ、すごく可愛いぞ。」

「ほんと？ えへへ〜。」

ああ、その笑顔が俺の荒んだ心を癒す。

「じゃあ、お父さまとお母さまが呼んでるから私、行くね？」

「分かった。また後でな。」

「うん！」

正しくトテトテと言う擬音が似合いそうな感じでエヴァちゃんが両親の元へと行くのを見ながら俺は彼女を助ける決意を改める。

(絶対にエヴァちゃんを助ける!!!)

* * *

ふう〜、緊張するぜ。

パーティーが終わり、皆が寝静まっている。いよいよ時間が近づいている。

俺の攻撃手段は限られている。魔法の先生もなく、武術を習いたくても、できたのは精々剣に少し覚えがある使用人に教えてもらえたくらいだ。俺が本当に当てにできるのは吸血鬼としての力と不死身さくらいだと思っっている。まあ、普通の人間相手にはそれで充分だが。もし今夜来る相手が魔法使いでも、少々の痛みを我慢さえすればエヴァちゃんが吸血鬼にされる前に相手の喉元に食いつける筈だ。それさえできれば俺の勝ちだ。吸血鬼の力に抗える人間などいない

のだからな。

だてに最強種と呼ばれている訳じゃないぜ、くっくっくっ

でも、まだ来ねえのか？

ここ最近は今夜の事で緊張していて碌に寝ていなかった。

その所為で、今は気を抜けば寝そうさ。

ていうか、本当に今夜来るのか？ 確か原作ではエヴァちゃんの十歳の誕生日に吸血鬼にされたと言った筈だけど、俺が来た事で歴史は変わってるかもしれないし、相手は今日襲って来ないかもしれない。

「まあ、こない、なら・・・その・・・ほう・・・が・・・」

・・・

・・・

・

「いやあああああ！！！！！！！」

「！！！！！！！！！！」

な、なんだ！？

しまった、寝てしまったか！

「くそ、間に合ってくれ!!」

* * *

<Side:エヴァ>

ふふ、今日の誕生日は楽しかったな。

この綺麗なペンダントもソウジにもらったし。

「えへへ。」

ソウジ・ホウキ。二年前くらいに森で遊んでた私の前に現れた不思議な異国の人。

それからずっと私のお世話をしてくれている、きつとお父さまとお母さまの次に大切な人。

「ソウジ、ずっと一緒だね・・・?」

「ふむ、残念だがそれは無理だろう。何せ、彼はあなたの両親共々私の部下に殺されるのですから。」

「誰?!」

「おやおや、私の顔を忘れたのですか? 折角高価なプレゼントも送ったのにとても残念です。」

「おじさま!?!」

「うむ、おじさまだよ、私のかわいいキティよ。」

「その名前で私を呼ばないで！ そう呼べるのはお父さま達とソウジだけよ（呼ばないけど）！ あなたに呼ばれただけで虫酸が走るわ！」

「ふっ、そんな強気な言葉もすぐに言えなくなるさ。あいつは死にあなた永遠にその姿で私の人形になるのだよ。」

何を言っているのよ、この人！ 永遠にこの姿？ それに、皆が殺された？ そんな事ありえない！

「嘘よ！」

「嘘じゃないさ。そして、これから最後の仕上げとして、あなたの心を壊す為にあなたに最愛の人の遺体を見せて差し上げましょう。人形には心など必要ないですからね。さあ、こっちに来るのです！」

おじさまに逆らいたくても、無理矢理ぐいぐいと引っ張られていく。

やだ、やだ、そっちには行きたくない！

「さあ、ここです。見なさい、あなたの大切な人の死んだ姿を！」

いや、見たくない！

「見なさい！」

おじさまは私の顔を両手で掴み、力づくで私の目を開ける。

そして、そこで見たのは？

「いやあああああああ！！！！！！！！！！」

重なるように俯せに横たえる、血まみれの両親の姿だった。

「うーむ、もう一人がいないのは残念ですが、これくらいで良いでしょう。あとはこの呪文を唱えればあなたは永遠にその愛らしい姿で私に愛でられる人形になるでしょう。」

そう言っつてぶつぶつと何かを呟き始めるおじさま。

その言葉の意味は分からなかったけど、それが終われば私が永遠に何かを失う事だけは理解していた。

いや、助けて……

助けて……

助けて！

「助けて、ソウジーーーー！！！！！！！！！！」

「ああ、まかせろ！」

* * *

< s i d e : ソウジ >

エヴァちゃんが叫んでる！ 何かがあったんだ！

バンツ！

部屋の扉が開き、数人が傾れ込み、こちらに剣を構える。

「貴様等、そこをどかないと死ぬぞ？」

その宣言と同時に送った睨みにできるだけ殺意を込めたが、あいつらは動じなかったようだ。
愚かな。

「忠告したぞ？」

「うるせえ！ 剣もない一人のお前に何ができるって言うんだ？」

「なら試せ。」

「かかれ！」

その声と同時に相手は一斉にこっちに飛びかかる。だが、俺にはこんな所で時間を食っている場合ではない！

剣？ 俺を殺せるのなら殺してみろ！

腕を切断され、腹を割かれ、首を串刺しにされても俺は止まらなかった。

そして、俺と扉の間に立つ一人の人間の前まで行く。

「邪魔だ。」

まるでハエを叩くように腕を振るとそいつの頭が胴体と離れた。

「バ、バケモノ・・・！」

それを見た他の賊が恐怖し、そう漏らす。

化け物？ ふん、とうに分かってた事だ。

「ああ、化け物だ。逃げるんなら、精々俺の邪魔をするなよ？」

そして突き刺さったままの邪魔な剣を取り出す。

「そらよ、返すぜ。」

「」「うわあああああ！！！！」「」「

あいつらは走り出したが、そんなものには興味などない。

(エヴァちゃん、無事でいてくれ！)

俺も走り出し、エヴァちゃんの声が聞こえた方向へと向かう。そして、二つの大きな扉に差し掛かると、中からエヴァちゃんの声が聞こえた。

「助けて、ソウジーーーー！！！！！！！！！！」

扉が壊れるのにも構わず、勢い良く扉を開け放ち、エヴァちゃんを

安心させる為に力強く返事する。

「ああ、まかせろ！」

「な、あなたは？！」

くくく、驚いてる。

なるほど。こいつは確かエヴァちゃんのおじさん。いつも嫌らしい目でエヴァちゃんを見ている変態だったな。でも、まさかこいつがエヴァちゃんを吸血鬼化させる呪いを知っていたとは。この二年間、色々調べていたが、マクダウエル家には魔法使いの血が流れていない筈だが・・・

「ソウジ！」

「ああ、大丈夫か、エヴァちゃん？」

「ソウジ、お父さまとお母さまが！」

「ちっ、間に合わなかったか。すまない、エヴァちゃん。」

「うっん、ソウジの所為じゃないよ・・・」

「あなた、どうやってここまで来たのです？！ 雇った傭兵どもに殺された筈です！」

「傭兵？ そう言えば、ソウジ、怪我してる！ 大丈夫なの？！」

「ふっ、俺は色々と特別だね。確かにその傭兵らしき者に襲われた

が、怪我もこの通り。全然無事だ。」

エヴァちゃんの心配を無くす為にシャツを捲り上げてみせる。

「なっ！ まさか、あなたは・・・」

「くっくっくっ・・・多分、あんたの考えている通りだぜ。(ニヤリ)」

「ひっ!?!」

どうやら俺の正体を知り、おっさんは腰を抜かしたようだ。

さて、おしおきの時間だ。

「エヴァちゃん、これからちょっと酷い事になるから少し目を瞑っててくれない?」

俺はエヴァちゃんにそう言っが、彼女は頭を横に振り、強い意志の籠った目で俺に返事する。

「ううん、これからおじさまを殺すんでしょう? お父さまとお母さまの敵を取る所、しっかりと目に焼き付きたいの。」

「そうか。分かった・・・」

まだたった十歳なのに、その覚悟ができてしまっているのか。ままだらねえな・・・

エヴァちゃんの言葉を受けて、俺はおっさんに向く。

後は、このゴミ屑を片付けるだけか。

「や、やめてくれ！ 何でもする！」

「見苦しいぞ、おっさん。諦めて死を受け入れろ。」

「本当に何でもする！ 金が欲しいか？ マクダウエル家の全財産をお前にやる！ キティか？ これからは手を出さないと約束するから、見逃してくれ！」

「キティだと？ 俺だって遠慮してんのに、こいつはそう呼んでるのか？」

「お前がその名でエヴァちゃんを呼ぶな！！！」

「ひいっ！！！！」

おっさんは喋っている間、ずっと出口の方へと這って行っていたが、その速度は俺の歩くスピードより大分遅い。俺が数歩歩いただけでおっさんを見下ろす形になっていた。

「さて、おっさん、何でもやると言ったな？」

「あ、ああ！ 何でもやるぞ！」

ちっ。何だ、その希望に満ちた顔は。

「なら、過去に戻って今日の事がなかった事にしてみる。」

「なっ、そ、それは・・・」

「何だ？ できないのか？ なら、やっぱり死んで償うしかないな。」

「お願いだ！ 私を助けてくれ！」

「ふん、そう懇願したエヴァちゃんの両親になんて言った？」

「や、やめるー！ー！ー！！！！！」

ザシュツ

腕を一回振るだけで事は済んだ。そうして残ったのは頭のない首から噴水のように血が吹き出す死体だけだった。

そして俺は両親の側で泣いているエヴァちゃんの元へと戻る。

「悪いな、エヴァちゃん、もっと早く来れなくて。」

「でも、ソウジはちゃんと来てくれた。ありがとう、ソウジ。私を助けてくれて。」

「エヴァちゃん・・・」

エヴァちゃんは今にも壊れそうで、彼女に血が付くのも構わずそっとなお抱きしめた。すると、事件が起きてから始めて触れた人肌に安心したのか、エヴァちゃんは声を上げて泣き始めた。

「うっ・・・うっ・・・うわあああああ・・・ソウジ・・・お

父さまとお母さまが！・・・お父さまあああああ、お母さまあああああ！！！！！！！！！！」

「エヴァちゃん・・・ジヨルジュさん、アイリーンさん・・・大丈夫・・・きつと大丈夫だよ、エヴァちゃん・・・俺がずっと側で守つてやるからな・・・！」

「ああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

* * *

エヴァちゃんが泣き止むと、その疲労で深い眠りに入った。そんな彼女を俺はベッドに寝かせ、自分を綺麗にし、着替えてから彼女にも同じようにした。

幼女の裸？ アホ言ってるじゃねーよ。ついさっきここであった事を忘れてんのか？ 何かある訳ねえだろうが。

その後、エヴァちゃんを綺麗にしてからまたベッドに寝かすと、俺は彼女の横でベッドに入り、彼女を後ろから抱いて眠った。

そして、翌朝。俺は眠りから覚めると、エヴァちゃんはまだ腕の中で寝ていた。

（あー、そう言えば昨夜、色々あったな。くそっ！俺がもつとしっかりしていればジヨルジュさんとアイリーンさんを助けられたかもしれないのに！！！！！！！！！！）

でも、今更あつたことを悔やんでも仕方がない。俺はこの先、この腕の中の天使を全力で守る事でしかジヨルジュさん達に恩を返せない。無論、そんな恩がなくてもエヴァちゃんを守るつもりだけだ。

「う、うーん・・・ソウジ・・・？ おはよう・・・」

エヴァちゃんが起きて、俺に挨拶する為に俺の腕の中で体を回す。

「おはよう、エヴァちゃん。」

「!?!? ソウジ！ お父さまとお母さまは?!」

「すまん、エヴァちゃん・・・」

「そう、やっぱり夢じゃなかったんだ・・・」

「エヴァちゃん、俺はこれからこの街を離れようと思ってるんだ。」

「えっ!?!」

あつ、不安にさせちゃったか？ 言葉が足りなかったか。

「もちろんエヴァちゃんも連れて行くぞ。ちなみにエヴァちゃんには拒否権はない。」

「そう、よかった・・・でも、何故この街を離れるの？」

「こんな事件が起きたんだ。そして生き残りは俺たちだけ。色々と住み辛くなると思う。それならいっそ、旅に出た方が気楽かな、と。」

「
そう……」

「あと、実はこっちの方が大変なんだけど……エヴァちゃん、昨日俺が特別だつて言ったのを覚えているか？」

「うん……」

「あのおっさんがエヴァちゃんに掛けようとしていた呪いだけど、あれは人を吸血鬼にさせる呪いだ。それも真祖。」

「吸血鬼？ 真祖？」

「あー、分からないか。えっと、吸血鬼って知ってるか？」

「あの人の血を吸う化け物？」

「そうだ。真祖って言うのは吸血鬼の中の吸血鬼。すごく強くて、ほとんど不死身。」

「おじさんは私をそれに変えようとしてたの？」

「うん。そして、俺が特別な理由だけど、実は俺も吸血鬼なんだ。」

「えっ？ ソウジが？ でも、血を吸ってる所なんて見た事ないよ？」

「まあ、別に血を吸わなくても生きていけるからな。ただ、血を吸えばもっと強くなるし、吸った相手を吸血鬼にさせることができる

くらいだ。まあ、それで昨夜、傭兵どもにちよつと化け物なところを見られてね。言い触らされたら多分面倒な事になる。だからその前に出て行くこと。」

「そうなんだ・・・」

「俺が恐くなつたか、エヴァちゃん？」

「どうして？ だってソウジは私を傷つけないでしょう？」

「もちろんだ。」

「だったらどうして怖がるの？ おじさんの様な人の方がもっと恐いよ。」

「そうか。」

はは、やっぱりエヴァちゃんは最高だな。

「ねえ、ソウジ・・・」

「何だ？」

「ソウジは人を吸血鬼にすることができるとよね？」

「うん？ まあね。」

「じゃあ、私を吸血鬼にして！ そうすればずっと一緒に居られるんでしょう？ それに、私も吸血鬼になればソウジを残して死んじやうなんて寂しい事はないよ？」

「うーん、それは駄目だな。」

「どうして!?!」

しまった、また言葉が足りなかったか。

「いや、駄目っていうか、『まだ』駄目だよ。」

「まだ……?」

「うん。エヴァちゃん、まだ十歳だろう? 今君を吸血鬼にさせたらこれからずーっと十歳のままだよ? それは困るでしょう?」

「うっ、そうかも。」

流石に永遠の十歳は嫌だったか。

「それに、何年かすればエヴァちゃんの考えも変わるかもしれないし……だから十年。」

「十年?」

「そう。あと十年経って、まだエヴァちゃんが吸血鬼になりたいならその時に吸血鬼にしてあげよう。それでいい?」

「……うん、分かったよ、ソウジ。でも、約束だからね! 十年経ったら絶対に私を吸血鬼にして!」

「ああ、約束だ。」

後日

「そう言えばソウジって歳を取らないんだよね？ 本当は今何歳なの？」

「俺か？ いやー、実はエヴァちゃんに出会えた頃、俺は吸血鬼になれたてでね。俺はまだ22歳なんだ。」

「そうだったんだ。よかった。ソウジが本当はおじいさんだったらどうしようかと思ってたよ。」

「ちょ、おじいさんって！」

俺ってそんなに爺臭いのか？

「あはは、安心して、ソウジ！ まだまだ全然若いよ！」

エヴァちゃん、それって微妙にフォローになってない・・・

第四話・15歳ならギリギリセーフ？（前書き）

第一部完、的な話です。

第四話：15歳ならギリギリセーフ？

マクダウエルの屋敷から旅立って五年経った。

その間、キティも少しは成長し、今は160cm近くまで背が伸びています。相変わらず胸はぺったんこですがw

あのおだるとぼでい姿はやっぱ理想と妄想を合わせたような物だったか・・・それとも後もう五年もすればああなるのか？

それにしても、楽しいと時間が過ぎるのが速いって話、本当だったんだねー。

いや、キティとの旅、ほんとーに楽しいのよ！

時々俺の噂を聞いた輩が俺を狙って襲ってくるのが唯一の不満かなあ。もちろん俺の吸血鬼パワーで返り討ちになっているがな。

あつ、因みにエヴァちゃんの事をキティと呼ぶ事になりました。二人きりの時用のペットネームの様なもの。本名だけど。

俺はソウジのまま。というか、ソウジをどうやって略すんだ？ソ

ー？ どの大工用具だよ。

というわけで、今街にいます。絶賛宿を探し中です。

「なあ、キティ。もうここで良いんじゃないか？」

「ソウジ！ 往来でその名前で呼ぶなと何度言えば分かる！」

いや、その反応が面白くて半分わざとです、すみませんwww

そしてキティのこの話し方ですが、キティと呼び始めた頃に変わりました。理由は覚えていません。

「ああ、すまん。で、この宿じゃ駄目なのか？」

「（ちつ、反省してるのか、こいつ？ 折角二人きりの時だけ呼ばれたいの、その気持ち分からないのか／＼）・・・別にこの宿でいいのだが、お金は足りるのか？ 今結構ヤバイのだろう？」

屋敷から出た時、金目の物を色々持って来たが、流石に何年もすればそれもなくなる。今は街に着く度に簡単な仕事を見つけては、それをやりながら旅を続けている。

「うーん、まあ、一晩くらいなら大丈夫だろう。けど、今日中にできる仕事を見つけないと明日は野宿かもしれないな・・・」

「そうか。なら今晚はここに泊まろう。部屋を取ってから街に出て仕事を探すか？」

「うん、そうしよう。」

「分かった。」

チリーン

「すみませーん、部屋を探しているんですがー！ 誰かいませんか

「？」

「はいはい、少し待ってくださいーい！」

俺が大きな声で呼びかけると、奥から女将さんらしい人から返事が来た。こちらに出て来た女将さんは俺たちを見て一瞬懐疑的な顔をしたが、本当に一瞬で、俺は特に気に留めなかった。俺の東洋人の容姿はこちらでは珍しく、こういう反応をされるのはよくある。

「えっと、お部屋でしたね？ 一部屋でよろしいのですか？」

「それでいいです。」

「その部屋にはベッドが一つしかないのですが・・・」

「ベッドが一つ？ むしろ望む所だ。ふははは！」

「／／／」

その照れた顔も良いよ、キティ！

「それで大丈夫です、お願いします。」

「ベッドは一つですが、普通のベッドよりは少し大きいので窮屈には感じないと思います。」

「分かりました。」

「では、一晚銀貨一枚になります。部屋に案内しますので付いてきて下さい。」

「はい。」

* * *

「じゃあ、俺はちょっと仕事を探しに行くから。」

「分かった。なら私も街で簡単そうな仕事を探そう。」

こういう時、俺は大抵討伐依頼のような、すぐにできて、かつ報酬が大きい仕事を探す。吸血鬼パワーのおかげで俺には危険がないし、割のいい仕事だと思っている。

けど、キティは普通の人間だ。戦い方も教えていないし、もちろん魔法も使えない。彼女には危ない真似はさせたくないし、仕事はいつも俺一人で行っている。その間、キティは街で給仕など、安全な仕事を見つけて金を稼いでいる。

「うん。いつ戻るか分からないけど、夜まで戻れるようにできるだけ早く仕事が終わらせるように頑張るよ。」

「ああ。まあ、お前の事だ。もし戻らなくても、心配いらないだろう。」

「なんだ。心配してくれないのか？」

「だって、ソウジは私とずっと一緒にいるって約束しただろう？
だったらどこに心配するところがある？・・・／／／」

ぐはっ、久しぶりに効いたぜ。そのくさい台詞を強気で言うくせに、自分で照れてしまう。そのギャップがいい！

「そうだな。俺は何があっても君の元へと戻るよ、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。約束だ。」

「／／／．．．そ、そうだ！ お前は私と約束したんだ！ ぜ、絶対に忘れるんじゃないぞ！」

ふっ、まだまだだね、キティ。

「じゃあ、行ってくる。」

「さっさと行け！」

* * *

< s i d e : : エヴァ >

ふん、行ったか．．．／／／

まったく、いつもはおちゃらけているのに、たまにああやって真面目な顔をするんだから困る。

コンコン

ん？ ソウジ、何か忘れ物でもしたのか？

「ソウジか？ どうした、鍵は開いているぞ？」

ガチャ

「どうした、何か忘れ物でも・・・！？ なんだ、お前等！！」

なんなんだ、こいつら？！

そろそろ部屋に入ってきたのは十人ほどの屈強な男達。いずれも武器を持っていて、数人は杖のような物を構えていた。

(杖・・・？)

「エヴァンジェリン・マクダウエルだな？」

「・・・」

どうして私の名を・・・

「吸血鬼ソウジ・ホウキの連れだな・・・？」

「！！！！？」

な、何っ！ こいつら、ソウジの事を知っているのか？！ 一体どうやって！？

「ふん、その顔だと知っていたようだな。ちっ、この人間の面汚しが・・・！ 貴様には人間としての誇りはないのか？！ あんな化け物の慰み者などに成り下がりがやがって。」

「貴様、取り消せ！ ソウジの悪口は許さないぞ！」

「はっ、洗脳でもされたか。こんなに可愛い顔をしているのに、あんな化け物にはもつたいない。なあ、お前達？」

「ははは、その通りだぜ。こんな上玉、滅多にお目にかかれねえよ。どこかの没落した貴族の嬢さんじゃねえのか？」

「くっ……！」

「まあ、どうでもいい。こいつを連れて行け。くれぐれもこいつに何もするなよ？ 人質に使うからな。」

「へっ、分かったよ。オラ、こつちに来るんだ！」

「いや!?!」

「親分、本当に手を出しちゃ駄目ですかい？」

「ああ、駄目だ。これほどの女なら高く売れるだろうからな。」

「それもそつすね。」

くっ、どうして私はこんなに弱いんだ!? いつも、いつも、いつも！

五年前の時も、私は何もできず、ソウジの迷惑になったのに！ 今日も私はただ人質になるのか!? 私はなんて無力なんだ！

私は両手を後ろに縛られ、悔し涙を流しながら奴らに連れて行かれ

た。

(ソウジ、助けて……)

* * *

<side:ソウジ>

「キテイ、ただいま!」

ん? この時間なら普通帰っている筈なのだが……

「キテイ?」

あれは……? 手紙か……?

なっ、これは?!

『化け物よ、

お前のおもちやは預かった。

返して欲しくば今夜零時、町外れの森まで来い。

お前の命と引き換えにおもちやを解放しよう。』

まさか、攫われたのか?!

くそっ! 迂闊だった!

今までは俺だけを狙っていたから油断していた。

「キティ、無事でいてくれ！」

今の時間は十一時くらいか？

手紙の時間までは一時間もあるが、そんなのくそ食らえだ！

「くくく、絶対に俺たちに手を出した事を死ぬほど後悔させてやる
っ！」

その後悔は一瞬で終わるかもしれないがな！

夜の吸血鬼に喧嘩を売るとどうなるか思い知らせてやる。

「ああ、それにしても、今夜は良い満月だ。力がみなぎるぜ。」

ふっふっふ……

「くっくっく……はっはっは……あーっはっはっはっはー！！！」

* * *

「早いぞ、化け物。約束は零時だったはずだ。」

「はあ？ どうした、俺を嵌める罠の用意でもしていたか？ そんなことよりエヴァは無事だろうな？」

「くっ……お前のおもちゃの事か？ まだ無事だぞ。まあ、お前の態度次第でどうなるかは分からないが。」

ちっ、むかつく野郎だ。キティが俺のおもちゃだと？俺を馬鹿にしているのか？そして何よりキティを馬鹿にしている。あいつが誰かのおもちゃなどに甘んじるものか！

「お前等の為にもそう願いたいものだ。」

「こっちへ来い。おもちゃの所へ案内する。」

連絡係の誘拐犯に連れられ、十分ほど歩くと森の開けた場所に着き、二十人ぐらいの魔法使いまじりの集団が縄で縛られたキティが地面に転がされていた。

「エヴァ、無事か！！！」

「ソウジ！私に構うな！何を言われたのかは知らんが、こいつらがそんな約束を守る訳がない！」

「黙れ、人間のクズが！」

パン！

キティの頬を叩くリーダーらしき男。つうー、とキティの唇から血が流れるのを見て俺の血がたぎるのを感じた。

「それで・・・俺を殺したらエヴァを解放するんだらう？」

あまりの怒りに、俺の口から出た声は周りの人間の血を凍らした。

「「「ひっ！！」「」」

「う、動くなっ！ こいつに何があってもいいのか!？」

「そういきり立つな。俺はこの通り、一步も動いていないだろう？
で、どうなんだ？」

「そ、そうだとも！ お前が抵抗せずに殺されればこいつは解放し
てやるぞー！」

「なら早くしろ。」

「ソウジ！ やめてくれ！ 私のために死ぬな！」

「どうした、やらないのか？」

「っ……！ おい、早くあいつを殺せ！」

そしてキティを監視する二人を残し、他の人は剣を抜き、魔法を唱
え始めた。

（さあ、来てみる。）

数秒後、俺は剣に刺され、魔法で手足が飛び散った。俺は何の抵抗
もせずそれを受け入れた。

「ふっ、案外呆気なかったな。これが最強種である吸血鬼の実力か
？」

「いや、ソウジ！ ソウジ……！」

「さ、終わったぞ！ さつさとこの人間の裏切り者を人買いに売りつけるぞ。」

「「「「了解です！」「」「」」」」

「ソウジ、ソウジ……いやあ……」

ふん、やっぱりそう言う事だったのか。なら、約束を守る大切さを教えないと駄目だよな？

「待てよ……エヴァをどこに連れて行く積もりなんだ……？」

「ソ、ウジ……？」

「ああ、俺だ。悪いな、エヴァ。また泣かせちゃまって。」

「無事、だったのか？」

「当たり前だろ？ 俺を誰だと思っている？」

「ば、化け物……」

「化け物なあ？ そんなの、やる前から分かってた事じゃねえか？ その化け物との約束事を破ったんだ。当然、報いを受ける覚悟はできているんだろう？」

「「「「ひ、ひいー……！……！……！」「」「」」」」

「「こんなのに勝てる訳がねー！」」

「俺はこの仕事を降りるぞ！」

恐怖のあまりに錯乱し、そこにいた人の大半が走り出した。ここに残ったのは十人ほどか？

「はっ、逃げたか。懸命な判断だな。さて、残ったお前等。もう何も言わねえ。さっさと死ね。」

そして、今度はさつきと反対に、俺が相手に飛びかかった。最初の人は心臓を一突きし、絶命させた。次の人は両腕を引き千切った。その次は手刀でギロチンの如く斬首した。

そこには武道の美しさはどこにもなかった。あつたのはただの原始的な力による蹂躪。

その暴力の嵐が続いたのはたったの二分だった。たったそれだけの時間で十人中の九人がただの肉塊に変わった。

俺の手は血に染まり、最後の一人を片付ける意志をたっぷりと込めて睨んだ。

「く、くるなあ！ こいつがどうなってもいいのか!？」

そいつはエヴァの後ろに立ち、ナイフを首に当てた。

「ちっ……」

キティの命を盾にしたか。

「そうだ！ そこから動くなよ！ 本当にこいつを殺すぞ！」

「お前は致命的な間違いを三つ犯した。」

俺は一瞬止まったが、そう言って一歩踏み出した。

「う、動くな！」

「一つ。吸血鬼と言う存在がどういふものなのかをちゃんと前もって調べなかった事だ。俺を相手にたつた二十人の人間？ 吸血鬼を舐め過ぎだ。俺を本気に相手したいのならせめて古竜種を数匹もつて来るんだつたな。」

「うるさい！ 近づくな！」

そして更に一歩踏み出す。

「二つ。人質つていう策はな、姿を見せない時と、脅している相手より圧倒的に強い立場にいる時にしか使えないんだよ。理由は分かるか？ それはな、相手より弱いと人質は脅し道具ではなく、自分の命綱に成り代わるからだ。さて、ここで問題だ。もしお前がエヴァを殺せば、俺はすぐにお前殺す。そして、俺は今すごく怒っているからな・・・エヴァを放しても、お前を殺すかもしれん。どっちが賢い選択だと思う？」

また一歩近づき、距離はもう手が届きそうなほど近い。

「それ以上近づくな！！！！ こいつがどうなつてもいいのか？！」

「そして最後。お前は吸血鬼との約束を破った。良い事を教えよう。吸血鬼は不老不死の所為か、手で触れるものにはほとんど価値を見

「ああ、俺だ。」

「あいつは……？」

「俺が殺した。」

「そうか、よかった……ねえ、ソウジ……？」

「なんだ？」

「ごめんなさい……私が弱かった所為でこんなことになっ、ちゃ
っ……て……」

何で謝るんだよ？ まさか、諦めているのか？ そんなことさせる
か！

「キティ？ おい、キティ！」

くっ、意識を失ったか。

もう時間がない……

「すまん、キティ。もうお前の許可を取る余裕はない見たいだ。恨
むなら、恨んでくれ。でも、俺はお前を失いたくないんだ！」

そう。魔法も何も習っていない俺がキティを救える手段は唯一つ。
彼女を死徒化させる事だ。

俺は口を大きく開けて、吸血鬼独自の牙をキティの首に突き立てる。

ゴクゴク

何だ、この美味しさは?! 今まで飲んだ血が泥水に感じるほどだ!

ゴクゴク

お願いだ、戻って来てくれ!

「はぁ・・・」

俺は今まで死徒を一人も作っていない。だから、これで良いのかも分からない。取り敢えず、血は飲んだし、キティを死徒化させる意志も込めた。

「戻ってこい、キティ!!!」

「かはっ! ごほっ、ごほっ・・・」

戻った?!

「おい、キティ! 大丈夫か! 返事してくれ!」

「往来、で・・・そう、呼ぶな・・・と・・・いつも言っているだろっ?」

ちゃんと声も出る!

「あはは、そうだな。でも、ここには俺たちしかいないんだぜ。」

「そう、か。それなら、ゆる、せる・・・か・・・なんだ?・・・」

ソウジ、泣いて、いるのか？」

そう言えば、視界が何だかぼやけているな。なるほど、泣いてたのか。

「お前が俺を心配させるからだろう？」

「何だ、私の、所為なのか・・・だったら、謝らないとな・・・」

「バカヤロウ。お前は何も謝らなくても良い。ただ、生きていればそれだけでいい。」

「なあ、ソウジ・・・私を吸血鬼にしたのか・・・？」

「ああ。すまない。他にお前を助ける方法がなかった。」

「そうか・・・なに。今でも、五年後でも私の答えは変わらないさ・・・約束しただろう？ 私たちはいつまでも一緒だ・・・」

「ああ、いつまでも一緒だ。」

「約束だぞ？」

「ふっ。吸血鬼の誇りに賭けてその約束を果たそう。」

「なら、安心、だな・・・少し疲れたな・・・ちょっと眠ってもいいか？」

「ああ、存分に眠れ。お前が起きるまでこうして抱いていてやる。」

「ありがとう、ソウジ・・・」

おやすみ、キティ。どうか、これからの長い人生が幸福でありますように。いや・・・俺が幸せにして見せる！！！！

第四話：15歳ならギリギリセーフ？（後書き）

取り敢えず、ここまでき書き留めたものです。楽しんでいただけたでしょうか？

続きのプロットは一応ありますが、自サイトで公開しているオリジナルの小説（ユーザー情報を見てね）と平行して書いていますので、こちらの更新速度は遅いかもかもしれません。

今は皆さんの反応を見てからどうしようかと決めたいと思っています。まず。

プロットについてですが、今は二つ通り考えています。

一つ目はここから魔法について二人でいろいろ修行編。

二つ目は500年ほど飛んで、京都で武術を習う編。

二つ目は絶対にやりますが、問題はその間に一つ目を挟むかどうかです。それについては皆さんどうお思いますか？

第五話：新たな旅立ち（前書き）

なんと、たった一日で20、000PV以上！

これがネギま効果か？！

取り敢えずはこのSSを続ける方向で行きます。

更新は不定期になると思いますが、頑張ります！

第五話：新たな旅立ち

「う……ん……ソウジ……むにゃむにゃ……」

なんだ、寝言か。

寝ている間にも俺の事を考えてるとか、嬉しすぎるぜ！

「うーん、ふああああ……」

「起きたか、キティ？」

「ソウジ……？」

「おはよう、キティ。気分はどうだ？」

「気分？……ッ！ そうだ、昨日……！」

「ああ、お前は最後に残った奴らの仲間刺され、お前を助ける為に吸血鬼にした。」

「気分は悪くない……むしろ前より力が溢れる感じがする。少し太陽の光が鬱陶しく感じるくらいだ。」

「それは吸血鬼になった副作用だな。俺もそれについては悩んでいるが、特に害はないから……まあ、我慢するしかない。」

「そうか。」

「さて・・・キティは吸血鬼になったわけだが、何か質問はないか？」

「ふむ、そうだな。吸血鬼というからには、私は血を吸わないといけないのか？」

そう聞くキティの顔は少し嫌そうにしていた。まあ、それも分からなくはない。血を飲むなんて、普通の人間の感性から言えば、異常もいい所だ。

「ははは、別に吸わなくても生きていけるぞ。」

「ほっ・・・」

「まあ、一度は吸ってみるのもいいぞ。多分、それなりには美味しいと感じるから。」

「そうなのか？ ソウジは私の前にも血を吸ったことがあるのか？」

「そうだな。」

「それはどうしてだ？ 血を吸わなくても大丈夫なのだろう？」

「まあ、大丈夫っちゃあ、大丈夫だが・・・最初は実験だった。」

「実験？」

「うわ、何で俺を睨むんだ？」

「あっ・・・」

「あー、ちなみに、血を吸ったと言っても、相手は殺していないし、死徒にもさせていないぞ。それで、お前に会った時、俺が吸血鬼になりたてだったって話、覚えているか？」

「そう言えば、そう言ってたな。」

「まあ、そういう訳で、俺はまだ自分の吸血鬼としての力の扱い方がよくわからない。そもそも、血を吸う意味があるのかも分らなかった。」

「なるほど。それで、実験の結果は？」

「ふむ。生きる為に血を吸わなくても大丈夫だと言うのは間違いない。なら、俺たちの『吸血鬼』という名前はどこから来たのか？ ずばり、血を吸えば吸うほど力が増すんだ。」

「力・・・？」

「そうだ。生命力、膂力、魔力、能力。ありとあらゆる意味で俺たちという存在が強化されるんだ。まあ、魔力の方はあまり意味はないし、膂力も吸血鬼になった時点で人間を遥かに上まるほど強化されるんだが。」

「ソウジ、魔力とはなんだ？ そしてどうして意味がない？」

「そうか、まだ知らなかったんだな。魔力はその名前の通り、魔法を扱う力だ。それと、どうして意味がないかというと、俺たちはこの星自体と接続し、星から魔力が供給される。つまり、星の魔力がなくならない限り、俺たちの魔力も続く。まあ、まだ魔法も使えな

「い俺たちには宝の持ち腐れだけどな、ははは。」

「なんだ、それは？ 無敵ではないか。」

「おいおい、呆れるなよ。俺自身、このチートさは分かってんよ。」

「まあ、それも俺と、俺の系譜に連なる吸血鬼にしか当て嵌まらないかもしれないけどな。他の吸血鬼がどうなのかは知らん。」

「お前は他の吸血鬼とは違うのか？」

「他の吸血鬼に会った事はないから分からないけど、ほぼ間違いなく、他の吸血鬼とは違うな。」

「どうして分かる？」

「うーん、これは言っても信じられるかな・・・まあ、キティなら信じられなくてもいいか。あんまり秘密を隠したくないしな。」

「ふむ・・・信じてくれるかどうか分からないけど、それでも聞かか？」

「ああ、聞かせてくれ。」

「分かった。どうして俺が特別だと分かる理由だが、俺は神様直々に吸血鬼にされて、その時に色々と便宜を働いてもらったんだ。」

「神様??? 便宜？」

「あはは、信じられないよな？ でも、事実だ。俺は神様に会い、

そいつに吸血鬼にされたんだ。便宜の方は力のことだ。制限を取り除かせたり、強化させたりね。」

「随分気前のいい神様だな。」

気前のいい？ あいつがか？ 冗談言つなよ。

「くくく。あれが気前がいいね・・・まあ、力のことだけを聞けばそう思うかもしれないが。あれはそんな優しい存在じゃない。」

「違うのか？」

「あいつはな、自分が退屈だという理由だけで俺を殺し、楽しむ為に俺を吸血鬼にした。その中で唯一感謝できることは君と出会えた事だけだ。」

「／／・・・そ、そうだったのか。すごい理不尽だな。」

「ま、神様なんてそんなもんだろ。今更怒つても仕方がないし、それに、この力のおかげでお前を助けられたんだ。それについては感謝している。」

「そ、そうか。なら、私もその神とやらに感謝しないとイケないな。／／／」

「ふつ・・・ま、そんな訳で俺は多分他の吸血鬼とは違う。そして、俺の死徒であるお前も同じように特別だと思う。」

「私もか？」

「ああ。神様に言われたんだ。俺の死徒は同じような強化がなされるって。俺よりは弱くなるけど、それでもそんじょそこらの真祖よりは強くなると。」

「なるほどな。」

「現状についてはこれくらいだな。あと話し合わないといけないことはこれからの事だ。」

「これからか？ このまま旅を続けるんじゃないのか？」

「旅は続けるけど、問題は目的かな。」

「目的？」

「ああ。今までは取り敢えず生きていければよかったんだから、特に目的はなくてもよかったんだ。でも、昨日お前は予定より五年も早く吸血鬼になったんだ。だから、その後に計画していたことを繰り上げようと思った。」

「それは、なんだ・・・？（私に選択を任せると言いながら、ソウジは私が吸血鬼になった後のことを考えていたのか？ つまり、始めから私を吸血鬼にし、永遠を共にしたいと思っていたのかノノノ）」

「なんだ、キティの反応が少し遅い？」

「ん？ 俺たちって魔力が桁外れに高い割には、魔法が使えないだらう？ 今のままだと折角の高い魔力が無駄になるから、これからは魔法を習う為の旅をしようと思う。」

「魔法？」

「ああ。手っ取り早い方法はどこかの魔法使いに弟子入りするか、魔法世界に行く事だが、まあ、時間はあるんだ。どっちでもいいだろう。」

「魔法世界なんてあるのか？」

「まあな。あそこには魔法使いや亜人、幻想種、およそ考え得る不思議なことではいっぱいだよ。」

「でも、どうやって行くんだ？」

「何でも、世界各地にゲートがあるらしいんだけど、具体的には分からないな。まあ、これも時間があればいずれ分かるだろう。」

「じゃあ、今からは？」

「適当に魔法世界へ行く方法を探しながら初歩的な魔法の練習や戦い方を練習しようと思う。幸い、昨日の奴らは魔法の発動体である杖を数本持っていたからそれを練習に使えるしね。」

実は、今までは魔法発動体がなくて、練習したくてもできなかった。そして、欲しくても、どうやって手に入れるかが全く分からなかった。

それに、師匠はいないからな・・・ぶっちゃけ、原作から覚えていける魔法と言えば“火よ灯れ（アールデスカット）”のような一言で完成する魔法だけだが・・・まあ、いいっしょ。他は師匠や魔導書

から追々覚えばいい。

「そうか・・・」

「まあ、そんな未来の話よりも確実なことが分かるよ?」

「それは何だ?」

「あの街には戻らない方がいいということだ。なんせ、宿で部屋を取ってから何分もしない内に狙われたんだ。おそらく、あの街は監視されているか、もしくはあの宿の女将さんが俺たちのことを話したんだろうな。どっちにしても、昨日逃がした数人が何も言わないことはないだろ。だから、面倒事に巻き込まれたくないなら戻らない方がいいと思ったただけだ。」

「私はソウジの判断に任せるよ。どっちでもいいしな。」

「分かった。まあ、荷物はあつてないようなものだったからな。そんなに困らないだろう。」

「まあな。お金も昨日の奴らの遺体を探せばしばらくは困らない程度には見つかるだろうし。」

「ちよ、いつのまにそんなに人の死体に慣れてたの?! もしかなくとも、俺の所為? いつも襲ってくる奴らをグロい方法で返り討ちにしてたから?! だってしょうがないじゃん!! 他のスマー卜な倒し方とか分からないんだもん! 力任せにやるしかないんだもん! (可愛く言ってもキモイだけぞ、コノヤロー)」

「あ、ああ、そうだな。じゃあ、俺はあっちの奴らを調べるから、

キティはこっちのやってくれるか？ 気持ち悪いなら無理しなくて
もいいぞ。」

「む、大丈夫だぞ。」

それからどこ吹く風のように飄々（ひょうひょう）と調べ始めるキ
ティ。

天使のような美少女がなんでもないように死体を漁る・・・なんて
シユールな光景だ。

・

・

・

そして十分後にはそれも終わり、俺たちは出発する準備ができた。

「用意はいいか、キティ？」

「大丈夫だ。」

「そっか。じゃあ、行くか。」

「ああ、行くぞ。」

第五話：新たな旅立ち（後書き）

要望があったので、これから修行編に入ります。どれくらいの長さになるのかは分かりませんが、吃驚するような展開が少なくとも一つは入れる予定です。

第六話：ししよー！ししよー！

「プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”！」

ポッ

「おお、できた！ できたぞ、ソウジ！」

「おー、やったな、キティ！」

流星は吸血鬼だけあり、あれから何日もしない内にキティの“火よ灯れ”が成功した。きつと才能もあるんだろう。

俺？ 聞かないでくれ。思い出したくもない。

なに、どうしてもだあ？

ちっ、しかたねーな。けど、笑うなよ？ っていうか、笑わないで下さい。お願いします。

結論から言つと・・・まあ・・・一応、最初の一回で火は点きました、はい。

けど、あれは絶対に成功なんかじゃなかった・・・

擬音で表すのなら、キティのライターくらいの火なら『ポッ』。

俺の火は『ゴオオオオ！！！！』。

そんな巨大な炎を予期していなかった俺の頭は『ボーボー』

すごく熱かった。そして多分、すごくグロかった。キティには悪い事をした。

それ以降も何度か試したけど、ライターほど小さくはできませんでした。最小でたき火くらいだった。魔力のコントロールはすごく難しいことだと知りました。

「これで私も魔法使いだな、ソウジ！」

「はは、その通りだ。」

「だが、私の火はソウジほど大きくない・・・」

落ち込むなよ！ そうしたいのは俺の方なのに！

「そんなことは気にするな！ 正しいのは俺のよりむしろお前の方なんだから！」

「しかし、こんなものでは戦闘で役に立たないだろう？」

「それこそ気にするな。これは初歩中の初歩の魔法の一つだぞ？ 威力なんて期待する方がおかしい。」

つまり、俺はおかしいんですね。わかります。

「だが・・・」

「時間はたっぷりあるんだ。急ぐ必要はないんだぞ。」

「・・・」

「はあ、全然慰めになってないな・・・」

「ふむ、どうやらこの前、何もできなかったことがよっぽど応えたいだな・・・」

「うーん、何か言える事があるかな・・・あつ、そう言えばヘルシング卿が言った事って微妙に励ましになるかも？」

「なあ、キティ。吸血鬼が怖い、一番の理由は何だと思う？」

「えつと、死なないことか？」

「確かに死なないが、一時的にでも殺す事はできるだろう？」

「それじゃあ、血を吸って手下をいっぱい増やせる事か？」

「ふむ、なるほど。数の暴力は恐ろしいからな。だが、それよりも多い数で襲えば？」

「だったら、やっぱり魔力が高いことなのか・・・？」

「ちょっと、どうしてそこに戻る？ 思ってたより悩んでいたのか？」

「魔力が高くて、それを使いこなせなければ意味ないだろう？
現に、俺は魔力がずば抜けて高いが、魔法なんて“火よ灯れ”くらいしか使えない。それでも。」

「それでも？」

「それでも、俺は一人で軍隊を相手にできると自負している。それはどうしてだと思う？」

「もしかして、力が強いからか・・・？」

「ああ、その通りだ。その通りだよ、キティ。俺たち吸血鬼は他の種族よりは圧倒的に力が強い。君は俺の戦い方を見てどう思った？魔法を使って派手にやっつたか？ 武道など、技術で華麗に勝ったか？ 違っただろう？ 俺はただ力にものを言わせて相手を蹂躪しただけだったろう？」

「・・・そうだったな。」

「究極的に言えば、俺たちは存在そのものが脅威なんだよ。近づきさえすれば一突きで心臓を抉り出し、一薙ぎで首を切断できる。そして近づくに必要なのは傷つけられても倒れない生命力だけだ。遠くから攻撃されても、止まらなければいつか辿り着くし、近づいてくれたら願ってもいないことだ。魔法や武術を知っていれば、もつと簡単に殺せるかもしれないが、ただ労力が少し減るだけだ。俺が言いたい事が分かるか？」

頷くキティ。

「私は今でも戦闘でも役に立つのだな・・・」

「そうだ。お前はすでに充分以上に強い。俺のような戦い方をさせることは躊躇うが、お前ももう大人なんだ。その判断はお前に任せる。」

「ほほほ、坊主の言う通りじゃぞ、嬢ちゃん。」

「「!!!?」「」

「誰だ!」

周りを見回すが、誰もいない。

そんな馬鹿な。確かに声がしたぞ？

「エヴァ、気をつける。姿は見えないが、絶対に近くにいる。」

「ああ。」

スタッ

後ろか!?

「おおっと、脅かしてすまんのだ。この通りじゃ。危害を与えるつもりは無いんじやよ。」

振り向くと、そこには爺くさい言葉で話す子供が両手を上げて立っていた。

子供？

爺くさい言葉・・・?

そんなキャラがいたような・・・

「誰だ、お前？」

「おお、そうじゃった、そうじゃった。すまんかったのう。わしの名前はゼクトじゃ。フィリウス・ゼクトじゃ。ゼクトと読んでくれ。」

ゼクト、だと・・・？

確かにあのゼクトも子供だったけど、あれはこれから600年以上先のことじゃなかったのか？ 先祖かもしれないけど、似過ぎだろっ？

「そのゼクトさんは俺たちに何のようだ？」

「別にお主等をつけていた訳ではないから安心するがいい。たまたま近くを歩いていたらお主等の話が聞こえてきてのう。気になる単語を聞いたから声を掛けてみたくなったのじゃ。お主達、吸血鬼らしいのう。」

ゼクトはニヤリと笑ったが、そこに嫌味はなく、純粹に楽しんでいようような顔だったから俺は警戒を少しは緩めてもいいと感じた。

（大丈夫だよ、キティ。）

手を握ったら安心してくれるかな？

（ありがとう、ソウジ。）

「確かに俺たちは吸血鬼だが、それがどうしたんだ？」

「別にどうもせんよ。ただ、人生二百年、一度も吸血鬼には会った事がないからのう。近くで見てもみたくなつたのじゃ。」

「ほう、で、どうだった？」

「ふむ、何とも言えんのう。だが先ほどの話が本当なら、噂以上の存在のようじゃ。」

「それで？」

「それだけじゃ。」

それだけ？ 世界中探しても吸血鬼より恐れられる存在などいないくらいなのに、それだけなのかよw

「くくく、あつはつはつはー、いいね、お前！ 面白いよ！」

「ほほほ、まあ、二百年生きているとの、楽しいことに飢えるんじゃない。たとえそいつに殺されたとしても、吸血鬼に殺されて死ぬのならそれはそれで面白い死に方と思わんか？」

そんな事を考えていたのか？ まあ、二百年も生きていれば暇な時間も多いんだろつからな・・・うん？

「そう言えば二百年って言ったな。お前、そんなに生きているのか？ 人間じゃないのか？」

「生まれは紛れもない人間じゃぞ。じゃが、魔法で色々実験しているうちに不老になつたんじゃ。まあ、それでも不死ではないし、馬

鹿げた力もないし、吸血鬼よりは人間よりじゃぞ。」

「ふっ、なるほど、道理だな。」

「それでじゃが、お主達、魔法の先生を探しているようじゃな。どうじゃ、わしが先生になつてやるうか？ わしにとつてもちようどいい暇つぶしになるし、不老不死の吸血鬼の魔法の先生になったら、わしの名が永遠に語り継げられることになるかもしれんからのう。」

「悪名になるかもしれんがな。」

「わっはっは、吸血鬼ならむしろそうなりそうじゃ！ それはそれで面白そうじゃがのう。」

「どうだ、エヴァ？ このじいさんに魔法を習ってみるか？」

「私はソウジに任せる。私は別にどっちでもいいぞ。」

ふむ、600年もあるんだ。別にここで先生を決めなくても困らな
いと思うけど、折角の出会いだ。この機運に感謝して誘いに乗ろう
じゃないか！ それに、ゼクトはナギの師匠でもあるらしいからな。
これはもしかして『ナギが弟子』フラグが立ったか？

「よし、その誘いを受けるぞ、ゼクト！ これからよろしくな！」

「おお、そうか！ これは楽しみじゃのう。嬢ちゃんもよろしくの。」

「よろしく頼む、ゼクト。」

第六話・ししよー!ししよー! (後書き)

やっぱり最初のテンションを維持するのは無理でした。orz

これからはたまにギャグを織り交ぜながら、普段はこつこついう風になるのが多いかと思えます。

それでもストーリーを面白くしようと頑張ります! どうか見放さないで下さい!

第七話：ハンター（前書き）

うわー、短い。すみませんです、あんまりいいネタ思いつきませんでした。

第七話：ハン　ーX八　ター

ドオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「・・・」

「・・・」

「・・・」

またやっちゃった、テヘッ

「こりやおったまげたのう。まさか、吸血鬼がこれほどとは・・・」

「あはは・・・」

「勘違いするなよ、ゼクト。こいつが規格外なだけだ。」

説明しよう！

ゼクトに魔法の師事をしてもらっている俺たち。

ゼクトの方針は取り敢えず初步の魔法を教える事から始めていた。自分で練習していた俺たちはそれを習得するのに数日くらいしか掛からなかった。取り敢えず今ゼクトに教えてもらっているのは“魔法の射手”。吸血鬼だから闇バージョン。

そして試すために一矢だけ唱えると・・・人の二倍は優にある大岩が瓦礫へと変貌した。

普通の“魔法の射手”の威力って人間の右ストレートくらいだったよね……？

神様よ、これはちょっとやりすぎじゃね？（どこがじゃ？）

何か聞こえたような気がするけど、無視した方が無難な気がする。

（ひどいのう）

「あゝ、取り敢えず、エヴァもやってみるか？」

「は？ なにを冗談きついことを言っている。なにを期待しているのかは知らんが、私はどうやっても今以上の事はできんぞ。」

「いや、取り敢えずエヴァが普通の魔法を見せてくれたら、この何とも言えない、微妙な空気もなんとかなるかなあ、と……あはは……」

「はあ、やれやれ。今更私になにをやったってどうにもなる訳ないだろう。」

あつ、やめて、そんな顔で俺を見ないで。俺のガラスハートが砕け散っちゃっ。

「うう、それは分かっていると言わない約束だろう、エヴァ。」

「とにかく、そう言う事だ。今日は練習をこの辺にしてご飯の用意をしよう。備蓄が少なくなっているのだろう？」

「おっし、そうしよっし……」

ここから離れられるのなら何でもいい！ 練習はほんの数十分で終わった気がするけど、気にしちゃ負けだぜ！

「ふむ、ならわしは魚でも釣って来よう。」

おー、乗ってくれるか、ゼクトよ！ これからは心の友と呼んで進ぜよう。

「じゃあ、俺は適当に野菜を集めながら動物を狩ってくるかな。エヴァはどうする？」

「私もソウジと行こう。」

ヨッシャー！

「うっし、じゃあ行くか！ 二人の方が色々と効率もいいしな。」

「うむ、そうじゃな。では、よろしく頼むぞ、二人とも。」

「任してくれ、ゼクト！」

「ああ、また後で会おう。」

さて、ちよっくらハンターにでもなっってくるか！

・・・

・・・

— — — orz

そう言えば、俺はバリバリの都会っ子だった・・・

こっちに来てからもマクダウエル家に世話になったり、街で討伐依頼などを受けて生活していたし、狩りなんて数えるほどしかやらなかった。

山菜も、食べられるかも分からないキノコとか、野菜っぽい草とかばっかり・・・

はあ、そろそろエヴァと合流する時間なのに・・・

あっ、噂をすれば。

「よう、キティ。収穫はどうだった？」

「おー、ソウジ！ この通り、成果は上々だぞ！」

なに！

狐、うさぎ、キノコに芋っぽいもの。果てはベリーののような果物。

絶望したー！ 十歳以上の年下に負けた俺に絶望した！

「・・・」

「ん？ どうした？ ソウジの方は何か見つかったか？」

「ぐっ……」

「なんだ、何も無いじゃないか。」

あつ、またその呆れたような目。本日二度目！ 今日踏んだり蹴つたりだ！

「キテイの方はすごく多いな。どうやってそんなに集まるんだ？」

「お前な……あれだけ私と森を駆け回ったのに、これくらいもで
きんのか？」

なんと、あれはただ遊んでいたじゃなくて、サバイバルスキルの上
達に繋がっていたのか！？

エヴァちゃん……以外と野生児だったんだね……

「うっ、そう言えばいつの間にか木の实やら、ベリーやら持って来
ていたな。俺はずっとお前が偶々見つけていたと思っていたぞ。」

「普通気づくだろう……あの時は別に必要なかったから狩りとか
はしなかったが、動物の跡をたどることなど雑作もないぞ。」

「そうだったのか……今まで全然知らなかった……」

これが子供の独り立ちを見守る親の気持ちなんだね。ヤベ、切なさ
で泣きそうだけ。

ふわっ

何だ？

はっ、まさか、この柔らかかくて暖かい感じ。キティに抱きしめられているのか？！

「／／ソウジ、別に何も集められなくても落ち込まなくてもいいじゃないか。お前は今までずっと私を守って来たんだ。私にもたまに恩返しさせてくれ。」

「キティ・・・」

「さっ、もう行くぞ、ゼクトも待っているだろうし！・・・／／／」
あっ、離れちゃった。ちょっと（いや、かなり？）残念。

けど、その顔が赤くちゃ、折角のシリアスも微妙にラブコメになっちゃうぞw

「もう、エヴァちゃん、そんなに照れなくてもいいのに。もう少し抱きしめてくれてもいいじゃないか。」

「う、うるさいっ！（／／／）それに、私はもう子供じゃないんだ！昔の呼び方はやめろ！・・・／／／」

「え〜？ 可愛いじゃないか、エヴァちゃん。」

「ふん、さっさと行くぞ、ソウジ！・・・／／／」

「あつ、ちょっと待ってよ、エヴァちゃん！」

「絶対に待たない！」

第七話：ハンター（後書き）

修行編のはずなのに、修行は十行ほどで終わってしまった・・・
次回こそ。次回こそは！

第八話・ライラックはオリーブの親戚なんだぜ（前書き）

微工口注意。

第八話：ライラックはオリーブの親戚なんだぜ

「うーん……むづー……」

「何唸ってるんだ、ソウジ？」

キティ？

「いや、ゼクトにそろそろ自分の始動キーを考えると言われただろ
う？」

ゼクトに師事してもらい始めてから数ヶ月。魔法のレパトリーも増
えて来た。空で唱えられるのはまだ初級の魔法だけだ。

ここで言えるのはただ一つ。呪文めんどくせー！

ナギがあんちよこを使ってた事に納得だ！

とにかく、魔法は順調に習得していて、いつまでも『プラクテ・ビ
ギ・ナル』じゃあ格好もつかないとゼクトに言われたのはつい先日。
しかし、いくら考えてもいいものか思いつかない。今は適当な木に
背を任せながらそれについて悩んでいる。

「確かに言われたな。何だ、考えつかなくて悩んでいたのか？」

「まあ、そんな感じかな。そう言うキティはどうだ？ 考えついた
か？」

「それは、まだだが、別に急ぐ必要ないだろう？ 焦って変な始動キーにしてもしょうがないしな。」

「うん、そだねー・・・」

「はあ・・・ほら、行くぞー！」

うお、ひっぱーらーれーるー

「ちょ、キティ、どこに行くんだ？ そんなに急ぐ必要はあるのか？」

「たまには息抜きをしないと考えつく事も考えつかないだろう？」

「そ、それはそうかもしれないけど・・・！」

「つべこべ言っていないで付いて来いー！」

うわああああああ

・・・

・・・

・

「で・・・何だ、これは？」

「うるさい、それ、絶対に取るなよ！・・・／＼／」

「それはいいが、これじゃあ何も見えないぞ。」

「その為のものだろう！」

「はあ・・・」

はい、察しのいい人には分かったかもしれないが、俺は今目隠しされていきます。『何故？』と、聞きたいかもしれませんが、はい、俺も聞きたいです。

目隠しされる前に最後に見たものは多分、いつも水浴びに使っている湖だったと思う。

だけど、そうだと確認できる前にキティに目隠しされて何も見えなくなつた。

「よし、そのまま服を脱げ！」

「はあ？」

何言ってるんの、こいつ？

服を脱げだと？

ま、まさか、これは俺の貞操の危機？！

駄目ですよエヴァちゃん！ あなたにはまだ早いです！

そんなはしたない娘に育てた覚えはないですよ！

「いいから脱げ！ それと、目隠しは絶対に取るなよ！」

パサッ

い、いまの音は・・・？

ま、ま、まさか、キティの服が脱げる音・・・？

と言う事は、彼女は今はだ・・・？

はっ！ ときどきが止まらない！！！！

チャプ

チャプ・・・？

「ソウジ、何をしている！ 早く服を脱いで入って来い！」

な、なんだ、そう言う事だったのか。ただ一緒に水浴びしたかったのか・・・

何やらほっとしたような、残念なような・・・

まあ、それなら服を脱いでも、下着まで脱がなくてもいいだろう・・・

多分キティも下着くらい着ているっしょ。

なら、俺も同様にやらないとキティに失礼だろう。

<side:エヴァ>

うう、胸の動悸が治まらない。

私は今、裸で湖に膝まで浸かっている。

いくらソウジに目隠しをさせていると言っても、恥ずかしさは隠せない。

小さい頃に何度か一緒に風呂に入ったが、あの時は子供で、羞恥心など一欠片もなかった。

色々と考えているうちにソウジは服を脱ぎ、湖に入って来た。

何だ、下着を履いたままなのか・・・私が裸なのに、ずるいではないか！

だが、下着を脱げと言ってしまつと、まるで私が変態に聞こえてしまう。

「ふん、やっと来たか。」

「キティ、何か怒ってる？」

「何でもない！」

これでは一人だけ裸の私が馬鹿みたいではないか。

「はあ、気持ちいいな・・・」

ちっ、気楽そうに泳ぎおつて。私の気持ちも知らないで。

・・・

・・・

・

「こうして一緒に水浴びするのって、昔にキティをお風呂に入れた
時以来だな。」

「ふむ、そうだったか？・・・／＼／」

「ああ、あの時のエヴァちゃんって落ち着きがなくて、洗うのが大
変だったのを覚えているぞ。」

「うー・・・」

そんな事まで覚えていなくてもいいだろう？

ソウジは私より十年ぐらい年上だし、覚えていても仕方がないけど、
それでも恥ずかしい。

「キティ？」

「なんだ。」

「いや、さっきから静かだったから気になっちゃってぞ。」

「別になんでもない。」

「ふーん。」

「で、どうだ？」

「なにが？」

「ちゃんと息抜きになったか？」

「ああ、悩みが吹っ飛んだよ。ありがと、キティ。」

「気にするな。／＼／＼」

「キティの言う通り、焦っても仕方がないし、変なものになったら目が当てられないし。」

「そうだな。」

「まあ、それでもいつかは決めないといけないが・・・あっ、そうだ！」

「うん？」

「折角ずっと一緒にいるんだから、いつそ同じ始動キーにしないか？」

そ、それは魅力的だな／＼／

「ソウジはそれでいいのか？／＼／」

「当たり前だろう？ キティとお揃いの始動キー……俺が断る訳ないじゃん。」

「そ、そうか／＼／」

そうはつきり言われると照れるではないか、ばかもの。

「だったら、この後は一緒に始動キーを考えようぜ。」

「うむ、そうしよう……くちゅん！」

うっ、くしゃみが。

「どうした、キティ？ 少し冷えたか？」

「うー、そうかも知れん。」

「じゃあ、そろそろ出るか？」

「ああ。」

「早速始動キーのことを考えるか？」

「うん。」

「分かった。じゃあ、キティが最初に出てくれ。俺はまだ大丈夫だ

から。」

「そうか。じゃあ先に失礼する。」

「また後でな。」

後日

「おつ、始動キーが決まったのか？」

「あー、ばっちりだぜ、ゼクト！」

「同じ始動キーにした。」

「ほう、それは珍しいのう。」

「ああ。永遠に二人一緒にいるんだ。始動キーもお揃いにしようと思っただ。」

「なるほどのう。して、肝心の始動キーは？」

「『リック・ラク・ラ・ラック・ライラック』」「」

第八話：ライラックはオリブの親戚なんだぜ（後書き）

エヴァ、照れまくりですw

始動キー、結局原作通りです。少し（五分くらい）考えましたが、結局めんどくさくなってこうなってしまうました。

まあ、お揃いと言う事で許して下さい。変なものになるよりはよっぽどいい筈。

第九話・突然じゃない別れ（前書き）

ちよつと長くできました。

第九話：突然じゃない別れ

ゼクトに魔法を教えもらい始めてから数年のある日、俺はゼクトと話していた。

「なあ、ゼクト。」

「なんじゃ？」

「俺たち、旅に出ようと思っている。」

「なんじゃ、藪から棒に。」

「いや、まだ考えているだけだよ。出るのは数ヶ月後かな。まだゼクトに教えてもらっていない魔法も結構あるし、手加減とかまだ得意じゃないし……。」

中級魔法で草原を焼け野原に変えるとか……俺、マジ自重。

「そうじゃな。」

グハツ。今の、効いたぜ。

そんなはっきりと言わなくてもいいじゃないか……

「そんなことよりも、エヴァンジェリンが興味深い魔法に手を出しているみたいじゃのう。」

俺の今の一番の悩みが『そんな事』か……

「エヴァの新しい魔法ね・・・人形に人工の魂を憑依させて操る魔法を研究しているみたいだな。」

いよいよチャチャゼロが生まれるのか。俺がいて魔法使いの従者の必要がないから、もしかしてチャチャゼロを作らないのかと思ったけど、そんなことはなかった。

というか、彼女がその魔法を研究し始めた理由が笑える。（自嘲と
言う意味で）

何でも、ゼクトから魔法はほとんど習い終わっていて、コントロー
ルも完璧。だから俺が練習している間は時間が開いてしまっている。
しかし、ただ無為に時間を過ごすのではなく、その時間を未来の為
になるようなことに使っている。

うーん、流石だ！

俺とは違い、魔法の天才だぜ。

「ま、エヴァの研究の事もあるし、せめてそれが終わるまではここ
にいるつもりだ。」

「なるほどのう・・・じゃが、わしも教える事がなくなってきたし、
エヴァンジェリンの魔法の完成を区切り目にし、それぞれの道に別
れるのもいいじゃろう。」

「ああ。」

* * *

<side:エヴァ>

いよいよ何ヶ月にも及ぶ私の研究が実現する時が来た。

理論は完璧。

魔法陣も何度も確認した。

従者用の人形も用意した。

これで私はソウジに迷惑をかけないで、一人でも戦えるようになる！

私は今でも充分強いと思っっているし、多少の怪我を負う覚悟で戦えば必ず勝てるが、ソウジは私が怪我をするといいい顔をしないからな
・
・

まったく、どうせ放っておいてもすぐに治ると言うのに。ソウジはいつも私の事になると過保護になるから困る（／＼／

「おっ、エヴァ。いよいよやるのか？」

うっ、ソウジか。さっきまであいつの事を考えていたから少し恥ずかしい。顔にでていないか・・・？

「そうだ。これから人工魂を作り、この人形に移す。ソウジも見ていくか？」

「おっ、そっさせてもらっよ。」

「おお、ついに魔法を完成させたか、エヴァンジェリン?」

「なんだ、ゼクトまで来たのか?」

「うむ。ソウジの練習がつい先ほど終わってのう。」

「ほう。ソウジの調子はどうだ?」

「相変わらず、馬鹿みたいな威力じゃ。」

「うっ……」

「くくく……」

「呪文の方はなんとか覚えてきとるが、まだ完璧とは言えんのう。

まあ、お主等ならこれでも充分じゃろっ。」

ソウジに繊細な魔力のコントロールを期待するのもバカらしいし、こんなものか。後はこの従者を完成させればゼクトと別れる準備が完了するか。

よしっ、やるぞ!

< s i d e : ソウジ >

キティが作業を続けているのを見てみると、彼女とゼクトが何故か俺の魔法の出来の悪さについて話し始めた。

ちよ、やめてよ! 本人が目の前にいるんだよ!?

というか、二人は絶対に俺を困らせるため&それを見て楽しむためにやっている。

くそう、俺だつて。俺だつてなあ！　すごく頑張れば魔法を普通に抑えられる！・・・等。

おっと、そんな事を考えているうちに儀式が始まったようだ。

キティが呪文らしきものを呟きだすと部屋中に書かれている魔法陣が一斉に光り始めた。

その中でも一番大きい魔法陣の中心に人形がポツンと置かれている。

おっ、その人形がチャチャゼロになるのか？　なるほど、よく見れば見覚えがある・・・かも？

できれば、原作よりは性格が丸くなっていますように・・・！

そう祈らずにはいられないぜ。

考えても見るよ。四六時中、戦闘狂の殺戮好きな人形と一緒にいるんだぞ？

ドキドキ（命の危機的に）で眠れなくなるじゃん！

「・・・！！！！」

キティが声高々に詠唱を完了させた瞬間、魔法陣の光が眩しいほど輝いた。

「うわ、まぶしー！」

「……」

思わず手で目を隠し、横を見るとゼクトも同じようにしていた。

そして光は十数秒続き、やがて完全に止まる。

「……終わったのか？」

「そう見たいじゃのう。」

「成功したのか？」

「それはもう少し様子を見ないと分からんわい。」

「それもそうだな……」

< s i d e : : エ ヴ ア >

光もおさまり、視界が鮮明になった時、私は何よりも先に人形を確
認した。

成功したか……？

理論は所詮理論であり、本当にやってみないとどうなるかは分から
ない。

「……うん……？」

おお！ 人形が声を上げた！

「お前、私に分かるか？」

「ん？ あんた誰？」

ピキッ

「私が誰だか分からのか？」

「だから、さつきもそう言ったでしょ？ あんたバカ？」

ピキッピキッ

「貴様、造物主に向かって随分な口を聞くじゃないか？」

「げっ、あんたがそうだったの？」

「げっ、とは何だ！ げっ、とは！」

「あーあ、どうせならかつこいい男だったら良かったのに。あつ、ちようどあそこに男が二人いるじゃない。ガキはごめんだけど、もう一人はギリギリ合格かな？」

「~~~~っ！ 私を無視するな！ この人形が！」

よりによってソウジを気に入っただと？！

「はあ、いやだね、ヒステリー持ちの女って。大体ね、どうして」

人形』なんて呼んでるのよ？ 前もって私の名前くらい考えてよね。ほんと、何を考えているの？」

何なのだ、この生意気な人形は！

こうなったら変な名前をつけて私に敬意を払わなかった事を後悔させてやる！

「名前だと？ いいだろう・・・くっくっく。お前の名前はチャチャゼロだ！」

「はあ？ なに、そのださい名前？ 変更を要求するわ。」

「もう遅い！ この名前はもうすでにお前の魂に刻んだ！ 変更の余地など一切ない！ お前はこれから一生チャチャゼロだ！ ふはははははははははは！」

「ちっ、さいあく。」

< s i d e : : ソウジ >

・・・

悪役のように笑うキティを少し離れてみている俺とゼクト。

これは予想外だったぜ。

キリングドールになっていないのはまあ、よかった。

何か、話し方も流暢だし、感情が豊かに見える。

けど、これじゃあまるで反抗期の娘じゃないか？

それに、何かキティを目の敵にしているし・・・

一応作り主なんだろう？

うーん、これなら原作通りのほうがキティに取ってはよかったかも・・・

これも俺がキティを死徒化させたことで強化された影響か？

どっちにしても、キティ、哀れ。

「うーむ、これは成功じゃろうか？」

「いや、魂もちゃんと憑依したし、一応成功ってことだろう？」

「まあ、そうじゃが・・・」

「心配するな、ゼクト。お前の言いたい事は分かる。けど、エヴァの為にもこれは黙ってここうぜ。」

「そうじゃな・・・」

その気遣いが目にしみるぜ。

「ねえ、その男。」

うん？ チャチャゼロがこっちを近づいて話しかけてきた。

「俺か？」

「そうよ。あなたの名前は？」

「俺はソウジだ。」

「そう。すごく不本意だけど、アタシの名前はチャチャゼロよ。これからよろしく。ついでに隣の男もよろしく。」

「ああ、よろしく。」

「わしはついでなのか？　ちなみにわしはゼクトじゃ。」

「別に聞いてないわ。」

「チャチャゼロって名前に不満があるのか？」

「当たり前でしょ？　こんなださい名前、誰が気に入るって言うの？　これも全てあの馬鹿マスターのせいよ！　マスターって呼びたくもないけど、何か逆らえないのよ。」

キティよ、何故これほど嫌われた・・・？

「おい、チャチャゼロ！　ソウジから離れる！」

おお、キティ、復活したか。

「はあ？　別にいいでしょ？　どうしてあんたの許可がいるのよ、馬鹿マスター。」

「うるさい！ お前は私が作った従者なんだぞ！ ちゃんと私の側にいる！」

「戦闘になったら守ってあげるわ。それ以外は好きにしてもいいでしょ？」

「~~~~っ！ ソウジも何か言え！ こいつが付きまとうのは迷惑だろう！」

「ねえ、ソウジ、アタシ迷惑？」

俺の頭の後ろ辺りに飛び乗り、肩車姿で後ろからそう聞くチャチャゼロ。

「んー？ 別に迷惑じゃねーぞ。」

「だよねー。」

「もういい！！ この人形を壊して新しく作り直す！」

「いや、エヴァ。これくらいは許容範囲だろう？ 別に邪魔していないし、うるさくもしてないしな。」

ちよっと落ち着こうぜ、キティ。

「しかしな！」

うーん、この顔はチャチャゼロを怒っているのか、嫉妬しているのか。どっちなのかは微妙だな。とりあえず抱きしめてみるか。

ポフッ

胸辺りでキティの頭を抱きしめる。

「なっ、ソウジー！（／＼／＼）」

「ほら、ちょっと落ち着け、エヴァ。」

髪を梳きながら宥めるために話しかける。

「チャチャゼロを壊すとか言っちゃ駄目だろ？ 人工とはいえ、魂があるんだ。それともう、一つの命だろう？ 襲ってくる奴には容赦はいらないが、命は無闇に奪えるほど価値のないものか？ 違うだろう。」

「むー……」

「お前がそれが分かっているやつだと知っているぞ。今はちょっと頭に血が上っているだけだろ？ 落ち着くまでこうしていてやるから、その後はちゃんとチャチャゼロと向き合え。な？」

「むう、分かった。ソウジがそう言うなら。」

「チャチャゼロ、お前もちゃんとエヴァと話し合えよ？ それに、チャチャゼロって確かにちょっと変わった名前だけど、俺は可愛いと思うぞ。」

「……分かったわ。ちゃんとマスターと話す。」

「おほん！ そろそろいいかのう？」

「！！！！」

おおっと、すっかりゼクトの事を忘れてたぜ。

ゼクトの声を聞いてキティが慌てて離れる。

相変わらずの照れ屋さんだな。

「そうだな。じゃあ、エヴァ、チャチャゼロを置いていくからちゃんと対話しろよな。」

「うむ。」

「じゃあ、後は二人に任せて、俺たちは行くか。」

「そうじゃな。」

* * *

数日後。

キティとチャチャゼロの仲は良好とは言えないが、最初の頃ほど険悪ではなくなった。

今はこれくらいでいいか。

俺とチャチャゼロ？ まあ、普通より少し仲がいいかな？ 今ではすっかり俺の頭の後ろが定位置になりつつある。

そして、今日。いよいよゼクトとの別れの日が来た。

俺たち三人（+1）は外で向かい合って別れの挨拶をしている。

「それじゃあな、ゼクト。色々教えてくれてありがとう。」

「うむ。お主は魔力のコントロールさえできれば完璧じゃがのう。それはこれからの課題じゃな。お主なら心配いらんじやろうが、無事を祈っとる。」

「あはは、そうだな。頑張るよ。ゼクトも元気だな。」

「エヴァンジェリンとチャチャゼロもまたの。エヴァンジェリンほどの生徒は始めてじゃ。おそらくこれからお主ほどの弟子は現れんじやろう。それと、今度会う時までにはもう少し仲良くなっているよう祈っとるぞ。」

「それは分からんな。とにかく、世話になった。また会うのがいつになるかは分からんが、死ぬなよ。死にさえしなければいずれまた会えるだろうからな。」

「じゃあね、ゼクト。」

「では、いずれまた会おう！」

「ああ。いつかまた会おうぜ！ じゃあな！」

そして、俺たちは手を振りながら反対の方向へと歩き始めた。

・

・

・

「なあ、ソウジ？」

「なんだ、エヴァ？」

「またゼクトに会うと思うか？」

「まあ、あいつも不老なんだ。それが何百、何千年後になるかは分からないけど、いつかまた会えるさ。」

「そうか。」

「なんだ、嬉しそうだな。」

「まあ、俺以外、ほぼ初めての友達みたいなもんだから仕方がないかもな。」

「それにな・・・」

「それに？」

「何か、絶対会えるっていう確信があるんだよね。」

「なにか知っているのか？」

「うんにゃ、勘。」

「何だ、それは。」

「ははは、勘を馬鹿にしちゃいかんぜ。」

「はあ……」

「ねえ、マスター、ソウジ。」

おっ、チャチャゼロか？

「なんだ？」

「これからどこに行くの？ 目的とかあるの？」

「どうだ、ソウジ？ 考えがあるのか？」

「そうだなー……魔法世界なんてどうだ？ いつか、ゼクトに行き方とか聞き出したし。」

「魔法世界？ 何か楽しそうね。アタシは賛成よ。」

「チャチャゼロの意見はどうでもいいが、私も異論はない。」

「なによ、それ！」

キティとチャチャゼロがまた怪しくなっているが、敢えて無視だ。

「よしっ、なら決まりだ。次は魔法世界に行くぞ！」

第九話：突然じゃない別れ（後書き）

何やら、チャチャゼロが大変なことになってしまった。

この話を書き始めた時はそんな予定など無かったのですが・・・

やはりノリだけで書いていると（作者にも）予想外な事がたくさん起きるのですね。

チャチャゼロ好きな人にごめんなさい。

でも、これもある意味タイトル通りの話？

第十話：エヴァ無双（前書き）

PV11万、ユニーク15000突破。

まさかこれほどになるとは思っていませんでした。

これからも楽しいSSを送り届けられるよう、頑張ります！

第十話：エヴァ無双

「さあ、やってきました、魔法世界！」

「誰に言っているのだ、ソウジ？」

「いや、何となく言ってみただけ。」

「変な奴。」

チャチャゼロ、それはちょっと酷いんじゃない？

とにかく、そう言う訳で俺たちはゼクトに教えてもらったゲートを抜けて魔法世界に来ました。

原作より六百以上前と言う事だけあり、ゲートの管理はそれほど厳しくはない。

まあ、ここがメインゲートとは遠く離れた場所にある事が関係あるかもしれないし、俺たちがまだそれほど有名になっていないからかもしれない。

俺たちはすんなりと入国し、管理局（と呼ぶのも躊躇うほどみすばらしいが）の外に出てその光景にはっとする。なんといるんな生き物が空を泳いでいるじゃないか！

いやあ、ファンタジーだねー。

これだよ、この『魔法世界！』な感じがたまらない！

うーん、これが火星なのか・・・？

信じられん。

「さーて、こっちに来たのはいいけど、これからどこに行く？」

「別にどっちでもいいんじゃない？ この世界の事はほとんど知らないんでしょ？」

「気に入らんが、チャチャゼロの言う通りだ。適当に街を選んでそこに行けばいいだろう。」

「うーん、そうだなあ。おっ、この街なんか良さそうじゃないか？」

道標を見てレーベンスシュルトと言う名前を指す。

この名前ってどこかで聞いたような気がするんだよな・・・どこだっけ？

「レーベンスシュルトか。まあ、いいだろう。」

「よし、行くか。」

・

・

・

ゲートからしばらく歩いた所。

俺とキティは連れ立って歩いていて、チャチャゼロはいつもの場所。

うーん、たまにはこうして気分にゆっくり歩くのもいいな。

ここ数年はずっと魔法の修行が続いていたからなあ。

別に修行漬けというほど大変でもなかったけど、目的もなく旅をするのは結構久しぶりだ。

「気持ちいいな、エヴァ。」

「うむ。こうしてソウジと二人で歩くのも久しぶりだし、気分も爽快だ。」

二人？

「ちょっと、アタシの事を無視しないでよ!」

そりゃ、怒りますよね。

「何だ、チャチャゼロ。いたのか?」

「はあ? 何アホな事言ってるのよ? アタシが離れられる訳ないでしょ? アタシを作ったくせに何も知らないのね。」

「~~~~っ!!! 嫌味だ、バカ! そんな事も分かんのか?!」

「いや〜ね、それくらい分かるわよ。アタシは初心なネンネじゃないんだから。マスターはどうか知らないけど・・・」

「く〜く〜!!!!」

いや、初心も何も、お前は生後何日の人形だろ？

そしてキティ、そんなチャチャゼロに手玉に取られちゃうなんて・

「この人形風情が〜〜!!!!」

またか・・・

チャチャゼロに掴み掛かるキティを適当にあしらう。俺との身長差もあり、ちよつと意地悪をしているみたいで罪悪感を感じる。

そろそろ止めた方がいいかな・・・

「エヴァ、そこら辺にしたら？ いつもの事だし、お前、一応マスターなんだろ？」

「そつだそつだ！」

「でも、ソウジ！」

「それに・・・」

「それに、何だ？」

俺に訴えるキティの後ろを見ながら言う。

「どうやら団体さんのお出ましのようだよ。」

「なに？」

俺に言われてキティはやっと後ろの人垣に気がついた。

ざっと見れば百人くらいか？

そしてほとんどが魔法使いらしい。

「ほう……（ニヤリ）」

その笑顔、すごく悪そうだよ！？

チャチャゼロと喧嘩していて気が立っているのは分かるけど、それはちよつと引くぞ！

「はん、噂の吸血鬼がどんなものかと気になって来てみれば、こんな小娘とガキだとは。」

あー、お前、その態度はキティを怒らせてしまうぞ。それに、修行していた間、襲撃は一度もなかったから、キティは折角習った魔法を試す機会が来るのをずっと待っていた。

そんな時に襲って来たお前達の命運は残念ながらもう決まっている。かわいそうだと思うけど、襲って来たのはお前達の方だし、遠慮はしないよ？

「ソウジ、ここは私に任せてくれ。ゼクトに教えてもらった魔法で私がお前の隣に立つに相応しい存在だと証明してみせる。行くぞ、チャチャゼロ！」

キティ、別に戦えなくても俺がお前を見捨てる訳ないだろう？

でも、ずっと悩んでいたことを知っているし・・・強くなってからはこれが最初の強さを証明できるチャンスだから、それもしようがないか。

「しょうがないわね。」

よじよじとチャチャゼロが俺の肩から降りてどこからでもなく二振りの鉈を取り出す。

チャチャゼロの言葉は嫌々だけど、声色は嬉々としている。

やっぱりあの人形は根っこでは殺戮大好きなんだ！

うわー・・・俺は殺す事に今更罪悪感はそれほど湧かないけど、流石に殺しが好きとまでは行かない。

「エヴァ、行ってらっしゃい。」

「ああ、行ってくる。」

<side:エヴァ>

ソウジを残し、私とチャチャゼロは魔法使いどもの前に立つ。

「何だ？ 小娘と人形でどうするんだ？ 後ろの野郎もやらなくてもいいのか？ たった一人でもないよりはましだろ？ まあ、この大勢相手だどう考えても無駄だと思うがな。」

相手の中で唯一話している一人が嘲笑うように私に言う。

ふん、こいつは何を勘違いしている？

ソウジを参加させる？

『たった』百人相手にか？

ふっ、笑わせる。

あれはまさに世界最強と言われてもいいほどの存在だぞ？

こんな虫のような奴らにソウジが出るまでもない。

「クククク・・・」

「あん？ 恐怖でおかしくなっちゃったか？」

「ククククク・・・お前達、何か勘違いしてないか？」

「なんだと？」

「お前等の相手など私とチャチャゼロで事足りるのだ。だからソウジも出て来ないし、あまりの滑稽さに笑いも出てしまう。」

「そうよ、あんた達なんかアタシの錠の錆に変えてやるわ。」

「くっつ！ 貴様、この人の数が見えないのか!？」

「ふん、蟻が何匹集まるうが象に敵う訳がなかるう?」

「ちいつ!! 行くぞ! 正義の名の下に悪しき吸血鬼どもに裁きの鉄槌を下せ! 全員かかれ!!!!」

「「「「「おおおおおおお!!!!!!!!!!」」」」

ふん、来たか。

今こそ私の修練の成果を見せてやる!

「チャチャゼロ、少し時間を稼げ! 一瞬で終わらせてやる。」

「ふん、マスターの思い通りに動くのは気に食わないけど、一応聞いておくわ。でも、別に全員殺つてもいいんでしょ?」

「くくく、出来るならな。だが、私の魔法に巻き込まれるなよ?」

むしろ、巻き込む勢いで撃つてやる。

「むっ、今絶対にアタシを魔法に巻き込もうと考えたわね! けど、そうはさせないわよ! 残念だったわね!」

ちっ……

「ちよっ……今舌打ちが聞こえたわ! やっぱりアタシを亡き者

にしようと考えてたんだ！ ソウジに言ってやる！」

「ふん、精々背中に気をつけるんだな。さあ、奴らが来たぞ。さっさと相手して来い。」

「分かってるわよ！」

そして連中のだ真ん中にチャチャゼロが飛び込み、二つの鉦を振り回す。

一振りする度に腕が飛び、首が飛び、私は思わず笑いが浮かぶ。

さあ、私も手に入れた力を見せよう。

「『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・・・』」

まずはソウジと一緒に考えた始動キーから始め、私の最強の魔法の一つを詠唱し始める。

「『契約に従い、我に従え、氷の女王・・・』」

私が得意とするのは闇と氷の魔法。

「『来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。』」

周囲の温度が絶対零度近くまで落ちていき、魔法使いどもが次々に氷漬けにされていく。

どうやらその間にチャチャゼロもこちらまで退いて来た。

ふん、そのまま巻き込まれればよかったものを。

「『全ての命ある者に等しき死を。』」

ここまで来ると、残るのは相手の恐怖で文字通り、凍り付いた表情だけだ。

「『其は安らぎ也』」

最後にソウジを見ると、あいつは満足そうに私を見ている。

ふふふふふふ・・・

「『おわるせかい』」

呪文の詠唱が終わり、私がパチン、と指を鳴らすと、魔法使いを含んだ氷は全て砕け散る。

後に残るのは何も言わない凍り付いた粉々の死体だけ。

私はそれを見て、始めて自分の手で人を殺したと分かった。しかし、不思議と特に何も感じない。

こいつらが襲って来たから割り切っているのだろうか？ それとも吸血鬼になったからか？

いいや。私は多分、ソウジに吸血鬼にしてもらった時からこの日が来るのを覚悟し始めたんだろう。

「チャチャゼロ、無事だったか。」

「なによ、その残念そうな言い方は？」

「残念だからだ。」

「ちょっと、あんたってほんっとーに酷いマスターね。やっぱりソウジに言っただけでやる。馬鹿マスターはソウジに怒られて落ち込めばいいわ。」

「ふん、これくらいでソウジが怒るものか。どうせ『いつもの事だろ』とでも言っただけで済むよ。」

そんなことより、早くソウジと話したい。

私の戦いをどう思ったんだろうか？ 私を認めてくれるだろうか？ 私を後ろではなく、隣で立たせるだろうか？

聞きたいことがいっぱいだ。

<side:ソウジ>

おいおい、『おわるせかい』かよ。

意気込む気持ちは分からないでもないが、こんなやつら相手にそれは少々オーバーキルじゃないのか？

まあ、最初の戦いだし、別に効率で点数をつけている訳じゃない。

何より大事なのはキティ達が怪我をしなかった事だ。

傷が治ると言っても、痛みはあるし、何よりも彼女の尊い血をこんな畜生共に見られるのが嫌だ。

さて、戦いは終わった事だし、キティ達を褒めてやるか。

もちろん、チャチャゼロも忘れないぜ。

第十話・エヴァ無双（後書き）

読み返してみると、色々酷い・・・

第十一話：レーベンスシュルト

ゲートを通り、魔法使い百人に襲われ、レーベンスシュルトへと歩き始めてから一週間。

「それにしてもこっちに来ていきなり襲われるとはな〜・・・いつの間に俺たちそんなに有名になったんだ？」

「大方、度々襲ってくる奴らの内、逃がしたものが噂を広めているのだろ〜。あの中には魔法使いもいたのだろ〜？」

「ねえねえ、あんな奴らが襲ってくる事ってよくある事なの？」

何となく気になるような感じで聞くチャチャゼロ。

まあ、旅に出て何日も経たずに襲われちゃったら気になるよね。

「別にいつもって訳じゃないよ。精々半年に一回くらいか？ ゼクトと一緒にいた間はなかったけどな。けど、ここは魔法世界だしね。向こうとは違って俺たちの様な存在はあちこちにいるから、これからはどうなのかは分からないな。」

「だったらどうしてこっちなんか来たのよ？ 面倒なことに巻き込まれるだけじゃない？」

「チャチャゼロ、確かにそうだけど、その可能性が高いから魔法世界を避けちゃったら、何か、奴らに行動を制限されているように感じないか？」

「それもそうね。」

ガキくさい理由だ？ 別にいいじゃないか。返り討ちになっている、襲って来た奴ら以外に迷惑かけてないし。

「だから、別に心配する事なんてないぞ、チャチャゼロ。」

「心配？ どうして？」

いや、そんな意外そうな顔をされても・・・

「アタシはただ、少し暴れ足りなあって・・・」

そりゃまあ、ほとんどキティの魔法で片付いたけど・・・

もしかあれで本格的に戦闘狂が目覚めたか？

「ふん、すでにここまで来たのだ。今更そんな事を考えてもしようがないだろう。それよりも、ほら。街だぞ。あれがレーベンスシュルトだろう。」

おっ、街か。

うん？ 遠くに見えるのは城か・・・？

「なあ、エヴァ。あれって城だよな？」

「あん？ 確かに城だが、そんなに珍しい物か？」

「エヴァは小さい頃から色々な城にパーティーとかで行ってるから、

珍しくないかもしれないけど、俺に取ってはほとんど始めてだな。」

「ほう、ならあそこに行つて中を見せてもらえるか聞いてみるか？」

「あはは、それは止めといた方がいいだろう。どうせ門前払いされるだけだ。」

「やってみないと分かんと思うが、ソウジがそれでいいなら私もそれでいいぞ。」

「どつちでもいいでしょ？ とりあえず街に入ろうよ！」

そうだな、チャチャゼロの言う通り、まずは街に入るか。

* * *

その夜。

俺とキティ（とチャチャゼロ）が店で食べていると、前の席に一人の人間が座った。

「この席いいでしょうか？」

え？ 周りの席、いっぱい開いてるじゃん？

けど、俺はNOと言えない日本人。

「ええ、どつぞ。」

俺がそう言つとキティは責めるように俺を見る。

うっ、ごめん、でも、聞かれたら俺は思わず頷いてしまつ！

俺の所為じゃないんだ！ 俺の血がそうさせるんだ！

そうしている間に前に座つた人は食べ物注文するところちを見る。

「どうも、こんにちは。」

「こんにちは。」

「旅の者と見受けませんが・・・」

「はい、そうですが、それが何か？」

「いえ、少し気になっただけです。この街にはいつ着いたのですか？」

「今日着いたばかりです。」

「へえ、そうだったのですか。どちらから来たのですか？」

「ゲートを通り、旧世界からです。」

「ゲートの方から！」

うっ、何かすごく驚いているな。

キティも、俺を睨んでいるし・・・

口を滑らせたかな？

「えっと、それだと何かいけなかったですか？」

「いえ、ただそちらの方に吸血鬼が現れた噂がありまして・・・」

ぎっくうー！ー！！！！

「そ、それは恐ろしいですね・・・」

「ええ。なんでも百人にも及ぶ討伐隊が結成されたのですが、行方不明になったそうで・・・」

「は、はあ。行方不明ですか・・・？」

「ああ、そう言えば、吸血鬼の特徴は黒髪の男と金髪の少女、それに動く人形でしたね。」

こ、こいつ、絶対に分かってるうー！

「へ、へえー。そうだったのですか。」

「おお、言われてみれば、ここにいるあなた達はその噂の容姿に似ていますね。」

「そう言えば、そうですね、あはは・・・」

俺の反応を見て楽しんでいるのか、こいつ？

「さて、冗談はこころ辺にし、そろそろ真面目な話をしましょうか。」

おっ、いきなり表情を変えた？！

キティとチャチャゼロも戦闘態勢だ。

「とりあえず、話を聞こうエヴァ。」

「感謝します。」

「で……？」

「ええ、そうですね……では……あなたが噂の吸血鬼ですね？」

「そうだとしたら、どうする？」

俺ができる一番怖い顔で男を睨む。

「何もしませんよ？」

「なに……？ なら、何故俺たちに話しかけた？」

「私はあなた達がこの街に入った時から見ていました。そして、つい先ほどの食事風景を見て、話しかけようと思いました。」

俺たちを見てた……？

「どうして俺たちを見張るような真似を？」

「吸血鬼がこの街に来たのです。この街の責任者として気になるのは当然でしょう？」

「責任者？」

「こいつが・・・？ 少し若いんじゃないのか？」

「実際、二十台と言われても俺は信じるだろう。」

「ええ、そうです。私の名前はクロウ・レーベンスシュルトです。この街、レーベンスシュルトを含む、レーベンスシュルト領の領主です。」

「その領主が俺たちにどうして話しかける？」

「私はあなた方を観察し、見極めようとしていました。」

「見極める？」

「ええ。もし、あなた達が危険でしたのなら、私は自分の命を差し出してもあなた達にこの街を離れるよう頼もうと考えていました。私の力で吸血鬼をどうこうできると考えるほど自惚れていませんが、せめてそれくらいしないと自分の領主としての責任は果たせませんからね。しかし、私が見た限り、あなた達にそれほど危険はないと感じました。なので、あなた達がこの街に危害を加えない限り歓迎をしますし、あなた達の存在を隠す事も約束しましょう。」

「それは、随分好意的ですね。」

はっきり言つて、吸血鬼と知りながらこんな扱いをされたのはほんと始めてだ。

「そうですか？　しかし、伝説の存在が相手ですから、私たちの安全を保証するにはこれが一番の方法だと思いました。」

なるほどね。こいつは中々強かだ。

「それで、もし俺たちが領民に被害を与えたらどうする？」

しないけどね。

「そうですね・・・街人全員に避難勧告をして、残った人で戦うしかないでしょう。おそらく、私たちは一人残らず殺されてしまうでしょうが、街から人がいなくなれば、人の血を吸う吸血鬼が留まる理由がなくなるでしょう？」

クロウは目を細めてそう言う。

ははは、そんな事を考えていたのか。

気に入ったぜ、クロウ。

キティを見たら、彼女も笑っている。

「くつくつく、確かに人間がいなくなれば、吸血鬼にはその街に意味はないな。まあ、俺たちは血を吸わなくても生きていけるからその行動も意味はないが。」

それを聞くと目を開いてクロウが驚く。

「ふっ、安心しろ、クロウ。少しからかったただけだ。俺たちには街の人に危害など加えるつもりは無い。」

「ほっ・・・もう、冗談が過ぎますよ、えっと・・・」

「ソウジだ。ソウジ・ホウキ。こっちは連れなの??」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。そして従者のチャヤゼロだ。」

「チャヤゼロよ。」

「よろしくお願いします、皆さん。」

「ああ、よろしく、クロウ。」

「よろしく。」

「そうです。皆さん、これから泊まる場所はまだ決まっていますか?」

「一応、宿で部屋を取っている。」

「もし良かったら私の城へ来ませんか? 客人として歓迎しますよ。」

むっ、これは少し予想外な展開?

「いいのか？ 俺たちは吸血鬼だぞ？」

「ええ、いいですよ。家族もいないし、あの城で住んでいるのは使
用人以外、私しかいないのですから少し寂しいのです。」

「どうする、エヴァ？ クロウの世話になるか？」

「そうだな、城へ行こう。ちょうどソウジも城が気になっていたの
だろう？」

「はは、そうだったな・・・よしっ、クロウ。その誘いを受けるぜ。
」

「そうですね！ それはよかったです。では、食事が終われば早速
行きましょう。」

「分かった。」

ふむ、城か。結構楽しみだな。

それにしても、レーベンスシュルト・・・レーベンスシュルト・・・

レーベンスシュルト、城・・・？

エヴァの別荘！

ここの城がそうだったのか？！

第十一話：レーベンスシュルト（後書き）

レーベンスシュルト城登場です。まだ別荘にはなりません。次回から二、三話はレーベンスシュルトが舞台になります。

第十二話：初めての・・・（前書き）

少し切ない話になってます。一体いつになったら笑いに戻るのです
よう・・・

第十二話：始めての・・・

城に案内され、城門が開いて俺たちが入ると、クロウは出迎えた使用人の一人に声を掛けて俺たちの部屋を用意させる。その際、一部屋か二部屋のどちらにするか聞かれたが、もちろん一部屋と言ってやったぜ！

いや、別にやましい気持ちなんてないんだけどね、これまで何年も一緒に過ごし、宿などでは金を節約する為にいつも一緒に部屋で寝ていた。そして、時々ベッドが一つしかなかった時は一緒に寝た事もあった。けど、それは本当に寝ただけで、寄り添うように抱き合うことがあっても、えっちなことは一度もなかったよ？

決してキティが魅力的な女性じゃないってことじゃないよ？ ただ、彼女が吸血鬼になる前は子供だったし、その後はずっとゼクトといふからそんな雰囲気になることはなかった。これからどうなるのかは分からないが、とりあえず今部屋と一緒にするのはそんな色っぽい理由からではなく、ただそうしないと何かが足りない、変な感じがするからだ。

まあ、他人は誤解したかもしれないけど、所詮は他人の事。俺たちには関係ない。

とにかくそう言う訳で一緒に部屋にしてもらい、俺たちは城での新しい生活を始めた。

* * *

それから十年ほどが経ち、俺たちはまだレーベンスシュルト城に世話になっっている。

その間、俺たちを狙って襲って来た魔法使いが時々いたが、街にも城にも被害はなかった。クロウも、それで俺たちを迷惑がる事はなく、俺たちと街の関係はおおむね良好と言える。

俺たちは各々の思うように過ごしている。俺は主に魔法の練習、それに吸血鬼としての力を研究や能力を伸ばす事に時間を費やしている。キティの方は魔法の研究をしている。クロウの城には魔導書などもたくさんあり、それを見たキティが大声を上げて喜んだことを今でも覚えてる。

しかし、一番忙しい理由は他にある。実はクロウ、とある日、領の経営の仕事があまりにも多くて、俺たちに手伝わせた事があったのだ。そして、それからたまに仕事を手伝わされ、時が過ぎるとともにその頻度は徐々に高くなり、ついに今では研究よりクロウの手伝いの割合が多いほどになっている。仕事ははっきり言えばつまらないし、疲れるが、俺たちはここから出るという道は選択していない。それは、ここでの生活を気に入っているからであり、仕事もそれほど嫌いと言いつ訳でもない。後、俺たちは時間を見つけては数週間から一月くらいの旅に出る事で鬱憤を晴らしている。

今日はそんな研究や仕事の息抜きに俺たちは久しぶりに城下町まで降りている。

「これはソウジ様にエヴァンジェリン様ではないですか。二人が揃って街に来るのは珍しいですね。」

ん？ おお、いつも世話になっっている屋台のおっちゃんじゃないか。

「おっちゃん、こんにちは。今日は二人とも暇だったんで、たまには遊ばないと、って思って街に来たんだ。」

「そうでしたか。今日は何か買っていけますか？」

ふむ、そうだな・・・小腹も空いてきたし、ちょうどいいか。

「うん。おっちゃん、その串焼きを二つくれ。エヴァも食べるよな？」

「うむ、もらおう。」

「分かった。おっちゃん、よろしく。」

「はい、二つですね。すぐに用意します。」

数十秒後におっちゃんは俺たちに串を渡して、俺が代金を払った。

「まいどー。」

「ありがとな、おっちゃん。はいよ、エヴァ。」

「ありがとう。」

「じゃあ、またな、おっちゃん。」

「はい、今日は楽しんで下さい。」

「おっ。」

・

・

・

「エヴァ、これなんか似合っんじゃない？」

とあるアクセサリー店で小さなサファイアが嵌めてある指輪を指す。

「かわいい指輪だな。」

俺はその指輪を手に取り、キティの指に嵌める。

「うん、よく似合っ。」

「そ、そうか／＼」

むっ、そんなに照れるような事だったか？ 　ただ指輪が似合っと言った筈だけど・・・

< s i d e : : エヴァ >

今日はソウジと一緒に街まで来ていて、今はアクセサリー店で指輪とかを見ている。

そしてソウジは一つの指輪を私に見せると、なんと薬指に嵌めたの

だ／＼／

ソウジは何でもないので振る舞っているが、これではまるで結婚指輪を探しているようではないか／＼／

それに、この指輪の石。いつかの誕生日にもらったペンダントと同じだ。ソウジはもしかしてあれを覚えていて、これを選んだのか？

「よしっ、それを買っていこう。店長、この指輪をくれ。」

「ソウジ、別に買わなくてもいいんだぞ？」

「いやいや、折角似合っていて、エヴァも気に入っているみたいだから。ここで買わないと俺が後悔する。」

「そうか。ありがとう、ソウジ／＼／」

「どういたしまして。それじゃあ、夕飯が近くなっし、そろそろ帰るか？」

「ああ、そうだな。」

それから私たちはアクセサリー店を出て、私は大事そうに指輪を何度も撫でながら城に戻った。

* * *

< s i d e : : ソウジ >

そして、そんな風に、クロウの仕事を手伝い、たまには襲撃者を撃退しながら更に五十年が過ぎた。

「ソウジさん、そこにいるのですか？」

「ああ、クロウ。ここにいる。エヴァもチャチャゼロも一緒だ。」

「それはよかったです。皆さんの顔がよく見えません。もう少し近くに寄ってくれませんか？」

「ああ。」

俺はベッドで寝ているクロウに近づき、俺に習いキティも近づく。

五十年も経てば、クロウも老いてしまう。今ではクロウはすっかり老人になり、ベッドから起き上がるのも辛い。

「どうだ、クロウ、見えるか？」

「ええ、見えます。ふふ、あなた達はあの頃とは変わらないのですね。」

「それが吸血鬼だからな・・・」

「私はすっかり老いてしまいました。命も残り僅かでしょう。」

クロウがそう言うと、キティが悲しい顔をする。

キティがこういう反応をするのも仕方がないだろう。これは彼女の両親以来、始めての親しい人の死だから。それに、知っていた時間

で言えば、両親よりも親しいかもしれない。かくいう俺も気持ちが悪く沈んでいる。五十年以上、友人をやっている人の死が近づいているのだから、それで何も感じない訳がないだろう。

「クロウ、もう一度聞くんが、吸血鬼になる気はないのか？」

「そつだ、クロウ！ 吸血鬼になれば死なないぞ！ そつすれば別れなくて済む！」

必死にクロウを説得しようとするキティ。

「ははは、いくら聞いても無駄ですよ。大体、こんなよぼよぼのおじいさんが吸血鬼になってどうするのです？ 若い時ならまだしも・

・

「まだ若い時にも何度が聞いたけどな。」

「ふふ、いいのです。吸血鬼としての生も魅力的ですが、折角人として生まれたのですから人としての一生を全うしたかったのです。それに、充分楽しい人生でしたし、充実していました。こんな良い友人も得ました。悔いなどありません。」

「クロウ・・・」

クロウのその言葉から、彼が自分の死を受け入れているのが分かった。キティの方を見ると、彼女の頬は涙で濡れていた。

「ソウジさん、エヴァさん、チャチャゼロさん、最後に一つお願いがあります。」

「なんだ、クロウ？」

「なんでも言え、クロウ。」

「ええ、任せて、クロウ。」

「レーベンスシュルトの事です。残念ですが、私には後継者がいないので、領の将来のことだけが気がかりなのです。ですから、永遠の命があるあなた方に見守るように頼みたいのです。縛るみたいで申し訳ないと思います。なので、百年。百年だけお願いします。それ以降はあなた達の選択に任せます。」

「分かった。約束しよう。俺たちがいる限り、レーベンスシュルトを任せてくれ。それがどれほどになるかは知らないけど、約束通り、少なくとも百年は守ってやる。」

「そうだ。任せてくれ、クロウ。私たちがレーベンスシュルトを見ていてやるから安心しろ。」

「そうよ。攻撃してくる奴らはアタシが皆殺しにしてやるから大丈夫よ。」

「あはは、それなら安心ですね。これで本当に心残りがなくなりました。」

「・・・」

「最後にもう一度だけ礼を言わせて下さい。ソウジさん、エヴァさん、チャチャゼロさん、今まで本当にありがとうございました。あなた達のような最高の友人がいてくれて、私はすごく幸せでした。」

「何を言う。礼なら私たちが言うべきだろう！　ほとんど他人の上に、吸血鬼である私たちをここにいさせてくれて、その上に友人などになってくれて。私の方こそありがとうー！」

「ありがとな、クロウ。お前の事は絶対に忘れないぜ。」

「ふふふ、ソウジさんが私の事を覚えて下さるのなら、私はある意味、不死になれますね。」

「そうだな。」

「私も忘れないぞ、クロウ。」

「アタシも。」

「ありがとうございます、エヴァさん、チャチャゼロさん・・・少し、疲れましたね・・・」

そろそろ時間か・・・

「そうか。なら、寝るまではここにいてやる。安心して眠ってくれ。」

そう言いながらキティの手を握る。彼女は声を上げて泣かないように必死に我慢している。

「ええ、少し、眠らせていただきます・・・みなさん・・・いま・・・まで・・・ありがとう・・・しゅわ・・・い・・・まし・・・た・・・た・・・し・・・」

そして、最後にまた礼を言いながらクロウは息を引き取った。

「まったく、最後までお前はいい奴だったよ。お前のような最高の友人なんてこれから会えるのか？」

「クロウ……？ クロウ……？ うっ……クロウ……」

「エヴァ……」

静かに涙を流しながらクロウの名前を呼ぶキティを抱き寄せる。

「うっ……うっ……なあ、ソウジ……」

「クロウっていい友達だったな……？」

「ああ、最高の友達だった。」

「もう泣いてもいいと思うか？」

「ああ、きつとクロウも分かってくれさ。」

「うっ、うわあああああ……」

今は泣け、キティ。その涙がお前とクロウの絆の深さを表しているんだからな。

第十二話：始めての・・・（後書き）

いきなり話が五十何年も飛んでしまいました。間の話は特にありません。敢えて言うなら、ほとんどはイベントなしの日常のようなものでした。

というわけで、不老不死である吸血鬼に付いてくる、寿命のある人との別れを書いた話になります。ついでにこうやってレーベンスシユルト城を手に入れました。次回の話ではこれがどうして別荘になったかを書きます。少しダークになる予定です。

第十三話：レーベンスシュルトの終焉（前書き）

色々描写が足りない・・・文才が欲しい・・・

第十三話：レーベンスシュルトの終焉

あつ、と言つ間に四百年ほどが過ぎ、俺たちはまだレーベンスシュルトで領主をやっている。

今は旧世界では西暦1890年くらいか・・・？

その間、何度も俺たちを狙いに魔法使いが襲つて来ては、撃退した。それは時にはたった数人。そして時には軍隊を上げて俺たちを殺そうとした。しかし、いずれの時も俺たちが出てそれを打ち倒した。

流石に何百年も変わらない姿で居れば、俺たちの正体は領民には知られ、それで離れた人も少くない。それでも、俺たちが侵略から守っているから領自体は平和なんだから、残つた人も多い。俺たちはそんな人たちを守りながら今まで過ごしていた。

そしてなんと、負けなしで撃退していると、俺たちに色々な異名がついた。キティには『人形使い（ドールマスター）』など、原作でもおなじみの名。そして俺にはひっじょーうに不本意な、『魔力暴走』^{ドライブバー}という二つ名がつけられた。理由は分かる。俺の魔法の威力がおかしいからそう呼ばれているって。けど、俺の欠点が見つけられているようで、それを聞く度に落ち込んでしまう。

反対に、悪くない異名もある。それは俺とキティ、二人で一つの名前がつけられた奴だ。その内で気に入っている二つは『最凶最悪のデッドリー・カップル』^{ダークエンペラー・エンブレス}夫婦』、と『闇の皇帝・皇后』。気に入っているのは畏怖とか、敬意が感じられるから？ あと、俺の異名とは違い、欠点とか表に出されていない事が大きいな。名前の由来は言わずとも分かるよな？

まあ、俺たちが敵に容赦ないからが主の理由だと思っている。

・

・

・

「もうそろそろレーベンスシュルトだな。」

「ああ、二ヶ月振りくらいか？」

俺たちがたまに行く旅行。今回は少し遠出して、ここに戻るまで二ヶ月。

あと半日ほど歩けばレーベンスシュルトに着けるか？

「ねえ、ソウジ、あれ見える・・・？」

俺の頭に乗っかっているチャチャゼロが俺に話しかける。

どうやら何かが見えたらしい。

「どれ・・・？」

「あれよ、あれ！-」

「おい、ソウジ・・・」

「だから、どこだよ？」

いくら周りを見ても、心配するようなものは見えない。普通の景色しかない。

「こっちよ、こっち！」

ガシッと俺の頭を掴み、チャチャゼロが頭を上げられる。

「あれは……」

煙……か……？

地平線を見ればちょうどレーベンスシュルトの方角から何筋もの煙の柱が上がっている。

あれはただのたき火という規模なんかじゃない。

街の大半が火事にならないとあんな煙を作れない。

良くはないけど、雷とか、何かの事故で始まった火事だと祈りたい。もう一つの考えよりはよっぽどいいのだから……

「エヴァ、チャチャゼロ、急ぐぞ！……胸騒ぎがする……」

「ああ、急ぐ……！」

……

・

・

「そん・・・な・・・」

目の前の光景を見て言葉を失う。隣ではキティが膝をついて同じように言葉を失っている。

「街が・・・燃えている・・・」

遠くから見ても燃えているだろうとは分かっていた。

だけど、この惨劇は予想していた最悪な事態より数段酷い。

街には生き残りが一人もいなく、道は民の遺体で溢れている。そして道は彼らの血で赤く染まっている。

「誰か！ 誰かいないのか！！！！ いたら返事してくれ！！！！」

生き残りを探す為に必死に呼びかけるが、それが絶望的なのは誰より俺が分かっている。

その間にも俺たちは歩みを止めないで、城を目指している。

茫然自失して反応が帰らないキティの手を引いて歩くまま、一時間。それほどの時間を掛けて、俺たちはやっと城に着いた。

城の姿は街とほぼ同じで、壊滅状態だ。

戦闘はそれほど激しくなかったようで、壁などはまだ立っているが、中は略奪しつくされていて、部屋は尽く荒らされている。

「くそっ！ 一体誰がこんな事をした！！」

悔しさを抑えられずに拳を地面に叩き付けた。

街の人が何をやったって言うんだ！ どうして死ななければならなかったんだ！

そうして城に着いた俺たちは朝日が昇るまで、ただ悲しみや悔しさ、それに身を焦がすほどの怒りのままに一言も交わす事がなく、時間が過ぎていった。

・

・

・

やがて朝が来て、最初に話したのは以外にもキティだった。

「ゆるさん・・・」

「エヴァ・・・？」

「これをやった奴らは絶対に許さん！」

「ええ・・・皆殺しよ。」

「まさかクロウとの約束がこんな風に破られるとはな・・・」

クロウと約束した百年はとうに過ぎてはいるけど、俺たちはそんな事に構わず、ずっと守るつもりでいた。せめて、俺たちがいらなくなるまでは。

「エヴァ・・・お前の魔法の中には土地を魔法球の中に封印する奴があつたよな？」

「ああ。」

「だったら、レーベンスシュルト城をそれに入れて持っていこう。多分、ここにはもう戻らないからな。せめてそれを一緒に持っていきたい。」

「そうだな・・・そのあとはどうする、ソウジ？」

「ふっ・・・そんなもの、決まっているだろう？」

「・・・」

「ここを襲った奴らを一人残らず探し出し、全員に報いを受けさせる。例え何年かかってもだ！！！」

これだけはすでに決定事項だ。キティも奴らを許せないし、チャチヤゼロは言わずもがな。

「そうよ、ソウジ！ みんな死ねばいいのよ！」

復讐は意味がない？ 残るのは空しい気持ちだけ？

はっ、そんなもの、くそくらえだ！

これは決して復讐なんてちやちな物じゃない。これは世界に対する警告だ！

吸血鬼を怒らせたらどうなるのか、全世界に思い知らせてやる！

「エヴァ、城を魔法球に移すのにどれくらいの時間がある？」

「一週間ほどだ。大きな儀式だからな。」

「分かった。すぐに取りかかってくれ・・・魔法球が出来たら、そのあとは戦争だ！」

「了解だ。」

「ええ。血の雨を降らせてやるわ。」

これから俺たちがやるのは文字通り、殲滅戦。関わった人は一人残らず死なせる。

これから起きる事は何世代も後世に語り継がれるだろう。吸血鬼の恐怖伝説としてな。

第十三話：レーベンスシュルトの終焉（後書き）

戦争はほぼ完全に飛ばします。うまく表現できる自信が無いので。

次の更新は多少遅れると思います。早くて数日。けど、一週間ほどないかもしれません。

第十四話：そつだ京都、行こう（前書き）

いつの間にか20万PV、3万ユニーク。まさか、こんなに読んでくれる人が出るとは思いませんでした。これからもよろしくお願ひします。

第十四話：そつだ京都、行こう

「これで最後だな・・・」

「ああ、こいつで最後だ。」

「何やってんのよ、二人とも。早く殺るわよ！」

「はは、そう急かすなよ、チャチャゼロ。やっと終わるんだ。少し感傷に浸ってもいいじゃないか。」

レーベンスシュルトを襲った人たちを見つけ出し、狩り始めてから十年。俺たちは今からあの惨劇に関わった最後の一人を殺しに来ている。

それで、犯人を探している間に分かった事がいくつかある。始めにレーベンスシュルトを襲ったのは一つの軍隊ではなく、西周辺全部の国が関わっていたんだ。

だからこそ、全員を見つけるまで十年かかった。

その間に消えた国や王家は十にも上る。

「さて、行くか。」

「ああ。」

「うーん、抵抗してくれないかなあ・・・最近、みんな怖がっちゃって、アタシ少し殺し足りないのよ。」

恐い事言うなあ、チャチャゼロ。

「はは、どうだろうね。でも、そう言う事なら、今回はチャチャゼロに任せるか、エヴァ?」

「目的が果たされるのなら私にはどっちでもいい。」

「そう言う事だ。今日は任せたぞ、チャチャゼロ。」

「ふふ、そう来なくちゃね。」

・

・

・

ドガーン!!!!

一際大きな扉を吹き飛ばし、破片を踏み越えて俺たちは部屋に入った。

「だ、誰だ!」

誰、だと?

「そんな事、分かっているだろう?」

「ま、まさか！」

ふっふっふ、その恐怖した顔・・・いいねえ・・・

「衛兵！ 衛兵〜！」

はっ、ぞろぞろと出て来てまあ。

「おお、来たか！ 直ちに奴らを殺せ！」

ほっとしたような顔を領主がして兵士の後ろに隠れる。

そして兵士達は武器を構えるが、中には俺たちの正体に気づいた人もいて、彼らは今にも腰が抜けそうに震えている。

少し脅してやるか。無駄な殺しは避けられるなら避けたいし。

「どうやら気づいている奴もいるようだが、まだ分かっていない者の為に名乗ってやる。俺はソウジ・ホウキ、真祖の吸血鬼だ。そして隣にいるのは同士のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、並びに彼女の従者、チャチャゼロ。」

「闇の・・・」

「デッドリー・カップル・・・」

「真祖・・・」

ははは、動揺が見て取れる。

そうだ、恐れる。さもなくば、その命をなくす事になってしまっぞ。

「俺たちが用のあるのは後ろにいる奴だけだ。死にたくなければ、今すぐ下がれ！」

俺がそう言うと、何人かは武器を下げて道を開ける。さらに数人は腰が抜けて、動けないようだ。本当に刃向かってくるのは数えるほどの人だけだ。

なんか、怒っているみたいだな。俺たちに恨みでもあるのか？ まあ、恨みを買っている事については自信がある。

『立派な魔法使い』特有の正義気触れという可能性も捨てきれないがな。

「ほう、ソウジの名乗りを聞いてもまだ向かってくるか。勇敢なのか、馬鹿なのか、どっちなのかは分らんが、警告した以上、もう遠慮はいらん。やれ、チャチャゼロ。」

「……………」

ん？ チャチャゼロなら喜んで飛びかかると思ったけど……

「どうした、チャチャゼロ？ さっさとやらんか！」

「……………」

「おいったら……く~~~~~~~~!!!!!!」

チャチャゼロに無視されてかなり頭にきているな。

「チャチャゼロ、やっってくれるか？」

「任せてよ、ソウジ！」

そして、飛んでいくチャチャゼロ。

「」「」「うわあああああ！」「」「」「」

ザシユ！

グサ！

「くそ、あの駄目人形め！」

荒れてんね〜

グサグサ！

「まあまあ。」

「や、やめるー！ー！ー！ー！ー！」

「だって、ソウジ！ あのアホ人形がマスターである私の命令を無視するんだ！」

「ぐはあああ！ー！」

ああ、キティのその涙目、すごく可愛いです。

「うん、終わったよ！ で、何の話？」

「エヴァの命令を無視するのはもう少し時と場合を選んでくれたら嬉しいかなあって……」

「それは無理ね。」

「蹴ですか。」

「……きさまあ、今度と言う今度は許さん！ そこに直れー！」

「いやですー。」

あー、チャチャゼロが俺の頭の後ろに逃げる。 返り血が髪の毛に付いてしまう……

・

・

・

「終わったなー。」

「10年か。結構長かったな……」

「ねえ、ソウジ。これからはどうするのー？」

だらーつとチャチャゼロが俺の頭上で寝転がりながら聞いてくる。

「そつだなあ。エヴァ、行きたい場所とかあるか？」

「私は特にないが・・・ソウジには無いのか？」

「俺か？」

うーむ・・・

「そう言えば、随分長く、故郷に戻ってないな。久しぶりに帰ってみるのもいいのかも。」

「ソウジの故郷。旧世界の日本だったか？」

「エヴァ、行った事無いだろ？ どうだ、行ってみるか？」

「ああ、興味があるな・・・」

「問題は日本のどこに行くかだが・・・」

「私は日本の事は知らないからソウジに任せるしかない。」

「・・・」

「・・・」

おお・・・

「そつだ京都、行こう。」

第十四話・そうだ京都、行こう（後書き）

数日かかるとか言いながら、こつこつして更新してしまいました。

本当、こんな事やっている場合じゃないのに・・・

第十五話：京都神鳴流

「キシャーーーーーー！！！！！！！！」

「エヴァ、そっちに行ったぞ！」

「任せろ！『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック』・・・」

キティが詠唱を始め、チャチャゼロが終わるまでの時間を稼ぐ。

「『闇の吹雪』！！！！」

呪文が完成し、闇と氷の嵐が妖怪を襲い、妖怪が吹き飛ばされる。

どうやらこの妖怪はそれほど強くないみたいで、これだけで沈黙した。

警戒を少し緩めて妖怪をしゃがみ込んで改めて見る。

「こいつは・・・鬼・・・か？」

角があるから、多分鬼の一種だと思う。正式な名称は分らんが。

「ソウジ、そいつはあれで倒れたのか？」

「そうみたいだな。」

「つまらないわね！。弱すぎよ。」

「まあ、いいじゃないか。それにしても、日本に来て早々に妖怪に襲われるとか、結構物騒だな・・・それとも吸血鬼はなんか美味しそうなのでも発しているのか？ 妖怪なら俺たちに敵わない事くらい分かりそうなんだけどなあ・・・」

そして妖怪から目を離し、キティたちを見ながら立ち上がる。

「よいしょ・・・とにかく、京都まであと少しだ。とりあえず街に入れば教われないだろう。京都は昔から結界で守られているらしい。」

そして、京都に向かって歩き出した時？

「妖怪、かくごーーーーーー！！！！！！」

何だ？！ 茂みからいきなり何かが飛び出た！

何かを振り上げている。剣士か？

でも、まだまだだね。

折角の不意打ちの途中に声を上げたら駄目じゃん。

とりあえず・・・

パシッ、ドカツ、きゅ~~~~~

左から俺の平手の音、相手が木にぶつかる音、そして目を回す音（？）

襲って来た時にまだ子供だと見たからちゃんと手加減したぜ。

褒めて、褒めて。

「どうした、ソウジ？」

おっ、キティ。

「いや、まあ、いきなりそいつに飛びかかれてね。とりあえずシバいておいた。」

「何だ、まだガキじゃないか。」

「『妖怪、かくごー』とか叫んでたから、多分さっき俺たちを襲って来た奴を倒しに来たんじゃね？」

「なるほどな。」

「でも、そいつ、弱すぎじゃない？ さっき見た實力じゃああの妖怪には敵わなかったよ？」

「それもそうだな・・・なら、一人じゃないかもしれないな。二人とも、周りに気をつけるよ。いきなり襲って来た向こうが悪いとは言っても、俺が倒した事には変わらないからな。」

「ああ。」

「了解。」

そして、待つ事数分。案の定、茂みからもう一人の男性が出て来た。

こいつはさっきの子と違って、かなりデキるな。

40歳ってどこか？

あの子の親、もしくは師匠か？

明らかに俺たちを警戒しているな。

と、思ったらいきなり膝をついて頭を垂れた。

「どこかの高名の妖魔とお見受けします。私は京都神鳴流あやまかすま剣術の当代、青山和麻と申します。その木の下で倒れとる聡一そうちちの父にごぞいます。」

ああ、なるほど。

こいつは見ただけで俺たちの存在に気がついたのか。

それにしても、神鳴流か・・・

こいつは使えるかも。

「ふむ・・・和麻は見ただけで俺たちの強さが分かったのか？」

「ええ。あやかしを相手しはるなりわいをしてはりますから。今宵も息子と妖怪を討伐に来てはったんです。」

「なるほど。さっきの鬼はもしかしてお前達から逃げて来たのか？」

「確かに私たちが狙うとったんは鬼どした。」

「そうか。」

「あの、妖魔様……」

「宗治だ。俺の名前は鳳姫宗治。」

決して筭掃除じゃないぞ！！ 間違っなよ！

「彼女はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。そして人形は彼女の従者のチャチャゼロだ。」

「では、宗治様。」

「何だ？」

「息子は無事ですか？」

「ああ、あいつか。無事だ。ちゃんと手加減したし、今は目を回しているだけだ。」

「そうですか……」

目に見えるほど、ほっとする和麻。

「宗治様。息子に情けをかけてくれはって、誠にありがとうございます。」

おー、ザ・土下座。まさかこんなに偉い奴にしてもらえる日が来る

とは。

「気にするな。息子がもう少し強かったんなら思わず殺していたかもしれないし。」

「それでも助けに来てくれたことには違いまへん。どうか、何かお礼をさせてくれまへんやるか？」

お礼ねえ・・・

「それなら、神鳴流を俺に教えてくれるか？ 敵対存在である俺に教えるのは嫌かもしれないが。」

「確かに神鳴流をあなた様に教えるんは躊躇われます。しかし、一つ約束してくれはったら、教えるんも吝かではありまへん。」

「ほう、約束か。取り敢えず聞こう。」

「この先、神鳴流の敵にはならへんと約束してくれはったら教えませぬ。」

「神鳴流に俺が狙われたらどうする？」

「その時は仕方ありまへん。しかし、できるだけ殺さないで欲しいです。」

ふむ・・・まあ、そんなところだろうな。

「分かった。その条件で約束しよう。これからよろしく頼むぞ、和麻。」

「よろしゅうお願いします、宗治様、エヴァンジェリン様、チャチヤゼロ様。」

「よろしく頼む。」

「よろしく〜」

「（なあ、エヴァ。勝手に決めちゃったけど、お前はこれで大丈夫か？）」

「（ああ。別にいいぞ。私は剣を習つつもりは無いが、お前が習っている間に、他の武術でも習ってみるよ。）」

「（わかった。ありがとう、エヴァ。）」

「（気にするな。）」

「それじゃあ、行こうか和麻。息子は自分で運ぶか？俺が運んでもいいぞ。」

「いいえ、私が運びます。宗治様を煩わせるほどのもんではありません。」

「そうか。」

「では、皆はん、どうぞ付いてきはってもらえまへんやろか。家にご案内します。」

そう言って、和麻が息子を拾い上げ、歩き始める。

第十五話：京都神鳴流（後書き）

京都弁、難しい・・・そして、むちゃくちゃになっている・・・
もし、京都からの人が読んでいるのなら、色々すみません。

第十六話：ざんがーんけーーん（笑）

「宗治様、どこかで剣を習いはったんですか？」

神鳴流を習い始めてから数週間経ったある日、和麻が俺に聞いた。

「500年前くらいに剣の手解きくらいは受けたが、後は全部独学だ。それも全部西洋剣だったから、刀の事は良く分からない。」

「通りで。宗治様の剣には洗練された美しさは無いんやが、戦い方はしっかりしとるから少し気になったんや。」

「それだとまずいか？」

「少し変な癖が付いてもうて、それを矯正せんと神鳴流を教えるのが難しゅうなるんや。」

なるほどな。確かに、俺の剣は力と反射神経に頼っているところがある。それですと戦っていたから、変な癖が付いていても仕方ないだろう。

「神鳴流を習いたいんなら、基礎から始めた方がええと思うんや。」

「そうか。まあ、和麻が先生なんだ。俺はそれに従うまで。時間なんて、何年かかってもいいし。」

「そうですか。ほんなら基礎の練習から始めよか。」

「分かった。」

今更基礎なんか、とか言わないぜ。ちゃんとやりたいなら、基礎は大事だからな。

よしっ、がんばるぞ！

めざせサムライマスター！

・

・

・

夜。

「戻ったぞー。ソウジ、いるか？」

おっ、キティか。

「おー、こっちの部屋だ。」

すっ、と障子が開き、キティが入って来た。

む？ 風呂上がりか？

肌が赤みがかっていて、艶っばい。

「キティ、お帰り。戻ってから風呂に入ったのか？」

「ただいま。まあ、ご飯を食べる前に汗を流したかったからな。」

「なるほど。それで、今日の稽古はどうだった？」

「まだ何とも言えんな。何せまだ始めて数週間だ。今はほとんど基本の反復だ。」

「そっかあ。俺も同じようなことだ。」

キティは後衛型だから、前に出ざるを得ない剣術にはあまり興味が無い。その代わり、近づかれたときの為に自衛の手段として和麻の知り合いの先生に合気道を習っている。

「俺の場合、ずっと我流の剣術を使ってたから妙な癖が付いちまったみたいで、まずはそれを無くすことから始めないといけないけど、幸い、吸血鬼の力のおかげでそういう体作りの訓練は省略できるがな。」

「私も体力がすごいって事で、そう言うことはさせられてないな。」

とにかく、そのおかげで修行が数年短くなるんなら僥倖だ。

「とにかく、少なくともあと数年はここにいないと駄目そうだなあ。」

「別に予定なんてないだろう？ 強いて言うなら、日本の他の場所を回れない事が少し残念だが、それもまた後で出来る事だし。」

「全く持って、その通りだな・・・そう言えば、チャチャゼロはどうしたんだ？ さつきから見えないけど・・・」

「さあな。稽古から戻って来た時は一緒だったが・・・どうせあの駄目人形のことだ。どこかで酒を飲んでるか、剣を振り回しているんだろう。」

「ふーん・・・」

まあ、心配いらないうらなう。

じゃあ、夕飯までは少しキティと話し合うか。

* * *

「宗治様、今まで基礎の稽古でよう我慢なはった。本日から神鳴流の技の練習に入りたいと思つとります。」

和麻に剣を習い始めて一年という短くも、長い時間が過ぎた。今までの稽古は無駄じゃなかつたけど、面白くもなかつたなあ。

けど、今日からいよいよ技の練習に入る！ 『気』を使って色々摩訶不思議な現象を起こす剣技。

問題はどうかやって『気』を使うかだな・・・魔力はなんとなく使い方が分かつたが、『気』の使い方は一年の練習を経た今でもまだ良く分からない。

「これから教える技は『斬岩剣』と言って、気を剣に纏い、岩をも両断する技です。」

おー、斬岩剣か！

割とメジャーな技だな！

「原理は気を剣に纏って振るうだけやから、斬岩剣は初級奥義に分類されとる技なんや。」

なるほど。他の技は気を飛ばしているとか、雷に変化させているからもつと難しいって言うのは分かる。

まあ、それについてはまた後で考えるか。今は斬岩剣のことだ！

「最初に私を手本をお見せしましよ。……ええですか？」

「いつでも。」

「では……」

俺に見せる為か、和麻が目を閉じると気がゆっくりと構えている剣に集まってきているのが何となく分かる。

それは三十秒ほど続き、やがて和麻は目を開いて???

「斬・岩・剣！……！！……！！……！！」

どーーーーーん！

おおっ！ 的になった大岩がまっふたつ！

「すごいな、和麻。」

「おおきに。さあ、今度は宗治様がやってみなはって。」

「よし……」

えっと、とりあえず目を閉じて、剣に集中するように……

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……宗治様？」

「……何だ？」

「やらないんですか？」

「……！」

「すまん……まだ気が良く分からないんだよ……」

「は、はあ……」

おおい、何だよ、その顔はっ!!!!

俺だってなあ、俺だってなあ!!

「魔力は得意なんだけど……」

「神鳴流の技は気やないといかんからな……」

わかってるよう……

くっ、こうなったら!!!!

「ざんがーんけーーーーん(笑)!!!!!!」

どーーーーーん!!!!!!

「……」

おお、見ろ、岩がゴミのようだ!

ふははははは!

「あの、宗治様……?」

何だ、折角現実逃避しているのにっ!!

「それはただ力任せに叩き付けとるだけやないの?」

「分かってるよ……！　だって、『気』とか全然分からないんだもん……！　うわああああああん……！！！！！！！！！！」

「宗治様?!」

うるせいやい！　グレてやる！

第十六話：ざんがーんけーん（笑）（後書き）

ソウジが斬岩剣（笑）を習得しました。

これがやりたいが為に京都編をやったくらいのもです。その割には短いですが・・・

次回は京都とはおさらばです。ソウジはその時、ちゃんと神鳴流をマスターしていますよ？

「・・・」

はっ！？ いかん、ちよつと調子に乗っちゃった。

一瞬の内に俺の周りが瓦礫と化している。

うーん、やりすぎちゃったか？ テヘッ

いや、だって、やってる内に段々と楽しくなつたんだもん。

あれから何年か経ち、俺は神鳴流をほぼ完璧にマスターしたと言つていい。和麻が言うには、かつて見た事も無いほどの成長速度らしい。

いやあ、気の使い方四苦八苦していた頃が懐かしいw

ちなみに、本来は青山家以外に伝承されない技も教えてもらったよ？

理由は色々あつた見ただけど、一番大きい理由は俺が不老不死だかららしい。

和麻曰く、

「宗治様が生きとる限り、神鳴流も生きとることになるんやから」

「なるほどな。俺は生き字引のようなものか」

「はい。もし、青山家が何らかの理由で途絶えてもつても、宗治様がいたら神鳴流は途絶えんから。」

と言う訳で、和麻はむしろ、進んで俺に神鳴流の秘奥義を教えてくれた。

魔を断つ筈の人が天敵の存在にそこまで教えるとか、そんなんでいいのか、神鳴流www

まあ、俺からの文句は無いがなw

「流石やな、宗治様」

「あはは、ちょっとやりすぎたかも」

「いえ、元々この場所は技の訓練用にあるんやから、多少壊れてもええんや」

これが『多少』ね・・・

「とにかく、これで宗治様は免許皆伝や。異例の早さやが、私が教える物はもうありまへん。今までお疲れさん」

「いや、和麻こそ、ありがとう。ここまで出来たのも和麻の教え方が良かったからだ」

ほんと、和麻にはいくら感謝してもしたりない。剣術を触り程度しか知らなかった俺に根気よく付き合っつて、教えてくれた事には本当に感謝している。

「それで、宗治様の卒業祝いに贈り物があるんや」

「贈り物？」

「これや」

刀か？ 結構強い力を秘めているな・・・

和麻が横から取り出したのは一振りの刀。

「妖刀、か・・・？」

「ええ、『ひな』という妖刀や。封印される前は神鳴流を壊滅寸前まで追い込んだ、恐ろしい刀やが、宗治様なら制御できると思うて用意させたんや。」

ふむ、なるほどな。

確かに俺なら存在として上位だから乗っ取られる心配はないだろう。

「分かった。ありがたく受け取るよ。」

そう言い、俺は『ひな』を和麻から受け取る。

取り敢えず抜いてみるか。

カチャ・・・

「よう、ひな。俺がお前の新しい主になる、鳳姫宗治だ。よろしく」

おおっと！

「ははは、そんなに暴れるなよ。こうなった以上、俺はお前を手放さないぞ・・・それに、俺と一緒にいたほうが思いつきり暴れられるぞ。何せ、俺には敵がいつぱいあるからな。」

ふう、やっと落ち着いたな。

やっぱり妖刀だな。俺に付けてくれば暴れられると分かっただら大人しくなった。

「よし・・・少しじゃじゃ馬な所があるけど、いい刀だ。感謝するよ、和麻」

「いえ、宗治様がそれを持っていてくれはったら私らも安心や。これあの惨劇が繰り返されることはあらへん」

「はは、体のいい厄介払いと言う訳か」

別にいいんだけどね。

「そう言う訳やあらへんけど、宗治様なら大丈夫やろ、と思うとりました」

「とにかく、ありがとう。こいつが二度と神鳴流に仇となる事が無いのを約束する。」

「ありがとうございます、宗治様」

「まあ、いいってことよ・・・さてと、帰りますか？ エヴァが待っているかもしれないし」

「ええ、戻りましょ。家の者がご飯を用意しとる時間やし」

おっ、飯か。今日は何かな？

* * *

「今まで世話になったな、和麻」

和麻に免許皆伝をもらってから数日。キティも大分前に師匠から免許皆伝をもらい、俺たち三人は京都から旅立つことに決めた。京都に滞在し始めてから数年。神鳴流と言う思わぬ戦利品も手に入れ、そろそろ京都ともお別れの時だ。

「世話になった」

「和麻、今までありがとうー。あと、聡一もね」

「いえ、こちらこそ、優秀な弟子を持ってて光栄です」

「エヴァはん、本当に行ってしまうん？」

むっ、聡一よ、まさかキティの事が好きだったのか？

駄目だぞ、こいつは俺のだ！

それを見せつけるようにキティの肩を抱く。

「なっ、ソウジ／＼」

「宗治はん・・・」

「どう、マスター？ 別にあんただけ残ってもいいのよ。それならアタシとソウジだけの二人旅が出来るわ・・・ふふん」

チャチャゼロ・・・こんな時くらい仲良く出来ないのか・・・？

「アホな事言うな、駄目人形！ 私も一緒に行くに決まっているだろう！！ こんなガキ共しかいない所に残ってどうする！？」

ああ、キティよ、その言葉は聡一に止めをさす・・・ぷぷ

「エヴァはん・・・」

「むっ・・・聡一。何だ、その顔は？ 男だろう・・・それに、私を好きになってもしょうがないぞ。私はソウジと一緒にいると何百年前に決めたのだからな。あと何年もすればちゃんとした人間の嫁をもらって、子供ができれば私の事など忘れるさ。」

「・・・」

ここはキティに任せるか。

「ふう・・・彼女などにはなれないが、私たちはずっと友人だ。またいつか会おう」

「約束ですか？」

「約束だ・・・な、ソウジ？」

「うん、またここに帰ると約束しよう」

「ソウジはんは来なくてもええ」

聡一、まだ最初に会った時にぶっ飛ばした事を根に持っているのか？ それに加わって俺をライバルと見ているか？

どっちにしても、こいつの子供じみた嫉妬が微笑ましくて思わず微笑みがこぼれてしまう。

「まあ、聡一がそう言うなら来なくてもいいが、そうになったらエヴァも来ないぞ」

「うう・・・」

「そういじめてやるな、ソウジ・・・」

「いや、面白くて、つい」

ああ、何かグダグダになっちゃったけど、そろそろ行かないと、いつまでもここに居る気がする・・・

「とにかく！・・・今まで色々ありがとうな、和麻。いつかまた会おう！」

「次に会う日までお元気で、宗治様」

「行くぞ、エヴァ！・・・じゃあな！」

手を振りながら、俺たちは和麻達を後にする。

さあ・・・次はどこに行こうか！

第十七話：この刀は・・・（後書き）

うわあ、何これ・・・お別れのシーンが特に酷い・・・

そう言う訳で、ソウジの刀は妖刀『ひな』になりました。これで素子はどうなるのか、とか気になるかもしれませんが、その辺は一応考えがあります。

次回から一気に大戦時代まで飛びます。そして、原作を復習する為、ちよつと更新が遅れます。すみません。

第十八話：紅き翼（前書き）

ナギが色々残念になってしまっています・・・

そして、最近、エヴァとの絡みが少なくてちょっと落ち込み気味。

第十八話：紅き翼

<side:ナギ>

オッス！ 俺はナギ・スプリングフィールドっていう天才魔法使いだ！

余りにもつまらなかった魔法学校を中退してから色々旅をしていたが、いつからかお師匠に弟子入りし、一緒に旅をすることになった。

そして今、お師匠、それと旅の途中に会ったアル、それに詠春と一緒に『紅き翼』アラ・ルフラと言うグループを結成したばかりだ！

もちろんリーダーは俺だぜ！

「よっし！ 名前も決まったし、これからどうする？ 皆には何かいいアイデア、ないか？」

「特にないのう。強いて言えば、このまま旅を続けながら人助けをすることか。」

ふむ、お師匠は現状維持派か。

「私は特に意見はありませんよ。楽しければ何でもいいです。そしてあなたに付いて行けば面白い事に出会える気がします、ナギ」

アルは意見無し、と。

「私もゼクト殿と同じだが・・・」

うん？ 詠春は何か思う所があるみたいだな。

「何だ、詠春？」

「いや、ただ、団体名を名乗るには四人は少ないか？」

「自信が無いのか、詠春？」

俺たちに不満がある奴らなんか全員ぶっ飛ばしてやるぜ！

「そういう訳じゃないんだが・・・」

「何だよ？」

「つまり、詠春はあと何人が入れるべきだと思つとるんじゃない？」

「はい、ゼクト殿。せめてあと二、三人はいた方が団体に相応しい数になるかと」

そうかあ？ 別に気にしなくてもいいと思うが・・・

「しかし、詠春。あと数人とあなたは言いますが、ここにいる四人に付いて行ける人はそう何人もいないと思いますよ」

「そうだけ、詠春！ 『紅き翼』は世界最強のパーティーだぜ！ 弱い奴が入っても役立たずになるだけだぞ。何せ、このパーティーには神鳴流最強の剣士の詠春、重力魔法まで使いこなすアル、俺のお師匠のゼクトお師匠、そして天才の俺がいるんだ！」

「それはそうだが・・・」

「ふむ、その条件を満たす者に心当たりがあるかもしれん」

お師匠？

「本当ですか、ゼクト？ 先ほどのナギじゃありませんが、とても信じられません」

やっぱりアルも半信半疑か。けど、お師匠の事だ。きっと俺たちのパーティーに見合うような奴だろう。

「本当じゃぞ？ それに、二人もじゃ。いや、三人……？」

何でそこで疑問系なんだ？

「三人もですか？」

「そうじゃぞ？ それなら詠春も安心じゃろ？」

「それは……三人も入ったら安心だが、本当にそんな人たちがいるのか？」

「うむ。いるぞ。お前達も名前くらいは知っているとと思うぞ？ 有名じゃからのう。かなり高額な賞金も掛けられとる」

「俺たちが知っているような賞金首……？」

「けど、賞金首になるような人が私たちのパーティーに入るのか？ それに、そんな人を入れて私たちの名が落ちるんじゃない……？」

もつともな質問だな、詠春。

謂れの無い不名誉は別に気にしないけど、高額な賞金首になるくらいだから、かなりの悪党じゃないのか？

「それは多分大丈夫じゃろう。会ってから大分時間が過ぎとるが、あいつらは芯がしっかりしとったから、心配はいらんじゃろう」

「それで、その人たちは一体誰のですか、ゼクト？ もつたいぶらないで下さい」

「そうだけ、アルの言う通り、さっさと言うてくれ、お師匠！ 気になってしょうがねえ！」

「別にもつたいぶつとった訳じゃないんじゃが・・・わしの心当たりと言うのは、ソウジ・ホウキ、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、そして彼女の従者のチャチャゼロじゃ」

「・・・な、なんだって~~~~~!!!!!!」

お師匠が出した名前に俺たち三人が腰を抜かしてすっ転んだ。

だって、伝説の存在だけ？

おとぎ話とか、怪談で出てくる方が多い名前なのに、こいつらがお師匠の『心当たり』だって?!

「あのデッドリー・カップル・・・」

「伝説の神鳴流剣士・・・」

「キリング・ドール……」

「そうじゃ、その彼らじゃ」

「お師匠、冗談きついで。何で、ここでその名前が出てくるんだ？
強い魔法使いの名前を出すだけなら俺だって出来るぜ？」

「そうですよ、ゼクト。必要なのは私たちの仲間になりそうです、
か強い人でしょう？」

「伝説の神鳴流剣士……」

詠春、さつさと戻って来い……

「仲間になるかは分らんが、聞いてみる事くらいは出来るじゃろ
う？」

「聞いてみるって……」

頭痛がするみたいで頭を押さえるアル。

その気持ちには共感できるぜ……

「それに、さきほどの言葉ではまるでゼクトが彼らの事を知ってい
るような口ぶりでしたよ？ そんな訳はありませんのに……」

「知つとるんや」

……

「「な、なんだって~~~~!!!!!!」」

本日二度目の驚愕の発言・・・

お師匠があゝの吸血鬼達を知っているだど?!

「もう一度言ってくれませんか? 聞き違いをしたようです・・・」

「じゃから、わしは彼らを知つとると言つたんじゃ」

また頭を押さえるアル。

「お、お師匠・・・いつ知り合つたんだ?」

「600年ほど前じゃったか・・・まだ魔法を知らなかった彼らに軽く魔法の手解きをしたんじゃ。ふむ、懐かしいのう・・・エヴァンジェリンは特に優秀な生徒じゃった。ソウジの方は魔力だけは申し分無かつたんじゃが、コントロールがあまり上手じゃなかつたのう・・・魔法の射手で軽くクレーターを作っていたのが懐かしいわい」

最凶最悪の魔法使い達をまるで旧友のように話すお師匠・・・

お師匠の話信じるんなら、正にその通りなんだけど・・・

「お師匠が魔法を教えたのか・・・?」

「そうじゃ。おお、そう言えば、それだと彼らはナギの兄弟子になるのう。ナギももう少しがんばらんな。ソウジは魔法の詠唱を覚

えるのが苦手じゃったが、別れた時には一通りの魔法をマスターしとったぞ。そして離れていた間に練習をさぼっていなければ、今ではかなりの魔法使いじゃろう。まあ、それは賞金の額を見れば分かるんじゃないが」

お師匠・・・やっぱあんたはすごいぜ・・・

「ゼクト、あなたは本当にすごかったのですね・・・」

あつ、アルも同じ思いか・・・

それにしても、ここまで本心を出すアルは珍しいな・・・よっぽどびっくりしたんだなあ。

「で、どうじゃ？ こやつ等なら文句は無いじゃろう？」

「そりゃー、強さだけ見れば文句無しだけど、そいつらってかなりの悪なんだろ？ 本当に大丈夫か、お師匠？」

「あはは、奴らは敵には容赦しないが、他の人には友好的、もしくは無関心じゃ。奴らの悪名はどうせ、勝手に敵となつて襲つて来た者どもを返り討ちにしとる内に付いた物じゃろう。」

お師匠、そんな軽く言われても・・・

でも、お師匠が大丈夫って言うなら信じるしか無いか。

それに、伝説の吸血鬼って奴らにも興味あるしな！

俺とどっちが強いだろう？

ワクワクするぜ！

「分かった。お師匠がそう言うなら、そいつらを誘ってみよう！」

「ナギ！」

「いいじゃねえか、アル。それに、伝説の吸血鬼だぜ？ 面白そう
だろ？（ニヤリ）」

「ふっ、ナギがそう言う顔をする時は何を言っても駄目ですからね。
良いでしょう。ここはゼクトの提案に乗りましょう」

「そうこなくっちゃ！ で、お師匠、そいつらと連絡する手段とか
あるのか？」

それが無いとかなり難しいと思うけど。

「別に無いのう……」

あれま。

「じゃが、あれほど有名なんじゃ。立ち止まる街で噂を聞きながら
行くと案外すぐに見つかるじやろう。奴らはあまり変装とかしそ
うでないから」

なるほど……

でも、賞金首なのに堂々してるとか、どんだけ自信があるんだ？

「よしつ、分かったぜ！ それじゃあ、今後の方針は旅をしながらその吸血鬼達を探す事で良いな？」

「いいですよ」

「うむ」

「・・・」

あれ、詠春？

「おい、詠春。お前もそれでいいか？」

「・・・」

「詠春？」

「伝説の神鳴流剣士・・・」

はあ？

まさかさつきからずっとこの調子だったのか？！

「おい、詠春！」

「・・・はっ！？ 何だ、ナギ？」

「いや、何だ、って・・・取り敢えずこれからの予定が決まったからお前に確認したかったんだよ。」

「はあ、それでどう決まったんだ？」

「はあく、やっぱり聞いてなかったのかよ……めんどくせえー……アル、パス」

「仕方が無いですね……えつとですね、これからは旅をしながら、ゼクトの知り合いらしい、彼の吸血鬼達を探し出し、仲間に誘うと言う事です。」

「何っ！？ あの方を仲間に誘うだつて！？ もちろん私は賛成だぞ！」

おいおい、すげー食いつきようだな……

そう言えば、詠春がぶつぶつ言ってたのって、『伝説の神鳴流剣士』だっけ？

もしかしてあの吸血鬼のどっちかがその伝説の奴なのか？

そんな事までやってるのかよ。本当に規格外なんだな、吸血鬼って。

それにしても……

詠春って以外とミィハーだったんだな……

第十八話：紅き翼（後書き）

詠春の書き方がいまいち分らない・・・長時代なら何となく分かるんだけど・・・

大戦の大筋はほぼ原作通りに行くつもりです。

そして、所々でソウジ達がかき回します。

当たり前ですが、オリ主はアリカとはフラグを立てません（ある意味、それが究極の原作ブレイクになりますけど。ネギがオリ主とアリカの子供とかw）

大戦の間にオリジナルのエピソードを入れるべきか悩んでいます。しかし、入れるにしても、ネタがないですから、多分ないでしょう。精々ソウジが詠春に稽古つけるとか、ナギがソウジに勝負を吹っかけるとかですかね？

第十九話：伝説（笑）と邂逅（前書き）

祝56000ユニーク、40万PV！

これからもよろしくお願ひします！

第十九話：伝説（笑）と邂逅

<side:ナギ>

あれから何ヶ月も経ったが、俺たちはまだデッドリー・カップルの二人に会えていない。

この前の街ではあいつらの噂を聞いて、今はあいつらがいるかもしれない街へと向かっている。

「ほんと、頼むぜ。今度の街にいてくれよ、吸血鬼……」

「そうですね……」

いてくれないと、もう『紅き翼』は駄目かもな。

だって……

「ふふふふふふふふふふ……」

詠春はあれからずっと頭が壊れてて、使い物にならない。

一応話しかければ反応するし、戦闘になればちゃんと戦う。

だが、それ以外の時間はこのように不気味な笑いをして、心ここにあらずだ。

はっきり言って、かなりうぜえ。

お師匠は呆れているだけ見ただけで、アルはかなり辟易している。

俺ももう我慢の限界が近づいている。

これが更に続いたら、俺が詠春の奴をぶっ殺しちまいそうだけ。

「ふふふ、まだ会えないだろうか、伝説の神鳴流剣士・・・ふふふ・・・」

お願いだ、次の街にいてくれ!!!

* * *

< s i d e : ソウジ >

「最近ちよつときな臭くなって来てるなあ。戦が近づいているのかねえ・・・」

魔法世界のとある街で俺はキティとチャチャゼロと一緒に喫茶店で休憩している。

「そうかもしれんな。今の内に旧世界に戻るか？」

「ええー、アタシ、戦いた〜い！」

さすが戦闘狂。

「それは考えたけど、それも面倒だなあ。ゲート周辺の警備も嚴重になってきてるし・・・力づくで押し通してもいいんだけど、それをやったらまた賞金が上がりそうだし」

そしたら俺たちを狙う賞金稼ぎが更に出て、それを撃退すると賞金がまた上がる。なんと言う悪循環・・・

「アタシはそれでも構わないけど」

戦いがあれば何でもいいんですね。分かります。

「まあ、ここに残ってもいいだろう。どうせ人間同士の下らん勢力争いだ。私たちには関係ない。まったく、百年後にはまた地図が変わっているのによくやるものだ」

関係ない、か。

確かにそうなんだけどね・・・

けど、これって多分原作の『大戦』の始まりなんだよな。つまり、色んな意味で何もかもがここから始まる。

それに興味がないと言えば嘘になる。六百年の間に原作なんてほとんど忘れたけど、『大戦』のような大きなイベントの事は何となく覚えてる。これはそれを間近で体験できるすごいチャンスなんだから、それに関わるべきかどうか悩んでいる。

キティの言う通り、俺たちには関係ないから傍観してもいいんだが・・・

よしっ！　ここは運命に任せよう！

またの名は、『考えるのが面倒くさいから適当に流されてみよう！』作戦だ！

それで大戦に関わる事になればそれもいいだろう。

そして、もし何もなければ、それはそれでいいか。

うん。そうと決まったら、気が少し楽になったな。

「そうだなあ・・・まあ、こっちに残っていても大丈夫だろう。他の人間も戦で忙しくて俺たちを襲っている暇もないだろうしな」

「分かった。取り敢えず今後の事が決まったし、今はこの紅茶とケーキを楽しもう」

「ああ・・・ここは久しぶりの当たりだな。この苺のショート、かなり美味いぞ。ほら、エヴァも食べてみる」

ケーキを一口フォークで切り取り、キティに差し出す。

「あ、あーん・・・た、たしかに美味しいな／＼・・・ソ、ソウジも私のミルフィーユを食べてみる。ほら、あ、あーん／＼」

「あーん・・・ン・・・うん、美味しいな。」

「そうだろう／＼」

ふふふ、照れちゃって。相変わらず可愛いなあ、もう。

こういう風に俺たちはイチャイチャしているが、いつになってもキティは慣れないから可愛い。

はっ、もしかしてこれがギャップ萌えと言う奴なのか？！

うーむ、幸せだ・・・

・・・

「ん？ 東洋人の男に白人の女、それに人形。もしかしてこいつらか？」

* * *

< s i d e : ナギ >

俺たち『紅き翼』は街に着くと二手に分かれ、早速吸血鬼達を探し始めた。俺はお師匠と。アルは詠春と。

理由は、お師匠があいつ等と知り合いで、詠春が顔を知っていると
言うからだ。

この班分けにアルは嫌そうな顔をしていたけど、あいつの意見は却
下させてもらった。

俺だって詠春と一緒に行きたくないからな！ 悪いけどリーダー権
限を発動させたぜ！

「お師匠、俺はあっち側の店を聞き回るから、お師匠はこっちの店
を回ってくれ。」

「うむ、わかった」

「何もなかったら三十分後にまたここで落ち合って場所を変えよう。もし見つかったら魔法の信号弾を打ち上げるって事でいいか？」

「了解した」

「じゃあ、また三十分後に」

さて、いっちょ吸血鬼を捜しに行くか。

・

・

・

そして一時間ちよつと過ぎた。

二度お師匠と合流して、まだ吸血鬼を見つけてはいない。

だけど、色々聞き回っているうちに分かった事もある。

どうやら吸血鬼達は確かにこの街に来ているらしい。どの店でもそう言う噂が飛び交っていた。

探す場所も二度変えて、今は酒場や料理店、喫茶店などが集まっている通りを探している。

「よし、今度はあそこを探してみるか・・・げっ」

今度の店は喫茶店のようだな。

カフェテラスに何組ものカップルがお茶をしている。

おえっ、どうやってもこの甘ったるい空気には慣れないな。

ほら、ちょうど目の前のカップルが互いのケーキの食べさせ合いをしている。

はあ・・・さっさと店長に吸血鬼の事を聞いて次の店に行こう・・・

・・・うん？

あれ、この目の前カップル・・・

「ん？ 東洋人の男に白人の女、それに人形。もしかしてこいつらか？」

< s i d e : ソウジ >

誰だ、このガキ？

もしかして俺たちを探しているのか？

まさか賞金稼ぎ？ まだガキだが・・・

「なあ、お前達が吸血鬼なのか？」

うーん、この赤毛・・・知っているような・・・

「ふん、確かに私たちは吸血鬼だし、多分お前が探しているのと同じ人だろう。それがどうした？ まさか私たちにかかっている賞金を狙っているのか？ 悪い事は言わん。諦めるんだな。私たちの敵になった者の末路を知らないのか？」

あつ、キティがちよつと不機嫌。イチャイチャしてた所を邪魔されて怒ったかな？

それにしても、このガキ・・・どうして知っている気がするんだ？

そして、このバカのような顔・・・

あつ・・・もしかして、ナギ？

「おお、そうか！ よっしゃあ、見つかったぜ！」

嬉しそうにナギ(?)が叫ぶといきなり上空へと魔法を飛ばす。

「チツ・・・」

魔法を使用され、戦闘準備に入るキティ。

「ねえ、戦い？ 戦いなのか？ まだ子供って所が少しつまらないけど、合図を送ったって事は仲間もいるってことよね？」

「ちよつと待て！ 戦うためにお前達を探してた訳じゃない！ 俺はお師匠・・・ゼクトお師匠の知り合いなんだ！」

「ゼクトだと?」

懐かしい名前を聞いて、キティが少し警戒を緩める。そしてチャチヤゼロ、そんなに残念そうな顔をするな。

まあ、こいつが本当にナギなら、ゼクトがいてもおかしくはないな。

「ゼクトか・・・これはまた懐かしい名前だな。ゼクトは元気にしてるか?」

「元気じゃぞ。この通り、ピンピンしてる」

なんと、まさかの本人からの返事。

「ゼクト、久しぶりだな!」

「ゼクト、ひさしぶりー!」

「600年前と全然変わらんな、お前」

懐かしい友人に出会い、嬉しそうに笑うキティ。かと言って、俺が嬉しくない訳じゃない。きっと俺の顔も笑顔でいっぱいだろう。

「そう言うお主達も元気にしてるようじゃのう。まったく、悪名が世界中に広がるとるぞ」

「ははは、俺たちと出会った時、こうなる方が確率高いと言わなかったか?」

「うむ、言ったのう・・・レーベンスシュルトの事は聞いた。気の毒じゃったのう」

「ああ・・・けど、あれをやった人たち全員には私たちが報いを受けさせた。だから、あれはもう終わっている。今更悔やんでも仕方がない。それよりも、そこに住んでいた人たちを思い出す事で彼らの記憶に敬意を払っている」

「そうか・・・」

「ゼクトは今、何をしているんだ？」

取り敢えず、暗くなりかけている空気を変えてみよう。

「うん？ 今はここにおるナギ・スプリングフィールドの魔法の師匠をやりつつ、一緒に旅をしとる。他にも後二人おるぞ」

えっと、サンダー軍曹に木乃香の親父だっけ？ ラカンはまだいなかったよな？

「それで、どうして私たちを探していたんだ？ さっきのこのガキの様子だと、偶然じゃないようだが？」

「ふむ、なに・・・わしらの『紅き翼』に勧誘するために探したんじゃないか。どうじゃ、わしらと一緒に来る気はないかの？」

俺たちが『紅き翼』に、だと・・・？

「本気か、ゼクト？ 俺が言つのもなんだが、一応俺たちはお尋ね者だぞ？」

「紛れもない本気じゃぞ。これは四人の総意でもある。賞金の事は別に気にせんで良い。外道でもない限り、そんな細かい事を気にする者はわし達の仲間にはおらん」

「ふむ・・・ゼクトには魔法を教えてもらった恩もあるし、私は別にいいぞ。ソウジはどう思う?」

俺?

俺はもちろん異論はないぜ。だって、『紅き翼』だぞ?

これほど深く、大戦の核心に関わるチャンスが向こうからやってきたんだ。断る理由がないだろう?

「俺もいいぞ。チャチャゼロは?」

「アタシ? アタシは何でもいいわよ。」

「・・・そう言う訳だ。これからよろしくな、ゼクト」

「うむ、よろしく頼む。あと、ソウジよ」

「なんだ?」

「仲間の一人に神鳴流の剣士で近衛詠春というのがおるんじゃないが、覚悟した方が良くじゃろう」

覚悟?

「わしはよく知らんのじゃが、何でもソウジは昔に神鳴流を修めたらしいのう？」

「75年前くらいにな。あと、50年前くらいにもう一度京都に行った」

「そうか」

「それがどうしたんだ？」

「どつやら、あれからソウジは神鳴流の中では伝説の剣士と語り継がれとるらしい」

「はあ？」

俺が伝説？

なんで……？

「良く分らんが、とにかくそう言う事になっとして、この詠春と言う者はソウジを半ば崇拜しとるようじゃ」

アイドルみたいなもんか？

「じゃから、覚悟をせんと気後れするかもしれん」

「それほどか？」

「それほどじゃ……」

そうか、それほどか・・・

「ちょーっつとまてーっい！」

「うん？ 誰だ、お前？」

キティ、いくら先ほどから影が薄かったと言っても、それはちょっと酷いんじゃないか？

「ナギだ！ 天才魔法使いのナギ・スプリングフィールド！ 俺が『紅き翼』のリーダーだ！！」

「はあ?!」

そんな、かわいそうな人を見るような目で見てやるな、キティ。

「ゼクトがリーダーではないのか？」

まあ、実力と年齢から見れば、そうなる方が自然にも思えるな。

「わしはリーダーなどというガラじゃないからのう・・・まあ、ナギは少しバカじゃが、悪くないリーダーじゃ。こいつの事もよろしく頼む」

「まあ、ゼクトがこう言ってるんだ。取り敢えず任せようぜ、エヴア。何か気に入らなければお稽古（と言っ名のおシオキ）をつけてあげたら？ そしたら少し従順になるだろうし」

リーダーって色々面倒くさそうだし、ナギがやってくれるって言うんなら、任せるか。

稽古については、今のキティとナギの実力を考えればキティの方が圧倒的に強いだろう。いくらナギがチート級の魔力を持っていると言っても、まだ使いこなせていないだろうし、もし使いこなせていても、キティは俺のおかげで強化されているから、そうそう負けないだろう。

「とにかく、兄弟弟子のようなもんだ。これからよろしく頼むぜ、ナギ。俺はソウジと呼んでくれ」

「エヴァだ」

「アタシはチャチャゼロよ！」

「ああ、よろしく頼むぜ！ 三人も仲間に入ったし、これから『紅き翼』も本格的に行動開始だ！」

第十九話：伝説（笑）と邂逅（後書き）

少し忙しいので、多分更新速度が遅くなります。

第二十話・新しいメンバー（前書き）

少し遅れて、次話投稿です！

第二十話：新しいメンバー

< side : ソウジ >

「それじゃあ、あとの二人に紹介するからちよつと俺に付いて来てくれ」

ナギ達は俺とキティが紅茶とケーキを食べ終わるのを待ち、それから残りの仲間の場所に連れてくらしい。

「分かった。仲間はここから遠いのか？」

「いや、結構近くだ。ソウジ達を見つけたという合図を送ったから宿で待つてる筈だ」

「そっか。じゃあ行くか、エヴァ」

「ああ」

さて、と・・・俺のファンらしい、詠春に会いに行こうか。

・・・

・・・

・

「おーっす、今戻ったぞー・・・おわっ！」

「ナギ！！ 彼らは！ 彼らはどこだ！ 仲間になるのか？！」

ナギが宿のドアを開けながら挨拶すると、いきなり中から一人の人間が出て来てナギの肩をガクガク揺らす。

お、おい、ナギ、目を回してるぞ？ 誰か、止めなくていいのか？

「詠春、そろそろ止めんか！ ナギが気を失つとるぞ！」

こいつが詠春なのか・・・

ゼクトの警告以上だぜ。

「はっ・・・！ ゼクト殿、すまない。少し取り乱した」

「それよりも、ナギは大丈夫か？」

「そう言えば！ ナギ！ ナギーー！」

そしてさらにナギをガクガク揺らす詠春。

それは逆効果じゃないのか・・・？

「じゃから、それは止めるとー！」

ダメだ、こいつ。早く何とかしないと。

・・・

・
・
「この三人がこれからわし達の仲間になる者じゃ。」

詠春が落ち着いて、ナギが起きるまで二十分かった。

そして今、やっと皆の紹介に入った。

「この者達の紹介は必要などないかもしれないが、一応な」

「俺はソウジ・ホウキ。ソウジって呼んでくれ。一応、元は日本人の人間だ。得意魔法は主に闇と火だが、他の奴もある程度使える。普段の戦闘ではこの刀、妖刀『ひな』を使用した神鳴流剣術で戦っている。あつ、あと、ひなは俺の魔法発動体でもあるのでそれでよろしく。ちなみに、俺が使用しているうちに、俺からの力を吸収して強くなっているから、俺とエヴァ以外の人がひなを持つと簡単に乗っ取られるので気をつけるように」

取り敢えず、こんなもんかな？

あつ、ひなのことは本当だよ？ かなり強くなっていて、それに伴い、ひなの支配力も強くなっている。かなりの上位の存在じゃないと、簡単に乗っ取られて、俺に戻ってくる。そのまま暴れらるかと思つかもしれないけど、俺と一緒にいた方が封印されずに暴れると分かっていようだ。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。エヴァンジェリンでも、エヴァでも、どちらでも呼んでいいが、ミドルネームのキティだけは呼ぶなよ？ これはソウジだけに許している名だ。元は人間だが、ソウジに死徒にもらった。死徒とは真祖の従者のようなものだが、基本的には吸血鬼と同じと考えていい。好んで使う魔法は闇と氷だ。他には魔力を通した糸を操って戦う事もあるし、合気道も嗜んでいる」

「そして、アタシがチャチャゼロよ！ 戦いの事ならアタシに任せて！ アタシのナイフが血の雨を降らせるわよ！ 可愛い人形だからってアタシの事を舐めたら痛い目に遭うよ？」

分かり易い自己紹介をありがとう、チャチャゼロ・・・それから、俺の頭の上でナイフをジャグリングしないでいただきたい。

そして始まる『紅き翼』面々の紹介。

「わしの事は知つとるし、ナギの紹介は先ほど済ませたから、あとはお主達だけじゃ」

「分かりました。私の名はアルビレオ・イマ。気軽に『アル』と呼んで下さい。得意魔法は重力魔法です。『紅き翼』での役割は主に後衛からのバックアップや作戦の立案などですね。吸血鬼という存在についてすごく興味がありますので、いつか時間があればぜひ話を聞かせて下さい」

「よろしくな、アル」

「よろしく頼む」

「よろしくねー」

「そして最後のこやつが??」

「近衛詠春です、宗治様、エヴァ様、チャチャゼロ様。三人の話を祖父から何度もせがみ、聞かされました。御会いできて光栄です」

『様』? しかも祖父から話を聞いた? あつ、何か、ナギ達が信じられないような顔で詠春を見てる。いつもはこんな風じゃないのか。

「お前、もしかして青山の所縁の者か?」

「はい。神鳴流の当代は私の兄です。そして、祖父の名は聡一」

「聡一の孫だったのか。あいつはまだ元気にしてるか?」

「いえ、残念ながら、五年ほど前に病にかかり、亡くなりました」

そうか、聡一がね・・・どうして人間の寿命はこれほど短いんだろうなあ・・・

「聡一・・・」

キティも少し悲しんでるか?

でも聡一、孫までいて、幸せだったんだろう。

「祖父は最後まであなた方の事を気にかけていましたので、いつかまた京都に来て挨拶して行って下さい」

「ああ、必ずそうしよう」

俺たちが最後にあったのはあいつが40くらいになっていた時か？
確か四人目の子供が産まれたばかりだったな。そういや、一番上の子に少し稽古したっけ。詠春の兄が当代なら、本家筋なんだろう。もしかして俺が教えたのってこいつの親父？

「お前の親父からは何も聞いてないのか？ 多分、俺が少し稽古してやったんだけど・・・」

「父上ですか？ 何も聞いてませんが、何故かあなたの話になると突然震えだします。何故でしょう？」

すまん、少し厳しくすぎたかも。けど、後悔はしても、反省はない。あれ、逆だったっけ？ まあ、いいか。どうせまた誰かに稽古をつけるような事になれば同じようにするだろう。

「ところで、お前の名字は青山と違うな。どうしてだ？」

「それはですね・・・本家の方は兄が継ぐことになったので、私は東の長の娘へと婿にだされたのです」

「所謂、政略結婚ってやつか？」

「そうですね。向こうの娘は器量好しで、すごく魅力的なのですが、私はその強制された結婚に反発し、結婚初夜に思わず逃げて来たのです。お恥ずかしい」

「けど、近衛って名前を名乗ってるんだな」

「ええ。結婚には反発していても、これの必要さは分かっていますし、私も少し時間が欲しかっただけなのです」

「なるほどな。まあ、がんばれ。あと、嫁さんに八つ当たり何かして不幸にするなよ?」

「はい、分かっています。御気遣い感謝します、宗治様」

「一応、青山家の守り神みたいなもんだからな。これくらいのことはずるさ。俺が神なんて少しおこがましいかもしれんが」

「いえ、勝手ながら、私や他の者もあなたを守り神に思っています」

「そうか・・・ともかく、詠春もよろしく頼む。あとでお前の剣の腕を見せる。稽古つけてやる」

「はいっ！　ありがたき幸せ！」

「よろしく頼むぞ、詠春」

「よろしくー。あと、アタシも稽古に交せてよね」

チャチャゼロモか。まあ、詠春ならいい練習相手になるだろう。

「さて、自己紹介も終わったようじゃし、これからの行動の予定でも立てよう」

「ちょっと、お師匠、俺の台詞を取らないでくれよう！」

ナギが場を仕切っているゼクトに文句言っているが、ここは取り敢えず無視。他の人もそうするようだ。

一応リーダーなのに、かわいそうなナギだ。

「ゼクト、今までどんな事をしてたんだ？」

「今までの目的はお主等を探すことじゃったからのう。あとは傭兵まがいのようなものじゃった」

「ふうん。で、これは少し関係ないかもしれんが、お前達は今度の戦争に関わるつもりなのか？　そして、どっちの陣営に付くつもりだ？」

「わしは積極的に関わる理由はないんじゃないが、関わるかもしれない。参加する理由を強いて言えば、そうする事で戦争が早く終われば最終的な犠牲が少なくなってくれるんじゃないかと思う」

「なるほどな。他の奴らもそうなのか？」

「そうですね、私もゼクトとそう変わりません。私はナギに付いて行くことに決めていますので、ナギが戦争に参加するのなら私もします」

「アルはそうか。詠春はどうだ？」

「私は戦争に参加する事に賛成です。私の剣は人々を守る為に使いたいのですから」

「そうか。で、肝心のリーダーはどう考えてるんだ？」

「やつとか！俺は楽しければ何でもいいぜ！それに、これほどの実力者が揃ってるんなら、戦争になっても皆大丈夫だろ？それなら普通の人を守る戦いつてやつをしてもいいんじゃないか？」

「分かった。俺とエヴァは人間同士の戦争の事なんか別になんとも思っていないが、このグループのメンバーになったからにはリーダーの決まりには従うだけだ。な、エヴァ？」

「そうだ。そのリーダーがこんなガキなのに少々不満があるがな」
ふむふむ。エヴァも異論はないようだし、チャチャゼロは言わずもがな。

今の所はこれくらいでいいか。まあ、俺は最初から結構乗り気だったけど、色々聞いておきたかったのは性分だ。

取り敢えず、これから俺たちも『紅き翼』の一員だ。歴史がどう動くか見るのが楽しみになってきたぜ！っていつか、俺が変えてやる！

第二十話：新しいメンバー（後書き）

やっぱり、世界歴史規模の大きなイベントを変えすぎるのは難しいので、それはほとんど原作通りに進むと思います。それでも、個人レベルで原作の二番煎じにならないように頑張ります。どうか寛容な目で見ていて下さい。

第二十一話：オスティア防衛戦（前書き）

なんと、この時ではまだゼクトは仲間になっていなかったらしいです。そこから辺もソウジというイレギュラーの影響が出ていると言っ事で目を瞑って下さい。

第二十一話：オスティア防衛戦

< side : ソウジ >

俺たちが『紅き翼』に仲間入りしてから数ヶ月後、戦争は本格化した。

争いはたちまち全世界へと広がり、世界の国々のいずれもヘラス帝国がメセンブリーナ連合の側に付いた。

俺たちは特に一つの国に所属している訳ではないが、ナギの決定で俺たちは人間が多いメセンブリーナ連合の為に動いている。

しかし、帝国側の勢いは凄まじく、あっという間に王都オスティアの門前まで侵攻してきた。

オスティア第一次防衛戦で連合側は何とか守りきったが、もう一度攻め込まれたらどうなるか分からない。そしてその二度目の侵攻はすぐにそこまで来ているようだ。

そこで急遽、俺たちは他の戦域からオスティアの防衛を助ける為にそこへと急いでいる。

「ナギ、このままだと間に合わないかもしれないぞ！」

「仕方ねえだろ、ソウジ！ もう休み無しで何日も飛び続けてるんだぞ！ これ以上急げる訳ねえじゃん！」

「そうですね、ソウジさん！ これが私たちの限界ですよ！ どうしました！ 心配ですか！」

「別に心配とかじゃないが、折角急いでいるのに、間に合わなければ全て徒労に終わるだろうが！」

「まったくだ」

「宗治様！ もっと急ぎましょう！」

また詠春かい。

「アホか、詠春。これ以上急いで、オステイアに着いた時にヘトヘトじゃと役に立たんぞ！ これより速く飛んで疲れんのは吸血鬼のソウジ達と人形のチャチャゼロくらいじゃ」

「まあ、ただの愚痴のようなもんだ。そんなに気にすんな」

「はい、宗治様！」

ええい、そんな主人を見つけた子犬のような嬉しそうな顔でこっちみんな！

やれやれ、暇だった時に少し稽古をつけたら、詠春がさらに酷くなつた。前は憧れに近いものだったが、あれ以降はもはや崇拜と言つてもいいほどだ。詠春がどれほど本気だったかは知らないけど、軽くあしらっちゃったからねえ……

ショックを受けるかと少し心配したんだけど、むしろ「さすが宗治様です！」とか言つて感動していた。

「とにかく急げ！ あと少しで着く筈だ！」

・

・

・

「くっ、遅かったか！」

オスティアに着いた俺たちを迎えた光景は無数のクジラのような戦艦、鬼神兵と魔法使いに攻撃されている都市だった。

「けど、都市はまだ落ちてないぜ、ナギ！ まだ間に合う筈だ」

しかし、これだけの戦力差で持ち堪えている理由を考えると・・・

「チツ、気に入らねえぜ！」

ナギも同じ気持ちらしいな。他の皆も言葉にしなくても、その顔を見れば分かるってもんだ。

そう、ここがまだ落ちていない理由、それは？

チユイイイーーーーン！！！！

そう考えている間にまた戦艦からの一斉射撃が開始し、何発もの精霊砲がオスティアの中央塔を襲う。

ヒュッ・・・

しかし、それらは全部、塔の直前で掻き消える。

『黄昏の姫御子』のマジックキャンセル能力を使用した防御結界。その前では魔力を使ったどんな攻撃が無駄になる。『黄昏の姫御子』という生け贄を代償に。

「まったく、人間の意地汚くても生き残るといふ執念を感じるぜ」

「ああ・・・胸糞が悪くなる話だ」

「だな、エヴァ。さて、そう言う時はどうするのが吸血鬼らしいと思っ？」

ニヤリとキティに笑う。

「ソウジ、まさかお前は・・・」

ふっ、キティも分かったかな？

「そうだとしたら？」

「はははっ、反対する訳ないだろう！ ようし・・・ここは吸血鬼らしく行くこうではないか！」

「おうー！」

吸血鬼らしくとはどついう意味？

愚問だな。最強種らしく、傲慢なほどに思うが俥に行動するだけだ！

「お前等もいいな！ 嫌と言われても止めないけどな！」

他のメンバーにも俺がどうしようかと考えているのが分かってい
るらしく、彼らの顔には達観のような表情が浮かんでいる。俺を止
めても無駄だと分かっているみたいだ。それに、本心ではあいつ等
だって俺と同じ気持ちの筈だ。

「よしっ、そうと決まったら行こうぜ！ ソウジが何かやる前に都
市が陥落しちまったら意見ねえだろ！ 見る、帝国の軍勢がもう中
央塔の目前だぞー！」

おっと、ナギの言う通りだ。

「オツケー、ナギ！ 合図を頼むぜ！」

「あいよ．．．『紅き翼』、出陣！―！―！」

「「「「「オオオオ―！―！―！―！―！」「「「「「

・

・

・

ドンッ！ ドドオオーン！！

ナギの魔法が当たり、塔に攻撃しようとしていた鬼神兵が倒される。

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ。あとは俺たちがやる。」

「お、お前は……『紅き翼』……『千の呪文の』……」

「そう！ ナギ・スプリングフィールド！ またの名をサウザンド・マスターー！！」

「自分で言ってるよ、こいつ……」

詠春、言ってやるな。ナギの数少ないリーダーとしての見せ場なんだから。

「まったく、調子が良いのう」

「ふん」

「さてと、ちょっと片付けるか……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

俺とキティ、それに他の魔法使い勢（まあ、詠春とチャチャゼロ以外の全員だが）が詠唱を始める。

それと同時に詠春、チャチャゼロ、それに無詠唱に重力魔法を撃てるアルが敵兵に突っ込む。

じゃあ、少し派手に行くぜ！

「『燃える天空』！！！！！」

「『おわるせかい』！！！」

「『千の雷』！！！！！！！」

「『そびえるだいち』！！！」

俺たちの詠唱は同時に終わり、中央塔から四方向へと炎が、氷が、雷が、石の山が広がり、囲んでいる敵を薙ぎ払う。

「はっはー！！！！！！！」

特大魔法をぶつ放すのは爽快だぜ！そして、俺の撃った『燃える天空』が命中した場所は少々（本当は大分）地形が変わっているが、気にしないぜ！気にした方が負けというしな！

俺たちの魔法で塔の近くの敵はあらかた片付けたが、まだまだいるな。

「おお・・・」

「安心しな、俺たちが全て終わらせてやる」

「無理だ！敵の数を知らないのか！ たったの七人のお前達に何が出来る！」

「はあ？ たったの七人？ 俺たちを誰だと思ってるんだ、ジジイ。世界最強の『紅き翼』だぜ。むしろこれだと少し物足りないくらいだ！ だろ、皆！」

「そうだ」

「うむ、そうじゃな」

「アタシ一人で足りるくらいね！」

「そう言う訳だ、人間。あとは先の短い人生をどう過ごすとかでも考えてるんだな」

「なっ・・・オーバードライバー・・・それではあの噂は真実だったのか?!」

くっ、ここでもその名前かよ。さっきの魔法を見ればその名前が浮かぶのも分かるけど、やっぱりちよつとへこむ・・・

噂っていうのは俺とキティが『紅き翼』の仲間になったことだろう。

あっ、あそこにいるのが『黄昏の姫御子』か。ちよつと挨拶してくるか。

鎖に繋がれた少女近づくと、彼女は俺に気づき俺を見る。

ちっ、血を吐いてるじゃねえか・・・

指で綺麗にして、と・・・ん、やっぱり美味しいな。これが王家の魔力が籠った血か。気に入ったぜ。

けど、この扱い・・・やっぱりあの計画を実行するしかねえな。

「こんにちは。俺はソウジだ。君の名前は？」

「・・・ナ、マエ・・・？」

「ああ、名前だ。君にもあるだろ？」

「アスナ・・・アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオ
フュシア」

「アスナちゃんか。可愛い名前だな。君にぴったりだ」

「カ、ワイ、イ・・・？」

「そうだぞ。君は可愛い。俺が保証してやる」

反応無し、か・・・感情が殺されてるな・・・こいつは所詮この国
の奴らに取ってはただの道具と言う事か。

安心しろ、アスナちゃん。俺が君を助け出してやる。

じゃあ、残りの敵はちゃっちゃんと片付けてくるか。

アスナちゃんの頭を撫で、立ち上がる前に一度だけ彼女の耳元で囁
く。

「ちょっとだけ待ってる。あの敵さんを倒したあとに必ず迎えに来
る。そうしたら君はこんな最低な場所から自由になる」

うしっ、やるぞー！

「やはりやるのか、ソウジ？」

敵に向かう途中にキティが俺に聞く。

「ああ。彼女を見て決心が固まった」

「この国が敵になるぞ？」

「それがどうした。それでどうにかなる俺たちでもないだろ？」

「ふっ、当たり前だ。面倒が増えると言おうとしているだけだ」

「彼女の為なら、それくらいの面倒を被ってやるさ」

「何だ、そんなに彼女を気に入ったのか？」

おっ、ジエラシー？

「バーカ、そんなんじゃねえよ。血は確かに美味かったけど、それが理由の訳ないだろう。ただ、あいつの感情のない顔を見て無性に悲しくなって、彼女を笑わせてみたいと思ったただけだ」

「ふん、やさしいお前らしい理由だ」

「俺、そんなにやさしいか？ 結構残酷だと思うけど・・・」

「お前は充分やさしい。お前のおかげで私は一度も寂しい思いをしなかったのが何よりもの証拠だ／＼」

「そうか」

「じゃあ、さつさと残りの敵を掃除するぞ。姫様を早く迎えに行くのだから?」

「まあな」

「よし、なら私はこつちを片付ける。ソウジはあつちを任せた」
キティの差した方向には大軍。

「おいおい、軽くお前の二倍はいるんじゃないの?」

「何だ。自信がないのか?」

「なにおう?! 無理な筈ないだろう!」

「ならさつさと行け。こうしている間にも姫様を待たせているぞ?」

ふっ、そう言われれば行かないわけにはいかねえな。

「了解。じゃあ、ちよっくら遊んでやるか」

「私もな」

「じゃ、またあとで!」

「ああ」

よしっ……いっちょやってみっか! (孫 空風)

*
*
*

< s i d e : アスナ >

私ノ前ニ現レタ温カナ手ヲ持ツ不思議ナ人、ソウジ。

タダノ道具ノ私ヲカワイイト言ウ。

私ヲココカラ連れ出スト。

私ニハ何モ無イノニ。

本当ニ不思議ナ人・・・

第二十一話：オスティア防衛戦（後書き）

オリジナル魔法、「そびえるだいち」

とりあえず、土系統の最上級系の魔法と考えてくれれば。

そしてソウジがやさしい云々は何故か前に一度やった気がするのだが、見つからなかったので、そのままに。

第二十二話：事後処理

< side : ソウジ >

俺たちが出撃した後、絶望的だと思われていた戦いはこちら側の圧倒的な勝利で終わった。

オスティアは無事生き残り、帝国は大打撃を受けた。これで向こうもしばらくは大きな侵攻作戦はできないだろう。

これで残るのはアスナちゃんという名の後始末だけだ。

「さて、いくか、エヴァ」

「ああ、行こう」

よし……お姫様を迎えに行くとするか。

・

・

・

「な、なんだ、お前達！」

「く、くるなあー！」

「貴様らのやっていることは反逆だぞ！」

「なら、俺たちを逮捕してみる」

俺たちが戻った時にはアスナちゃんはもう儀式の場所から移されていた。

だが、それで諦める俺たちだとも思ってたか？

その辺の偉そうな人を適当に捕まえて尋問したら、簡単にアスナちゃんの居場所を吐きやがった。そんなに我が身が可愛いのかねえ。一応国家最大の機密なんだろう？ まあ、言わなくても、ちょこつと血を吸えば記憶が分かるから抵抗しても無駄だけどね。

どっちにしても、手間が省けたのはいいことだ。

そう言う訳で俺とキティの二人は抵抗をする人たちを倒しながらアスナちゃんの部屋へと歩いている。

「なるべく殺さないように気をつけてくれよ。折角助けたのに、俺たちが殺してちゃ本末転倒だからな。あくまで『なるべく』だが」

「私には合気道があるから手加減もできるが、ソウジの方ができるか心配だ」

「あはは、それは言ってる。じゃあ、戦闘はエヴァに任せた方がいいかもな」

「それでもいいが・・・」

「が？」

「どつやら着いたようだ」

「おっ？」

いつの間に着いたのか。

「じゃあ、帰りはエヴァに任せるといふことでよろしく」

「仕方ないな」

「さて、お姫様とご対面だ」

ギー……

部屋は質素な作りで、窓には鉄格子。飾りの一つもなければ、この年頃の娘が好みそうな人形もない。真正正銘の王族なのに、まるで囚人扱いのようだ。

そして部屋の唯一の家具であるベッドの上にツインテールのアスナちゃんがちょこん、と座っている。

「ダレ……？」

「やあ、さつき振り、アスナちゃん」

「……ソウジ？」

「そうだよ、ソウジ。そして、隣の彼女はエヴァ。これから君をこ

「ここから連れ出す為に迎えに来たよ、約束通りにね」

「イイノ？」

「大丈夫だよ。どんな事からも君を守るし、何があっても俺たちが君の味方になる。国の人も納得させるさ」

「・・・」

「だから、君が心配する事は何もないぞ。さあ、俺たちと一緒に行く」

アスナちゃんに手を差し出しながらそう言う。

「・・・コク」

小さく頷いて、アスナちゃんが俺の手を握る。

「よしっ！ じゃあ、行くぞ！ エヴァ、先導頼む」

アスナちゃんが俺の手を取ると、それを了解の意とし、そのまま彼女を抱き上げる。

「アッ・・・」

いきなり持ち上げられ、アスナちゃんから小さな声が出る。

「ふっ、任せる」

頼もしいぜ、キティ！

「しっかり捕まってるよ、アスナちゃん。少し揺れると思うから」
そしておずおずと俺の首に腕を回すアスナちゃん。

「捕まったな？ それじゃあ少し急ごう、エヴァ。もう気づかれて
いるだろうし、きつと兵をいっばい連れてくるからな。それでも負
けないが、要らない労力を使うのもバカらしいし」

「分かってる」

キティが頷き、俺たちは割と本気の早さで走る為両足に集めた魔
力を一気に解放。向かう先は他の『紅き翼』のメンバーの所。

・

・

・

「おーっす、皆。今戻ったぞ！」

「ただいま戻った」

「もおー、どこ言ってたのよ！」

「はあ、まさか本当にやるとは・・・」

アルよ、どうしてそんな呆れたような顔をする。

それはともかく、皆にアスナちゃんを紹介しないと。

「取り敢えずそれは横に置いておいて、この娘の紹介だ。多分知っているけど、アスナちゃんだ。『黄昏の姫御子』とか言われているウエスペルティアの姫様だ。この国での扱いが気に入らなくて、拉致って来た」

「拉致って来た、って……」

なんだよ、アル。文句があるのか？

「はははっ！ やつてくれるな、ソウジ！ 俺も気に入ってなかったが、さすがに誘拐するほどいかれてないぜ……よう、アスナ。俺はナギだ。よろしくな！」

「ゼクトじゃ。よろしく頼むぞ、嬢ちゃん」

「ふうー……よろしくお願ひしますね、アスナさん。私はアルです」

「こんにちは、アスナちゃん。私は詠春と呼んで下さい」

「アタシはチャチャゼロよ！ 一応よろしくするけど、ソウジはアタシのよ！ 渡さないわよ！」

「人形……？」

「そうだよ、アスナちゃん。チャチャゼロはエヴァが作った魔法人

形だ。あと、彼女の戯れ言はいつものことだから、気にしなくていいよ」

「ワカッタ」

うん、素直でいい子だな。

「ちょ、なによ！ アタシの言う事を聞きなさいよ！ うきー！ー！ー！！！」

「エヴァの事はもう紹介したし、取り敢えず、これが俺たち『紅き翼』の仲間だ。これから皆がアスナちゃんの友達だぞ」

「トモダチ？」

「ああ、そつだ。これからは大変だぞ、アスナちゃん。みんな、騒ぎが大好きだからな。寂しいとか思う暇もないぞ！」

「・・・」

む、少し反応が薄いな・・・やっぱり今までの扱いが機械的すぎて、寂しいとか楽しいとか分からないほどだったのか？

ちっ・・・これからあそこに戻って、アスナちゃんにこんな扱いを強いた奴らをぶっ殺したくなるぜ。

とにかく、これからの未来。アスナちゃんは絶対に不幸に何かさせないことをここに誓う！

・

・

・

その夜。

アスナちゃんを寝かした後、アスナちゃんと一緒に寝ているキティを除いた俺たちは今回のことについて話し合っている。

「さて、アスナちゃんの事だが、多分ウエスペルティア王国からの反発が多いだろう」

「まあ、そうじゃろうな。王国に取っては守りの要じゃからのう」

「それで、だが、もし皆が不安なら、俺とエヴァは『紅き翼』から抜ける覚悟だ。俺とエヴァだけでもアスナちゃんを守る自信はあるし、それなら『紅き翼』が連合の敵になる可能性が低い」

「その必要はないぜ、ソウジ！ 俺だって姫子ちゃんの扱いが気に入らなかつたんだ。お尋ね者になっても、どうってことないぜ！」

「ナギ？」

「そうですね、宗治様！ 守りたい人たちを守る。その為の力なのですから！」

「詠春・・・」

「何も、軍隊に所属しなくても、人々の助けは出来ますよ。局地的な傭兵でもいいですし、勝手に武力介入して戦いを終わらせても、そのくらいの力は私たちにあります」

「うむ、アルの言う通りじゃ」

「それに、なんだかんだ言って、最後には何とかなる物ですよ」

「そうだぜ！ だから仲間を抜けるとか言つなよ！」

何とかなる、か。ちょっと気楽な気もするけど、それくらいが俺たちには丁度いいのかもしれない。

* * *

<side：メセンブリーナ連合協議会>

アスナ誘拐事件から少し経ち、緊急に開かれた協議会。

今、ここに連合各国の代表が集まってオステアの防衛戦、並びに『紅き翼』の行為について相談しあっている。

「これは連合に対して明らかな反逆ですぞ！ 直ちに『紅き翼』を捕縛し、極刑に処すべきです！」

ウエスペルティア代表が声高々に申し立てる。

「『黄昏の姫御子』は我が王国の最大の機密、そして最終防衛手段。

あれをなくしては我が国の守りもままなりません！」

しかし、ウエスペルタティア代表がいくら大声を上げて主張しても、他の国々の代表の反応はなかった。やがて、この問題に決着を着けるべく、連合の盟主たるメガロメセンブリア代表が話し始めた。

「セレナス、コペルク、イリダン、ヴェポール・・・」

「・・・？」

突然訳の分からない単語を口にするメガロメセンブリア代表にウエスペルタティア代表が混乱した顔をする。それは他の国々の代表も同じだったが、その単語の意味を知っていた数人は途端に深刻そうな表情を浮かべた。

「一体何なのです、メガロメセンブリア代表！ 今は我が国に対し大罪を犯した者どもをどうするか話している筈！」

「ふん、分からんか、若造。これらはただの意味のない単語などではない。これらはいっ百年ほど前に存在していた国の名前だ。中にはこの連合で上位に入るほどの大きさを持った国もあった」

「ばかな・・・」

それほどの国なら何故知らない。百年は人間にとっては随分昔だが、人間の歴史から見れば本の僅か。それがまるで存在しなかったように消されている。

「この国はとある理由で歴史からその名を抹消され、今ではその名前さえ禁句に近いものとなっている。その理由と言うものに疑問を

持つだろう。歴史から抹消されるほどの事。余程の罪を犯したと考
えるかもしれない。しかし、それは違う。彼らが犯した罪など戦争
では日常茶飯事。では、その理由とはなにか。それこそがこの議会
の主題に深く関係しているのだ」

メガロメセンブリア代表の延々と続く話に少し苛立ちを覚えたウエ
スペルタティア代表だったが、盟主の話を見聞かすにはいかなく、黙
つたまま続きを聞いた。

「このいずれの国は一つの小さな国の滅亡に深く関わっていた。そ
の国の名はレーベンスシュルト。そして国の王の名はソウジ・ホウ
キ並びにエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「!!!!!!」

「そう。今回の事件でも名が挙がっている吸血鬼だ。自分の留守を
狙われ、国を滅ぼされた二人の吸血鬼の怒りは相当なものだった。

やつらは関係者を尽く葬り去り、特に深く関わっていた先ほどの国
などは草の根一本まで破壊された。その余りにも残酷で非道な行い
に当時の我々人間は恐怖に染まり、その滅ぼされた国と関係してい
たと思われるのが恐ろしく、あらゆる物からその存在を消し去り、
その名を口にする事を禁止した。これがその国の存在が知られてい
ない理由であり、彼の吸血鬼達を敵にすると言う意味だ。賞金を掛
けるくらいなら奴らは何とも思っていないようだが、奴らの物に手
を出したらそれなりの報復を覚悟する事だ。分かったか、若造ども
？ ウエスペルタティアが自分でどうしようが勝手だが、連合から
の助けなどないと知れ。我々はあの吸血鬼達の敵になど決してなら
ん」

「くっ……!!」

メガロメセンブリア代表の言葉は固く、意見を変えるつもりは無いとウエスペルタティア代表に分かった。そして、『紅き翼』の実力を間近で見ている彼には連合の助けがなければとても『黄昏の姫御子』の奪還など無理だと知っている。

「しかし、今回のことで『紅き翼』に何の咎めが無いのでは他に示しがつかん。それが形だけとなっても、何かは必要だ。そこで、今回の事で勝手に動いて命令に背いた事を理由とし、彼らを前線から離す。これに異論のある者は声をあげる・・・無いようだ。では、今回の議会はこれにて閉会する！ 決まった事については直ちに処理するように」

メガロメセンブリア代表の宣言で協議会は終了し、各国の代表が会場から出て行く中、ウエスペルタティア代表は焦り、苛立ち、疲れなどの色々な感情がない交ぜになったまま自分の席に座り込んで一人残された。

第二十二話：事後処理（後書き）

レーベンスシュルトが何百年の間に領地から王国へと格上げされた設定です。

そして名前が無い哀れな各国の代表w

さて、今回のことで人間にとってソウジ達がどれほどの恐怖の対象となっているか少し分かりますね。しかし、ここまで具体的に恐れている人はあくまで上層の一部の人間であって、一般人にはやっぱりなまはげ程度くらいにしか思っていないのでしょうか。

ソウジの心配は無駄になってしまいましたね。これほど恐れられているとは自分でも思っていないでしょう

そして『黄昏の姫御子』をなくしたウエスペルティア。これからどうなるのでしょうかねえ……

第二十三話：鍋皇帝（前書き）

素直クールはいい。

第二十三話：鍋皇帝

<side：ソウジ>

あれから意外にもお咎め無しの俺たち。前線からは外されたが、別に文句は無い。

それのおかげでアスナちゃんにそれほど危険もなく過ごさせているかな。

そのまま新年を迎え、俺たちはとある辺境で鍋の準備に勤しんでいる。

今までの数ヶ月でアスナちゃんは感情を見せる事はまだ無いが、いつも一緒にいたがるから、どうやら俺の事は気に入っているみたいだ。

いつも手を握りながら歩いているし、夜ではよく一緒に寝ている。たまにはキティも一緒に川の字になって寝る事もあるな。これからも分かるように、アスナちゃんはキティの事も気に入っているらしい。

そして、少し予想外かもしれないが、詠春にも懐いている。これは後で分かった事だが、詠春は今十歳くらいになっている姪の世話をよくやっていたらしく、それで子供の扱いに慣れているらしい。

「しかし、鍋があ・・・随分と食べてないなあ。最後に食べたのは日本に行ってた時だから・・・かれこれ五十年振りか？ 楽しみだ」

「ソウジ、ナベツテ、ナニ？」

俺の膝の上に座っているアスナちゃんが首を後ろに回し、俺に聞く。

「うん？ 鍋って言うのはこういう風な大きな鍋の中にいろんな食材を入れて煮るとっても美味しい日本の料理のことだよ」

「・・・」

そしてまだ出汁昆布しか入っていない鍋に視線を落とすアスナちゃん。顔には表情こそ浮かんでないが、なんとなく楽しみにしているのが分かる。

「これが旧世界の『鍋料理』か！ それじゃ、早速肉を投入〜〜！」

「ちょ、ナギ、おまつ！ 何をいきなり肉を入れようとしている！」

「いいじゃねえか、詠春。旨いんだから！」

「バ、バカツ！ 火の通る時間差というものがあつてだな！ まずは野菜から入れてだな・・・大体、折角宗治様に私の料理を振る舞うチャンスなのに、その料理を不味くさせてどうする！」

「フッフ、知っていますよ、詠春。日本ではあなたのような人を『鍋將軍』と呼ぶのでしょうか？」

「「な、鍋將軍！！！」」

いや、鍋奉行な。なんかナギとゼクトが驚いてる・・・

「詠春八鍋將軍・・・？」

あつ、アスナちゃんが何か間違つた方向で覚えている。けど、可愛いから許す！ 詠春、お前はこれから鍋將軍だ！

「つ、強そうじゃな・・・」

「まいったよ、詠春。お前がそれほど偉かつたなんて知らなかったぜ・・・」

「うむ・・・料理は全てお主に任せる。好きにするといい」

やれやれ、まだ料理を始めないのかね・・・

「なあ、エヴァ。こんなバカどもはほつといてさつさと始めようぜ」

「そうだな。アスナも早く食べたいだろう？」

「ウン、オナカ減ツタ・・・」

「じゃ、ちよつとそこの野菜を渡してくれ」

「はいよ」

「ちよつと待て、ソウジ！ ここは鍋將軍である詠春に任せた方がいいよ！」

「ふつ・・・愚かな・・・いいか、ナギ。俺も元は日本人。そして歳は600歳以上！ つまり、詠春が『鍋將軍』なら、俺は『鍋皇帝』だ！...!!...!!」

でまかせだけどね

だって、早く食べたいでしょ？

鍋なんてある程度の手順さえ守れば、後は適当でいいじゃん。

「な、鍋皇帝だと……!!!!」

「そういうわけだ。さっさと料理を始めるぞ！」

「わ、わかったよ、ソウジ……」

さて、とりあえず野菜を適当に放り込むか。

・

・

・

「うーん、そろそろいい感じに煮込んで来たかな……？」

「そうですね、宗治様。そろそろ食べても大丈夫でしょう」

そっか。詠春がそういうなら大丈夫だろう。

「そう言う事だ。もう食べてもいいぞ、皆」

「おおー！ 早速いただくぜ！」

「私もいただきますよう」

「美味そうじゃな」

「いただきます」

各々が箸を手に取り、鍋をつつき始める。

「アスナちゃんの方は俺が取ろう。何がいい？」

「ナンデモ」

「そっか。じゃ、取り敢えず片っ端から取ってみよう」

うーん、肉だろ、白菜だろ、椎茸だろ、豆腐だろ・・・

うし、今はこれくらいでいいか。これにしょうゆをかけて、っと・・・

「ほい、アスナちゃん。食べてみ」

「アーン・・・」

ひな鳥のように口を開けて食べ物を待つアスナちゃん。

おもわずお持ち帰りしたくなるような可愛さだ！

あっ、いつも一緒に寝てるからすでにお持ち帰り状態だった！

わっはっはっはー

おっ、キティがなんか羨ましそうにこっち見てるな。

しょうがないなあ、もう・・・

「ほい、エヴァも、あーん・・・」

「なっ・・・あ、あーん・・・」

「美味いか？」

「う、うむ」

はう、今度はアスナちゃんが訴えるように俺を見る。

「はい、今度はアスナちゃんの番」

「アーン・・・」

うーん、なんとなく嬉しそうかも？

おろ、アスナちゃんが箸を拾ったぞ。今度は自分で食べるのか？

そつと肉を摘み上げるアスナちゃん。

さて、それじゃあ俺も食べ・・・うん？

俺が何もしてないのに目の前に肉が・・・？

そしてその箸の先を辿れば、そこには何かを期待するようなアスナちゃんの顔。

これは、まさかの“アーン返し”？！

アスナちゃん、いつの間にそんな高等技術を？！

「ソウジ・・・」

よし、やるぞー！

「あーん・・・うん、美味しい。ありがとう、アスナちゃん」

「・・・」

かわいいね！ よーし、ナデナデしちゃうぞー！

ナデナデ・・・

「んー・・・」

そして、子猫のように目を細めるアスナちゃん。

この顔だけでご飯三杯はいける！

それでは、ご飯の続きをするか・・・

はっ！？

ドカツ！

鍋から食べ物を取ろうとすると、いきなり空から剣が！そして舞う鍋と中身。

「エヴァ、鍋を頼む！」

俺はアスナちゃんを守る！

「任せろ」

他の奴らは空を舞った肉や野菜を摘んでいるが、エヴァは鍋を掴み、中身を空中から鍋ですくった。

こぼれた料理は一欠片もない。さすがはキティだ。素晴らしい反射神経と身体能力！

「食事中失礼〜〜ツ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！
！ いったちよやろうぜツ！」

なんだよ、うるせえ奴だな。

あつ、詠春が怒っていきなり崖の上の奴に襲いかかった。まあ、詠春は食べ物にはうるさいからな・・・

まあ、いつか。

それにしてもラカン、か。

ここで来るとはね・・・

まあ、戦闘は詠春に任せて食事続けるか。火はさっきのでダメになったから『火よ灯れ』で点け直して。

「なんじゃ？ あのバカは」

「結構強そうだな」

「あの大男、やりますよ。ちょっと前に噂になった剣闘士ですよ」

「ふーん、アタシよりは『ほんのちょっと』くらいは強いかもね」

「剣闘士ね・・・もぐもぐ・・・」

「まあ、詠春なら大丈夫だろう」

とか言っている間に、詠春のやろう、色仕掛けにかかって負けてやる・・・

「あいつ、後でオシオキだ（怒）」

そして始まるナギとラカンの戦闘。

ゼクトとアルはそれを見物するようだが、俺たちはそれほど興味ないので、三人（+人形）は食事に戻る。

エヴァは俺の隣、チャチャゼロは俺の頭、そしてアスナちゃんはまた俺の膝の上。

・

・

・

三十分後。

俺たちは食事を終えたが、戦闘はまだ続けている。

「よくやるなあ、あいつら」

「そうだな。バカのやる事はよく分からん」

「・・・ふ、あ~~~~」

「眠いのか、アスナちゃん？」

「ん・・・」

目をこすりながら小さく頷くアスナちゃん。

「そうか。ならちょっと昼寝でもするか。食後にすぐ寝るのは良くないって言うけど、昼寝くらいならいいだろ。エヴァはどうする、一緒に寝るか？」

「うむ。どうせこの戦闘もしばらく続くだろう。少し寝て時間を潰すのもいいだろう」

それから俺たちは三人でテントに入り、並んで寝転んだ。

* * *

結局、ナギとラカンの戦闘は辺りの地形を変えつつ、13時間も続いた。

戦いは引き分けに終わり、起き上がれないラカンをそのままに、動けないナギを連れて俺たちはその場を離れた。

その後も何度かラカンが襲って来たが、なんか戦ってるうちにラカんとナギが仲良くなって、いつの間にかラカンが仲間になっていた。

本当にいつの間によ・・・

ちなみに、呼び名はジャックと。

第二十三話・鍋皇帝（後書き）

大戦はこのように早送り（？）でお送りしたいと思います。

少しでも面白く見せる為に基本はソウジ達からの視線で話を進めた
いですが、それでもつまらないと感じるのでしたら、知らせて下さ
い。変える努力くらいはします。

大戦を半端な話にはしたくないですが、原作に似すぎるとつまらな
い・・・バランスが難しい・・・

第二十四話：グレートブリッジ攻防の準備（前書き）

アスナのしゃべりでいつ漢字にすれば分からない・・・

今度からは片言じゃなくさせるかな・・・

第二十四話：グレートブリッジ攻防の準備

< side : ソウジ >

「ふんっ！」

「はあ・・・」

ジャックが俺たちの仲間になってからのある日。俺は何故か襲いかかられている。

「なあ、もういいじゃないのか、ジャック？」

「冗談っ！ はああああ！！！」

また殴り掛かる筋肉達磨。

それを適当にあしらっている俺。

はあ・・・手加減って難しいんだよね・・・

ジャックって打たれ強いし・・・

どうしてこんな事になっているかと言つと、どうやらジャックは前から俺に興味があったようだけど、いつもナギとやりあってたから今まで俺と戦う機会がなかったらしい。

仕方ない、少し痛めつけるか。

「斬空掌！！！」

気を纏った手でジャックを戦う。刀有りだとやりすぎる可能性大だから今は無手だ。

「ぐぼっ！」

「紅蓮拳！ー！！」

「ぶべらー！！」

「雷鳴拳?????!!」

「ぎゃぴーーー！！！！！！」

気で出来た炎を拳に纏い、それで殴り、雷を纏った拳がそれに続く。割と本気でやったから、多分起きないだろうけど……

プスプスと煙を上げながら、白目をむいているジャックを見る。

「だから無駄だと言ったのに……」

「ソウジ……」

「おー、アスナちゃん！」

「オワッタ？」

「うん、終わったぞ！」

とてとてと近づいてくるアスナちゃんを抱き上げる。

「・・・」

そしていつものように首に捕まるアスナちゃん。

「じゃ、エヴァの所に戻るか」

「ジャックハ・・・？」

地面で伸びているジャックを見て心配そうに聞くアスナちゃん。

「ジャック？ まあ、大丈夫だろ。ジャックだし」

頑丈だからな。普通なら大怪我もいいとこだが、ジャックならあとでケロツと起き上がり、いつものように騒ぎながらご飯と一緒にするだろう。

* * *

そして数ヶ月後、ヘラス帝国は誰も予期していなかった、大規模転移魔法という戦法によって不意をつかれ、連合の巨大要塞グレートブリッジが陥落した。

その出来事を切っ掛けに、連合は後手後手に回り、帝国の侵攻を次々と許す。

そこで、このままではダメだと連合は思い、ついに俺たちを前線に

呼び戻した。

「さて、もうすぐグレートブリッジ奪還作戦が始まる訳だが、アスナをどうするかが問題だな・・・」

「うーむ・・・」

一人にさせたくないけど、さすがの俺たちでも、全員でいかないとやばそうだ。

前にもアスナちゃんを戦いに連れて行ったことがあったけど、あれはさすがにこれから起こる戦いとは比べ物にならないほどの小さな戦い。

俺がアスナちゃんを連れて来た訳だから、ここはやっぱり俺が責任を取るべきだな。

「俺が責任もってアスナちゃんを守りつつ、戦闘に参加する」

「しかし、危ないのでは？」

「まあ、戦闘だからな。ある程度の危険は仕方ないだろう、アル。だから、今回の戦いでは、俺は後衛の役に専念する。それなら危険は最小限に留められるし、今回は攻城戦。余程の事が無い限り、戦闘が後衛まで至ることはないだろう。俺も少ないながらも、砲撃魔法で援護する」

「それなら仕方が無いですね。ソウジさんの前衛での仕事に期待できないのは少々残念ですが、私たちだけでも大丈夫でしょう」

「そうだぜ、アル！ 俺たちなら心配ないぜ！」

「はっ！ その通りだ！ こんな要塞、ちよちよいのちよいだぜ！」
ナギ、ジャック。

「まあ、そう言う事じゃ。お主はしっかりお姫様を守る事を考えとればよい」

「分かった。それじゃあ、そうさせてもらおう」

「悪いな、みんな。エヴァ、俺の分まで暴れて来てくれ」

「うむ、安心しろ。ソウジの分まで働いてやるさ」
「なら心配ないな。」

「よしっ、じゃあ行くか！ 俺は連合軍の奴らに打ち合わせの為に呼ばれてるから先に行くぜ！ また後でな！」

ナギはそのまま軍議に行き、俺たちは作戦の開始までばらばらに散った。

・・・俺はアスナちゃんでも少し話をするか。

・・・

・・・

テントに戻ると、アスナちゃんはその中心で座って、ぼんやりと宙を見ていた。その顔は何も考えていないような物だった。

「アツ、ソウジ・・・」

でも、俺が入ってくると、彼女はほんの少しだけ嬉しそうな顔をして俺の名前を呼ぶ。

「よっ！ 悪いな、一人にさせちまって」

「イイ、イツモ一人ダツタカラ・・・」

おおっ・・・それは良心が痛むぜ・・・

安心しろ、アスナちゃん！ もう絶対に独りぼっちになんてしないからな！

「アスナちゃん、これから大きな戦いがあるんだけど、知ってたか？」

「・・・コクン」

「本当ならアスナちゃんはどっか離れた場所で待っていて欲しいけど、一人にさせたくないから、今回は一緒に連れてく。けど、危険だから、絶対に俺からは慣れるなよ？ って言うか、俺が肩車するから、絶対に離すな。分かった？」

「ワカッタ」

「よし・・・それじゃあ、少し時間があるからな。それまでどうしよつか？ 何かやりたい事あるか？」

時々、こうしてアスナちゃんにやりたい事があるかどうかを聞いているが、まだそういう答えはもらっていない。多分今回もだろうと思ひ、どんな遊びがいいだろうと考え始めると??

「ハナシ・・・」

「え？」

聞き間違いか？

「ソウジノハナシ、キカセテ・・・」

「俺の話？ それは旅とか冒険の話か？」

「ウン・・・」

おお、始めてだ！

よし、それじゃあとっておきの話をしてあげよう！

「ふむふむ、だったら古龍と出会い、喧嘩した時の事を話すか・・・」

「コリュウ・・・？」

「おう、あれはかなり強かったぞ！　けど、血にはかつてないほどの魔力が籠ってて美味かったなー」

「ワタシノヨリ・・・？」

まさか嫉妬か？　ついにそんな感情まで持つようになったかー。それにしても変な嫉妬の感じ方だな、どっちの血がおいしいかなんて

「アスナちゃんの方が何倍もおいしいよ」

「・・・フフ」

そんなに嬉しいんかい。

「それじゃ、聞いてみるか？」

「ウン・・・」

オツケー、任せんさい！

「あれは三百年ほど前だったかな。俺とエヴァは休暇の為にレーベンスシュルトを離れていた・・・」

* * *

その後、『紅き翼』の活躍によって連合がグレートブリッジを見事奪還した。

そしてその大活躍により、『紅き翼』の面々にファンクラブが出来たとか。なんと予想外にも俺やエヴァにもファンクラブが。問題なのはそのメンバーのほとんどが恐いもの見たさというか、俺とエヴァがたまにする殺意が籠った視線にしびれたというか・・・まあ、いわゆるMな人(?)が多い。

しばらくして、俺たちにガトウとタカミチと言う新たな仲間ができた。

それを機に俺たちは『紅き翼』の写真を撮る事に。もちろんアスナちゃんも写真に入れたよ？ 唯一写ってなかったのはカメラを構えていたタカミチだけ。けど、仲間はすれはいけないから、後でもう一度、今度はチャチャゼロにカメラを持たせ、タカミチも入った写真を撮った。

第二十四話：グレートブリッジ攻防の準備（後書き）

オリジナル神鳴流の技、雷鳴拳の登場です。まあ、それくらいならいいかな？

そしてグレートブリッジ、ガトウ達の参入、写真のイベントを一気に通過。

次回は戦争の真相に近づきます。

第二十五話：協力者？

<side:ソウジ>

そして時はさらに過ぎて行き、俺たちはガトウに招かれて今、本国首都まで来ている。

何でも、この戦争を両側から操作して意図的に長引かせている『完全なる世界』コスモエンテレケイアという存在がいるそうだ。

今からガトウは俺たちにその秘密結社に抵抗するべく、協力してくれる人物を紹介したいそうだ。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ。ウエスペルタティア王国・・・アリカ王女」

なに〜?! アリカ王女だと?!

意外だ・・・てっきりアスナちゃんの事で俺たちを恨んで、関わりたくもないかと思っていたが・・・

そんな感情よりも、国を想う気持ちの方が強いのだろう。まったく、姫の鏡だね。

「よつ、姫様。俺はナギ・スプリングフィールドだ。『紅き翼』のリーダーだ」

「ふん、よくもぬけぬけと顔を見せたものだ。貴様等が我が国にし

たことを忘れたとは言わせんぞ！」

いやいや、一応協力の為に来たんだよな？ 何でそんなに攻撃的なよ。

「まあまあ、落ち着いてくれ。今はそれより『完全なる世界』をどうするかだろ？」

「貴様は全ての元凶、ソウジ・ホウキ！！ おのれ、貴様の所為で我が国の防衛が格段と弱くなったのだぞ！！」

うっ、藪蛇だった。

「あんだ、自分の国でアスナちゃんがどう扱われていたか知ってるのか？ まるで物か何かのようだったぞ。俺たちが最初に保護した当時なんか、ただの動く人形のようなもんだったぞ？ 今もあんたはアスナちゃんの心配より、彼女がいなくなった事で国がどうなったかで俺たちを責めている。王族としてはその反応は正しいかもしれないが、人間としては反吐が出る。よくそれであいつの親族と名乗れるものだ。それとも、あんたはそもそもあいつの事は家族とは思っていないかったか？」

「きさま・・・！」

「はあ・・・すまん、みんな。ちょっと感情的になった。俺はみんなが落ち着いて話ができるように少し席を外すよ」

折角協力してくれるっていうのに、変に怒らせて、この話をこじらせたら嫌だし。

・
・
・

・

・

「ソウジ、ドウシタノ？」

ナギ達と別れ、俺はアスナちゃん、そして彼女の相手をしてきたキティとチャチャゼロの所に行った。

「いや、何でもないぞ。向こうにいる人とちょっと言い争いをしちやっただけ」

「フーン・・・」

「それでソウジ、ガトウの連れて来た協力者とは何者だったんだ？」

「ん、まあ、少し予想外な人だった。なんとウエスペルティアの王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだった」

「アリカ・・・」

その名前を聞くと、さっきまで微笑んでいたアスナちゃんの顔から表情が一気に失せる。

まだ本国を連想させるには早すぎたか・・・？

このままじゃあ、ダメだな。

「よしっ、これから皆で出掛けよう!」

「なんだ、突然に?」

だって、アスナちゃんの笑いを取り戻す為にはそれくらいしか考えつかないから・・・

取り敢えずこの場を誤摩化せれば何でもいい。

「まあ、いいじゃないか! とにかく行こうぜ! アスナちゃん、行ってみたい店とか、食べてみたいものとかあるか?」

「アイス、タバタイ・・・」

「おー、アイスか。いいね! エヴァも行くよな?」

「もちろん私も行くぞ」

「うっし、チャチャゼロも行くか?」

「あつたりまえでしょー?」

そうと決まれば、よいしょっと。

「ワッ」

手をアスナちゃんの両脇の下に置き、一気に持ち上げて肩車をさせる。

そしてチャチャゼロは俺の頭の上。始めは自分の居場所を取られて少し不満に思っていたが、頭の上で寝転べばアスナちゃんの視界を遮らないと分かり、それ以来、俺の頭上は二人の場所になっている。

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

「おー！」

「ほら、アスナちゃんも！」

「オー……」

「アスナちゃんは何味のアイスが欲しい？」

「ソー……イチゴ……」

「イチゴか。おいしそうだな！」

「ソウジハ？」

「俺はバニラかな？ エヴァは？」

「私はチョコ味にしよう」

「アタシはバナナ味がいいわ！」

「チャチャゼロ、分かっているとと思うが、俺の頭の上でのアイス、禁止な」

「えー・・・」

だって、チャチャゼロ、絶対にアイス垂らしそうだから。

アスナちゃん？ アスナちゃんは大丈夫。言わなくても分かってるからな。こういう、汚れ易いものを食べる時、彼女は肩から降りて食べる。食べ物は片手に持ち、もう一方の手は俺かエヴァが握っているのが普通だな。

うーん、夕方くらいに戻れば話は終わってるかな？

< side : アリカ >

私はずっと戦争を止めたくて、王女としての立場を使って色々動き回ったが、そのどれもが失敗に終わった。

けれど、その失敗した理由がどうも不自然で、それを調べているとガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと言うものに連絡を受けた。彼に会い、話を聞くと、この戦争が『完全なる世界』と言う秘密結社によって仕組まれていると言う驚くべき事実を知らされた。

しかし、ヴァンデンバーグは我がウェスペルタイア王国の憎き敵『紅き翼』のメンバーだと後で分かった。

私は戦争を終わらせたい。しかし、その為には敵と手を組まないといけない。

私は自分の複雑な心境を押し殺し、ついに『紅き翼』と会う事を決意した。

だが、奴らを前にしたらその怒りが押さえきれなくなり、特に『黄昏の姫御子』を誘拐した吸血鬼ソウジ・ホウキを見た時、私はつい怒鳴ってしまった。

そして続いたのは奴によって私たちの姫御子の扱いについての追及。

私も姫御子の扱いには不満があったが、いくら言っても変えてくれはなかった。だからと言って悪名高い吸血鬼に預けてもよしとはしないし、国から離れさせ、国民を危険に晒すのにも反対だ。

しかし今、窓の外にある、まるで仲の良い三人家族と言う光景を見ると、もしかして間違っていたのは私の方だったのかもしれない、と言う思いにさせる。

どこかへ出掛けるのか、姫御子はソウジ・ホウキの肩にまたがり、嬉しそうな顔を浮かべている。以前の彼女を知っている私からはそんな顔が可能だった事さえ知らなかった。

彼女のそう言う顔を見てしまうと、彼女を連れ戻す事を躊躇ってしまふ。いくらそれが国の為だとしても、彼女は今人並みの幸せを掴もうとしている。それに、この戦争を続けさせている存在がいるのなら、今更彼女を祖国に連れ戻してもウエスペルティアを守れない可能性が大きい。それならいっそ、彼女をこのまま彼らといさせた方がいいのかもしれない。

とにかく私は今、この大戦を終わらせる為に動かなければいけない。今はそれに力を注ごう。姫御子や吸血鬼たちの事はその後で考えよう。

第二十五話：協力者？（後書き）

何だか最後がとてもグダグダになってしまった。そしてアリカの葛藤を全然うまく表現できなかった・・・

次はもっと面白い話にできますように・・・

第二十六話：若白髪は遺伝なのだろうか？

<side:ソウジ>

アリカが協力を申し出てから俺たちはしばらくの間、首都で『完全なる世界』について調べている。

まあ、調べものは詠春、アル、ゼクト、ガトウにタカミチ少年に任せているが。俺やキティは目立つし、ナギやジャックはいろんな意味で隠密調査に適していない。

そう言う訳で、俺とキティ、チャチャゼロにアスナちゃんは思いがけない休暇を満喫している。

アスナちゃんの片手には先ほど屋台でエヴァに買ってもらったクレープがある。

「なんか、こうしてのんびり出来るのは久しぶりだなー」

「そうねー」

「アスナ、どうだ、そのクレープ。美味しいか？」

「ウン、アリガト、エヴァ」

「うむ、そうかそうか。それは何よりだ」

「アスナちゃん、はぐれないように手を繋ごうか」

「ん・・・」

アスナちゃんはクレープを持っていない、もう片方の手を上げ、俺がそれを握る。

そしてクレープに意識を戻すアスナちゃん。

むう、別に照れて欲しいと言う訳でもないし、自然に手を握ってくれることは嬉しく思うが、そんなに無関心だとまるで俺がクレープに負けたように感じちゃうよ。

・・・まあ、ここはアスナちゃんが食べ物などのような、俗世の物に興味が出来始めたことを喜ぶべきかな。

「さて、これからどうする？ アスナちゃんはリクエストかなんかあるか？」

「ベツニ」

「そっか。エヴァは考えがあるか？」

「ふむ、アスナの服でも買いに行くか？」

「おお、アスナの服か。それはいいアイデアだな。じゃあ、早速かわいい女の子の服が置いてある店を探してみよう」

「・・・残念だけど、それは無理だよ。彼女は僕たちと一緒に来てもらうからね」

「誰だ・・・？」

声が出た方向を見ると、そこに一人の青年が道の真中に立ってこち

らを見ていた。

服装はどこかの制服のようなブレザーにズボン。髪の毛の色は白。

目の前に立っているのは一人だけだが、回りの視線から推測すればあと四人の仲間がいるだろう。

そしてさっきの言葉通りなら、狙いはおそらくアスナちゃん。

「僕たちが誰かなんて君たちには関係ないさ。重要なのは僕たちがそこのお姫様を迎えに来た事だけだよ」

それを聞いて、アスナちゃんが俺の手を握る力を僅かに強くする。

「アスナちゃんが狙いか・・・お前は俺たちが誰なのか知っていてそう言っているのか？」

さすがにアスナちゃんを連れて行くと言われちゃあ冷静にはいられないぜ。それは多分キティも同じだと思う。それを証拠に、彼女から押さえ切れなくなった魔力が漏れだしている。

「悪名高いデッドリー・カップルを知らない訳がないでしょう？」

「ふん、それでもアスナを連れて行くと言うのか？ 余程の自信過剰なのか、余程の身の程知らずなのか・・・」

俺たちが誰なのかを知っていてなお正面から堂々と来るとは。それを聞いてキティもその言葉に呆れを含めずにはいらなかった。

「ふふふ、伝説とは誇張されるものだよ。あなた方の実力を過小評

価するのは危険ですが、噂に踊らされ、必要以上に恐れるのも愚か
と言つもの」

「エヴァ、大丈夫だよな？」

「無論だ」

「チャチャゼロもよろしく」

「ふっふっふ、久しぶりに腕が鳴るわ」

「お前が何者かは知らんが、お前は一つの事を見落としている」

「それは何だい？」

「その伝説で云われている事がすべて事実かもしれないと言つ事だ」

うむ、その通りだね。

「まさか・・・」

「そう思つのなら試して見るがいい」

キティが自信満々にそう言つと、白髪の青年の顔に緊張が走る。

「いいのかい？ こんな町中で戦えば周りに被害が出るよ？」

「私たちがそんな事を気にすると思つか？」

知らない一般人とアスナちゃん。どっちが大切か聞かれれば、俺と

キティなら迷わずアスナちゃんと答えるだろう。

俺たちは別に殺人狂じゃないからあえて人を巻き込むような事はないけど、もしこいつがここで事を起こすと言うのなら、周りに構わずそれを全力で阻止する。

「お前達こそここで顔が割れてもいいのか、『完全なる世界』？」

「驚きだ。もうそこまで分かっているのか？」

キティの言葉に本気で驚く男。

これは多分キティの引っかけだったのだろう。『完全なる世界』にこんな奴がいる事は知らないしな。

だけど、俺たちがその組織のことを嗅ぎ回っているこのタイミングで接触してくる存在。奴らの可能性が高かった。

そして、どうやらそれは大当たりだった。

「そうだね・・・確かにまだばれるには早いね。それに、あなた方への対処の方法を少し見直さないといけないようだ・・・今日の所は引き上げるよ」

「ふん、さっさと行け」

「ふふふ、お姫様は今しばらく預けておくよ。それでは、またいずれ会おう」

「二度と来るな」

そのまま男は来た道を引き返し、周りから見えていた視線も消えると
キティとチャチャゼロが戦闘態勢を解いた。

「奴らはまた来るだろうな……」

「ああ、アスナの周辺の守りを強化すべきか？」

「うん、それも考慮に入れるべきだな」

それにしても……

「何だかさつきから向こうが騒がしくないか？ 今日ってお祭りとかあつたっけ？」

「いや、私はそんなの聞いていないが……」

「うーん、あつちつて何があつたか覚えてるか？」

「特に何もなかったと思うが……」

「まあ、いいか……取り敢えず今は拠点に戻ろう。さっきの買い物を楽しむ気もなくなつたし」

「そうだな……」

「それでいいか、アスナちゃん？」

「ウン……」

アスナちゃんの手を握り直し、それから皆と拠点に戻った。

* * *

拠点に戻って俺たちを待っていたのはどこか沈んだ様子のガトウに動揺を隠せないジャックの二人だった。

どうやらメガロメセンブリアのナンバー2、執務官のヨハンなんとかまでが『完全なる世界』の手先だと調査で分かっただけらしい。

その際に俺たちが『完全なる世界』の手のものに襲われたと報告。どうやらアスナちゃんが狙いだとも。なるべくアスナちゃんを一人にしないという事に決まり、最低一人は一緒にいるようにした。

そして翌朝、出掛けていたナギとアリカが戻り、あの昨日の騒ぎの原因があいつらだったと言う事が分かった。

なんでも、買い物途中に襲われて、その犯人のアジトを潰し回っていたのが昨日の騒ぎの真相らしい。

で、勝手にアリカを連れて暴れ回ったナギは詠春に説教された。まあ、少し迂闊だったのは確かだからな。俺たちはそれを止める事はしなかった。

そして明かされる、ナギが見つけた執務官と『完全なる世界』を結びつける証拠。

この証拠を持って帝国の皇女と会い、戦争を終わらせに行くと言う

アリカ。

その晩、ナギ、ジャック、ガトウが証拠を持ってマクギル議員に会いに行くも、それは敵の罠だった。どうやらその人はマクギル議員に化けた、先日の白髪の青年だったらしい。

それから俺たちは本格的なお尋ね者になった。連合、帝国のどちらからも狙われ始めた俺たちは辺境にある隠れ家へと逃げ、反撃を計画した。

その第一段階として、まずは襲撃され、捕われたアリカ王女とテオドラ皇女の救出をしなければいけない……

第二十六話：若白髪は遺伝なのだろうか？（後書き）

少しの変化を交えつつ、原作のイベントをさくさくと解消。

このペースならあと四、五話で大戦が終わるかな？ その後はまたオリジナルな展開に突入。

第二十七話：反撃開始（前書き）

今回は少し短いです。

第二十七話：反撃開始

< side : ソウジ >

少し調べたら、アリカ王女とテオドラ皇女が捕まっているのは『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントゥスだと言つ事が分かった。

俺たちは早速そこへ向かい、二人の救出の為に齒向かってくる敵を千切つては投げ、千切つては投げ。あつという間に二人の牢屋まで辿り着いた。

「よお、来たぜ、姫さん」

「遅いぞ、ナギ。私を暇死にさせたかったのか？」

「うっせーな。俺たちも逃げるのに忙しかったんだよ！」

「まあ、よい。さつさところから連れ出せ。いつまでもこんな辛気くさい場所にいたくはない」

ふむ、アリカは無事らしいな。もう一人の皇女は牢屋の奥か・・・

まだ子供か。アスナちゃんよりちょっと年上つてどこか？

まあ、アスナちゃんは色々複雑だな。

体の年齢は百歳以上なのに精神の方は子供未満。最近になって、ようやく見た目に追いついて来たところだ。

けど、それはアスナちゃんの事。今は捕われて心細かっただろう、

皇女を安心させないと。

「よっ、君がテオドラか？」

背を向けているテオドラ（？）に話しかける。

「むっ。そうじゃ。妾がテオ・・・ひっ！！！！！」

あれ？ 何か悲鳴を上げて退かれたぞ？

「お、おい、なんだ？ どうした？」

「ひいっ、食べられてしまっっっ！！」

食べられるっ？

「ソウジ、どうした？ 何か問題でもあったか？」

あっ、キティ。

「ひゃあああ〜！ こっちからも来たのじゃ〜〜！！ アリカ、妾を助けるのじゃ〜〜！」

「むっ、なんだいきなり？」

「あっ、エヴァ・・・俺もよくわからん。この子に声を掛けたんだけど、いきなり叫びだしたんだ」

「うっきゃああ〜」

うーむ、これは困ったな・・・

俺たちの噂がこんな風に形を現せるとは。

「あー、テオドラ。別に食べないから安心しろ」

「・・・ほんとか？」

むっ、その少しの恐怖が混じった涙目の顔、俺の微S心を刺激する。ただ、今彼女をさらに怖がらせたなら恨まれるかもしれないからなあ・・・今はそれを押さえる。

「ほんとさ」

安心させる為にはどうすればいいんだろう・・・

アスナちゃんに会わせてみれば信用するかな？

「エヴァ、アスナちゃんって近くににいるか？」

「アスナか？　すぐ外でチャチャゼロという筈だ。アスナがどうかしたのか？」

クイクイと近くに来るようにキティを招く。

「・・・いや、アスナちゃんと仲良くしている所を見せればテオドラも怖がらなくなるかな、ってね」

声を低くしてキティにひそひそと話す。

「・・・なるほどな。しかし、別にたった一人に怖がられてもいいのではないのか？ 他人に恐れられることなどいつもの事ではないか？」

「・・・まあ、そうなんだが・・・子供にこんなあからさまに怖がられるなんて嫌だろ？」

「・・・その気持ちは分からんでもないが・・・」

そう言う事だ。

「テオドラ、今すぐに信じろとは言わないけど、君に会わせたい子がいるんだ」

「・・・誰じゃ？」

「それは会ってからの楽しみと言う事で。すぐに分かるよ」

なるべく無害そうに笑ってテオドラを安心させようとし、アスナちゃんがいる場所へ歩く。

よし、躊躇いがちだが、ついて来てるみたいだな。

・・・

・・・

・

「ソウジ！」

「アスナちゃん！ 待たせたか？」

とてととアスナちゃんが走って来て、それをしゃがんで迎え、抱っこする。

「チョットダメ」

「そっか、悪かったな」

「イイ」

「アスナちゃんに会わせたい人がいるんだ」

「ダレ？」

「テオドラ、ちょっとこっちに来てくれるか？」

「・・・なんじゃ」

まだ警戒してるな。

「テオドラ、この子はアスナちゃん。仲良くしてくれるか？」

「なっ、『黄昏の姫御子』ではないか」

「テオドラ、アスナちゃんは『元』姫御子だ。アスナちゃんはこんなに可愛いんだから、そんな称号なんかじゃなくて、ちゃんと名前

で呼んでくれ」

そう言いながらアスナちゃんをぎゅっと抱きしめる。少し強かったのか、アスナちゃんが小さく声を上げたが、嫌がっていないみたいだ。ふっ、俺の調ゲラゲラky・・・俺の愛が伝わっているようで嬉しいなあ。

「む、それはすまんかった。今度からは気をつけよう。妾はテオドラじゃ。よろしく頼む、アスナ」

「ヨロシク、テオドラ」

「俺もよろしく頼むな」

「うむ・・・よろしく頼むのじゃ」

テオドラはまだ少し硬いけど、まあ、これから仲良くなればいいな。

とりあえず、もう無条件に怖がっていない事を喜ぶべきか。

* * *

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か。どんな所かと思えば・・・掘建小屋ではないか」

「何だと、このジャリ！」

む、何かジャックとテオドラが言い合いを始めた・・・

何故かジャックとテオドラは仲が悪い。いや、ある意味仲がいいか？

まあ、ジャックはバカだからなあ・・・精神年齢が近いからか？

「まあまあ、押さえて。テオドラ、ここが気に入らないなら後で俺たちの別荘に招待するから」

「別荘？ なんじゃそれは？」

「俺とエヴァの城だ」

「城じゃと？ そんな物、どこにあると言っのじゃ？」

「エヴァの魔法球の中だ。お前の実家の宮廷ほどではなくても、中々立派だぞ？」

レーベンスシユルト城は普段エヴァの魔法人形に世話をさせていて、復旧も大分前に終わっている。中での一日が外の一時間と言っ比率は原作と同じだから、魔法球に城を入れてから中では実に二千年以上経っている。その間に人形たちは城を直し、多少の改良もしている。だから、城の見栄えはかなりいいし、住み心地もテオドラが満足できるほどだと思っ。ちなみに、前にアリカを誘ってみたが、やはりというか、断れた。

「そんな物があるのか？ なら早く出さんか」

「そう急かすなって、テオドラ。すぐに見せてやるよ」

「いつじゃ、いつ出すのじゃ、ソウジ？」

「だから、すぐだって。少しくらい我慢しろ！」

「早くソウジたちの城を見たいのじゃ！」

「テオドラ、コドモ・・・プッ」

えっ、アスナちゃん？

「なっ・・・！」

おお、テオドラが驚いてる。

「フッフ」

アスナちゃん、その冷笑が怖いよ！

別に冷笑ってほどじゃなかったけど、また一つアスナちゃんに感情が芽生えた事が嬉しくてちよつと大げさに思ったかも。

俺たちがこうして後ろで騒いでいた内に、いつの間にかナギとアリカが話をして、それが終わっていた。ナギがアリカの騎士になっ
ていて、俺たちで世界を救うとかなんとか。

とにかく、これで役者が揃った。待ってるよ、新世界。ここからが
本当の『紅き翼』の伝説の始まりだ！

第二十七話：反撃開始（後書き）

ソウジがテオドラと少し仲良くなっています。まだフラグが立っていないほどじゃないですけど、その第一歩くらいでしょうか？

アリカの処刑まで二年半くらい。処刑の後は魔法世界を離れるし、テオドラもまだ子供ですし、多分淡い恋心のままソウジ達と別れることになると思います。まあ、二十年後には種族的にはまだ十代らしいので、それまでは準ヒロインでも充分ではないかと考えています。

第二十八話：原作無知の弊害

< side : ソウジ >

それから半年近く。お姫様たちの働きによって俺たちに味方する人を見つけていた。

その間に『紅き翼』の俺たちは調査の内に判明していた敵を倒している。

仲間が増えるに連れて、俺たちの拠点もあの秘密基地からもっと大きい場所に移っている。

そしてある日、最大級の一つの敵の基地の場所が分かり、俺たちはそれを潰す為、ほぼ全員で出撃することになった。防衛側の人数は数万。基地の兵器は強力。そして中には何人も敵側の要人。この基地を陥落させれば『完全なる世界』にとって大打撃を与えられる事間違い無し。

今回、留守番係になったのはお姫様二人にその護衛の者、子供のアスナちゃん、それに念の為の詠春。

「じゃあね、アスナちゃん。今回は少し大変だけど、多分数日で戻れると思う。その間は留守番しっかりね」

「ワカッタ、ソウジ。ソウジモ、ガンバッテ」

ニコッ

「ほー・・・」

はっ！？ アスナちゃんの笑顔が可愛すぎて見惚れちゃったぞ！

アスナちゃん・・・最近の成長はすごかったけど、ニコポまで使いこなすとは・・・恐ろしい子！ 今度は何をもってくるんだ！ ナデポか？！ ナデポなのか？！

いかん、いかん。ここは取り敢えず他の人との挨拶に移って落ち着くんだ、ソウジ！ 最後に一度アスナちゃんの頭を撫で、次の人、詠春に向かう。

「え、詠春、後は頼んだぞ」

「任せて下さい、宗治様」

「ソウジ、奴らを完膚なきまで潰すのじゃ！」

元気よく物騒な事を言うな、テオドラ。

まあ、俺が人に言えるほどじゃないがな。

「任せろ、テオドラ。一人残らずぶつ殺してやる」

「うむ、さすがソウジじゃ」

テオドラの元気のいい笑いが可愛い！

取り敢えず撫でてやろう。

「やめんか、ソウジ！ 妾を子供扱いするでない！」

顔を真っ赤にして、いやいやと頭を振って俺の手を振りほどくテオドラ。テオドラはこういうのが子供扱いと感じて嫌がるけど、こんな反応をしている内はまだまだ子供だな。

「ソウジ！ 何をしている！ 早く来い！」

おっと、キティが呼んでる。少し急がないと。

「じゃあ、エヴァも呼んでるし、そろそろ行くな」

「バイバイ、ソウジ」

そして俺は手を振りながら他の皆と合流し、俺たちは船に乗って戦地へ向かった。

* * *

結論から言うと、戦闘は俺たちの大・勝・利で終わった。

敵の反攻は凄まじかったが、俺とキティ、それに他の『紅き翼』の力には敵わなかった。

そう言う訳で俺たちは船の中でくつろぎつつ、意気揚々と拠点へと戻り中だ。

「今回は久々に骨のある仕事だったのう」

「最近はずっと雑魚ばっかだったから、暴れられなくて色々溜まってたしな！」

「わっはっは、その通りだぜ、ジャック！」

ナギとジャックは久しぶりに暴れられて気分がいいみたいだな。

俺は別にどうでもいいけど。それよりもやっと数日振りにアスナちゃんの顔が見られる事の方が嬉しい。

まったく、これなら俺が詠春に代わって留守番してた方がよかったぜ……

とにかくもうすぐ拠点に戻る。その時は（愛でられる）覚悟を決めるよ、アスナちゃん！

ふははははは……

「み、みなさん！ 今すぐにブリッジまで来て下さい！」

なんだ！？

パイロットがかなり焦ったような声で俺たちを呼んでる。

「おい、早く行くぞ！」

「ああ！」

何をそんなに焦っているのかは知らないけど、これは拙そうだ。

それに、この状況が気に入らない。家に帰っている途中に来る嫌な予感。レーベンスシュルトの事を想起させる。キティもその事を考えているのか、その表情は暗い。

とにかく、早くブリッジまで行かないと・・・

「どうした？ 船に問題でも出来たか？」

「ソウジ殿！ 皆さんも。いえ、船ではなく・・・」

「何だ？」

「外です」

外？

「あれは・・・」

「煙・・・？」

あれは俺たちの拠点の方角・・・

くっ、ますますレーベンスシュルトの時と似てやがる・・・

「俺は転移で先に行くぞ！」

他の人なんか待ってられない！

すぐに影を媒介にした転移魔法を発動。隣ではキティも同じように転移し始めている。

そして数秒後に俺たちは拠点のど真ん中にいた。辺りは瓦礫の山と化した拠点の建物。

「くっ……」

「誰かいないか！ アスナちゃん！ テオドラ！ 詠春！」

皆、無事でいてくれ！

「うっ……」

声？！

「ぐっ……」

こっちか！

どうやら瓦礫の下に埋もれているらしい。少し大きい破片だが問題ない。

テオドラ！

「テオドラ！ 返事しろ、テオドラ！」

「うう……ソ、ウジ、か……？」

「テオドラ！ よかった！」

血が出ているけど、命に関わるような酷い怪我はないようだ。

「他の皆は・・・?」

「分からない。近くに他の人はいたのか?」

「詠春とアスナが・・・」

二人がまだ近くにいいのか?!

「エヴァ! 詠春とアスナちゃんが近くにいるかもしれない! 探すを手伝ってくれ!」

「ああ・・・」

取り敢えずテオドラをここから出さないと。

「少し待ってる、テオドラ。すぐにこれをどかしてそこから出す」

「・・・」

「テオドラ!」

よかった、気を失っただけみたいだ。

・・・よし、こいつで最後だな。

最後の石をテオドラの上からどけてテオドラを抱き上げる。

「ソウジ! こっちに詠春がいたぞ!」

「無事なのか！」

「怪我が酷いが大丈夫だ！ 意識もある！」

「分かった！ すぐに行く！」

テオドラは・・・寝かせる場所はないし、このまま連れて行った方がいいか。

「詠春！」

「うっ、宗治様・・・」

怪我はテオドラのより酷いな・・・

「詠春、ここで何があった！」

「すみません、宗治様・・・」

「誰がやった！」

「奴らでした・・・『完全なる世界』の白髪とその従者」

あいつらが?! どうやってここが分かったんだ?

「奴らの狙いはアスナでした・・・!」

「なに？」

アスナちゃんだと!

「じゃあ、アスナちゃんは・・・」

「はい、奴らに連れて行かれました・・・」

「なんだと！ アスナが攫われたのか?!」

「それが始めからの狙いだったようです。奴らの基地の情報も囷のためにこちらにリークしたらしいです」

「囷だと・・・?」

しかし、あそこは確かに奴らの重要基地だったはず・・・

前から探していた大物も何人かいた。

あれで奴らの組織が大ダメージを受けたのは間違いない。

それがただの囷だと・・・?

「くそっ!」

「申し訳、ごさいません・・・私が、いながら・・・」

詠春・・・

「お前だけの所為じゃない。まさか奴らがこんな手に出るとは誰も思っていなかった」

確かにその通りだ。しかし、俺くらいは予想できていた筈だ!

原作の事ももう少し覚えていたら・・・！

大戦で起こった、覚えている事なんて『紅き翼』が大活躍した事くらいだ。具体的なイベントなんて覚えてないし、奴らの目的も・・・

チツ、俺のバカ！

「おい、ソウジ！ アスナの事も心配だが、すぐに詠春の治療をしないとヤバそうぞぞ！」

「くっ、そうだな」

詠春もいつの間にか気を失ってるし。不死身な所為か、俺やキティの治療魔法なんてあつてないような物だし。

焼け石に水でも、他の仲間が着くまで持たせないと！

そして、その状態で皆を待つ事数分。治療が得意な人に詠春とテオドラを任せ、俺は残りの『紅き翼』のメンバーを集めた。

・
・
・

「どうやら今回の事は全部『完全なる世界』に仕組みられた罠だった

ようだ。奴らの狙いはアスナちゃん。前から狙っていた事は知っていたが、奴らはあの基地を犠牲にまでして彼女が欲しかったらしい」
ドゴツ！　と言う音を立て、俺が振り下ろした拳がテーブルを半分に折った。

どうやら怒りで力の加減を間違えたようだ。

「姫子ちゃんが!？」

「詠春やここにいた護衛を倒せるほどの勢力で来たのですか」

「なるほど。わし等をここから離れさせる為にはあれくらいの標的が必要じゃからのう」

「しかし、あの基地やそこにいた人員を失った事で奴らもダメージが大きい筈」

「つまり、奴らはそれほど切羽詰まっていると言う事だな」

「そうだ、ガトウ。俺等はもう少しで奴らを追いつめられる」

「そうか。それじゃあ、俺たちがやる事は簡単だな！」

「そうだぜ、ナギ！　奴らの本拠地を見つけて、奴らをぶっ飛ばし、アスナの嬢ちゃんを助け出す！」

「ジャックの言う通りだ！　頼むぜ、ガトウ、アル！　奴らの居場所を割り出してくれ！」

「当たり前です」

「アスナが奴らにとってどれほど重要なのか分かったし、これで奴らの居場所もしぼれるだろう」

「そう言う訳だ、ソウジ。姫子ちゃんの事は心配するな！俺たちなら絶対に助け出せるだろ？」

「ああ」

頼もしい仲間だ。俺が怒りで我を忘れそうになっているのに、ナギが笑っていられるから俺も落ち着けられる。

「だが、奴らを見つげ次第……」

「奴らに生まれて来た事を後悔させる！」

キティが俺の言葉を終わらせ、俺と同等な怒りを感じている事を示す。

絶対に助けるからな、アスナちゃん！

* * *

それから一週間ほど後、奴らの居場所が分かった。

オスティアの『墓守人の宮殿』にいるらしい。そこでアスナちゃん

を使った『世界を無に帰す儀式』の準備が行われているようだ。

そして俺たちはアスナちゃんを救うため、世界を救うため、最終決戦の事を仲間全員に到達した。

第二十八話：原作無知の弊害（後書き）

すみません、少々強引ですが、やはりアスナが敵の手元にいないと、そもそもオスティア崩落やアリカ処刑に持って行けませんし、最終決戦に緊迫感がないですから・・・

原作との違いはアスナが長い間ソウジたちといた事で感情が生まれ、助けを待っている事ですかね。

第二十九話・最終決戦（前書き）

すみません、結構遅れちゃいました。そのかわり、というか、普段の二倍くらいの長さになっています。

第二十九話：最終決戦

< s i d e : アスナ >

サムイ・・・

ココロガ、サムイ・・・

みんな、ドコ・・・？

エヴァ・・・

ソウジ・・・

ココハイヤ・・・

タスケテ・・・

ソウジ、タスケテ。

タスケテ・・・！

* * *

< s i d e : ソウジ >

やっとか。

やっとここまで来た。

アスナちゃんを誘拐した奴らの本拠地が分かってから更に一週間ほど。

俺は一人でもすぐにアスナちゃんを助けに行きたかった。けど、ここは本拠地の名に相応しいほどの戦力が集中している。

いくら個々の力が弱くても、数の暴力と言うものがある。時間をかければ俺一人、それが『紅き翼』だけでも負けないだろう。

しかし、そんな時間をかけてしまうと、奴らがどういう手に出るかは分からない。もしかしたら準備が完璧じゃなくても礼の儀式を始めるかもしれない。それでどうなるかは分からない。失敗するかもしれないし、成功するかもしれない。縮小された規模で発動するかもしれない。最悪、自棄を起こしてアスナちゃんに危害を加えてしまいかもしれん。どっちにしても、こっちも数を揃えてから攻撃しないとリスクが大きすぎると言う事で、俺は渋々と一人で特攻するのを止めた。

俺たちは大急ぎでできるだけ多くの人に呼びかけたが、間に合ったのは前から俺たちに賛同していた人たちだけだった。

数はそう多くないが、ないよりはずっとましだ。これで俺たちはあの白髪野郎に集中できる。その上にラスボス的な奴もいたかもしれないけど、そいつも一人。白髪野郎を倒した後、アスナちゃんを探す前に立ちほだかれば倒せばいい。

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

「おう」

やっと準備が終わったか。ちっ、待たせやがって。

「あ、あの・・・」

「ああん？」

なんだ？ 俺は今苛立ってるんだ。話しかけるんじゃないやねえ！

「はっ？」

はあ？

こいつはさっき報告に来たアリアドネーの戦乙女。

そいつがどうして恍惚した表情を浮かべてこっち見てるんだよ。

「ソウジ様！」

「な、なんだ」

「セラスです！ あ、あの、私を罵倒して下さい！ お願いします
！」

えっ・・・

「私を冷たい目で蔑んで下さい！ 弱い人間と罵って下さい！」

「お、おい・・・」

「お願いします!」

「あゝつと……俺の邪魔すんじゃないやねえ、この役立た……ず?」

「もつと侮蔑を籠めて!」

えーつと……

「ふん、俺たちの足を引つ張つたら殺すぞ、非力な人間が!」

「はづゝゝゝゝん?!?!?!」

顔を真っ赤にしてセラスが体をクネクネさせながら悶え始める。

うわあ、なんだよ、こいつ……

多分こいつは俺のファンの一人だろう。ファンの中にこういう人たちがいるのは知っていたが、こつ面と向かって会うのは始めてだ。まさかこれほどだったとは……

おかげでさっきまでの怒りが一気に冷めたが。

「えつと……ナギ、そろそろ行かないとヤバいだろ?」

「あ、ああ、そうだな、ソウジ」

「ええ。姫二人にガトウたちの説得も間に合いそうにないです。私達で行くしかなさそうです」

「詠春、あまり無理するなよ？ お前の怪我はまだ完全に回復してないんだからな」

「お気遣いありがとうございます、宗治様。しかし、これは私の不甲斐なさが招いた事態。たとえこの身が朽ち果てても必ずアスナを助け出します」

「阿呆。お前が死んだらアスナちゃんが悲しむだろ？ たとえやバそつになっても、俺とエヴァが誰も死なせない。最強の名は伊達じゃない。な、エヴァ？」

「その通りだ。誰も死なせんし、アスナは助け出す。何の心配も要らん」

本当にヤバくなったら奥の手を出してもいいしな。

「よおし、野郎ども。行くぜ！！！！」

ナギの号令で俺たちが一気に飛び出す。

未だに悶えていたセラスもその声に反応し、出撃の合図を送る。

待ってる、アスナちゃん！ 今行くからな！

・
・
・

・

・

「見事・・・理不尽なまでの強さだ・・・」

「黄昏の姫御子はどこだ？ 消える前に吐け」

あれから俺たちは邪魔になる敵を全て倒し、白髪野郎にその従者も今倒し終わった。

ナギは最後まで残った白髪野郎を先ほど倒し、瀕死の奴にアスナちゃんやんの居場所を聞いている。

「フ・・・フフフ・・・まさか君はまだ僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん・・・だと？」

そう言えばまだラスボスが出て来てないな。

バシユツ！

なんだ、魔法か！？

「ナギ！！」

どっから来た！

「いかん！！ 『最強防護』！！」

ゼクトが突然奥に向かって幾重もの魔法障壁を作る。

「なんだ、このデタラメな魔力は！」

ゼクトのやっている事に気づき、俺とエヴァも障壁を作るが、この短い時間では元々防御魔法がそんなに得意じゃない俺たちのそれはほとんど意味をなさない。

「ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

あっ、ジャックの両腕が吹っ飛んだ。

せめて再生が出来る俺たちが前に出て他の皆が受けるダメージをできるだけ減らさないと！

そんな思いで皆の前に立つ俺とエヴァ。

けど、この威力だと、それも無意味だろうな……

ドガガガガガガ！！！！！！

・

・

・

魔法が消えた後に残ったのは死屍累々の俺たち。

俺は肩まで両腕がなくなり、頭も半分吹っ飛んでいる。

完全な再生までは数十分かかるだろうが、とりあえず戦っただけなら無理矢理再生させれば数分で足りるだろう。こんな時は星とのリンクで魔力がほぼ無限なのには感謝する。

「エヴァ、行けるか・・・？」

「あと数分ほどで戦える状態まで回復できるだろう」

「そうか。他の皆も無事か？」

ジャックと詠春は無事だが戦える状態じゃないな。チャチャゼロも半壊している。

アルは動けるようだが、あの傷じゃあ戦えないだろう。

「俺は行けるぜ、ソウジ」

「わしも行くぞ。他の奴らに比べて傷も浅いしの」

「アル、お前の残りの全魔力で俺の傷を直してくれ」

「しかし、そんな無茶な治癒では！」

「30分持てばいい」

「・・・分かりました」

そして文字通り、すっからかんになるまでアルはナギを治療した。

数分後、俺、エヴァ、ナギ、そしてゼクトの四人が立ち上がり、戦闘準備をする。

「用意はいいか、お前等」

「いつでもいいぞ、ナギ」

「私もだ」

「わしもじゃ」

「分かった。それじゃ行こうぜ！」

「」「おつ」「」

「待て、ナギ！ 奴はまずい！ ここは一旦退くべきだ！」

「珍しく弱気じゃねえか、ジャック。心配するな。俺たちを誰だと思っっている？ 無敵の『紅き翼』だぜ！ 負けるわけねえだろ！ じゃあな。ちよっくら片付けてすぐに戻る」

そういつてナギは俺たちを見て笑ってから、ラスボスの間へと飛ぶ。

俺たちも笑い、一度頷き合ってからナギを追う。

・・・

・・・

「ナギ。ジャックにはああ言ったが、何か作戦でもあるのか？ あれは確かに白髪野郎とは次元が違うぞ」

「作戦？ 別にねえ！」

「おいおい、ちょっとお気楽すぎるんじゃないかねえのか？」

「ま、なんとかなるだろ？ それともソウジは何か考えがあるのか？」

「俺？」

「ふむ・・・」

「一つだけ手がある。これを使えばほぼ間違いなく奴を消せるだろう」

「ソウジ、まさか『あれ』をやるのか？」

「何だ、エヴァ。ソウジの考えてる事が分かるのか？」

「しかし、問題があるんじゃない？ どこか躊躇つとるんじゃない？」

「ああ。確かに問題がある」

「何が問題なんだ？」

「詠唱が長い。そして効果が終われば俺は強制的に半日ほど戦闘不能になる」

「けどそれを使えば奴を倒せるんだろ？」

「多分な」

「だったらやれよ、ソウジ。時間稼ぎくらい俺たち三人なら簡単だぜ！ な、皆？」

「ああ」

「うむ、それくらいはやらんとな」

「分かった。じゃあ頼むぞ」

「任せろ！」

「俺が使える唯一の『魔術』。そして俺の『闇の皇帝』という名の所以。これからそれをお前たちに見せてやる」

・

・

・

少し進み、俺たちの前にはラスボス創造主ライフメイカーがたたずんでいる。そして奥にはクリスタルの中に捕われたアスナちゃん。

「アスナちゃん！」

アスナちゃんを見て俺は飛び出しそうになったけど、それをナギが止めた。

「ソウジ！ 姫子ちゃんをすぐに助け出したいのも分かるけど、まだ最大の敵が残ってるんだ！ まずは奴を倒さないと姫子ちゃんも、この世界も全て終わりだぞ！」

「ナギ・・・分かった・・・それじゃあ、時間稼ぎ、頼むぞ！」

「おう！ ソウジも何をやるのかは知らねえが、奴を倒せるんなら何でもいい！」

俺がこれから使うのは俺の固有結界。強力だが、問題はその為に必要な膨大な魔力。俺の全魔力を動員しても足りない。そこで入ってくるのが星とのリンク。そのパイプを強引に広げ、俺が使用できる魔力を一時的に限界以上までに増やす。

それで固有結界は発動するが、その反動も大きい。俺だからこそ半日寝込むだけで済んでいるが、普通の人間がやったらよくて再起不能、最悪命を失うだろう。むしろ、その可能性の方が高い。

「ソウジ、さっさと始める・・・ナギとゼクトがどれほど持ち堪えられるかは分からんからな」

「ああ、分かってる。無理するなよ、キティ」

チュッ

「わ、私の事は心配するな／＼／＼．．．私だって吸血鬼の端くれだ。これくらいでどうにかなる訳がない」

キティは一瞬、キスで真っ赤になったけど、それから直ぐに不敵な笑いを浮かべて敵に向かう。

「さて．．．やるか」

まずやらないといけないのは星とのリンクを広げること。

これって痛いんだよね．．．

けど、そうも言ってもらえないか。

ゴゴゴゴゴゴ．．．

「くっ．．．はぁ、はぁ．．．」

そろそろ、いいか。

「I am the world , and the world
is my own

(我は世界であり、世界は我)

The mountains are my limbs , an
d the seas are my eyes

(山脈は我が四肢、海は我が目)

I have given life, and taken i
t away

(幾多の命を救い、幾多の命を消した)

One thought

(ただ一つの思考)

One word for all

(ただ一つの言葉)

One act to perform

(ただ一つの行為)

My will be done, Emperor's Act
ual

(我が意を成せ??至上思想)

詠唱を終えると、世界が浸食され、黒に染まる。

けど、それは何も見えなくなるような暗闇ではなく、ただの無。

周りの建物は全部消えてなくなり、残ったのは戦闘中の五人だけ。

「な、なんだこりゃ?!」

「奇怪な魔法じゃのう・・・」

「バカな。こんな魔法はありえん!!」

「この世界では俺が神。全てが俺の思うまま。草原で戦いたいと思えば……」

闇が一気に風が走る草原に塗り変わる。

「ローマのコロッセオで剣闘士のように戦いと思ったら……」
風景がコロッセオの闘技場に変わる。

「なんだ貴様は!!」

ぷっ、創造主が動揺してるw

「おっと！ 無駄だ」

創造主がさっきのでかい魔法を撃とうとしていたが、それは俺が発動を阻止する。

「言っただろう？ ここでは俺が神だ。いくら魔法を使おうとしても無駄だぞ」

「すごいな、ソウジ！」

「そのようなバカな事がある訳がない！」

それから世界を元の無へと帰し、この戦いに終止符を打つ最後の攻撃を開始する。

「創造主とやら、お前はブラックホールと言うものを知ってるか？」

「なんだと？」

「一点に集まった質量が多すぎて、光さえも発生した重力から逃れられないと言う、自然最大の脅威だ」

「それがどうした！」

「ブラックホールに消えた物は原子まで分解されるそうだ。そこまですれば、いくら強大な存在であるお前でも死ぬしかないだろう？俺だってブラックホールに飲み込まれたらどうなるかは知らない」

「だけど、ここは俺の世界で、俺がルールだ。創造主だけを吸い込むブラックホールを作るなんて朝飯前。」

別にブラックホールじゃなくて、他のやり方があるかもしれないけど、ブラックホールほど徹底的に存在を消すものは他に知らない。

それに折角なんでもできるんだ。派手にやりたいじゃん？

「それじゃあな、創造主。もし生まれ変わるならもつとマシな存在になるように祈ってるぞ」

それから腕を振り、創造主をブラックホールの中へと吸い込ませる。

原子レベルで徐々になくなっていくのはどれほどの痛みが伴うんだろう？考えただけでぶるっとくるぜ。

「おのれ・・・だが、これで世界が救われたと思うな・・・いずれお前達にはこれ以上の絶望を感じる時が必ず来る！・・・それまでの僅かな平和を精々楽しむがいい！」

そう言い残し、創造主はついにブラックホールの中に消え去った。

創造主が消えたのを確認してからブラックホールを消して、固有結界も解除する。

「終わったか」

「意外と呆気なかったな！」

「アホか、ナギ！ 呆気なかったのはソウジという無茶な存在がいたからじゃ！ こつも簡単にブラックホールを操作できる奴がいるのがそもそもありえん！ というか、なんじゃった、あの世界を浸食した魔法は？！」

「まあ、いいじゃねえか、ゼクト！ 俺たちが勝つたんだし！」

「やつが最後に言い残した言葉が少々気になるが・・・」

奴らの目的は魔力の減少で世界が滅ぶ前に皆を安楽死させることだったらしい。だが、そんな理由で世界を滅ばせてたまるか！

人間というのはしぶとくていつも驚くような方法で生き残っている。そんな問題、はきつと乗り越えるさ。

そんな事より??

「アスナちゃん……!!」

固有結界の反動で気を失う前に助け出さないと!

「アスナちゃん、を、だせええええ!!!!」

カ一杯アスナちゃんを捕らえているクリスタルを殴る。

パキパキ、パキ……

それだけでクリスタルに無数のひびが走る。

そして???

パリーン……

ガラスの割れるような音とともにクリスタルが砕け散った。

クリスタルから解放され、アスナちゃんが落ちてくるが、それを難なくキャッチ。

「アスナちゃん!」

「ウツ……ソウジ?」

「ああ、そくだ! 俺だ!」

「ソウジ! ソウジ!」

ははっ、そんなに強く抱きつくなよ!

「大丈夫だったか？」

「ウン、ソウジガキタカラ、ダイジヨウブ！」

「泣いてるのか・・・？」

アスナちゃんにそう聞くと彼女はまるで意味が分からないような不思議そうな顔で俺を見て手を頬に当てる。

「ナミダ？ ドウシテ・・・？」

「泣って言うのは嬉しい時もあるんだよ」

「ウレシイ、トキ・・・？」

「ああ、そつだ・・・」

これで安心できるな・・・

「とにかく、もう、だい、じょうぶ、だ・・・な、にも・・・こわ・・・く・・・な・・・」

< s i d e : : エ ヴ ア >

「ソウジ？・・・ソウジ！」

アスナを抱いている間にソウジが気を失ったらしい。

「おっと」

ソウジが倒れる前にあいつを支え、取り乱しているアスナを安心させる。

「アスナ、ソウジは気を失っただけだ。心配するな」

「ソウジ、ダイジョウブ？」

このアスナの不安そうな顔・・・ソウジが助け出した当初の頃を考えたら大した進歩だ。

「大丈夫だ。少し眠ればすぐに起きるぞ」

「エヴァ・・・」

「エヴァ！ ここはヤバそうだ！ どうやら俺たちが来る前に儀式をすでに始めていたようだ！」

「もう止まらんぞ！ 早くここから離れるのじゃー！」

「取り敢えずアル達と合流しよう。どうするかはそれからだ」

「アスナは私が連れて行こう。ソウジの事を頼むぞ、ナギ」

「任せろ！」

「では急ごう。外では連合・帝国の艦隊が来とるらしいが、ここは一刻でも早く出るべきじゃ」

「ああ、行こう・・・」

第二十九話：最終決戦（後書き）

ついに出してしまいました、ソウジの固有結界。なんという厨二ですか？ 自分で書いていて少し恥ずかしかったくらいでした。

そして多分今回が最初で最後の出番です。

『闇の皇帝』云々は前に一度だけ使った時に、使われた側の生き残りが語り継いだ事から始まりました。

ゼクトも生き残りました。これからどう絡むかは分かりませんが、取り敢えず一緒に行動させるつもりです。

そしてセラス・・・すごく残念です。実は彼女、ソウジファンクラブの一桁メンバーだったり。

第三十話：オスティア崩落（前書き）

大分待たせてしまいました。すみません。
すごい難産でした・・・

そしていつの間に100万PV、15万ユニーク突破。
これからも応援よろしくお願いします！

第三十話：オステイア崩落

<side:ソウジ>
・・・んむ・・・

むっ、何か居心地いいな。俺のベッドってこんなにフカフカだったっけ？

それにぬくぬく。いい匂いもする。

丁度いい抱き枕もあるみたいだし、もうちょっと寝ていよう。

そうと決まれば、この柔らかい物体を抱き寄せて・・・

「アッ・・・」

何か聞こえた気がするが、まあいいか。

「おやすみ・・・」

「な・に・が・おやすみだ、ばかもの！」

ボカ！

「いつて~~~~~！　なんだよも〜！　せつかく気持ちよく眠ってたのに・・・」

「眠っている場合か！　まったく、アスナを助けた途端気を失いおつて。あれからずっとアスナが心配していたぞ？」

キティ・・・？

寝ぼけ顔を声の方に向けると拳をぶるぶる震わせてキティが立っていた。

つて、そう言えば？？

「アスナちゃん・・・」

「ナニ、ソウジ？」

あれ、アスナちゃんの声？　というか、下から・・・？

今度は下の方に目を向けるとこっちを見上げるアスナちゃんと視線が合う。

同じベッドで寝ていたらしい。そして彼女の胸の回りには俺の両腕なるほど、アスナちゃんが抱き枕だったのか。

道理で気持ちいいわけだ。

「ソウジ、ダイジョウブ？」

随分と心配させていたみたいだな。顔に泣いたあとがある。

「大丈夫だ。傷は元々すぐに再生したし、反動で少し寝てたけど、今はもう全然なんともないぞ」

「ヨカッタ」

「見つめ合ってないで、さっさと起きろ！」

「そんなに怒鳴るなよ、エヴァ。なんだったら、お前も一緒に寝てもいいんだぞ？」

「はあ・・・お前が気を失った後どうなったのか気にならないのか？」

「んー、べつにー・・・俺たちが勝ったんだろ？ それで充分じゃない。そんな事よりもアスナちゃんを無事に助け出せた事の方が嬉しい」

ぎゅっ、とアスナちゃんを抱きしめる。

「んー・・・」

抱きしめられたアスナちゃんが気持ち良さそうに目を細めている。

やっぱりかわいいな！ キティにもこんな時代があったなあ・・・

懐かしい・・・

別に今のキティに不満がある訳じゃないし、変わって欲しい訳でもないが、時々こういう癒しも欲しくなる。

「やれやれ・・・」

ギシッ

なんだ。結局キティもベッドに座ってるじゃん。

そして愛おしそうに俺の頭を撫で始める。

うーん、これも気持ちいいけど何か足りないなあ……

あっ、分かった。

「エヴァー、ひざまくらー」

「はあ？ 仕方がないな……ほら」

ちよつと呆れた声をしてから、少し身じろぎしてパンパン、と自分の膝を叩くキティ。

やりー！

ダメもとで頼んでみたけど、なんと、してくれるみたいだ。

ここにアスナちゃんしかいないからかな？

まあ、どうでもいいか。今はキティの柔らかい膝を堪能しよ。

「うーん……スリスリ……」

「や、やめんか、バカ！／＼／」

「やだー」

「ええい、子供のように駄々をこねるんじゃない！」

「えー」

「うるさい！」

「ソージー……」

クイクイ

「なんだ、アスナちゃん？」

「ン……ナンデモナイ……」

俺がキティばかりと話してたから拗ねたか？

取り敢えず頭を撫でていよう。

「で、エヴァ、戦いがどうなったって？」

「あ？ うむ……お前が気を失った後、例の儀式が発動してな。どうすればいいのか考えていたらアリカとテオドラが艦隊を引き連れて来た。儀式はそいつらが封印した……その跳ね返りはすぐに来るだろうがな……」

「跳ね返りね……それから？」

「あれから五時間ほど経っているが、街は戦勝気分だ。そして勝利へ特に貢献した『紅き翼』にはこれから勲章が授与される式が開かれる。お前が起きているのなら参加させるため来たんだが、お前が

もたもたしているからもう始まったぞ」

勲章ねえ・・・

「エヴァ、もしかして参加したかったのか？」

「私がか？ 別にそんな物に興味はないが、くれると言うのならもらって損はないだろう？ それに、たった数年前まで忌み嫌われていた私達が勲章をもらうのもおもしろいではないか？」

「まあ、そうかもしれないが、式典に参加しなくても後でくれるだろ？ そんな事よりも、久しぶりに三人でのんびりしよう」

いつもはチャチャゼロもいるけど・・・って??

「そう言えばチャチャゼロはどうなった？」

「奴か・・・損傷は酷いが、数週間でなんとかなる。あんな生意気な人形なんか壊れてもよかったがな」

「エヴァ、ソナナコト、イツチャ、ダメ・・・」

「アスナ？」

「アスナちゃん、エヴァだって本当は安心してているんだ。ちょっと照れてるだけなんだよ？」

「ソウナノ、エヴァ？」

「えっ？ あっ、う、うむ。そう・・・だ・・・」

アイタタタ!!

最後は消え入りそうな声でキティが俺の言葉を肯定するが、その逆恨みで俺の頬がつねられる。

理不尽だなあ、もう・・・

けど、チャチャゼロは大丈夫か。

最後に見たときは半壊してたからな・・・

よかった、よかった。

「ナギ達は参加してるのか？」

「さあな。ナギとラカンが目立つのが好きだからな。少なくとも奴らは参加しているのだろう。他は知らん」

「ふーん・・・まあ、どっちでもいいんだけどね」

「なら聞くな」

「とにかく、俺はもう一眠りするから。まだ体が少しダルい・・・」

「はあ、分かった。アスナもこのままここにいるか？」

「ウン」

「そうか・・・それなら私も一緒に少し休もう。それでいいな、ソ

ウジ？」

「もちろん構わないよ」

けど、そうならこの膝枕は終わりか・・・まあ、また今度してもらえばいいか。

「それじゃ、おやすみ・・・」

そして俺が目を閉じ、胸の上に心地よい重みを感じながら眠ろうとしていると、横にポフン、とキティが隣で寝る音と揺れがする。

* * *

その後、俺たちが起きたのは更に数時間後。どうやら式典も終わって、街はお祭り騒ぎ。

そして、遅れて起きてきたキティと俺を待っていたのは先ほどもらい損ねた勲章の授与と、なんと長年ついていた懸賞金の取り消しだった。

俺たちは別に変わってないのにね・・・

まあ、なくなっただんならそれで困る事はないし、文句はないけどね。

それに、勲章をもらうほど『正義』の為に働いたんだからこれで俺たちを狙う自称『正義の魔法使い』たちも鳴りを潜めるだろう。

襲ってくる奴らがいなくなれば、俺たちは自分から人を襲うようなことはしないし、また賞金首になる事は多分ない。かといって、俺たちの親しい人を脅かす存在がいれば、それが例え誰でも容赦はないが。

それから一夜が明けての翌日。オステイアの崩落が始まった。アリカの咄嗟の機転で市民の犠牲は全体の数%を下回ったが、それでも助けられなかった人はいる。あの時の悔しそうなアリカの顔はしばらく忘れられない。そして残されたのは故郷を失い、行き場をなくした数百万の難民。

* * *

オステイア崩落から2ヶ月後、アリカはメガロメセンブリア元老議員によって逮捕され、色々とそれらしい罪を着せられて2年後での処刑が決定された。実際は自分達が『完全なる世界』に踊らされていた事実を塗り潰したかっただけなんだけど。

勿論、俺とキティは激昂し、すぐに元老院を潰してアリカを助けようとしたが、ナギに止められた。

「ダメだ、ソウジ」

「なんだと、ナギ？ お前ならむしろ率先して助けに行くと思っていたが」

「それでもダメだ」

「何故だ」

「あいつはそんな風に助けられたがっていない。これから二年の間、あいつも納得できるような助け方を考える。それまで待っていてくれ！」

そう言っただけに俺たちに頭を下げるナギ。その顔には自分でも今すぐ助けに行きたい衝動を必死に押さえているのが見えた。

ちっ……そんな顔を見ちゃったら何も出来ねえじゃん。

「……分かった。お前がそこまで言うんなら今回はお前の言う通りにしよう。確かに処刑まで2年の猶予がある。だが、処刑までに何も考えつかなかったらお前やアリカが何を言おうと、俺たちは動くぞ。いいな？」

「へっ……そんなときやまず俺が行くぜ。けどその前に、絶対に誰も納得する終わり方を見つけてやる！」

「そうか……だったら後はこれからどうするかを決めないといけないな」

「あいつは自分を助ける暇があれば一人でも多く助けると言った。大戦は終わったけど、小さい戦はどこでも起きている。だったらあいつを助ける時が来るまでその言葉の通り、出来るだけ多くの人を助けてみせるぜ！」

前向きだな。

いいだろう……あと二年。それまで付き合っただけでやるよ、ナギ。

第三十話：オスティア崩落（後書き）

次はアリカ救出イベント。

それで原作沿いの話は取り敢えず終わります。

その後はしばらく更新が遅くなるかと思っています。その間にオリジナル小説の方の続きを書きたいので。すみません。

第三十一話：アリカ救出！

< side : ソウジ >

結局アリカが捕まったときから2年間、俺たちは動かずにいた。

けど、別に無意味に2年を待っていた訳でもない。

大体半年くらい経った時だったか、ナギは『紅き翼』の俺たちを集め、アリカを助ける計画を打ち明けた。

「処刑まで待つて、アリカがケルベラス渓谷に飛び込んだら自分も飛び込んで助けるだあ？」

「そうだ」

「魔力も気も使えないあの場所に飛び込むと言うのですか、ナギ？」

「そうだ」

「2年も何も出来ないって言うのはつらいぞ？」

「・・・ああ。でも公的に『災厄の魔女』のアリカを死なせ、かつ生き残らせるにはこの方法しかないんだ。それでもしないと、あいつは安心できないと思うしな」

と、言うような話がされ、俺たちの方針が決まった。

* * *

処刑当日の今日。

今日の為に『紅き翼』のメンバーが勢揃いだ。まあ、勢揃いと言ってもアスナちゃん、タカミチ、それに護衛のチャチャゼロとキティは少し離れた安全な場所で事の顛末を待っているけど。

そしてナギを除いた俺たちは処刑場を囲んでいる兵士に紛れ込んでアリカが渓谷に飛び込むのを待っている。飛び込んだ後にアリカを助けてもこいつらは許さないかもしれないから俺たちは保険でここにいる。

それで今、何が起きているかと言うと、何か偉そうなおっさんがアリカの罪状を読み上げている。

(かあゝ・・・早く終わってくれないかな・・・)

この全身鎧ってかなり暑いんだよ・・・

あつ、アリカが処刑台の上に歩かされている・・・いよいよか？

一歩一歩ゆつくりと魔物がうごめく渓谷の上まで歩くアリカ。下からは魔物の奇声が聞こえる。

いくらこれが作戦でも、あまり気持ちのいい光景じゃないな・・・

やがて谷底へと飛びアリカ。さっきの偉そうなおっさんが少し話すと、処刑場が終わったような空気に包まれる。

「よーっし、こんなモンだろ」

あっ、ジャック。

「撮れたか？ ちゃんと撮れたか？ よおーし、御苦労！」

「やれやれ・・・おい、ジャック、まだ少しタイミングが早いだろ・・・」

「だってよー、ソウジ、この鎧って蒸し暑いし、ずっと突っ立ってただけで暇だったんだよ」

「だからって計画より早く行動するな！ 失敗したらどうする！」

「ああん？ そんなときゃ、そんなときだ」

「お、お前達は・・・！ ジャック・ラカン！ ソウジ・ホウキ！」

「宗治様の言う通りだ、ジャック！ どうしてお前はこんなにも協調性がないんだ！」

「近衛詠春！」

「そんなことより、早く録画を止めるべきじゃろっ？」

「フィリウス・ゼクト！」

皆、思う所があるのか、それぞれ言葉を発しながら姿を現す。

「そうですね」

「それなら俺が今やっといたから心配はいらん」

「アルビレオ・イマ！・・・ガ、ガトウ！・・・馬鹿な！ 何故『紅き翼』がここにいるのだ？！ それでは、まさか谷底の女王は・・・！」

「今頃ナギの奴に助けられてんじゃないのか？」

「いかな『千の呪文の男』とはいえあの谷底から生きては・・・！」

「普通はそうだろうがな・・・」

そう、『普通』は、な。

けど、ナギって普通か？ というか、『紅き翼』で普通の人間が何人いる？

さて、谷底はどうなってるかな・・・

おゝ、結構深いな・・・どれどれ・・・

ふむふむ、流石はナギってとこか？ 無事お姫様を救ったみたいだ。あとはこの場をどう収めるかだが・・・

後ろでおっさんが何かジャックと言い争いを始めてる。

ふう・・・やっぱり戦いになる訳ね・・・

まったく、戦力の差くらい分かれよ。

ジャック辺りは大暴れできて嬉しいだろうけど、俺はどちらかと言えば面倒だけだ。

さっさと終わらせて帰りたい・・・

* * *

数時間後。

メガロメセンブリア元老院の自慢の護衛は壊滅した。

まあ、俺を含んだ『紅き翼』のメンバーは手加減していたから死人はほとんどいないと思うけど。

あと、ナギがアリカとのイチヤイチャにかまけて俺たちを忘れてやがったから、ジャックなどは治まりどころが見つからず、少しやりすぎた。

今はそれも終わり、俺たちはアリカとともに秘密基地に戻っている。

「いやー、わりい、わりい。別にわざとお前等の事を忘れてた訳じゃねえんだ」

その顔は全然反省してないな。別に期待していた訳じゃないけど。

「で、お前たち二人は結婚することになったと・・・」

「まあな！」

「う、うむ／＼」

「はっ！ やっぱりこうなったか！ 俺は最初からこうなると思ってたぜ！」

「おめでとつございます、ナギ」

ジャックとアルが結婚の話を聞いてそれぞれの反応を返す。

「その後はどうするのじゃ？」

「そうだな、・・・アリカと前に約束してた京都にでも行くか」

京都か。

京都はおるか、旧世界だって何年も行っていないな。ちよつどいいかもしれない。

「そうか。だったら俺たちも行くのかな。どうだ、エヴァ？ 久しぶりに日本に行くか？」

「ああ。久しぶりに本場の茶や料理を味わうのもいいだろう」

「私も家に帰らないといけないから一緒に行こう」

詠春も一緒か。

「そう言えば、詠春。嫁との関係は良好なのか？」

「はい、おかげさまで以前のしこりはほとんどなくなりました」

終戦から二年の間、詠春は実家と『紅き翼』の時間を半々と分けていた。

詠春はその間にどうやら嫁とは仲直り（最初から仲違いをしていた訳じゃないけど）して新婚気分を味わっていたらしい。アリカの事があったから、ほろ苦い新婚生活だったけど。

「それはよかったな。子はできそうか？」

「あはは、まだまだですよ。あと数年は夫婦だけで過ごすつもりです」

「そうか」

まあ、ネギが麻帆良に行くまであと18年くらいで、その時に木乃香が14歳くらいなら少なくともあと3、4年は生まれて来ないと言う計算になる。

「取り敢えず京都に行くのは詠春、ナギたち、俺とエヴァとアスナちゃんか？ 他の皆はどうする？」

「わしはまだ日本には行った事がないからのう。一緒に行こう」

ゼクトも行くのか。

他の皆も頷いている。どうやら皆で京都へ行く事になりそうだな。

賑やかになりそうだな。

特にジャックが騒ぎそうだな。

花見の宴会でもあれば楽しそうだが、桜の季節に重なるか・・・

「どうやら全員行くみたいだな。どうだ、詠春。青山の本家は俺たち全員を受け入れてくれると思うか？」

「多分大丈夫でしょう。敷地は広いですし、開いている部屋はたくさんありますし」

「なら安心だな！ それじゃあ、ナギ。いつ出発する？」

俺が色々仕切っていたけど、最後は一応、リーダーのナギに任せるのを忘れない。こういう気遣いが団体行動を円滑に勧める為には欠かせないんだよ。

「作戦通りなら俺たちがアリカを助けたのはなかった事になるはずだが、しばらくは様子を見ようと思ってる。取り敢えず一ヶ月くらいか？ ほとぼりが冷めたらどうか田舎のゲートから旧世界へ行く」

「りょーかい」

一ヶ月か。久しぶりにのんびりできるな。

そしてその後は京都か。何年か振りに神鳴流の門下生に稽古をつけるのもいいかもしれないな。

そう言えば、詠春には姪がいたっけ。名前は鶴子だったか？

青山鶴子が・・・『ラブひな』では既婚で、鬼のように強い、素子の姉だったっけ・・・

まあ、今はまだ子供の筈で、結婚はしていないと思うし、鬼のように強くはないだろう。

そうだ。鶴子強化計画を実行したら面白いかも！

神鳴流最強の剣士、ここに瀑誕！ってね。

前もかなり強かった筈だけど、更に強くなったらどうなるのかわめてみるのもいいかもしれない。

うん、そうしよう。

これで今度の京都でやる事は決まったな。

首を洗って待っているがいい、鶴子！俺が詠春以上の剣士に変えてみせる！

第三十一話：アリカ救出！（後書き）

原作で大戦が描かれているのはここまでですね。

一行はこれから京都へ向かいます。そこでリヨウメンスクナ・イベントなどがありますね。

あと、最後で行っている通り、鶴子が登場します。

大戦が終わり、切りのいい所で更新は一旦、中断します。再開は5月半ばを目処にしています。その間にリフレッシュし、創作意欲の回復を図ります。

第三十二話：京都、再び（前書き）

ふっかー！ーっ！ー！！

少し短いけど、とりあえずりハズリです。

第三十二話：京都、再び

<side：ソウジ>

ゲートを無事に通り抜き、俺たちはついに日本に着いた（思わず『私は帰ってきた！』をやりそうになったけど、ギリギリで踏み止まった）。

今は京都で、少し山奥にある青山の本家に皆で向かって歩いている。

「うーんっ！ 久しぶりの京都の空気は美味しいなあ〜！ エヴァもそう思うだろ？」

大きく背伸びしながら、俺は隣を歩いているキティにそう聞く。

「そうか？ 都会のど真ん中よりは澄んでいるかもしれないが、私は普通を感じるぞ？ まあ、古都の独特の空気を持っているのは確かだな」

「うーむ・・・エヴァは俺ほど感動してないっばいな・・・やっぱり故郷の国だから感じ方が違うのか？」

「ソウジ、ココガコキョウ？」

肩車しているアスナちゃんから質問が来る。

「ふむ・・・日本と言う意味なら確かに故郷だけど、俺は元々、東京から来たからな。正確には違う」

六百年前は室町時代の真っ直中だったから、江戸と言うべきかもし

れんが。

「チガウンダ・・・」

むっ、なんか少し落ち込んだ？　ここが俺の故郷じゃないから？

「でも、ここ最近京都に何度も来ているから、第二の故郷と言っ
てもいいかも」

「エイシユンノウウチ？」

「おー、まあな。青山さん家にはエヴァ共々結構世話になった」

「アタシもね！」

「今もそこに向かってるし・・・やっぱり少し稽古して感謝をしな
いと」

「きつと皆も喜びます、宗治様」

噂の詠春か。

「なあなあ、詠春。まだ着かねえのか？」

「もうすぐだ、ナギ。少し落ち着け！」

「なあなあ、詠春！」

「ええい、お前もか、ジャック！　少しは宗治様を見習え！」

「え〜？ でも、俺は日本人じゃねえもん」

「まあ、よいではないか、ナギ、ジャック。詠春はもうすぐじゃと言っとするし。あとちょっとすれば酒も飯も食えるんじゃない。それまでは我慢しよう」

ゼクトに宥められ、ナギとジャックは渋々と引き下がるのを後ろから見ている。

魔法世界なら人目なんて気にせず飛んで行けるけど、こっちは気がつけないと駄目だから俺たちは歩いている。どうやらナギとジャックはそれが気に入らないらしい。

ナギの方はゼクトと話した後にはアリカに話しかけられ、イチヤイチヤし始めた。

チツ、リア充め。いいもん、俺にはキティがいるもん。俺だってリア充してやる！

自然を楽しみながらゆっくり歩くのも雅みやびがあつていいのに・・・やれやれ。

とにかく、目的地はもう目と鼻の先。

とりあえず、今日は歓迎会やらで時間が取られそうだけど、明日からは神鳴流の稽古に参加しようかな。鶴子も見たいし。

あつ、稽古と言えば・・・

頭を上に向けてアスナちゃんに声をかける。

「アスナちゃんも剣術を習ってみるか？」

「ケンジュツ？」

「おう。まだ体ができていないから本格的な訓練じゃなくて基礎だけになるけど、将来大きくなった時に剣を使いたくなったら役に立つしな」

「ソウジガ、センセイ？」

「アスナちゃんがそうして欲しいなら俺が先生になってやるぞ？」

「ソウジガイイ」

「分かった。じゃあ、早速明日から始めるか」

「ウン！」

アスナちゃんが生徒か。呪いの所為で未だに成長の兆しを見せないが、魔力はあるし、咸卦法の素質もあるから剣術の基礎くらい教えるのもいいだろう。

「なんだ。アスナはソウジに剣を習うのか？ なら、私は合気道を教えるぞ？ どうだ、アスナ？ 合気道を習いたくはないか？」

「ベツニ・・・」

「なっ！！！」

特に興味がなさそうにアスナちゃんが断り、キティが言葉を失った。

「あはは、マスター、断られてやんの。馬鹿みたい！」

「な、なんだと、この駄目人形が！ ソウジの頭の上になければ捻り潰しているのに！」

「え、なに、やりたいの？ アタシは受けて立つよ？」

どうやらやる気満々のチャチャゼロ。彼女の方を見るとカマーンとキティに向けて手をクイクイと動かしてキティを挑発している。

「こらこら、二人とも。こんな所で喧嘩を始めるな。迷惑になるだろ？」

主に俺のな。

「ぐっ、しかしな・・・」

「ハイイ！ ソウジが言うのならアタシ止めるー！」

「チャチャゼロ?!」

「なあに、喧嘩早い、他人に迷惑をかけるマスター？」

「くうっ!?!」

「まあまあ、エヴァ。そう怒ってやるな。お前が何百年経ってもそうやっていつまでも面白い反応をするからチャチャゼロもやめないんだぜ」

まあ、それを分かっても変わらないキティが可愛いんだけど。

「・・・っと、そう言っている内に着いたみたいだな」

「ココ?」

道はこの先で終わりに来ていて、その向こうには青山の屋敷。

「うん。何十年振りだ?」

「ここは何年経っても変わらないな」

「そうだな、エヴァ。まあ、ここが変わっちゃったら少し寂しいな」
吸血鬼をやっていると変わらない物は貴重だからな。

「さて、感傷に浸るのもこれくらいにして中に入ろうか。詠春の親父にも挨拶しないと行けないし」

「あいつにまた稽古をつけるのか?」

「それも楽しそうだけだな、エヴァ。でも、あいつはもう爺さんなんだろ? 流石に今になっていじめたら酷くないか?」

「というか、いじめと分かってやっていたのか」

「くくく、当たり前だろ? けど、あいつもそれで強くなったし、文句はないだろ?」

「まあ、いいか。横から見ていて確かに面白かったし」

それに、鶴子と言う新しいオモチャ……じゃなくて、実験動物……でもなくて、えーっと、生徒……うん。鶴子という新しい生徒がいるし（まだ生徒じゃないが）今回は詠春の親父をいじめなくても充分楽しめるだろう。

「宗治様？ 入らないのですか？」

「あつ、悪い。すぐ行く」

キティと話している間に他の人がすでに屋敷に入ったらしい。最後に残った詠春は正門の所で遅れている俺たちを読んでいる。

「じゃ、行くか、アスナちゃん、エヴァ、チャチャゼロ」

「ウン」

「そうだな」

「あー、やっと休めるわね！ おいしいお酒があるかしら」

チャチャゼロは結局それ（酒）なのか？ 他に楽しみはないのかい。

そう聞いても、チャチャゼロから『うーん、殺戮？』見たいな答えが返って来るに違いないので、俺は軽い溜め息を吐きつつ、キティ達と屋敷の中へと移動した。

第三十二話：京都、再び（後書き）

とりあえず第二京都編の始まり、始まり。

鶴子の登場は次回から。

この下の作者の愚痴の中には微妙なネタバレがあるかもしれません。
注意して読んで下さい。

ハーレムものと謳いながら、今まではヒロインっぽいのはエヴァ唯一人！

原作キャラの多くはまだ生まれもしていないし、アリカ以外の主要キャラはいずれも子供なので仕方ないとはいえ、これはあんまりだ！それにこの時代の鶴子はまだ中学生。フラグ立ちがあっても、ハーレムにはまだ入らない。そして大人になる間にそのフラグもへし折れるかも？

しかし、安心(?)してください。原作開始までは準ハーレム要員は少なくとも5人、ハーレム入りはエヴァに加わり少なくともあと一人！

それでは、また次回まで！

第三十三話：初顔合わせ（前書き）

いつの間にか150万PV以上。

今までありがとございます。これからもよろしく！

第三十三話：初顔合わせ

<side:ソウジ>

「おえつぶ・・・」

朝起きると、目に入った光景は頭を抑えて吐き気を押し殺しているジャックの姿だった。

「どうした、ジャック？ お前が二日酔いとは珍しいな」

ほんと、ジャックが二日酔いって・・・一体どれだけ飲んだんだ？
いくらお酒が青山家持ちでタダだといつても、限度くらい知ってるよ。

「なんだよー、ソウジ。お前は大丈夫なのかあ？ たしか、お前は俺よりも飲んでいた筈なのによー」

「俺が一度でも二日酔いになったのを見た事あるか？ それが吸血鬼の体質なのか、ほろ酔いにはなっても、泥酔はしないし、翌日に残るような事は起こらないぜ」

「かあ、羨ましいぜ」

「不経済だけどな」

酒を浴びるほど飲んでやっどほろ酔いとか、金をドブに捨てているようなものだ。まあ、味を楽しむ為に飲むのもいいんだけど。

「とにかく、俺は行かないと。今日から道場の方に顔を出す事にな
ってるから、早く朝食を食べて行かないとな」

朝練には間に合わなかったけど、まあいいだろ。俺は所詮、名誉顧
問のようなもんだし。

「おー、また後でな」

さて・・・アスナちゃんも剣を習いたいって言ってたし、あいつを
起こしてご飯を食べたら道場に言ってみるか。

* * *

「おーい、おきろー。あさだぞー」

アスナちゃんの寝ている部屋（宴会は夜中まで続き、途中で眠くな
ったアスナちゃんはこの部屋で寝かせたのだ）の障子を開けながら
声をかける。

部屋の中を見ると、アスナちゃんは昨夜布団に寝かせた時と同じ格
好で寝ていた。夜中に動いた様子はなく、彼女は幸せそうな顔で寝
息を立てている。

「いつも思っているけど、子供の寝顔が無垢な天使のようなのって
アスナちゃんを見ると納得できるよな」

めちゃくちゃ可愛い。思わず撫でたくなっちゃう。というか、すで
にナデナデ状態なんだけど。

おっと、いかんいかん。早くアスナちゃんを起こしてご飯を食べに行かないと。

「アスナちゃんー。起きる時間だぞー。朝ご飯がもうできてるぞー」

「ウ・・・ン・・・」

「起きたか？」

「オハヨー、ソージ」

「おう、おはようさん。ご飯の前に顔を洗いに行こうか」

「ン・・・」

眠そうな目を擦りながら布団から出てくるアスナちゃん。

「ソージ、ダッコ」

「ははは、仕方ないな。ほら、掴まれ」

俺が腕を出すと、アスナちゃんはこっちに來て俺の首に腕を回す。

「うっし、じゃあ行くか」

「ン・・・むにゃむにゃ・・・」

おりよ、もしかしてまた寝始めた？

俺の肩辺りにあるアスナちゃんの顔を見てみると確かに目が閉じられている。まあ、洗面所に着いて冷たい水で顔を洗ったら問題なく起きるだろう。

* * *

<side: 鶴子>

昨日、詠春おじ様が仲間を連れて帰って来た。

うちもおじ様に紹介されて挨拶したんやけど、どの人も凄うて、驚いた。

中でも、伝説の神鳴流剣士と云われとる鳳姫宗治様に会えたのは嬉しかった。宗治様にしか使えないと云われとる妖刀『ひな』も見せてもらうた！ あれほど禍々しい刀は今まで見た事もなかった！ さすがは宗治様やな！

昔からお爺様に宗治様の話を何度も聞かされ、うちは宗治様に対して憧れに似た感情を持つとる。まあ、昨日の宴会での様子からしたら、お父様やおじ様ほどやないけど。

そして、なんと今日からはあの宗治様がうちの練習を見てくれるんや。朝ご飯前の練習には顔を出してへんかったけど、朝ご飯の時に聞いてみたら今からの練習には参加するって言うった。

今がちょうど中学の夏休みでよかった。宗治様達がいつまでここに
いるかは分からへんからな！。

それまでに出来るだけ宗治様に練習を見てもらわんと。

ちょうど、少し悩んだる問題もあるし、相談に乗ってもらえんやろか。

とにかく、それらは全部宗治様が来てからやな。いつ来てくれるんやろ。もう、待ち遠しいわー。

「こら、鶴子！ ちゃんと練習に集中せんか！ 折角宗治様が来とるんや！ 本家のお前が腑抜けた姿を見せてどうする！」

「はい、お父様！」

うー、怒られてもった。

けど、お父様の言う通りや！ 宗治様にはうちのだらしない姿なんか見せられん！ ちゃんと集中せんと・・・

<side:ソウジ>

「朝ご飯は美味かったか、アスナちゃん？」

道場に向かう途中、アスナちゃんに朝食の感想を聞いた。

「ウン、オイシカッタ」

「そうか、そうか。そりゃ、よかった。東京の料理よりはちょっと味が薄いけど、やっぱり和食って一番美味しいんだよなあ・・・こっ、魂に響くっていうか」

「タマシイ？」

「まだアスナちゃんには難しかったかな？」

「ヨク、ワカラナイ・・・デモ、ソウジガスキナラ、ワタシモ、イチバンスキ」

そう言つて俺に笑顔を向けるアスナちゃん。

きゅゅん。

「もう、かわいいな、アスナちゃん！」

俺はたまらず、アスナちゃんを抱き上げてほっぺをスリスリし始めた。うーん、このプニプニ感が癖になる！

「キャ・・・ムウ・・・」

アスナちゃんは驚いて声を上げたみただけど、抵抗はしない。だから、俺も少し調子に乗つて五分もそれを続けてしまった。

周りから見たらさぞ変な光景だったんだろう。ここが山奥で本当によかつた・・・

まあ、そんな事をしていたから当然道場には遅れた。だが、敢えてここで言おう。俺は後悔していない！！！！

それから少し歩いて、俺とアスナちゃんは今道場の入り口の前に立っている。

よしっ、やっぱり印象は最初が肝心だから、ここはちょっと趣向を

凝らしてみるか。

気をほぼ全てを解放して、っと・・・ふっふっふ、これだけで並みの相手なら腰を抜かすだろう。道場の薄っぺらい扉なんかあってないようなもんだし。

さあーって、中の奴らは何人立っているかな？

「たのもー！！！！」

道場破りみたいに声をかけながら、俺とアスナちゃんが道場に入る。ちなみにアスナちゃんは大丈夫。『紅き翼』と旅していたからこれくらいの気当では慣れているし、アスナちゃんは的に入ってないから。

そして中の様子は・・・

ふむふむ、ほとんど立っているな。倒れているのは明らかに初心者な人だけだし。他は突然の強い存在にビックリしつつ臨戦状態だし。特に強い視線を向けているのは一人の長い黒髪の少女。いいねー、これは。くっくっく、実にいじめがいがある。

「ソウジ・・・クロイ・・・」

えっ、アスナちゃん、分かるの？ けど、そこで怖がらないって、嬉しいなあ。

「よーっし、お前達（倒れた奴ら以外は）合格だ！」

これだけで分からないのか、たくさんの弟子の顔には混乱が浮かんでいる。

「つ・ま・り、鳳姫印、地獄の特訓に参加する許可をお前達に上げたのだ！！そしてこれは神鳴流の特別師範としての権限で合格した全員は強制参加だ！拒否は受け付けない！」

あつ、向こうで青山大和やまと、前青山当主である詠春達の親父が何かに怯えるみたいに震え始めたな。そう言えば、あいつも俺の地獄の特訓を受けたんだっけ？まだトラウマになっているのか。ふっ、さすが俺だな。

「あー、大和、お前は参加しなくてもいい。いくら俺でも、老人を労るくらいの良心がある」

俺がそう言つと、彼はほっとして、その震えも少し収まった。

それを見ていた他の弟子はかなりの実力者である大和があれほど怯える特訓とは一体どれほどの物なのかと想像し始めて俺の方を見ている。

「一応ここで言っておこう。俺の特訓はかなり厳しい。だが、その効果はあそこにいる大和が保証してくれるだろう。なお、参加は強制だが、途中で諦めて脱落するのは勝手だ。その場合、ここから出て行ってもらうがな」

「そんな！」

「横暴や！」

「そうや、そうや！」

「うるせえっ！！！！！！ 俺がいる限り、神鳴流に途中で諦めるような軟弱者はいらん！！！」

それに、俺は何も、体を壊すような無理をさせるつもりはない。各々に実力に見合った、全力で頑張り続けたらやっとできるかもしれないようなメニューをちゃんと考える。これはこいつらには言わないけど。その事に自分で気がつくのも特訓の内だからな。

「よし、じゃあ早速始めるぞ！ 俺の気当たりを凌いだ奴らは全員、この山を走って十周してから戻って来い！ まずは体力調べだ！ くれぐれも全力で走れよ？ ここに戻って余力のある奴らはまた走らせるからな。では、行け！」

俺の命令とともに道場を出て走り始める弟子達。残ったのはさっきので腰を抜かした初心者と大和、それにアスナちゃん。

それを見て、俺は大和に挨拶する為にあいつがいる道場の奥までアスナちゃんと歩く。

「おはよ、大和」

「おはよー、宗治様」

「いい弟子がたくさんいるみたいだな。結構なことだ」

「ええ、おかげさまで」

「あの中学生の少女が鶴子か？」

「そつちや」

「実力の方はどうだ？」

「あの年齢にしては強いですよ。でも、今は壁に当たったとって少し伸び悩んどるみたいや」

「はは、そう言えばお前もそんな感じだったな」

「ほほほ、そうでしたな。けれど、宗治様のおかげでそれも乗り越え、青山に相応しい剣士になれたんや。だから・・・」

「俺に鶴子を頼みたいってか？」

「その通りや。頼めんやるか？」

「いいぜ。さっきのを見れば、鍛えればかなり強くなるみたいし、将来が楽しみだ。安心して俺に任せてくれ」

「頼みます、宗治様」

大和はそう言って俺に頭を下げると、俺は頷いて了承を伝えた。

さて、皆が戻ってくるまでアスナちゃんにちょっと教え始めるか。体が成長しないから体力作りとかはできないけど、足運びやら技術的な物は教えられるから、それから始めよう。

鶴子の事も大和から直々に鍛える許可をもらったし、これからが楽しみだ。鶴子は何番目に帰ってくるかな・・・？

< side : 鶴子 >

道場で練習をしようと、突然外からすごい気が現れた。

「（な、なんや、これは?! まさか、敵!?!）」

訳も分からず、うちを含んだほとんどの弟子が扉の外に意識を向け、敵を迎え撃つ準備をした。

入って来たのは宗治様とアスナだった。

それから、混乱が収まらない内にこちらは何か合格し、山を走らされ始めた。

うちは体力に自信がある方やけど、まだ成長中やし、弟子の中で一番と言う訳やない。

前を走る兄弟子の背中を追いつつ、うちは宗治様の事を考えとった。

先ほどの気はものすごかった。お爺様の言う通り、いや、それ以上やった。それなら、宗治様の他の伝承も本当なんやる。やから、うちは確信した。宗治様に習い続ければ、うちは絶対に強くなると。

第三十三話：初顔合わせ（後書き）

エセ関西弁またまた登場。すみません。どこか変だったら指摘とどう直せばいいのかを言ってくれば直す努力はしますが、気にしないでいただけると嬉しいです。

第三十四話：宗治先生？

< side : ソウジ >

「よし、全員戻って来たな・・・まあ、こんな小手調べで脱落されても困るが」

鶴子はギリギリでトップ10入りか。ふむ、こんなもんだろ。

一番は鶴子の親父の青山秋人。あおやまあきひと現神鳴流のナンバーワンだし、他の上位者もそれに近い実力を持っているので、それだけでも鶴子の実力が結構高いと伺える。

「それじゃ、早速次の試験に移る。今度は俺との試合だ。武器の使用は自由。俺はこの木刀を使う。ハンデは五分やる。その間、俺は一切の攻撃をしない。もしその五分の間に一つでも攻撃を当てられたらそこで合格。だが、出来なくて五分が過ぎれば、今度は五分間俺が攻撃する。無論、お前達の攻撃は禁止しないし、思うままに反撃してくれていい。もしそんな余裕があればな。そして前もって言うが、俺の攻撃は最後意外、全て寸止めさせる。だから、俺の動きをしっかりとその目に焼き付けろ」

寸止めと言っても、痣が残る程度には当てるつもりだ。痛くなければ覚えられない事もある。そして、最後の当てて行く一撃は昏倒させる為の物。

この訓練の合格の条件は俺に攻撃を当てるか、最後まで立っていられるかのどちらか。今回は最初だから各々の実力を測る為に始めから全力で行くので合格者は出さないつもりだ。というか、この訓練では俺の全力相手に合格できないとそうさせない。

「では帰って来た順に三人ずつで来い」

弟子は30人ほどいるから、三人同時に相手しないといつまでも終わらん。それでも一時間半かかるけど。

「他の奴らは見ている。他人の戦いを見るのも為になる・・・では最初の三人、かかって来い！」

俺がそう言つと、秋人と二番目、三番目に帰って来た弟子達が前に出て木刀を構えた。

「木刀でいいのか？ 別に、刀を使つてもいいんだぞ？」

「神鳴流は得物を選ばないので、これで結構です」

俺の問いに秋人がそう返し、残りの二人も頷く。

「宗治様こそ、本気で私達三人を同時に相手にするのですか？ これでも、私達は現神鳴流の上位三人を自負しています。いくら宗治様でも少々無理があるのでは？」

「そう思つたら俺に思い知らせばいい。だが、俺はこれでも負けるつもりはない・・・他に何も無ければ、始めよう。この後にもまだまだ残っている奴らを相手しないといけないから・・・では、始め！」

<side: 鶴子>

宗治様とお父様達の試合が始まったとき、うちはお父様達の勝利を

確信しとった。

いくら宗治様が強いと言っても、お父様達は今の神鳴流の最強の剣士や。最強と言われとる相手でも、三人の内の一入なら充分の戦力なのに、それが三人。

一撃と言わず、宗治様が倒される事も考えられる。

お父様達もそんなふうと思うとったのか、始めの内は少し手を抜いとった。

けれど、試合が始まってから数分、そんな考えも吹っ飛んだ。お父様達の攻撃は擦りもせんし、宗治様の余裕顔は一度も歪んどらん。

そして五分が過ぎ、ついに宗治様が攻撃し始めた。

戦いはすぐに変化し、今まで攻撃しとったお父様達は一転、守る側になった。

三対一の筈なのに、まるで三対三かそれ以上や。

素早さや力で圧倒しとる訳やないのに、お父様達は手も足も出ない。宗治様の戦い方が上手いんや。間合いの取り方、それにフェイントや攻撃の緩急の付け方。それだけでお父様達を翻弄しとる。

宗治様に一方的に攻撃されるまま時間が過ぎて始まってから十分が経った頃、宗治様の気が一気に膨れ上がり、宗治様が一度笑うと姿が掻き消えた。一瞬の内にお父様達三人は一撃を入れられて、宗治様がまた現れると、お父様達はバタ、バタ、バタ、と三つの音を立てて倒れた。

『・・・・・・・・』

それを見ていたうちら弟子は言葉を失った。この目で見ても信じられなかった。けど、これは現実やった。

この瞬間、うちは宗治様に対して、憧れだけやのうて、尊敬と信頼も感じ始めた。宗治様に付いて行ったら、うちは必ず今よりも強くなれると確信したんや。

<side:ソウジ>

秋人達と試合して、敢えて動きを見せながら容易く勝つ事で圧倒的な実力の差を見せつけた。これで俺の指示に逆らう奴らは出ないだろう。

やっぱり力を示すには最初にその場の一番強い奴ボスをぶっ飛ばすのが効果的だな。

うむ、残りの弟子（鶴子含む）は未だに信じられないような顔をしているな。

くっくっく・・・

けど、鶴子の表情はそれだけじゃないような、他の感情も混ぜているみたいだな。まあ、あの様子なら、それは親父の仇を狙っているような感情じゃなくて、もっと好意的なものみたいだけ。

「ふむ、最初の数分を除けば悪くない動きだったな。それでもまだまだだが。ちなみに、合格できなかった者には後で俺から直々に神

鳴流の技を見舞ってやるから、そのつもりで。逃げてもいいけど、その場合、俺に捕まった時には少し本気の雷光剣を食らわせるからはつきり言っておすすめはしない・・・さて、それが分かったら次の三人、来い！」

罰ゲーム（？）の説明を終えて次のグループを呼ぶけど、誰も前に出て来ない。

「うん？ どうした？ 早く前に出て来い！ 別に次に速かった三人じゃなくてもいいぞ？ 誰も来ないか？・・・仕方がない、俺が決めてやる・・・お前達の腑抜けた根性を少し叩き直さないとけないらしいな・・・」

躊躇う弟子達を見て適当に三人を選ぼうとしようとする、手を拳げながら威勢のいい声を上げる人がいた。

「宗治様！ うちにいかせて下さい！」

「おつ、お前は青山鶴子だな。ふつ、なんだ、少しは気概のある奴がいるじゃないか。こんな可愛い少女が度胸を見せているのに、他のお前等はなんだ？ 情けないとは思わないのか？ 当たって砕けるくらいの覚悟を見せる！ なあに、俺は手加減が上手いから死にはしない。余りにも情けないようならちよつと怪我をするかもしれないが・・・」

手加減が上手いのは本当・・・剣に関しては。

魔法の事は聞かないでくれ。

「はあ、やれやれ。ここまで言っても誰も出て来ないか？ まあ、いい。今回はご褒美として、鶴子には一対一で試合をする。しっかりと勉強しとけよ、鶴子」

「はい！」

お、中々いい返事だな。元気があってよろしい。

「その間に次にやる奴らを決めるよ。もしこれが終わって、まだ決まっていなければ・・・ふっ、まあ、いい結果にならない事だけは確かだな」

意地の悪い顔を浮かべてそう言うと弟子の間に動揺が走ったが、俺の知ったこつちゃない。

それよりも目の前の鶴子だ。

とりあえず、彼女の實力を見ないと何も始まらないしな・・・

「よしっ、準備はいいか、鶴子？」

「はい、宗治様！」

「それでは試合を始める・・・いつでも来い」

木刀を構えて鶴子と向き合い、試合の開始をつげる。

「やあああ—————!!——!!——!!」

掛け声を上げながら鶴子が襲いかかる。

それを俺は難なくかわす。

「ふむ、思い切りのいい突っ込みだ」

さて、これが鶴子の先生としての最初の仕事だ。しっかりやらないとな・・・

第三十四話：宗治先生？（後書き）

とりあえず続きを投稿。

感想の返事は多分明日になります、すみません。

第三十五話：鶴子と接触

< side : ソウジ >

一日目の修行が終わり（誰も続ける状態ではないという意味で）、周りの光景は死屍累々。

まあ、それは仕方がない。直接の試合の後、身を以て知る為、皆に神鳴流の奥義を一通り浴びせたしな・・・一つ一つをギリギリ耐えられる威力にするのも忘れずに。

そして、途中で逃げた奴らには宣言通りに特大の雷光剣を当ててやった。

一つだけ付け加えると、途中で逃げた弟子は本能的な恐怖に打ち勝てず、思わず逃げただけで、まだ修行を投げ出した訳じゃない・・・よくある事だ。

これまでの経験からすれば、ほぼ全員の場合、時間の問題だが。しかし同時に、その恐怖に打ち勝ち、修行を最後までやり遂げた奴らは皆化けた。

ちなみに、鶴子は逃げた人の内にはいなかった。彼女は気丈に立ち向かい、顔色も変えず、ただ俺の技を黙って受けていた。

あの真剣な顔は何が何でも俺から奥義の全てを盗もうとしていたんだろう。あの貪欲に強さを求める姿勢は正に理想の生徒だ。

鶴子と言えば、壁に当たって伸び悩んでいると大和が言っていたな。

どれ・・・ちよつとが終わったことだし、少し話を聞いて来ようかな。

・

・

・

少し歩くと、道場の片隅で鶴子が目に濡れたタオルを置いて休んでいた。

「よう、鶴子。お疲れさま」

「そ、宗治様?!」

俺が声をかけると、鶴子は驚いて起き上がろうとするが、俺は彼女の肩を押してそれを止めた。

「まだ寝てる。あれだけ奥義をその見に受けたんだ。まだ起き上がるのも辛いだろう?」

「すみません・・・」

謝りながらまた寝る鶴子。

「気にすんなって」

「あ、あのー、宗治様？」

「なんだ？」

「うちになんか話があるん？」

戸惑いつつ、俺が何故声をかけたのかを聞く。

「話はあるぞ」

「何なん？」

「お前のじいさんからお前が少し悩んでるって聞いてな・・・お前さえよければ、ちょっと相談に乗ろうと思ったんだ」

「そうなん？！ どうして宗治様がうちの悩みを聞くんや？」

「特別な理由なんてないが、強いて言うなら、お前に興味がある」

「うちに?!」

そう言うと、何故か鶴子の顔が赤くなる。

別に恥ずかしい事言っていないよな？

「そつだ。お前は伸び悩んでいると聞いているが、それを乗り越えれば歴代の神鳴流の使い手に名を連ねるほど強くなると俺は睨んでいる。いや、むしろ俺に付いてくれば俺が過去最強にさせる。お前の悩みなんか軽く吹っ飛ばすほどの修行で強くさせる。どうだ？ 興味はあるか？」

「はいっ！　お願いします、宗治様！」

一瞬の躊躇もなく決断したか。

「ふむ、よろしい・・・なら、今から俺を呼ぶときは先生と呼べ！」

「はい、宗治先生！」

おお、笑顔が眩しい。

「この特訓は他の訓練よりもさらに厳しくなる。途中で止めたくないかもしれない・・・しかし！　やり遂げれば、必ず結果を出す！　俺が保証する。だから、絶対に諦めるな。いいな？」

「はい！」

「では、早速今晚から始めるぞ！　飯を食ったら屋敷の裏に来い。お前の為だけの特別訓練をやる」

「分かりました、宗治先生！」

・

・

・

その少し後。

俺は道場から離れて、アスナちゃんと母屋に戻る途中だ。

そして、俺は鶴子にどんな特訓を課せばいいのかを考えている。

鶴子を強くさせる事は前から計画していたが、具体的な考えなんてなかったんだよね。勢いに任せて『過去最強にさせる』とか言っちゃったし……

うーん……

……

ふーむ……

……分かん！

はあく……とりあえず、今は少し本気の組み手をやるか。さっきの奴の無制限版な。実践に勝る訓練は無しって言うくらいだから、今はこれでいいか。鶴子は土台がしっかりしているし、この所為で故障とかはしないだろう。

あとは……奥義を教えることくらいか？

「ソウジ、カンガエゴト？」

「ん？ アスナちゃん？ まあな……鶴子の先生をやることになったんだが、どんな訓練がいいのかを考えてた」

「ツルコ？」

「ほら、いただろ？ 詠春の姪ってやつ。勿論、大きい方な。流石に二歳児を特訓させるほど俺はアホじゃない」

「フーン・・・デモ、ワタシハ？」

「アスナちゃん？」

「ケンジュツ、オシエルヤクソク」

無表情の中、どことなく拗ねているような顔のアスナちゃん。

「大丈夫、忘れてないぜ。鶴子のは夜でやるから、昼の間はアスナちゃんに教えられる。他の弟子達にも教えなきゃならないから付きつきりと言う訳にもいかないけど、その間は大和にでも習ったら？ あいつはじいさんだから、アスナちゃんはきつと孫のように可愛がるぞ」

「ウーン、ソウジガイイ」

「そうか？ だったら一人で練習するか、俺が教えるのを見てるしかないな」

「ソレデイイ」

「分かった。じゃあ、そう言う事で」

「ウン・・・」

アスナちゃんとの話が終わると俺たちは母屋に着き、部屋へと歩いた。

この後はちよつと風呂で汗を流してから晩ご飯で、その後は……
つて、そうだった。鶴子の特訓メニューを考えていたんだつた。

うーん、とりあえずはさっきのプランで行くか。しばらくして、効果がないようだったら変える方向と言う事で。

うん、そうしよう。

* * *

< s i d e : 鶴子 >

今夜からはうちと宗治先生との個人訓練。

なんや、ちよつと恥ずかしいな……

だって、二人だけやし。

うちももう14や。恋の一つや二つしてもええと思うんよ。

まあ、その相手が宗治先生というんは少し無謀かもしれへんけど。

今はまだ憧れと尊敬だけやが、二人での練習が続けば、どうなるかは分からへん。宗治先生が充分素敵な人なんかは会って話しただけで分こつたし……

それはともかく、今は今夜からの訓練の事を考えんな。

どんな事をするんかは分からへんけど、うちは負けへん！

今日の練習もきついもんやったし、すごい辛かったけど、これは全てつよーなるためやと思うたらなんとか耐えられたんや。

この後の訓練も絶対に最後までやってやる！

第三十五話：鶴子と接触（後書き）

今日から一週間ほど旅行で更新できないかもしれません。

一応ノートパソコンも持って行くし、滞在先にはネット環境があるので、書く時間自体がないかもしれませんが。

第三十六話：ハーレムのなんたるか（前書き）

なぜこうなった・・・？

第三十六話：ハーレムのなんとるか

<side: 鶴子>

宗治先生との訓練が続いて数ヶ月が経った。夏休みももう終わりや。

宗治先生の言葉通り、うちはその間に以前とは比べられんほど強くなった。

どんな訓練をしたのかは・・・聞かんとして、お願いや・・・

嫌・・・嫌や・・・暗闇の中から聞こえてくる笑い声が止まらへん！

イヤーーーーー！！

・・・はっ！

とにかく、あれは思い出すだけで体が自然と震えてくる。

山に一人だけでサバイバルさせて、奇襲してくるんや。それだけならなんとかなったかも知れんかったけど、それだけやなかった。

姿は見せんのに、笑い声だけが聞こえてくるんや。気配も消すから、どこにいるのかも分からんや！ その上、笑い声は別に襲ってくる合図でもなんでもないんや！ 狩られる小動物の気持ちはきつとあんな感じじゃ、絶対。

他には、吸血鬼の能力を使っているんな化け物と戦わされた。しかも、どれも宗治先生の分身なんやから、普通の化け物よりずっと強いんや！ もう、何回三途の川を見たんか分からん！

うー・・・あんなに恐ろしい修行の癖に結果的に強うなつとるからあんまり文句言えんのや。それが悔しい。

けど、夏休みが終わったら宗治先生との修行が終わってしまうかもしれん。うちは学校があるし、宗治先生たちが京都を離れる可能性がある。ラカンはんは最近退屈そうにしとるし、タカミチ君は麻帆良の中学に編入するようや。タカミチ君を麻帆良に送ってから、ガトウはんはマギステル・マギとしての仕事を再開するつもりのもりもや。ナギはんとアリカはんも、なんやかんやと言って新婚生活を満喫しとるようや。アルはんとゼクトはんが考えとることはうちには分からんけど、二人ともしばらくは一人になつてどこかで静かに過ごしたいと何回か言うもつた。

そうなると、まだ何も決まってる人んは宗治先生たちだけ。うちの勘やけど、彼らも多分ここには残らんのやろ。どこに行くかは分からんけど。

もし宗治先生たちが本当に出て行くんなら、うちも付いて行きたいところやが、学校のこともあるて、お父様が許さへんやろ。

ふう・・・どうしたらええんやろ・・・

色々悩みながら、うちは今日も行われる宗治先生との修行に向かった。

<side:ソウジ>

「さて、今夜も張り切って鶴子をいじめ・・・じゃなくて、修行させるか!」

例えそれが本音でも、はっきりと言葉にしてみましたら鶴子が少し可愛そうだし。

「ソウジ、今日も鶴子と修行？」

俺が部屋を出ようとしたら、部屋の障子が開いてチャチャゼロ、キティ、それにアスナちゃんが入って来た。どうやら風呂上がりのようだ。ほんのり赤いキティの肌が艶かしい。

「ああ、そうだ、チャチャゼロ」

「ねえねえ、ソウジ、アタシも行っている？ 鶴子って最近強くなっているでしょ？ きつと楽しい殺し合いができると思うんだ！」

殺し合っていて・・・確かに俺の修行は死ぬほど辛いけど、ちゃんと手加減をしているんだぞ？

けど、チャチャゼロの参加か・・・

「ふむ、面白そうだな。よしっ、チャチャゼロ、今日はお前も来い。二人で鶴子に修行をつけよう」

「やったー！」

「なあ、ソウジ・・・最近のお前は鶴子と随分仲が良さそうだな？ 先生なんか呼ばせて喜びおって・・・」

「なんだよ、エヴァ。嫉妬か？」

「ば、ばかもの！ 誰が小娘相手に嫉妬なぞ妬くものか！」

「だったらなんだ？」

いや、嫉妬だと分かってるが。

キティの反応が面白くてついつい弄っちゃうんだよね。

「なんでもない！ ふん、行くぞ、アスナ！ こんな馬鹿と駄目人形なんて置いて台所からデザートにアイスを頂こう」

あちゃ、最近、弄りすぎてたか？ それともそれほど不安だったか？

「あのな、エヴァ。鶴子はまだあ14だぞ？ お前の言った通り、まだ小娘だ。年齢的にも、精神的にも。俺が手を出す分けないだろ？」

「だったら、鶴子が成長して大人になった時に迫られたらどうする？」

「うーむ・・・それは良い質問だ。どうしようか？」

「なにー？！ まさか手を出すつもりなのか?!？」

「俺からは出さないよ？ でも、質問は『もし迫られたら？』なんだろう？ だからエヴァに聞いてんじゃん」

「ソウジ！ 私と言うものがいながらお前は堂々と不倫宣言か！」

「不倫っていうか・・・ハーレム？ うん、ハーレム！ それは永遠の男のロマン、不動のトップ！ お前を愛していない訳じゃない！ けど、もし他の魅力的な女性に好かれたら、それに応えるのが男の義務！ 皆を受け入れた上で、皆を幸せにしてみせる！」

「なら、ソウジは私が他の男性と愛し合ってもいいというのか?!」

俺の言葉が信じられないように、俺と自分を置き換えて考えてみるとキティが言う。

「勿論嫌だ！ エヴァは俺のものだ！ 他の奴に何か渡してたまるか！」

「それなら、ソウジも私の気持ちを分かれ！」

「エヴァ、確かに俺はエヴァが他の男性と愛し合うのは嫌だ、すごく悲しい。だけど、もしエヴァがそれを望むなら俺はエヴァを止めない」

「なっ・・・ソウジ、お前の気持ちはその程度だったのか？」

「勘違いするな、エヴァ。エヴァは俺にとって世界よりも大事な人だ。その愛は宇宙よりも果てしない。俺がエヴァを止めないと言ったのは、エヴァがそんなことをすることになったら、それはつまり俺がエヴァを十分に幸せにできていなかったと言う事だ。勿論そのようなことにさせない為に俺はなんでもしてエヴァの愛を勝ち取って、他の男なんていらなと言わせる自信がある！」

「つまり、私にも同じことをしろと？」

「そうだ！俺はエヴァを悲しませるようなことは絶対にしない！
ここで、ハーレムとはなんだとエヴァに聞きたい！」

「は？べつに、一人の男が何人も女性を侍らせていることだろ
う？」

「そうかもしれない。しかし、真のハーレムとは一人の男性が何人
もの女性を幸せにさせ、その内の一人も悲しませないことなのだ！
こそこそと裏で付き合っている二股、三股とは違うのだよ！そ
して、俺のハーレムの第一人であるエヴァは何よりも優先される人
なのだ！」

「なんだ。じゃあ、私が駄目と言ったら、ソウジは他の人をハーレ
ムに入れられないではないか」

「非常に残念だが、そうだ」

「私が許可する訳がないだろう？」

「そう言うのは総計じゃないのか？未来は分からないことだらけ
だ。もしアスナちゃんが大人になった時、本気の気持ちで俺のハー
レムに入りたいて言ったらどうする？ここまで大切な家族をエ
ヴァは拒絶するのか？できるのか？俺は多分出来ない」

「ワタシ・・・？」

良く分かっていない顔で自分を指すアスナちゃん。

「うっ・・・もしアスナがそうになったら、考えてやる・・・」

「だろ？ それだけでハーレムは成り立つぞ？ 大体、俺を好きになるやつがいるかは分からないのに、エヴァがそいつのハーレム入りを許せるかは分からないじゃん」

「むうー……」

まだ納得できない様子のキティ。まあ、それは仕方がない。俺がいきなりキティに『私はハーレムを作る！』と言われたら同じような反応をするだろう。今の所、キティとそんな関係になり得る男なんていないけど、未来永劫いないだろうとは言えないし、俺にできるのは精々キティに愛想を尽かされない事だけだ。

それに、俺だつてキティの他にそんな相手はいないし。これらは全部、所詮は可能性の話だ。今すぐ結論なんて出せないだろう。出しても、結局はその場面にならないとどう行動するかは分からないし。そして話が終わり、今度こそ部屋を出て行こうとしたら、外がなにやらバタバタと騒がしい事に気づいた。

とりあえず外に出て近くの人になんかどうなっているかを聞こうとしたら、向こうから鶴子が走って来た。

「宗治先生！ 大変や！」

「どうした、鶴子？ これは何事なんだ？」

「近くで封印されていた凶悪な鬼が復活したんや！ 今神鳴流の剣士を集めとるんやが、間に合うか分からへん！ せやから、うちが先生たちを呼びに来たんや！」

「分かった。他の奴ら呼んでからそこに行こう。鶴子、案内は任

せた」

なるほど、『紅き翼』に頼もつて考えた訳か。

けど、鬼か・・・実物を見ないと分からないけど、鶴子の卒業試験にちょうどいいかもな。ちょうど夏が終わったし、皆もそろそろ離れようと考えているみたいだ。それを機にアスナちゃんにこっちの世界を色々見せ回ろうとキティと話合った。

さて、他の仲間を呼びに行くか。

「そう言えば、鶴子」

「なんや?」

「その鬼って名前はあるのか?」

「リョウメンスクナノカミヤ」

第三十六話：ハーレムのなんたるか（後書き）

ソウジがいろいろと暴論を並べています。けど、やっぱりある程度の無茶を出来ないとハーレムって成り立たないですよね？

今回の話はスクナとの戦闘になる筈が何故かソウジのハーレム論になった。まあ、これでハーレム作りの土台が出来たと喜ぶべきでしょうか？

第三十七話・リョウメンスクナノカミ(前書き)

お待たせしてすみません。

感想返しは感想を見るのが少し恐いので、後日になります。

「ナギ、ちょっといいか？」

「なんだ、ソウジ？」

「暴れるのは少しだけ先に延ばしてくれないか？」

「えー、なんでー？」

ぶーぶー言うナギの横でジャックも同じような顔をしている。

「その前に鶴子にやらせてみようと思ってるんだ」

「うち?!」

「おいおい、ソウジ。鶴子の成長がすごいのは知っているが、これの相手をするのはまだ早くないか？」

「そ、そうや、宗治先生！ うちには無理や！」

「安心しろ。なにも、一人で倒せとは言っていない」

「ほっ……」

「とりあえず一人でやって、危なくなったら俺たちが介入する」

「結局一人でやるんやな……」

そう聞いてがくつと肩を落とす鶴子。

「鶴子、これはお前に課す最後の試練だ。所謂、卒業試験だな」

「卒業？」

「そつだ。夏ももう終わるし、俺たちはもうすぐここから出るつもりだ」

「そんな！ 宗治先生、行ってしまっくんか？」

「ああ。いつまでもここにいても仕方ないし、アスナちゃんに世界を見せたいしな」

「そんなこと言わずに、ずっとここにおればええのに・・・」

本気で残念そうに鶴子が言う。

「寂しいかもしれないが、これはもう決まった事だ。だから、これがお前の修行の成果を見せる最後のチャンスだと思え・・・さあ、俺が安心して旅に出られるように、お前の力をしっかりと見せてみる！」

「・・・分かった、宗治先生。うち、やるよ」

うん、それでこそ鶴子だな。

「そう言う事だ。みんなは少し待っていてくれ」

「しかたねーな」

「少しだけ待ってやる」

よしっ、ナギとジャックの了解も得たし、さっさと鶴子を行かせるか。

「じゃあ、がんばれよ、鶴子。お前ならやれると俺は信じているからな！」

「はい、宗治先生！」

そう返事をする、鶴子は刀を手に取り、スクナの方へと跳んだ。

「ほう、虚空瞬動か。いつの間に習ったんだ？」

感心したようにナギが驚く。

「少し前にな」

「ふーん・・・ちなみに、ソウジは鶴子にどれくらいの勝機があると思っっているんだ？」

「一割もないだろうな」

「そんなに少ないのにやらせたのか？」

「別に勝つ事を期待している訳じゃないしな。これは、あいつが諦めずにどれくらい戦うのかを見るのも目的の内だ」

「なるほどな・・・」

俺のその説明で納得したのか、ナギはそのまま目を鶴子とスクナの

戦いに向けた。

そして俺もそれに倣い、鶴子の戦闘に注目する。

< s i d e : 鶴子 >

先生達から離れ、今、うちの前にはリョウメンスクナノカミの巨大な体躯が佇んでいる。

「うゝ、大きい・・・それに、強そうや・・・けど、これも試練のうちや！ 宗治先生を失望させないためにも情けない姿を見せとうない！」

さあ、行くえゝ！

「まずは小手調べや！ 斬岩剣・弐の太刀！！！」

・

・

・

< s i d e : ソウジ >

鶴子とスクナの戦闘が開始してから一時間ほど。

考えていた通り、鶴子は終始スクナに押されていた。

今の鶴子は満身創痍。倒されるのも時間の問題だろう。

だが、スクナも腕が何本か切り落とされていて、無事とはほど遠い。

「ふむ、これくらいできれば合格だな。あとはどれくらい持つかが・・・この調子だと後五分も持たないな」

まあ、上出来だな。

「ナギ、ジャック。あと五分くらいで鶴子が倒されるだろうから、その後に存分に暴れていいぞ」

「暴れていいって・・・ソウジよー、あれってもうボロボロじゃん。これじゃあ鬱憤を晴らす前に絶対終わるぞ・・・」

ものすごく不満そうにジャックが言う。その横ではナギも『ウンウン』と頷いている。

はあ、仕方ない・・・

「あー、分かった。明日は別荘を貸してやるから、その中で暴れて来い」

ジャック達に別荘を貸すと必ずと言っていいほど中をめちやくちやしにしちゃうから嫌なんだけど・・・こっちの我が俣を聞いて鶴子に戦わせてもらったからなあ・・・

「おっ、そうか？ それなら我慢してやるか」

偉そうだな、ナギ・・・

なーが『我慢してやる』だよ・・・

けど、それに文句言っちゃったら俺も明日のバトルに巻き込まれそうだし、ここは何も言わないのがベストだな、うん。

「さて、そろそろか」

そんなやり取りをしている内に鶴子の動きが段々と遅くなってきた。

そして、鶴子はいよいよ不意をつかれ、無防備な状態になってしまふ。

そこに襲ってくるスクナの攻撃。

「おっと、あれは少し危ないな・・・じゃあ、俺はちよっくら弟子を助けに行くから、あとよろしくたのむわ」

「まかせろ、ソウジ！」

「そんじゃあ、いっちょ暴れてみつか！」

二人の声を背に俺は一足先に鶴子の元へと駆けて行く。気分はさながら土壇場で助けに来るヒーローってか？

<side:鶴子>

戦い始めてからどれくらい経ったんやろ・・・？

もうずっと戦つとるようや。スクナもダメージを受けとるみたいやけど、うちでは勝てないようや。

悔しい・・・！

宗治先生はうちが勝つ事を期待してない。このまま負けても、うちの事を認めてくれるやる。

・・・それでもうちは勝ちたかった！

最後に先生をびっくりさせ、ここを出てもうちの事を忘れんようにしたかった！

けれど、いくら悔しがっても、体がもう思うように動かへん・・・

「・・・はあ、はあ・・・くっ・・・きゃあ！」

スクナの一撃を喰らい、身動きが取れない空中へと打ち上げられる。

(あかん、次を受けてしもうたら、もうお終いや・・・)

それをよける為に虚空瞬動で逃げようとするが、怪我の所為で集中できず、不発に終わる。

もう駄目か・・・宗治先生、うち、よくできたかな・・・？

・・・それでええの？

(えっ・・・?)

宗治先生が最後に見る姿を負け姿にしてええの？

って、よく見たら鶴子の目の色が反転してるじゃないか。
なるほど、そう言うことだったのか。

神鳴流の剣士は興奮したり、強い感情を持つと、時々こうなる。そしてこうなると、まるでスーパー・サヤ人のように数段強くなる。これにはある程度の力、そして成長の限界に近いことが必要だから、実力を量る基準にもなっている。

どうやら、鶴子は今までこの状態になった事がなかったから、もしかして自分には実力がないのではと悩んでいたらしい。まあ、俺から言わせれば、鶴子のもともとの限界が神鳴流の剣士に比べても高いので、出会った頃は実力的に大人顔負けでもまだまだ限界から遠かったからだろう。

しかし、まさかここで覚醒するとはな……

この調子だと鶴子が一人で倒すのかもしれないな。

隣でナギとジャックが所在無さげで戦闘の続きを見ている。

「なあ、ソウジ。これって詠春のあれだよな？」

「ん、まあ、そうだな」

「……けど、これってもしかなくても詠春以上じゃねえか……？」

ナギの言う通り、今の鶴子は詠春と同等かそれ以上。

・・・副作用として興奮し、すごい戦闘狂になっているが。

「終わったな・・・」

何分もしない内に鶴子はスクナを追いつめ、最後の1撃を与えるために頭上高く飛び上がった。

そして気を集め、奥義を解き放つ。

「特大・滅殺斬魔雷光剣！！！！！！！！！！」

ふむ、魔を断つ斬魔剣と雷光剣を合わせた技か。

威力も申し分ないな。

技の光が収まると、スクナは跡形もなく消えていた。そして力尽き、地面に向かって落ちる鶴子。

「おっと」

落ちる前に鶴子をキャッチ。

さて、今の内に呪術協会の術者にスクナの最封印をさせるか。流石に神だけあり、倒しても殺していないらしい。

鶴子を見ると目を閉じてスースーと寝息を立てている。

「よくやったな、鶴子。流石は俺の弟子だ」

「せん・・・せ・・・」

ふっ、本当によくやった。

土壇場での成長もあったし、これならすぐに神鳴流一の剣士になるだろう。

安心して旅にも行けるな。

「お疲れさん」

* * *

ちなみに翌日、結局何も出番がなく、フラストレーションが溜まりに溜まったナギとジャックに連れられて俺は別荘の中で何日もぶっ通しで戦うはめになった・・・疲れたあ～～。

第三十七話：リヨウメンスクナノカミ（後書き）

えっと、ハーレムの談義についてはすみません。

ついカツとなり、ああいう話になってしまいました。

なあなあでハーレムになるのを避けたかったのですが、やっぱりエヴァを納得させるのは難しいですね。まあ、だからソウジの自分勝手な言い訳とか出来上がったのですが・・・

とにかく、時々こういう変な話があるかもしれないですが（ライフメイカーとの決戦のような）どうかこの小説を見放さずにいてください。お願いします！

それでは、次話まで。

第三十八話・取り敢えず待ってみよう(前書き)

お待たせしました。やっと京都編終了です。

第三十八話：取り敢えず待ってみよう

< side : ソウジ >

「宗治先生、ほんとうに行ってしまうん？」

スクナの事件から数日後。

鶴子が戦闘で受けた傷はとりあえず起き上がれるくらいまでに治っている。だから今日、京都を出て行くことにした俺たちを見送りに出てきている。

出て行くのは『紅き翼』のメンバーのほとんど。残るのはここが元々の実家である詠春と隠れ家で新婚気分を謳歌しているナギとアリカだけだ。アルとゼクトはどこかで隠遁するらしく、ジャックは魔法世界に戻るみたい。子供のクルトとタカミチは詠春の伝手で麻帆良の中学に編入するようだ。最後はガトウだが、あいつはしばらく魔法世界やこつちでマギステル・マギとして働くつもりらしい。

アスナちゃん、並びにエヴァ、チャチャゼロ、俺はしばらく旧世界を旅し、その後は特に決まっていけないけど、その時が来たら決めればいい。

とにかく、スクナ事件は丁度いい区切りになり、これを機に俺等は京都を離れることにした。そして、少し寂しいのか、鶴子は引き止めようとしている。

いつもはエヴァが引き止められているような感じがするから、これはちょっと新鮮だ。

しかし、鶴子には残念かもしれないが、出て行くことはもう決まっている。

「ああ。鶴子も壁を乗り越えたし、いい機会だと思ってるな」

「ずっとここに居ればええのに・・・うちは宗治先生に習うものはまだまだあるし」

すごく悲しそうな顔をする鶴子。

こりゃ、惚れられたかもな。しかし、別に馬鹿にする訳じゃないが、その気持ちもきつと憧れが混じった子供の恋なのだろう。鶴子も数年が経てばその勘違いに気づくさ。

「鶴子なら大丈夫だ。後は一人で頑張れば、最強の神鳴流剣士になるのも時間の問題だ」

鶴子がなんか不安そうだから、励ましながら頭を撫でる。

ふーむ、鶴子の髪ってサラサラしていて撫で心地がいいな。エヴァやアスナちゃんとは少し違う感じだ。

「いつ?！」

鶴子を撫で過ぎていると感じたのか、エヴァが俺の腹を抓った。

すぐにエヴァの方を睨んだけど、そこにいたのは不機嫌そうにプイツと顔を背けているエヴァだった。

むっ、不覚にも萌えてしまった。

「ううー・・・それじゃあ、うちを一緒に連れてって！」

「いや、お前、まだ学校があるだろ？ 高校を卒業しているのならともかく、今は拙いだろう」

それに、横でエヴァの視線が数段鋭くなっちゃってるし・・・

「なら、うちが高校を卒業した後、また京都に戻ってきてや！ その時こそ、うちも一緒に行く！」

「まあ、その時にまだ付いてきたいのなら連れてってやる」

「（おいつ、ソウジ！）」

エヴァが怒ったような声で俺を叱る。多分、そんなに簡単に約束をするな、とか怒ってるんだろう。

「（大丈夫だろ？ 鶴子が高校を卒業するまでは少なくとも四年。俺たちがまたここに来るのはいつになるかは分からないけど、少なくともそれ以上だろ？ 鶴子もきつとその内俺たちの事なんか忘れるか、他に興味が移るだろう。この年齢の子は移ろい易いしな）」

鶴子は俺とエヴァの会話が聞こえるはずもなく、今度は連れて行くことだけを聞き、元気な顔を見せる。

「ほんま？！ 絶対約束や、宗治先生！」

「あ、ああ・・・」

ぐっ……！ イ、イカン……罪悪感が俺の心を蝕む！

なんか騙してる様で、どうも……

けど、これも鶴子の為なんだ（と、自分に言い聞かす）！

今時、高校くらい卒業していないとすごく苦勞する！ いや、まあ、神鳴流を継ぐのなら関係ないかも知れないし、もし原作通りに結婚すれば、更に必要なさそうだけど（割と暇っぽかったし、専業主婦だったかも？）。

「とにかく、今は学業と修行に専念しろ。いつ戻ってくるかは分からないが、遅くてもお前が大学を卒業するまでは来るつもりだ」

「大学……」

それくらいしたら他の人との出会いもあるだろうし、もしかしたら本来の夫に出会うかもしれない。

あと、90年代になれば木乃香が生まれているし、刹那がいるかもしれない。

エヴァを助ける他に俺がやりたかったことの一つは刹那と木乃香の確執を無くす事だった。もう、どうしてそうなったのかはあまりよく覚えていないが、二人が五、六歳ぐらいの時に何か事件があったと思う。

何もしなくても修学旅行の時に仲直りはするけど、それでも普段の刹那はどこか硬いし、幼少のトラウマがまだ少し残っている感じがする。

その事件を防ぐついで、アスナちゃんを二人の遊び仲間になっ
てもらうのもいいかもしれない。

そしてその時、京都に戻ったら鶴子に挨拶すればいい。多分、鶴子も大人になり、俺たちに付いて行くという気持ちも消えているの
だろう。もしそれが変わらずにいれば、その時はエヴァと相談すればいい。

またの名は『取り敢えず問題を先送りにし、時間が解決してくれるのを祈ってみよう作戦』だ。

「まあ、そう言う訳だ。分かったか、鶴子？」

「分かった、先生。うち、絶対に待つとるから！」

鶴子の顔は断固として待っているようなものだが、今はこれでもいいだろう。それも仕方ない。

そして鶴子とのお別れが終わり、俺たちは他に別れる『紅き翼』のメンバーに向き直る。

「じゃあな、お前等。一緒にいたのは長い様で短かったが、中々楽しかった」

「おう、ソウジ！俺も楽しかったぜ！おめえがまたここに来たとき、ここに居るかは分からねえが、いつかまた会おう！」

と、ナギ。

「さらばだ。もし魔法世界に行く事があれば帝国の姫に私が元気だと伝えてくれないか？」

と、アリカ。というか、テオドラとアリカってそんなに仲良かったっけ？

「行くかは分からないが、行ったら伝えよう。けど、俺たちに頼むより、ガトウかジャックに頼む方が確実じゃないか？」

それもそうか、と笑いながら言うアリカ。

「ソウジ、本当にアスナを連れて行くつもりか？」

今度はガトウか。まだ子供のアスナちゃんを色々連れ回すのが心配らしい。詠春と同じくらいにアスナちゃんの世話をしていたからそれも仕方がないかもしれないが。

「別に危ない場所に行くんじゃないし、大丈夫だろう？ 戦時中に俺たちと一緒にいた時の方がよっぽど危なかったぞ」

「だが、何も、旅に連れて行く必要はないだろう？ まだ小さいし、一つの場所にいるほうがいいんじゃないか？ タカミチとクルトと一緒に麻帆良に行かせてもいいし、ここでナギとアリカと暮らしてもいい」

「いや、まだ呪いが解かれてないから、一つの場所にいたら変に思われるだろう？」

何年も子供のままだに居る子がいれば気味悪がられるじゃん？ アスナちゃんにそんな思いはさせん！

そして、俺やエヴァと離れさせられると思ったか、ふとアスナちゃんにギュッと手を握られる。心なしか、その顔も少し不安そうだ。

大丈夫だ、アスナちゃん！

そこの悪いおじさんはすぐにやっつけてやる！

「それに、本人が俺たちと行くのを望んでるんだ。お前はこのつばらな瞳を見てまだそんな事が言えるのか！！！」

絶賛手を握り中のアスナちゃんの顔をガトウに向ける。

「・・・・・・・・」

ガトウは何も言えないようだな。

ふっ、勝った。

何に勝ったかはいまいち分からんが。

ガトウの次は子供二人、それにアル、ジャックと短い別れを済ませ、最後はゼクトと話している。

「ゼクトはどこか静かな場所を見つけて、しばらく落ち着くんだったっけ？」

「そうじゃな。ここ何年かは戦争やら、『完全なる世界』やら、で色々騒がしかったからのう。数年はひっそりと暮らすつもりじゃ。

まあ、落ち着いたら誰かに連絡して居場所を伝えるから、もし何か

があった時はわしも呼ぶといい」

「そうか。魔法世界か旧世界のどっちかに住むのかを決めてるか？」

「うむ、魔法世界じゃな。こっちは都市化がかなり進んだからかう。向こうの方がわしに合う」

「じゃあ、途中まではジャケットと一緒に？」

「うむ。して、ソウジ達はどっちに行くんじゃない？」

「取り敢えずは旧世界だな。エヴァの実家があったヨーロッパでも気候に旅をするさ。それからは世界旅行にでも行く。途中で魔法世界にも立ち寄るかもしれないが、向こうじゃ顔が割れてるからなあ・
・なんか面倒くさそうな事が起こりそうであつとやだ」

「ほっほっほっ・・・ソウジとエヴァはかなりの人気じゃからのう。わしも知られとるが、お主たちほどの人気はないから安心じゃな」

なぜか勝ち誇るように胸を張るゼクト。

ちっ・・・そうやって威張れるのも今の内だ！ ファンクラブがなければ、俺が作ってやる！ そうして人気者になり、俺たちの苦勞を思い知るがいい！

そうして全員との挨拶を終え、俺たちはついに京都をあとにする。

鶴子の顔は最後まで晴れなかったのが少し残念だが、それは仕方がないか。いつかまたここに戻ってきた時に笑顔で迎えてくれることを祈ろう。

第三十八話・取り敢えず待ってみよう（後書き）

京都編、鶴子少女の巻はこれで終わり。しばらくはソウジたちだけの話になります（新キャラが出てくるかも）
次はもっと早く投稿できたらいいな？

第三十九話：アスナ・・・パネっす
(前書き)

待たせてすみませんでした。

第三十九話：アスナ・・・パネっす

< side : ソウジ >

「うっし、今日の練習を始めるか、アスナちゃん」

「うん」

京都を出、旅を始めてから数年。その間、アスナちゃんは表情豊か
とまではいかないまでも、はつきりと感情を表すようになってきた。
まだまだ大人しめだが、片言で話していた前よりは大分進歩してい
る。

旅では先ずエヴァの故郷を訪れたけど、やはり600年という時は
長く、マクダウエルが存在していた証は何も残っていなかった。エ
ヴァと出会った森も開発が進んでほとんどなくなっていた。あれは
流石にちよつと寂しかった。

ともかく、そこをしばらく観光してからは世界中を飛び回り、今は
どこかの南の島でゆつくりしてい
る。吸血鬼と南の島という組み合わせはすごく不自然な気もするが、
そこは気にしない。

ちなみに格好はアロハシャツ、バミューダショーツ、それにサング
ラス完備というもの。某ぶよ よ3の悪魔様を思い浮かべてもらえ
ば、ちよつどそんな感じだ。エヴァはちよつとセクシーなビキニタ
イプの黒い水着・・・残念な胸の所為でちよつと危なそうだ。彼女
は少し離れた所でデッキチェアにもたれ、カクテルを片手にくつろ
いでいる。そしてアスナちゃんは簡単なワンピースの水色な水着。
だが、彼女の手に握られているのは浜辺に似つかわしくない刀。

南の島で刀を構える水着姿の少女・・・それをさせている俺が言うのもなんだが、なんていうか、凄い光景だ。

それで、なんでアスナちゃんが刀を持っているのか。それには特別な理由なんてなく、ただこれからちよっと剣の稽古をするっただけだ。

「じゃあ、まずは軽く手合わせから始めよう」

「わかった」

「アスナちゃんの準備が出来たらいつでもいいぞ」

「うん・・・いく!」

開始の合図を送るとアスナちゃんが刀を振り上げてこっちに突撃する。

十メートルほどの距離をたった数歩で駆けるアスナちゃん。

中々早い。

足場の悪い砂浜でこれほどの俊敏さを見せるとはな。流石はアスナちゃんってところか？

アスナちゃんが俺に迫ると、勢いよく刀を振り下ろした。

かなり速い一撃だし、その小さな体のどこにそれほどの力が眠っているのかと聞きたいほど強い。多分、気が魔力かで強化しているん

だろう。

まあ、それでも俺にとっては脅威でもなんでもなく、アスナちゃんの攻撃を難なく受け流す。

そんな風に打ち合うこと数十合。

体も温まり、そろそろ本格的な練習に移るにはいい時間だ。

「ふう……」

アスナちゃんは一度俺から距離を取り、息を整える。

「オツケー、アスナちゃん。準備運動はこれくらいにしよう。次は奥義を混ぜた手合わせを始めよう」

「分かった」

この台詞から分かるように、アスナちゃんはもう神鳴流の奥義を使い始めている。問題（？）が一つだけあるけど……

剣を習い始めて数年で奥義を使って何の問題があるかって？

むしろ才能の塊で喜ばしいだろうって？

ふむ、どっちも尤もな指摘だ。

そしてまだ幼い体が奥義に耐えられる心配があるかもしれないが、それも違う。

アスナちゃんの問題、それは――

・左手に魔力……

・右手に気……

ポツ！

両手の力を合わせ、アスナちゃんの体が咸卦の気に包まれ、途端に彼女から感じるプレッシャーが増した。

「いくよ、ソウジ……ざんがんけん！！！！」

ザッバーン！！！！！！！！！！

再開と共にアスナちゃんは斬岩剣を撃ち、俺がそれを躲す。

アスナちゃんの斬岩剣は俺の横を過ぎ去り、海を真つ二つ。

うーむ、あれは少なくとも沖の方へ500メートルは行っているな。

いやあ、何度見ても咸卦の気を使った神鳴流の技は凄まじい。究極技巧の名は伊達じゃない。

まるで本物の雷のような雷鳴剣。俺でも受ければヤバそうな斬魔剣。これを最初に見たときは度肝を抜かれた。

エヴァ共々（。。。）ポカーン という顔になっていた。

いつの間に咸卦法をマスターしたのもだけど、それをまさか本来は
気の技であるはずの神鳴流の奥義に使うとはね・・・

それに、さつきも見た通り、威力もすごいし。

アスナちゃんは普通の、気が基の奥義も使えるけど、威力は比べ物
にもならない。

ちなみに、俺がやったらどうなるのだろう？と思い、試してみたけ
ど、そもそも咸卦法からして出来なかった。OTL

やっぱりあれだね！

究極技巧は誰にも出来るわけじゃないから究極技巧なんだね！

決してガトウに出来るんだから俺にも出来るだろうって高をくくり、
失敗して恥ずかしい思いをしたから誤摩化してるんじゃないんだよ
？　ここ、大切

えー、こほん・・・ちよつと話が逸れてしまったぜ。

とにかく、あれだ。

アスナちゃん、凄い！　咸卦法、凄い！

これでもう囚われの姫様と言う役からはごめんだね！

おめでとう！

そんな事を考えている間もアスナちゃんの攻勢は続いていて、俺は

時々反撃をしつつそれを凌いでいる。

キンツキンツ！ という刀がぶつかり合う音が何度も繰り返す。

そして離れたらすぐにでも奥義を放つアスナちゃん。

アスナちゃんの戦い方はすごく上手くなっている。すでにタカミチヤクルトでは相手にならないだろう。

しかし、この激しい戦いの中でも俺たちは一つだけ心がけている。

それはエヴァがくつろいでいる方向へと奥義を撃たないことだ。

前に一度だけ攻撃が逸れてしまい、技の余波でエヴァが飲んでいたドリンクを零させたが、あの怒りを思い出すだけで・・・まあ、俺にもアスナちゃんにもトラウマが出来てしまったと言う事だけを記しておこう。

「ひゃっかりょうらん！！！」

「おっと！ 弱・斬空閃！」

アスナちゃんの気を飛ばす技を避け、すかさず同様な技で反撃。

「きゃっ！・・・ううっ・・・」

俺の攻撃を避ける暇がなかったのか、アスナちゃんはそれを刀で受け、少し押し戻される。そして俺に恨めしそうな目を向ける。

え、なに？ 俺、反撃しちやいけなかった？ どうしてそんな風に

こっち見るの？

訓練はこのように一時間ほど続き、それが終わる頃はアスナちゃんが結構息切れをしていた。

「よしっ、今日の訓練はここまで。お疲れさま、アスナちゃん」

「ありがとう、ソウジ・・・」

「明日はどうする？ 奥義の練習をもつとするか？ それとも魔法の練習？」

「あしたは、エヴァのひ・・・」

「あっ、そういえばそうだったな」

毎日交互にというほどじゃないが、週に一、二度はエヴァがアスナちゃんを色々指導している。それは時々合気道であり、時々エヴァの系魔術。何を教えるかはその時の気分によるらしい。

だが、アスナちゃんの才能のおかげか、アスナちゃんは俺たちの教えをどんどん吸収していき、この調子なら、いつかナギをも超える可能性があるだろう。

「じゃ、明日はがんばれよ」

「がんばる」

そして訓練が終わった事をエヴァに報告しようとしてアスナちゃんの頭を一度撫でてから立ち上がると、ふと違和感を覚えた。

(あれ、アスナちゃんって頭がこんな所にあっただっけ?)

今はまだ座っているアスナちゃんの頭は膝辺りにあるが、前は絶対にそれより低かった。

「なあ、アスナちゃん・・・」

「・・・なに？」

「もしかして、体成長してない？」

「うっ？」

「おい、エヴァー！ ちょっとこっちに来てくれー」

とりあえずエヴァを呼んで聞いてみよう。

「なんだ、ソウジ？ アスナとの訓練は終わったのか？」

「それは終わったけど、ちょっとアスナちゃんを見てくれ」

「アスナをか？」

「アスナちゃん、ちょっと立ってこっちに来てくれないか？」

「うん・・・」

何が起きているのがよく分かっていないけど、俺の言葉に従って立ち上がるアスナちゃん。

「で、アスナがどうしたんだ、ソウジ？」

「ちよつとな・・・アスナちゃんって少し大きくなってない？」

「あん？ 何をバカな事を・・・ん????？」

腰より少し高いアスナちゃんを見て考え込むエヴァ。

「な？ やつぱり大きくなってるだろ？ 前はエヴァの腰より低かっただろ？」

「ふむ・・・そう言えば・・・しかし、ありえるのか？」

確かに、俺たちは何もやっていないのにアスナちゃんの呪いが解けることなどあるのか？

「けど、現に成長してるんだから、そう言つてもんだろ？」

「だがな、ソウジ・・・」

エヴァの言いたいことも分かる。原因が分からずに解決してしまうと何か後遺症があるのではと心配だ。

「まあ、いいじゃないか」

アスナちゃんを抱き寄せながらエヴァを安心させる。

「・・・？ えへへ・・・」

いきなり抱きしめられてアスナちゃんは少し狼狽したが、すぐに微笑んで俺を抱き返した。

「今はアスナちゃんが他の皆のように成長できるようになったことを喜ぼう。後はこいつの状態をよくみて、何か悪い後遺症があればそれに対処するくらいしかできないじゃない？」

もちろん、呪いの原因を探すのを止めないが、それは今までより少し優先順位が落ちるかもしれない。

「うむ・・・」

エヴァが浮かない顔で一応了解をする。

やっぱりまだ分からないのが納得できないのか。

けど、その心配もいずれは収まるだろう。

それより大事なのはアスナちゃんがいつから成長し始めたのかを解明するかだ。成長するなら公的な年齢とかを決めないといけないし・

まあ、それは後で決めたらいいか。アスナちゃんが成長している事は驚きだが、今すぐに何か影響が特にあるわけでもないし、変な顔でアスナちゃんを無駄に不安にさせなくてもいいだろう。

「とにかく、おめでとうだな、アスナちゃん」

まだ抱きついているアスナちゃんを見て言う。

「おめでとつっ？」

「はは、まだよく分かってないか。まあ、もう数年もしたらこれの価値が分かるだろ……」

「ソウジ？」

「なんだ？」

「おなかすいた……」

「ぷっ……そうか。腹が減ったか……」

アスナちゃんは体の成長なんかより腹の虫の成長が気になる頃らしい。

「だったらホテルに戻って何か食うか」

「うん」

「そう言う事だ、エヴァ。アスナちゃんが腹を空かせるからホテルに戻るぞ」

「む？ あ、ああ。分かった。だがな、ソウジ……」

「分かってるって。アスナちゃんが心配なんだろ？ それは後でゆつくりと話そう」

「むう、ソウジがそう言うなら……」

「俺がそう言ってるの。じゃ、さっさと行くぞ?」

「エヴァ?」

「ああ、ちょっと待ってる。すぐに準備する」

俺とアスナちゃんから催促を受けてエヴァが急いで荷物とかまとめにさっきの椅子に戻った。

そして数分後、エヴァは戻り、俺たちは今泊まっているホテルへと帰った。

第三十九話：アスナ・・・パネつす（後書き）

えと、いきなりアスナの呪いが解かれています。

理由は作中で明解にする予定はないので、少し裏設定の説明をば。

この作品でアスナが成長していなかったのは王国の魔法使いが定期的に成長を止める魔法をアスナに掛けていたのが原因で、それを掛け続けないと自然に解かれてしまうような物です。けれど、これなら原作の年齢に合わないのでは？ それはきつとガトウが死に、アスナの記憶が消された時、アスナの体を小さくする魔法を掛けたのでは？ という設定です。原作でもガトウの死を見せたとき、アスナが微妙に成長していたのかも？ という勝手な解釈をさせて頂いています。

そして、最後に一言。原作のネタバレになるかもなので、気をつけて下さい。

ザジ・・・まさかここで出てくるとは・・・

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：とある魔術編（前書き）

本編で少し煮詰まったので、ネタで書いたやつを公開。今のところは三つほど書いたもので、一日ずつ上げます。
ネタで書いたので、色々作風が壊れています。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ…とある魔術編

「なんだ、ここ？」

学園都市です。

「はっ?! なんだか無償に引き寄せられる匂い……」

いかん、それは孔明の罠だぞ?!

「うん? あの子は……」

何故か巫女服の女の子。

この匂いはあの子から来ているのか?

誘蛾灯に誘われるように近づくソウジ。

「そう……また私の所為で人がいなくなるのね……」

何だか悲しそうな女の子。

「なんだか知らんが、無性にお前の血が吸いたくなつた。悪く思わないでくれ」

無抵抗に首を差し出す女の子。

そして吸い付くソウジ。

「パクリ・・・チュウ・・・チュウ・・・こ、これは！」
毒に犯されるように痛む体。

「まさか吸血鬼殺しか！」

驚愕するソウジ。

しかし、流石はチートのソウジ！

その痛みも次第に引き、治まる。

「え・・・？」

今度は女の子が驚く順番。

「なぜ・・・」

「どうして俺が死なないかって？それは俺が特別だからだ！」

ご都合主義、万歳！

「うっ・・・！」

胸を押さえて崩れる女の子。

「すまん、ちょっと正気じゃなかったからお前を吸血鬼にしちまっ
た・・・テヘッ！ お前の吸血鬼殺しの血は多分負けるだろう・・・
悪いな」

変化が終わり、吸血鬼になってしまっ女の子。

「お前、行き場があるか？ 今までの立場とかあったらだろうが、吸血鬼だと色々まずいだろう。お前を吸血鬼にしちまった責任もあるし、もし当てがないなら一緒に来るか？」

「・・・コク」

「そうか。俺は鳳姫宗治って名前だ。お前は？」

「・・・姫神秋沙」

「へえ」。二人とも名字に姫って字があるな。なんだか運命を感じる？」

そしてその日、学園都市から一人の吸血鬼殺しが消えたとき。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ…とある魔術編（後書き）

ちょっと短いです。次のはもうちょっと長くなると思います。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：GS美神編（前書き）

外伝第二弾。この作品では珍しい三人称でお送りいたします。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：GS美神編

「ここは・・・京の都か？」

なんだか古くさい建物が立ち並んでいる場所に現れるソウジ。

「!!!?・・・なんだ、この巨大な力は？」

山?の方で感じるとてつもない力。

まるで上級の神か悪魔の力。

「ふーむ・・・折角だ。神の血って言うのを味わうのも一興か？」

そして無謀にもその場所に飛ぶソウジ。

まあ、余程の事が無い限り死なないし、それほどでもない？

少し飛んで、力のもとに着くソウジ。

「ひゅ〜、こりゃすごい大物だな！」

なんとその場には最上級悪魔らしき者、神族らしき者二人、下級悪魔一人、さらに気（霊力）が多そうな人間、数人。

全員、突然の乱入者をぽかーんと見ている。どう反応すればいいのか迷っているらしい。

「（ん?あのバンダナのエロそうな男・・・それにないすばでーな

姉ちゃん……どっかで見たとような……それに、あの強そうな悪魔……」

「あー……メフィストよ……本当にそんな人間のために父である私を裏切ると言うのか？」

とりあえずソウジは無視と言う方向で話を進める悪魔。相手は下級悪魔と貧乏そうな陰陽師の男。

「うるさい、くそ親父！あたしは命令通りに霊力が高い術師と愛し合っつて契約したんだ！裏切ってなんかいなかった！」

「ふむ……愛か……お前にはいらん感情だ。やはり失敗作か。仕方ない。その男を殺し、お前をまた一から作り直すでしょう……」

「(さてよ、『メフィスト』……『くそ親父』……『バンダナのエロ男』……『ポインな姉ちゃん』……GS美神か！)」

だったらここはタイムスリップで平安京に来た時か！

偉く昔に現れたもんだ……

しかし、するとあのハンパなく強いのはアシュタロスか……たしか、願いは魂の牢獄から解放されることだったか？

そしてこの決着は高島がアシュタロスに頭を吹っ飛ばされたあと、美神の力で500年後に飛ばされるはず……

って、まずい！ もうすぐ高島が殺されるじゃないか！

「（おい！俺が少し時間を稼ぐから、その内にあの女の力を使う準備をしろ！）」

とりあえず近くのヒヤクメに声をかけるソウジ。

「（あなた、誰なのね！）」

「（それは後で説明する！とにかく今は時間がない！）」

「（わ、わかったのね。でも、美神さんの力でどうす・・・はっ！そういうことなのね！）」

そして美神の力を使う準備に入るヒヤクメ。

その時間稼ぎにソウジがアシユタロスに話しかける。

「あゝ、ちよつと失礼。アシユタロスさん、少し話さないか？」

「何だ、お前は？どうやら人間とは違うが・・・ほう、吸血鬼か。それもかなりの力を秘めているようだな。なぜこのような場所にお前の様なものがある？」

「うーん、その辺は色々複雑だから今は説明を省くとして・・・ちよつといい話があるけど、乗らない？あなたの『本当の』『目的に繋がる話だよ？』」

それを聞いて目を鋭くするアシユタロス。

「ほう・・・私の本当の目的？そんなものがあるというのか？」

「魂の牢獄・・・(ボソツ)」

「なっ!?!・・・よからう、お前の話とやらを聞こう」

「その代わりっていうか、ここにいる奴らを見逃してくれないか？」

「話の内容によるが、考えておこう」

「そうか。とりあえず言っておくよ。あなたの願いは可能だ」

「なに？それは本当か？」

「ああ。その方法はー」

「用意できたのねー!」

その言葉とともに光り出すアシユタロス。

ヒヤクメ・・・空気を読もうよ。

「これは!きさま、やはり嘘か!??」

そしてやっぱりお怒りのアシユタロス様。

「本当なんだがなあ・・・おい、アシユタロス!俺の名前は鳳姫宗治だ!500年後、お前が現れたら俺を探せ!その時にまたゆつくり話そう!」

「ふん、嘘だったら、覚悟しておけ・・・今度は都合よく時空間操

作の出来る人間などいないからな・・・」

アシユタロスがそう言い終わると光に吞まれ、その場から消える。

「ああ、覚えておこう」

アシユタロスが消えた空間を眺めながらソウジが言う。

「やったのね〜！成功したのね〜！」

ソウジの約束を知らず、はしゃぎ回るヒヤクメとその他。

その光景を見て、苦笑を漏らすソウジ。

菅原道真はアシユタロスが消えたと見て、そのまま逃走。

それを見送ってからソウジはまだ喜び合っている一同に近づく。

「よう、お前等。浮かれるのもいいが、いつまでこんな場所にいるつもりなんだ？俺はアシユタロスとの話で疲れてるし、腹が減ってるんだが」

「……………！！！？」「……………」

ソウジの事を忘れていたのか、全員が声をかけられて驚く。それを見て少し傷つくソウジ。

「そういえば、あんたがいたわね！何者よ！」

いち早く驚きから復活し、声を上げたのは美神だった。

「ああ、俺はー」

「って、もしかして宗治お兄ちゃん？！どうしてお兄ちゃんがここにいるの？！まさか私達の転移に巻き込まれたの？！」

「へっ・・・？」

目が点なソウジ。

『お兄ちゃん』・・・？それはもしかして自分の事を指しているのか？何故自分は『あの』美神令子にお兄ちゃんって呼ばれるんだ？

「えええ〜〜！？美神さん、どうしてあのスカした吸血鬼野郎がここにいるんですか〜！折角未来に置いて来て美神さんとムフフな関係になるチャンスだと思ってたのに！」

「横島！あなたはまたそうやってお兄ちゃんに失礼な事を言って！」

「えええ〜〜！？あなた、宗治さんだったのね〜？！」

「ヒヤクメは気づきなさいよ・・・私なんかよりよっぽど面識あるでしょ・・・」

「・・・」

未来組の三人の話題に着いて行けず、言葉を失うソウジ・・・

「えーっと、悪いが、俺たちは知り合いなのか？」

「「「・・・・・・・・・・」」」

今度は三人が言葉を失う。まさかソウジからそう返されるとは思っ
ていなかったのだ。

「あの〜、お兄ちゃん？私だよ？令子よ。私分からないの？」

「すまん・・・・・・・・」

「ねえ、宗治お兄ちゃんだよね？」

「確かに俺は宗治だが・・・・・・・・」

「もしかして記憶喪失？」

「そんな筈はないと思うけど・・・・・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

何やら軽く絶望している美神を見てソウジは罪悪感を感じる。

「あのー、美神さん、多分誤解してるのね〜」

「ヒヤクメ・・・・・・・・？」

「この宗治さんは『この時代の』宗治さんなのね〜。だから、当然
まだ私達に会ってないのね〜」

「はあ?!この時代のお兄ちゃん?!」

確かにそれならソウジが何も覚えていない事は信じられるが、三人はまさか知っている人物の過去、それも未来と寸分変わらぬ姿で会うとは思ってもいなかった。

「あの一、ご飯は・・・？」

三人は話し込んでしまっているし、メフィストと高島はいちやいぢやしているし、ソウジともう一人は所在無さげに佇んでいる。

「よう、俺は鳳姫宗治だ。あんたは？」

と、ソウジがもう一人に話しかける。

「西郷だ。陰陽師をやっている。そういうお前は何者だ？」

「お前ふうにいうなら妖つてとこかな？まあ、安心しろ。別に人は食わないし、危害を加えるつもりもない」

「そうか・・・」

それから一同は西郷の家に行き、ヒヤクメの力が溜まった時、美神、横島、ヒヤクメの三人は未来へと帰った。

メフィストと高島は幸せに暮らし、子供も何人もできた。

そして約千年後??

「こんにちは、君が令子ちゃんかな？」

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：GS美神編（後書き）

連日更新なんて何ヶ月振りだろう・・・

この話では美神がメインヒロイン、横島は横でルシオラとくつつく
ものです。

おキヌちゃんは宗治に助けられ、そもそも人柱にならず、天寿を全
うし、現代で生まれ変わります。

そして宗治は裏でアシユ側と繋がっていたり、いなかったり？

外伝はあと一話続き、それからまた本編に戻りたいと思っています。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：風の聖痕編（前書き）

外伝第三弾です。本編の続きはまだ出来ていませんが、週末辺りに書き上がると思います。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：風の聖痕編

「おぎゃー！ー！！（なんじゃこりゃー！ー！！）」

テンプレごめんなさい。

どうやら赤ん坊に生まれ変わったソウジです。

さっきまではネギまの世界で家族と共に過ごしていた筈なのに、どうしてこうなった。

『それはじゃな、お主がネギまでやることを全てやり終えたと判断したからワシが勝手に次の世界に送ったんじゃ』

はっ！その声は俺を最初に殺しやがったクソ神様！おのれは〜〜〜
〜！！！！！！

『安心せい。エヴァやらお前の妻達、子供達は望んだやつらはいずれこの世界に送るっ』

それは喜べばいいのか？感謝すればいいのか？

『両方じゃ』

ふざけんなよ！アホ神が！全部お前が原因じゃねえか！そもそも俺をここに送らなければよかつたじゃん！

それに、何で俺なんだよ！他の奴でもいいじゃなえか！

『特別な理由などないわい。強いて言うならネギまでやった事が面白かったからかのう。じゃからきつと今度も面白くしてくれると思ったんじゃ』

なんだよそれ！

くっそくっ……はあ、アホ神が理不尽なのはいつもの事か……で？

『なんじゃ？』

俺を新しい世界に送ったからには何か大変なことが起こるんだろ？それなのに赤ん坊なんて、どうすんだよ？

『大丈夫じゃ。吸血鬼としての能力は以前のままじゃし、お主が培った技術も全部使える手筈になつとる』

それならなんとかなるか。でも、なんで赤ちゃん？

『無論、その方が楽しいからじゃが？』

そんなこつたろうと思ったよ。

『まあ、特典もあるぞ？』

はあ……その特典とやらは？

『お主が生まれた家は代々火の精霊と深い関係があるんじゃが、お主にもその才能を上げた』

それはいいが、それって必要か？ネギまからの魔法が全部使えたらほとんどの事に対処できるような気もするが・・・

『ふん、お主が嫌ならその力は取り上げてもよいのじゃぞ？』

あつ、神様の機嫌を損ねちゃった。

ごめんごめん。別に文句を言ってる訳じゃない。少し疑問に思っただけだ。力がありがたく受けとるよ。

『質問はそれだけかのう？じゃったらワシはもう行くぞ』

分かった。じゃあな・・・って、そう言えばこの世界はどこなんだ？

『・・・・・・・・』

おい。バカ神様。

『・・・・・・・・』

ちっ、せめてそれくらい言ってから消えろよな。

「見て下さい、あなた。元気そうな双子です」

「ああ、そうだな」

双子？あつ、横にもう一人の赤ちゃんがいる。俺の兄弟か？

俺の前には一組の男女が俺たちを見て話している。

「きつと二人ともあなたに似た立派な神風の炎術師に育つわ」

「そう願うだけだ」

「ええ・・・宗治、和麻。立派に育つのですよ。あなた達が神風の未来を担っているのですから」

神風に炎術師？それに和麻？なるほど、ここは『風の聖痕』の世界で、俺は神風に生まれたのか。話からすれば隣で寝ているのは和麻将来、この物語の主人公になる悲劇のヒーロー。

* * *

何年も経つと、和麻に炎術師としての才能が欠片もない事が分かり、一族からの虐待が酷い事になっていった。それを見かけた時はなるべく止めているが、俺の目が届かない場所でそれでも起き続けている。一度だけ大神操が止めに入ったらしいけど、それも一回限りの出来事だった。

俺は神様のおかげで才能はあるので和麻は落ちこぼれ、俺は一族のホープになっているが、はっきり言って俺はそれが気に入らない。まるで炎術の才能が人間としての価値とでも言っているようだ（実際、一族のほとんどはそう言う人間だけだ）。

ちなみに、今の所、俺は簡単な剣術以外、ネギまからの技術は封印している。子供がいきなりすごい剣術を使い始めたら変に思われるし、体系の違う魔法を使ったら異端と思われるかもしれない。

それ自体は別に気にならないが、ここから追い出されると残った和麻が少し心配だ。

と、言ってる側からまた和麻が分家の奴らに虐められてやがる。

「おい、てめえら、やめろ！」

炎を見に纏いながら奴らに近づく。

「やべ、宗治様だ！逃げろ！」

「にげるー！」

「わああああ！」

俺を見て一目散に逃げ出す。

「ふん……」

とりあえず和麻の様子を見るか。

「和麻、大丈夫か？」

「兄貴……すまん、また助けてもらったな」

悔しそうに言う和麻。

「気にすんな。弟を守るのも兄のつとめだ」

「くそつ、なんで俺に炎が使えないんだ！それさえ出来れば自分で自分の身を守るのに……」

「なあ、和麻。そんなに炎術が使いたいのか？」

「当たり前だろ、兄貴！」

「はあ・・・和麻、少し酷かもしれないけど、変に期待させても後悔するのは和麻だからはっきり言う。和麻、お前には炎術を使う才能は全くない。だから諦める」

「なっ、兄貴！」

まるで裏切り者を見るような目だな、和麻。まさか俺がそれを言うとは思っていなかったようだ。だけど、早く炎術師と言う道を諦めた方が和麻のためだ。親父の奴も多分同じ思いだからあんなに厳しいんだろ・・・。つたく、不器用な親だ。母さんの方は本気で和麻に失望してるらしいから気に入らないけどな。

「和麻・・・何も炎術だけが自分の身を守る術じゃない。確かに炎術は精霊術の中では攻撃力が一番高いし、並の術師なら抵抗する間もなく倒されるだろう・・・しかし、それはあくまで『並の術師』の話。いくら炎術師でも、それなりに強い奴には負ける」

「バカな事を言うな！精霊術師が一番強いのは常識だし、その中でも炎術師は最強だ！敵う奴らなんかいる訳がない！」

「甘いよ、和麻。上位の魔術師なら勝つことが出来るのがいるだろうし、世の中には仙人、吸血鬼のような伝説級の化け物もいる。特に、最後の二つは親父や宗主でも敵うかは怪しい」

「仙人や吸血鬼って、兄貴・・・存在すら伝説ものに比べられても・・・」

今度はあきれ顔の和麻。

「はは、確かにそいつらに比べられても精霊術師も困るだろう・・・
ともかく、俺が言いたいのは別に炎術が使えなくても炎術師に勝てる手はいくらでもあるってことだ。それをお前に証明してやる。今度、どっかの分家の奴と戦って、炎術も使わず、純粹な剣術だけでそいつを倒してみせる。もちろん、炎に強い、炎術師の体質も使わない。それなら証明になるだろう?」

奥義さえ出さなければ神鳴流を使っても大丈夫だろ。

「そんな事が本当にできるのか?」

「できる。必要なのはその力を手に入れるための努力と根気。まあ、才能も必要だが、幸いにもお前には武術の才能はあるようだ。やって見ないと分からないけど、多分『氣』も使えるだろう」

「『氣』って仙人とかが使ってる・・・?」

「そいつだ」

「どうして兄貴に分かるんだ?」

「そりゃあ、使えるし」

「・・・は?」

ふっふっふっ、ポカーンとしてるね。

「だから、俺には氣が使えるんだよ。あつ、一応これ、他の奴らには秘密な」

「兄貴！」

「なんだよ？」

「なんで兄貴に氣が使えるんだよ！」

「うーん、そいつはいくら和麻でも言えないなあ・・・」

「くっ・・・」

「けど、もし和麻が力を欲しているのなら、それを教えてやる」

「・・・」

「試合を見てから決めたらいい・・・俺の修行は厳しいから、覚悟をしておいた方がいいけどな」

「分かった・・・」

* * *

あのすぐ後、俺は分家の当主と戦い、見事(?)炎術を使わずに勝つてみせた。それ以降、和麻への虐めは何故かバタリと止まった。それから俺は秘密裏に和麻に氣と武術、剣術を教え、和麻はどんどん強くなった。

そして何年か過ぎ、俺たちはついに18歳になり、高校を卒業した。

そんな折、俺たち二人、それに従姉妹の綾乃を加え、炎雷覇の継承の儀を行う事になった。ようは三人による総当たり戦だ。その結果は俺、二勝〇敗。和麻は俺に負け、一勝一敗。綾乃、〇勝二敗。当然のように炎雷覇は俺が継承する流れになったが、俺はそれを辞退した。はつきり言つて、俺は神凧を継ぐつもりなどない。だから、炎雷覇もいらぬ。継承の儀に参加したのもこれから出奔する俺の親父や宗主への最後のけじめだった。その次に勝っていたのは和麻だが、それは武術で勝つた。もちろん炎術なんて欠片も使っていない。だから、一族の総意で和麻は炎雷覇を継承しなかつた。なので、前代未聞の、負けて継承という事態になり、この戦いはなかつた事になった。まあ、俺には関係ないが。

そんな恥ずかしい事実を隠蔽するため、俺と和麻は勘当になり、神凧を出るはめになった。まあ、もともと出て行くつもりだったので、別になんとも思わなかつたが、残して行く末弟の煉が少し心配なのはたしかだ。けど、原作では大丈夫だったし、綾乃に任せればいいだろう。それよりも、和麻が精霊王と契約するきっかけとなる翠鈴生け贄事件。なんとしてもそれを阻止するため、和麻に付いて行きたい。その所為で和麻はコントラクターになる機会を失うかもしれないけど、それはその時だ。

「和麻、準備はできたか？」

「ああ。それよりも、兄貴の方こそいいのか？」

「あん？何がだ」

「兄貴なら炎雷覇を継いで次期宗主になれたのに、あんな小娘にくれてやってよかつたのか？」

「別にいらねえよ。宗主に煉、それにあと数人は個人的には好きだが、『家』としての神風は大嫌いだ。誰が継いでやるもんか！それよりも双子の弟が一人で世間の荒波に晒される事の方が心配だ」

「何言ってるんだよ、兄貴！俺はもう昔の弱っちい俺とは違うし、大體、もう高校を卒業してるんだ！兄貴は過保護なんだよ！」

「ふっ、それは一度俺に勝ってから言うんだな、弟よ」

「ちっ！今に見てるよ・・・兄貴なんかコテンパンにしてやる！」

「はっ、吠えてろ」

「なん???!」

「かずまにいさま！そうじにいさま！」

おろ、まだ8歳の弟、神風煉君ではないか！俺たちを見送りに来たのか？

「どうした、煉？」

「にいさまたち、ほんとうにいつてしまわれるのですか？」

「まあ、勘当されたし、出て行くしかないだろう」

「うっ、いやです！ぼくをおいていかないでください！」

泣きそうになる煉。というか、すでに涙が溜まっています。

「お、おい、煉！泣くな！ほら、兄貴も何か言え！」

おい、和麻！こっちに丸投げか？！

仕方ねえ・・・まあ、可愛い弟を泣かしたまま出て行きたくないしな・・・

「煉・・・」

しやがみ込んで、煉と目を合わせながら頭の上に手を置く。

「そっじにいさま？」

「俺たちはお前が嫌いだから出て行ってるんじゃない。そうだろ、和麻？」

「当たり前だ」

「そうですか？」

不安そうに聞き返す煉。

「そつだ・・・いくら俺たちが神風を名乗る事を禁じられても、お前はずっと俺たちの自慢の弟だ！それは絶対に変わらない」

「ほんとう？」

「ああ・・・だから泣くな！最強な俺たちの弟だろ？俺たちの弟なら悲しみなんかぶっ飛ばせ！俺たちが戻った時、弱いままならば容赦しねえぞ！具体的には、綾乃より弱かったらオシオキだ」

「これでどうだ？」

「うっ、ねえさまより、ですか・・・ぼくにはむりですよ」

悲しみはなくなっているが、今度は未来への不安に変わる。

泣かれるよりはマシか。

「とにかく、がんばれ、煉。ほら、和麻もなんか言ってるやれ」

「煉・・・」

「かずまにいさま・・・」

「いつになるかは知らんが、必ずここに戻る。兄貴の言う通り、名前も変わるし、神凧家の者として、二度とこの門を潜ることはないだろう・・・それでも俺はお前を家族と思っている。その想いは絶対に変わらん」

「はい、かずまにいさま」

「だから、煉は笑顔で俺たちを送ってくれ」

「わかりました・・・いつてらっしゃい、かずまにいさま、そうじにいさまー！」

ちょっと無理をしているが、気持ちのいい笑顔だ。花丸をあげよう。

「ああ、行ってくる、煉」

「またな、煉。約束、忘れるなよ！」

「はい！にいさまたちにみとめられるようにがんばります！」

「その調子だ」

そして、必死に手を振る煉を背に、俺たちは神凧邸を後にした。

さて、今度はどこに行くかね〜・・・

そう言えば、原作では和麻は中国に渡り、仙人の修行を受けたんだっけ？ それも面白そうだな・・・今の俺たちの力がどれほどの物を量れるし。

よし、それに決まり！

俺たちの次の目的は中国だ！

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：風の聖痕編（後書き）

（多分）続きません・・・

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：ゼロ魔編（前書き）

性懲りもなく外伝シリーズの第四弾です。

今度の本気の本気で最後です。

次は絶対（きつと？）本編の続きがあります。

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：ゼロ魔編

「ウホッ、いい鏡」

とある日、麻帆良でぶらぶら歩いていると、突然目の前に等身大の光り輝く鏡が現れた。

浮いているから、魔法だよな・・・？

「それにしても、こんなシーン、どっかで見たような・・・」

そくだ！ゼロ魔の使い魔召喚シーン！

と言う事は何だ？！もしかしてこれは俺〃ガンダールヴでルイズの使い魔召喚フラグか！！！！？

多分、また神様の気まぐれかなんかだろう・・・

エヴァ達がちょっと気がかりだけど、これがあの神様によるものなら、どっちみち俺には選択肢なんてないよな・・・

まあ、吸血鬼だし、生きてればまたいつか会えるだろう。向こうには世界を渡る魔法とかもあるみたいだし。最悪、神様に頼めばなんとかしてくれるかもしれない。

さて・・・一応納得する理由もできたし、そろそろ行ってくるか！

「ルイズ、待ってるよ〜。あなたの為にさいきょー（笑）の使い魔が世界を超えてあなたの元にすぐ行くぜ！・・・とうー！」

鏡の中に飛び込んで召喚に応じる！

「……つと。なんだ、結構あつけないな」

別に光のトンネルとかあるわけではなく、まるで穴を通り抜けるように向こう側に着く。

そして、目の前には召喚主と思われるナイスボディの赤毛の少女。

……つて、あれ？

「はあ？あんた誰よ？」

俺が聞きたいことを彼女が最初に聞く。

「キュルケが平民を召喚したぞー！」

「なんだとー？」

「わはは！流石は野蛮なゲルマニア人！使い魔も野蛮ということか
！」

えーつと、状況が分からないんですけど……もしかして、俺フライング？ルイズじゃなくてキュルケの使い魔？

「ちょっと、あなた。どうして人が使い魔として呼び出されるのよ
！コルベール先生！やり直しを要求するわ！」

「やり直しは認められません、ミス・ツェルプストー。さあ、早く

コントラクト・サーバントを」

「くっ、屈辱だわ・・・あなた！どこから来たのかは知らないけど、
光栄に思いなさい！私の唇は安くないわよ！」

は？もしかして、俺、マジでキュルケの使い魔にされるの？

「我が名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハル
ツ・ツエルプストー。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を
与え、我が使い魔となせ」

呪文を唱えて、俺に顔を近づける。

そして距離がゼロになり、彼女の唇が俺の唇に重なる。

キュルケのキス、キターーーーー！！！！！！

ついでに、右手にルーンが刻まれる（ヴィンダールヴじゃないよ？）

「ふむ、精霊のルーンですか。珍しいですね・・・まあ、いいでし
よう。ミス・ツエルプストーは無事に使い魔召喚を完了したのを確
認。次の人、どうぞ・・・」

「ありがとうございます、先生。さあ、あなた、こっちに来なさい
！色々聞かないといけないわ」

終わったか。取り敢えず、マスターのキュルケに付いて行くか。

召喚の儀が行われている広場の端まで二人で歩き、誰にも聞かれて
いないと確認してからキュルケが俺に話しかける。

「それで？」

「なんだ？」

「あなたの事を説明しなさい！どうして人間が使い魔として召喚されるのよ?!」

「俺に聞くなよ。そもそも、俺はこことは違う場所から来ているらしいし」

「なに、あなた、トリステイン出身じゃないの？」

「トリステイン？」

とりあえずボケてみる。

「なんだ、それ？大体、俺のいた場所には月は一つしかなかったし・・・」

「月がひとつうゝ？どんな場所よ、それ！」

「さあ？案外、異世界とかそういうもんじゃね？」

「異世界ねえ・・・それにしても、あなた、すごく冷静よね？ここは普通、取り乱すところじゃないの？」

「そうかもな・・・」

「なによ・・・煮え切らないわね」

「まあ、いいじゃん。あと、一つ訂正すると、俺は人間じゃない」

「人間じゃない？けど、どこからどうみても人間に見えるわよ？」

「外見はそうかもな・・・だが??」

口に指を入れて、普通より長い犬歯をキュルケに見せる。ドーン・

「ちょっと、それはまさか・・・」

「おっ？これで分かるか不安だったけど、こっちの世界にもあるらしいな・・・吸血鬼」

「やっぱり!」

「まあ、安心しろ。俺は質の悪い吸血鬼とは違い、別に人間を誰彼構わず襲わない」

「吸血鬼が使い魔なんて聞いた事がないわよ・・・」ドーン・・・

「そういうものとして受け入れるしかないな。それに、お前にとつて何も悪い事ばかりじゃない」

「どつという意味よ？」

訝しげにキュルケが聞く。

「さっき聞いた話から察すると、ここは魔法の実力が尊重される社

会なんだろ？俺の魔法は強力だぜ？」

「あなたが本当に吸血鬼なら、それも納得できるけど、後で証明しなさいよ」

「まかせろ。お前は・・・火の魔法が得意か」ドーン・・・

「そんなの分かるの？」

「何となくな・・・俺も、どちらかと言うと火の魔法が得意だし、ちようど良かったな。と言う訳で、後で俺の最強の火魔法を披露してやるよ」

「今じゃ駄目なの？」ドーン・・・

ふむ、別に今でもいいんだけど、『燃える天空』は派手だし、授業の妨げになっちまう。

キュルケにそう説明し、とりあえず授業が終わるまで待ってもらおう。

ドーン・・・

それにしても???

「さっきから、何だ、この爆発のような音は？」

「ああ、あれ？どうせヴァリエールの失敗魔法でしょ？」

あれがルイズか。

なるほどねえ……

「よくやるな」

「そりゃあね……進級がかかっているし、もし彼女が落第したら家の威信にかかわるから、必死にもなるわ」

そう言うキュルケはどこか同情的。まあ、ライバルというのは両サイドの力が拮抗していないと、ライバル心を保てるのは難しい。片方だけが底辺を彷徨っていると、ライバルとの勝利で得られる満足感はほとんどない。

だから、ルイズが見てない今は普通な態度なのだろう。

おっ、コツパゲール……じゃなくて、コルベールがルイズに何か言ってる。大方、次で最後の挑戦とか言ってるんだろう。それを聞いてルイズは抗議したが、渋々と了承し、最後の詠唱に入る。

「むっ、今回は何か違うな。もしかして成功か？」

ルイズの詠唱が終わり、彼女の前に鏡が現れる。

そして、俺の前にも鏡。

……あれ？

「キュルケ、よくわからんが、これって召喚の扉だよな？」

「え、ええ、そうね」

「もしかしなくても、これって俺用？」

大きさも俺にぴったりだし。

「まさか・・・」

「でも、ここには俺とキュルケしかいないぞ？それとも、キュルケがあの子の使い魔になるか？」

「死んでも嫌よ！」

だよね・・・

「じゃあ、とりあえず行くぞ？使い魔が二人の主人を持てるかは知らないけど、もし無理なら契約が失敗するだろ・・・」

「仕方ないわね・・・まあ、もし私との契約が破棄されれば、新しい使い魔を召喚すればいいし。今度は火トカゲがいいかもしれないわ」

キュルケは最後に悪戯っぽくそう言って、俺はゲートを通り抜ける。

やれやれ・・・それが起きたらすごく悔しがる癖によく言う。

さあて、第二のご主人とご対面するか。

「ええー？！何よ、あんた、キュルケの使い魔でしょう？！...！どうして私に呼び出されるのよ！...！」

「よう、あっちから見てたぜ？君、中々根性あるじゃん」

「ゼロのルイズがキュルケの使い魔を呼び出したぞー！ー！」

「恥も外聞もなく、他の誰かが呼び出した使い魔を中古で呼ぶなんて、ゼロの名は伊達じゃないな！」

「うっ．．．先生！やり直させて下さい！ツエルプスターの使い魔を呼び出したなんて、ヴァリエールの恥だわ！」

「認められません、ミス・ヴァリエール。前代未聞ですが、呼び出された以上、彼があなたの使い魔です。もし契約が失敗した時は再召喚を検討します」

「分かりました．．．」

ルイズとコルベールの話は終わったか。

うっし、バッチコイ！

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

コントラクト・サーバントの呪文を唱え、今度はルイズに口づけをされる。

そして左手に刻まれるルーン。

今度はガンダールヴのルーンなのか？

これで俺もゼロ戦で無双フラグが立ったぜ！

なに？魔法を使えばゼロ戦なんて使わずに無双できるだろうって？

ふっ、分かってないね、チミ。戦闘機を飛ばして戦うのがいいじゃない！男の子なんだから！

「ふーむ、ちゃんとルーンは刻まれていますね・・・これは、見た事がないルーンですね。後で少し調べてみますか。とにかく、召喚の儀はこれにて終了しましたね。ミス・ヴァリエール、それにミス・ツエルプストーはその使い魔を連れて学院長室に来て下さい。色々話し合わないといけないでしょう・・・」

コルベールはそう言って、生徒達がそれぞれの使い魔を連れて教室へと戻った。

「・・・・・・・・・・」

あっ、ルイズとキュルケが睨み合っている。

まっ、しょうがないよな。ライバルだし・・・

さて、今度の世界にはどんなドラマが待っているのだろうか？

外伝もしもソウジが〜に行ったらシリーズ：ゼロ魔編（後書き）

こんな事をしている場合ではないのに、つつい書いてしまう。

第四十話：その頃、京都では・・・（前書き）

やっと本編の続きです。

幼女なあの子が出てきます。

第四十話：その頃、京都では・・・

<aside：素子>

「はあ~~~~・・・宗治先生はいつになったら戻って来るんやろ・・・うち、もう高校、卒業してまうよ・・・」

「あねづえ〜、あそんで〜！」

うちのなまえはあおやまもとこ、6さいや。いま、だいすきなあねづえに、あそんでもらうたためにあねづえのへやにきとる。

「はあ・・・」

「あねづえ〜」

うう~~~~、ぜんぜんはんのうない・・・

あねづえはときどき、こつやって、どこかとおいとこにいったように、ぼーっとすることがある。

そんなとき、うちがいくらおねがいても、あそんでくれへん・・・

「あねづえー！」

「なんや、素子か・・・ごめんな、今そんな気分やないねん・・・また後で遊んであげるから、今は一人にしといて」

「~~~~」

あねづえにききよせしむて、しむはとほとほとくちをひらへ。

・・・

・・・

・

トコッ！トコッ！

ひとりじゃやれることもなく、うちはいつものほくとびで、すばら
をしとる。

あねづえ・・・いつも、かんがえとるそうじせんせってだれなんや
る・・・

たぶんおとこのひとやけど、うちはしらへん。

あねづえにきいたけど、うちがちいさいころ、ここにきたらしい。
うちはおぼえとらんけど。

けど、そのひとのせいで、あねづえがうちのことをかまってくれ入
んのはわかるし、あねづえがためいきをついとるのも、そのひとの
せいなのはわかるんや。

“そうじせんせ”なんてひと、きらいや・・・

「どつした、素子、一人で練習か？」

「・・・ええちやちや」

ちちつえにはなしかけられて、ぼくとうをおろす。

「あねうえはいそがしいんや・・・」

「またいつもの『あれ』か。全く、何年も経つのに、いつまでも未練を持ちおって・・・」

ちちつえもあねうえのことをしつとるみたいや・・・なんや、おこつとるな。

うちもおこつとるから、ちょうどええ。

「ふむ、鶴子ももうすぐ高校を卒業するし、あの話を受けてもいい頃合いかもしれんな」

うう、ちちつえがなにかむずかしいことをいいはじめた。

「ちちつえー」

「む？ 何だ、素子？」

「うちのねんしゅうをみてくれへん？」

「もちろん、いいぞ。なら、見てるから少しやってみろ」

「わかった、みてて〜」

ちちつえ、うちも、あねうえのような、りっぱなしんめいりゅうのけんしになれるよう、がんばる！

* * *

< side : 鶴子 >

高校の卒業式を間近に迎えたある日、『鶴子、お前に話がある』とお父様に言われ、お父様の書斎に呼ばれた。

「お父様、うちに何か用か？」

「来たか、鶴子」

お父様はいかめしい顔をしながらうちを迎えたことから、これからの話は重要な話らしいな。

「お父様、話ってなんや？」

「鶴子、お前ももう高校卒業だな」

「そやけど・・・」

話と関係あるんやろか？

「なんだか、お前が生まれたのがつい先日のようにも感じるのだから、時間と言うものは不思議だな・・・」

「お父様・・・」

なんやろ、この勿体ぶったような言い回し。いつものお父様と違う。

「私はな、鶴子。お前と素子が生まれた時から、ずっと二人の幸せだけを望んでいた。神鳴流の後継者に相応しくなれるようにも願っていたが、もしなれなくても、分家で才能のある子に任せてもよかった。幸い、お前はもう後継者として十分な実力を持っているから、そう言う問題はないがな」

宗治先生に失望されない為に、今もがんばっとるし！

「だが、お前はもう高校を卒業する。もう立派な大人の女だ。そんなお前の『女としての』幸せも私は望んでいる」

「お父様、それは結婚や子供のこと？」

「端的に言えばそうだな。宗治様がここに来るまで、お前は男に興味なんて見せなかった。私としては、それが少々心配だったが、まだ中学生だったお前が男に興味を示さなくても、それはまだお前が子供だったからと納得できた。そんな時、大戦が終わり、詠春と一緒に宗治様がやってきた。たった数ヶ月だったが、鶴子、お前は恋に落ちたのだろう？」

「は、はい、お父様／＼／」

「恥ずかしいわ、うちの気持ち、誰にも言うたらんのに、どうしてお父様にばれたんやろ？」

「その様子だと、お前はまだ宗治様の事が好きなのか？」

「はい／＼／」

うちは火照る頬を感じながらお父様に正直に答えたが、それを聞いたお父様は何故か肩を落とした。

「はあ・・・あれを機に、お前も異性に興味を持ち始めると私は喜んだが、あれからずっと、お前には浮いた話の一つも聞かないから、もしかしたらと思ったが、やはりそうだったか」

剣術をたくさんがんばって、今度会った時に宗治先生を『あつ』と言わせるんや！ そしたらうちの気持ち伝えて、一緒に旅に出るんや。

「あのな、鶴子・・・宗治様は私達とは違う存在なのだ。お前の為にも、その恋心を忘れて、早く良い相手を見つけた」

「なっ・・・！」

お父様の厳しい言葉に、絶句する。

宗治先生の事を忘れる？ そんなの無理やし、嫌や！

宗治先生が人間じゃないのは知つとるが、そんなの関係ない！

「ちょうど、最近お前に縁談を持ちかけた知り合いがいるのだ。相手はお前より少し年上だが、気にするほどではない。先日、私も一度会う機会があったのだが、中々の好青年だった」

「お父様、それはまさかうちにお見合いをしろと言っんか！」

「そつだ」

「嫌や！ 絶対にうちは行かへん！」

「鶴子、もし宗治様が戻って来なかったらいつまで待っているつもりだ？」

「いつまでもや！」

「宗治様が今回、京都に来たのはその前の時より数十年前だったのだぞ？ お前の爺さんがまだ若かった頃だ。もし、宗治様がまた来るのがそれほど先になったらどうする！ 老人になるまで一人のまま、待つのか！」

お父様は話しとる間に段々と声を荒げ、最後の言葉の時はついに叫んでいた。

「うちは待つもん！ それに、宗治先生は絶対に戻ってくる！」

「何を根拠にそう思う！」

「だって、うちと約束した！ うちが大学を卒業するまでは絶対に一度戻ってくるって！」

「そんな口約束。どうしていつまでも信じられる！」

「ううう……」

だって、うちにはそれしかないんや。それを信じてないと、うちは自分の気持ちに押しつぶされてまっ。

お父様の言葉は正しい。せやから、うちは何も言い返せず、悔しさ

のあまりに涙を流し始める。

「だったら、賭けをしよう、鶴子」

「か、け・・・？」

「そつだ。私はお前が大学を卒業するまで待つ。それまではお前が
どうしようと、私は口を出さない。時折、お前に縁談話を持ってく
るかもしれないが、相手と会うかはお前に任せる。それまでに宗治様
が戻れば、それ以降もお前の事でなにも言わない。そのかわり？？」
そこでお父様は一旦、話すのを止め、うちを一度見てから続けた。

「そのかわり、もしお前の卒業までに宗治様が戻らなければ、お前
は宗治様の事を忘れ、私が用意した相手と結婚をしる。無論、お前
が相手を見つけるのもいい」

「そんなん、うちに有利なとこなんてないやん！」

宗治先生が戻つても、うちが勝手にできるだけやん！ そのかわり、
宗治先生が戻らなければ結婚させられるなんて！

「どうした？ 宗治様の事を信じているのだろう？ なら、何も心
配することはない」

そんな！ うちが賭けに乗らなければ、まるで宗治先生を信じとら
んやないか！

「そんなん、ずるい、お父様・・・」

「それで、鶴子。この賭けを受けるか？」

「分かったわ、お父様。その賭け、受けたる」

話はそれで終わりとしても言うように、うちが賭けに乗ると、お父様はうちに背を向け、仕事に戻った。

そして、うちは無言で部屋を出て、自分の部屋へと帰った。

<side：青山秋人>
ボタン・・・

背後で鶴子が扉を閉める音がする。

「鶴子、私はお前の幸せだけを望んでいる。いつまでも不可能な恋に捕われていないで欲しいのを分かってくれ・・・」

第四十話：その頃、京都では・・・（後書き）

なんと、ソウジが知らない所でこんな話がされていたり。
どうなる鶴子！

そして素子の好感を取り戻せるのか、ソウジ！

第四十一話・とある戦争孤児の話（前書き）

今回は自分でもかなり好きなあの子の出番！

第四十一話：とある戦争孤児の話

< s i d e : 戦災孤児の少女 >

「うっ……あ……」

……

隣からうめき声が聞こえてくる。

声を上げているのは小汚い、髭を生やした男。

私がこの路地裏に住み着く前からここにいて、それから、食べ物を口にするのを見ていない。

そろそろ餓死するかもしれない。

あいつが死んだら、その死体が腐る。また場所を変えないと……

人が死ぬ。それについてはもう何も感じない。

物心が着いた頃に両親が殺されてから人が死ぬ場面は数え切れないほど見てきた。今更何を思う。そんな事より、どうやって次のご飯にありつけられるかの方が大事だ。

そう考え、いつものようにお金を手に入れる為に、お金を持ってそんなカモを探しに街に出る。

……

人混みが多い表通りに出て、しばらく歩いているとこんな場所に似つかわしくない三人組を見つけた。
年若い夫婦とその娘のようだが、その姿は色々と諦め切っているこ
こら辺の人間とは違って幸せそうだ。

気に入らない。どうしてこんな場所にいる、と聞きたいほど場違い
なのにここにいる。貧しい私達を見て笑いに来たのか？

決めた・・・今日のカモは奴らだ。有り金を全部スツてやる。

そうと決まれば、奴らを尾行して、チャンスが来たらすかさず財布
を盗む。いつものように行動開始だ。

自慢じゃないが、私は今まで一度も盗みに失敗していない。特に、
こつこつという暢気そうな奴ら相手の仕事は簡単だ。

「く〜・・・」

ちっ、早く何かを食べないと、今度は私があ路地裏の男のように
なってしまう。

む、奴ら、混雑がすごい市場に入った。盗むのなら今がチャンスだ
ろっ。

「す〜・・・は〜・・・」

大丈夫だ。いつものようにぶつかつた拍子に財布を盗むだけだ。

深呼吸をして自分を落ち着かせる。

よし、行くぞ・・・

<side:ソウジ>

「エヴァ、気づいてるか？」

1992年、魔法世界の某街に俺たちは来ている。大戦から10年近く経っているのに、この街はまだ復旧しきっていない。街のあちこちに戦争の影響がちらほら見える。

けど、今、俺がエヴァに聞いているのはそれとは関係ないことだ。

「当たり前だ。こんな素人同然の気配の消し方。私が気づかないとでも？」

「はは、聞くのも失礼だったか」

「ソウジ、私達、つけられてる？」

俺とエヴァの間で手を繋いでいる、今は十歳くらいに成長しているアスナがこつちを見上げて聞く。

「おう、アスナも気づいたか。流石だな」

「ソウジ達の方がすごい・・・」

ふむ、俺たちがアスナにやらせたサバイバルの途中での奇襲はしっかりとアスナの身になっているようで、嬉しいぞ。

ちなみにこの呼び方についてだが、少し前にアスナがちゃん付けを拒否してきたのだ！ かわいいのに・・・何が気に入らなかったんだろう？ もしかして、これが噂の反抗期？

とにかく、あれから俺もエヴァと同じように『アスナ』と呼んでいく。

そんな事を考えていると、俺たちは道を曲がって人通りが激しい市場に入った。

「気配が変わったな・・・来るか？」

「そうかもな、エヴァ。アスナ、多分大丈夫だけど、油断するなよ？」

「分かった・・・」

さて、こっちはわざと隙を見せてるけど、何が狙いだ？

気配の消し方からはプロじゃないだろう。囷という可能性もあるが、こんなのを囷に使う奴らなら脅威にもならないし、大丈夫だろ。

俺たちを狙ったプロじゃないなら何が狙いかだが・・・ただの盗人か？

ふっ、もしそうなら選んだ相手が悪いな。

すぐそこまで近づいたな。

狙いは・・・どうやら俺のようだ。

やっぱりただのスリみたいだな。ぶつかってくる気まんまんなのが丸分かりだ。

「あっ！　ごめ・・・！」

ぶつかつてくると同時に手を俺の懐に伸ばしつつ、謝り始めるスリ。けど、その手が俺の財布に届く前に捕まえる俺。そして驚くスリ。

「おっと、残念。俺から財布を盗るならもう少し技術を磨くんだな・・・って女の子？」

俺の財布を盗もうとし、俺が捕まえているのは4、5歳の女の子だった。

肌は褐色、髪は黒のボサボサで、服はぼろぼろ。いわゆる、ストーリーチルドレンという奴だ。

「どうしたの、ソウジ？」

「チャチャゼロ？　いや、こいつがさっきの奴なんだが・・・」

いつの間に仲良くなったのか、この頃はアスナに抱かれているチャチャゼロがどうしたのかと聞いてきた。

「女、の子？」

その子を見てアスナが反応する。

「離せ！ 私、何も悪い事はやってないぞ！」

「いや、俺の財布を盗もうとしただろ？」

未然に防いだから、確かに『まだ』何も悪い事はやってないけど、
そんなの屁理屈だろう・・・

「うるさい！ 証拠はなんだ！」

「証拠も何も、現行は「くう〜」・・・」「・・・あん？」

これってこいつの腹の音か？

ふむ・・・

「お前、腹減ってるのか？」

「うっ、悪いか！ 二日も何も食べてなかったら腹も減るだろ！」

聞かれたのが恥ずかしかったのか、女の子は顔を赤くしながら俺を
睨んできた。

「二日も食べてないのか？・・・それはよくないな。よし、ちょっと俺たちと一緒に来い」

「なんだよ！ 私を警察に突き出すのか！」

「ちげーよ。飯を食わしてやるから付いて来いって言ってるんだ。」

エヴァもそれでいいか？」

「ふん、何を言っても無駄だというのはお前の顔を見れば分かる。勝手にしろ」

さて、エヴァの承諾も得たし、こいつに何か買ってくるか。

・

・

・

と言う訳で、屋台でケバブっぽいものを人数分買って、広場のベンチに座り、それを食べながら女の子の話の話を聞く事にした。

「はぐ・・・はむ・・・あむあむ・・・」

「なるほど、両親を失ってからずっと一人で生きてきたのか」

子供じゃ働き口もないし、盗みも仕方なくからやり始めたんだろう。別に、それで許されることじゃないが、昔から法律なんか全力無視で走っている俺やエヴァが何かを言える立場じゃないな。

「それで、お前、名前はるか？　ちなみに、俺はソウジ、こいつはエヴァ。この子がアスナで、この人形はチャチャゼロだ」

「・・・マナ。マナ・アルカナ」

ん？　マナ？

どこかで聞いたような・・・

「マナか。いい名だな。お前に似合ってるよ」

「うっ、そうか？ 名前を褒められたのは始めてだ」

「ああ、いい名前だ」

「・・・／／／」

なんだ、ツツパってるけど、かわいいところもあるじゃん。

「おっ、どうやら食べ終わったようだな・・・さて、マナはこれからどうしたい？」

「え？」

マナが面食らったような顔をする。

多分、一食をおごって、それでさよならすると思ってたんだろう。

そう言う行動はやられた側には偽善もいいとこだけど、それでも一回は食べられるから、怒りよりも諦観のような感情があるとか。

だからこそ、俺がマナのこれからに興味を示した事に驚いたんだろう。まあ、俺からしたら、こういう子を全員助けるのは無理だけど、せめてこうして知り合った子の為に何かしてやりたい。

始めは信用できる知り合いの施設にでも送ろうかと思ってたけど、話してる間に少し情が移って、一緒に連れて行くのもいいかもしれ

ないと思い始めた。アスナも、妹ができれば更に成長できるだろう。

「マナ、これから君に三つの選択をあげよう」

「選択？」

まだ幼い子供に一生を左右するような選択をさせるのは酷かもしれない。でも、今まで一人で生きてきたんだ。自分で決めないと色々納得できないだろう……

「そうだ……一つ目は俺から金をもらい、これからも今までと同じように過ごすこと……二つ目は俺の知り合いの孤児院に行き、そこで育つこと……」

「孤児院？」

「ああ。信用できるし、最低限の衣食住は保証される。お前のよう な子もたくさんいるから、一人になることはないだろう」

「そう……」

最低では今よりずっといい生活ができるだろう。

「三つ目は？」

「三つ目は……俺たちと一緒に来る事だ」

「えっ???」

「ソウジ？」

「ふん・・・」

「やっぱりね」

マナ、アスナ、エヴァ、チャチャゼロの順でそれぞれの反応が帰ってくる。マナは目が飛び出るほど驚いている。まさかこんな提案が来るとは思っていなかったかもしれない。

「知り合って間もない俺たちが信用できないのも分かるが、ゆっくり考えてくれ・・・個人的な意見を言わせてもらえば三つ目を勧めたいけどな」

「・・・ほんとに一緒に行っているのか？」

不安気にマナが聞く。

「おう、いいぞ。なんだったら、信用の証に俺の名前をマナにあげる」

「名前？」

「うむ。それでマナは晴れて俺の家族になる・・・」

「家族・・・」

「けど、もしそうになったら覚悟しないとイケないかもな」

「えっ、どうして？」

「俺はいい意味でも悪い意味でも有名だからな。お前が俺の家族になれば、必然的にお前も注目を浴びるようになるかもしれない」

「ソウジって有名人？」

俺を知らないのか。こういう反応も新鮮だな。まあ、こんな子供、特に路上生活をしてたなら、大戦のこととか分からないだろう。

「かなりの有名人だな・・・エヴァも同じくらい有名だが」

「エヴァも？」

「うむ。確かに私もソウジと同じくらいに有名になっているな。むしろ、二人一組で有名だ」

「ふーん・・・」

「で、マナはどうするか決めたか？ できればここで返事を聞きたい」

下手に返すと、変に考え込んで、二度と会えなくなるかもしれない。こつこつのは少し強引の方がいいくらいと俺は思っている。

「・・・うん、私、ソウジたちと一緒にいきたい・・・兄さん」

「兄さん？」

「これからは家族だろ？ だったらソウジは私の兄さんでしょう？・・・ダメ？」

そんな捨てられた子猫のような目で俺を見るな！

「もちろん大丈夫だぞ？ うん、俺はこれからマナ・ホウキの兄さんだ！・・・ん？ どうした、アスナ？」

マナと話しているうちにアスナが俺の手を握ってきた。

「マナだけ、ずるい」

ずるい？

「私もソウジの家族・・・」

もしかして・・・

「・・・アスナも家族の証に俺の名前が欲しいのか？」

「うん」

「そっか・・・当然、アスナが欲しいなら、その名前を上げるぞ」

嬉しいね、アスナが俺やエヴァをそこまで思っているなんて。

「へへ・・・」

「・・・」

む？ エヴァが何だか怒っている顔・・・もしかしてエヴァもか？

「あゝ、エヴァも俺の名前が欲しいなら、もちろんいいぞ？」

「ふん！ 600年も経って、今更だ、そんなもの！ けど、ソウジがどうしても言うなら、仕方なく名乗ってやるう」

「ソウジ・ホウキはどうしてもエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルにホウキの名前をもらって欲しい」

「そ、そうか・・・なら、仕方ないな。私はこれからエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」ホウキと名乗ろう／／／」

全く、顔を真っ赤にして、かわいいなあ、もう！ このツンデレさんめ！

「おう、そうしろ、そうしろ」

「なんだ、そのリアクションは！ 私だけぞんざいな気がするぞ！」

「気のせい、気のせい」

いや、実際、名前一つで変わるほど俺たちの関係は浅くないし・・・

「ともかく、マナという新しい家族を迎えたし、今日は目一杯祝うぞ！」

「おー！ 酒だ、酒！」

あらら、声を上げたのはチャチャゼロだけか。まあ、アスナたちはそんな性格じゃないから分からなくもない。

「まずはマナの事をなんとかしないとな」

「私・・・?」

「おう、マナのその服も汚れをどうにかしないと・・・エヴァ、久しぶりに別荘を出すぞ!」

「別荘をか?・・・まあ、いいだろう」

別荘にはこちら辺のどのホテルよりいい設備があるからな。その方がゆつたりできる。

「さてと、じゃあ、行くか、アスナ、マナ」

「はい、兄さん」

「うん」

アスナとマナの手を取り、今夜の為に予約しておいた宿に向かう。

「ほら、エヴァも早く。行くぞ」

「やっぱり私の扱いがぞんざいな気がするぞ・・・」

・・・気のせいだ。

第四十一話：とある戦争孤児の話（後書き）

この小説では真名さんは他の3 - Aの皆さんより、実は1、2歳年上ということになっています。それでも原作開始時は同じA組に入りますが、それは学業を始めたのが他の皆より少し遅れていたからです。

そしてコウキ・タツミヤに保護されていないので龍宮神社に世話になることもなくなる（真名さんの巫女さん姿も捨てがたいからバイトさせるかもしれないけど！）

第四十二話：ついにソウジ、始めての پاکティオー！x2（前書き）

（8/9）に少し修正。アイテムという言葉アーティファクトに変更。後になって契約アイテムに名称があったことを思い出した作者です。

第四十二話：ついにソウジ、始めてのパクティオー！x2

<side：ソウジ>

「雷鳴剣????!!」

「ぎゃあああ!!」

「闇の吹雪!!」

「うわあああ!!」

「あーっはっはっはー!!」

「おー、やってる、やってる」

「・・・」

今はマナと出会った街から次の街に行く旅の途中で、俺たちは何故か盗賊に襲われています。はっきり言って、今時の時代、盗賊なんて流行らないでしょ？ と、彼らに言いたい。

盗賊達に応戦しているのはアスナ、エヴァ、それにチャチャゼロ。

俺はマナを護衛するためにそれを離れた場所から眺めている。

「姉さん達、すごいね、兄さん・・・」

マナは半ば呆然とその光景を見ながら俺に言うが、俺もその感想には同意できる。十歳に十五歳くらいの少女、それに可愛い人形に蹂躪されていく屈強そうな盗賊達。

「確かにすごいな・・・けど、マナもこれから頑張ればあれくらい出来るようになるさ」

「私にも?・・・信じられない」

「その気持ちも分からなくもないけど、エヴァやチャチャゼロは全然本気を出していないし、あれくらいならまだまだマナが到達できる力の範疇だ」

「なんだかんだと言ってアスナも『黄昏の姫御子』っていう特別な存在だから、潜在的な力という観点から言えば、マナが最終的にアスナより強くはなれないかもしれないけど、それは今言わなくてもいい事だ。」

「それもアスナが訓練を怠らずに才能の限界まで強くなれるかにかかっているが。」

「うーん・・・」

思案顔でマナが唸る。

「はは、俺からの言葉だけじゃ信じられないってか？」

「そろそろ終わりだな」

最後の盗賊がアスナに吹っ飛ばされ、三人がこちらへと歩く。

「兄さん」

「うん？ どうした、マナ？」

「私も強くなりたい。アスナ姉さんも戦ってるのに、一人だけ守られてるなんてやだ」

「どうやら、マナは色々納得できてないようだ。」

「マナは今まで一人で生きていたんだし、自分が守られる側でいるのに躊躇してるのかも。別に強くなるのに反対しないが、弱いままでも俺たちは気にしないのを知って欲しいな。」

「マナ、一応言っておくけど、無理に強くなる必要はないからな。マナが弱くても俺たちは気にしないし、強くなるのを期待している訳でもない」

「うん、分かってる。それでも私は強くなりたい」

「そうか。まあ、分かってたけどな。うっし、じゃあ、早速明日から訓練を始めるか」

「うん」

「ソウジ、終わった」

「マナとの話が終わる頃、戻ってきたアスナがそう言いながら抱きついてきた。」

「おう、お疲れ、アスナ」

「アスナを労い、その頭を撫でる。そして横から俺の裾を掴んでくる」

マナ。ふふ、愛い奴め。

「エヴァもお疲れ」

「あんな雑魚相手に疲れるものか。まったく、相手を見てから襲ってこい。おかげで余計な時間を食ってしまったではないか」

「えー？ アタシは久しぶりにたくさん暴れてすっきりしたけど。むしろ、こういうことが毎日あってもいいくらいなのに」

チャチャゼロならそう言うよね・・・俺は面倒にしか思えないのに。

「はあ、とりあえず次の街はもうすぐだ。今日はそこまで行ってから休もう」

「そつだな」

* * *

盗賊に襲われた次の日、別荘内。

俺たち五人はいつも訓練に使っている広場に集まっている。

「さて、今日、別荘に来た理由は他でも何でもない、マナの修行の為だ」

「ほう、マナの修行か。アスナと同じく神鳴流の剣術を教えるのか？」

「それも考えてみたんだけど、今はとりあえず体力作りから始めるよ。あと……」

「あと？」

「ん、まあ、すぐにでも戦えるようになれる方法もあるんだが……」

「ぶつちやけパクティオーですね、はい。」

実は、俺、吸血鬼になって600年、一度もパクティオーをしたことがないんだよね。だって、俺もエヴァもどっちも従者はなくとも充分戦えるし、今更どっちかを従者にするにしても、エヴァってもう俺の死徒だし……

「なるほど……ふむ、それならついでにアスナにもやらせるか？」

「うん、それもいいかも」

「ソウジ、何の話？」

話が見えないアスナが質問。その横でマナも分かってなくて、首を傾げている。

「実はな、二人とも。実は今すぐにでも戦力アップができる手段があるんだよ」

「本当、兄さん？」

「まあな。これは、もうかなりの実力を持っているアスナには関係のない話かもしれないが、仲間外れにはしたくないから、アスナにも説明するな」

「うん」

「・・・で、その手段なんだが、パクティオーっていう儀式だ」

「「パクティオー？」」

二人とも聞いた事がないみたいだな。

「うん、パクティオー。これはある魔法使いを主人と認め、そいつの従者になる儀式だ。この場合、俺が主人で、お前達が従者になるな。それで、この契約を結ぶ利点は主に二つある。一つ目は主人から魔力の供給を受けられる事。まあ、これは自分の魔力で自分を強化できるならあんまり意味がないけど・・・そして二つ目は従者に適した素敵な魔法アイテムが贈られることだ」

「「魔法アイテム??」」

「うむ。これらは戦闘用の武器から補助系のアイテム、様々なものがあるが、それをもらって弱くなることはないから、損はないぞ」

「「ふーん・・・」」

「それで、その儀式のことだけど・・・」

「難しいの、ソウジ??」

「いや、儀式自体はすごく簡単だ。問題はやりかただが・・・」

まあ、二人とも子供だし、そんなに問題はないか？

「何をやるの、兄さん？」

「キス」

「「キス？」」

「ソウジ、何が問題なの？」

本気で分かってないような顔をして聞くアスナ。

「二人とも女の子だろ？ それで好きでもない俺とキスをして嫌じゃないのか？」

「別に、嫌じゃない。それに、私、ソウジ、好き」

「俺もアスナの事は好きだけど、この場合、家族としての好きじゃなくて恋人とかの好きの意味だが・・・それを分かるにはまだまだ早いかな」

「兄さん。私も兄さんとのキス、嫌じゃないよ？」

「ありがとな、マナ・・・それじゃあ、二人とも俺とパクティオーをする方向でいいか？ エヴァとする選択もあるぞ？」

「ソウジがいい」

「私も兄さんがいい」

多分こうなるって分かってたけど、エヴァの顔を見るのが少し恐いな。後で構ってやろう。

「あはは、分かった。じゃあ、魔法陣はあっちに用意してあるから、そこに立って」

「うん」

「分かった」

まずはマナが魔法陣の上に立って、俺も隣まで歩いてマナと目線を合わせる為にしゃがむ。

「じゃあ、用意はいいか、マナ？」

「大丈夫だよ、兄さん」

「OK。じゃあ、行くよ！」

『パクティオー』

ちゅっ

マナと唇を合わせると、俺たちは光に包まれ、二人の間に二つのパクティオーカードが現れた。(主人と従者用)

「ふむ、成功だな。マナ、このカードが契約の証だ。そいつを持って『アダアット』と唱えれば魔法アイテムがでてくる。けど、どう

せなら少し待ってアスナと一緒に試してみようか」

「うん」

マナのカードは、っと。

ふむふむ。中央にガンマン姿のマナ。4歳のちびっ子でその姿は少し違和感があるけど、まあ、似合ってるな。その周りにマシンガンやらライフルが浮いていて、右手には下に向けたP90（サブマシンガン）。そして、左手にはこちらに向けたデザートイーグル（大口径のピストル）。

称号は『千発千中の魔女』

察するに、アイテムは何らかの銃？

称号の『魔女』はマナの魔眼を指しているのかな？

とにかく検証は後にするか。

「さて、次はアスナの番だな。大丈夫か、アスナ？」

「うん、いつでも」

「分かった」

マナが魔法陣から出て、今度はアスナがその上に立つ。

アスナの肩に両手を置き、顔を近づける。

『パクティオー』

ちゅっ

先ほどのマナと同じように儀式を行い、パクティオーカードが現れる。

「今度も成功だな。はい、アスナのカード」

アスナのカードには今の10歳くらいのアスナ。服装は助けた時に着ていた巫女服の上に軽鎧。武器は光を纏った剣で、それを地面に突き立てている。

称号は・・・『黄昏の戦姫』

まあ、もう『巫女』って感じでもないし、剣術もかなり上達してるから『戦姫』という二つ名も案外的を射ているかもしれない。

「さて、二人とも契約が無事終わったし、今度は二人のアーティファクトを見てみよう。呪文は『アデアット』。さ、やってみる」

二人にそう言い、二つの頷きが返ってくる。

「『アデアット!』」

呪文を唱えると、二人が持ったカードが光り出し、アイテムに変わる。

光が収まると、マナの両手にはピストルが一丁ずつ握られていて、アスナの手には剣の柄と思われるもの。

あれ??

「柄だけ？」

「ソウジ、これ、武器？」

「うーん、まだよく分からないな。それはちょっと後で考えてみよう。マナの方はもう少し分かり易いな。マナ、ちょっとあそこの的を撃ってみ？」

「うん、兄さん」

マナが頷き、20メートルほど離れている、魔法の練習に使っている的に銃を向ける。

「.....」

パン、パンパンパンパン。

「おお、すごいな！ 全弾命中じゃないか！ 弾は・・・魔力を使った魔弾か？ ふむ、それなら滅多に弾切れなんか起きないだろうな」

マナを見ると、魔眼を発動している。そのおかげで命中しているのは分からないけど、その可能性が高いだろう。

「へへ.....」

「なあ、マナ、そのアーティファクトってピストルだけか？ カー

ドの絵柄からどんな銃にもなれるようだから、ちょっと試してみて
?」

「分かった・・・兄さん、どんな銃がいい?」

「そうだなあ・・・それじゃあ、ライフルなんてどうだ?」

「やってみる」

それからマナが目を閉じて少し集中すると、ピストルはまた光り出し、今度はボルトアクションのライフルに変わった。魔弾を撃つ銃にボルトは意味があるのかは疑問だが、これも仕様なのか?

「おお、変わったな。ふむふむ、これは中々使い勝手がいい物が出たな。当たりだな、マナ。後はこれに合った技術を身につけるだけだな」

「がんばる」

「マナはこれでいいとして・・・今度はアスナか。アスナ、ちょっとこっちに來い」

アスナを呼ぶと、彼女は柄だけの剣を持って俺の側に來た。

「・・・うーん、やっぱ柄だけだよな・・・エヴァ、こつこつこの、見た事あるか?」

「全くないな。そもそも、これは役に立つのか?」

エヴァのもっともな疑問を聞いて、アスナは若干肩を落とした。折

角、契約をし、もらったアーティファクトなのに、それは用途不明の柄だけの剣。気も落ちるだろう。

ここはアスナのバクティオーカードをもう一度見てみよう。アーティファクトはそれに写っている筈だし・・・

「ふむ・・・カードに写っている武器と言えば、この光ってる剣だけだが、やっぱりこれだよなあ？・・・って、こいつはまさか!!!
アスナ！」

「え?! なに、ソウジ？」

すごい考えに至り、思わずアスナの肩を強く握った。

アスナの痛がる顔を見てそれをすぐに止めたが、俺の興奮は止まらない。

「アスナ、その柄を構えて、『光よ!』と唱えてみてくれ」

「????分かった・・・」

俺の推理が正しければ・・・

「光よ!」

ぴかっ!

「おお、やっぱり!」

アスナが呪文を唱えると、何も無い柄から突然、まるでラトセイ

バーのように光が剣を作るように出た。あのカードに載っていた光る剣は、剣が光っているんじゃないかと、剣自体が光で出来ていたんだ！

「ソウジ、あれが何なのを知っているのか？」

「ああ、エヴァ、ありゃ、光の剣だ。またの名はゴルンノヴァ。名前の通り、魔力を光の剣に変えてるんだろう。あれの威力はすごいぞ。正に伝説級の武器だからな」

「ほう、それほどの物が。よかったな、アスナ」

「うん。ありがとう、ソウジ」

「私も、ありがとう、兄さん」

「別に礼を言われるほどのことじゃないが、とりあえず受けとろう。さて、これからマナの修行を始めようかと考えていたが、二人ともアーティファクトを使って色々試したいだろうから、今日の予定はそれにする。異論はあるか？」

「うっん」

「ない」

アスナ、マナは二人とも首を横に振る。

「分かった。じゃあ、最初は俺がマナの方を見て、アスナはエヴァに任せる。それで、数時間後に交代しよう」

その方がどっちも見れるしね。

皆はその提案を受け入れ、俺はマナと一緒に標的がある場所に向かった。

それにしても、光の剣か・・・やっぱり魔法とか技とか、強化されるんだろうか？

あと、光の剣＋魔法使いと言えばギガスレイブ。いつかアスナに試させてやりたい事だ。

・・・まあ、流石に世界を崩壊させたくないし、ドラグスレイブに留めた方がいいかもしれないけど。そもそも発動するか分からないし。

「よし、じゃあ、マナ。とりあえず、そのアイテムがどんな銃になれるかを試してみようか」

* * *

後日談。

「黄昏より暗きもの、血の流れより紅きもの・・・」

はい、好奇心に勝てず、光の剣を構えたアスナにあの呪文を撃たせてます。

「・・・等しく滅びを与えんことを。
ドラグスレイブ 竜破斬！」

呪文を唱え終わり、アスナの剣から魔法が放たれる・・・

ドーーーーー！！！！！！！！

「・・・・・・・・・・」

正直、舐めてました、ドラグスレイブ（強化版）

山が丸々、一つなくなりました。

流石の俺でも、素で同じようなことをやるのはちょっと難しいです。

「アスナ、これは永遠に封印した方がよさそうだ」

「そうね、ソウジ」

アスナも分かってくれたか。

よかった、よかった。

第四十二話：ついにソウジ、始めてのパクティオー！x2（後書き）

パクティオーです。

こんな感じでしょうか？

感想を待っています。

第四十三話：数年振りの仲間との再会（前書き）

お待たせしました。続きです。

第四十三話：数年振りの仲間との再会

<side:ソウジ>

「はあ？ 仕事？ やだよ、めんどくさい」

マナと一緒に旅しはじめてから数ヶ月が経ったある日、ふとナギから電話がかかってきた。何でも、これから大きい仕事があり、『紅き翼』のメンバーを集めているとか。

「まあまあ、そう言うなよ。他の皆も来るんだ。お前達だけいないのも何か寂しいし……」

「その仕事ってのは、俺たちが手伝わないといけないほど厄介なものなのか？」

「確かにすこーしだけ大変な仕事になりそうだが、別にお前等が来なくても大丈夫だ。けど、俺も他の奴らも久しぶりに会いたいから来てくれないか？ 仕事自体に参加しなくてもいいから」

仕事は面倒くさいが、久しぶりにあいつらと会うだけなら行ってもいいか？ それに、気分次第では仕事も手伝うかもしれないし。

「分かった。そういう事ならそっちと合流するよ。場所はどこだ？」

「そうか！ よかった。仕事の場所は旧世界にある、トルコのイスタンブールだ。細かい合流地点とかはまた後で連絡するけど、今は近くのゲートからあっちに向かってくれ」

「トルコね……分かった。あつ、あと、京都で別れた時から新し

い仲間が一人できたから、そいつも紹介するよ」

ナギたちはマナの事をまだ知らないからな。

「仲間？　どんな奴だ？　強いのか？」

「まだ小さい子供だ。強いも何も、それ以前の問題だ」

「つたく、どんだけのバトルジャンキーだ。」

「俺は子供ときでも充分強かったぞ？」

「子供の意味が違う。マナはまだ五歳だ。それに、人類最強のお前と一緒にされるとあいつも困るだろう」

「マナ？　それがその子供の名前か？」

「ああ。少し寡黙だが、かわいい女の子だ」

「ふーん、そいつは会つのが楽しみだな。とにかく、俺は他の皆にもお前達が来る事を報告する」

「はいよ・・・じゃあ、またな、ナギ」

「おう、じゃあな、ソウジ」

プツンと電話が切れる音がして、それから受話器を置く。

旧世界で『紅き翼』の再会か。

とりあえずエヴァ達に言っておかないとな。

そういえば、マナは旧世界に行ったことがないんだっけ？

最初はイスタンプールに行くとしても、その後はまた日本に行こうか。そろそろ鶴子との約束のタイムリミットの筈だし、京都にもよらないと。

ついでに、今は三歳か四歳くらいの木乃香や刹那にも会えるし。

* * *

「久しぶり、ソウジ、エヴァ、アスナ。それに、チャチャゼロ・・・それと、これがソウジの言ってたマナって娘か？俺はナギだ、よろしくな」

「よろしく」

ゲートを通り、俺たちはイスタンプールに向かった。

今は他の仲間が集まっている拠点に使う宿にいる。少々寂れた感じがする所だが、まあ、悪くない。

「久しぶりだな、ナギ。アリカや他の奴らはどこだ？」

俺たちを出迎えたのはナギ一人。もしかして他の仲間はまだ来てないのか？

「ガトウやアル等は今、街に出てる。アリカはここに来てねえ」

「アリカ、大丈夫？」

一応、自分の親戚であるアリカがここにきていないと聞き、アスナが心配そうに問う。

「心配ねえよ、アスナ。むしろめでたい事だ」

「めでたい？」

「おうよ。実はな、ここに来る少し前にアリカが体調を崩して医者
に診てもらったんだが、なんと、妊娠してるって事が分かったんだ
！」

「妊娠?!」

いきなりのビッグニュースだぜ、こりゃ。思わず、エヴァとハモつ
たよ！ けど、時期を考えれば、アリカがネギを宿しているのも不
思議じゃない？

「まあな！ だから、今はあいつに無理をさせたくねえし、今回は
家に置いてきた」

「そうか。おめでとう、ナギ。というか、よく今まで子供ができな
かったな」

あのいちゃつきぶりなら、すぐにできてもおかしくはなかったのに。

「ははは、まあな！ いやあ、もう少しで俺が種無しなのかを本気

で心配するところだったぜ！」

「アリカ、おめでた？」

アスナ、そんな言い方、どこで覚えた？

「そうだけ、アスナ。来年にはお前の家族が増えるんだぜ。男か女かは分からねえけど、よろしくしといてくれな？」

「うん、分かった」

ナギがイカしたスマイルをしながらアスナの頭を撫でて、今度生まれてくる子供のことを頼む。

撫でられたアスナはあんまり表情を変えなかったが、僅かに笑い、それを了承。

「赤ん坊の名前は決まったか？」

ふと気になり、ナギにそう聞いた。

「うーん、まだ性別が分からないからなんとも言えないが、男なら俺の名にちなんで『ネギ』と考えている」

やっぱりか。

「ふーん、まあ、いいんじゃないか？」

「なんだよ、ソウジ。その名前に文句があるのか？」

「別に文句はないけど、日本に行けば、それって野菜の名前だぞ？」
野菜坊主とか言われてたのを覚えてるぞ？

俺に指摘され、ナギは一瞬ピクつと眉を動かした。けど、それをす
ぐに消し、話を続けた。

「あー・・・まあ、別に日本で育てようとか思ってねえし、その
所為で虐められるとかないだろ。大体、俺の息子だぜ？ 虐められ
るとか考えられねえ。それに、息子が生まれるとは限らねえし」

明らかに『今気づいた』って証明するように苦しい言い訳をするナ
ギ。

もしかして考えていなかったのか？ 何年も京都で住んでいた筈な
のに、気づいていなかった？

確かに今のナギを見れば原作のように鬱々とした根暗な性格をした
子供は想像できないけど、それってただの詭弁じゃない？

けど、もしこれで名前が変わったら、もう『ネギま』って成り立た
ないんじゃないか？ 同じ路線で『又ギま』にでもなれば、それは
それで面白いが。

「とにかく、おめでとうな、ナギ。名前のことはともかく、子供が
生まれることは嬉しいことだ。俺とエヴァも自分の子供は欲しいと
はいつも思ってるんだが、不死な吸血鬼である所為か、生まれにく
い体質らしい」

数百年前からそういうことはしてるけど、いつころにも生まれてく

る兆候がないんだよね・・・まあ、吸血鬼がそんなにぼんぼんと生まれたら、世界が吸血鬼で溢れてしまうから、一種の星の自己防衛手段かもしれない。

「まあ、その代わり、時々アスナやマナみたいに親をなくした子を引き取っては育てていたんだが、人間だからな。十数年もすればそいつらは大人になり、親離れし、いつかは老い、亡くなった」

その時のことを思い出したのか、エヴァは少し暗い表情を浮かべたが、それは悲しいというよりも、寂しい感情から来てるんだろう。あいつらは皆幸せに生きたし、最後は家族に囲まれながら逝ったしな。不幸中の幸いに、レーベンスシユルトが滅ぼされた時、俺たちが直接育てた子はおそこにはいなかったが、それでもあいつらの子孫がいた。だからこそ俺たちの怒りも半端なかったと言えるだろう。

「そうだったのか・・・不老不死もいいことばかりじゃないんだな。自分の子の死を見ないといけないなんて考えたくもねえよ」

申し訳なさそうにナギが言う。

「ああ。だから、ナギ、子供を大切にしろよ？」

「つたりめーだろ！俺が『サウザンドマスター』なら、俺の子は『ミリオンマスター』と呼ばれるほどにしてやるぜ！」

「お前とアリカの子ならそれもありえるかもな・・・」

そこまで話し、横のマナがあくびを噛み殺しているのを見た。

「おっと、ちょっと話し込みすぎたか。ナギ、俺等はとりあえず部

屋に行つて少し休む。他の奴らが戻ってきたらまた呼んでくれ」

アスナとマナの頭に手を乗せ、二人の疲れをナギに気づかせるように注意を向けさせる。

「おう、分かったぜ、ソウジ。じゃあ、また後でな、皆！」

二重の意味でナギが了解し、手を振りながら俺たちを見送った。

さてと、部屋に行つて子供二人と昼寝でもするかね。エヴァも誘えば一緒に寝るかな？

第四十三話：数年振りの仲間との再会（後書き）

本当はガトウの死まで書く予定だったこの話でしたが、ネギの話が入り、少し長くなりそうだったのでここで区切ることにしました。

これは少し関係ないことですが、いつの間にか地文でソウジがエヴァを『キティ』ではなく、『エヴァ』と呼んでいることに気づいた駄目作者です。これは直したほうがいいでしょうか？ 直す場合、『エヴァ』と『キティ』のどちらで統一したほうがいいでしょうか？ 本当に大切だと思っっていると見せる為に二人だけの時以外、ナレーションでも『エヴァ』で統一しようと思っっていますが、正直悩んでいます。それと、もしそれほど気にならないならば、このまま放置という選択もあります。何も意見がなければ、多分こうなるのが一番確率が高いです。それでは、皆さんがどう考えているのかが聞かせて下さい。待っています。

第四十四話：宴会と仕事（前書き）

話が進まねえ・・・

第四十四話：宴会と仕事

<side：ソウジ>

イスタンブールに着いたその日の夜、偵察から戻ってきたアル、ガトウ、タカミチ等を巻き込んだの宴会になった。

そして宴会が始まってから数時間、他の奴らに酒がほどよく回っており、そろそろお開きになりつつある。

それを横から見てみると、ふとタカミチ（なんと、今年、高校を卒業するらしい）と一緒にアスナと話しているガトウが目に入った。ガトウは椅子に座っていてタバコを吸っている。そしてその周りには子供の二人。

京都で別れる時、ガトウは特にアスナのことが気になってたから、俺たちといた間をどうやって過ごしていたのかを聞いてるのだろう。あつ、アスナがパクティオーカードを取り出して光の剣を具現化させた。それを見たガトウとタカミチは驚きを顔に浮かべ、ガトウはぴくっと眉を動かし、俺を睨んだ。

な、なんだよ?! 俺になんか文句あんのか?!

そうだよ、俺がアスナとパクティオーしたんだよ!

うっ、そそそそんな目で俺を見るな! 俺はロリコンじゃねえー
|-----!!!

そりゃあ、確かにアスナとも、アスナよりも小さいマナともパクティオーをしてるさ! けど、それは恋愛対象として見てるからじゃ

ないぞ！ 家族愛だけなんだ！

はあ・・・何言ってるんだろ・・・ガトウの睨みはそういう意味じゃないかもしれないし。

やれやれ。

でも、あれ・・・？

この三人のこういう姿・・・なんだか見た事があるような・・・

どこだっけ・・・？

って、そうだ！ ガトウが死ぬ場面ってちょうどこんな感じだった！

そう言えば、あの事件ってこの時期じゃなかったか？

というか、もしかしてこの仕事がそうなのか？

だが、どうやってガトウに知らせる？

『もしかしてこの仕事に参加すると死ぬかもしれないから止める』？

そんなのじゃ無理だろう。こんな仕事をやってりゃ死ぬ危険なんてしょっちゅうだし、今更それで止めるような奴でもないだろ。

俺と一緒に仕事に出て、いつも横で守る？ じゃあ、もしこの仕事でそれが起きなかったらどうする？ これからずっとガトウに付いて行くのか？ それこそ無理だ。それに、この仕事だって、俺がずっとガトウを見ていられる訳じゃない。ふとガトウから目を離れた

際に攻撃されるかもしれない。やっぱり現実的じゃないな。

所詮俺にできることなんて、ガトウにいつもより気をつけるように注意することくらいだ。

あとは、そうだな。ナギと少し話をするか。

・

・

・

「ナギ、少しいいか？」

皆から少し離れた場所で一人で食べているナギに近づいて声をかける。何か考えている様子だったが、多分アリカのことだろう。

「おっ？ ソウジじゃねえか。楽しんでるか？」

「ああ、普通に楽しんでるぞ？ それより話だが・・・」

「あん？ どうしたんだ、ソウジ？」

「仕事のことだが、やっぱり俺も手伝う」

俺がそう言つと、ナギが不思議な顔をして俺を見た。

「どついつ心境の変化だ？ お前が意見を変えるなんてあんまりないのに」

確かに、俺は頑固って言われるほど普通は考えを変えない。それは俺のほうが正しいと信じて疑わないからだ。もちろん、俺が間違っているなら喜んでそれを受け入れる。

「なに、少し気になることがあってな・・・」

「ふーん、よく分からねえけど、分かった。ソウジが手伝ってくれらるなら心強いぜ。じゃあ、早速明日からよろしく頼む！」

「ああ。あと、仕事の際はガトウと組ませてくれるか？」

「ガトウとか？ どうしてだ？ ・・・って、さっきと同じ答えか。まあ、大丈夫だぜ。多分タカミチも一緒に行くと思うが、それでもいいだろ？」

「了解だ。エヴァにアスナとマナの世話を任せるから、あいつらは仕事に参加しないが・・・」

はつきり言っただかミチ程度なら今のアスナの方が数倍強いと思うけど、それでもまだまだ子供だからな。危険が伴うこの仕事と関わらせたくない。

「気にすんな。元々そう考えていたしな」

「そうか。まあ、あいつらにも仕事をさせると言われても困るけどな」

「ははは、違くないな。もし、俺がそう言った時のソウジの顔を想像もしたくねえ」

はて、俺ってそんなに恐いかね？ そりゃ、もしもそう言われれば怒るし、ナギを睨んだと思うけど・・・まあ、これはナギが冗談まじりに言ったことだし、そんなに気にしなくてもいいか。

「とにかく、ガトウと組ませる件、よろしくな」

「任せる・・・ソウジはこれからあいつらんとこに戻るのか？」

ナギの視線は向こうにいるエヴァとマナに向いている。

「そうだな、そろそろアスナ達を寝かしつける時間だし、俺もあいつらと一緒に部屋に戻る」

「そうか。アスナも限界のようだし、ソウジも行ったほうがよさそうだな」

「ああ、じゃあ、また明日な、ナギ」

「おう、また明日！」

お休みの挨拶をナギと交わし、俺は席を立ってエヴァとマナ、そしてガトウと別れ、眠そうに目をこしこしと擦っているアスナの側まで歩いた。

「アスナ、ガトウとの話は楽しかったか？」

「ん・・・いろいろ・・・聞かれた・・・」

「そっか。そりゃ、よかった。久しぶりに会ったけど、どうだった？」

「ちよつと・・・年、取った・・・・・・・・ソウジ・・・」

おう、それはガトウに面と向かって言ったのかな。少しガトウに同情するぜ。多分、始めて子供に『おじさん』って呼ばれるくらいの衝撃があっただろう。

「なんだ、アスナ？」

「眠い・・・」

「はは、そっか。じゃあ、そろそろ部屋に戻って寝ようか」

「ん・・・」

もう、目を開けているのも辛い感じだな。

「エヴァとマナもそれでいいか？」

「ああ、私はそれでいいぞ」

マナは・・・

ありゃりゃ、首をかくくんかくんさせている。もう限界を通り越してもう眠る寸前だ。これは早く寝かしつけないと。まあ、まだ五歳だし、マナにとって夜十時は十分に遅い時間帯だ。

「ほら、マナ、部屋に戻るぞ」

マナの両脇に腕を通し、彼女を抱き上げた。

「ん、兄さん……」

抱っこしたマナは俺の首に腕を回し、肩に頭を預ける。そんなマナを片腕で抱え直し、反対の手でアスナの手を掴み、エヴァと共に部屋に戻る。そして、会場を去る際、まだそこに残っているチャチャゼロに声を掛けた。

「チャチャゼロー、俺たちは部屋に戻るが、お前はとうするー？」

「まだ残るー……酒もこんなに残ってるしー」

まだ飲むんかい……

「おう、チャチャゼロ、こっち来い！ まだまだ飲むぞ！」

「何よー、ジャック！ こんな良い酒を今まで独り占めしてたのー？ ずるいわよー！」

あー、これは朝まで続きそうだな。ジャックは明日、仕事があるんじゃないなかったのか？ でも、後悔するのは自分だし、俺には関係ないか？

「分かった。じゃあ、お休み、チャチャゼロ、ジャック、それに他の皆も」

「おやすみー、ソウジー」

「じゃあな！」

チャチャゼロとジャックに続いて他のやつらから挨拶が返り、それを背中で受けながら俺たちは会場を後にした。

* * *

「じゃあ、俺はちょっとガトウに付いて行く。エヴァ、アスナとマナをよろしく」

「ああ、分かった」

「ソウジ、行っちゃうの？」

「悪いな、アスナ。本当は一緒に遊びたかったけど、今回はあいつらと一緒に行ったほうが良いような気がするんだ。アスナとマナはエヴァと待っていてくれ」

「うー・・・分かった」

「兄さん、行ってらっしゃい」

「ちょっと行ってくるよ、マナ」

宴会の次の日、宿の前でエヴァ達と短い挨拶を交わし、手を振りながら、少し先で待っているガトウとタカミチと合流する。

「今日の仕事に付いてくるって聞いたときは驚いたぞ、ソウジ」

近づくと、ガトウからの最初の言葉がそれだった。

「悪いな、ガトウ。迷惑だったか？」

「いや、助けはいつでも歓迎だが、今回、ソウジは仕事を手伝わないと聞いていたんでな」

「ちょっと気になったことがあってな。杞憂で終わればいいが、なんとなく嫌な予感がするんだよ。だから、ガトウもなるべく注意してくれ。タカミチもな」

「分かった。ソウジがそう言うならいつもより気合いを入れよう。タカミチ、ソウジに修行の成果を見せるチャンスだぞ。しっかりやれ」

「はい、師匠！」

ガトウの激励にタカミチが元気よく返事する。

これが本当に危険ならタカミチも連れて行きたくないが、あいつの師匠がガトウである限り、それは俺が決めることじゃない。ガトウがタカミチの実力が足りていると判断したのなら、それはガトウの責任だ。

あとは、この嫌な予感が杞憂で終わることを祈るだけだ。

第四十四話：宴会と仕事（後書き）

今回ソウジは薄れている原作知識を運良く思い出せました。けど、ガトウが死ぬ時の詳細を知らないの、具体的な解決案を思いつけず、仕事に付いて行くという受け身なことしかできません。これでガトウを助けられればいいですね。

第四十五話・死亡フラグなんてへし折ってやるぜ！・・・あれ？
(前書き)

少し短いですが、すみません。

第四十五話：死亡フラグなんてへし折ってやるぜ！・・・あれ？

<side:ソウジ>

「そう言えばだな、ガトウ」

これから仕事に向かう途中、俺はふとガトウに話しかけた。

「なんだ、ソウジ？」

「・・・結局、今回の仕事ってなんなんだ？」

「ずでん。」

俺の質問に対して、コケることで答えたガトウ、ついでにタカミチ。

「ソウジ、仕事の内容も知らずに付いてきたのか？」

呆れと困惑が混じった顔でガトウが聞く。

「元々、参加する予定がなかったからな。ナギからは何も聞いていない」

「それでも少しくらい話すと思うが・・・まあ、いい。今回の仕事は『完全なる世界』の残党が関わっているかもしれない組織を壊滅させることだ」

「奴ら、まだ残ってたのか？　しぶとい奴らだな」

しかし、『完全なる世界』の残党か。なるほど、確かに大変な仕事

になる可能性大だな。

「とにかく、そう言う訳で、俺たち『紅き翼』が集められ、他にも多数の魔法使いが雇われている」

「他にも魔法使いなんているのか？」

昨日は宴会やらで、他の人に会わなかったのも仕方がないかもしれないけど、今朝もまだ誰にも会っていないぞ？

「皆、別々の任務を受けているからな。その内の何人かは同じ宿に泊まっているから、あとで会うかもしれない」

「そうか・・・それで、俺たちの任務は何だ？」

質問されたガトウは一度タカミチを見てからそれに答えた。そして不満顔になるタカミチ。どうしてタカミチを見る必要があるんだ？そして、何故タカミチはそんな顔になる？

「奴らの拠点の一つと思わしき建物に行き、偵察をし、それを報告することだ」

「それだけか？・・・って、なるほど」

だからタカミチを見たのか。

随分簡単な任務に一瞬戸惑ったけど、それは実力に不安があるタカミチのことを考慮してか。

そこまで考えて、一度タカミチを見ると、タカミチは少し気まずそ

うに目を逸らした。

自分の所為でガトウや俺の力に見合わない仕事をやらされているのを申し訳なく感じてるのか？ けど、そんな事は気にしなくてもいいぞ、タカミチ少年（青年？）よ。簡単な仕事、多いに結構。大体、戦闘とかはそれが好きなナギやジャックのような奴らに任せろ。俺はそんな面倒くさいことはやりたくねえ。

「分かった。それで？ その建物とやらはもうすぐ着くのか？」

「空を飛ばすすぐに着くが、今は目立ちたくないからな。歩きで行くと、あと30分ってとこだ」

「あいよ」

それ以降はたわいない話をしながら件の建物の様子が分かる向かいのビルに三人で入った。どうやらそこには監視にちよūdい店があるらしく、俺たちは窓際のテーブルに座って偵察を開始した。

・

・

・

数時間後。

俺たちは同じテーブルに座っていて、相変わらず監視を続けている。

普通なら、数時間も同じ席に座り続けていたら店員に目を付けられるが、そうならないように時々ドリンクや軽食を頼んでいる。

いつまでも同じ席を占有している、せめてもの償いだな。

それにしても、数時間、あの建物を監視しているが、全然怪しくないな。

「ガトウよ、あそこは本当に奴らの拠点の一つなのか？」

「ソウジ、まだ数時間しか経っていないぞ。そう簡単に尻尾を掴ませてくれるもんか。少なくとも数日は覚悟しておいたほうがいい」

「はあ・・・まあ、偵察任務なんてそんなもんか・・・うん？　おい、ガトウ、何か、あそこ、騒がしくなってるぞ。どうかしたのか？」

「なんだと？」

ガトウに言った通り、向かいの建物が騒々しくなっている。何人も慌ててビルから出てきていて、怒号などが聞こえてくる。そして、それが始まってから数瞬後、突如、爆発が起きた。

ドゴーン！！！！！！

衝撃波で俺たちのいる店の窓がガタガタと揺れる。

「どわっ！！」

「くっ！」

「うわあっ！」

俺たち三人を含む店の客に店員は反射的に地面に伏せ、テーブルの下などに隠れる。

けど、すぐに俺とガトウは立ち上がり、向かいのビルに目を向ける。

「どつやら当たりのようだが、先を越されたみたいだな」

「そうだな、ソウジ」

ビルを見続けていると、煙の中から一つの影が飛び出し、それを追うように十ほどの影が続いた。

「あれは・・・」

「最初の影は女性のようなだったが・・・あとの奴らに追われていた？ ガトウはどうみる？」

「確かに、追われていたみたいだったな。それに、確証はできないが、あれは多分俺たちの仲間だ」

「彼女を知っているのか？」

「知り合いというほどではないが・・・とにかく、あとを追おう。俺が知っている人と同じなら、彼女は強いが、さすがに十対一じゃあ分が悪い。タカミチは本部に戻って、このことを報告しろ」

「分かりました」

「分かったぜ、ガトウ。それなら、急ごう」

相手の力量が分からないので、タカミチにはここから別行動をさせるらしい。

タカミチはすぐに了承し、俺たちはその場で別れる。タカミチは本部へ、俺とガトウは女性とその追手の追跡へ。

「行くぞ、ガトウ！」

「ああ！」

それからすぐに俺たちは店を出て、一般人に見られるのも構わず、魔法で飛んだ。

・

・

・

< side : 謎の女性 >

しくじったわ！

あたしの任務はただの偵察だったけど、いくら待っても、あたし達が欲しい情報はなかった。

それに我慢できなくなったあたしは命令を無視して一人であそこに潜入した。もちろん、あたしの仕事のパートナーであり、人生のパートナーでもある、あたしの夫は猛反対したが、あたしはそれを強引に振り切り、潜入捜査を実行した。

けれど、潜入して一時間もしないで、あたしは見つかり、追われた。

「くっ、追いつかれる！」

ちよつと後ろを振り返ると、十人の追跡者はもう少しであたしに追いつく距離にいた。

「これってある意味、奴らの拠点の確認という目的達成なんだけど・・・ごめん、あなた。あたしもう駄目かもしんない」

諦めるのは嫌だけど、このまま追いつかれれば、あたしがどうなるかなんて分かり切っている。そして、その結果はそう遠くない未来にある。それこそ、奇跡的にヒーローの登場でもなければ、あたしはもう駄目だ。

それから十数分。あたしは必死に逃げ続けたけど、町外れの工場跡でついに追いつかれた。

覚悟を決めないといけないようね。

「ごめんね、裕奈。ママ、帰れそうにないわ。あなた、あたしたちの娘をよろしく頼むわね・・・さあ、悪の手先どもめ！あたしを追ってきた事を後悔させてやるわ！」

あたしが走るのを止め、振り返りながら追手どもにそう宣言すると、やつらはあたしを包囲するように舞い降りて各々の武器を構える。

あたしも自分の魔法銃を取り出し、戦闘の準備をする。

せめて、半分は道連れにしてやるわ！

けれど、あたしが最後の覚悟を決めると同時に、ここにはいない筈の第三者の声が廃工場に渡り響いた。

「悪いが、ちょっと待ってもらおう！」

< s i d e : ソウジ >

俺たちが追いついたのは、今は使われていない、寂れた工場だった。仲間の魔法使いと思われる女性は囲まれていて、戦闘は今にも始まりそうだ。

このまま戦いが始まつたりすれば、結果は明らかだ。けど、ここに俺とガトウが来たからには、絶対にそうさせはしない！

「悪いが、ちょっと待ってもらおう！」

その為には、まず奴らの意識をこちらに向かわせないとな。

第四十五話：死亡フラグなんてへし折ってやるぜ！・・・あれ？

（後書き）

死亡フラグはへし折っていますが、狙っていたの（ガトウの）とは少し違いますね。

分からない人の為に説明しておきます。謎の女性は明石夕子、明石裕奈のママです。これで裕奈がどうなるのかは作者にも分かりませんが、多分ファザコン度は少しくらい下がる？

第四十六話：明石夕子（前書き）

今回、いいサブタイトルが思いつかなかった・・・

第四十六話：明石夕子

<side：ソウジ>

俺とガトウが来ても相手に十対三という数の有利があるのは変わらない。

まあ、あくまで数の上での話だけだ。

「だ、誰だ、貴様等！」

「ふん、これから消えて行くお前達には関係ないことだ」

不敵な、というか微妙にあくどい笑いをしながら女性を囲んでいる魔法使いの問いに答える。

あ、あれ？　もしかしてこれって、俺の方が悪党に見える？

ガトウと女性の顔を見れば、やっぱり微妙な表情を浮かべている。

「い、今のなしだ！　俺はソウジ・ホウキ、こいつはガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。そこにいる女（名前は知らないけど）の仲間だ！　あつ、けど、このままそいつを襲ってんなら、お前たちが消えるのは本当になるよ?!」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

ぐっ、皆、俺を変な奴を見るような目で見てる・・・

「だ、誰だ、貴様等！」

えっ、全部なかったことにするの?!

「その女性の仲間だ。彼女は助けさせてもらうぞ」

ガトウもそれに乗るの?!

「あなた方は『紅き翼』の……どうしてここに?!

あう……あなたもなんですね、名も知らぬ女の人。

いいですよ、どうせ俺は変な奴ですよ。

本気でやらないが、工場の片隅での字を書きたくなる気分になる。

「ば、馬鹿な! なぜ『紅き翼』がここにいる?! 情報では奴らは全員違う場所にいたはず!」

俺たちがここにいる事に魔法使いの男の一人が驚く。

「俺たちの行動がばれていたのは驚きだが、ここにいるのだから、それについて考えてみましょうがないだろう?」

実際、俺が突然ガトウと一緒に仕事をする事になって、任務の内容が変わったのかもしれない。

それからガトウと奴らの言い合いがしばらく続いたあと、敵は包囲を解き、この場から消えた。

「ガトウ、あいつらを逃がしちまったけど、よかったのか?」

いや、正直に言って、戦闘は面倒で嫌だけど、さっきの奴らを逃がしちゃったら、こちらの事が色々知られてまずい事になるんじゃないか？

「別に構わん、ソウジ。どうやら、すでに俺たちのことは筒抜けになっっているし、奴らを逃がしても、俺たちがこれ以上に困ることはない。そして、今回の目的は彼女を助けることだ。これでその目的は果たしたことになるだろ？」

「まあ、今回の仕事についてはガトウの方が詳しいから、その判断は任せる」

「それなら、早く彼女の所に行くぞ。怪我がないか、確認しておかないと」

「そうだな」

とりあえず、奴らは消えたし、彼女の様子を見よう。離れたところから見たら、酷い怪我はないようだが、分からないからな。

俺とガトウは彼女の側まで飛び、具合を聞く。

「お前、大丈夫だったか？」

「はい、大丈夫です。助けて下さってありがとうございます、ソウジさん、ガトウさん」

無事だったか。

「どうやら俺たちのことを知っているが、お前は？ あの場合にい

たから、俺たちの仲間らしいが、あそこに誰かが潜入するとは聞いていないぞ」

ガトウがもつともな疑問を彼女にぶつける。

すると、彼女は気まずそうな顔をして返事する。

「あたしは明石夕子。ガトウさんの言う通り、一応仲間です。あたしも本当は偵察をすることだけが任務だったんだけど、それに痺れを切らし、強引に潜入してしまっただんです、なはは……」

明石夕子か。名前からすると、日本人の魔法使いか？

ん？ 明石？

確か、ネギのクラスに明石って娘がいなかったか？ もしかしたら、関係があるのか？

「思い切ったことをやったな……馬鹿な事とも言えるがな」

「うっ、ソウジさん、酷いです。あたしも少し浅慮だったかなあ、と思っていたのに、追い打ちをかけなくてもいいじゃないですか・

」・

本音が思わず口から漏れ、それを聞いた夕子が涙目になり、いじける。

「自業自得だ、馬鹿者。とにかく、ここから離れるぞ。お前も仕事の相方が心配しているだろう？」

「はい、そうですね。あたしも早くあの人に無事を伝えたいです」
そう言う夕子の顔は愛しい人の事を思っているようで、一瞬見惚れるほど綺麗だった。よく見ると、彼女の左手の薬指に指輪が嵌められているが見える。きっと彼女の相方は夫でもあるのだろう。

それから俺たち三人はその場所を離れ、作戦本部へ報告をしに帰った。

・

・

・

本部に戻ったあと、俺たちは事の顛末とスパイがいる可能性が高い事を説明してから宿に戻った。

途中、彼女の夫と合流し、二人も俺たちの泊まっている宿に招待した。

その際、夕子の夫は泣いて喜び、夕子は困った顔をして子供をあやすように彼の頭を抱きしめた。

そして、今、皆も宿に戻り、俺たちは夕子たちを巻き込んだの宴会になった。

というか、ナギたちといれば、毎日が宴会になっているのは俺の気

のせいかな？

「へえ、マナちゃんって言うんだ？ マナちゃんは今、何歳？」

「えつと・・・」

「マナは誕生日を覚えていないからな。多分、五歳くらいだが、よくわからん。まあ、学校にも行っていないし、今は特に困った事にはなっていないな」

宴会が始まり、俺がマナと食べていると、皿に色々な食べ物のをせた夕子が近づいた。大戦の英雄としての俺しか知らない夕子が子供と一緒にいる俺が気になっただらしい。

「ふうん、そうだったのね。実はね、あたしにもマナと同じくらいの娘がいるから気になっていたの」

「ほう、夕子にも娘がいるのか？」

やっぱり、そうだったのか。

「うん。裕奈って言うんだけどね、今年の六月に五歳になるのよ」

じゃあ、マナが4、5歳でもいいか。マナを拾ったのが去年の11月頃だったから、それを四歳の誕生日に設定するか？

それにしても、夕子の口調が変わっているんだが・・・最初に会った時は敬語だったのに、今はなんだか馴れ馴れしいぞ？

俺は別にそれを気にしないが、少しびっくりしたぞ。これはあれか

？ 親同士としての親近感が何かを感じて口調が普段の物になっているのか？

「裕奈と言うのか。夕子に似たなら将来はさぞ男泣かせな女に育つだろうな・・・少し能天気にもなるかもしれんが」

「もう、ソウジさん！一言余計ですよ！」

「ふっ、甘んじて受けるんだな、夕子。お前は今日、死ぬ所だったんだ。からかわれるくらいなら軽いもんだろ？」

「うっ・・・そうですね。これからはもう少し気をつけます」

「というか、こんな仕事を辞める。娘がいるのだろう？ そいつともっと時間を過ぐせ」

「でも、あの人のことが心配なの。それに、あたしはあの人のミニストラ・マギよ。あの人がこの仕事を続けている限り、あたしはやめる訳にはいかないのよ」

そう言う夕子は向こうでガトウやジャックと一緒に食べている男性を見ている。

「あいつがこれ続けている限り、やめる訳にはいかないか。それならあいつを説得しろ。お前はただそいつに付き従うような女なのか？ 先ほどのことを鑑みれば、決してそんな女じゃないような気がしたんだが・・・」

違うか？ と、目だけで夕子に聞く。

バン！

それを聞いた夕子は両手でテーブルを叩き、立ち上がった。その目には決意が籠っていた。

「そうね！　そもそも、この仕事だって、あの人に付いて来ただけのよつなもの！　あたしは乗り気じゃなかったけど、あの人がどうしてもって言うから・・・でも、それも今回限りよ！　こんな危険な仕事、もうやめさせるわ！　あの人、頭がいいから、麻帆良大学の教授になるのも夢じゃないわ！」

あれ？　何か、一人の世界に入った。

「・・・ええ、そう。そうよ。それがいいわ。早速、あの人と少し『お話』しないと」

おゝい・・・

「あつ、ソウジさん！　助言、ありがとうございます！　それと、いつか麻帆良に行くようなことがあれば、ぜひあたし達のお家に来て！　裕奈のことも紹介したいし！　きっと、マナちゃんもあの子と仲良くできるわ！」

「あつ、うん・・・また後でな、夕子」

「さよなら、夕子さん」

「またね、マナちゃん！　ソウジさんも！」

それから夕子はさっそうと俺たちから離れ、自分の夫の手を取り、

宿の外に走って行った。

『お話』するために自分達の宿に帰ったんだろうか？

「すごかったね、兄さん」

「そうだな、マナ」

特に最後とか。

「どうだ、マナ。あいつの娘に会ってみたいか？」

「・・・分からない」

「あはは、まあ、あれを見た後に躊躇うのは分かる。けど、そういう友人がいるのも楽しいぞ？」

「そう？」

そんな、『本気？』とでも聞いたそうな顔をしなくても・・・

「まあ、騙されたとでも思って今はそう言う事にしとけ」

「うん・・・」

「それに、すぐに麻帆良まで行く予定はないし、それまで考えておくのもいいさ」

寡黙なマナに元気娘な裕奈。メリハリのいいコンビになれると思うんだけどなあ・・・それに、裕奈が夕子から魔法を習えば、魔法銃

を使う可能性はすごく高そうだし、そう言う意味でも仲良くなれそうだ。

とにかく、この仕事の後は、京都に行く予定だが、その後くらいに麻帆良に行くのもいいのかもしれない。

そうだな・・・京都でどうなるのかは分からないが、確か、小学の途中くらいに詠春が木乃香を麻帆良に送るんだっただか？ その時、アスナやマナと一緒に麻帆良までついて行くのもいいかもしれない。そのほうが木乃香も見知らぬ土地で独りぼっちにならずに済むし。

その前に、ガトウの事を片付けないと駄目だな。思いもよらない所で夕子を助けたが、まだガトウの事が残っている。できればこのまま何も起きずにいればいいんだけど・・・とにかく、最悪の事態にはならせない。

第四十六話：明石夕子（後書き）

多分、次回くらいにイスタンプール編が終わると思います。

第四十七話：『この戦いが終われば、恋人と結婚するんだ』b yカトウ（嘘）

イスタンプール編、終了！

第四十七話：『この戦いが終われば、恋人と結婚するんだ』byガトウ（嘘）

<side:ソウジ>

「タカミチ、危ない！！！！」

何かに気づいたガトウが叫びながらタカミチの方に飛ぶ。それに一瞬遅れ、こちらに向かってくる魔法を見つける。このままではタカミチに直撃コース。

「おい、ガトウ！！！」

「ぐはっ！！・・・よかった、タカミチは無事のようにだな・・・」

しかし、タカミチに当たりそうだった魔法は彼にではなく、ガトウに当たった。

「師匠！ どうして僕なんかを庇ったんですか！？」

尊敬する師匠が自分の所為で怪我をし、悔しそうにタカミチが叫ぶが、もうどうしようもない。ガトウはすでに傷ついた。頭を切り換えないと。

・

・

・

トルコでの仕事も終わりに近づき、今日までガトウに大きな危険もなく、このまま何事もなく無事に終了するかと思われた。

だが今日、『完全なる世界』の残党との決戦になり、その時、敵の攻撃に気づいていなかったタカミチを庇い、ガトウが代わりにそれを喰らった。

俺は出来る限り、気をつけていたんだが、まさかこんな形でガトウが怪我をするとは思っていなかった。てっきり、ガトウが油断している所を不意打ちでもされたのかと考えていたから、主に狙撃や、ガトウの死角からの攻撃に気をつけていた。その所為で、タカミチに狙いを付けていた敵を見過ごし、反応が遅れた。

そしてその結果、タカミチの近くにいたガトウが間に入り、負傷した。

「ガトウ、大丈夫か！」

「ソウジか・・・」

「おい、タカミチ、ガトウを動かすぞ！」

「師匠・・・」

早くガトウを治療しないとやばいのに、タカミチはガトウの側で放心しているだけだ。

「タカミチ！！！！」

「ハッ！・・・は、はい、ソウジさん！」

俺の喝でタカミチが正気に戻り、血塗れのガトウを動かすのを手伝いに来て、二人でガトウを治療できる場所まで担ぐ。

銃弾や魔法が飛び交う中、なんとかガトウの場所を移し、改めて傷の具合を見てみる。

「ちっ・・・」

血をかなりなくしている。傷もかなり酷い・・・

ガトウの意識も朦朧としているし、こういう傷を何度も見た事がある経験からすれば、ガトウの助かる確率は半々ってところだ。けど、手遅れじゃないのがせめてもの救いだ。

「どいて下さい！　すぐに医者まで運びます！」

本部にある野戦病院までガトウを運び込んだ俺たちを出迎えたのは看護師の女性。彼女はすぐにガトウを受け取り、いそいそと中に連れて行った。

一応、応急処置はした。あとは医者に任して祈るしかない。

・
・

・

・

ガトウの手術は数時間に及び、それが終わる頃には外での戦いはすでに終了していた。

そして手術室の外ではタカミチや俺は勿論、アスナやエヴァ、戦いを終えたナギやジャックといった『紅き翼』のメンバーは焦りを隠せず手術の結果を待ち続けた。

ギー……

太陽が沈み、外が暗くなりつつあった頃、手術室の扉はゆっくりと開き、中から医者が出て来た。その後ろでガトウは手術室から集中治療室へと移されるのを見たから、とりあえず最悪の事態は免れたんだろう。

「先生！ ガトウは大丈夫なのか?!」

真っ先に医者に飛びつき、ガトウの容態を聞いたのはナギだった。タカミチはその横で報告を不安そうに待っていた。

しかし、医者の顔は正直に言って、こちらを安心させるような物じやなかった。

ぴりぴりする空気の中で待つ数秒はその数百倍に感じた。

そして、医者は重々しく口を開ける。

「手術は成功しました。しかし、彼は血を多くなくしました。輸血をし、そのなくした血を補いましたけど、その間の体の衰弱が激し

かったです。ヴァンデンバーグさんは今でもとても危険な状態で、多分、今夜が峠になるでしょう」

「・・・そうか」

ガトウの手術が成功したと聞いて皆は安堵したけど、医者のもに続いた言葉を聞いて落胆した。

「先生、僕たちにできることはないのですか?!」

ガトウが怪我をした原因を作ったタカミチが必死になって医者に縋り付く。

「残念ですが、今できることは待つだけです」

「そんな・・・」

タカミチはそれを聞いて、医者のもを掴んでいた手を離してぺたんと地面に崩れ落ちる。

他の皆も多かれ少なかれ、タカミチと同じ気持ちになっているのは、その顔を見れば分かる。俺も例に漏れず、そうだ。

いくら長生きしても、親しい人間の死とは慣れないもんだ。

つと、縁起でもない考えはやめないと。

ガトウはまだ死んでいない。今も生死の狭間で戦っているんだ。

「タカミチ。今はガトウの所に行こう」

床に座っているタカミチの肩に手を置き、移動することを勧める。

「ソウジさん……」

タカミチは弱々しく顔を上げてこちらを見る。

「お前がそんな顔でどうする。ガトウが起きる時にそんな顔をして
いてみる。呆れ返って弟子を破門させられるぞ」

「……そうですね。僕は弟子失格です。いつその事、僕があの攻
撃を受けていれば……！」

ちっ、励ますために言った冗談が逆効果になっちまった。やれやれ、
鬱気味になるのはネギの専売特許のはずだったが……タカミチに
もその素質があったか。

「バカヤロウ。そんな事、本当にガトウが思う訳ないだろう！……
はあ、こんな場所にいるくらいなら、ガトウの所に行つて気でも送
つてる。ほとんど効果はないとは言つても、何も無いよりはましだ
ろう」

一応、気は生命エネルギーの一種だし。

「っ?! はいっ! 師匠の所に行つてきます!」

俺がタカミチを促すと、タカミチはロケットのように飛んで行く。
それを見ながら、ナギが俺に近づいて話しかける。

「ソウジ、いいのか、あんな事を言つて?」

『あんな事』とは気を送る云々か？

まあ、そうだろう。俺の言葉通り、ほとんど効果はないからな。

「あの様子じゃあ、タカミチのやつ、死ぬ寸前まで気を送り続けるぞ？」

「その時は俺たちが止めればいいさ。それに、確かに他の人が気を送っても、気の波長っていうか、質っていうか、そういうのが合わなくて無駄に終わるだろう。だが、タカミチはガトウの弟子という立場で誰よりもガトウの気を知っている。そしてタカミチは無意識にガトウの影響を受けて、ガトウの気と近いものになっている。だから、もしかすると無駄じゃないかもしれない」

「けど、もしかすると、だろう？」

「まあな。はつきり言って、可能性は低いな。それでも、何かをしていなければ、タカミチは潰れてしまう」

「だから、やらせたのか？」

「さあな・・・それよりも、俺たちもあっちに行こう。ガトウがどうなるにせよ、その場にいたいからな」

「ああ・・・」

他の皆はタカミチに続いて、すでにここにはいない。まだ残っているのは俺とナギだけ。

それから俺とナギはガトウの病室まで歩き、気を送り続けるタカミチを見ながらひたすら時間が経つのを待った。

* * *

長い夜が明けての翌朝。

「……………うつ……………」

俺たちが見守る中、ガトウがゆっくりと目を開けた。

「師匠!?」

それに最初に気づいたのは、ほぼ一晩中、気を送り続けていたタカミチだった。

「師匠! 師匠!」

「うるさいぞ、タカミチ。少し静かにしろ」

「!?!?! ごめんなさい、師匠!」

「ナギ。とりあえず、俺は先生を呼んでくる」

タカミチが泣いて喜ぶ横、一人冷静だった俺はナギにそう言う。

「分かったぜ、ソウジ。頼んだ」

俺に返事をするナギもすごく喜んでいて、大きく笑っていた。

そういう俺も上辺では冷静な顔をしているが、内心はほっとしている。まだ医者が診ていないからなんとも言えないが、ガトウが起きたのはいい兆候だ。

・

・

・

「ふう……」

十五分ほどの診察が終わり、医者は息を吐き出して医療器具を置いた。

「先生？」

期待半分、不安半分にタカミチが躊躇いがちに医者に結果を聞く。

「ええ……良い報せと悪い報せがあります……」

「いい方から……」

力弱く、ガトウがいい方のニュースから頼む。

「そうですね。それでは……ヴァンデンバーグさんは無事、峠を

越え、もう命の危険はないでしょう」

「!?!」

「本当ですか、先生！」

「よかったです。本当によかったです」

「よかったな、ガトウ！」

もうガトウが死ぬ危険はないと聞いて各々、喜びを表す。けど、浮かれるのはまだ早いだろうが。

「おい、ガトウが大丈夫と聞いて嬉しいのは分かるが、まだ悪い報せの方を聞いていない。喜ぶのはそれを聞いた後まで待った方がいいんじゃないか？」

皆の気持ちに水を差すのは気がとがめるけど、誰かが言わないと駄目だろう。

「ぐっ……」

俺がそう言つと、皆の顔が途端に沈み、数人は俺を睨む。

いや、確かに俺が言ったが、いつかは聞かないといけないことだ。

「先生、お願いします」

またガトウの言葉から話が進む。

「はい、その、非常に言い辛いのですが、やはり怪我が酷く、後遺症が残る可能性が大きいです。二度と現場で仕事をする事は敵わないでしょう」

「な、なんだと?!」

「そんな、僕の所為で・・・」

ナギは驚き、タカミチが絶望する。しかし、当人のガトウはそれほど落胆しているようではなかった。

「そうですか。それは仕方がないですね」

「ガトウ?」

ガトウの反応はえらくあっさりしていて、流石にそれは少し予想外だった。

「そんなに意外か、ソウジ?」

「ちよつとな。もう少し食いつくかと思っていた」

これほど諦め易い性格の奴が『紅き翼』にいるのも驚きだ。

「今は生きていることの方に感謝している。それに、俺ももう年だ。そろそろ現役から退くことも考えていた。これはちよつどいい機会かもしれない。これを機に麻帆良で魔法先生にでもなるさ」

「なるほどな・・・まあ、ガトウがそう決めたんなら。俺からは何も言わない。ガトウならあそこは大歓迎するだろうな」

「師匠……すみません、僕の所為で！」

医者への報告と俺の話が終わわり、タカミチは罪悪感を押さえ切れず、思いのままにガトウに謝罪する。

「そんな顔をするな、タカミチ。戦えなくなっても、俺は気にしない。そんなことよりも、お前が無事でいてくれたほうが嬉しい」

「でも、師匠！」

タカミチはもうポロポロと涙を流している。

「だから、泣くなつて。お前は俺の一番弟子なんだろう？ お前がそんなんだと、世間様は俺をどう考える？」

タカミチに笑いかけながら叱るガトウ。そんな風に言えばタカミチは無理な修行で体を壊しそうだけど、ガトウというストッパーがいればそうなる前にやめさせられるか？

まあ、タカミチはガトウの弟子だから、俺がとやかく言う筋合いはないか。

しかし、ガトウは麻帆良に行くか。俺も数年後には麻帆良に行く予定だし、タカミチもそのままそこに残るだろう。これでアルまでもそこに行けば、『紅き翼』のメンバーの半分近くが麻帆良にいることになるのか？

最強だな。

けど、その前には京都だ。鶴子との約束もあるし、木乃香との初顔合わせもある。あと、マナの紹介とかな。今のアスナは他の子供達より年上だから、友達というよりは姉になるが、それでも木乃香とは仲良くさせたいな。

第四十七話：『この戦いが終われば、恋人と結婚するんだ』byガトウ（嘘）

気の波長はこの小説の独自設定です。

そしてガトウは予想通り（？）生存。けど、もう戦えない体になっ
てしまいました。これからは麻帆良で魔法先生としてタカミチに続
く弟子を育てることに専念します・・・かもしれない。

第四十八話：帰国、そして温泉（前書き）

タイトルに温泉が入っていますが、温泉には入りません。そう言う展開を期待している方には申し訳ないですw

第四十八話：帰国、そして温泉

< side : ソウジ >

イスタンブールでの仕事が終わわり、『紅き翼』は再び解散となった。ナギはアリカの所に戻り、ジャックはまた魔法世界へ。タカミチとガトウ、アルは麻帆良に帰った。

そして俺、エヴァ、アスナ、マナ、チャチャゼロのいつもの五人になつて他の日本組と成田国際空港で別れてから京都に向かった。余談だが、別れ際に俺たちはまた明石夫婦と会い、麻帆良に行ったら必ず挨拶しにいくと約束させられた。

俺たちは急いでいる訳じゃないから、新幹線は使わず、観光がてらに日本が始めてのマナの為、色んな場所に寄り道をしているのだ。

「マナ、初めての日本、どう思う?」

日本に着いてから数日のとある日、電車で隣に座るマナを見ながら聞く。

「兄さん?・・・綺麗な国だと思うよ。それに、すごく平和」

綺麗な国か。それはきつと清潔さと景色の美しさの両方の意味だろう。今までは色んな場所を回ってきたが、マナと一緒にだったのは全部魔法世界だったし、都会っぽいところにはあんまり行っていなかった。だから、マナにとっては色々新鮮であると考えられる。

「確かに平和だな。っと、平和と言えば、この国には銃刀法ってい

うのがあるから、アーティファクトを出す時は気をつける」

「分かったよ、兄さん。気をつける」

「まあ、普通にやってれば、武器が必要になる事態にはならないから、心配するな」

「うん・・・ふあ・・・」

「どうした、マナ？ 眠いか？」

口を大きく開けてあくびをするマナ。

「ちよつと・・・」

「そうか。なら、少し寝ている。目的地に着いてまだ寝てても背負っていくから大丈夫だ」

「うん、おやすみ、兄さん・・・」

そして重たい瞼を閉じ、小さく寝息を立て始めるマナ。

そんなマナを横に倒し、俺は彼女の頭を膝に乗せた。所謂、膝枕という奴である。

それを見て向かいの席に座っているアスナとエヴァが少し羨ましそうな顔をしていたが、今は我慢をさせるしかないな。

「二人とも、そんな顔をするな。アスナはお姉さんだから、今は我慢してくれ。して欲しいなら、後でアスナにもしてやる。それとエ

ヴア、お前は大人だろ？　こんな小さな子を羨ましがるなよ」

「う、うるさいぞ、ソウジ！　私は何も文句は言っていないかったのだ！　少しくらい羨ましがっても良いではないか！」

「ちよっ！　しーっ！　しーっ！」

マナが起きちゃうだろ！

「む、すまん。だが、ソウジも悪いぞ。私をまるで駄々っ子のよう
に言うから」

「それは悪かった。確かに少し言い過ぎだったかも。お詫びに今日
の宿に着いたら思いっきり甘えてもいいぞ？」

「それは本当か？　・・・って、だから、私は・・・！」

顔を羞恥で真っ赤にしながら反論しようとするエヴァだが、マナを
見て声を下げる。

因みに、甘えさせる約束も本気。まあ、それはエヴァ次第だが。も
しかしたら、エヴァは意地を張って甘えに来ないかもしれないし。

何かを言い続けているエヴァを軽く無視して、今度はまだこっちを
見ているアスナに話しかけた。

「アスナ？」

「ソウジ、私にも膝枕。約束」

はは、かなり羨ましいみたいだな。

「分かってるよ、アスナ。後でアスナにも膝枕をする。約束だ」

「うん」

「それで、アスナは久しぶりに日本に来て、懐かしいか？」

「よく分からない」

よく分からないか。まあ、アスナの中では日本⇨京都という方程式ができているかもしれないので、その気持ちは分かるけど。

それじゃあ、質問を変えてみるか。

「それなら、アスナはここでやりたい事とか、楽しみな事はないか？」

「うーん・・・うどん？」

なにゆえにうどん？

いや、俺もうどんは好きですが、どうしてもやりたい事や楽しみな事を聞いてそれが返ってくるの？

「他には？」

色々あるでしょ？ 東京デイズ ーランドとか、子供が好きそうな奴が。

「・・・お好み焼き？」

はい、また食べ物ですね！

よし、もうヤケだ！ 日本一のうどん屋とお好み焼き屋に連れてつてやる！！

* * *

そして電車とバスに揺られて数時間、俺たちはついに目的地に着いた！

まあ、どこにでもある、少し田舎っぽい所にある温泉宿ですが。

場所はちよつと山奥。近くには自然が溢れている山と森。女将に聞くと、近くの山には天狗の伝説があるとかないとか。

なんでも、不用意に山の奥に入ると、天狗が出てきて食われてしまいうらしい。

「ふーん、天狗ね・・・ちよつと面白そうかも？」

実は俺、神鳴流の仕事で出掛けた時以外には日本の妖怪って会ってないんだよね。仕事の際は倒さなきゃ駄目だし。というか、相手は必ず敵意を持っているんだよ。だから、これは日本で人間以外の知り合いを作るチャンスかもしれない。それに、天狗って一度は会ってみたいじゃん？

「という訳で、俺はちょっと山まで出掛ける」

「はあ？」

天狗の話聞いた後、しばらくは部屋でくつろいでいた。そして、ふと思い立って俺が山に行くと言ったとエヴァに言うと、エヴァは片眉を上げて『唐突に何を言うんだ、このバカは？』とでも思っているような顔を浮かべた。

くつ、何度、この顔を見ても慣れないぜ……

「だって、天狗を見てみたいんだもん！」

「何が『だもん！』だ！ 気色悪いわ！」

「ぐはっ！」

き、気色悪いって……いくらなんでも酷すぎると思うの。自分でもそう思ってるけど。

せめての救いはアスナとマナは旅で疲れて今は寝ていることか？
できるだけ子供達にはかつこわるい所を見せないように気をつけている。幻滅させたくないからな。え？ それはもう手遅れ？ うっせ。そんな事、俺は知らん。

「とにかく！ 俺は少しでかけるからな！ 子供達を頼んだぞ、エヴァ！」

「おい、ソウジー！」

「・・・いい子で待っていたら、後で一緒に温泉に入るう、『キティ』」

部屋を出る際に、通り過ぎたエヴァの耳に口を寄せ、囁くように言い残す。

「!?!?」

それを聞いたエヴァは顔を沸騰させ、俺の言葉の意味に思いを馳せた。最近、というか、ここ十年は一人きりになるのはほとんどないので、この呼び名はもっぱら睦言の時に使っている。だから、まあ、今では『キティ』って呼ぶと、自動的にそついう事を想像するわけ・・・

「じゃあ、また後でな」

「う、うむ。はははは早く、ももも戻ってくるのだぞ」

「おう、なるべく早く戻ってくるよ」

何せ、目的はいるのかも分からない天狗を探すことだからな。数時間、山の中を歩いて、何もなければ切り上げるさ。

そして俺はまだ顔を赤くしているエヴァと子供二人を残して部屋を出た。そこで一人(?)足りないと思った君! 実は旅館に着いた途端、チャチャゼロはふらふらとどこかへ消えた。酒瓶を手に持っていたから、多分、温泉に浸かりながら酒を飲んでいるんだろう。

・・・

・

・

「天狗さんはどっここかなあ〜」

山に入った俺は変な歌を歌いながらどんどん奥へと進んだ。

天狗の噂が聞いているのか、ここはまだ人の手が入っていないくて、自然が溢れている。

「おい、天狗さーん、出ておいでー！ー！」

まだ見つからぬ天狗を大声で呼んでみる。

しかし、返事がない。

こんなん得天狗が出てくるならもっと騒がれるだろうけど。

ガサガサ・・・

「天狗か?!」

近くの茂みから音がして、振り返る。

「誰か、そこにいるのですか?」

「詠春?」

なんと、茂みを掻き分けながらでてきたのは俺もよく知っている、西の長の近衛詠春。

「へ？・・・あなたは、宗治様！なぜここに？」

「なぜって、ここ近くの温泉宿に泊まっているんだが・・・詠春こそ、ここで何やってるんだ？長としての仕事はどうした？」

「温泉ですか。それは羨ましいですね。私は仕事で来ています」

「仕事？もしかして天狗と関係あるのか？」

俺が天狗というキーワードを出したことに少し驚く詠春。

「ええ、多分それ関連です。正確には天狗ではなく、烏族ですが」

烏族ね・・・天狗は確かカラス人間のような物だったか？なら、誤解されるのも仕方ないか？

「ふーん、それで、どんな仕事？手伝いはいるか？」

「いえ、退治などと言った仕事ではないので手伝いはいりませんが、もし宗治様が一緒に来て下さるのなら歓迎します」

「そうか。だったら付いて行こう。烏族という奴らには興味がある」

「ありがとうございます。それでは、仕事の内容を説明します」

「頼んだ」

「仕事というには少々簡単ですが、単なる人物の引き取りです」

引き取り？

「それは人質交換のようなものか？」

「いえ、数年前に烏族の中で生まれた忌み子がいるのですが、最近その子の両親が他界し、扱いに困っているらしいのです。そこで半ば厄介払いのつもりで関西呪術協会に引き取りを頼みました。忌み子と言っても、ただの子供ですので、私はそれを了承し、ここまで来ているのです」

「ほう、子供ね・・・詠春。なんなら、俺たちがその子を引き取るうか？ アスナとマナもいるし、たいして迷惑にならんぞ？」

「宗治様が、ですか？ しかし、私も木乃香の遊び友達としてちょっといいと考えていたのですが・・・」

俺がその子を引き取る提案を聞いて詠春は少し難しい顔をする。

「だが、そいつをお前の養子にするわけにもいかないだろう？ お前の立場のしがらみとかがあるし・・・あと、遊び友達なら、俺たちはこの後に、また京都に行くつもりだ。その時にマナと一緒に前前の娘と友達になれるさ」

というか、烏族の忌み子つて99.9%、刹那のことだよな？ 俺としても刹那に木乃香の友達となって欲しい。けど、それと同時に、彼女にはちゃんとした家族も持つて欲しい。詠春にそれを頼むのは難しいが、俺とエヴァなら問題ない。

「ふうー、そういう事でしたら、仕方ありませんね。あの子を引き取ったあと、その子を交せてもう一度話し合う必要はありますが、今は宗治様が引き取るつもりで話を進めましょう」

苦笑しながら詠春が折れる。

「おう。流石は詠春だな。話が分かる。それなら、その子を連れて俺たちが泊まっている宿に戻ろう。詠春も残るよな？」

「いえ、私は仕事が・・・」

「と・ま・る・よ・な？」

「はい・・・」

有無を言わせない声で詠春を泊まらせる。というか、ここから日帰りって・・・帰りは魔法でも使っつもりだったのか？ そうじゃないと、バスとか電車とか、色々無理があるんじゃない？ 田舎だし。

「よし！ そうと決まれば、詠春。烏族の里まで案内よろしく！」

「分かりました、宗治様。とりあえずはこちらへ・・・」

そう言って詠春は先に歩き始め、俺はそれに続いた。

そして、一時間ほど歩くと（結構なハイペースだった）詠春は呪符を掲げ、里を守る結界を通れるように一時的に解いた。

結界に開いた穴を俺と詠春が通り、すぐに烏族からの案内役が迎え

に来た。

さて、俺ももう一人の娘を迎える準備をするかね。

第四十八話：帰国、そして温泉（後書き）

なんというご都合主義。

鶴子と再会する前に刹那を引き取ってしまうソウジ。なんていうか、ソウジの家族がどんどん大きくなっていきますね。

第四十九話：烏族の忌み子

< side : ソウジ >

「近衛殿、こちらの方は？」

護衛に先導されて、俺と詠春は烏族の長老の所まで来た。

長老は六十歳前後の男で、長い髪の毛は白髪が目立ち始めている。そして、長老に限らず、この場にいる全員が背中から大きい黒色の翼を出している。

「長老、この方は鳳姫宗治。神鳴流がとてもお世話になっている方です」

「なんと、あなたが・・・会えて光栄です」

詠春の紹介を聞いて、ここにいる人たちは少なからず驚いていた。

こんな山奥の小さな部族まで知られているとはな・・・日本での活躍なんてほとんどなかったと思っていたけど・・・

烏族の人たちは俺を尊敬するような顔で見ているが、忘れてはいけない。こいつらは刹那が少し変わっているからと言って、彼女を化け物か何かと同様に扱って追放しようとしているのだ。俺はそんな奴らの尊敬や憧れを素直に受けることはできないし、したくもない。

「ふん・・・」

そんな俺の侮蔑の気持ちは鼻笑いとして漏れた。

それを見て詠春は向こうが反応出来る前に慌てて話を進める。

「ち、長老！ それで件の子供はどこにいるのですか？」

詠春に氣勢をそがれて、何かを言いそうになっていた長老は座り直して一度咳払いをした。

「おい、あれを連れて来い」

長老が部屋の入り口付近で待機している男に命令すると、その人が部屋を出てどこかへ向かった。おそらく、刹那を連れてくるんだろう。

しかし、『あれ』・・・ね。もはや、人扱いすらしていないのか・・・
ったく、むかつく奴らだ。当初の友達になる計画は白紙だな。

そして、俺が刹那の扱いに怒っている間に、長老は詠春との話を続ける。

「詠春殿。まずは此度の、あれを引き取る件を受け入れて下さり、ここにいる烏族に代わって感謝を述べさせて下さい。私どもは同族を殺めるのを禁忌としているので、扱いに困っていたのです」

「長老。その事について話があるのですが・・・」

「話ですか？」

「ええ・・・実は今回、こちらの宗治様が件の子供を引き取る事になったのですが、大丈夫でしょうか？」

「鳳姫様が、ですか？　しかし、あんな卑しいものが鳳姫様のよう
な誇り高い吸血鬼に迷惑をかけるのははばかります」

ちっ……いいかげん、長老の口を永遠に閉じさせたくなくて来た
が……

苛立ちで眉をピクリと動かし、詠春を睨んで早くしろと促す。

「そ、それは気にしなくても結構です。これは宗治様からの提案で
すので」

「そうですか。鳳姫様のご趣味に合うかどうかは分かりませんが、
あれも一応メスに分類されるので、使い物にはなりませんよ」

本当に下衆だな……というか、どういいう目で俺を見ているんだよ
！？

ゴゴゴゴゴという効果音が似合うほど、俺の怒りのボルテージがど
んどんあがっていくぜ。

「（ちよっとー！　子供を早く連れてきてくれー！！　このまま
だと宗治様が大変なことにー！！！！）」

詠春は横で何やらおろおろし始めているが、俺にはそんなことは関
係ない。

長老達もやっと俺の状態に気づき、額に脂汗を浮かばせている。

そして、部屋の緊張が頂点に達しそうになった時、部屋の入り口が

ガラリと開けられた。

「長老様。あれを連れてきました」

そう言いながら一人の男性が入ってきて、張りつめていた空気は霧散した。それからその男に続いて小さい子供が入ってくるが、その姿を見て、俺は思わず「あれ、刹那ってこんな感じだったっけ？」と考えてしまった。

まず目に入ったのはその子の真っ白な双翼。そして続いたのはその真っ白な髪、そして紅い瞳。それから分かる通り、彼女は俗にいうアルビノ症候群という奴だろう。それのおかげかどうか分からないけど、潜在的な力はかなり高い。しかし、それだけ。それだけで彼女は忌み子、化け物扱いされ、酷いことをされ続けてきたのだ。

しかし、ある意味、その姿よりも目立つのは彼女の格好である。着せられているのは服と呼ぶのもおこがましい、ボロ布。体は最後にいつ洗ったのかも分からないほど垢が溜まっている。極めつけはその首に回っている枷に手錠、そしてそれに繋がれている鎖。それはまるで中世の罪人の姿だ。彼女の顔は全て諦め切ったように表情がなく、生きる気力が見られない。

それを見て俺は我慢ができなくなった。

俺は立ち上がり、男から鎖を乱暴に取り上げ、吸血鬼の馬鹿力を使って枷を全て外した。

それらは音を立てて地面に落ち、俺は彼女を抱き上げた。俺のいきなりな行動に少女は戸惑ったが、抵抗する気力もないのか、すぐにされるがままにされた。

「悪いな、詠春。俺はこんな場所を一刻でも早く去りたいんで、この子と先に出る」

正直に言っつて、烏族の奴らを皆殺しにしたい気持ちもあつたが、まだ子供のこの子にそんなグロテスクな光景は見せたくないから、それは抑えた。ついでに詠春の顔も立てて。

詠春に声をかけると、俺は少女を抱いたまま、里の出口まで飛んだ。そこで俺は一度少女を下し、目線を合わせる為にしゃがみ込み、話しかけた。

「はじめまして。俺の名前は鳳姫宗治だ。君は？」

「……」

名前を聞くが、反応はなし。

「うーん、教えてくれると嬉しいんだけど、駄目かな？」

「……さくらざきせつな」

おずおずと答えた少女はやっぱり刹那だった。けど、原作だと黒髪黒目だったような……？

まあ、どっちでもいいか。それは今の刹那には関係ない。

「刹那か。よろしくな、刹那」

「うん……」

「刹那は今がどういう状況か分かっているか？」

「ちちうえと、ははうえがしんで、わたしは、さとからでないといけない」

親の事を思い出して、刹那は泣きそうになった。

「それに付け加えるなら、刹那はこれから俺と一緒に来て俺と家族になる」

「かぞく？」

「ああ。俺が刹那の新しいお父さんだ」

「ちちうえ？」

「うーん、それだと今までの親と混同しちゃうかもしれないから、違うのによっ」

俺がそう言つと刹那がしばらく考え込んだ。

「・・・おとうさま？」

「まあ、それでもいいか。それと、お母さんもいるぞ」

「おかあさまも？」

「ああ・・・これから戻る旅館にいる。他にもお姉さんが二人もだ」

「うっ……うっ……」

「お、おい……」

これから新しい家族ができると刹那に説明した途端、刹那が泣き出しました。

「どうしたんだ、刹那？」

「うっ……わたしがかぞくでいいの？ わたし、ばけものなのに……」

くっ、刹那まで自分が化け物って思っていたのか。子供と言えど、自分の事には敏感なのを奴らは分かっていたの？ いや、分かっているなお言い続けていたんだろう。奴らはそう言う奴らだった。

刹那が泣き始めたのは折角できそうな家族を失うのが恐かったんだろう。けど、失うかもしれないと分かっているにも、何も隠さず、自分が化け物だと俺に言ってきた。

それがあまりにも悲しくて、俺は力一杯、刹那を抱き寄せた。そして、刹那の白い頭と背中を撫でつつ、安心の言葉を送る。

「刹那、お前がどんな存在だろうと、俺は受け入れる。それに、自分のことを化け物と言うな。お前はとっても可愛い女の子なんだから」

一言も聞き逃させないように、ゆっくりと刹那に言い聞かす。

「うっっっっっっっっっっっっっっっっっん」

何も心配しなくても刹那のことを受け入れると言っと、今度は嬉しさで安堵から彼女は泣き出し、俺にしがみついた。俺はそれをやさしく抱きとめ、詠春が長老との話が終わって合流して来る頃、俺は泣き疲れて眠った刹那と一緒にそこにいた。

第四十九話・烏族の忌み子（後書き）

テンプレですね。

第五十話：新しい家族（前書き）

記念すべき第五十話！

！
いつの間にかPVも300万越え。これからも応援、お願いします

第五十話：新しい家族

< side : ソウジ >

「準備はいいか、刹那？」

詠春と合流した俺はまだ眠っていた刹那を背負いながら山を下りた。そして俺達は今、エヴァ達がいる宿部屋の前で立っている。

刹那は少し前に起きたら俺の背中から降りて、俺の手を握り、歩き始めた。彼女の白い翼もその時に隠してもらい、今は普通の人と変わらない姿でいる。

「はい、おとうさま」

これから新しい家族に会う刹那の顔には僅かの不安と緊張が見られた。けど、今までは出会う人全員に嫌悪されていただけに、それも仕方ない事だろう。

「大丈夫だ、刹那。 あいつらとなら刹那もすぐに仲良くなれるさ。じゃあ、行くぞ」

刹那にそう言うと、彼女は握っていた俺の右手をぎゅっと握った。それに対して俺も安心させるために握り返し、ドアをノックしてから二人で部屋に入った。

「ただいまー」

挨拶しながら部屋に入ると、中にくつろいでいたエヴァ達が振り返りつつ挨拶を返す。

「ソウジか。お帰り」

「お帰り、ソウジ」

「お帰りなさい、兄さん」

「おう、ただいま」

「それで、ソウジ、どうしたんだその子は？　というか、何故天狗に会いに行きながら、子供を連れて帰る？」

皆を代弁してエヴァが聞く。

「色々あって、俺たちが引き取ることになった、刹那だ」

「色々とはなんだ、色々とは・・・」

額を押さえながらエヴァが呆れる。

それを見て勘違いをしたのか、刹那は怯み、俺の手を握る力が増し、僅かながら、俺の足の後ろに隠れた。

「大丈夫だぞ、刹那。この人が新しいお母さんのエヴァだ」

「おかあさま・・・？」

俺の後ろから顔だけを出してエヴァを見る刹那。

その彼女の頭に手を乗せ、数回撫でてからその手を彼女の後ろまで

回し、後押しをする。

「む？ 『おかあさま』？ ソウジ、今度はそういう設定なのか？」
設定とか言う名よ。身も蓋もない。

「刹那の場合はまだ親に甘えたい年頃だからな」

マナは同じような年だけど、一人で生きていた時間が長かったせい
か、親のように甘える存在が必要になっっていない。だから、年上の
兄弟という役に落ち着いている訳だが。アスナの場合、『紅き翼』
の皆と一緒にいた時間が長かったからな。その時の名残でアスナは
皆を名前で呼んでいる。

まあ、呼び方が違うからと言って、俺たちの三人の扱い方が変わる
とかはない。これは本人達の意識の問題だ。

「おかあさま、か・・・そついう風に呼ばれたのはかなり久しぶり
だな」

エヴァの外見が外見だしね。見た目が15歳の女の子が4、5歳の
子供にお母さまとか呼ばれていたら色々変に見られるし。

「何か不満か？」

有り得ないけど、何だかエヴァの言葉が曖昧になっているから何と
なく聞いた。

「いや、なんでもない」

頭を数度振って、思考を終わらせるエヴァ。

それからエヴァは優しい笑顔を浮かべて、刹那に声をかけた。

「よろしくな、刹那。私が今日からの新しい母だ」

「・・・はい、おかあさま！」

大きく笑いながら、刹那がエヴァに飛びつく。それがしばらく続いた後、今度はアスナ達の紹介が始まった。

「刹那、この二人は刹那の姉妹になる、アスナ、そしてマナだ。それから、向こうにいるのはエヴァの従者である、人形のチャチャゼ口だ。皆、自己紹介してくれ」

「私、アスナ。よろしく、刹那」

まずは年長者（人形除く）のアスナから始まる。

「はい、よろしくおねがいます、アスナおねえさま」

おねえさまと呼ばれ、アスナは満更でもないような顔をする。マナにも姉さんと呼ばれているけど、感じ方でも違うのか？

「マナだ。よろしく頼むよ、刹那」

「よろしくおねがいます、マナおねえさま」

「マナでいい。刹那とは同じくらいだしな」

「えつと・・・マナちゃん？」

アスナに続き、マナが自己紹介をし、どうやらマナの呼び方は『マナちゃん』と決まったらしい。刹那は呼び捨てにする事に抵抗を感じるのか？ それに対し、今までちゃん付けで呼ばれた事がなかったマナは微妙な顔をしたが、結局はそのままにしておいた。

そして、最後にはチャチャゼロ。部屋の奥で武器を磨いていたチャチャゼロが顔を上げ、刹那に自己紹介をする。

「アタシはチャチャゼロよ。趣味は殺戮。よろしくね、刹那」

「ひう!？」

趣味が殺戮と聞いて、刹那は小さく悲鳴を上げて、また俺の後ろに隠れる。それを見てチャチャゼロはケロケロと笑い始める。

「こらこら、チャチャゼロ。刹那を怖がらせるな」

「なによ、ソウジ。ちょっとしたお茶目じゃない」

「そう言う事はせめてもう少し気の強そうな奴に言え・・・刹那、チャチャゼロを怖がらなくてもいいからな。あいつは家族に暴力を振るう奴じゃない」

涙目の刹那を安心させるために俺が言う。

「おとうさまぁ・・・」

「安心しろ、お父様が守ってやるからな」

「ちえく……」

刹那をあやす俺を見てチャチャゼロが拗ねた。これじゃあ、まるでチャチャゼロが悪者みたいからか？ というか、こんな子供をビビらせるとか、まんま悪者だろ。

「とにかく、刹那はこれから俺たちの家族の一員になるんだ。皆もそのように接しろよ？」

自己紹介が終わり、皆に刹那と仲良くするように頼むと、全員から快い返事がした。

それから俺たちは部屋のテーブルを囲むように座ってから話を続けた。

「さて、刹那が家族になったことだし、とりあえず、今やらないといけない事は二つほどあるな」

「お？ 宴会か？」

すぐに食いついたのはチャチャゼロ。

「違う……ちょっとは落ち着け、チャチャゼロ」

歓迎会のようなものはやる予定だが、それは後だ。

「刹那の名前と正体の説明だ」

「おとつちま?!」

いきなり正体をばらすと聞いて刹那は会ってから一番大きい声で驚いた。そして、彼女の顔は青ざめ、恐怖に染まった。里での扱いを思い出して、体も震え始めている。

それを落ち着かせる為に、横に座っている刹那の肩に手を回す。

「大丈夫だ。家族を信じろ、刹那」

そう刹那に声をかけると、彼女は少し落ち着いた。

しかし、顔にはまだ拒絶されることへの恐れが見えている。

「まず、最初には刹那の名前のことだが、刹那はこれから俺たちの家族になるんだから、俺の苗字の鳳姫を名乗って欲しい。刹那はそれでいいか？」

「はい……」

あー、これはもしかしたら話の順序を間違えたか？ 刹那は正体の事が心配で、心ここにあらずって感じて返事をした。とりあえず、名前の件に刹那は承諾したが、あんまり考えていなかったっぼいんだよな……これはまた後で改まって聞いた方がいいかもしれない。

「……それじゃあ、刹那の正体だが……」

「……ビクッ！」

「刹那は鳥族の子供だ」

「烏族？　もしかして、噂になっている山の天狗やつらか？」

「そうだ、エヴァ。刹那はそこから追い出されたんだ」

「なぜだ」

「とてもくだらない理由だ。刹那、ちょっと羽を出してくれるか？」

刹那に頼むと、彼女は諦めたような顔で頷いてからゆっくりとその真っ白の翼を背中から出した。

「きれい・・・」

誰が言ったのかは分からないが、その場の誰もが思っていたことだ。そして、誰の顔にも嫌悪なんて感情は浮かんでいなかった。それを見た刹那は信じられないような顔をした。

「だから言っただろ、刹那。ここにいる人は皆刹那の家族で、お前を受け入れると。それに、お前の羽がとても綺麗なのは事実だ」

「おとうさま・・・はい・・・はい・・・ぐす・・・」

刹那に一度話しかけて安心させてから、またエヴァに説明を続ける。

「とまあ、烏族の奴らは刹那のこの翼の所為で彼女を追放した訳だが、そんな田舎者の奴らの事はどうでもいい。今、皆に知って欲しかったのはこの刹那の綺麗な翼の事だ」

ふむ、正体ついでに、皆の事も刹那に話して置くか。それなら刹那も少しは自分の事を気にしなくなるかもしれないし。

「それに、刹那。少なくとも、この部屋にいる人は皆、刹那のようにどこか特別なところがあるぞ?」

「とくべつ?」

「まあな。アスナは魔法無効化体質だし、マナは魔眼を持っている。そしてエヴァと俺は吸血鬼だ」

「え……?」

皆の事を説明すると、刹那は部屋を見渡し、一人一人と目が合うと、皆は肯定するように頷いた。

「だから刹那は何も気にしなくてもいい。前にも言った通り、俺たちはどんな事があっても刹那と一緒にいる」

「……はいっ!」

第五十話：新しい家族（後書き）

お待たせしてすみませんでした。どうもネタが思い浮かばず、結局こんなものになってしまいました。

とりあえず、刹那編はこれくらいにして、この後、皆は詠春に付いて行って京都に行く予定です。

この下は原作のネタバレがあるので注意して読んで下さい。

さて、今週のマガジンでマナが半魔族だと言う驚きの事実が判明。

この小説ではまだ明確に言っていませんが、いずれはそう思うと思います。それがいつになるのかは分かりませんが・・・

第五十一話・温泉最終日

< side : ソウジ >

刹那を皆に紹介したあと、しばらくして詠春が部屋に入ってきて、一緒にご飯を食べたり、今までどうしていたのか話したりした。その話で分かったんだが、やっぱり、長としての仕事で忙しくてイスタンブールに行けなかったらしい。そして、酒を飲んで酔っぱらった詠春にうんざりするほど娘の木乃香のことを自慢された。それに対抗するように俺もアスナとマナがいかにか可愛く、かしこく、そして才能が多いことを自慢したが、それでも詠春の勢いに押し負けた。横でエヴァが呆れた顔をしていて、刹那はおろおるとヒートアップしていく俺と詠春の討論を見ていた。アスナとマナがどういう顔をしていたかは分からなかったが、二人の性分から、照れていたとかそんなのじゃないと思う。

結局、俺たちは旅館に数日間泊まり、充分に温泉を堪能した。

いや〜、いいよね、温泉！ あの疲れが溶け出す感覚がたまらん！

そして今日は最終日。チェックアウトを済ませた俺たちはこれから詠春と一緒に京都に行くつもりだ。

「宗治様、本当に京都に来て下さるのですか？」

「いきなりどうした、詠春？」

旅館を出ると、詠春が変な顔をしていたので、話を聞いてみた。

「いえ、宗治様たちには他に行く予定があったのではないのですか

「？」

「ん？・・・まあ、確かに京都に行く前に少しづらぶらしようかと考えていたが・・・」

「でしたら、今私と来なくてもよろしいですよ？ 京都は逃げませんから」

「別にそんなの気にしなくてもいいぞ？ な、エヴァア？」

「あん？ うむ、私は特に意見などないぞ。温泉も楽しんだし、どうせ他の場所も対して変わらん」

一応、山の次は海など考えていたが、ここで詠春に会ったのも何かの縁だ。それに、刹那を連れて行くんだから、皆と仲良くなれるような場所であればらく落ち着くのもいいかもしれない。

「そういう事だ、詠春。大体、逃げないというのなら、他の観光所も逃げないだろう」

「それはそうですが」

「何だ詠春、その煮え切らない態度は？ まさか、俺たちが京都に行くのは都合が悪いのか？」

「い、いえ！ 決してそのような！」

と、必死に手を振りながら否定する詠春。

「じゃあ、何だ？」

「その、宗治様・・・」

「あん？」

「気を悪くしないで欲しいのですが・・・」

「だから何だ？ 言え」

「実は今、本家では宗治様はあまりよく思われていないようでした・・・」

「本家と言うと、青山の方が？」

「ええ・・・特に兄上と素子の印象が悪いようですので、覚悟をしておいた方が良くかと」

秋人と素子？ 俺って何か悪い事したか？

というか、素子に最後に会ったのって、彼女が2歳くらいじゃなかったか？ あの時は結構可愛がってやったのに。忘れて何も思わないとか、それを覚えて何となく懐かしく思うとかならともかく、どうして恨まれるんだ？

秋人の方もそうだ。確かにあいつへの修行はちよっぴり辛かったかもしれないが、恨むほどだったか？ あいつはそんな奴だとは思わなかったが・・・

そもそも、最後に京都に来た時のほとんどって鶴子の修行に・・・って、そうか。

「何か、鶴子と関係していることか？」

「へ……？ は、はい、その通りです、宗治様」

一瞬、詠春は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしてから、慌てて肯定した。

「なるほどね……」

秋人は娘二人を溺愛していた（詠春も血か？）し、素子は原作の通りなら、子供の頃はかなりのお姉ちゃんっ子だった筈。

しかし、それで俺が恨まれていると言う事は……

鶴子は未だに俺に恋をしているのか？

うーん、しばらく離れていれば誰かいい相手を見つけると思っていたんだがなあ。もしかして逆効果だったか？ 距離は愛を育むって言うし……

「……うげ」

ふとエヴァの方を見ると、今の話で俺と同じ結論に至ったのか、かなり御機嫌斜めの様子。これからする必要になる機嫌取りを思い浮かべ、目の端に浮かんだ心の汗を拭いた。

けど、正直、鶴子のことをどうするかは悩みどころだね……

約束だからこれから鶴子に会いに行くが、このまま行っても、鶴子

の為にならない気がする。

とにかく、会ってみないと何とも言えないか。全部、素子や秋人の思い過ぎしなのかもしれないし、もしそうじゃなくても、いくらでもやりようがある。だけど、後者の場合、俺たちの関係をほぼ最初から始めないといけないな。前は弟子としてしか見ていなかったし。あと、鶴子とエヴァと一緒にゆっくり話さないといけないだろうな……

鶴子の事を知らないマナと刹那はエヴァと俺の間の突然な空気の変化に不思議な顔を浮かべていた。まあ、分かれてもそれはそれで困るけどな。

「兄さん、鶴子って誰？」

抑えた、小さい声でマナが聞いてきた。知らない人のことが気になるらしい。小声なのは不機嫌なエヴァを刺激したくないからか？

「マナ？……鶴子ってのは、前に少し剣を教えてあげていた神鳴流の女の子だ。今は二十歳くらいになってるか？」

「神鳴流……アスナ姉さんも使ってるよね？」

「そうだな。アスナにも教えている奴だ。今じゃあ神鳴流の中では俺が一番年寄りで、経験があるし、筆頭のようなもんか？」

「おとうさま」

今度は刹那か？ 躊躇いがちに刹那が俺を見上げていた。

「どうしたんだ、刹那？」

「おとうさま、わたしにもできるでしょうか？」

「できるって、剣術をか？ 教えられない事はないが、まだ少し早
いかな？」

そう聞いて刹那が肩を落とした。

そう言えば、アスナに教え始めたのって、彼女が今の刹那くらいだ
った頃だったか。

「基礎くらいなら今の刹那でも大丈夫だから、京都に着いたらそれ
から始めよう」

「あっ・・・はい、おとうさま」

俺が刹那の頼みを拒絶した訳じゃないと分かり、嬉しそうに笑う。

「マナも剣術を習ってみるか？」

「私はいいよ、兄さん。これもあるし・・・」

懐からパクティオカードをちらりと見せるマナ。

「そうか」

ちよつと残念かも。

「けど・・・」

うん？

「剣術はいいけど、戦い方を教えて欲しい」

「おつ、そうか？ うむ、それなら任せる。剣以外での戦闘も得意だぞ。銃の事はよく知らないが、なんとかなるだろ」

今までもアスナの傍らで少しやっていたけど、今度からはもうちょっと取り組んだ訓練をしよう。

しかし、そもそも銃を使った戦い方など俺には教えられないと思う。・・うーん、原作のマナの近接戦闘方法って確かあれだったか。・・？ マイナー映画にあったガン⇨カタに似たやつ。あの映画は面白かったなあ。ストーリーは普通だったけど、ガン⇨カタのかつこよさが忘れられない。それを俺なりにアレンジしたのをマナに教えてみるか。銃は剣よりリーチが長いが、両方とも手の延長と考えれば似てなくもないし、剣術の動きは役に立ちそうだ。

流石に神鳴流の奥義は難しそうだけど、魔弾を弄れば無理じゃないかも？ マナの銃から撃たれる雷鳴弾（仮）なら強力そうだ。銃の弾なら、技が圧縮されて貫通力がすごいことになりそうだし。

「じゃあ、京都に着いたらマナも刹那と一緒に鍛えよう」

「うん、お願い、兄さん」

「ソウジ！ 何をしている！ 早く来い！ バスに遅れる！」

「あゝ、はいはい。今行く」

未だに苛立っているエヴァが俺たちを急かす。

「それじゃあ、行こうか」

「はい、おとつさま」

「うん」

それから俺たちはバスに乗り、出発した。

そして、バスと電車で揺られて数時間、ついに京都に到着する。

・

・

・

「宗治様、どうしますか？　すぐに本家の方へ行かれますか？」

京都に着くと、詠春がそう聞いてきた。因みに、今の時刻は夕方。詠春の家、青山の家のどちらに行っても、着く頃は夕ご飯の時間になっっているだろう。

「いや、それは明日にしよう。詠春の家は大丈夫か？」

「それは勿論大丈夫です」

まだ青山家には今日ここに来るって連絡を入れていない。日本に着いた時はしばらくしたら挨拶をしに行くと言っておいたから、完全な不意打ちにはならないだろうが、いきなり行って混乱はさせたくない。

青山家に行けば色々面倒なことになるかもしれないし、せめて今日はゆっくりしたい。

「じゃあ、それで頼む、詠春」

「はい、分かりました。木乃香も同年齢の子と知り合えるなら喜ぶでしょう」

詠春と少し話すと近衛家に一晚世話になることが決まり、俺たちはそれから一緒に詠春の家まで付いて行った。

第五十一話・温泉最終日（後書き）

こんな駄文ですみません。

どうも気分が乗らないんですよ・・・これがスランプってやつか？
次はもっと面白くできるようにがんばります。

第五十二話：三人娘（前書き）

お待たせしました。

ひらがなばかりで少し読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。

第五十二話：三人娘

< side : 木乃香 >

おとーさまがしごとからかえってきた。

おとーさまとすうじつぶりにあえたのはうれしかったけど、それよりもたいへんなことがあったんや！

おとーさまといっしょに、しりあいのひとのそうじさまっていうひとがかえってきたんやが、そのひとはうちとおないどしのがたりもいたんや！

ひとりはせつなちゃん。もうひとりはマナちゃん。

ばんごはんのときはふたりともおとなしくて、あんまりはなせんかったけど、せつなちゃんはひとみしりな感じで、マナちゃんはすこしおとなっぽいかんじやった。

けど、あしたはいっしょにあそぶやくそくをしたし、これからおともだちになるんや！ どうしよ、うちのはじめてのおともだちや。

うー、なんや、どきどきしてねむれへん。いつもはひとりであそぶしかないんやが、あしたはちがう！

いとこのもとこおねえさまがときどきあそんでくれるんやけど、もとこおねえさまはおともだちってかんじがせえへんからなあ。もとこおねえさまのことはだいすきやけど、やっぱりおないどしのおともだちがほしいんや。

はやくあしたにならんかな。

あしたはどんなことをしてあそぼうかな。かくれんぼやろ、おにごっこやろ、まりつきもええな。

あとは・・・

すう〜・・・すう〜・・・

<side:刹那>

「じゃあ、俺たちは青山の家に行く。刹那とマナは木乃香と遊ぶんだっただか？」

「はい、おとうさま」

おとうさまとアスナおねえさまは、けんじゅつのどうじょうにいくみたい。わたしとマナはきのう、このかちゃんとあそぶやくそくした。ほかのこともあそんだことがないから、ちよっときんちょうする。

おかあさまはまちにいつて、おかいものをするみたい。すこしまえに、おこったかおでていったけど、どうしたんだろ。おとうさまとけんかしたのかな？ いやだな・・・おとうさまとおかあさまはなかくがいちばんなの。

「分かった。戻って来るのは多分夜になるな。それまでだいじょうぶか？」

「だいじょうぶです。マナもいますし」

おとうさまとおかあさまがいつちやうのはちよつとふあんだけど、わたしはいいだから、ちゃんとまってる。

「そうか。マナも、刹那の事を頼むな？」

「うん、兄さん。安心して」

「よしっ。んじゃ、行ってくる」

そういつて、わたしとマナがおとうさまにつよくだきしめられる。

ちよつとくるしいけど、とてもあたたかい。ほつとする。

「おとうさま、いつてらっしやい！」

「行ってらっしやい」

「また後でな」

それからおとうさまはアスナおねえさまといっしょにいえをでた。

「それじゃあ、刹那。私達も行こうか。きっと木乃香も待っている」

「はい、いきましよう、マナ」

「その前にだかな、刹那・・・」

「なんででしょうか？」

「その話し方だ」

「え……？」

わたしのはなしかた、なにかわるいの？

「刹那は誰にでも敬語を使っているだろう」

そういえば、そうかも……？

「多分、それは刹那なりの自己防衛手段かなにかだろうが、私達はもう家族だ。家族の間くらいは敬語を使うのをやめないか？ 何だか距離を感じてしまう」

じじい……？

「とにかく、敬語はやめてくれ。兄さんたちは何も言わないけど、同じような気持ちだと思う」

おとうさまたちも？

「……」

「まあ、いきなり喋り方を変えろと言われても戸惑うだろう。けど、がんばって欲しい」

「うん……がんばってみる」

「ああ……っと、早く行かないとな。刹那、少し急いじ」

そしてマナはわたしのてをとって、このかさんのところまではいっ

ていく。

このかさんは、おとうさまとわたしをむかえにきた、えいしゅんさんのむすめ。

きょうはいつしよにあそぶやくそくをした。もしかして、わたしのともだちになってくれるかもしれない。ともだちはじめてだから、どうすればいいのかわからない。

さどでは、いえのなかからそのこどもたちがあそぶのをみてたけど、わたしはあそんだことがないから、あそびかたがわからない。わたしがあそびかたがわからないから、このかさんがっかりしたらどうしよう。

けど、わたしがこわくても、マナはとまらない。もう、にわがみえてきている。

「あーっ、やっときたー」

わたしとマナがにわにはいると、きものをきたこのかさんがわたしたちをよんだ。

「すまん。兄さんとアスナ姉さんの見送りをしていたら少し遅れた」

「ごめんなさい・・・」

「ええよー。それよりも、はやくあそぼー」

「木乃香はどんな遊びをしたいんだ？」

「んー、そやなあ・・・かくれんぼ!」

このかさんはすこしかんがえてから、かくれんぼがしたいといった。
どんなあそびだろう・・・

・

・

・

「なあなあ・・・」

「なんですか、このかさん」

「どうした、木乃香?」

たくさんあそんだあと、このかさんがはなしかけた。

「それ! それや!」

「え・・・?」

とつぜん、なんだろう。

「うちら、おともだちなのに、せつなちゃんはずちのことを」「このかさん」ってよぶし、マナちゃんはなんかよそよそしい」

「そんなつもりはないんだがな」

「とにかく！ そのよびかたがきにいらんのや！ せやから、うち
のことは『このちゃん』ってよんで！ せつなちゃんは『せつちや
ん』、マナちゃんは『まーちゃん』ってよぶからー！」

「せつちゃん？」

「まーちゃん……」

「そのほうがおともだちってかんじがするやろっ…」

「このちゃん……」

「これでおともだちなのかな？」

「うん！ なんや、せつちゃん？」

「このちゃん」

「せつちゃん？」

「このちゃん」

「せつちゃん！」

「このちゃん！」

えへへ……わたしのはじめてのおともだち。

このちゃん。

「まーちゃんも！」

「いや、私は今まで通り、木乃香でいいよ」

「うう、だめなん？」

まーちゃんはこのちゃんってよびたくないみたい。それがかなしくて、このちゃんがなきそうなかおをしてる。

「まーちゃん……」

「なんだ、刹那もか？」

「だめ？」

「……ふう〜、分かったよ。このちゃん、せつちゃん。これでいいかい？」

「うん！ これでまーちゃんもおともだちやな！」

「ありがとう、まーちゃん！」

ふふふ、まーちゃんとはかぞくになっただけ、なんだか、これでほんとうになかよくなれたってかんじがする。

「おーい」

「あつ、兄さん」

え、おとうさま？

「あつ、ほんとだ。おとうさまたちがかえってきた」

こえがしたほうを見ると、おとうさまとアスナねえさまがいた。

「せつちゃんたちのおとうさま？ おにいさま？」

「このちゃんはまーちゃんがにisanってよんだのに、わたしがおとうさまとよんでるのがふしぎみたい。」

「あのね、このちゃん。おとうさまはおとうさまだけど、まーちゃんのおにいさまなの」

「え？ え？」

「このちゃん、ちょっと複雑な事情があるから、また今度話すよ」

「まーちゃん？」

「兄さん達が帰ってきたし、多分もうすぐご飯になるだろう。だから、その話はまた時間があるときにしよう。それでいいか？」

「うん、ええよ。まーちゃんがそついつなら」

「また明日、遊ぶだろう？ そのとき、話そう。せつちゃんもそれでいいか？」

「わたしもいいよ」

あしたもあそぶやくそく。

えへへ、うれしい。

あしたはどんなあそびをやるのだろう。

第五十二話：三人娘（後書き）

いやー、すごい難産でした。

あのまま、すぐにソウジと鶴子を会わせるか迷いましたが、木乃香、刹那、マナの出会いの方を入れてみました。ソウジ達の話（今回の裏話）は次回になります。

今度はもう少し早く書けるようにがんばります。

あと、感想の返事はもう少し待って下さい。

第五十三話・青山家、そして再会（前書き）

お久しぶりです。

諦めた頃にやってくる、るらたです。

きっとこれからも更新は不定期になると思いますが、今回ほど長く待たせないようにがんばります！

第五十三話・青山家、そして再会

< side : ソウジ >

「おとうさま、いつてらっしゃい！」

「行つてらっしゃい」

「また後でな」

詠春の家で一晩過ごしてから翌日。俺とアスナはこれから青山家に出掛けるところだ。刹那とマナはどうやら昨日のうちに木乃香と遊ぶ約束をしたらしく、今日はここに残りたいと朝言われた。

刹那とマナに新しい友達ができるのは大歓迎だし、勿論俺はそれをすぐに許可した。原作云々よりも、ただ純粹に今まで寂しい思いをしていた刹那に友ができるのが嬉しい。刹那と知り合ってからたった数日しか経っていないけど、家族として受け入れるには充分だ。そんな家族には幸せになつて欲しい。

「じゃ、いくぞ、アスナ」

「うん……ソウジ、どうしたの？」

「なにが？」

「エヴァ、怒つてた」

アスナと手を繋いで詠春の家を出ると、アスナは俺を見てエヴァの事を聞いた。

「あゝ、なんかなるよ。だからあんまり心配するな」

エヴァは少し前に怒りながら出て行ったからなあ・・・アスナが心配するのも無理はない。

「そう」

それに、エヴァと俺の絆はそんなにやわじゃない。今は少し拗ねているだけだ。俺はエヴァを信頼しているし、彼女も同様に俺を信じているはず・・・だよな？ 俺の鋼のような自制心で鶴子のどんな誘惑にも耐え抜いてみせる！

「それはともかく、アスナは楽しみか？」

「楽しみ？ どうして？」

「だって、アスナが神鳴流を習い始めて、強くなってからは俺以外と模擬戦することはなかっただろ？ 俺は先生だしな。今まで同年代の子とかいなかったけど、青山の家にいる素子は確か、今のアスナと同じくらいになっていると思う」

最後に会った時から計算すれば、素子は十歳くらいで、今のアスナの身体年齢と同程度のはず。

「ふーん・・・」

「あんまり興味なさそうだな」

ふーん、って。

「だって、子供なら弱そう・・・」

「そりゃ、今のアスナはかなり強いし、素子じゃ相手にならないかもしれないけど、それでも、近い年齢の子がいるのはいい刺激になると思うぞ」

「そうかな」

どうも信じられないと言う顔をするアスナ。確かに今のアスナは色々と規格外だし、アーティファクトを使わせたら、いわゆる『本物』並の実力を発揮する。タカミチなんて目じゃない。

それはアスナ自身も分かっているし、そんなアスナなら、いくら将来有望な素子でもライバルと認められるのは少し無理があると言う話か。

けど、素子ならば、姉の鶴子ほどの才能はあると俺は睨んでいる。

『ラブひな』じゃ色々の理由（亀のトラウマなど）から本来の実力以下しか出せていなかったけど、素子も本家の血筋。剣に本気で打ち込めば、話は変わってくるだろう。そうすれば素子はアスナがびつくりするくらい強くなるかもな。素子は鶴子のご不満ですごく修行をがんばっているって詠春が言ってたし。

「とりあえず行こう。素子のことはともかく、鶴子は剣術だけなら今のアスナよりは強いし、いい先生にもなるだろ」

詠春の話でも鶴子の技術はすでにマスタークラス。気の量もすでに人外。二十歳にして、すでに現役時代の詠春を凌いでいるらしい。覚醒状態ならば以前でも詠春より強かったけど、ついに普段の状態

でもそうだったか。がんばったんだな、鶴子。

「先生はソウジがいい・・・」

「むっ、そうか」

かわいいことを言ってくれるなあ、もう！

アスナの言葉に内心喜びつつも、それを表に出さない。アスナが先生に俺しか欲しくないのは嬉しいけど、そのまま頑張っても、視野が狭い武術家になってしまいかもしれない。実際、俺にもエヴァにも何人もの先生がいた。それは魔法に限らず、旅先で出会った武術家も含んだ。それに、アスナには鶴子の強さを過小評価している節がある。

だから、最終的に俺が先生役に落ち着いても、その過程でアスナには色々な経験をして、世界は広いと知って欲しい。例え、その結果としてアスナが時々叩きのめされようとも。

「一応、鶴子は神鳴流としてはアスナの先輩になるんだけど・・・」

「・・・」

はあ、アスナの考えは変わらずか。まあ、俺も『先輩』という理由だけでと説得力に欠けると思うけど・・・

けれど、それでもここの頭ごなしに鶴子の強さを否定しなくてもいいだろ。きっとアスナの中じゃあこんな図式が出来ているのだろう。

俺>エヴァ>>>(越えられない壁)>>>ナギ>ジャック>>紅
き翼のその他>>>(越えられない壁)>>>その他の人間。

その中でアスナが自分をどこらへんに置いているのかは知らないけど、『その他の人間』の括りの中じゃないのは確かだな。

詠春の話が真実で、鶴子が本当に強くなっているのを祈るしかないか。

「・・・ソウジ？」

何も言わない俺にアスナが声をかける。

「まあ、いいか。とにかく、今は青山家に行こう。鶴子の話も、アスナの鍛錬もそれからだ」

「うん」

アスナが短く返事をし、それから俺たちは雑談しながら青山家まで歩いた。

・

・

・

「着いたな」

「うん、着いた」

しばらく歩いた後、俺たちは数年振りに青山家の正門を潜った。

「アスナはここを覚えてるか？」

ふと気になり、アスナに聞く。

「覚えてるよ」

「前は小さかったのに、よく覚えてるな」

「体は関係ない・・・」

少し拗ねたようにぶすっと唇を結びながら言うアスナ。その顔もかわい。

小さい事を気にしていたのか？

確かに実年齢だけで言えば、あときはすでに百歳くらいだったから覚えていても不思議はないけど、今は子供扱いされたくない年頃かな？

というか、こんなやり取り、つい最近もやったような感じがする。

いかなあ・・・子供をいつまでも子供扱いするのは俺の悪い癖だ。吸血鬼だと、時が過ぎるのが速すぎる所為だ！

うむ、決してエヴァが言うように俺にデリカシーが足りないなどと

言う理由ではない！

「さて、こんな場所で立っているのもなんだし、さっさと中にはい
??」

はっ！

殺気！？

「アスナ！」

屋敷に入る寸前、いきなり何者かが襲いかかってきて、俺はアスナ
を抱えて後ろに跳んだ。

そして??

ドーン！！！！

一瞬前まで俺たちが立っていた場所は大きな音とともに土煙に覆わ
れた。

煙の奥からゆっくりと出てくる襲撃者。

その間に俺はアスナを下し、ひなを抜刀する。

「ふっ、気配を消すのが上手くなったな。当たる直前まで気がつか
なかつたぞ」

襲われたというのに、俺の声色は明るい。煙は未だに晴れないが、
こんな場所で襲ってくる奴など限られている。その上、煙の中に見

える影が女性のものとくれば、該当するのは一人しかいない。

「ふふ、流石やわ。今の、結構本気やったのに、擦りもせんなんて」

「おいおい、アスナもいたんだぞ？ 俺が反応していなかったらどうするつもりだった？」

「嫌やわ、そんなん、あなたが許さんやろ？ なあ、先生？」

「当たり前だ。それでも、少しは配慮して欲しいぞ、鶴子」

襲撃者？？鶴子？？は微笑を浮かべながら煙から出現する。

鶴子は袴姿で、太刀を片手からだらりと垂れ下げられている。数年振りに会った鶴子は少女を卒業し、立派な女性にまで成長している。それと以前にはなかった余裕と落ち着きが相まって鶴子は前と比べて遥かに魅力的だ。

しかし、この鶴子の様子……

目の色は反転していて、全力全開状態だ。明らかに戦闘を続けるつもりだ。

とりあえず、アスナを離れさせないと危ないな。

「アスナ、少し離れてくれるか？」

「うん、分かった。がんばって、ソウジ」

アスナに離れるのを頼むと、彼女は素直に頷き、去り際に俺を応援

の言葉をくれた。

イエーイ！

それだけで元気百倍だぜ！

「さて・・・さっきのも挨拶にしては元気過ぎな感じは否めないが、まだ終わりじゃないだろ？」

五メートルほど離れた場所で立ち止まっている鶴子に話しかける。

「そんなん、当たり前やん、先生。うちの成長、その目でしっかりと見てや！」

そう言うと、鶴子は気を解放し、刀を構えて俺に飛びかかった。

こんな場所（屋敷の門前）で本気の戦闘をしてもいいのか、とか、他の奴らに挨拶をしなくてもいいのか、とか、色々なことが頭を横切ったが、そんな心配をしている場合じゃなさそうだな。そんなものは今の鶴子の頭の中にはなさそうだし。

それでは、弟子がどんな風に成長したか、じっくりと確認しようか。俺をすっかりさせるんじゃないぞ、鶴子！

第五十三話・青山家、そして再会（後書き）

後半、無駄にテンション上げ過ぎかな？

次回は鶴子との戦い（かも？）

戦闘描写を考えるのが難しいので飛ばし気味になる可能性もあります。

それでは次回まで。

ノシ

第五十四話：鶴子と対決！！と、見せかけて素子再登場！（前書き）

結局更新まで3週間も待たせてしまいました。
すみません。

第五十四話：鶴子と対決！！と、見せかけて素子再登場！

< side : 素子 >

遠くから大きな音が何度も聞こえてくる。

それを作つとるんは姉上と『あの人』やろつ。

姉上が好いとる、ソウジっちゅー人。

詠春おじさんが仕事の報告の電話をして、一緒にあの人か帰つてくるって聞いた姉上の喜び様はすごかった。

今朝も、姉上は朝食から上機嫌で、どこか上の空やった。

そして、つい先ほどまで、道場で姉上に剣の稽古を見てもろつとつたんけど、その途中で姉上は何かに気づき、すごい笑顔で刀を取って道場を飛び出た。

もう、折角姉上に教えてもろつとつたのに！

ソウジめ・・・父上に聞けば、妖怪やないの。妖を退治するはずの神鳴流がなんで化け物と仲良くしとるんや！

うちのお祖父さんのお祖父さんかなんか世話になつたとかなんからしいけど、そんなん知らん！

ソウジなんて姉上にやられて振られてしまえばええんや！

姉上はソウジの事を『先生』なんて呼んどるけど、ソウジが姉上に剣を教えとつたんは何年も前の話や。

その間に姉上は最強の剣士になって、今はもう詠春おしさんや父上よりも強いんや。

せやから、いくらソウジが昔は強くても、今の姉上が負けるはずがない！

「む、素子か」

外の姉上のことを考えとると父上が入ってきた。

「父上」

「鶴子は・・・外か・・・ちっ」

一瞬、父上は姉上のことを探したけど、すぐに外で戦っていると気がついた様や。

そして姉上が誰と戦闘中だとも。

父上はうちと同じであの人のことを嫌うとるから、昨日から機嫌が悪い。

「父上、大丈夫や。姉上が負ける筈がないやろ？ 吸血鬼男なんて、姉上がすぐにやっつけて戻って来る筈や！」

難しい顔をしとる父上を励まそうとそう言っけど、父上の表情は変わらへん。

「素子・・・」

むう・・・

なんや、父上、姉上のことを信じとらんのか？

姉上は勝つんや！

そしてソウジの事なんて忘れて、またうちに剣術を教えに帰って来るんや！

「素子、鶴子が勝つのを信じたいんは分かる。私も出来れば、そう思いたい。実際、鶴子は私よりも強うなつとるし、歴代の神鳴流剣士の中でも最強に近いんや。しかしな・・・」

「父上、何言つとるんや。まるで姉上が負けると思つとる様に聞こえるよ？」

まさか父上に限つてそんなことあらへんよな？

「あの人・・・宗治様は別格なんよ。鶴子は負ける。鶴子だつて分かつとる事や」

「そんなん、ちやうもん！ 姉上は絶対勝つもん！」

「素子・・・おい、どこ行くんや！」

父上のバカ！

姉上は負けん！

そんな父上から逃げるようにうちは道場を出て、姉上とソウジが戦つた場所まで走った。

周りからは大きな爆音が聞こえるし、危ないんのは分かつた。

けど、我慢できんのだよ！

父上が間違つたことを証明する為に、この目で姉上が勝つところを見るのだよ！

そうして走つると、屋敷の正門に着いた。

姉上とソウジは色々動き回つたようだけれど、この近くを中心に戦つた様子やし、ここならどうなるかは分かる。

「(なんや、あいつ?)」

姉上達のことを見ると、ふとうちの近くでもう一人の女の子がいるのを見つけた。

うちと同じくらいのその子もどうやら二人の戦いを見とるらしい。

けど、あんな子、うちの門下生にいたか？　うちには見覚えがないけど……

すると、あの子はソウジの仲間か?!

くっ……家に何の用や！

ソウジが来るだけでもむかつくのに、神鳴流に関係あらへん奴まで

連れてきたんか!?

やっぱり、所詮は元々神鳴流とは関係ない化け物やったんやな。

そう考えると、怒りがどんどん沸き上がり、足でズンズンと音を立てながら女の子に近づいた。

「あんだ!」

「・・・?」

声をかけると女の子はこっちに気づいて顔を向けたけど、返事をせえへん。

「あんだや、あんだ!」

「・・・なに?」

ふん、今度はちゃんと反応したか。

「あんだ、ソウジとか言う奴の仲間か?!」

「うん・・・それが何?」

やっぱりそうやったんか!

「ソウジが今戦つとるんはうちの姉上や!」

「お前、鶴子の妹?」

お前、とか、姉上を呼び捨てとか、失礼な奴やな！

「そつや！ 神鳴流最強の剣士、青山鶴子の妹の青山素子や！」

ふふん、どや、参ったか！

「違う・・・」

ん、なんや？

「何か言ったか？」

「違う。鶴子は最強じゃない」

「なんやと！ 姉上は最強や！ 父上もおじさんも、誰も敵わんのや！ 姉上が最強じゃのうたら、誰が最強なんや?!」

姉上は無敵や。なのに、こいつは姉上が最強やないという。

「最強はソウジ。鶴子は予想外に強いけど、ソウジよりは弱い」

「なっ!!--!!」

よりもよってソウジが最強やと?!

「姉上は負けへん！ 負けるんはソウジの方や！」

「ふっ・・・」

なんや、その笑い!!--!!

まるで負け犬を嘲るような顔！

ええもん！

どうせ姉上が勝つもん！

そしたら、笑うのはうちの番や！

今の内に笑っとけばええ。

* * *

< s i d e : ソウジ >

戦い始めてからどれくらい経ったんだろう？

大体1時間くらいか？

一応、殲滅用の技はどちらも使っていないから、周りの被害は最小に抑えられている筈。

小さなクレーターを所々に作っているし、多少の木は倒されているが、まあ、許容範囲だろう。

しかし、鶴子は本当に強くなっているな。

勿論、基礎体力や気の量もかなり上昇しているが、それよりも剣の腕自体が上がっている。

数年前にはまだあった粗さはなくなっており、動きが洗練されている。

正に達人級。

剣の腕だけなら俺に近づいてるんじゃないのか？

たった数年でここまで強くなるとは・・・

これが天才か。

少し妬けるな。

無論、ここまでくるのに血の滲むような努力をしたのだろうが、それでもたった数年だ。

それだけの時間で百年近く磨き続けている俺の剣に追いついてきている。

これを天才と呼ばずに何をそう呼ぶ。

「強くなったな、鶴子。正直言って驚かされたぞ」

しばらく打ち合っていた剣を止めて、俺は鶴子に話しかけた。

「先生に褒めてもらえるなんて、光栄やわ。けど、それでも先生は本気やないやろ？」

「いいや、そんな事ないぞ。一応、地形を変えたくはないから技を

色々封印しているが、それはお前の方もだろう。純粹な剣の腕の勝負ならお前はこの通り、俺と同等の技術がある」

「.....」

あらら、鶴子が目を開いて驚いてるぞ。

これはもしかしてかなり貴重な顔か？

写真に残したいところだが、流石にそんなものは持ち合わせていない。残念だ。

けど、そんなに俺と並んでいる事が予想外だったか？

「鶴子、お前がどう考えているかは知らんが、俺は無敵でもないし、完璧超人でもない」

まあ、今までは負け知らずだから1つ目は証明できないが、こと剣に関してはそうだ。

それが技術の上に成り立っている限り、その上限はないし、俺も自分の技術が完成していると思うほど自惚れていない。

だからこそ、日々精進しているわけだし。

「けど、先生、まだまだ余裕やないの。うちは気の強化も使って、いっぱいいっぱいなの」

「それは、俺はまだまだ余裕だから当然だ」

「ほら！」

鶴子は何やら得意げな顔をしてこっちを見ている。

俺より弱いと認めていると同然なのに、何でそんなに嬉しいんだ？

「あのなあ、鶴子。俺は今、剣の腕の話をしているんだ。戦闘力の話じゃない」

「そんなん、同じとちゃうの？」

「当たり前だ」

よく分かっていないような顔をする鶴子。

ここらへんはまだ若いから分かっていないのかな？

まあ、どうでもいいか。

「剣の腕とは技術の良さ。戦闘力とは体力、筋力、気、魔力などと言った要素を全部含めた上での強さ。俺は人間じゃないから・・・戦闘力は人間とは比べ物にならないほど高い」

「そうですか。分かりました、先生。先生は戦闘力を今のうちに合わせとるからまだまだ余裕やけど、剣術は全力なんやね」

「おおむねその通りだな」

鶴子も分かったか。

「そう言えば、鶴子に始めて会った時の模擬戦。覚えてるか？」

「そんな当たり前やん、先生！ 先生との事は一つも忘れてへんよ！」

「一つもかよ・・・」

「あの時、どう感じた？」

「うーん、そやな・・・確か、先生の戦い方がやけに巧く感じたな・・・あつ！ そういう話なんやね？」

「そうだ。その時も俺は戦闘力を落としていた。それでも、剣術だけで他の生徒を翻弄していただろつ？ そう言う事だ」

「なるほどなあ・・・」

多分、今の鶴子ならあの時と同じ事ができるんじゃないかね？

「とまあ、そう言う訳で、鶴子。おめでとう」

「おめでとつっ？」

頭にはてなを浮かべて軽く混乱する鶴子。

「ああ・・・今までよくがんばったな。これでお前は俺の生徒から卒業だ」

「せんせ・・・」

鶴子は感激して、目に涙を浮かべている。

「じつじ・・・」

その鶴子の頭に手を乗せ、昔のように撫でてしまう俺。

いやいや、何、この茶番？

そもそも俺が鶴子に剣を教えていたのはたった数ヶ月なのに、何が『俺の生徒から卒業だ』だよ！

けど、これは必要なことなんだ！

これで鶴子は生徒から卒業し、俺と対等になれる！

これからの事では絶対不可欠なことなのだ！

それから少しだけ撫で続けてから鶴子は俺から離れ、もう一度剣を構え直した。

・・・あれ？

ここは鶴子が感動して教師と生徒の壁を越えた恋物語が始まる場面なのでは？

ドウシテ鶴子はまた剣を構えているのかな？

というか、恋物語はまだ駄目だろ！ エヴァに殺される！

ここで『まだ』を使っているのがミソ。

だってハーレムは男のロマン。そう簡単に諦めてたまるもんですか！
はあ・・・ちよつと面倒だけど鶴子に理由を聞くか。

「鶴子、何でまた剣を構えてるんだ？ さっき俺がお前の成長を認めればっかりじゃねえか」

「そやね、先生。それはそれで嬉しかった。けどな、うちはまだ本気の先生とはまだ戦つとらんのや」

なに？

俺の本気とやりたいのか？

うーん、まあ、今の鶴子なら耐えられるか。

「そんなに俺の本気が見たいのか？」

「見たい」

「分かった・・・気を抜くなよ、鶴子。油断すると冗談ではなく死ぬかもしれない」

「いつでもどうぞ、先生」

そう言うと、鶴子は刀を握り直し、俺がどこからでも襲いかかってもいいように全方位を注意し始める。

「では、行くぞー！」

久しぶりに全力を解放し、戦闘が再開する。

・

・

・

数分後。

その場で立っているのは一人だけ。

俺だ。

鶴子は多少の怪我をして倒れている。

死んではいないが。

「やっぱり先生はすごいな」

「まだ意識があつたのか？」

流石は鶴子ってところか？

「というか、卒業したんなら、もう『先生』じゃないだろ？」

「ふふふ、ええやないの。やっぱり先生はいつまでもうちの先生

「なんや」

「まったく、地面に倒れているのにやけに嬉しそうじゃないか。」

「はあ・・・まあ、そう呼びたいなら呼べば良いさ」

「ふふ」

「それで、鶴子。動けそうか？ そろそろ戻らないとアスナが少し心配だ」

「しばらくは無理そうやわ・・・やから??」

動くのは無理と鶴子が言うと、不意に両腕をこちらに向けた。

「これはあれか？」

「抱っこの催促か？」

「・・・」

「・・・」

「俺たちは少しだけそのまま向き合つと、最初に折れたのは俺だった。」

「俺は無言で鶴子に近づいて、鶴子の背中と膝の後ろに腕を入れ、鶴子を抱き上げた。」

「うん。姫様抱っこだ。」

これは何年もがんばった鶴子へのささやかのご褒美だと思えばいいか。それに、動けない怪我の原因は俺にあるし。

さて、この後はアスナと合流して当主に挨拶か。

あと、鶴子とも色々話し合うことでもいいあるな。

まあ、これも俺がここまで引っ張ってきた所為でなった事だ。ちやんと責任はとるさ。その形がどうなるかはまだはつきりしないけど。

第五十四話：鶴子と対決！！と、見せかけて素子再登場！（後書き）

やっぱり飛ばされる戦闘描写。

そして役得（？）の鶴子。

素子はどうでしたか？

素子はラブひなヒロインの中では自分の一番お気に入り。

ネギまの原作開始時には準ハーレムメンバーの予定（どうやってこの最悪な印象からそうなるんだ？ 俺の馬鹿！ 無駄にハードル上げやがって！）

第五十五話・戦闘その後（前書き）

短いですが、これ以上書くと更に待たせてしまいそうなので、
りあえず投稿です。

第五十五話：戦闘その後

< side : ソウジ >

鶴子を抱いたままアスナが待っている青山家の門まで戻る。

「姉上！」

腕の中で少々ぐったりしている鶴子の姿を見て、鶴子に少し似た、アスナと同じくらいの少女が声を上げてこっちに走る。あれが素子か？

アスナの方は何でもないような顔でただ俺たちを見ている。いや、よく見れば、どこか勝ち誇っているような・・・？ 何でだ？

「お前！ 姉上に何したんや！」

そして何故か責められる俺。

「何って、久しぶりに会った師弟のちょっとしたスキンシップ？」

「その状態はなんや！ 何で姉上が動けなくなつとるんや！ お前が酷い事したからやる！」

「こら、素子！ 先生に失礼やる！」

目を吊り上げた状態で俺を睨む素子だが、それを見た鶴子は俺の腕の中から降りて素子を叱責する。しかも、その足取りはしっかりと歩けないのはやっぱり振りだけだったのね。

「姉上！ でもっ！」

「鶴子、俺は別に気にしてないから大丈夫だ。」

「先生……」

そういつと何故かうつとりする鶴子。

こいつ、こんなキャラだったっけ？

「うつ……姉上のバカー！！ もう、知らーん！！！！ うわあーーん！！！」

そして、それを見た素子は泣きながら走り去る。

「素子……」

「鶴子？」

「大丈夫や、先生。素子はちょっと拗ねとるだけや。あの子もええ歳やから、姉離れをせなあかんのやけど、いつまでたっても甘えたがるんやから、困りもんや。うちもいつまでもここにおる訳やなし……」

意味ありげな微笑を俺に向けて言う鶴子。

それは何……？ 暗にこれからは俺たちと行くから素子には姉離れをしないとイケないと言いたいのか？

まあ、鶴子とはそう約束したし、俺たちについてくることには異議

はないが、これじゃ俺はますます素子に嫌われるんじゃないのか？

「ふう・・・とりあえず、中に入るか。いろいろ挨拶もしたいし」

「そやね」

「アスナ、鶴子に挨拶は？」

「久しぶり」

ぽつりとアスナが呟く。いつも大人しいけど、なんだか鶴子の前では更に言葉数が少なく感じるな。何でだ？

「お久しぶりやな、アスナちゃん。うちのことを覚えとる？」

アスナの視線までしゃがみ込み、鶴子が話しかける。

「うん」

「そつかあ。あんときはこーんなに小さかったのに、よく覚えとるなあ」

膝の半ば辺りを手で示す鶴子。今のアスナは鶴子の腰より少し上の身長だが、確かにあの時のアスナは鶴子の言う通り、結構小さかった。

「関係ない」

アスナは身長と記憶が関係ないと言いたいのか？ 当時のアスナはまだまだ精神年齢が低かったから、普通の子供みたいに記憶が薄れ

ていくかと思っていた。けど、記憶は全然なくなっていないらしい。記憶力だけが成熟していたのか、それともアスナ自身の記憶力が特別にすごいのか、よく分からないけど、もしも後者ならどうして記憶を消されたアスナはあんなにアホの子だったんだ？ やっぱりあれか？ 記憶を消す魔法で頭がパーになったのか？

「そういえば、アスナちゃんは見た目より年上やったっけ？ それなら色々覚えとるのも不思議やない？」

そこでアスナには色々複雑な事情があるのを思い出す鶴子。詳細は多分知っていないとは思うけど、なんとなく察しているだろう。

「鶴子、負けた？」

「うん、負けてもうたな。やっぱり先生は強い」

「やっぱり」

やっぱり？ アスナに信じられているのは素直に嬉しいけど、どうしてそんなに勝ち誇っているんだ？ もしかして素子と何かあったか？

「アスナ、何だ、その顔？」

「ソウジ？」

「俺と戦って鶴子が負けるのが当たり前とか考えているかもしれないけど、少なくとも鶴子は今のアスナよりは強いぞ。アーティファクトを使っても負けてしまっつかもな」

「本当？」

いかにも信じられないという顔をしながら鶴子を見るアスナ。

「本当だ。今日は無理でも、また今度戦ってみればいい。そうすれば分かる」

「ふーん、ソウジがそういうなら信じる。鶴子、今度勝負よ」

宣戦布告してからアスナは俺の横に来て、俺の手を取る。一方、挑まれた鶴子はただにこやかに微笑んでいた。そして俺たちはそのまま家の中に入る。

「先生、アスナちゃんはそれほど強いのですか？」

道中、鶴子が俺にアスナの事を聞く。

「アスナか？ 結構強いぞ。そうだな、最初に会ったときの鶴子よりは確実に強い。神鳴流は俺が教えていたし、咸卦法という奥の手もある。それに、あいつのアーティファクトも凶悪だ」

「アーティファクトですか。確か、西洋魔術師が使う契約魔法で得られる魔法具だったか？」

「そうだ。とにかく、勝負するときは油断するなよ、鶴子」

「分かつとるわ、先生。先生の話からアスナちゃんの強さは充分分かつとるつもりや」

アスナと戦う覚悟をする鶴子を見て大丈夫だろうと思う。最後には

個人的な願いを足すか。アスナに聞こえないように声を下げて続ける。

「・・・できれば勝負の時はコテンパンにして欲しい。アスナはあ言っていたが、多分まだ鶴子のことを舐めているだろう。ここずっと俺やエヴァとの訓練しかしていなかったから自分の強さを過大評価している節がある。だから、ここで自分より強い人はいるところにはいるという事を知って欲しいんだ」

「任せて、先生。アスナちゃんの強さはまだ知らんけど、先生がうちにできると思たんならうちはやるだけや」

心強いな、全く。まあ、アスナの事は鶴子に任せてもいいだろう。

さて、問題は次の秋人との話し合いか。詠春の話では結構恨まれているからな・・・

できればあいつと素子とは仲良くしたいんだけど、このままじゃあちょっと難しいか？

第五十五話：戦闘その後（後書き）

<http://ncode.syosetu.com/n0304p/>

にて私が書いた天地無用と星界シリーズのクロス物があります。「オリ主」を始めたとき、どちらを続けるか迷いましたが、結局こちらの方が進め易く、こっちにしました。興味があれば見ていって下さい。

第五十六話・青山家の事情（前書き）

お久しぶりです。

研究が忙しかったり、アラド戦記に嵌まったりして書く時間が見つからなかったです（自業自得とも言いますね）

とにかく更新です。できれば次はもっと早くしたいですね。

第五十六話：青山家の事情

<side：ソウジ>

「ならん！ ならんぞ、鶴子！」

「姉上！ なんでそんなこと言うんや！」

「父上、素子、これは前から決めてたことや。先生が戻って来たとき、うち是一緒に行くつて。父上も覚えとるやろ？」

大声を上げているのは鶴子の父である秋人、そして素子。会話から分かるかもしれないけど、ただいま鶴子と盛大に喧嘩中です。

屋敷の中に入った俺たちはすぐに鶴子の父に挨拶に来た。そこには秋人に加え素子もいた。まずは軽く挨拶でも、と俺は考えていたんだけど、そこを鶴子に割り込まれ、開口一番で俺に付いていくと宣言した。そして冒頭に至るといふ訳です。

鶴子の言う、覚えてる、つていうのは俺たちが前回京都を出て行ったときのことだろう。確かに、俺は今度鶴子を一緒に連れて行ってやるけど、まさかいきなりこう来るとは・・・

「あいな、鶴子・・・」

「先生は黙つといて下さい！」

「はい・・・（しゅん）」

更に険悪そうになりそうな三人を止めるために声を上げたけど、そ

れを鶴子にピシヤリと黙らせられる。

やっぱりここは静観するのが一番か？

言っておくけど、鶴子のプレッシャーに負けたんじゃないぞ？

うん、負けたんじゃない。

大切な事だから（ry

とにかく俺はアスナと部屋の隅っこで成り行きを見守っていよう。

「姉上！　ここを出て行くってどういうことや！　姉上は神鳴流の剣士やる！　うちの事を捨てるんか？」

そう訴える素子の顔は鶴子を責める言葉とは裏腹に、泣きそうになっている。

「素子・・・素子も先生の事を聞いとるやる？　先生は御先祖様に妖刀ひなを託されるのを認めただほどの剣士や。そんな先生と行ってもうちが神鳴流じゃなくなる訳やない。それに詠春おじさんも昔京都を何年も離れとったやん。それでもまだ神鳴流の剣士やる？」

「姉上！」

「鶴子、詠春とお前では話が違う。あの子の詠春はすでに婿に行く事が決定されていた。青山家を継がないあいつと長い神鳴流の歴史の中でも最強に近く、そして跡継ぎでもあるお前とは立場が違う。お前が離れるのを認める訳にはいかん」

必死だね・・・理屈は分かるけど、顔を見ればそれは本心じゃないっぽいな。どうしても鶴子に俺たちと行かせたくないらしい。

「なんやの、それ！　うち、そんなん、いつ合意したんや！　跡継ぎなら素子でもええやん！　今はまだ幼いけど、将来は立派な神鳴流の剣士になるんは間違いないしや！　そしたら素子に継がせてもええし、なんなら弟子の一人に継がせてもええ！」

「なっ！　それは本気で言つとるのか、鶴子！　代々青山に継がれてきた神鳴流を途絶えさせるのか！」

この言葉には秋人も驚愕した。

俺も驚いた。

秋人じゃないが、まさか鶴子が長い歴史がある青山家の事を否定するとは思っていなかった。

多分鶴子のこの言葉は秋人や素子と同じく、本気で言っている訳じゃないだろう。この場の雰囲気の流れで思わず言ったとか。それに、自分が出て行きたいのに次期当主の事を素子に押し付けるのを躊躇っているからそういう形になったとか。

とにかく、これ以上続いてしまえば双方が後悔することを言ってしまうかもしれない。そろそろ何か言うべきだろう。

「もちろん・・・！」

「皆、そこまで。ちょっと落ち着こう」

「先生！ これはうちの問題や！」

「そうです、宗治様！ 失礼かもしれませんが、口出ししないでいただきたい！」

鶴子と秋人は俺が声を上げた事に不満があるようだ。けど、俺はこれ以上黙っているわけにはいかない。

「関係ないって・・・そもそも話は鶴子が俺たちについて行くかどうかなんだろう？ それで関係者じゃないなら、誰が関係者なんだよ」

やれやれ。

「むう・・・」

「それで、聞いていけば、今の問題は鶴子が京都を離れることか？」

そう聞くと、秋人は渋々と頷く。

「それならばこれでどうだろう？ 俺たちはしばらく京都にいるから今は折れてくれないか？」

刹那の為にもしばらくは一カ所に留まっている方がいいだろう。木乃香という新しい友人ができたみたいだし、俺もいいかげん放浪するのに疲れてきた。レーベンスシュルトの時のように何百年もここにいなくてもいいけど、せめて五年は、とか考えている。

「今の鶴子はどうしても俺たちについて行くつもりみたいだし、それは約束だから、俺は反対しない」

鶴子の方を見てみると、えらいいい笑顔をしている。他の二人は反対にしかめっ面だ。まあ、予想していた反応だ。

「けれど、その所為で鶴子が家族と疎遠になるのは避けたい。だから・・・そうだな、とりあえず数年は京都にすることにしよう。その間はナギの隠れ家を使う事にする。鶴子達はその数年でどうするかをゆっくりと話し合え。その末に話が決裂するのならばしょうがないが、今短慮を起こして全員が後悔するよりはマシだろう」

「先生・・・！」

鶴子が何やら感動して目元がキラリと光っているように見える。そんなにいい事言っただか、俺？

「分かりました、宗治様。鶴子、ここは宗治様に免じて何も言わないが、私はお前が出て行くのには反対だと言う事は変わらん」

「父上、うちの事が心配なんは知つとるけど、うちかていつまでも小娘とちゃうんやで。もう成人式も済ましとるし、自分の事は自分で決められるんや。せやから、父上がいくら反対してもうちは今日ここから出て行く」

「ふん、勝手にしろ」

「姉上！」

「素子、さつきはごめんな。別に神鳴流を素子に押し付けるつもりはないんや。もし嫌なら断つてもええんやで」

「姉上！ そんなのどうでもええ！ もし姉上が神鳴流が嫌なんやったらうちが継ぐ！ やから、行かんといて！ うちを置いて行くんは嫌や！」

建前とか捨てて必死に鶴子に縋り付く素子。言われていたが、やっぱりすごいお姉ちゃんっ子なんだな。しかし、神鳴流が『そんなのか。まあ、子供の素子にまだ歴史とか伝統とかは分からなくても仕方ないな。彼女に取っては大好きな姉とは比べ物にもならないんだろっ。』

「すまん、素子。けど、先生が言うとならざる？ うちらは京都を離れる訳やない。毎日は無理かもしれんが、ここにも顔を出すし、素子の鍛錬にも付き合っつてやれる」

「あねうええ……いやや……」

あつ、泣き始めた。鶴子も困った顔をしている。

「もう、しょうのない子やな」

苦笑しながら泣く素子をあやす鶴子。

「分かってくれんかな、素子。これがお姉ちゃんの選んだ道や。何と言われても気は変わらん」

「あねうええ……キッ！」

まだ鶴子に抱きついてしている素子だが、鶴子の気が変わらないと言われたらこっちを睨んだ。

「はは・・・」

そして素子は鶴子から離れて立ち上がるとこっちに向き、指で指しながら声をあげる。

「あんたの所為や！」

「ん？」

「あんたの所為で姉上がおかしくなつたんや！」

確かに俺の所為・・・？ 恋の病的に。

「許さへんで！ 絶対にあんたを倒して姉上を正気に戻す！」

俺にそう告げると素子は音を立てながら部屋を飛び出した。

「先生、素子はまだ駄目やで？」

素子が出てから少しすると、ふと鶴子にそう言われる。

「は？ 何の事だ？」

「いくら可愛いいうても、素子はまだ十歳かそこらの子供や。手を出したらあかんよ」

「ぶっ！ 何言ってるんだ鶴子！」

俺が子供に手を出す分けないだろ！

それに俺はどちらかと言えば手を出す方より出される方だ！ 自慢じゃないが夜這いをされても、したことはない！

「大体、お前の目は節穴か！ どう見ても素子には嫌われているだろう！」

「ふふ、先生も知つとるんやないの？ 嫌いと好きは遠くに見えて意外と近いんやで。嫌いという感情は意外と簡単に好きに変わるんよ？ そう遠くないうちに素子もきつと先生の良さに気づいて好きになると思つよ。」

「鶴子・・・私がまだいることを忘れとらんか？」

「あら父上、まだいたんや」

さつきとは違つて随分と軽いな、おい。

「・・・いて悪いか？」

「嫌やわ、ちよつとした冗談やないの」

「鶴子、もう私が何を言つても無駄だとは分かっている。それならば親として私が言える事は一つだけだ」

うん？ 何か秋人の雰囲気が変わつたな。もしかして何年といわずにもう納得し（諦め？）たのか？

「エヴァンジェリンと言う伴侶がすでにいる宗治様に堂々と正面から喧嘩を売りに行く以上、絶対に負けるな！ どうせなら子供を産んで正妻の座を奪つてしまえ！」

ズゴツ！

真剣な顔で何を言うのかと思えば・・・

俺の前で悪びれもなく寝取りを勧めるとかって。

おいおい、鶴子もなにいい顔で思いつきり頷いているんだよ！

さっきまでのシリアスは一体どこに行っただよ。

「さ、先生、行きましょう！」

「はあ、そうだな・・・もう稽古とかそんな空気じゃないし」

頭を押さえながら立ち上がる。そこで俺の腕をとる鶴子。そして反対側の手を取るアスナ。そう言えばいたな・・・何も言わないからすっかり忘れていた。

「ソウジ、小さい子がいい？」

手を握ったアスナに聞かれる。

「なんだ、藪から棒に？」

「・・・私ならいいよ？」

「ぶっ！　しないよ！」

思わずまた噴いちゃったじゃないか！

誰だよ、アスナに教えたのは！

ジャックか?! ジャックなのか?!

なんか前にもあったような気がするし！

さて、これで帰るはめになってしまったけど、もしかして帰ったら
エヴァVS鶴子の大決戦とかになるのか？

別荘が一つ駄目になるのを覚悟しないとなあ・・・はあ、直すのも
やっぱり俺か？

第五十六話・青山家の事情（後書き）

鶴子パパ、はっちゃんけすぎです。

第五十七話：頂上決戦？（前書き）

日本は今、地震や核汚染の危険ですごく大変みたいですが、皆さんは大丈夫でしょうか？ 無事を祈っています。

前半は数日で書き上げていたのに終わらせるのに一月近くという体たらく・・・

すみませんでした！

第五十七話：頂上決戦？

< side : ソウジ >

「ソウジは私の物だーーーー！！！」

ドーーーーーン！！！！

闇色の魔法が爆発を起こす。

「先生は誰の物でもないーーーー！！！！！」

ちゅっどーーーーーン！！！！

雷が落ち、地面が抉れる。

察しのいい人にはもう分かっているかもしれないけど、ただいま絶賛エヴァ対鶴子の戦争真っ最中。二人はもう十時間以上戦い続けているが、未だに終わる兆しを見せていない。

うん、この惨状はまさに戦争という言葉がぴったりだ。

「私は600年もソウジと一緒にだったんだ！今更ぼっと出の小娘に入り込む隙などないわーーーー！！！！！」

ズドーーーーーン！！！！

森が吹き飛ぶ。

「それでもうちは先生の事が好きなんやーーーー！！！！それに、先

生もそろそろ何百歳のババアからピチピチの若い娘に鞍替えしたいはず!!!」

どかー！ー！ん！ー！ー！

城が瓦礫と化す。

「なんだと、きさまー！ー！！ ソウジは貴様のような乳臭いガキよりも色々と経験とテクニクがある私の方がいいに決まっている！ー！！」

「何ゆーとるんや！ うちなんかよりそっちの方がよっぽどガキやん！ そんな貧相な身体で先生を満足させられるもんか！」

「！！？！？？！」

あつ、それ禁句。

今更秘密でもなんでもないかもしれないが、エヴァは妖婉さ（せくしいさとと言う？）に欠ける自分の姿を気にしているところがある。

十五歳と言うまだ成長しきっていない年齢で吸血鬼になったのだから、大人っぽくなくても仕方ないと思うし俺は気にしていないとは言っているが、彼女にとっては別問題らしい。だから、ここに来て色々大人の色香を纏う鶴子の出現に焦っているかもしれない。

そしてそれを指摘されたエヴァの顔は怒りで赤く染まっている。

こりゃもうしばらく続くかもしれないな。

「しかし、二人ともよくやるなあ・・・どうしてこんな事になったのやら」

遠くで鳴り響く魔法と剣戟の音に耳を傾けながら独りごちる。

「ひと、それを自業自得と言う・・・」

「んあ？」

横にいる先の言葉の発信源であるアスナを見る。

思い過ごしじゃなければ、若干の呆れも混じっていたような気もする。

でも、確かに俺の所為だなあ。俺が面倒くさがって問題を放置した所為で鶴子の想いは当初の狙いから外れて深くなったみたいだし。そして、こうなるかもしれないと分かっていたから、その責任くらいは取らないと。

しかし、それをアスナまでに指摘されるとか。俺ってどれほど情けないんだ？

それにしても二人ともよくまあ、恥ずかしげもなくあんな風に言い合えるな。はっきり言っただけ聞いてる方が恥ずかしいぞ？

テクニックとか体つきとかあんな大声で叫ぶことじゃないだろう。

けど、二人がこんなに必死になって戦ってくれれば男冥利に尽きるな。まだまだ鶴子と過ごした時間は比較的短いから、俺の感情は男女の色恋事よりも未だに師匠とか先生の物とかに近い。だからと言

って、鶴子のことが嫌いな訳じゃない。むしろ、好きだ。問題はエヴァとどうやって折り合いをつけるかなんだよなあ。

散々『ハーレムは男のロマン！』などと言っておきながら、いざその機会があるとこんな優柔不断になるなんて思わなかった。

いや・・・事態はもうここまで進んだんだ。ここはもう開き直ろう。

俺は誰だ？

600年以上生き、ライフメイカー造物主にも勝利した最強の吸血鬼だろう！

好いた女の一人や二人、三人（四人、五人？ いや、進んで増やそうとは思わないけど）を幸せに出来ないでどうする！

ここは男の甲斐性を見せるところ！

過労で倒れることはあっても、不死身だから死ぬ事はない！ 恐れる事は何も無い筈！

やってやるぜ！

「ソウジ」

決意を新たにしていると、ふとアスナが話しかけた。

「どうした、アスナ？」

「ねむい・・・」

「そっか。こっちに来て少し眠るか？」

膝の間を指しながらアスナに聞く。

「ん・・・」

目を擦りながらアスナが頷く。それから足おぼつかなく歩きながら
こっちに来て俺の足の間に腰を落ち着かせる。そしてアスナは身じ
ろぎして落ち着く姿勢を見つけると眠り始める。

まあ、アスナが眠くなるのも仕方がないな。

アスナの頭をゆっくりと撫でながら考える。

二人の戦闘はもう十何時間も続いているし、アスナはそれを俺と一
緒にずっと見続けていた。外にいた時間も足すと、すでに20時間
くらい起きている計算だ。むしろ、よく今まで起きていられた。

けど、寝る寸前に浮かべていたアスナの笑顔が少し黒かったのは思
い過ぎだったのだろうか・・・？

さて、エヴァと鶴子の戦いの結末はどうなるのやら。俺に分かるの
は勝敗がどちらに転んでも俺はみんなを幸せにする方法を見つける
だけだ。例え、それで俺がどれだけ苦労しても。

<side:エヴァ>

気に入らん！ 気に入らん！ 全くもって気に入らん！

何なのだ、この小娘は！

600年！

600年だ、私とソウジが一緒にいたのは！

その間に私の気持ちに揺らぎは一瞬もなかった。ソウジもそうだったと信じている。

600年は長い。そして私もソウジもそれなりに容姿が整っている。言いよつてきた人はそれこそ数え切れない。けど、それでも私達は浮気とか妾などとは縁遠かった。

それなのに、何故今になって青山鶴子などを連れてくる！ 今までと何が違う！

ソウジが常々ハーレム云々言っていたが、いつもの冗談かと思っていた。

だが、ソウジは鶴子を連れて来た。まったく、半端な約束なんぞしておつて！ 数年後にまた来るからなどと言うから変な期待を持つのだ。

ソウジが約束を違える事を嫌っているのは知っている。しかし、鶴子をここに連れてきた事によってその約束は果たされた。これから鶴子がどうなるうと関係ない。いっそ、私がここで彼女を殺してしまえばカタがつくのではないのか？

いや、落ち着け・・・こんなつまらん事で殺してしまえば誇り高い悪の名が傷つく。せいぜい九割殺しに留めておくべきだ。

「どうした、その程度か？」

何時間も戦い続けてボロボロの鶴子を見下ろす。私も無事とは言い難いが、まだまだ余裕だ。

本来ならば私の傷はすぐに再生するはずだが、そこは流石妖退治を生業としている神鳴流と言うべきか、しっかりとダメージを残すような技を使ってくる。だが私も伊達に600年生きている訳ではない。普通の妖なら瞬殺されるだろうが私には傷がつく程度のもの。こんな物では私を倒すのはまだまだ無理だ。

「はあ、はあ……ま、だ……まだ……や……」

「いいかげん諦めたらどうだ？ 所詮、お前とソウジの住む世界は違うのだ。お前があいつと一緒にするのは無理だった。それだけだ」

「いやや……うちは、諦めん……先生の、事、が、大好き、なん、や……」

そう言いながら鶴子は立ち上がり、震えながら剣を構える。

「チツ……もう少し身体に分からせてやらんといけないらしいな」

「た、とえ、ころ、されても、うちは自分の想いに嘘を吐きとっ、ない！」

「いいだろう……ならば望み通り、止めを刺してやろう……ん？」

なんだ？ 鶴子の様子がおかしい……

「気を失っているのか？」

どうやら鶴子は立ったまま気を失ったらしい。

「一応、まだ生きてはいる、な」

まだ息している事を確認してほっとする。

「って、何をほっとしているんだ、私は。こいつは敵だろう！」

だが、これほどになってもまだ戦い続けようとするとはな。

「その根性と想いの強さを認めない訳にはいかんか」

しかし、それとソウジを共有するかどうかは別問題だ。それだけは認める訳にはいかない。

「……まあ、今回のことに免じて一回くらいは許してやらんでもない。それで気持ちに整理をつけるんだな」

鶴子には聞こえていないだろうがこれは私自身にも言い聞かせている。

さて、こいつをこのまま置いて行くのも面白いが、それだとソウジがなんか文句いいそうだし、一応連れて行くか。

第五十七話：頂上決戦？（後書き）

ソウジかつこわるい・・・

そしてエヴァ。『一回くらい』って・・・

鶴子もエヴァもソウジにはもったいない！

それに、なにげにアスナが一番得しているかも？！

ハーレムって難しいですね・・・某魏の種馬を尊敬します。

さて、これからは話とは関係ない戯れ言ですので、興味なければ飛ばして下さい。

最近というか、他の小説などを読んでいるときに、よく『誰々がその場に着いてから』の意味で『く』が着^きて・・・』が使われているのをよく見かけます。そして私は疑問に思ったのです。確かに『着』という漢字には『て』の送り仮名を使いますが、それは服などを『着た』時に使われる筈。『着』は『到着』などどこぞに『着いた』ときに用いますがこの場合、『い』が送り仮名に含まれるのではないのですか？

自分の第一言語はあくまで英語で、日本語では『着』にこういう使い方があるのかもしれませんが、これは『来て』の誤字または誤変換だと思っていました。誰かこの疑問を解消できる人はいませんか？

第五十八話：おぎゃー（前書き）

ちよつと早く更新。短いですが。

第五十八話：おぎゃー

<side：ソウジ>

「できましたわ・・・（ポツ）」

とある朝、皆がご飯の席についた時、鶴子が頬を染めながらそう切り出した。

「「「は？」「」」

鶴子の言葉の意味が分からず、俺たちはただ疑問を浮かべるしかなかった。しかし、それは鶴子の続く言葉で氷解する。

「子供ができましたわ」

バキッ！！

何かが折れるような音がする。

隣を見るとエヴァが持っていた箸が半ばで見事まっぶたつ。なるほど、さっきの音はこれだったのか。ふう、一瞬ポルターガイストを疑っちまっただぜ。いやあ、よかった、よかった。

「兄さん、現実逃避はよくないよ」

やめてくれ、マナ。俺は今、頭の中で超常現象の有無を考えているんだ。

「ソウジ・・・」

「お父様？」

アスナには呆れられ、刹那は何が起きているのか分からなさそうな顔をしている。その表情がまたかわいい。

「ふう……」

さて、そろそろ目の前の事を見よう。

チラッとエヴァの方を見る。

はい、すごく怒ってますね。

「じ、じども？」

「ええ」

「だ、誰と誰のだ？」

「勿論、うちと先生のや」

「ほ、ほう。許したのは一回だけのはずだが……？」

眉をぴくぴくと動かしながら言って、こっちに目を向けるエヴァ。

いやいや、俺も知らないよ？

「その一回でできたようや」

エヴァと鶴子の戦いの後、俺たちは話し合いの末、鶴子の想いを一回だけ遂げるのをエヴァに許された。

鶴子は少々不満を見せていたが、それを了承した。今はとりあえずこの一回を有効活用し、エヴァともっと仲良くなつてから更なるチャンスを得ようとの考えだったらしい。それに、別に体の関係がなくとも、幸せに出来ない道理はない。デートや、ちよつとした遠出に行くとか。

とにかく、そういった事情で俺と鶴子は着飾り、雰囲気のあるレストランでの夕食の後、夜景が綺麗なホテルのスイートでロマンチックな夜を過ごした。そしてそれ以降、一度も子供が出来るような行為をしていない。

そもそも、俺に子供が作れるかどうかも疑問に思っていた。エヴァとずっと一緒にいて一度もできなかったし。

よーし、おちつけー、おれ、おちつけー。

「えっと、鶴子、それは間違いないのか？」

まずは確認しないと。思い違いかもしれないから。

「ほぼ間違いない。今朝の妊娠判定テストで陽性と出たんやが、産婦人科の予約はまだしとらん。朝ご飯の後に電話する予定や」

そついう鶴子の顔は幸せいっぱいで、鶴子自身もオーラのような物に包まれているかのように見えた。吸血鬼には別に妊娠しているかどうか分かるような能力なんてないが、なるほど、これは本当に妊娠しているかもしれない。そう思わせるような何かがある。

「そ、それはめでたい事だな！ まつまあ、子供に罪はない。しっかり食べ、医者予約に遅れるのではないぞ。それからソウジ・・・」

「な、なに？」

「すこし話がある。ついて来い」

「あ、うん」

「お前たち。私はソウジと大切な話があるからちよつと席を外させてもらう。二週間くらい出て来ないかもしれないが、気にするな」

「二週間？！」

「では、いくぞ、ソウジ」

ドナドナドーナドーナ・・・

エヴァに腕を掴まれ、子牛のように連れて行かれる。

だ、誰か、俺を助けるやつはいないか？！

鶴子は・・・ああ、駄目だ。エヴァに予想外の応援をもらって心ここにあらずって感じた。

刹那はおろおろしているだけだし、他の二人は興味ないのか、我関せずを通してている。実際、興味ないんだろう。

うう、孤立無援って正にこの状況。

まあ、エヴァのことだし、死にはしないだろう・・・

死なないよね？

・

・

・

そして、約二週間後。

「よしっ！」

お腹を押さえながらガッツポーズしているエヴァンジェリン、そして部屋でひからびているソウジが見られたそうさ。

第五十八話：おぎゃー（後書き）

いきなり二児のパパになってしまったソウジです。よかったね、二人とも。

子供は生まれればネギより数ヶ月若いくらいでしょうか？

次回からはスポットライトをアスナ、素子、それから刹那達に当てていきたいと思っています。ソウジ達にはしばらく休んでもらいます。ちょうどエヴァと鶴子はゆっくりしないといけないですね。

前回の『着て』についての質問、多くの返事をくださり、ありがとうございました！

うーむ、やっぱり誤字でしたか。よかったです。私も間違わないように気をつけないと行けませんね。

第五十九話：初登校

<side：素子>

「なあなあ、素子ちゃん、機嫌悪いけど、なんかあったん？」

朝の教室、先生が来る前の時間に友達のさつきちゃんがうちに話しかけた。

「別に、なんもあらへんよ」

「いや、素子ちゃんは絶対に機嫌悪い。なんかあったんに違いない！」

自信満々で断言するさつきちゃん。

「やから、なんもないって言うとするやろ！」

うちはそう言ったけど、間違っって大声出してもうたからさつきちゃんは信じなかった。

「ふう・・・どうせまたお姉ちゃんとなんかあったんやろ？ 素子ちゃんがこんなふうになってまうんはそれくらいしかないからな」

「うっ」

「やっぱりそうなんやな。で、何があったんや？」

「姉上に赤ちゃんが出来たそうなんや」

「なんや、めでたい事やんか。それでなんで素子ちゃんが機嫌悪くなるんや？」

「めでたくなんてあるもんか！ 子供なんてできたら姉上はもう家に帰って来ないやん！」

出て行っただけやったら、まだ戻ってくるかもしれんけど、これじやあきつともう駄目や。赤ちゃんができたと報告した時の姉上の顔はすごく嬉しそうやった。

「あんなあ、素子ちゃん。ええ加減？？」

「みんなー、席に着きい。もう予鈴もなつとるやろ」

さつきちゃんが何か言う途中で先生が教室に入ってきて、皆を落ち着かせた。

「おっと、先生が来たみたいやね。この続きはまたあとでなあ、素子ちゃん」

「あ、さつきちゃん！」

さつきちゃんのことを呼ぼうとしたら、もういなかった。

な、なんちゅう早さや。

『きりーっ！』

っと、そやそや、先生が来とった。

慌てて立って先生に挨拶、そして席に座る。

姉上のことはいろいろ複雑やけど、今は勉強に集中せんと。姉上は何があってもいっつも一番やった。姉上のようになるにはもっともっと頑張らんと。

「おはよー、みんな。今日は嬉しい報せがあるんや。聞いて驚くな！　なんと、今日からみんなの仲間が一人増えるんや！」

クラスが静まり、出席を取ると、先生がそう言った。

「せんせえ、もしかして転校生かー？」

男子の誰かが聞く。

「そつや！　みんな仲良くするんやで？」

『はーい！』

「それじゃ、明日菜ちゃん、入っておいでー！」

先生が転校生を呼ぶと教室のドアがガラガラと開き、女の子が入ってくる。

その子は腰まである長い赤い髪をポニーテールにまとめ、赤いランドセルを背負いながら黒板の前まで歩いた。

ん？　赤毛？

「あ、あんたはっ！！」

その子を見て、うちは思わず大声を上げながら立ち上がってしまった。

「どうしたんや、素子ちゃん？　もしかして明日菜ちゃんと知り合
いやった？」

先生が何か言うところけど、今はそんなことに構っとる暇はない！

転校生として入ってきた奴はあの日、姉上を連れて行ったあいつと
一緒にいた子だったんや！

あのとときと違ってツインテールやないから一瞬分からなかったけど、
間違いなくあの子や！

むっ、こっち見た。

「ふっ……」

なあっ？！

またその馬鹿にしたような笑い！

「お前！　勝負や！！」

その顔が我慢できず、バン、と机を叩いて赤毛に勝負をしかける。

「ちよ、ちよっと、素子ちゃん。落ち着いて。先生のお願いや」

「でも、先生！　そいつ！」

邪魔すんなや！

「明日菜ちゃん何があったか知らんけど、今は学校や。勝負ならまた後でな」

「うぐつ・・・」

そう言えば、今学校やった。

周りを見れば、皆が変な目でうちを見とる。

カア・・・

恥ずかしさで頬が赤くなるのを感じ、さっさと座る。おのれ、赤毛め！ よくもうちに恥をかかせたな！ 後で覚えてろよ！

「さ、明日菜ちゃん、自己紹介や」

うちが座ると先生はまた赤毛に自己紹介をさせる。

「鳳姫明日菜。よろしく」

「」「」「」「」

「・・・明日菜ちゃん、それだけ？」

「・・・？」

名前だけで・・・

こういう時、普通は趣味とかどこから来たとか言ってもんやないやろか？

所詮、あいつの知り合いっちゅう訳か？

「うーん、それじゃ、質問ある人、手挙げて」

赤毛に興味があるのか、何人かの手が挙がる。その内、特に勢いよく上げとるんは友達のさつきちゃん。

なんでやねん・・・

「んー！ んー！ 先生！ うち！ うち！」

「あー、それじゃあ、さつきちゃん、どうぞ」

「やった！ あんな、明日菜ちゃんは素子ちゃんとはどっいう知り合いなん？」

「鶴子の妹の負け犬」

「「「・・・・・・・・「「「

赤毛の返事を聞いてクラスが呆然する。

というか、うちもや。うちが負け犬やと！？

「なんやとー！」

「素子ちゃん、抑えて、抑えて」

「先生！ 負け犬呼ばわりされたら我慢なんて出来ん！」

「そこをなんとか！・・・ね？ ほら、明日菜ちゃんの初日やら、大目に見てくれんか？」

「・・・くっ！」

先生に頼まれて、仕方なく座り直す。けど、うちは忘れた訳やないで。後で覚えとき、赤毛！

「鶴子っちゅーことは、素子ちゃんのお姉ちゃんと知り合いなん？」

「うん」

さつきちゃんがまるで何もなかったかのように質問を続ける。

・・・よくこの微妙な空気ですんな気になんね。

「そうなんかあ。あっ、ひよっとして??？」

「さ、さあて、残念やけど、質問タイムは終わりや。続きは休み時間にしてな」

「はい、先生」

やっと終わったか。あれ以上続けてもつたら、さすがのうちも切れとったわ。

鉛筆でも定規でも何でも使って襲いかかったやろっ。

気の使い方はまだ姉上ほど巧くあらへんけど、何でも武器にするこ
とくらいできる。

「じゃあ、明日菜ちゃん、空いとる席に座ってくれる？」

「うん」

幸い、先生の言う席はうちとすぐく離れとるから、こっちから行か
ん限り顔をあわせなくても済む。さつきちゃんがなんやら赤毛に興
味もつとるから、今日は一緒にお昼食べられんかも。まあ、丁度え
えんかも。今さつきちゃんとはちよっど話しとくない。

それから赤毛は自分の席に行き、ノートやらをランドセルから取り
出してから座った。教科書はまだないんか、机を隣の人とくっつけ
て見せてもろうとる。

ちっ、覚えてろ、赤毛。放課後の校舎裏でこの決着をつけちやる。

< side : 明日菜 >

今日、ソウジに言われ初めて学校という場所に来た。私は別に必要
ないって言ったけどソウジは聞かなかった。なんでも、同年代の子
と友達を作ってみた方が私の為だとか。私はもう百歳以上なのに。
私はソウジにこんな子供達と一緒に見られているのかな？ マナ（
真名？）と刹那はまだ学校に通う年齢じゃないらしく、今日も木乃
香と遊んでいるだろう。

先生に案内されて教室まで来たらなんと鶴子の妹がいた。名前はど

うやら素子と言つらしい。そして何故か私に勝負をしかけてきた。本当のことしか言わなかつたんだけど。

授業のほうはちょっと分からなかつた。ソウジや『紅き翼』の人たちに習つた戦い方ならともかく、国語？とか算数は何を言っているのか分からなかつた。後でソウジに聞けば教えてくれるかな？

そして、ずっとこっちを睨んでいた素子が少しウザかつた。

本当に私と戦つつもりなのかな？ 敵う筈なのに。やっぱり馬鹿だね。それとも、ただ子供なだけ？ うーん、どっちでもいいか。

とにかく今は授業を聞こう。あんまり面白くないけど、ソウジに馬鹿な子だと思われるのは悔しい。

そう言えば、あのさつきと呼ばれた子はなんであんな質問したんだろ。素子はちょっと嫌だけど、なんでかあの子はそれほど嫌になれない。あいつとなら話してみてもいいかも。

第五十九話：初登校（後書き）

同級生になった明日菜と素子。

今回は勝負となるのか？

そして密かに素子の親友ポジョリキャラであるさつきの登場。今後の重要度はまだ分からないけど、数話限りの登場かもしれないですね。少なくとも、麻帆良にはついて行かないでしょう。

第六十話：巖流島の戦い

< side : 素子 >

赤毛が転校してきても授業はいつものように続いた。少し違うのは休みの度にあいつの机の周りに人集りができるくらいや。まあ、あいつは愛想悪いから、それも長く続かんやろ。

そして昼休みになって、給食を食べ終わったあと、あいつがお手洗に行つた時を狙つてあいつの机の中に『はたし状』を置いた。

内容は放課後に校舎の裏まで来てうちと戦えと書いてある。

覚悟しいや、赤毛！ あんたの命運も残り数時間や！

あつはつはつは？？

「素子ちゃん、さつき明日菜ちゃんの机で何しとつたん？」

うっ、まさか、さっきの、さつきちゃんに見られとつた？

「べつに何もしとらんよ。見間違えやないの？」

「えー？ 絶対、机に手を入れたと思つたんやけど・・・」

そこまでバレとる？！

「その顔はやっぱり何かしたやろ？ 素子ちゃんは嘘が苦手やもんねー。まあ、嘘が得意な子とは友達になりたくないけど」

「あう……」

「言いたくないのなら別にええよ。けどな、素子ちゃん」

「なに？」

「虐めだけはあかんよ」

「そんな訳あるか！」

「うちがそんなことする訳ないやろ。虐めは卑怯もんがやることや。」

「いくらあいつの事が気に入らんでも、そんな陰湿なこととはせん。うちなら正々堂々、面と向かって文句を言うし、勿論、数を頼みに集団でいびるんは論外や。」

「よかった。素子ちゃんって明日菜ちゃんが気に入らん見たいやから少し心配やった」

「うちがそんな風に思われとったなんて……」

「じよ、冗談やって、素子ちゃん！ 素子ちゃんがそないな事する訳ないもんな！」

「まったく、さつきちゃん……」

「けど、何かしたんやろ？」

「言い逃れはできなそうやね……」

「はたし状を送った」

「はたし状やって？」

「うん。放課後に勝負するんや」

「でも、素子ちゃんって家が道場なんやろ？ そんなん、明日菜ちゃん敵う訳ないやんか」

むっ、そういえば、うちもあいつの実力は知らんな。あのソウジの身内やからそれなりに強いつて考えとったけど、そうとは限らんし。あのむかつく態度に目が行き過ぎてあいつが弱いかもしれんということまで考えつかんかった。

「そんな時はそんな時や。まあ、もしあいつが弱いなら勝負はすぐに止める。別に弱いもの虐めたいんやないし」

「なら安心やな」

うちから話を聞いてほっとしたんか、さつきちゃんはそれで以降それについて何も言わん。そのままこちらは昼休みが終わるまでいつものように話した。朝の時はちよつと気まずかったから不安やったけど、さつきちゃんは気にしとらんかった。

そして昼休みが終わり、授業のチャイムが鳴る。それと同時にあいつも入ってくる。やっぱりあのすました顔で。

うーん、次の授業は理科やったか？ 教科書とノートを机から取り出してあいつを見てみれば、ちよつどうちのはたし状を見つけて読んどる。

よしっ、これでは放課後まで待つだけや。そしたらうちが負け犬やないってこと分らせる！

* * *

< s i d e : ソウジ >

「ただいま」

おっ、アスナが帰って来たか？

「アスナお帰り〜」

玄関までアスナを迎えに行ったらアスナが靴を脱いでいるところだった。

「ソウジ、ただいま」

「っと」

ぼふっ、とアスナが抱きつく。

「おう、お帰り。学校はどうだった？」

「ん、普通」

普通か。

「それだけか？」

「んー・・・うん」

アスナは少し考えたけど、何もいわないで頷くだけ。

まあ、まだ初日なんだ。学校を面白く思うにはまだ時間が足りないか？

「初めて同じくらいの子供が周りにいたのはどうだ？」

「子供過ぎ・・・」

「む、それは・・・」

仕方ないよなあ。十歳といったらまだまだ子供だし。せめて、あと五年はしないと周りの子はまだ子供と感じるだろうな。それでも、何人が友達ができればと思っている。

「友達はできそうか？」

「分からない」

「ふむ、まだ早いかな？」

「でも・・・」

でも？

「一人、変な子がいた」

「ふーん、面白いのか、その子？」

「そうかも？ うるさいけど、なんか憎めない」

おっ、こりゃひょっとして好感触？

「なんて名前の子だ？」

「さ・・・さちこ？ 違った。さつきだった」

『さ』しか合っていないじゃん。

けど、一応最後には名前を思い出したからいいのか？

そういえば、素子のことが話に出て来ないな。アスナを素子と同じクラスにするように学校に頼んだから会っていない事はない筈だけども。

「素子とはどうだ？」

「負け犬？・・・あっ」

なんで負け犬？

とにかく、素子の名前で思い出したのか、アスナがランドセルから紙を取り出した。

「手紙か？」

まさかラブレター?! 初日でもう誰か落としたのか?!

「って、これは果たし状か? また古典的な・・・」

「負け犬からもらった」

「素子から? って、これ今日の放課後って書いてあるじゃん」

今の時間を考えると絶対に行ってないだろ!

挑まれたからって応える必要はないと思うけど、素子がちょっと哀れ・・・

けど、これで二人の仲がますます悪くなっちゃうかもな。こりゃ、アスナを素子と一緒にの学校にしたのはちよつと早まったか?

いやいや、そう決めつけるのは早計だ。まだ初日だ。時間はまだまだある。それにさつき(?) はなにやらクラスのムードメーカーみたいだし、そいつを通して仲良くなるかもしれない。

「はぁ・・・とりあえず初日お疲れ様。おやつを用意はできてるぞ。今日はちよつと話題になっっているケーキ屋さんの苺ショートを買って来た」

「ケーキ?」

「まあな! 俺もまだ食べてないから楽しみだ。皆で食べような」

「うん!」

第六十話：巖流島の戦い（後書き）

巖流島では宮本武蔵は一応現れたのに・・・
素子ちゃん、ファイト！

第六十一話：やっと対決

<side：素子>

「はあああ！！！」

くそ！くそ！くそ！

暗くなるまで待ったのに、結局あの赤毛は現れなかった。うちは勝負する価値もないと思われとんのか！ あいつめ！ うちの事をなめよって！

おまけに父上に帰るんが遅くなるって連絡せんかったから、怒られて罰として素振り1000回をさせられた。

怒りを力にして、一時間かけてようやくそれが終わった。

「はあ、はあ・・・くっ！」

床に拳を叩き付けても怒りが全然紛らされへん。

汗だけで気分悪いし、まだご飯食べとらんからお腹も減つとる。

これも全部赤毛の所為や！

あいつめ、覚えとけ！ もう誤っても許さへん！

* * *

うちの復讐の機会は意外と早く来た。

あいつが転校してきた週末、姉上とソウジとあいつが家に来た。

どうやら父上は姉上達が来るって前から知ってたみたいやが、うちが皆が家に着いて挨拶してから初めて知った。

「姉上はええけど、なんでお前等がここに来るんや！」

姉上はいつでも歓迎やが、ソウジと赤毛は別問題や。顔も見たくない！

「素子。怒つとるんは分かったけど、とりあえず中に入る？」

「姉上！」

「それとも、うちら帰るか？」

うっ……あいつらがおるんは嫌やが、姉上が帰るんはもっと嫌や。

仕方ない……ここは我慢してやる。

「分かった、姉上……おいつ！今回は仕方なく上がらせるんやからな！それを忘れるんやないで！それと、赤毛は後で勝負やからな！」

「ありがとな、素子。それじゃ中に入るか」

姉上にお礼を言われてから姉上の手を取って家の奥に入る。

ソウジと赤毛はできるだけ見んように背を向けた。

・

・

・

「鶴子、経過は順調か？」

「はい、父上。産婦人科の先生は赤ちゃんが順調に育つと言われた。十一月の半ばが予定日や」

「そうか。赤ん坊の性別は分かるか？」

「嫌やわ、父上。まだ分かる訳ないやろ」

姉上は今、父上と赤ちゃんの事について話してる。父上は前に姉上が出て行く事に反対しとったのが信じられん程嬉しそうに話してる。そんなにおじいちゃんになるのが楽しみなんやろか？

うちはよう分からん。まだ小学生なのにおばさんになるなんて。前に姉上にそう言うたら、お姉ちゃんになるって考えたらええって言われた。

お姉ちゃんか・・・考えた事もないわ。

うーん、やつぱり実感湧かんなあ。赤ちゃんが生まれたらなんか違ってくるんやろか？

そんな事より、今は赤毛との勝負や。姉上と父上の話でうやむやになりそうやが、うちはそんな簡単に忘れる訳ない。

けど、姉上達の話はまだまだ続きそうやし・・・このままやとまた勝負でけへんかも。いや、そんなん認めるか！

赤毛の方を見れば、ソウジの膝に座りながらつまらなそうに話を聞いとる。これはチャンスやないか？ 赤毛が暇つぶしに勝負を引き受けるんは癪やが、勝負が出来ればもうそんなんどうでもええ。

「おい」

赤毛に声をかけるけど、聞こえんかったか、うちの方を全然見ん。

けど、姉上達の話の邪魔したくないし、あんまり声を上げられん。

「おい、赤毛、つまらんならうちと勝負しろ」

「？」

今度は聞こえたらしいけど、はっきりと答えん。奴は首をコクンと傾げてソウジにどうすればええと聞きたいように見ただけや。

なんやその態度！ 確かにその仕草はかわええけど！ そう思ってしまう自分が憎い！

それから赤毛はソウジと少し話し合ってから二人で立ち上がった。

何を話してたか聞こえんかったけど、多分勝負することにしたんや
る。

「鶴子、ちょっと子供達と道場の方に行ってくる」

「先生？」

「ちょうどアスナ達が退屈してるみたいだし、いい気分転換にもなる
だろ」

「分かりました、先生。素子の事、お願いします。うちはもう少し
父上と話しとる」

「ああ」

姉上との話が終わり、ソウジと赤毛は手を繋いで部屋を出て行く。
そしてちょうど部屋を出る時、振り返ってうちを見た。

な、なんや？

「来ないのか？」

「勿論行くわ！」

やっと来たチャンス、絶対に無駄にせん！

* * *

< s i d e : ソウジ >

アスナと素子は今道場で木刀を持って向かい合っている。

クールな表情で木刀を握るアスナとは対照的に素子はすごく熱くなっている。

そりゃあ、決闘をすつばかされたあげく、相手にもされないことを続けられると起こる気にもなるよな・・・

はつきり言つて今の実力じゃあアスナの足下にも及ばないだろう。神鳴流の技を抜きにして、剣の腕だけで勝負しても今まで俺の指導を受けたアスナなら大人でも勝つのは難しいだろう。素子は言わずもがな。

しかし、そう言われても素子は納得しないだろうな。自分の目で確かめないと何を言われても信じないと思う。

「二人とも用意はいいか？」

「ん」

「・・・」

アスナは一文字で返事して、素子はアスナしか目に入らないのか、何も言わない。

ちよつと寂しい・・・

「それじゃあ、もう始めちゃっていいよ（涙）」

「やあ！……！」

なんとも締まらない合図で試合を開始させると同時に素子は剣を一段に構えながらアスナへと襲いかかった。

素子も曲がりなりに神鳴流の後継者の一人だ。その実力は子供離れている。けど、それでもアスナには通じない。

それを証明するかのように、素子が何度木刀でアスナに斬りつけてもアスナは平然とそれを防いでいる。

頭、胴、腕、足。素子は必死に木刀を振ってアスナを倒そうと考えつく限りの角度で攻撃している。

だが、やっぱり無駄だな。アスナは未だに一度も攻勢に出していない。素子はそれに気づいているだろうか？ それとも自分の攻撃にアスナが手も足も出ないって勘違いしてるのか？

「なんや、お前！　うちの事嘗めとんのか！　なんで攻撃せんのか！」

二人の攻防が五分ほど続いた時、突然素子が爆発するようにそう叫んだ。

やっぱり分かったたのか。それで、アスナが全然本気を出さないから怒り出した、と。

「うちは戦う価値もないっちゅうんか！」

「……そうだね。剣が止まって見える」

「うわあああ~~~~!!!!」

アスナ、それはちょっと酷いでしょう・・・

いくら本当にそう思っている、言い方でもんがあるでしょう？

面と向かってそう言ったら素子が我を忘れるのも仕方ない。強くても、所詮は十歳そこらの少女なんだから。

「・・・・・・・・」

今度こそ決着をつけたいんだろう。素子は殺す勢いでアスナに襲いかかった。

それでもアスナは眉を一つ動かさずに対処する。

自分に迫る素子をアスナは一步だけ身を反らす。それだけで素子の攻撃はからぶる。素子は勢いあまってたたらを踏んでしまう。そしてアスナはその隙を利用して自分の木刀で素子の脇腹を薙ぎ払った。

「ぐっ!」

「そこまで! アスナの勝ち!」

アスナの一撃が入り、素子が身もだえる。

素子はまだ戦い続けられる状態だろうからここで勝負を終わらせるのは納得できないかもしれない。重い一撃でも、所詮一撃だからな。アスナも本気でやっていないし。

だが、これ以上やらせても素子がボロボロになるだけだ。素子も自分とアスナとの実力の差を思い知っただろう。これで自信喪失してやけにならなければいいけど・・・

しかし、時間が結構余ったな。勝負に十五分もかからなかった。これからどうしよ・・・

「さて、素子。気は済んだか？」

「くっ・・・」

おうおう、悔しそうだねえ。心が折れていない様でなによりだ。

「言うておくが、今のお前とアスナの間にはかなりの実力差がある。こんな勝負を何回やったって結果は変わらないだろう」

「そんなもん分かつとるわ！」

あっ、素子が泣き出した。

うー、こっこの苦手なんだよな・・・

とりあえずアスナがいたら話も聞かないだろうな。俺を嫌っているみたいの素子が俺の話を聞くかどうかは分からないけど。

「アスナ、ちょっと俺と素子の二人にしてくれないか？ 鶴子に頼めば風呂にも入れるだろう」

「分かった」

たいして汗をかいた訳でもないだろうけど、アスナは気を利かせて道場を出て行った。

さて、今度は問題の素子だな・・・はあ、どうしょ。

「なあ、素子。素子はどうしてアスナとの勝負に拘っていたんだ？」

素子がすすり泣く声をBGMに五分ほど作戦を練っていたが、結局考えが何も浮かばず、ストレートに聞いてみる事にした。

「・・・」

「黙りか。それじゃあ質問を変えるか。素子は俺の事が嫌いなのか？」

「・・・」

すごい反応だな。

「どうしてか聞いていいか？」

「お前がそれを言うんか！ お前の所為で！ お前の所為で姉上が出て行ったやんか！」

やっぱりそうだろうな・・・

鶴子が出て行った事は確かに俺が関係しているが、結局は鶴子の決めたことだ。俺を恨むのは筋違いと言うもの。けど、そんな薄っぺらい言葉じゃ意味がない。聡明な素子の事だ。そんなの素子も分か

っているだろう。そして言っても素子には逆効果になるのは明らかだ。

「鶴子のことはすまなかつたな、素子」

「あやまらんといて！ あやまれたらうち、どないしたらええんねん！」

「これでお前の気分が晴れるのかは分からないけど、俺は鶴子をすごく大事に思っている。そして、確かに俺がいたから鶴子はこの家を出て行ったんだろう。けどな？俺はそんな大事な鶴子の大事な妹であるお前のことも家族だって考えてるんだ」

「うちが、かぞく？」

「まあな。お姉ちゃんを失ったと考えるより、兄貴が増えたって思えないか、素子？」

「あにっ、え？」

「そつだ。素子は兄貴が欲しいとか考えたことないか？」

鶴子という素晴らしい姉がいたら兄なんていらないと考えるかもしれないけど、兄弟姉妹がいる子供は大抵、少なくとも一度は考えるんだと思う。

「素子ならいつでも俺たちの家に来てもいいぞ。大歓迎だ。それに、うちにはマナに刹那という小さな女の子もいるんだ。素子がお姉ちゃんになる練習にもなるんじゃないか？」

「・・・」

「そうだ！ 俺たちの家に来たら素子の剣の修行も見ろぞ。素子がアスナにぎゃふんと言わせるくらい強くなりたくないか？」

「すまん、アスナ。ここは悪者になってくれ。あとでアイスかなんか買ってやるから。」

「前は鶴子が素子の修行を見ていたのは知ってるから、今更俺に習いたくないかもしれない。けど、鶴子は今、身重の体。あんまり激しく動けないから素子の練習に付き合えない」

「だからお前が？」

「ああ。俺に兄貴らしいことをさせてくれないか？」

「さて、手応えはあるか？」

「・・・考えておく」

「これはかなりの脈有りか？」

「俺を嫌って一言も交わさない以前と比べたら、俺と訓練することを考えると言うだけでもかなりの進歩だ。」

「そうか、それはよかった。それなら、とりあえず話はここまてかな？ そろそろ母屋の方に戻ろう」

「鶴子達の話ももう終わるころだろうし、素子の汗が退いて風邪を引く前に風呂に入らせないといけない。」

「……つと、母屋に戻る前に顔を洗わないとな。鶴子に素子を泣かせたって知られたら俺が殺されかねん」

キュピーン。

何故かそんな音が聞こえた気がしたと思ったら素子がいきなり立ち上がって母屋の方へ走り去った。

「うわーん！ あねうえーん！ あにづえがいじめるー
ー！」

「ちよっ！……！」

第六十一話：やっと対決（後書き）

今回の話でアスナにこてんぱんに負けた素子でした。

そして完璧とは言えないけど、ソウジとの関係も改善した？

ちなみにソウジは素子が泣きながら走っていったことにパニックって
しまったので、素子が『あにうえ』って呼んだことにまだ気づいて
なかったりしています。

第六十二話：魔法少女リリカルこのちゃん、見参！

<side:マナ>

「まーちゃん、まーちゃん！」

アスナ姉さんが学校に通い出してから、私とせつちゃんはこのちゃんと遊ぶ時間がぐっと増えた。

前はアスナ姉さんや兄さんたちと遊んだり、一緒に兄さんと訓練したりしてこのちゃんと遊ぶのは週に二回くらいだった。兄さんは面と向かって言わなかったけど、きっとせつちゃんが家族に馴染めるように努力していたんだと思う。

ただの親バカだったかもしれないけど・・・

兄さんのあのせつちゃんを甘やかしっぱりは流石にちょっとひいたよ。

兄さんの方針か何かは分からないけど、兄さんはせつちゃんの髪の毛の色とか目の色を隠していない。私達家族はその事についてはどうにも思っていないけど、街の人々はやっぱり珍しいのだろう。街に出る度、変な目でせつちゃんを見る人がいる。私もこの国の人と見た目が違うから、余計に目を引くんだろう。

とにかく、里での事で敏感になっているのか、そう言う目で見られる度にせつちゃんは気を落としていた。そしてそれを見た兄さんはすぐにせつちゃんを抱き上げてあやし始める。その後はたいやき、アイス、クレープ、せつちゃんが元気になるまで兄さんは何でも買ってあげていた。まあ、私も買ってもらうていたから文句はないけ

ど。

けど、アスナ姉さんが学校に通い出してから私とせつちゃんは兄さんと過ごす時間は少なくなった。アスナ姉さんが家にいる時間が少なくなるし、兄さんはいい区切りになると考えていたのかも。

最初は大好きなお父様との時間が減ってせつちゃんはちょっと落ち込んでいたけど、このちゃんともっと遊ぶようになって段々気にならなくなった。

「なんだ、このちゃん？」

「まほうってあるとおもう？」

「ぶっ！」

「こここのちゃん！ どぞどうしたの、いきなり?!」

このちゃんの突然の質問にせつちゃんがあたふたとこのちゃんに聞いた理由を問う。

せつちゃんが慌てている理由は詠春おじさんに頼まれて魔法の存在をこのちゃんに秘密にしているから。私達はせつちゃんの前では異能を使っていないから私達からバレていないと思うけど・・・

「ふたりともどうしたん？」

「な、何でもないさ、このちゃん。それで、どうして魔法のことを聞いたんだ？」

「あんな〜、テレビでまほうしょうじょビブليونっていうのみたんやけど、すごくかつこよかったんや！　うちもあんなふうに、まほうをつこうてみたい！」

ふう、何だ。テレビの話が。びっくりさせる。

「魔法少女か。見た事はないけど、そんなによかったのか？」

そついうとこのちゃんはガシツと私の両肩を掴んで詰め寄った。

「まーちゃん！　ビブليونを知らないまーちゃんは、じんせいのはんぶんをそんしとる！」

「人生の半分って・・・」

けど、このちゃんがその番組がすごく好きなのは分かった。

「せつちゃんはわかつとるよな！　まほうしょうじょ！　かつこええとおもわん？」

「えええ???　わわわわたしはまほうなんてつかえないよ?!」

刹那、動揺し過ぎだろう・・・

それじゃあ私達が魔法の事を知っていると白状しているようなものだろう？

「なにいうとんの、せつちゃん？　まほうつかえないなんて、あたりまえやん。うちはただビブليونみたいに、まほうがつかえたらええな、っっておもっただけなんや」

「そうだぞ、刹那。魔法があるわけないだろう」

「あつう……」

ふむ、これで誤摩化せたかな？

「……せつちゃん、どうしてそんなにあわてたん？ もしかして
??？」

「な、なにもしらないよ！ おとうさまとおかあさまが、すごいま
ほうつかいなんてしらないよ！」

あつちゃん、ついに言っちゃったよ。

「え？ そうじおじさんとエヴァおばさん？ ふたりはまほうつか
いなん？」

「ええええええ????？」

このちゃんに聞かれてせつちゃんはやっと自分が言った事に気づい
たらしい。

これはもう誤摩化すとか、そう言う話じゃなさそうだな。

「なあなあ、まーちゃん！ おじさんたちって、ほんとうにまほう
つかい？」

「む……う、む。確かに二人は魔法使いだ」

詠春おじさんも魔法使いだったと思うけど、この場合、このちゃんはきつと西洋魔法使いのことを考えていると思うので兄さん達の方が当て嵌まる。

「そうなんや！ まーちゃんとせつちゃんは？ まほつつかいなん？ あすなねえさんは？」

「わ、私とせつちゃんは習っていない。アスナ姉さんは兄さんに剣術を習っているけど、魔法は分からない」

「へえ！ まーちゃんとせつちゃんはならわんの？」

「分からない。けど、いつか習うと思う。せつちゃんも多分習わされるだろうな。家族の一員になっているし」

「わたしも？」

せつちゃんも半妖という、裏の世界に半ば足を突っ込んでいる存在だからな。自衛の為に兄さん達に戦い方を教えられるだろう。だけど、せつちゃんが剣術、格闘術、魔法のどちらを選ぶかは知らないし、戦うのが嫌で習うのを拒むことも彼女の大人しさから考えられる。もし、それでも兄さんたちは構わないだろう。その場合は兄さんの過保護が加速するかもな。それをせつちゃんがどう思うかは知らないけど。

「まーちゃん、まーちゃん！ うちもおしえてもらえるとおもって！」

「聞いてみないと分からないな。それに詠春おじさんにも聞いてみないと」

「おとうさまもしつとるん?!」

「ああ。このちゃんには秘密にしたかったみたいだけど」

「なんでやる! まほう、かつこええのに!」

「それは・・・詠春おじさんに聞いた方がいいだろう」

理由は想像できるけど、それが詠春おじさんの理由だという保証はないから、やっぱり直接聞いた方がいいと思う。こんな風にバレてしまったことは悪く思うけど。

「そっか! なら、おとうさまにきいてみるわ!」

「そうした方がいい」

「そや!」

何か思い当たったみたいにこのちゃんが手を打った。

「なんだ?」

「どうしたの、このちゃん?」

「もしおとうさまが、まほうをならってもええっていうたら、さんにんでならわへん?」

三人で習うか。それもいいかもな。

「さんにんで?」

「どや? ええかんがえやる?」

「悪くないな」

「そやろ、まーちゃん! さんにんでまほつしよつじょになるつな
」!

いや、魔法少女はないだろう。

あんなひらひら、私は嫌だぞ。

「たのしそつやろ、せつちゃん!」

「よくわかんないけど、このちゃんもいっしょなら」

「ならけていや! さっそくおとつさまに、ききにー!」

「うん」

「わかった」

そういつとこのちゃんはせつちゃんの手を取って、多分仕事中の詠
春おじさんの部屋に走りだす。

なんだかすごく楽しそうだな。

まあ、私も本格的に魔法を習う事はすこし楽しみだ。

魔法少女は嫌だけど、魔法には興味ある。

あとは詠春おじさんをどう説得するかだけど、多分大丈夫だ。魔法の事はこのちゃんに秘密にしたかったみたいだけど、バレたからと言ってこのちゃんの記憶を消すとかはしなれないと思いたい。最悪の場合、兄さんに頼めば何とかしてくれるだろう。

第六十二話：魔法少女リリカルこのちゃん、見参！（後書き）

素子魔改造を期待していた人たちすみませんでした。それはもう少し後になります。

今回はなんと木乃香に魔法バレの回でした。これで木乃香及び刹那魔改造のフラグも立ちましたね。

次回は木乃香たちか素子の修行、どちらにするかちょっと迷っています。

いっそのこと、同時にやった方がいいかもしれませんね。刹那達は魔法の基礎のことばかりでちょっと面白くないかもしれないし。

第六十三話：レッスンワン！ （前書き）

何だか最近筆が進みます。なんと一週間に三度の更新！

第六十三話：レッスンワン！

< side : エヴァ >

「さて、三人は魔法に興味あるらしいな」

いつの間にか知らないが、木乃香に魔法の事がバレて詠春から魔法を教えてやってくれないかと頼まれた。そして今日は最初のレッスンを始めようとしている。

お腹の子があるから実践的な指導はできないが、この子達に教えるのは初歩的な魔法のことだ。激しく動き回することは必要ないし、そもそも座っていてもできることだしな。

子供か・・・何百年も子供を作ろうとしてやっとできた子だ。鶴子の方が早くできたのは癪だが、やっとソウジとできた子だ。何より愛しい存在。

私達は今別荘の中に入っているが、他にはソウジの奴やアスナ、チャチャゼロ、素子も来ている。鶴子は知らんが、今日は出掛ける用事があるとかでついて来なかった。

「エヴァおばさん、うち、まほうしょうじょになりたいねん！」

おばさんか・・・

刹那のお母さんということ木乃香はおばさんと呼んでいるが未だに慣れんな。まあ、そんなことで一々怒るほど若くないし、子供の言うことだから気にしないようにしている。

「魔法少女？ 何だ、それは？」

「まほうしょうじょビブليون！ すごいかつこええねん！」

「姉さん、テレビの中のヒロインだよ」

マナか。

それにしても、テレビのヒロイン？ 名前からしてアニメキャラか？

だが、木乃香は分かっているのか？ これから教える魔法はほぼ間違いないとテレビに奴とは違うぞ。いや、分かっているのだろう。

まだ子供だから、きつと木乃香の中ではこれから習う魔法はテレビの中の物と同じだろう。

「木乃香、始める前に言っておくが、私が教える魔法はお前の考えている物とは違う。正義の物でも、悪と戦う為の物でもなく、ただの力だ。どう使うかはお前次第。もちろん、テレビのようにメルヘンチックな冒険があるわけでもない」

戦争孤児だったマナならまだ分かる話だが、詠春によって隔離されていた木乃香には理解しにくいかもしれない。刹那は忌み子ということと魔法のダークサイドに触れていたから魔法が全ていいことじゃないのは知っている。けど、反対に木乃香の憧れがいまいち理解できていないようだ。多分ここにいるのは木乃香に付き合っただろう。

「そうだな、それではアスナ、チャチャゼロ。ここでちょっと一戦しろ。大きな怪我をしない程度で本気を出せ」

「むう・・・久しぶりに本気でアスナと戦うのは嬉しいけど、マスタアの命令に従うのは何かヤダー」

「ええい！ たまには素直に生みの親の命令に従わんか！」

「やれやれ、仕方ないなーもう。アスナもそれでいい？」

「うん、チャチャゼロとやるのは久しぶりだね。エヴァ、ルールは？」

「言っただろう？ 本気で、と。咸卦法も神鳴流も使っている。ただ、アーティファクトはやめる。あれは流石に威力がありすぎるからな」

あのゴルン・ノヴァと言ったか？ とにかくあの光の剣は私の断罪の剣と同じようにとんでもない切れ味だ。その上、魔法や気を使った技の威力を増強させるというにわかに信じられんような機能も持っている。

「分かった」

短く返事をした後、アスナは普段使っている刀を取り出してチャチャゼロと向き合っている。ソウジの影響か、アスナは好んで剣術を使っている。

うん？ 向こうでソウジと素子もこっちを見ているな。アスナ達の戦いに興味があるのか？ 素子はアスナのことをライバル視しているようだし、アスナの本気を見たいのだろう。

「」では、いつでも始めていいぞ」

簡単な合図を送り、途端にチャチャゼロとアスナの姿が消えた。

「えっ?!」

「きえた?」

二人は目で追えないほど速く動き、私達の前から離れた。刹那と木乃香には文字通り消えたと見えただろう、刹那達は二人がどこに行っただのか分からないようだ。マナはよく見れば魔眼を発動させていて、目を忙しく左右に動かしているのでアスナ達の戦闘が見えているようだ。流石は半魔というべきか?

それから続いたのは剣と剣がぶつかる金属音と時々雷鳴。さらにはたまにチャチャゼロがアスナの居合い拳に吹き飛ばされるの見える。

しかし、チャチャゼロも負けていない。

パワーでは負けているかもしれないが、圧倒的な経験の差でそれを補っている。フェイントを駆使してアスナの不意をついたり、アスナの動きを自分の攻撃で誘導して隙を作ったりして勝負を有利に進めている。

さて、子供達はこれを見てどう思っているんだろう。

三人を見ると、ふむ、マナはそれほど動揺していないな。だが、これは別段驚くことではない。もともと、マナは時々アスナの修行に付き合っているから見慣れているのだろう。

刹那は少し怯えているな・・・大きな音がする度にビクビクして木乃香にしがみついている。

そして木乃香は・・・何だか圧倒されているようだな。戦いの様子が見えないなら花火ショーのように映っているかもしれん。

これは少し失敗したか？ 圧倒的な魔法戦を見せて魔法の危険さを分からせようと考えていたが、これはあまりに次元が違いすぎて却って分かりにくくしているかもしれん。

仕方がない。多少怯えられるようになるかもしれんが、戦いのあとで殺気を少し浴びせて分からせるか。

「はあああああ！！！」

「なんとーーーー！！！」

まったく、チャチャゼロの奴め。なんだあのふざけた掛け声は・・・そして二人が声を上げながらぶつかり合い、一際大きな音を鳴り響かせたあと、二人とも膝をついた。戦闘はひとまず収まったようだな。

「終わったか」

少しして二人はゆっくりとこっちに戻った。チャチャゼロは所々が欠けているが、数十分程度で直せないほどじゃない。アスナの方は体中に切り傷が出来ていてそこから血を流している。まあ、回復魔法を使えば痕は残らないだろう。

だが、二人の姿を見て木乃香と刹那の表情が明らかに崩れた。

「アスナおねえちゃん、しんじやいやや~~~~!!」

「うう、アスナおねえさま、ちがいつぱい・・・」

二人とも目に涙を浮かべ、アスナの心配をしている。

これならさきほどの殺気をぶつけるといふ考えを実行しなくてもよさそうだな。

「木乃香、刹那。分かったか？　これが魔法に関わることについてくる危険だ。怪我をするかもしれないし、死ぬ危険すらある。決してテレビのように皆が幸せになるなどということはない」

「うう・・・」

「ひっく」

「アスナ、とりあえずこっちに来い」

言いたいことを言い、アスナの怪我を直す為にこっちに呼ぶ。

「うん」

アスナもそれを分かっている、すぐに頷いた。

「リク・ラク・ラ・ラック・・・」

始動キーを唱え、回復魔法の呪文に繋げる。そして暖かい光がアス

ナを包み、傷が見る見る塞がって行く。

「ほわあ~~~~」

「おかあさま、すごい・・・」

数分後、アスナの手当てが済み、チャチャゼロもとりあえずの応急処置が終わって木乃香達にどうするか聞いた。

「さて、魔法の危険性について分かったところで、まだ習いたいかな？」

「姉さん、私はこのちゃんとせっちゃんがりやいたいなら一緒にやるよ。私はもう少し待っても構わないし」

「そうか。分かった、マナ。では木乃香と刹那はどうだ？」

「・・・」

二人とも反応がないな。恐くなったか？ まあ、それでもいい。木乃香の方はもともと魔法とは関わらせるつもりはなかったらしいしな。

「エヴァおばさん！」

そんなことを考えていると木乃香がいきなり顔を上げて私を呼んだ。

「どうした、木乃香？」

「うち、きめた！ エヴァおばさんみたいに、みんなをたすけるま

ほづつかいになる!」

さっきの回復魔法のことか？ 私はどちらかというところ回復魔法は苦手なんだが・・・

「そして、みんながあんしんできるように、すっごいつよーなるねん！ うちがみんなをまもったら、だれもけがせんようになるやろ!」

察するに、木乃香が泣いたのは魔法が怖いと言うより、アスナが怪我して心配という感情が強かったか？ そしてそういう思いをもつしないように自分が最強の魔法使いになると。

「ふむ、だが、そうなるにはかなり辛い修行になるが、それでもいいのか?」

「それでもええ！ せつちゃんもまーちゃんもうちがまもるからな!」

そう言いながら木乃香が他の二人の手を握る。

「このちゃん・・・ううん、だめ！ わたしもこのちゃんをまもる!」

「せつちゃん」

「そうだぞ、このちゃん。三人で強くなって皆で皆を守ろう。そうすれば誰も悲しまない!」

「まーちゃん・・・わかった！ みんなでつよくなる!」

「「おー！」」

決まったようだな。

三人で最強か。面白そうだな。木乃香はナギ以上に魔力があるし、マナにはかなり強いアーティファクトと半魔族の血がある。そして刹那は半妖で、潜在能力は高いだろう。

いいだろう、三人とも。ソウジも巻き込んで、ナギ達以上の最強になれるよう、私たちの全てを叩き込もうじゃないか。

第六十三話：レッスンワン！（後書き）

何だか木乃香が某魔王化フラグが立った予感・・・

こ「話がしたいねー！ん！」

おわるせかい。ぱりーん

回復魔法。ばわーん

こ「ね、お話しよ？」

ガクガクブルブル・・・

第六十四話：もとこ1/2（前書き）

またまた連日投稿〜！

第六十四話：もところ1/2

<side：ソウジ>

しばらく続いていたアスナとチャチャゼロの模擬戦が終わると、俺は一緒にそれを見ていた素子に向いて感想を聞いた。

「あいつがあんなに強いなんて全然知らなかった。確かにあれくらいなら、うちの攻撃は止まって見えたんやろな・・・」

見事に落ち込んでいるな。

アスナが自分より強いとは分かっているけど、これほどとは考えていなかったらしい。

「素子。確かにアスナは強いが、あの動きは何もあいつの地力じゃない」

「地力やないって、どういう意味？ 気か何か使うとるん？」

「正確には違うが、力を強化させている点では同じだ」

「それじゃあ、魔力？」

「近いが、それも違う。あれは咸卦法という物だ」

「かんかほう・・・？」

聞いたことがないみたいで、素子は頭に疑問符を浮かべて聞き返した。

「ああ。気と魔力を合わせて爆発的な力を生み出す、究極技法と呼ばれるものだ」

「気と魔力を？」

「そつだ。普通なら相反する力で、同時に使ってもあんなことは出来ない。しかし稀に、完璧にその二つの力を拮抗させて混ぜ合わせることで相乗効果を生み出す人がある。アスナはそんな数少ない人の一人なんだ」

「そんな・・・それじゃあうちに勝ち目なんて・・・」

咸卦法の説明をすると、素子は絶望したような顔になった。

天才以上の才能がないと使えない技をアスナというライバルが使っていれば気落ちするのも仕方がない。

「アスナに勝つのが難しいことは前から分かっていただろう？　まさか、それが考えていたより難しそつで怖じ気づいたのか？」

「!?!?」

その言葉を聞いた瞬間、素子の顔に生氣が戻つたように一気に変わった。

「そんな訳あらへん！」

「そつか？　さっきの顔からてつきり・・・」

「ちやう！ 絶対にあいつに勝つもん！」

「その調子だ。ではこれから最初の授業を始める。準備はいいか？」

「はい！ 兄上！」

うむ、いい返事だ。

それじゃあ早速やるか。

懐から今日の為に用意していた袋を出す。

素子は何だろうとそれを覗き込み、正体を知るとさらに不思議な顔になる。

「栗……ですか、兄上？」

「うむ、栗だ」

「栗の袋、やなくて？」

「正真正銘の甘栗だ。どこにも売っている、な。そして、これを？」

袋を開けて、集めておいた枯れ葉の山に中身を出す。

更にアールデスカットと唱え、枯れ葉に火をつける。

俺がこれらの作業をやっている間、素子はやっぱり何が起きているのか分からなかった。

「兄上、栗が欲しいんなら別に買ってきてもええんやないの？」

「いや、素子。これこそが今回の修行。時に素子、アスナに勝つにはどうしたらいいと思う？」

「・・・分かん」

自分がアスナに勝つイメージが湧かないのだろう。彼女にとってあの光景はそれほど印象的だった。

「まあ、そう思うのも分かる。聞きたくはないかもしれないが、今の素子じゃあアスナと正面から戦ったら絶対に負けるだろうな」

「くっ・・・」

「だからと言って、全く勝てない訳でもない」

「え？」

「勘違いしないように言うが、別に奇襲をしろとも言っていないぞ？」

「なら・・・」

「まず分かって欲しいのは、アスナが咸卦法を使える以上、パワーで打ち勝つのは無理だ。じゃあ、どうやったら勝てるかだが・・・とにかく手数を増やし、反射神経を上げてアスナの攻撃に堪えつつ、必殺技で一気に勝負をかける。それでも殺し合いでは勝てないだろうけど、普通の一本勝負なら勝機はある」

今度勝負してもアスナはきつと本気を出さないとと思うし、上手くその油断をつけば素子にも勝つチャンスがある。

「それは分かったけど、それとこれはどう繋がってるの？」

「よくぞ聞いた！ これこそ中国四千年の中で出来たスピードを上げる、由緒ある修行法だ！ 火中の栗を火傷を負わずに素手で取り出せるようになった時には素子もアスナのスピードについて行けるようになる寸法なのだ！」

「……………」

むむむ、これは信じていないな。

それでは実演してしんぜよう。栗も大分熱くなっているところだし。

「じゃあ、よく見ておけ。これから実際にやってやる」

「……………」

よし、見てるな。

「ふん！」

しゅばばばばばばば！

両手を素早く動かし、火の中から栗を取り出す。少し熱いが、栗に直接触っている時間が短いから火傷するほどじゃない。

栗が焼き上がるまではまだ時間が足りないが、別に今すぐ食べる訳じゃないので、ほどよく熱ければそれでいい。

そして全部取り出したあと、それをまた火の中に戻す。

「分かったか、素子？ とりあえずこれくらいは出来ないと話にならない」

「うー・・・」

「始めのうちは火傷をするかもしれんが、心配するな。ちゃんと後で治す」

「くう・・・」

「やっぱり止めるか？」

そう聞くと、まだ何も喋らない素子が頭を左右に振った。

「一応まだやるつもりはあるらしい。そして覚悟を決めた様子で素子が顔を上げる。」

「兄上、やる前に一つ聞いてもええか？」

「何だ？」

「どうして神鳴流の技を教えてくださいんの？ うちはてつきり奥義を教えてくださいれると思うとった」

なるほど、そんな疑問があったのか。

「理由はいくつかあるが、まず一つは神鳴流の技なら実家で教えてもらえばいいからだ。そして肝心の二つめの理由はそれらがアスナには通用しないからだ」

「兄上！ 神鳴流の師範のあんたがそんなこと言うの?!」

げっ、素子が怒った。

神鳴流を悪く言ったと聞こえたかも？

「素子、俺は何も神鳴流を愚弄している訳じゃないぞ?」

「どづいう意味や?」

「アスナは魔法や気を使った攻撃を無効にするんだ」

「そんな馬鹿な」

「そういう体質なんだ。かなり珍しいが、そう言うこととして受け入れた方がいい。そうすれば、神鳴流の奥義を使って決定的な隙を作らなくても済む。信じないならそれでもいいが、そうすれば後悔するのはお前だぞ」

「分かった。兄上の言うことを信じる。説明してくれてありがとうな」

「そうか。それじゃあ始めるか?」

「うん・・・あちっ!」

素子は早速火傷をしている見たいだ。まだまだ素早さが足りないよ
うだ。まあ、一発で成功させていたらそもそもこの修行をやる意味
はないし、今はこれでいい。

それに、これは修行の第一段階でしかない。この修行で素子の攻撃
スピードを上げて、次の修行で剣を導入して刀を振る速さも上げる。
そして最後の修行でアスナをびっくりりさせるような必殺技を教える。

第六十四話：もとこ1/2（後書き）

ついに素子の修行が開始！

まず習うのは火中天津甘栗拳！

そしてソウジの言う必殺技はもちろんあれです。

何だか、こつ言うネタを使ってしまつと歳を感じてしまいますねw

第六十五話・るるつに素子（前書き）

素子のネタ具合が加速する・・・

第六十五話：るろうに素子

<side:ソウジ>

素子がひたすらに火の中に手を突っ込み、栗を取り出す作業を繰り返して始めてから一月ほど経った。実際は魔法球の中で過ごした時間も多いため、修行に費やした時間はその数倍になっている。

そしてその成果は今、俺の目の前にある。

「はあああああ！」

しゅばばばばばばー

素子は手を素早く動かし、物の数秒で百近い栗を火傷も負わず、見事に俺の前に積み上げる。

「ふう・・・どうや、兄上？」

額に浮かぶ僅かな汗を拭いながら素子が聞いてくる。

「文句無しの合格だ。お疲れ様だな、素子」

「何言うとの、兄上？ まだ第一段階やる？ あいつとまた勝負して勝つまで休んだ暇はない！」

「そうか、それはすまんかった。じゃあ、すぐに第二段階に入るか？ 一日ぐらいの休みを入れてもいいんだぞ？」

「そんなん必要ない！ 今からでも平気や！」

気丈に振る舞い、素子は修行を続けたいと言う。

今日はまだこの試験しかやってないからそんなに疲れていないのだろつ。

「分かった。じゃあ、すぐに次の修行に移るぞ」

「はい！」

「修行の第一段階はスピードを上げること。第二段階は覚えてるか？」

「えっと、修行で得た素早さを剣でも出来るようにするんやったか？」

「そうだ。そして今度の修行では俺が相手になる」

「兄上が？」

「相手がいた方が高速な戦いに慣れ易いだろ？」

古くから実戦形式の訓練が一番効果あると知られている。最近そのような修行が行われないのは大きな怪我を負い易いからだ、魔法があるからそんな心配はない。まさにローリスク・ハイリターン。やらない理由がない。

「そやね。お願いします、兄上」

「おう。お前の限界を上げる為にその限界ギリギリの速度で攻撃し、

徐々に速度を上げていくから上達していないように感じるかもしれないが、めげるなよ?」

「当たり前や!」

「それじゃあ、始める前に前回ののように今回の修行で得たスピードを使った攻撃を実際にやって見せよう」

* * *

<side:素子>

「それじゃあ、始める前に前回ののように今回の修行で得たスピードを使った攻撃の完成型を実際にやって見せよう」

そう言うと兄上は訓練用の木刀を正眼に構えて、存在しない相手を睨んだ。

兄上はこれから何するつもりなんやる?

多分すごい高速の攻撃やろうけど、ただの連続技ならわざわざ見せんでもええのに。

それと、今回がまともな訓練で安心したわ。

前の時は思わず兄上の正気を疑ったもん。

何やの、あの修行は? 火の中から栗を取り出す修行なんて聞いたことないわ。

確かにそれのおかげでうちは大分スピードが上がったけど、なんだか納得行かへん！

技名を付けるんなら『火中天津甘栗拳』か？ うわ、かつこわるい！ そんなの叫びながら拳で連撃を繰り返す姿を思い浮かべると恥ずかしゆうて死にそうや！

「じゃあ、やるぞ。しっかり見てろよ？」

む、兄上のやることに集中せんと。考え事しとって見逃してもうたら話にならへん。それに、全力で集中せんとそのスピードについて行けへんやろうし。

「いつでもええよ」

「おし！ はあああああ！ 九・頭・龍・閃！」

兄上は気合いを入れると、技名らしきものを叫びながら架空の敵に凄まじい連撃を食らわす。辛うじて分かったのは兄上がほぼ同時に九回攻撃したことや。それも正面からできるあらゆる斬撃をや。

あんな攻撃されたら普通の人は確実に死ぬ。同じような速度で防がないと確実に何発か受けるんは間違いない。

うちはこれからそれを習わんといかんの？ そんな無理やん。

「どうだ、素子？ どういう攻撃か分かったか？」

「兄上！ そんなすごい技、うちに来る訳ないやん！」

「そうか？ やってみないと分からないだろ？」

「うちはあるなに速く剣を振るえん！」

「その為に前の修行をやったじゃん」

えー！！！！ 確かにスピードは上がったけど、あれは剣無しな状態
やった。比べもんにならんやろ！

「それとも、やっぱりここで諦めるか？ お前が無理っていつのな
らそれでもいいぞ？」

「うっ」

兄上はずるい。うちがそんな事できんって分かってそう言う。
うちはどうしてもあいつに勝ちたい。その為には兄上の言う通りに
するんが一番の近道やって言うのも分かるとる。

けど、最初の修行は訳が分からず、今回の意味も分かるけど、す
ごく無理そうや。

こんな真似、うちに来れるんやるか？

いや、出来ると信じるんや！ うちが兄上のこと嫌うとったが、兄
上は確かに強い。姉上も兄上に教えられてからは成長速度が見違え
るようになったと父上も言うとった。この修行がうちに来れると信
じてる兄上のことを信じるんや。

「とりあえず、今の素子の实力を見てみよう。全力でかかって来い・

・甘栗の修行で実際、どれくらい剣速が上がったか気になるし（ボソ）」

最後で何言ったかよう聞こえんかったけど、兄上に全力で切り掛ければええんやな？

「行くで、兄上！」

「おう、いつでも来い！」

第六十五話・るろつに素子（後書き）

ソウジ、ぶっちゃけすぎだろ。素子は確かに強くなっているけど、ソウジがおもしろ半分で作っているのがかわいそうですねw

第六十六話：竜巻注意報（前書き）

この回は勝手な解釈が多分に含まれています。つつこみは控えても
らえるとすごく嬉しいです

第六十六話：竜巻注意報

<side：ソウジ>

「もう一回だ！」

「はあああああ！！！！」

もう何回目か分からない素子の攻撃に剣を合わせる。

九頭龍閃という技は何も、双龍閃の鞘を使った二段構えの抜刀術や土龍閃の土砂を飛ばす技の様な特殊な動きが必要という訳じゃない。突き詰めれば、九頭龍閃はただの高速連撃だ。一撃一撃が必殺のものなのが特殊と言えはそうだが、斬撃の一つ一つは誰もが早くに習う動作だ。

これを本当の必殺技として使うには素子の力も体格が足りない。気を使って力を強化してもだ。けど、真の必殺技へと繋げるための目くらましとして使うのなら丁度いい。

「もう一回！」

「はあ、はあ、やあああああ！！！！」

素子の剣速は大分上がっていて、アスナを焦らせるようになるくらいまでにはあと少してるところだろう。ああ、それと、あの甘栗修行は思いのほかい結果を残した。パンチのスピードがそのまま剣のスピードになるかは分からなかったけど、最初に素子にやらせた時、すでに九割方完成していた。パンチと斬撃の動きはかなり違う

からちよつと不安だった。

結論から言えば、それは杞憂だった。だが、それだとどうして動きが違うのにそれができたのかという不思議が残る。仮説としては、甘栗の修行で高速を体感する事でそれに慣れ、その経験がそのまま元々できていた剣の動きに転用できたかもしれない。これは素子が元々剣を習っていたから出来ていた真似であり、やっぱり剣士じゃない人だと同じようなことはできないだろう。

「もう一回!」

「はいっ!」

疲れているはずなのに元氣よく素子が返事し、本日最後の突撃を繰り出して俺がそれを防ぐ。

「よし、そこまで! 大分良くなったな、素子」

「ふう・・・本当、兄上?」

「ああ、本当だ。もうこの訓練も充分だろう。午後からは最後の段階に移る」

「ええの?」

合格をもらったことに素子は少し驚いているみたいだ。

その思いは分からないでもない。この練習を始めてからは数日しか経っていない。魔法球の中での時間も含めてだから、前の修行で数週間もかけただけ、尚更びっくりしているかもしれない。

「そもそも、技の完成度は結構よかつたんだ。今までの練習は素子がその動きに慣れさせて、もっと流動的にするためだった」

「そやつたんや」

「正直に言えば、アスナと戦うためだけだったら最初のみまでも一応通用しただろうけど、教えたんだからできるだけ完璧にしたかつたんだ。その方が素子の将来のためになると思ったし」

素子を弟子にしたからには出来るだけ強くなれるように教えたい。

「兄上・・・」

「とりあえず、よくやつたな。ご飯のあとは修行の最終段階に入るぞ」

「はい！」

さて、今日は何にするかな・・・

簡単に野菜炒めとか焼きそばでいいか？ うーん、素子に聞いてみるか。

「素子、昼に焼きそばと野菜炒め、どっちがいい？」

「うーん、焼きそば！」

ちよつと考えてから素子は手を挙げて勢いよく返事した。焼きそばが好きなのか？ 俺も好きだが。

「分かった、焼きそばだな？」

確か麺はあったよな？

聞いておいて無理でしたなんてかつこ悪い事態になりたくない。

おおう、考えていたら少し不安になってきた。

いや、もし無くても一から作るくらいの気概でないと！

むしろ最初からそうしよう。それならかつこ悪いことになる危険もない。反対に、美味しい手打ち麺を食べさせたことで印象がよくなるかも？！ なんて天才的なアイデア！

よっしゃー、燃えてきたー！

・

・

・

「美味しいね、兄上！」

口をいっぱいにして俺に笑顔を向けながら素子が焼きそばを褒めた。

「そうか？ まあ、野菜も新鮮だし、肉は結構いいやつを使ってい

るからな」

外面では冷静さを装いながら、内心ではガッツポーズ！

美味いご飯でもっと仲良くなるう作戦、成功！

まあ、修行の間に一緒に過ごした時間は結構な物になっているからもう仲良くなっていると言ってもいいかもしれない。本来の素子はとっても素直で優しい子なんだ（鶴子談）。対象がいい奴なら、偏見さえなきや素子は仲良くなれると思う。よく考えれば、今回の焼きそばで得た好意はごく小さいものだろう。けど、少しでも仲良くなれたのなら嬉しい。こういう人間関係は小さいものの積み重ねの上で出来ているんだから。

「ところで、兄上？」

「どうした、何か足りなかったか？・・・っと、青のりが歯に刺さっているぞ？」

「／／／?!」

青のりを指摘してあげると素子は恥ずかしそうに口をぐしぐしと拭いた。

「と、ところで、兄上？」

あつ、なかったことにしたいのね。顔を赤くしてこっちを睨む表情は可愛いし、もっとみてみたいとは思っけど、可哀想だから俺も無視しよう。

「ああ、なんだ？ おかわりなら焼きそばはまだあるぞ？」

「うっ、おかわりは欲しいけど、ちゃうねん」

話は違うようだけど、おかわりは欲しいんだね。

焼きそばのおかわりを皿に装い、改めて席に座る。

「それで、何が聞きたかったんだ？」

「えと、最後の修行の事や。何かの必殺技やろ？ どんなのなん？」

あー、気になるんだな。

どうせすぐに分かるんだから今言わなくてもいいんだけど、いいか。今の内に説明しておけば後でまたする必要がないし。

「必殺技のことね・・・簡単に言えば竜巻を発生させて相手をそれに巻き込むんだ」

「竜巻で・・・気や魔法はきかんやないの？」

「確かに魔法の竜巻ならば効かないだろう。だが、この技は違う。気で竜巻の発生条件を満たし、竜巻はあくまでその副作用で起こる。だからアスナの魔法無効化能力に消されない」

「そうなんか・・・？」

胡散臭そうな顔を素子が俺に向ける。

なんだか詭弁のように俺も思うけど、それでうまくアスナに影響を与えらんだから、そういうこととして受け入れるしかない。

「今は信じるとしか言えないな。けど、俺を信じてここまで来たんだ。もう少し信じてもいいんじゃないか？」

「うん、兄上を信じる」

いいねえ、素直な子は好きだよ。

「それで、その竜巻はどうやって作るんや？」

「まずは火の気を纏い、螺旋のステップを踏み、相手をその中心へと誘う。この時、何かを企んでいると相手に悟られないように相手に一方的に攻撃させるか、こっちが一方的に攻撃して進む道を誘導させないといけないんだけど？」

「今までの修行はその時の為なんやな？」

「ああ。技の名前は飛竜昇天破という」

「なんや、かつこええ名前やな」

「そうだろ？」

この技は本来、格上の相手の攻撃を誘い、相手の闘気で渦を作って中心に至ったら冷気を上に打ち込んで上昇気流を発生させるカウンター技だ。けど、この世界には闘気に相当するものがあるかは分からない。咸卦法や気、魔力で代用できればいいけど、それが出来なければ意味が無い。だから今回は火気と冷気でその状態を擬似的に

再現させる。カウンター用途もできるかどうかいつかは試してみてもいいかもな。

さて、午後の練習はまず螺旋のステップを踏むことに慣れることか？ 高速攻撃に耐えながらも螺旋を踏めるようになってもらわないと。それと自分で攻撃しながらでもやれるようにな。カウンターじゃなくても使えるということはもっと積極的に技を発動させることも考慮したほうがいい。

「とまあ、技の大体はこんなもんだ。分かったか？」

「どういう技か分かったけど、どうやるかはまだよく分からん」

「まあ、それは追々分かってもらうさ。それより、もうお腹いっぱいか？ 一応デザートにプリンがあるが・・・」

「食べる！」

うわ、言い終わる前に身を乗り出して返事した。よっぽどプリンが好きなんだな。焼きそばも二人前食べたのによく入るな。これが別腹ってやつか？

第六十六話：竜巻注意報（後書き）

なんだか久しぶりに『／／／』を使った感じがします。実際はどれくらい振りかな？

感想返しは今時間がないので、もう少し待って下さい。

第六十七話：今日はいい勝負日和だ！（前書き）

ついに修行の成果が試される！

第六十七話：今日はいい勝負日和だ！

<side:ソウジ>

「・・・ゴクリ」

構えた剣を握り直し、素子が喉を鳴らす音が聞こえてくる。

対するのは無表情で佇む素子の永遠のライバルであるアスナ。

場所が違うのを除けば、まるで前回の対決の焼き増しだ。あとは素子が前回よりも大分落ち着いているくらいか？

素子が落ち着いているのは俺との修行で強くなり、自信がついたのもあるだろう。しかし、アスナへの怒りが治まったのも多い。そのお陰で素子は冷静にこの試合に臨んでいる。

ここに来るまで現実世界で二ヶ月ほど。その間に素子は必死に修行をこなし、ついに数日前、飛竜昇天破を会得した。強化のために気を使うことは前からちよくちよく習っていたらしいが、神鳴流の奥義で使う気の属性変化はまだ習い始めてもおらず、それを教えるのに少々手子摺った。

それからは試合でもそれができるようになるまでしばらく実戦形式の練習をして、技の出来に満足したらアスナとの試合を組んだ。

「今回の試合のルールだが、有効打、ダウン、ギブアップのいずれかで終わる一本勝負形式でやる。これでいいか、二人とも？」

「うん」

「はい」

「気も魔力も自由に使っていていいし、それを聞いた技も使っていていい」

このルールは前もって二人とも納得済みだが、一応再確認を取る。

アスナはこの方が試合が早く終わると考えていて、素子はこんなルールでしか自分に勝機がないことを知っている。

うむ、二人とも領いたな。

それじゃあ、始めようとするか。

「よし、用意はいいか、二人とも？・・・それでは、始め！」

合図とともに挙げていた手を振り下ろし、試合を開始させる。

「九頭龍閃！！！！」

おっと、素子はぐずぐずしない気のようにだ。

試合の開始と同時にいきなり九頭龍閃を使ってアスナを攻める。

素子はいきなり的高速連撃で試合のペースを掴もうとしているらしい。この試合の対策として高速攻撃と飛竜昇天破を素子に伝授したけど、具体的なプランは一緒に立てていない。その為、多分飛竜昇天破で終わらそうとしているだろう意外、素子がどういう試合運びで戦うつもりでいるのかは知らない。

「?!」

「はああ！」

アスナは素子のこの速度を予想していなかったみたいで少し驚いたが、彼女はそれでも一撃も浴びずにその攻撃を防ぎ切った。

やっぱりこれだけで倒すのは無理だよな。まあ、それは素子も分かっていたことだ。

九頭龍閃が防がれても素子は攻撃の手を緩める事無く、更にアスナへの攻撃を続ける。

これは、素子は攻勢に出たまままで試合を続けるつもりか？ さつきから素子は体に火気を纏っているのでも螺旋のステップに移る準備がある。

このままアスナを押し切るのは難しいと思うが、こういったアグレッシブさは好きだ。

その難しさを示すように素子は全力でアスナの動きを悟らせずに誘導しようとしているが、なかなか上手く行かない。

しかし、この素子の一方的な攻撃がいつまでも続く筈も無く、十分ほど続いたあと、ついに素子の攻撃に一瞬の揺らぎが生じ、その隙をついてアスナが離れた。

「なるほど、前より強くなってるね。ソウジのお陰？」

「そや、あんたを倒す為に強くなったんや！」

「ふーん・・・でもそれだけだとまだまだ無理ね。けど、頑張ったことを評価して、ちよっと本気を出すよ」

そう言つてアスナは左手に魔力を集め、右手には気。そしてそれらを合わせて咸卦の気を作つて身に纏う。

「それが咸卦法やな？ チャチャゼロはんと戦つた時にちらっと見たけど、目の前やと余計すごいな」

「知つてるんだ？ うん、これが咸卦法。私の切り札の一つ」

「これから本番うちゅう訳やな」

「今度はこつちから行く・・・！」

アスナがそう言つた途端に彼女の姿が消えて素子の目の前に現れる。

「うわ!?!」

おー、素子が反応した！

ぎりぎりつぽかったのは否めないけど、アスナの初撃を無事に防いだのならまだ素子にチャンスがある。

「やああああ!!」

それからアスナは掛け声を上げながら素子に向けて剣を何度も振り下ろす。

「くっ！！！」

素子は懸命にそれを防いでいるが、押されているのは明らかだ。

アスナの本気攻撃が考えていたよりも速いらしく、素子の顔は焦りで歪んでいる。だが同時に、これこそが待ち望んでいた状況。

アスナもこのまま戦い続けたら自分の勝利が揺るがないことは分かっている。そしてそれは素子の見せる表情が裏付けている。そここそが素子が付け入れられるところだ。

「これも凌ぐ？」

「まだまだ、行けるで！」

「じゃあ、もつと速くする！」

素子の言葉は明らかに強がりだけど、アスナはそれを知りつつ、宣言通りに速度を上げた。

さて、どうする、素子？ 仕掛けるなら今しかないぞ？

そんな考えが頭に浮かぶと、素子も同じ考えに至つたらしく、徐々に螺旋のステップを踏み始めた。その動きはアスナの攻撃に耐える動きによって巧妙に隠されていて、アスナはそれに気づく素振りはない。

けど・・・素子はどれほどの竜巻を起こすつもりだ？ このままだと直系30メートルくらいになるぞ？

しかし、俺のそんな思いをよそに戦いは続く。素子はもう螺旋の半分ほど描き終えている。まあ、どんなにすぐくてもアスナならば後遺症が残るような怪我はしないだろう。

「何か企んでいる？」

防御だけに専念しているのにまだ諦める様子を見せない素子をアスナは疑いを持ち始めている。けど、素子の狙いが分からず、このままやり続けることにしてみたみたいだ。今のままで勝てるし、例え素子が何かを企んでも自分なら大丈夫という自信もあるだろう。

そしてアスナが迷う数瞬のうちについに素子が螺旋の中心に至る。

その時、素子は纏っていた火気を消して冷気に変える。

「これが兄上に習った奥義！ 食らいなはれ・・・飛竜昇天破！！

！」

「！！！？

素子が火気を消した時、アスナは何かが来ると感じて素子から離れようとするが、時はすでに遅し。むしろ、アスナは攻撃を止めた事で素子は冷気を全力で打ち上げられるようにした。

素子はその機会に乗じて一気に冷気を帯びた剣を振り上げる！

そして打ち上げられた冷気は周りの熱気と反応し、上昇気流を生み、一気に竜巻が生まれる。

「きゃあああ~~~~~！」

竜巻に巻き込まれたアスナはぐるぐる回され、叫びながら空高く放られる。

錐揉みしながら打ち上げられた事によってアスナは目を回したのだろう。彼女は満足に受け身も取れずに地面に叩き付けられる。

「そこまで！ 勝者、素子！」

一本勝負のルールに則り、素子の勝利を宣言する。

素子はまだ勝った事が信じられないようだ。呆然と突っ立っている。

そんな素子に俺は労いの一声をかける。

「やったな、素子。お前の勝ちだ！」

「兄上……」

「アスナ、大丈夫か？」

怪我の心配はしていないけど、結構な高さから落ちたからな。それに素子のことにかまけてアスナをないがしろにしたくない。

「がばっ！」

アスナに声をかけると彼女は勢い良く顔を上げてこっちに走ってくる。

「今のなに！」

走ってきたアスナはさっきの技の正体を知る為に素子に詰め寄る。

「えっ？ えっ？」

「私、魔法、効かないのに巻き込まれた！ それ、ソウジに習ったの？」

「はう・・・う、うん。兄上に教えてもろうた」

素子はアスナの勢いに気圧されているらしく、返事がたじたじになっている。

「ソウジ！ 私にも教えて！」

自分の能力を無視した技に興味を示すアスナ。

俺がこのまま教えてもいいが・・・

いい機会だ。これを使って素子と仲良くさせられるかもしれない。

「俺よりも、素子に習ってみたらどうだ？」

「素子？」

素子の名前を呟きながらそつちを見つめるアスナ。

「素子！ 教えて！」

素子の手を握り、頼み込むアスナ。

そういえば、アスナ、初めて素子の事を名前で呼んでないか？

これってアスナが素子に興味を示したってこと？

「え、ええよ、うちでよければ」

「じゃあ、あっち行こ！」

「え、ええ？！ あ、あにうえ！」

「ソウジ？」

「うん？ ああ、いいぞ。けど、アスナ、素子はお前と違ってさっきの戦いで疲れてるだろうからあんまり無理させるんじゃないぞ」

「うん！ 分かった！ 素子、行こう！」

素子の手を取り、離れようとアスナがせつつく。

そして素子は俺の言葉が期待していたものと違ってしまい、狼狽しているうちに連れて行かれる。

頑張れ、素子。アスナは非常識だけど、根はとていい子だ。お前達二人ならきつとうまくやれる筈だ！

第六十七話：今日はいい勝負日和だ！（後書き）

素子の勝ち〜！

イエーイ！ どんどんパフパフ〜！

これを切っ掛けに素子とアスナが仲良くなるかも？

アスナの方もともと嫌っていなかったし、素子は相手にされない
ことでイライラしていたので互いに嫌う理由はもうない、と思う・

とりあえず、このアスナ／素子編は今回で終結です。次回は学校で
の後日談で、その後は新章突入です。

第六十八話：二つの仲良し三人組（前書き）

なんと、いつの間にか600万PV突破。これからも応援よろしく
お願いします！

第六十八話：二つの仲良し三人組

<side:さつき>

「素子、一緒にご飯食べよ？ さつきも」

「わ、分かった」

「ええよ。明日菜ちゃん、今日の給食ってなんやったか知ってる？」

「シチューだったと思う」

「そかー」

なんやら、この状況・・・

明日菜ちゃんと素子ちゃんが仲良く話しとる。いや、これは明日菜ちゃんが積極的に素子ちゃんに話しかけて素子ちゃんは戸惑っているよつや。けど、嫌がっとなるような感じがせえへん。

明日菜ちゃんが転入してから今までずっと二人の仲は険悪やったけど、この前の週末が明けたらこの通り、まるで何もなかったかのよつに振る舞っとなる。

明日菜ちゃんの無表情はいつもと同じやけど、それは普段の無関心とは違っつてなんとなく分かる。

それと素子ちゃんや。明日菜ちゃんが転入した時は家でのゴタゴタで気落ちしとったけど、それから少ししてそれはなくなり、明日菜

ちゃんとの問題だけが残った。何があつたか素子ちゃんと言わへんけど、話の中でいつも出てくる『兄上』つちゆうお姉さんの旦那はんと仲良くなつとるらしい。明日菜ちゃんとの関係もその頃に変わつた。相変わらず二人の間は冷戦状態やつたが、素子ちゃんのはもつとライバルに向けるような気持ちやつた。

まあ、二人が仲良しなのはええことや。素子ちゃんとはずっと親友やつたし、明日菜ちゃんはあるま喋らへんけどええ娘や。

「どうしたの、さつき？」

「さつきちゃん？」

しもた・・・いつの間にかご飯が配りおわつとる。素子ちゃんたちはうちが食べ始めとらんのが気になつたらしい。

「あつ、なんでもないよ。いただきます！ おつ、おいしい〜！このまるやかで深い味わい・・・それに舌の上でとろけるような肉に野菜！ まさに絶品や！」

「なに言うてんの？」

「変なさつき」

くはっ！ 厳しいツッコミありがとう、二人とも！

その変な人を見る目が心に刺さる！

とにかく、どうやらこの数日の間、二人に何かがあつたらしい。

これで皆で遊べるようになったら嬉しいな。

* * *

< side : 素子 >

明日菜との勝負に勝ったらあいつの態度がいきなり変わった。

ずっとうちのことなんか知らんって顔やったのに、話しかけるようになった。

認めてもらうたって思ったら嬉しいけど、なんか急に変わると、今までのは何やったんやって思ってしまう。うちの存在ってそんなに軽いもんなん？ ちょっと複雑やわ。

けど、それが明日菜って納得するしかないって兄上が言うってた。明日菜は同年代の子と過ごした時間が少ないからしゃかいせい(？)があんまりないんやって。よう分からへんけど、友達を作るんが苦手で、友達がいなくても気にせえへんらしい。うちは友達ってすごく大事やって思うんやけど・・・

つまり何が言いたいんかは明日菜が嫌な感じやったんは根っから嫌な奴やのうて、ただ周りがどう思うか気にしてへんから冷たく感じるんや。けど、家族か親しい人相手なら普通に優しいし、意外と甘えたがりなのも分かった。

「素子、国語教えて？」

「ええよ、どこらへんが分からへんの？」

「えっと、このこの奴……」

「うん、ここは……」

このように、今じゃ普通に授業で分からへんところも聞いてくる。

どうしてこんな風になったか。それはあの勝負の時、明日菜に飛竜昇天破のことを説明した後、代わりに昔の兄上のことを聞いたんや。

そうしたら、出てくる出てくる。あんなに喋る明日菜は初めて見た。分かつつたことやけど、やっぱり兄上のが大好きなんやね。

それはうちも分かるかも。兄上といっぱい修行したけど、兄上がうちのことを大切に思うのが感じれた。昔の姉上もこんな感じやつたやろか？

けど、うちは姉上のように色ぼけにはならん！ 兄上は優しくて好きやけど、家族として好きだけや。姉上とかエヴァはんとはちやうねん。

あと、困りもんは明日菜や。嫌いって意味やのうて、可愛すぎて困るつちゆう意味や。あれは変わりすぎやろ！ あれから明日菜は兄上やエヴァはんに見せる表情をうちにも見せ始めた。相変わらず、他人には冷たいけど、そのずれがまたうちに見せる僅かな笑いを目立たせる。なんなんやろ、この胸がもやもやする気持ち。

「素子、次ここ」

「ああ、これは……」

はあ、まあ、それはまた今度でええか。この問題はうちも少し分かりづらかったからちゃんと集中せんと。

「そうだったのか・・・素子、頭いいね！」

だから、その顔はやめろー！ー！　うち、おかしくなってるまうー！ー！

* * *

<side:エヴァ>

「「「プラクテ・ビギナル・アールデスカット」」」

目の前の三人が呪文を唱えて初心者用の杖を振る。

すると三人の杖に火が灯る。特に木乃香の火が大きい。直系二メートルくらいか？

彼女の魔力は人間にしては異常に高いからな、こんなものだろう。

しかし、マナと刹那も負けていない。大きさは木乃香のよりは小さいが、木乃香のが二メートルくらいなら他の二人は一・七五メートルと、それほど遅れをとっている訳でもない。これは二人が妖交りの血であるお陰だろう。

これは準備運動のようにやらせているのだが、ここまで来るのに結構長かったな。マナや刹那はもともと魔法と接しながら生きていた

第六十八話：二つの仲良し三人組（後書き）

素子、人、それをギャップ萌えという。

そしてエヴァに魔改造される木乃香達・・・原作開始時にはどの魔法先生よりも強くなっているんじゃないでしょうか？ 十四歳の少女に負けて落ち込むタカミチ・・・可哀想すぎるw

第六十九話：卒業式（前書き）

時間が少し飛んでソウジがパパさんになっています！

第六十九話：卒業式

< side : ソウジ >

「パパ~~~~！」

「ばば、こつち」

京都に来てからもう二年が経つ。ただいま俺は可愛い娘二人に手を掴まれて席に引つ張られていく。場所は明日菜達の小学校。なんと、今日は二人の卒業式なのである。

娘というのは勿論エヴァと鶴子が生んだ子のことだ。名前は第一子が青山美奈子で第二子が絵梨・エリザベート・鳳姫。なぜ美奈子に青山姓があるのかは第一に鶴子とは正式に結婚していないこともあるが、将来に神鳴流を継がせる可能性があるのが大きい。因みにこれは秋人の願いだ。

二人とも母から容姿を受け継いでいて、美奈子は背中の中半ばまである黒髪、黒目の純日本人。絵梨の方はエヴァから金髪を貰っているが目の色は青じゃなく、俺の黒色だ。どうであれ、二人が将来、とてつもない美人になるのは間違い無しだ。

美奈子は元気がよく、いつも絵梨を連れ回している。対照的に絵梨はおとなしく、美奈子に振り回されている感があるが、虐められていると言うより少し強引に遊んでいるだけで、二人の仲は良好だ。エヴァの娘なのにこつちも性格に違いが出るのは面白い。いや、よく考えてみれば、初めてエヴァと会った時はこんな感じだったな。あんまりにも昔の出来事ですっかり忘れていたよ。

「おーい二人とも、そんなに慌てていると転んじまうぞ」

「だいじょうぶだよー」

「だよ」

「ふふ、二人ともはしゃいじゃって。おめかししてお出掛けするんが嬉しいんやね」

「ああ・・・でも娘があんなに仲がいいのに母親はどうしてこんなに仲が悪いんだ？」

「貴様がそれを言うのか?!」

ドスッ!

「ぐほっ！ ナイス・・・ツッコミb」

エヴァに脇腹にいい肘打ちをもらい、思わず咳き込む。

「うちはそんな事ないんやけど・・・」

「むっ、それは何だ？ 暗に私が狭量と言っているのか？」

「やっぱり懐の深さと胸の大きさが関係しとるとか思っへんよ？」

「いいだろう・・・よっぽど死にたいらしいな、鶴子。安心しろお前の子はちゃんと私が面倒を見てやる」

周りの温度が十度下がったと感じたのはきつと気のせいじゃない。

「まあまあ、抑えて、抑えて。今日は明日菜と素子の晴れの舞台だろ?」

「そうですね、先生」

「ちっ、確かにな。命拾いしたな、鶴子」

「ああああ、恐いわ。先生助けて下さいな」

怖がる振りをして俺の腕に抱きつく鶴子。それを見てエヴァの眉がピクリと動く。

絶対怒ってるよ……

頼むからあんまりエヴァを刺激しないでください。とてもすごく恐いです。

「パパ、ママたちまたケンカ?」

少し涙目になって美奈子が俺のズボンの裾を掴んで見上げながら聞く。

その横で絵梨も心配げにこっちを見ている。

「大丈夫だよ。二人ともじゃれ合ってるだけだから。それよりも早く席に座ろつな。そこまで抱っこするぞ」

「わっい、だっい」

「ぱぱ、えりも〜」

「もちろん絵梨もだぞ〜、わはははは」

よし、これで般若どもから逃げられる！

いそいそと二人を抱き上げ、会場（体育館）に入る。

「おっ、明日菜達がいる。ということはおそこがあいつらのクラスか？」

「おねえちゃんたち？」

「あつ、ほんとだ！ あすなおねえちゃんと、もとおねえちゃん！」

明日菜の赤毛は目立つから見つけやすい。そしてそこに向けて二人が手を振る。

その声に反応して明日菜と素子、さらにさつきが振り返り、控えめに手を振った。

どうやら卒業生は皆すでに集合していて席に座り済みらしい。

俺たちも座らないとな。

因みに真名、刹那、木乃香の三人は普通に授業に参加しているのでこの場にはいない。

少ししてエヴァと鶴子が来て座り、そしてそれから数分経つと壇上

に校長が現れた。

それを見て、辺りに響く話し声が静まり、会場が静寂に包まれる。

『みなさん、こんにちは。それでは第三十七回、
× 小学校卒業式
を始めたいと思います』

明日菜達ももう春休みが明けたら中学生か。そして、麻帆良で生活を始める時でもある。新しい場所で友達を作れるかは少し心配だが、二人一緒なら大丈夫だろう。

どうして今になって麻帆良に行くのか。それは関西呪術協会に不穏な動きが見られ始めたからだ。詠春も頑張っているが不満は募っているらしく、木乃香が危険になり始めている。一応護衛として俺とエヴァも気をつけているんだけど、俺たちの家族もいることだし二十四時間ずっとついていく訳にも行かない。そこで詠春は木乃香を麻帆良にいる養父の元に送ることに決めた。

木乃香を弟子にしている俺とエヴァはその教えを途切れさせたくないし、木乃香を一人だけ知らない土地に送りたくない詠春にも頼まれているので木乃香が向こうに行くと同時に俺たちも一緒に行くことに決めた。

これについて皆と相談した時、特に反対はなかった。真名と刹那は親友の木乃香とは離れたくなく、娘達は俺たちと一緒にならどこでもいい。あとは明日菜と素子の問題だが、だからこそ卒業まで待った。それならいい区切りにもなるだろうと考えた。正直に言えば素子までついてくる必要はないけど、聞いてみた時、一緒に来たいと言われた。もう一人の親友のさつきが親の都合で引越すらしいので、明日菜までいなくなつて一人になりたくないと言った。

という訳で、一家総出（+素子）で麻帆良に引っ越す事になった。

新年度に間に合うように京都を出るのは明後日で、麻帆良での新居はすでに手済みだ。皆で住めるようになり大きな、屋敷と称してもいいような家を購入した。

『次に6年5組・・・青山素子』

『はい!』

おっ、ついに明日菜達のクラスの番か。

ビデオ、ビデオ、つと・・・

* * *

<side:明日菜>

卒業式が終わったあと、私達卒業生は校庭に集まって話し合いとかしてる。よく聞こえてくる話題はどここの中学に行くのかとか、中学生になるのが楽しみだとか。私も明後日に京都を離れるから皆に別れの挨拶をしてる。けど、まださつきとは会ってないから、ちよっと探してる。

「明日菜ちゃん! こっちや、こっち!」

「ちつき?」

あつ、素子もいる。

「明日菜ちゃん、三人で写真とる？」

「うん、いいよ」

「さつきちゃん、カメラ持つとるん？」

「うちのお父さんが持つとるよ？」

「もう卒業なんやね・・・」

素子がしみじみに言う。私は二年くらいしか通ってないから素子ほど思い出がないけどそれでもなんとなく素子の気持ちが分かる。

「そう言えば素子ちゃんたちも引越すんやったな」

「うん、麻帆良っていう学園都市に引越すんや」

「明日菜ちゃんもやる？」

「うん、ソウジとエヴァの皆と一緒に行く」

木乃香が危ないから引越すんだけど、それはさつきとは関係ない。

「さつきちゃんはどこに引越すんやったっけ？」

「えっと、確か、三咲町ってとこやったかな？」

三咲町？ 聞いた事無いけど、遠いのかな？

麻帆良とはどれくらい離れてるのかな？

「毎日は無理でも、毎週手紙書くから、素子ちゃん達も返事書いてね！」

「うん！ うちも書くよ！ 向こうの住所はまだ覚えとらんから実家の方に送って。そうしたらうちの人の誰かが麻帆良に送ってくれるから」

「そっかー、うちもまだ向こうの住所は分からんから、最初の手紙はうちが送るね。それと電話番号も送るから電話でも話そな？」

「分かった、楽しみにしてる」

「おーい、さつき、カメラ持ってきたぞー」

「もー、お父さん、遅いよ！ うちの写真とって！」

遅れてきたおじさんをさつきが叱ると私と素子の肩に腕を回して写真を撮らそうとする。

素子は戸惑いながら笑い、私もできる限りの笑顔を浮かべる。

「チーズ！」

パシャ。

おじさんがカメラのボタンを押し、フィルムが回る音がする。

きつとフィルムにはさつきを中心にしてその左右に首に腕を回され
た私と素子が写ってるんだろう。

第六十九話：卒業式（後書き）

なんと三咲町に引っ越してしまっさつきちゃん。

果たしてソウジ、または素子／明日菜は彼女の運命に介入することはあるでしょうか？

それは神のみぞ知るですね。

第七十話：この木なんの木（前書き）

ついに第七十話。

この話から麻帆良突入です。

第七十話：この木なんの木

< side : ソウジ >

「ここが麻帆良か・・・うおっ、あの木、超でけえ〜！」

卒業式の二日後、俺たちは一家揃って京都を出発した。

そして京都から電車で揺られ、何度か乗り換えをして半日ほど。俺たちはついに麻帆良に着いた。

それにしても、あの木。世界樹だったか？ 想像していたよりも何倍もでけえ。街のどの建物よりも高いってどういう訳？ いくら麻帆良に高層ビルがないと言っても、いやもしあってもそれより高いんじゃないか？ 周囲が一キロと言われても簡単に信じそつだ。

「あの木すごーい！ パパ、すごいね！」

どうやら美奈子も世界樹が気になるらしい。キラキラした目で俺のスボンの裾を何度も引つ張る。他の家族も言葉は少ないから、圧倒されているみたい。皆のあんぐり顔からそれが分かる。

「おっ、美奈子もそう思うか？ やっぱりすごいよな！」

「パパ、もっとよくみたい！」

「そうか？ じゃあ、肩車だ〜！」

「きゅ〜〜！」

美奈子を抱き上げて肩車をする。頭の上には相変わらずチャチャゼ口がいたが、大丈夫だろう。以前はアスナの居場所だった俺の肩だが、今じゃあ主に娘達（と、時々刹那）の場所になっている。それを明日菜がどう思うか心配だったが、もう小さな子供じゃないから別にどうでもいいと言った。ちよつとむつとした表情になっていたのが可愛かったのを覚えている。お姉さんだから我慢しないと駄目と考えたか？

何で俺がこれほど驚いているのかが聞きたいかもしれないけど、何気に麻帆良に来るのは初めてなんだよね・・・

原作の中心舞台なのに?!　そしてどうやって新居を買ったんだ? と、疑問に思うかもしれない。
けど、今までは来る理由とか特に無かったんだよ。

新居はおすすめの不動産屋に要望を伝え、写真を見て決めた。

それからタカミチはただ学校に通っていたし、ガトウがついていたから心配はなかった。

あつ、そういえば明石家の皆さんもここに住んでいたっけ。でも、あいつらはお礼にと言って一家揃って京都まで来たし、わざわざこちまで来る必要がなかった。ちようど、娘の裕奈も魔法を習い始めていて、それが仲良くなる理由の一つだったらしい。裕奈が木乃香達と仲良くなったからその後も何度か京都に来ていたけど、だからと言って俺たちが麻帆良に行く理由にはならなかった。木乃香が京都から離れられなかったし、一人だけ置いてけぼりにするのは嫌だった。

「あつちの世界でもこれほどの木は見た事無いな・・・」

「ママ、あっちのせかいってなに？」

「魔法世界のことだよ、絵梨」

「まほうせかい？ それってまほらよりとおいの？」

「ふふ、そうだな、麻帆良より遠いぞ」

「ママはいったことあるの？」

「むしろこっちにいる時間が少ないな」

「えりもいつてみたい！」

「そうなのかな？ でも、絵梨がもう少し大きくなないと駄目だな」

「え〜・・・」

「まあ、いつかは連れてってやるさ。それまでは絵梨も強くならな
いと駄目だぞ？」

「うん、えり、つよくなる！」

絵梨は魔法世界に興味があるらしい。どんな場所かはよく分かって
いないみたいだが、そんなの絵梨には関係ない。彼女はただ、自分
の母の言う場所のことが気になっているだけだろうな。

・・・

・

・

さて、こっちに来たのはいいが、ここからどこに行くんだ？

確か話じゃあガトウとタカミチが迎えに来る手筈なんだが・・・

「おーい！」

あつ、噂をすればなんとやら。

声のする方を見ればタカミチが手を振って何人が連れながらこっちに向かっていた。

あれはガトウに明石一家か？

タカミチの呼ぶ声に気がつき、明日菜やエヴァ、そして他の皆も迎えが来ているのに気がついた。

「ソウジさん！ それに皆さんも！ 麻帆良へようこそ！」

タカミチとガトウはこっちに来て、明石一家はどうやらまずは木乃香達と話に行くようだ。

近づいたら、まずタカミチが挨拶してきた。

「よう、少年。元気だったか？」

「はい、ソウジさん、おかげさまで。チャチャゼロさんもお久しぶりです」

「はるー。久しぶりね、タカミチ。どう？　少しは強くなった？」

「ははは、それはどうでしょう？　頑張ってるんですけど、まだまだ師匠の強さには追いつきません」

「そうそう追いつかれたらこっちがたまらんよ。元気そうで何よりだ、ソウジ」

「ああ、ガトウも元気そうよかった」

ガトウが怪我した事件からこっち、直接会っていなかったが、元気にしているのは電話とかで聞いていた。それだけでも安心していたが、やっぱりこうしてガトウの顔を見ると更に安心するな。

「パパ、このひとたちだ〜れ？」

頭上から美奈子の声がして、まだ紹介していなかったのを思い出す。

「ソウジさん、もしかしてこの娘が？」

「ああ、こいつは美奈子。鶴子との娘だ。もう一人の娘は・・・おい、エヴァ。ちょっとこっち来てくれるか？」

「分かった」

「・・・パパ？」

エヴァがこっちに来て、エヴァと手を繋いだ絵梨も勿論ついてきた。

「久しぶりだな、二人とも」

「はい、お久しぶりです、エヴァさん」

「・・・」

新しい人たちと出会い、絵梨は少し恥ずかしらしく、エヴァのドレスの裾を掴んで後ろからタカミチ達を見上げていた。

「二人とも、この人はタカミチとガトウと言って、パパとエヴァママの昔からの友達だ」

それからタカミチはエヴァの前でしゃがみ、絵梨の顔を覗き込んだ。

「こんにちは。僕はタカミチ・T・高畑って言うんだ。君は？」

「・・・」

「ほら、ちゃんと挨拶しないか」

中々話し出さない絵梨に業を煮やし、エヴァが絵梨を前に押し出す。

「ほづきえりです。2さい・・・」

「絵梨ちゃんか！ 可愛い名前だね！」

「よく言えたな」

頑張った絵梨の頭を撫でて褒めるエヴァ。

「えへへ・・・」

（ほら、美奈子も自己紹介）

（うん、パパ）

「あおやまみなこです！ 2さいです！」

「美奈子ちゃんは元気がいいね。ソウジさん、エヴァさん、少し遅れましたが、お子様のご誕生、おめでとございます。二人とも可愛くて、将来は母達に似た美人になるでしょう」

「そつだよな！」

二人ともすごく可愛いよね？ やっぱり将来は美人間違い無しだよ
ね？

それに頭もすごくいいし、潜在能力もすごく高い。美人で力も強く、
頭もいい。さすが俺たちの娘だ！

「先生、うちの紹介もお願いします」

あれ？ 鶴子ってタカミチたちとは会っていないなかったか？

最初の時はアリカの救出後だったっけ？ その時のタカミチは麻帆
良で学生をやっていたから京都に来ていなかった？

それから二度目はガトウに付き添っていて、そのまま麻帆良まで帰った？

こうして考えると確かに会う機会はなかったかもしれない。まあ、前に一度会っていても、また紹介しても別に悪くない。

「そうだな。えっと、この人が青山鶴子で、美奈子の母だ」

「ママ！」

「おお、ええな、美奈子。パパの肩車、楽しい？」

「うん！　すごいとかい！　おおきいきもよくみえるよ！」

「大きい木？　ああ、世界樹のことやな。美奈子もすごいと思ったん？」

「うん！」

「鶴子」

美奈子とじゃれるのもいいけど、自己紹介はいいのか？

「すみません、先生。こんにちは。ガトウはんとタカミチはんやな？　うちは青山鶴子。よろしゅうな？」

「はい、よろしく願います、鶴子さん」

「ああ、よろしく」

「さて、挨拶が終わったところで早速行くか？」

いつまでも駅の前で立ち尽くしている訳にもいかないし。

「はい。あの、学園長がまずは自分のところへ来るようにと言いつけられています。それでいいですか？」

「うん？ そうなのか？ まあ、いいよ、それで。家の方はどうだ？」

「いいところですよ。荷物や家具などもすでに運び込まれていますので、いつでも住めるようになっていきます。鍵もここに・・・」

そう言っただけを懐から取り出し、こちらに差し出すタカミチ。

「ありがとな。それと不動産屋とのやりとりもご苦労様。お陰であり苦労しないで済みそうだ」

「いえ、気にしないで下さいよ。こちらは喜んでやっていますので」

「それと学園長との話の後に家までの案内、頼むな」

「はい、それは勿論です。あと、今は有志を募り、ソウジさんの家で歓迎会の準備がされている筈ですので学園長には長話をしないように頼んでいます」

「はは、そいつはありがたいな」

あのじいさんが無駄話するのが好きかは分からないが、どっちにしてもありがたい。きつとじいさんもパーティーに来るだろうし、

話が短く済めば子供達も退屈せずにできる。

けど、有志って誰のことだろ？

こっちには他の知り合いなんていない筈なんだが・・・

* * *

<side:木乃香>

「このちゃん！　せっちゃん！　まーちゃん！」

「「ゆーちゃん！」」

駅について大きな木を見て皆でぼーっとしたら向こうからゆーちゃんとおばさんとおじさんがこっちに来た。あとは知らんけど、ソウジおじさんの知り合いの人も。

その二人はソウジおじさんたちと話があるみたいでそっちに行って話をしとる。

けど、そんなことより、ゆーちゃんが来てくれたことが大事や！

こっちに住んどるのは知ってたけど、駅まで迎えに来てくれるなんて思ったらなかった。

「久しぶり、みんな！」

ゆーちゃんはこっちまで走るといきなりうちら三人に抱きついた。

もちろん、うちは嬉しくて抱き返した。せつちゃんも笑いながら抱き返しとる。まーちゃんだけはあんまり笑ってへんけど、嬉しそうや。まーちゃんはいつもくーるやからな。

ゆーちゃんは裕奈ちゃん言うて、うちの強敵ライバルなんや。ゆーちゃんのお父様とお母様が二人とも魔法使いで、ゆーちゃんもうちらと同じくらいに魔法を習い始めたらしい。ゆーちゃんは才能があるらしく、いつも会う時はどれくらい成長したか比べとる。

「ゆーちゃん、久しぶり！ ゆーちゃん、魔法がんばっとる？」

「あつたりまえよー！ ちょっと大変だけど、もう雷の暴風とかもできるもんね！」

「わあ、すごいね、ゆーちゃん！」

中級魔法ができるゆーちゃんをせつちゃんが羨ましそうに見る。

うちもまーちゃんも出来るんやけど、せつちゃんは少し手間取つとるからな。けど、せつちゃんは剣術をソウジおじさんに習い始めてそれが上手くなつとるんやから別に羨ましく思わんでもええのに。人はみんなそれぞれやし。

「あとね、あとね！ ちょっとだけママの魔法銃を撃たせてもらったの！ すごく楽しかった！」

「ええ？ ええなー。なあなあ、うちにも撃たせてもらえるかな？」

「うーん、分かんない。ちょっと聞いてみる！ ママー、このちゃ

んがママの魔法銃を撃ちたいってー！ いいかな？」

うちが撃つてみたいって言うたらゆーちゃんがいきなり明日菜姉さんと素子姉さんと話しとるおばさんたちに聞いた。

「あら、そうなの？ でも、いきなりは駄目かな。ちゃんとソウジさんや学園長に許可を取らないとね」

「ええー・・・ごめんね、このちゃん、駄目だって」

「ううん、ええよ。ちょっと気になっただけやし」

本当は結構残念やけど、それは言わない。

「そう言えばまーちゃんも魔法銃持つてるよね？」

「私？ うん、持つてるよ。あんまり使う機会はないけど。ほら・・・」

ポケットから一枚のカードをまーちゃんが取り出す。

「アーティファクトでしょ？ いいなー、わたしも欲しいけど、誰もどうやって手に入れるか教えてくれないんだよ！ 酷いよね！」

「うんうん、うちもな？ みんなに聞いたんやけど、誰も教えてくれへんねん。まーちゃんも明日菜姉ちゃんもいくら聞いても言わへんし・・・」

「パクティオーっていうのがいるってパパが言ってたけど、どうやってそれをするのか分からないんだよね・・・」

「ばくていおー？」

「そだよ、せつちゃん。でも、みんな、わたしにはまだ早いって言うんだよ！ まーちゃんはもうしてるのに！」

「私は明日菜姉さんと一緒にしたから出来たと思う。じゃないと、私もまだ早いって言われたんじゃないかな？ あと、私に聞いても言わないよ？ 怒られたくないからね」

「ううー、まーちゃんのいじわる！ けちんぼ！」

「ゆーちゃん、いくら言っても駄目だよ。うちとせつちゃんが何度頼んでも言ってくれへんのやから」

「そっかー、このちゃんとせつちゃんでも無理だったか。それじゃあ仕方ないね、今は諦めるか」

まったく、いつになったらうちにもアーティファクトが出来るんやる？

「裕奈！ みんなも、そろそろ行くみたいよ！」

「はい、ママ！ 行く、みんな！」

おばさんと呼ばれるとゆーちゃんがうちとせつちゃんの手を掴んで歩き出した。まーちゃんはうちの横やから、もう一つの手でまーちゃんの手を握った。これで仲良し四人組になったな！

第七十話：この木なんの木（後書き）

ちよつとした宣伝。

自サイトで公開しているオリジナル小説が一応完結したのでこちらのサイトにも載せ始めています（リンクは<http://ncode.syosetu.com/n8191t/>）。最後まで一日更新に設定してありますので、こちらで完結するのは七月に入ってからになります。ぜひ読んでみてください。

本当の後書き。

この小説で明石裕奈の初登場。なんと木乃香達のライバル的存在。この娘も原作までには魔改造されてしまうのか？ それとも脱げ女のような強いのに雑魚キャラになるのか？ まあ、きっと木乃香達とチームを張れるくらいの強さになっていると思います。

第七十一話：交渉？

< side : ソウジ >

「失礼します」

「長旅でお疲れのところ、わざわざここまですまんかったのう」

タカミチに先導されて俺たちは学園長室まで来た。

木乃香以外の子供達は外に待たせ、中にはガトウ、タカミチ、俺、エヴァ、鶴子、そして木乃香の六人で入った。

「おじいさま」

中に入ったなら木乃香は机の後ろから出て来た学園長の元に走り、学園長がそれを笑いながら迎えた。

「おお、木乃香！ 電車はどうじゃった？」

抱きついた木乃香を抱き返しながら聞く学園長。

「楽しかったよ。お弁当美味しかったし、販売員さんがゴロゴロでおもろかった」

「ふむ、そうかそうか、それはよかったのう」

こうして見るとただの好々爺なのに、これでも関東魔術協会の長なんだろ？ 毎日陰謀と戦ったり、過激派の抑えとかで忙しいとは思わないよ。

「お父様がよろしくお願いしますって言うつつたよ」

「婿殿が？ 後で電話するかのう。木乃香も忘れずに電話して婿殿を安心させるんじゃぞ？」

「はい！」

「さて、外で友人が待つとるんじやる？ 儂はまだソウジ殿達と話があるから、少し席を外してくれんかの？」

「ええよ。お爺さま、また後でな」

「ああ、また後でじゃな。儂も歓迎会に行くからその時にまた話をしような？ プレゼントも渡したいし」

「プレゼント？ そんなんええのに」

「なんじゃ、木乃香は孫を甘やかしたい爺の楽しみを奪うと言つのか？」

まさに爺バカだ・・・

「木乃香は最近、魔法を頑張つとるそうじやからな。ちょっとした道具を用意したんじや。それが何かは後であげてからのサプライズじゃな」

「ありがとう、お爺さま！」

「はっはっは、お礼はプレゼントを渡してからでもええんじやぞ？」

「うん！ でも、ありがとな！ じゃあ、お爺さま達が話出来るよ
う、うちは出て行くな？」

「そうじゃな。できるだけ木乃香たちを待たせんよう、話を短くし
よう。ではな……」

「ばいばい」

そう言つて、僅かにお辞儀しながら木乃香が部屋を出る。そして残
される五人＋学園長。

「さて、立ち話もなんじゃし、とりあえず座ろつかの？」

言葉は普通でも、目を鋭くさせて切り出した学園長の雰囲気はさっ
きと違つて真剣そのものだ。

やっぱり狸だな。

学園長に言われるままに俺たちが席に座る。タカミチだけは少し離
れて立つたままだが。一番若輩だからか？ 歳は鶴子と同年代だと
思ったが……まあ、鶴子は一応客だから彼女が座るのは不自然じ
やない。

「それで、話とは一体何なんだ、ジジイ？」

「ちよつと、エヴァはん、それはいくらなんでも失礼やないか？
それに、年齢から言えばエヴァはんの方がよっぽどババアやないの」

「ああん？」

「抑えて、抑えて」

鶴子の見え透いた挑発にエヴァが乗りそうになるのを肩に腕を回し、押さえつけて止める。タカミチもエヴァの反応焦っていたみたいだけど、俺が止めるのを見ると落ち着いた。

「ほほほ、ええんじゃよ。儂らの都合で呼びつけたんじゃから、これかい言われても仕方がない」

「ふん」

「くどい様だが、用件を説明して欲しい」

「そうじゃな。まずは謝罪と感謝を述べさせて欲しい。木乃香の為にここまで来させてすまんかった。そして木乃香の祖父として礼を言う。ソウジ殿の家族には迷惑をかけた」

「気にすんなど言いたいが、皆の代わりに言うほど思い上がりじゃない。本当にすまないと思っっているなら皆にも言ってくれ」

小さい方の子供はむしろ木乃香について来られて嬉しいみたいだが、これから中学で、友人も多い明日菜と素子の正直な気持ちは分からん。いや、納得はしているだろう。二人で京都に残る選択をあげたし、ここに来るのは自分で決めただ。けど、やっぱり友人と別れるのは寂しいだろう。

「それはそうじゃのう、歓迎会でまた皆に詫びるとしようかの」

「それがいいだろう」

「次はソウジ殿達に頼みがあるんじゃ」

「頼み？」

まあ、予想はつくけど。

「うむ、ここは特別な霊地じゃからのう、時々魔物や敵対組織に襲われるんじゃ。ソウジ殿達にその撃退を手伝って欲しいんじゃ。ここにおける魔法先生や生徒も頑張るとるんじゃが、はつきり言って人手不足じゃ。そこで、戦争の英雄でもあるソウジ殿、エヴァンジェリン殿、チャチャゼロ殿、そして名高い神鳴流の青山鶴子。皆が警備に加われば儂らも大分楽になるじゃろう」

やっぱりそうか。

まあ、俺としては異存がない。俺らが戦えばそれだけ家族も安全だしな。

「無論、戦ってくれるならば、家族が生活に困らん程度の報酬は出す」

「なるほど・・・いいだろう。さすがに全員が毎日という訳にはいかないだろうが、呼ばれた時くらいには応えてやるさ」

「それで充分じゃ。それから最後にもう一つあるんじゃが・・・」
まだあるのかよ。

「うむ、ソウジ殿は長生きじゃろ？ その経験を生かして麻帆良女

子学園中等部で歴史の先生をして欲しいのじゃ。ちょうど空きができて代わりを勤める者を探しとったんじゃ」

「歴史つて。俺はほとんどの時間を向こうの世界で過ごしていたんだが、いいのか？」

「それでもええんじゃよ。こちらの世界の歴史を全く知らんという訳でもないじゃろうし、儂らが必要なのはソウジ殿の経験、そして知識じゃ。それがあれば、授業を面白くさせるアイデアも出るじゃろう」

はつきり言っであんまり自信はないんだが、こいつがそれでいいんなら別にいいか？それに、学校の先生は初めてでも、物を教えるだけならば経験はある。それを活かせばいいか？

「分かった。やらせてもらうよ」

「おお、そうか、やってくれるか。そうじゃ、副担任にはタカミチ君を付けよう」

「ぼ、僕ですか？」

「うむ。教育実習も終わり、タカミチ君も今年から正式な先生になるんじゃし、二人で助け合っつんじゃ」

そうか、タカミチももう先生になる歳か。

「よろしく頼むぞ、タカミチ」

「は、はい、ソウジさん！」

嬉しそうに笑っちゃって、まあ。俺と先生をやるのがそんなにいいことなのか？

「そう言えば、ソウジ殿の家族の二人は今年度から中学生になるんじゃないな。名前はなんじゃったかのう・・・」

「明日菜と素子か？」

「おおっ、そうじゃ、そうじゃ。そんな名前じゃった」

よく言うよ、絶対に知ってたくせに。

「その二人の行く学校はもう決まったんかいのう？」

「一応、東麻帆良中学校に登録させた」

「ふむ、そうじゃったか。麻帆良女子学園に変えるつもりはないかの？ お礼として学費を免除するぞい」

「変えない理由は特にないが、どうしてだ？」

「いやなに、ソウジ殿もそこで先生をする訳じゃし、何かと安心するじゃろう。それに、二人は魔法生徒じゃろ？ 麻帆良女子学園では魔法先生が多いからのう。もし『裏』のもめ事が起きても、あそこなら対処しやすいんじゃない。木乃香は初等部に入学させるつもりじゃし、ソウジ殿の他の子もそこに入学させると儂らとしても助かる。とりあえず、検討してくれんかのう」

説明が終わった学園長を観察してみる。

うーん、この顔は嘘を言っていないが全てを明らかにしている訳でもないか？

大方、俺たちに恩を売って麻帆良の警備にもっと真剣に取り組まそうとしていくんだろう。

はあ、やれやれ。

「それも明日菜と素子に聞かないとどうにもならないな。二人は東麻帆良中学校には思い入れもないし、反対はしないと思うが」

「ふむ、今のところはそれでええじゃろ。しかし、それほどは待てんぞ？ 新年度はもう来週に始まるんじやから」

「分かってる。明日か明後日には知らせるさ」

「そうか。では教材は後で届けさせるとして、こちらからはもう何も無いのう。ソウジ殿はどうじゃ？ 何か聞きたいことはないかのう？」

「特にないな。エヴァと鶴子は？」

「ありません」

「ない」

「ふむ、ではこの話も終了じゃ。僕は仕事を少し片付けておくから皆は先に家に行ってくれ。場所は知つとるから後で合流する。ではガトウ君、タカミチ君、彼らの案内を頼んだぞい」

「はい！」

「任せてください」

「では、また後での」

「じゃあな」

「失礼しました」

学園長の話が終わり、俺たちはそろそろと部屋を出て行った。鶴子とタカミチだけは部屋を出る際に頭を下げた。

・

・

・

< s i d e : : このえもん >

「ふう~~~~~~~~」

緊張したわい。

一応学園長としての態度を崩さんようにしとったが、生きた伝説であるソウジ殿とエヴァンジェリン殿の前であれで良かったんじゃろ
うか？

とにかく、彼らを怒らせんようにせんとな。

最近は大戦での活躍が表に出て彼らの評判はすごいが高いが、儂は彼らの恐さを知つとる。

儂の祖父は百年ほど前に魔法世界から逃げ延びた難民じゃ。百年と言う時にピンと来る人もおるじゃろう。そう、儂の祖父こそソウジ殿たちに滅ぼされた国の一つの住民じゃった。祖父は運良く彼らの怒りから逃れ、こちらの世界で新しい生活を始められた。

しかし、彼は一時も自分の味わった恐怖を忘れず、いつも儂には吸血鬼の二人に会ったらすかさず逃げよと言い聞かせとった。

今では学園長としての立場もあるし、木乃香の祖父として彼らから逃げ出す訳にはいかん。その代わりに儂が出来ることは薄氷の上を歩くかのごとくに彼らと接し、彼らの怒りを買わないようにするこ
とじゃ。

戦争の英雄だから、吸血鬼という存在である所為で他の魔法先生が彼らに手を出す危険がないのがせめての救いじゃな。

「婿殿、偉い人と戦友になったのう。これが吉となることを祈るしかないのがもどかしいのう・・・」

第七十一話：交渉？（後書き）

この小説でも正義バカの先生や生徒が存在しますが、ソウジ達が戦争の英雄ということに敵視されません。

ソウジ達がそれをどう思うかは後になってそれを直接見るとかしないと分かりませんです。

第七十二話：歓迎会の準備をする者

< side : ソウジ >

「ただいま？」

・・・で、合ってるんだよな？ 一応ここが俺たちの新しい家になるんだから。

と言う訳で、目の前には立派な日本家屋。門は大きく、整頓された庭には小さな池まである。

「これが新しいお家？」

「おつきー！」

「そか〜？ うちはこれより大きいやろ？」

「このちゃん・・・このちゃんのお家と比べたらほとんどの家が小さいよ・・・」

「せつちゃんの言う通りだよ、このちゃん！」

「ゆーちゃん？」

「うちなんかこの何倍も小さいんだから！ まったく、パパってばもう少し頑張ってもらわないと一軒家なんか夢の夢だよ。」

うん？ 一瞬、10tと書かれた重りが頭の上に落ちてきた幻が見えたぞ。

あつ、裕奈父が血を吐きながら倒れた。

娘に甲斐性なしと呼ばれたと同じだし、倒れもするわな。

「せっちゃんともーちゃんはいいいね、こんな立派な屋敷を買えるようなパパがいて」

止めを刺したー！

裕奈父の体は陸に揚げられた魚のようにピクピク跳ねていて口からなにか白いもやが出ちゃってる。

横では裕奈母が「大丈夫よ、あなた。私はアパートでも幸せだから！」と、励まし(?)を送っている。

「あはは・・・」

どう反応すればいいのか分からず、タカミチは苦笑を漏らしていた。

「どうしました、先生？ 家に入らへんの？」

「あ、ああ。悪い、すぐ入る」

裕奈父を哀れむ俺を鶴子がまるで何も起きていないかのように無情に急かす。

そして俺は鶴子に促されるままに屋敷の中に入る。

未だに倒れたままの裕奈父をそのまま残して・・・

・

・

・

ガラガラ、という音とともに引き戸を開け、玄関に上がると、そこには何組かの靴がすでにあつた。数と形からして女性が三人、男性が二人か？ うーん、誰だろ・・・やっぱり知り合いとかもう居ない筈だし。それも五人も。

ひよつとしてこれがタカミチとガトウが言っていた歓迎会の準備をしている人たちの物か？

「それではソウジさん、屋敷の案内をしましょうか？」

「いや、まずは荷物を置こう。部屋はまだ決めていないから居間でいいか？」

大人の俺たちはマスターベッドルームを使うが、子供たちはまだ決めていない。部屋数から言えば一人につき一部屋は余裕だが、二、三人で使いたいと考えているかもしれない。明日菜たちはともかく、木乃香と刹那はやりそうだな。そしてそれに巻き込まれていく真名。まあ、いつものパターンだ。

「そうですね。それならここに歓迎会の準備に来ている人たちも紹介しましょう」

「そうそう。なあ、タカミチ」

「なんですか？」

「その準備している人たちって俺たちが知っている人か？ お前ら以外にここの知り合いはいなかったと思うんだが・・・」

タカミチにさっきからの疑問をぶつけると、少し考えてからこう返事した。

「アルさん以外は多分知らないと思いますよ？ まあ、ソウジさんは色々と有名ですので、一度は会ってみたいという人はいっぱいいます。今日来ているのはそんな人たちです」

「ミーハーはちょっと遠慮したいな・・・流石に今日はちょっと疲れてるし」

「それは大丈夫ですよ、みんな僕の同僚になる人ですが、いい人ばかりです」

と、苦笑しながら答えるタカミチ。

「それなら安心・・・か？ というか、アルも来てるのか？ あいつ、いつの間にかこっちに来たんだ？」

「いやですね、ソウジ。私はずっと麻帆良にいましたよ？」

「うおっ！」

「アルさん?!」

ぬっ、と姿を現しながらいきなり背後から声をかけたのは正に話に上がっていたアルだった。そして、そのまるで悪戯に成功した子供のような顔がすごくむかつく！

「いきなり現れるな！ 寿命が十年縮んだぞ！」

「ぷぷぷ、無限から十を引いても無限でしょう？ それならいくらやっても平気ということですね」

「揚げ足を取るな！」

それにしてもアルも久しぶりに会ったけど、全然変わらないな。本当に人間か？ タカミチは少年から青年まで成長したし、ガトウは白髪が混じって更にダンディーさに磨きがかかってきたのにアルは出会った頃と何も変わらない。

「それはともかく久しぶりですね、ソウジ。最後に会ったのは何年か前の仕事でしたか？」

「その間に家族が更に増えたようですね、おめでとうございます」

刹那、鶴子、絵梨、美奈子に目を向けながら言うアル。新しい家族を祝う気持ちだけは本当みたいだから素直に受けよう。

「ありがとな」

「エヴァと姫も幸せそうで何よりです。姫の方も順調に育っているようですね・・・とても残念です」

最後だけは声を落として言ったアルだが、俺にははっきりと聞こえた。

やっぱり口 なのか?!

危険だ。すごく危険だ。下の子供達をアルに近づけさせないように気をつけないと。

ていうか、中一の明日菜が守備範囲外ってどれだけ真性なんだよ！だから出会った頃はエヴァに見向きもしなかったのか！

この話題は危ない。話題を変えないと。

ちょうど他の人たちも出て来たことだし。

「おっほん、まあ、とにかくアルが元気になってよかったぞ。それじゃあ、他の人にも挨拶しないといけないから今はこの辺で。落ち着いたらまた後で話そう」

「そうですね、楽しみにしていますよ」

「ああ。それじゃあ、タカミチ、他の人の紹介もよろしく頼む」

「分かりました。ではアルさん、また後ほど」

「待ってますよ」

そして手を振りながらアルがエヴァの方へ行った。

「さあ、ソウジさん、こっちです」

アルが離れると俺はタカミチに他の人たちが居る場所まで案内される。

連れて行かれた場所は台所。そこには三人の女性が立って料理しており、一人の男性が庭と台所を行ったり来たりしていた。

三人の女性のうち、二人は普通の格好をしていたが、もう一人は何故かシスター姿。

そして男性は眼鏡をかけた長身の黒人。うん、ガンドルフィーニです、ね、ありがとうございます。

「みなさん、お疲れ様です。忙しいところすみませんが、ソウジさん達が来ましたので一旦手を休めませんか？」

「あら、タカミチ君、戻って来たの、聞こえな・・・って、ソウジ様！？！」

タカミチに声をかけられ、皆がこちらを向く。そして俺がいるのを予想していなかったのか、全員慌て出した。特に眼鏡をかけた長いストレートの髪を持った女性の驚きようがすごい。

それから四人は料理する手を止め、タオルで手を拭きつつこっちに来た。

「ソウジさん、こちらはガンドルフィーニさん、そしてその奥さんの洋子さん」

黒人の男性と隣に立つ女性を指して言うタカミチ。

「よろしくお願ひします。ご飯の用意はもう少しで完了します。多分、学園長が来る頃には始められると思いますので少し待つてください」

「うむ、よろしく。ご飯のことも了解した」

てか、やっぱりガンドルさんなのね。こいつって頭が固い正義バカじゃなかったっけ？ 吸血鬼と仲良くしていいんかい。

「それから、こちらはシスター・シャークティ、そして葛葉刀子さん。二人とも僕と一緒に教育実習して知り合いになりました」

「よろしくお願ひします！」

「初めまして、シャークティと言います」

「ああ、よろしく。ソウジ・ホウキだ」

「二人、特に刀子さんは前からソウジさんを尊敬していたらしく、今日の役を自分から買ってでたのです」

「ほう、そうだったのか。俺たちの為に色々ありがとうな」

「いえ！ こちらこそソウジ様と会えて光栄です！」

「私も会えて嬉しいです！ 前からソウジさんやエヴァさんのことを尊敬していました！」

「そっちのガンドルフィーニさん達もありがとう。皆も今日のパー

ティーを楽しみにしている」

「いえいえ、気にしないでください。私達が望んでやらせて頂いていますので」

笑いながらそう答えるのは洋子さん。

「そうですよ、ソウジ様！　むしろここで住み込みのヘルパーをやりたくらいです！」

「ちょっと、刀子！　あなた、結婚してるでしょ？　そういえば、今日、旦那さんは？　仕事で忙しかったの？」

「別居よ、別居！　あんな二股男なんてもう知らないわよ！」

み、耳に痛い話だな。

「あっ、ソウジ様は別ですよ？　エヴァ様も鶴子様が納得済みですし、ソウジ様なら皆を幸せにできます。けど、あの男は……」

うわ、刀子の目の色が反転しちゃってるよ……よっぼどその旦那のことで怒ってるんだな。

そういえば刀子って神鳴流だったな。だから鶴子の現状に詳しくかったのか？

とにかく、今はその事に触れるのはよそう。

えっと、他に話題……そうだ！

「あー、えっと、刀子は俺のファンって話だが・・・」

「ふふふ・・・ファン？ 私をそんな安っぽい人たちと一緒にしないでください！」

刀子がそう言うのと懐から金属製のカードを取り出した。

それに書かれているのはN o . 0 という番号と刀子の名前。

おいおい、もしかしてあれってオリハルコンじゃないか？

ただの会員証に使うものじゃないぞ？

「紅き翼のメンバーには数々のファンクラブがあるけれど、その中でも最大数の会員を誇るソウジ様のファンクラブ！ このカードにあるゼロナンバーこそ、そのファンクラブの創始メンバーの証！」

「創始メンバー？」

俺のファンクラブの創始メンバーはその設立前に許可を取りに会いにきていたけど、刀子は覚えがないぞ・・・

「って、まさかあの時の子供？」

「はい！ 覚えて頂いていたのですね！ あの時はお世話になりました！」

じゃあ、あの時の会長的立場の人の娘ってわけ。

「ソウジ様のことは小さい頃から母に聞かされていました」

「母？」

「ええ。私の家は代々神鳴流の剣士で、母も私と同じく、小さい頃からソウジ様のことを聞かされていて、大戦の時、ソウジ様の活躍を聞いてそれを機にファンクラブを作ろうと考えたのです。私もその時、一緒にいて、ありがたくもゼロナンバーの会員証をもらえました。オリハルコン製に変えたのはファンクラブが大きくなってからですが、勿論オリジナルは今でも持っていますよ？ 見てみますか？」

「いや、それはいい」

刀子はなんだか鼻息を荒くさせてオリジナルを見せようとし、それがちょっと恐かったんで遠慮させてもらった。

「そうですか・・・」

どうしてそんなに残念そうな顔をする。

「けど、そうなら、久しぶりと言わないといけないな。あの時の子供がこんな美人になるなんてな」

すでに嫁が二人いる身でなにを言っているのか分からないかもしれないが、別にくだいてる訳じゃないぞ？ ただの事実をそのまま告げているだけだ。

「もう、いやですわ、ソウジ様。私はまだ結婚してる身よ」

頬を赤く染めて刀子が照れる。そして、なにが『まだ』結婚してる

身だよ？　まるで結婚してなかったら何かあったかもしれないでも言いたそうに。

「ははは・・・そうか、そりゃ残念だ。ともかく、刀子とシャーケティはタカミチの同僚ということは俺とも同僚になる訳だ。これからよろしくな？」

「ソウジ様が先生をやるのですか?!」

「夜の警備を含めて学園長に頼まれてな。ひよつとしたらいつか組むことになるかもしれん。その時は刀子の腕、見せてもらうぞ」

「はい!」

「じゃあ二人とも、また後で」

「はい、ソウジ様!」

「ええ、会えて良かったです、ソウジさん。また後で話しましょう」
二人の言葉に一度頷いた後、俺は二人と離れ、みんなのところに戻った。

そして居間でみんなと合流したとき、ちょうど玄関で扉が開く音がした。

「ひよつとして学園長が来たか？」

とすると、もうそろそろ食べる時間か。

台所のあの様子だとバーベキューだな。子供達には初めてのバーベ
キューになる子もいるし、反応をみるのが楽しみだ。

第七十二話：歓迎会の準備をする者（後書き）

裕奈父、哀れ・・・

そしてファンクラブ誕生の秘話？ 意外なところにある原作キャラクターの縁。

第七十三話・閑話の鳳姫真名のちよつと特別な一日(前書き)

要望があったので、今回は真名の話です。

第七十三話・閑話の鳳姫真名のちょっと特別な一日

< side : 真名 >

「あれ？ いるのって真名だけか？」

新しい家に住み始め、やっと慣れてきたとある日曜日。部屋のドアを開け、ベッドの上でくつろいでいた私を見た兄さんが声をかけた。

「兄さん？ このちゃん達ならちよつと前に出て行ったよ。確か、エヴァ姉さんと明日菜姉さんを連れて買い物に行くって言っていたかな？」

「ふーん、真名は行かなかったのか？」

「うん。私は特に買いたいものとかないし、いつもの訓練でちよつと疲れてたからね。今日は家に残る事にしたんだ」

それに、いくら仲が良くても、いつもせつちゃんとこのちゃんと一緒にいる訳じゃない。それよりも気になるのは???

「兄さん、このちゃんとせつちゃんに用があつた？」

「ん？ まあ、あいつらにどうか、お前たち三人に、つてのが正しいな。久しぶりに四人で出掛けてみようかと考えてたけど、エヴァに先回りされたみたいだな。しょうがない、一人で出掛けるか」

私の質問に答えると、兄さんは少し残念そうな顔を浮かべて部屋を出て行くこうとする。

「あつ、ちよつと待って、兄さん」

「どうした、真名？」

「私も一緒に行く。すぐに用意するから少し待ってて」

「疲れてるんじゃないのか？」

「気のせいだった。だから一緒に行く！」

「気のせいって……」

兄さんはちよつと呆れた顔で言う。自分でも苦しいと思うし、おかしいと思う。でも、折角のチャンス、ここで手放せない！ 兄さんと二人きりでお出かけするというチャンスを！

このちゃん、せつちゃんを入れた四人で兄さんと出掛けるのはよくあるし、家族全員で外出するのはたまにある。けど、兄さんと私の二人で何かをするのは全然ない。

「とにかく、五分で準備するから兄さんは玄関で待ってて！」

「お、おう、待ってるぞ」

一気に捲し立て、兄さんを部屋から追い出す。

そしてボタン、と扉を閉めてすぐにタンスに向かった。

シャワーを浴びる時間がないのは残念だけど、せめて服は可愛いのにしたい。

うーむ、このドレスもいいけど、最近はや暖かくなってきたからこれだと暑すぎるかも。ここはやっぱり、この前買ったこの薄手の白いブラウスとピンク色のミニスカートで行こう。これならちょっとおしゃれで可愛いし、暑くなりすぎない。

ふふ、兄さん褒めてくれるかな？

じゃあ、これに着替えて・・・

そして最後に鏡の前で身だしなみのチェック・・・

うん、よし！

寝癖もないし、服もどこも変なところがない。

鏡の前で体を回してそう確認し、部屋を出る。

そして廊下をしばらく歩くと玄関で靴を履いて待っている兄さんを見つける。

「兄さん、おまたせ」

「来たか。おつ、新しい服か？」

「うん、変かな？」

ときどきして兄さんを見上げながら聞いてみる。

「い、いや、全然そんなことない。すごく似合ってる。うん、可愛

いぞ」

「ほんとう?」

「ああ、もちろんだ」

へへ、やった。

「えへへ・・・えいつ」

兄さんに褒められて嬉しくなり、思わず腕に抱きついて顔を擦り付けた。

「珍しいな、真名が甘えるなんて」

「別にいいでしょ。私だって子供なんだから、時々甘えたくなるんだよ。せつちゃんほどじゃなくてもいいからたまにはそれを思い出してくれると嬉しいな」

「はは、真名が歳に似合わず、大人びてるから本当の年齢を忘れがちになっちゃう。これから気をつけるよ。それじゃあ行くところか?」

「うん!」

それから家の戸締まりを確認して、私は兄さんに引っ付いて家を出た。

・・・

・
・
家から出て、私達は駅で電車に乗り、数駅先にある繁華街まで行った。

さすがは週末と言うか、駅前是人でごった返している。

「さて、真名はやりたいことあるか？」

「ないよ、兄さんに任せる」

「そうか。時間は・・・ちょうど昼前か。それじゃあまずは飯を食いに行くか」

腕時計を見て兄さんが時間を調べると「ご飯を食べに行こうって言うてきた。」

「そうだね。私もちょっとお腹減ったし」

「そうと決まれば、真名はなんか食べたいものあるか？」

「うーん、特にないな」

「真名はそればっかだな」

「だって、兄さんといられればそれでいい」

言つのはちょっと恥ずかしいけど、私の正直な気持ちだ。

顔が赤くなってくるのを感じてそれを隠すために俯いた。

「嬉しい事言ってくれるじゃん。そうだな・・・それじゃあ手早くファミレスで済みますか。真名はそれでもいいか？」

「うん、いいよ」

・・・

・・・

・

「俺はこの旬の松茸御膳を頼む。デザートはモンブランチョコパフ」
「エ」

「私はお子様ランチ」

兄さん、そのにやにやした顔を止めて欲しい。

・・・しょうがないでしょ、だって美味しいんだもん、お子様ランチ。小さなデザートもついてるし、量もちょうどいい。

「では注文を繰り返しますね。旬の松茸御膳一つ、モンブランチョコパフェ一つ、そしてお子様ランチ一つですね。以上でよろしいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

「飲み物はいかがですか？」

「つと、そういえばまだ頼んでなかったな。・・・俺はアイスティーを頼む。真名はどうだ？」

「えつと、私はオレンジジュースがいい」

「はい、アイスティー一つにオレンジジュース一つですね？ かしこまりました。それでは、少々お待ちください。お飲物はすぐにお持ちいたしましょうか？」

「それはご飯と一緒にいい。けど、水を二つ頼めるか？」

「はい、お冷やを二つですね？ すぐにお持ちいたします。それではごゆっくりどうぞ」

ウェイトレスさんは注文を取り終わると忙しそうにキッチンにそれを伝えるにいく。

それから数分、彼女は水を持ってきてまた急いで他のテーブルへ向かった。今は昼の一番忙しい時間帯らしく、テーブルが全部埋まっている。彼女も客のもてなしで忙しい。

更に時間が進み、食事が運ばれてきて私達のご飯を食べた。それはやっぱりファミレスの物で、味は特別に美味しい訳じゃなかったけど、まあまあだった。

そして今、私達の前に兄さんが頼んだパフェが置かれている。

「でかい……」

「兄さん……」

兄さんは目の前に置かれている巨大なデザートに目を丸くさせている。

私も驚きを隠せない。だって、このパフェ、高さが優に三十センチがある。

「い、いや、大丈夫だぞ？ 俺は真祖の吸血鬼だからな。これくらいへっちゃらだ」

……吸血鬼は関係ないと思うよ、兄さん。

「兄さん、私も食べるのを手伝うよ」

困っている兄さんにそういうと、兄さんはほっとしたみたい。

「そうか。正直助かる。それじゃあ早速……はい」

兄さんはスプーンを取ってパフェのアイスを掬い、私に突き出す。

えっと、これはなに……？

もしかして私に食べると？

私はウエイトレスさんにスプーンをもう一つ持って来させると思っていたのに。

「どうした？ ほら、あーん、だ」

躊躇う私を兄さんが更にスプーンを突き出して急かす。

「あ、あーん・・・」

どうしよう、これかなり恥ずかしい。

でも、しょうがなかったんだ。あれ以上待たせてしまうとアイスが溶けてテーブルに垂れてしまっただろうし。うん、テーブルを汚さない為に仕方なく食べたただけだった。

「おいしいか？」

「・・・うん」

甘くて美味しかったけど、それ以上に恥ずかしかったよ！

でも、それを言って兄さんが止めてしまうのは嫌だし・・・

「そりゃ、よかった。それじゃあ、俺も・・・うん、これは美味しいな。頼んで正解だった」

私の返事に満足し、兄さんもパフェを一口食べた。

って、兄さん、それは間接キスだよ！

けど、兄さんはそんな事を気にせず、食べ続ける。

「じゃあ、真名ももう一回・・・あーん」

兄さんは何も言わない私をパフェの催促と取ったのか、また私の前にスプーンを出した。

「あーん・・・」

今度は私が間接キス！

うー・・・周りもこっちみて微笑ましそうに笑ってる・・・恥ずかしい！

・・・

・・・

・・・

天国と地獄を一気に味わったようなデザートの後（結局あのまま完食してしまった）、私達は店を出てまた駅前に来た。

「うっし、飯を食ったし、今度は遊ぶか！ まだまだ時間はあるし・・・映画でも見に行くか？ 確か新しいアクション映画が出てたっけ。真名はそれでいいか？ それともゲーセンがいいか？ 真名はシューティングゲームが得意んだろ？」

「映画でいいよ」

映画館ならこの気持ちも落ち着くと思うし。

「おっけー、了解。それじゃあ映画館に行くか」

「うん」

「今度は腕を組まないのか？」

映画館へ向けて歩き出した兄さんはふと思いついて私にそう聞く。

「今はいい」

「あれ（真昼のあーん事件）の後に腕を組んで歩くのは私にはハードルが高すぎる。大体、朝の私もおかしかった。あんな簡単に兄さんの腕を取るなんて・・・きっと兄さんと二人きりという状況に浮かれすぎてたんだと思う。自分がなにをやっていたかはよく分かっていなかったんだ。そうじゃないと説明できない！」

「はは、そうか。じゃあ、手だけは繋ごうな。はぐれたらいけないし」

「分かった」

手を繋ぐだけなら大丈夫だな。うん、きつと、大丈夫。

* * *

「ただいまー」

「ただいま」

玄関の扉を開け、挨拶しながら兄さんと一緒に家に入る。

どうやら皆も帰っていて、玄関に皆の靴が置いてある。

「兄さん、手を洗ったら部屋に戻るね」

「そうか？ 分かった。多分、夕飯はもうすぐだから、出来たら呼ぶ」

「うん、分かった。じゃあまた後で。あと、今日はありがとう。すごく楽しかった」

これは本当。恥ずかしいこともあったけど、それを含めて今日はすごく楽しんだ。映画も面白かったし、ゲーセンでは兄さんと一緒にハイスコアを叩き出した。終わった後に大きな拍手があった時なんかは兄さんと一緒に笑った。

「どういたしまして。俺も楽しかった。また今度、一緒に出掛けような」

私もできればまたいつか兄さんと出掛けたいけど、しばらくは無理かな？ 皆が揃って家を出る事なんてあんまりないし。

まあ、私は皆が一緒でも楽しいからいい。でも、やっぱりたまには二人がいいな。

そんな事を考えつつ、私は兄さんと別れ、洗面所で手を洗ったあと、部屋に戻った。

・

・

・

「ただいま」

「あー、やっと戻ったー！」

「お帰り、まーちゃん」

部屋に戻った私を迎えたのはちよつと怒ったこのちゃんと、顔には出てないけど、やっぱりちよつと拗ねてるせつちゃんだった。

「二人も帰ってたんだ」

「大分前に帰ったんよ。それよりも、まーちゃんは今までどこにいたん？今日は疲れててどこにも行きとっないって言うたってやん」

「・・・」

「えっと、皆が出て行った後、兄さんが来て遊びに誘ったんだ」

「お父様が？」

「うん。で、私は兄さんについて行った」

変なボロを出さないように、淡々と説明する。

特に一あれ（真昼のあーん事件、もうこれに確定）のことは必ず隠し通さないと！

「ソウジおじさんと出掛けたん？」

「まあね」

「二人で？」

「そうだね。他の皆はもう出掛けてたし、二人で行くしかなかった」

「それってデートやん！」

「えー?! まーちゃん、お父様とデートしてたの?! ずるい！私もデートしたい！」

「うっ・・・」

やっぱりデートかな？ 私もちよっとそう思ってたし。

せつちゃんはかなり悔しがってる。このちゃんはせつちゃんほどじゃないけど、彼女もどこか面白くなさそうな顔だ。

「で、どうやったん？ 楽しかったん？」

「うん、楽しかったよ」

「えー、やっぱり？ うー、私もデート・・・」

「せつちゃん、今度は私達もおじさんを誘ってみよ？ 私とせつちゃんとおじさんの三人でデートや！」

「うん、そうだね、このちゃん！ 三人でデートしよう！」

三人だとデートにならないんじゃないか・・・

そんな疑問も浮かんでくるけど、二人がそれでいいならそつとしておこう。そうすれば私が攻められることもないし。兄さんはちよつと大変かもしれないけど、いつもの事だよな？

「よっし、じゃあせつちゃん、今すぐに頼みに行こ？」

「うん、このちゃん！」

「ふふ〜ん、まーちゃんが一人だけデートできるなんて思わんことやね！ 今度はうちらもデートや！」

「そうか。二人ともがんばれ」

「応援ありがとな〜、まーちゃん。じゃあ、行くで、せつちゃん！」

「おー！」

えらく意気込んで出て行く二人を眺めつつ、私はデートの詳細を説明しないので済んだことを安心してベッドに寝転んだ。

そして、にやけ顔を浮かべながら、夕ご飯に呼ばれるまで今日の出来事を頭の中で再生させた。

第七十三話・閑話の鳳姫真名のちょっと特別な一日(後書き)

と言う訳で、真名ちゃんとのソウジのデート編でした。

一言だけ言わせてもらおうと・・・真名ちゃん壊れ過ぎ！

そしてこの子たち、マセ過ぎw

他にも見てみたいキャラがあれば、ネタの参考に言ってみてください。
この様に出てくるかも？

第七十四話：閑話の高畑・T・タカミチの成長確認（前書き）

遅くなつてすみませんでした。

前回の真名に続いてタカミチの話です。

第七十四話：閑話の高畑・T・タカミチの成長確認

<side:タカミチ>

「明日菜ちゃんと戦う、ですか？」

「そうじゃ。ソウジ殿によれば彼女はなかなか強いらしくてのう。バイトに夜の警備に彼女を推薦したんじゃが、彼女の実力が分からんもんじゃからタカミチ君に見てもらおうと思ったんじゃ」

「はあ、そうですか」

新学期が始まってからしばらく、経ったある日の放課後、僕は学園長室に呼ばれ、明日菜ちゃんと戦うように言われた。

なんでも、折角の魔法生徒を何もさせずに腐らすのは勿体ないとか何とか。

けど、気が進まないなあ・・・

「戦わないといけないですか？」

いくら強いとは言っても、明日菜ちゃんはまだ中学生の子供だ。僕が戦うのはなんだか大人が子供を虐めているようで嫌だな。

いや、ソウジさんが強いって言うんだ。きっと明日菜ちゃんは強くなってるんだらう。旅をしていた途中で咸卦法に目覚めたように、彼女の潜在力は計り知れない。

「すまんのう。まあ、本気を出せとは言っとらん。しかし、ガトウ

が引退して以来、タカミチ君がこの学園の一番の実力者じゃ。じゃから君に明日菜君の力を見てもらうのが一番いいと思ったんじゃない」

「未だに若輩者の僕をそれほど評価してくれるのは嬉しいですが・・・」

「やはり無理かのう・・・仕方がない。それではガンドルフィーニ君に頼むとするかのう・・・できればタカミチ君に頼みたかったんじゃないかなあ・・・」

片目を閉じ、もう一つで僕を睨む。

そんなに僕にやらせたいのだろうか？

「分かりました。その試験官の役やらせていただきます」

「おお、引き受けてくれるか！ それはよかったわい。うむうむ、では早速行くとするかのう？」

「今からですか？」

「うむ。ソウジ殿と明日菜君はすでに世界樹広場におる。あまり待たせるのは悪いと思わんか？」

もう待ってるって・・・やっぱり最初から僕に拒否権なんてなかったんだ。というか、あそこで頷いて良かった。もしも更に渋っていたら学園長が何をしたのか想像もしたくない。

「はあ・・・」

「む、どうした、タカミチ君？ 溜め息なんぞ吐いて。幸せが逃げ
てしまっぞい」

誰のせいで溜め息吐いていると思ってるんだよ・・・

仕方ない。覚悟を決めるしかないみたいだ。

恨みますよ、学園長。

その気持ちを込めて学園長を睨む。

「ん？ どうしたんじゃ、タカミチ君。早くせんか」

「はぁ・・・」

悪びれた感じも見せず、学院長が僕を急かし、僕はたまらずまた溜
息を漏らしてしまう。

・

・

・

世界樹広場に着くと、そこにはソウジさん、明日菜ちゃんに加え、
エヴァさん、素子さん、それに刀子さんなどと言った魔法先生が数
人僕たちを待っていた。

「待たせてしまったようじゃのう」

皆の前まで歩くと学園長はまず、遅れた事を謝罪した。

「まったくだ。そつちから呼び出しておいて、何事だ、じじい」

エヴァさんは待たされて怒っているみたいだ。

「それはすまないのう・・・タカミチ君が中々頷いてくれなくて少々遅れてしまったんじゃ」

な?! 学園長、僕に責任をなすり付けるおつもりか?!

僕はつい先ほど知らされたばかりなのに!

確かに少しは渋っていたが、話自体はせいぜい五分かそのくらいしか掛かっていなかったでしょう! きつと放課後になってからやっと思ひ出し、慌てて僕を呼び出したんでしよう。

明らかに自分の落ち度なのに僕の所為にするなんて!

『そんなに僕の事が嫌いならこんなのやめてやる! 試験は学園長がやればいいじゃないですか!!!』

つて、そんなことも言える筈もなく、僕は口を閉じてエヴァさんの睨みを身に受ける。ソウジさんはエヴァさんを宥めようとしているみたいで、もう怒りを言葉にしないけど、目がすごいです。正直、ソウジさんがいてくれてすごくよかったです。

「エヴァさん、遅れてすみませんでした」

「ふん、まあ、いい。どうせじじいが悪いんだろう?」

「ほっ?!」

「何でもいいから、さっさと始める。私は早く帰ってドラマを見た
いんだ」

ドラマですか・・・

「えっと、それで、僕は明日菜ちゃんと戦うように言われているの
ですが・・・」

エヴァさんの迫力に負けて何でも良かったので話題を今日の用事につ
いてに変えようとし、運良くソウジさんが乗ってくれた。

「ついでに素子もな。明日菜と素子が夜の警備に参加したいと言っ
てきてな。アルバイトになるし、訓練にもなるから俺たちは許可し
たんだが、学園長がまずは実力を見ないと駄目だと言ったんだ。と
言う訳で、タカミチにテストしてもらったことになった」

「素子さんもですか?」

素子さんは僕とソウジさんが担任しているクラスの生徒なので面識
がある。彼女は鶴子さんの妹で、詠春さんの姪に当たらしい。そ
の関係から彼女も神鳴流を使えるだろうというのは何となく分かる
けど、本当にこの前まで小学生だった二人に夜の警備をさせていい
んだろうか? いけない、それを調べる為に僕が試験をするんじゃないか。
僕が疑問を持ってどうする。それで間違った判断でもすれば困るのは
彼女達だ。そうなら本末転倒もいいところ。ちゃん

と集中して戦わないと。

「お願いします、高畑先生」

僕が考え事していたら素子さんが僕の前に出て頭を下げた。僕の反応が鈍かったからそれを躊躇いと取ったんだろう。

「大丈夫だよ、素子さん。僕は確かに素子さんとまで戦う事に少し戸惑っているけど、模擬戦についてはもう納得しているから頭を上げて」

「ありがとうございます、高畑先生」

「それでは学園長。まずは素子さんからでよろしいですか？」

素子さんの力は未知数だが、聞いた話から推測すると明日菜ちゃんの実力には劣るだろう。素子さんのことを侮っている訳ではないけど、明日菜ちゃんの後には素子さんと戦うよりはその逆が容易いと思う。

「ふむ、それでよい。では始めるといい」

「神鳴流、青山素子、参ります！！」

学園長の合図があると素子さんは彼女の得物である木刀を掲げた。ありがたいことに、今日は真剣を持ってきていない。流石にただの試験では使わないようで安心した。真剣相手でも戦いようはあるが、それでも危険は間違いで、常に命の危険が伴う。

「中々のスピードだね。流石は神鳴流の剣士というべきか？」

上段から振り下ろされた剣を避けつつ、その速度に感心する。

「兄上に修行を付けて頂いたお陰や！」

そう言いながらも、素子さんは攻撃を緩めない。

しかし、そうですか。素子さんはソウジさんに師事しているのか。それならこの力も頷けるな。

けど、まだ僕には通用しない。それを示すように、素子さんの攻撃はまだ僕を擦らず、僕は余裕を持ってそれをやっている。

「その歳でその力。同じ頃の僕よりも強いかもしれない」

「まだまだや！ うちの本気はこんなもんやない！ 斬岩剣！！」

そんな事を考えていると一段強い斬撃が僕を襲った。それは名前の通り、岩をも切る剣、神鳴流の奥義の一つ。どうやら素子さんは気の扱い方も習っているようで、地面に小さくないクレーターが出来る。

彼女の技を大きくよけ、距離をあけつつ手をポケットに入れて攻撃準備に入る。

「すばらしい技術だね。これなら攻撃力は文句無しだ。後は防御力。これからは僕も攻撃するからそのつもりで」

「いつでもええよ！ けど、そう簡単に攻撃に移れると思わん事や」

僕が今まで様子見してただけで攻撃してこなかったことを不満に思っていたのか、素子さんの剣の苛烈さが数割増す。全ての斬撃を避け続けるのが難しくなり、僕は居合い拳で応戦した。

「くっ、なんや、その攻撃は！ 魔法の射手か?!」

素子さんは僕の攻撃の正体を勘違いしているみたい。

「まだまだ行くよ!」

素子さんを更に試す為に居合い拳を何度も繰り出す。そして素子さんは耐え切れなくなり、そのうちの何発か体に当たる。

「ぐうっ?! それならこれでどや・・・斬空閃!!」

素子さんの掛け声とともに斬撃が飛んでくる。

「その技さえも使いこなすとは!」

「斬魔剣! 斬鉄閃! 雷鳴剣!」

「むっ?!」

ギアを入れ替えるかのように僕を襲う奥義のラッシュ。威力もなかなかで、僕は避けるか居合い拳で反撃するしか選択肢がない。

こういう時は自分の詠唱できない体質が恨めしい。そして同時にそんな才能溢れる素子さんのことが羨ましい。

「これで終わりや！ 飛竜昇天破！！！」

「ぐわあ！」

突然素子さんを中心に発生される竜巻に巻き込まれ、空高く突き上げられる。空中で必死に姿勢を正して何とか足から着地する。

「そこまでじゃー！」

そこで学園長から声がかかり、試合の終了を告げられる。

「ふっ、参ったよ、素子さん。剣技も素晴らしいし、気の扱い方も上手だ。これならば夜の警備を任せても大丈夫かな。そうですね、学園長？」

「そうじゃのう。彼女なら大丈夫じゃろう」

「そうですね！ ありがとうございます、高畑先生、学園長！」

僕たちから合格を言い渡され、素子さんは笑顔を浮かべて喜んだ。

「それにしても素子さんの力には驚いたよ。今まですごく頑張っていたんでしょう」

「いえ、そんなの、神鳴流剣士の一人として当然のことです！」

胸を張り、誇らしげに素子さんが言う。刀子さんも素子さんの成長に感心しているようだ。

「そうかい。ともかく、これからよろしく頼むよ」

「はい、こちらこそ、よろしくお願いします！」

「それでは次は明日菜君の試験じゃが、タカミチ君、連戦になるが大丈夫かの？」

「大丈夫です」

素子さんとの戦いは派手だったけど、何もどちらかの限界まで戦っていた訳でもないし、少し疲れているだけで戦闘に支障はない。豪殺は出していないし、気や魔力にも余裕がある。

「明日菜君もええかの？」

「うん」

明日菜ちゃんに確認を取り、彼女は頷いてから素子さんと場所を入れ替える。

「ではいつでも始めても良いぞ」

僕と対峙する明日菜ちゃんの手には素子さんと同様に木刀を持っている。随分と前からソウジさんに剣術を習っていたらしいから、きっと彼女も神鳴流を使えるんだろう。

「さて、やるかな」

「うん。タカミチは強くなった？ 咸卦法は使えるようになった？」

「はは、うん、おかげ様で使えるようになったよ。でも、まだまだ

師匠の強さには追いつけないよ」

「そう・・・なら私も遠慮しなくていいね」

明日菜ちゃんはそれからとても悪い笑顔を浮かべながら両手を光らせてそれを合わせた。

「まさか、咸卦法！」

ギャラリーの一人が明日菜ちゃんの行為のその正体を見抜き、驚きを示した。そんな僕も明日菜ちゃんが咸卦法を発動させたそのスムーズさに驚いている。気と魔力を集中し始めてから咸卦法の発動まで一秒もかからなかった。

しかし、明日菜ちゃんは僕がそれから回復するのを待つことはなく、すぐに突撃した。

「はあああつ！！！！ 雷光剣！！！！」

うおおあああ！

叫び声と一緒に巨大な雷が僕に向かって放たれ、僕は慌ててそれを避けた。

そしてそれから続いたのは正に雷が数歩先に落ちたかのような閃光轟音、そして衝撃。

目をパチパチと瞬かせて眩むような光から回復すると、数人がすっぽりと入れるような穴ができていた。

「「「「.....」」」」

いやあ、これなら掘削機もいらないなあ！

あっはっは（泣）

「ふむ、これくらいで良いじゃろう。合格じゃ、明日菜君」

「分かった」

あつ、学園長が何もなかったことにしようとしている。けど、言葉を発せられるだけ、冷静なのかもしれない。

「よかったね、明日菜！」

「うん、ありがとう。素子もおめでとう」

合格を言い渡された明日菜ちゃんを素子さんが賞賛していたが、他の人はまだ啞然としている。

けど、僕もそれが分かるなあ。何せ、中学生の子が目の前ですごい力を見せつけたのだ。おそらくは見ている自分と同等かそれ以上の強さで、それでも本気じゃないんだから、才能の差に絶望しているかもしれない。少なくとも驚愕からまだ回復していない。

僕は前に一度打ちのめされているからまだ衝撃が少ない。本気で戦えば僕はまだ辛うじて明日菜ちゃんより強いかもしれない。けど、数年後には確実に僕の方が負けちゃうだろう。それに、ナギさんのような本当の天才を間近で見たから達観に似た心境が出来上がっているかもしれない。

とにかく、皆が感じているものは僕も前に感じたものだ。どうか、
これの所為で皆が腐ることなく、これからも精進することをし続け
るのを祈っている。

自惚れた訳じゃないけど、どんなに頑張ってもナギさんのような天
才になれなくとも、僕のように充分立派な魔法使いになれるのだか
ら。

第七十四話・閑話の高畑・T・タカミチの成長確認（後書き）

素子とは何気に良い勝負したのに、明日菜とは技一発。タカミチ君が少し可愛そうに見えてしまいます。まあ、学園長に止められていたので本当に哀れなことにはならなかったのがせめてもの救いか？

第七十五話・閑話の鳳姫明日菜の討伐日記（前書き）

今回は日記形式でお送りします。

第七十五話・閑話の鳳姫明日菜の討伐日記

< 月×日 >

今日、素子と一緒に夜の警備に参加するための試験としてタカミチと戦った。

タカミチは強くなってたけど、今なら私が勝つと思う。素子もあと数年でタカミチを追い越せるだろう。

試験の時、素子は技を一通り披露できたのに、私は一つだけ出したら試合を止められた。あんまり暴れなかったので少し欲求不満だ。

どっちにしても、私達は二人とも合格したから、今度から夜の警備に参加できる。

これでいつもソウジやエヴァに頼まなくてもお金が手に入る。ソウジたちは私が頼めばお金をくれるけど、私ももう中学生。もうソウジに頼りっきりの子供じゃないんだ。自分の趣味とかに使うお金くらい自分で稼ぎたい。

< 月 日 >

今日は初めてのバイトの日だった。

少しの小競り合いがあった以外、特に何かがあった訳じゃないけど、始めてソウジか鶴子の監督なしで戦ったからちよつとどきどきした。多分素子も同じような気持ちだったと思う。

敵は誰かが召喚した低級悪魔だったけど、私達に敵う筈がない。戦

闘自体も十分もかからなかったし、私と素子は傷一つ負わなかった。これで危険手当でもあるんだから、すごい割のいいバイトだよな。というか、いつもこんなのだと訓練にならないよ。ソウジ達と練習したほうが強くなれる気がするのはいきつと気のせいじゃない。まあ、お金のためにやってるって割り切れればいいか。バイトも毎日ある訳でもないし。

< 月 日 >

今日もバイトだった。少し違ったのは素子と一緒にじゃなくて、違う魔法先生と組まれた。名前は確か・・・ガンドルフィーニさん？ 歓迎会にも来てたと思う。彼は銃とナイフを使った戦い方だったから、いつか真名の練習に付き合ってくれるのを頼むのもいいかもしれない。真名はナイフは使わないけど、参考にはなるだろう。

素子の方は刀子さんだった。彼女も歓迎会に来てたのは覚えてる。なんか、ソウジのすごいファンで、いろいろ変だったし。素子と組んだのは神鳴流の先輩だったかららしい。そういえば京都の本山で見た事があつたかも？ 私も神鳴流を使ってるけど、私はずっとソウジにしか習っていなかったから、正式には神鳴流の生徒になってないのかもしれない。別にそれでも気にしてないからいいけど、素子が何を聞いたのかちょっと気になる。

・・・あの後、素子に話を聞いたけど、何故かげっそりした顔で何も話そうとしなかった。怪我はなかったから、敵が強かった訳じゃないと思うけど、数が多かったのかな？ 素子はすごく疲れてて、家に帰ったらすぐに寝ちゃった。一体何があつたんだろう？

< 月 日 >

今日は始めてバイト料をもらった。バイト代は日払いじゃなくて、何週か置きに払われるから結構溜まっていた。

封筒の中にはこんなにもらってよかったのか、と聞きたくなるくらいお金があった。素子も私の横で目を丸くしてたからきっと私が変という訳でもないと思う。

アイスに換算したら何百個くらいになるんだろう？

とにかく、やっぱり自分で働いて稼いだお金を手に持つと特別に感じる。なんか普通のお金より重く感じるんだけど、私だけだろうか？

給料をもらった後はソウジの提案に従って素子と一緒に買い物に出掛けた。ソウジは記念に何か買ってきたらどうだって言って、私も素子もこの想いを形に残したくて言う通りにした。

とりあえず、デパートまで行って素子とお揃いのリボンを買った。素子も髪が長いから時々リボンを使うし、私も前のリボンがちょっと古くなってるからちょうどよかった。けど、それだけでお金がなくなったら訳じゃないので、帰りに皆にケーキを買った。夕食の間にずっとそわそわしていた妹達を見るのは楽しかった。特に絵梨と美奈子は落ち着きがなく、いよいよデザートの時になったらすごい笑顔でケーキにかじり付いて嬉しく感じた。これからはバイト代が入った日は何か買って帰ろうかな？

< 月 日 >

何だか良く知らないけど、今日は大停電の日という物らしく、結界が弱まっていつも以上に麻帆良に侵入しようとする敵が多かった。

そのため、夜の警備員は全員招集されて見回りをしていた。普段は見ない人もいてちよつと面白かった。あと、いつもはペアでパトロールするのに、今日は五人くらいで回っていた。始める前は必要なかったと思っていたけど、いざ始めるとすぐに思い直した。

だって、本当に敵が多かったんだもん。停電が始まった20時から電気が復旧した0時の四時間、敵が絶え間なく襲ってきたんだ。流石の私もその間ずっと休みなく戦い続けるのは嫌だった。五人なら互いをカバーし合えるし、一人ずつ休憩を取る事もできる。正直助かったよ。私だけでもきつと敵を百人以上倒したと思う。普段はバイトの間に三人か四人と戦っても多い方なのに・・・
これですごいボーナスとか出ないと納得いかないぞ！

第七十五話・閑話の鳳姫明日菜の討伐日記（後書き）

日記形式で書くのは大変ですね・・・

一日につきネタを一つ考えないといけないし、会話がないので字数を稼ぐのが難しい。

次回からは本編の続きを書くとします。

第七十六話：不幸の前触れ（前書き）

前話から数年飛びます。

第七十六話：不幸の前触れ

<side：素子>

「おかしいな……」

「どうしたの、素子？」

麻帆良に引越してきてから数年が経ち、私は高校生になっている。

ちなみに中学の間はずっと兄上担当のクラスだったが高校は違う。まあ、それは普通だがな。それからこっちにいる内にいつの間にか関西弁も使わなくなっていた。周りの生徒や姉上以外の家族がみんな標準語で喋っていたから影響されたか？ 慌てた時とか切羽詰まった時には関西弁になるから完璧じゃないけど。

けど、今はそんなことより目の前の問題だ。

「明日菜？」

私が手の中にある携帯電話を見ていると部屋に入ってきた明日菜が私を不思議な顔でどうしたのと聞いてきた。

「どうしたのよ、素子？ ちょっと恐い顔してたわよ？」

「うん……さつきが電話に出ないんだ」

以前は一ヶ月に何度か手紙でやり取りしていたが、携帯電話を買ってから週に二、三回さつきと会話している。明日菜もそれくらいの頻度で話しているらしい。

「さつきが？ 変ね・・・私はこの間話したばかりよ。充電し忘れたとかじゃないの？」

「それだとすぐに留守電に変わるだろう？ 私が電話した時は何回もコールが鳴った後に留守電に変わるんだ。ということは向こうではちゃんと鳴っているだろう？」

「そうね・・・ちょっと待って、私も電話してみる」

明日菜がそういうとポケットから携帯電話を取り出して操作しはじめた。そして登録してあるさつきの番号を見つけたら通話のボタンを押して電話を耳に持って行った。

「・・・・・・・・・・」

そのまま私達は一分以上待ち続け、やがて明日菜はしかめっ面になって電話を下ろした。

「どうだった？」

「留守電だった・・・」

静寂が私達の間を訪れた。

それを最初に破ったのは私だった。

「明日菜はどう思う？」

「まだ何とも言えないわ。さつきが電話に出ないのは確かに変だけ

ど・・・」

「やっぱり変だろう?」

「けど、ちょっと出掛けた時に携帯を忘れただけかもしれないじゃない? 素子、さつきの家に電話にしてみた? それならさつきが出掛けていても家族が出るんじゃない?」

「家・・・」

そういえばさつきの家に直接電話するのは考えつかなかった。それも考えつかないほどさつきと連絡がつかないことに動揺していたんだろうか? 私も不思議だ。ちょっと電話に出ないくらいだけでこんな風に取り乱すのはらしくないと思う。けれど、何故か胸騒ぎがする。さつきに何かよくないことが起きたんだと。

「そうだな、ちょっと電話してみる・・・」

また私の携帯を出して今度はさつきの家の番号を見つけて電話をかける。

トゥルルルル・・・

向こうの電話と繋がり、コール音が鳴る。

『もしもし、さつき!? あなたなの?!』

「え・・・?」

向こうの誰かが電話に出るといきなり叫ぶような声が私を迎えた。

「あ、あの、おばさん？」

『えっ……その声は素子ちゃん？』

「はい、そうです、素子です」

『そう……久しぶりね、元気にしてたかしら？』

「はい。近くに明日菜もいます」

『そう、明日菜ちゃんも……』

気のせいか、おばさんの声色が少し暗い？ それに何だかさつきの話題を避けている気がする。やっぱり何かあったんだろうか？

「おばさん、さつきに何かあったのですか？」

『っ？！』

聞くのも躊躇われるが、私から言わないとおばさんはきっと何も言わずに電話を切ってしまう。

「おばさん、言ってください。私も明日菜もさつきのことを親友だと思っています。彼女に何かあったのなら知りたいです！」

『素子ちゃん……そうね、あなたには伝えないと。それにあなたは何か知っているかもしれないわね』

「おばさん？」

『昨日からさつきが帰って来ないのよ』

「さつきが帰って来ない?!」

「えっ、素子?! さつきが何だっけ?!」

「ちょっと待って、明日菜。今おばさんに話を聞いてるから・・・
おばさん、もっと詳しく話してくださいますか?」

詰め寄る明日菜をなだめ、おばさんに続きを頼む。

『今のところ分かっているのは昨日、学校が終わったならさつきが無事校舎から出たことだけなの。けど、いつもなら晩ご飯までにさつきは帰ってくるのに昨日は帰って来なかった』

「警察には行ったのですか?」

『行ったけど、警察は取り合ってくれなかった。数日いなくなっただけからじゃないと行方不明扱いに出来ないって言うていたわ。連絡もなしに外泊するなんてあの子らしくないのに! それに、今日は学校にも行っていないと連絡が来たわ!』

そういえば聞いた事ある。確かに誰かが家出する度に警察が捜索していたらきりがないのかもしれない。けど、さつきは違う。おばさんの言う通り、さつきは何もなしにいきなり消えることはあまりにも不自然だ。やっぱり心配だ。

「あの、さつきの携帯は?」

『あの子、忘れてしまったのよ・・・そっかしいのはあの子らしいわ、ふふ。きつと充電したまま持って行くのを忘れたのよ』

「おばさん・・・」

『こんなことを言っでごめんなさいね。あの子のことだからきつとひよっこりと帰ってくるに違いないわ。そしたらまたあの子と電話してあげて。あの子、あなた達のことをずっと大切な友達だと思っ
ていたから』

「もちろんです」

『ありがとうね。それじゃあ、さつきから何か聞いたらこっちにも
報せてくれるかしら?』

「はい。あの、そちらも何か分ければ電話してください!」

『ええ、分かったわ』

それからおばさんは電話を切り、ツーツーと電話の音が響いていた。

「素子! おばさん、さつきがどうしたって?!」

「昨日から帰っていないみたい」

「そんな! 警察は?!」

「門前払いらしい。数日いなくなっていないと行方不明扱いにならないとか」

「なんて役立たずな!!!」

明日菜は警察が何もしないことに苛ついてしまっている。それは私もだ。こっとなったら??

「明日菜・・・」

「なに、素子!」

「三咲町に行くぞ!」

警察が何もしないのなら私達がやるしかない!

「・・・そうね、もうそれしかないわね」

明日菜も私と同じ考えのようだ。

「それならば兄上達にしばらくここを離れることを言わないとな」

「ええ。行く前にソウジ達に何か言わないと心配してしまうかもしれない」

「なら早速」

「ええ」

そう決めたが早く、私達は連れ立ってソウジ達がいる居間へと向かった。

・

・

・

「ソウジ」

「兄上」

居間に着いたら私と明日菜は早速ソファーに座ってテレビを見ている兄上達に声をかけた。時間は少し遅いので子供達の方はもう寝たようだ。

少しすると私達の声に反応した兄上はこちらに顔を向けた。

「どうした、二人とも？」

「しばらくの間さっきのところに行きます」

「いきなりどうしたんだ？」

私が突然こんなことを言い出したことを変に思っているらしい。

「さつきが昨日から行方不明みたいなんだ」

「さつきって言うと、お前達の小学校の友人だったか？」

「はい。今、彼女のお母さんと電話して聞きました」

「それで行方不明と・・・」

「はい」

「そしてお前と明日菜はその友人を探しに行きたいのか？」

少し説明したら兄上は事態を飲み込み、私達の望みを理解した。

「そうです」

「そうよ、ソウジ」

「分かった」

「「え？」」

「うん、どうしたんだ？」

「そんなに簡単でいいの？」

兄上が即答したことに明日菜と私は目が点となり、明日菜が呆れたように兄上に質問で答えた。

「二人とももう決めたんだらう？ 学校のことには気にしなくてもいいぞ。休学届けはこっちで出す」

確かにもう行くことは決めただけ、兄上がこんなにも簡単に許してしまうとなんだか拍子抜けする。

「はあ、ありがとうございます・・・」

「今から行くのか？」

「そのつもりです」

「うん。今出れば終電までに向こうに着けると思っし、ホテルも見つける時間もある」

兄上に明日菜が私達の予定を説明する。

「そうか。彼女が見つかるの良いな。俺も少し覚えているが、すごいいい子だった」

「ありがとうございます、兄上。それでは私は少し着替えとか集めます」

「私も！」

「ああ、出て行く前にもう一度こっちに来てくれ。しばらくは困らないようにちょっとお金を渡す」

「はい」

バイトで稼いだお金があるけど、兄上がお金をくれるなら安心する。

あとは向こうに着いてから行動を決めるけど、とりあえずは少しさっきのことを探したい。

さっきに何もなければいいが・・・

第七十六話：不幸の前触れ（後書き）

と言う訳で友達のさつきちゃんを探しに行くことになった素子と明日菜。

そして麻帆良編とか言いながらいきなり数話もしない内に離れていくことになってしまいました。

これから三咲町に行くことになった二人ですが、月姫の原作には基本関わらないように事を進めるつもりです。さつきを探す過程で顔見せくらいはあるかもしれませんが、月姫のキャラと共闘し、ラスボスを倒すとかはないです。

第七十七話・三咲町に到着（前書き）

短くても継続は力！ と言う事にしておいてください。

第七十七話：三咲町に到着

<side：素子>

「このホテルでいいんじゃない？」

三咲町の駅に近いホテルを見つけ、明日菜がそこを推す。

そこは結構大きいホテルで、ちょっと高級そうなところだ。

「明日菜、本気？」

「何が？」

なにか問題でも？ とでも聞くような顔をする明日菜。

「いや、いかにも一拍何万円もします！ って感じな場所じゃないか」

私は普通のビジネスホテルに泊まると考えていた。いくら兄上にお金をもらったとしても、これは無理だろう。

「そう？ でも、ソウジ達と旅をしていた時はいつもこれくらい当たり前だったわよ？」

そうだったのか・・・

明日菜って以外とお嬢様だったんだな。いや、うちも家柄はいいし、数少ない家族旅行の時は老舗の旅館に泊まるのはよくあった。でも、成人もしていない二人でこんなところに泊まるのは何故か躊躇われ

る。

「でも、ソウジにもらったお金があるから大丈夫だわ」

「は？ いくらもらったんだ？」

そういえば、兄上にお金をいくらもらったか知らなかった。その時はちょうど姉上達と挨拶しててそこにいなかったし、明日菜のことを信用しているから気にしていなかった。

「お金？ これだけ」

明日菜はそういうと何でもなさそうに懐から札束を取り出した。そう、札『束』だ。

「はあ？ なんだ、それは？」

兄上、お金を『少し』くれるのではなかったのですか！ 明らかに百万単位ですよ！

「お金」

「いや、お金って！ 確かにそうだけど！」

何かが違う！

「どうしたの、素子？ あんた、ちょっと変よ？」

これってうちが悪いんか？！

なんかすごく納得いかへん！

「はあ・・・まあ、それほどあればこのホテルでも問題ないだろう・
」

「？」

「じゃあ、行くぞ」

「？ うん」

兄上は理不尽な存在の割に常識を持っていたと思っていたけど、間違っていたのか？

とりあえずホテルのチェックインを済ませて少し街に出よう。本格的な搜索は明日からやるとして、今日は街の地理を知るがてらさつきのこと少し探そう。

「承知いたしました。しかし失礼ですが、お支払いはどのように？」
高校生二人で来てちゃんと払えるか疑問だろうか？ 受付の人が確認を取って来た。

「はい、えっと、現金でお願いします。明日菜、お金を出して」

「え？ うん、分かった。はい」

明日菜は何かに気を取られていたようだが、私が話しかけるとすぐにこっちに向いた。

そしてやっぱり出される札束・・・

はあ、受付の人も目を丸くしている。

けど、そこはやっぱりプロの人。すぐに顔を戻し、営業スマイルを浮かべてチェックインの続きをやる。

「それでは二名様で五日間のご宿泊。お部屋は1412号室になります。こちらが鍵です。お部屋まではあちらのエレベーターをお使ください」

「ありがとうございます」

受付の人から部屋の鍵を受けるとフロントから離れ、明日菜と合流した。

「チェックイン終わったの？」

「終わった。部屋は1412号室」

「そう。じゃあ、行きましょう」

そういうと明日菜はさっさとエレベーターの方へと歩き始め、私も彼女について行く。

エレベーターに入ると、私は明日菜に先ほどのことを聞いた。

「そういえば、明日菜はロビーでは何か気になっていたのか？ どこか上の空のようだったが」

「ちょっとね・・・客の一人が気になったのよ」

「客？　どんなだ？」

「んと、金髪で赤目の外人さん」

「ふーん、赤目というのは珍しいかもしれないが、それほど気になるものだったのか？」

金髪だけならエヴァさんや麻帆良にいる色んな人で慣れているだろうし。第一、赤毛でオッドアイの明日菜も充分珍しいだろう。さっきから明日菜は注目を浴びていることに気がついているのだろうか？

「それだけじゃないのよね・・・どうも、あの人から『血』の匂いがしたのよ」

「・・・それは物騒だな」

「うん、それに、なんだかソウジと似た感じがして気になったのよ」

「兄上と・・・？」

それにはどんな意味があるのだろうか・・・？

しかし、血の匂いを纏う兄上に似た雰囲気の人か・・・もしかしてこの街で厄介なことが起きているのだろうか？

どちらにしても、一般人のさつきとは関係ないだろうが、気をつけるには越した事ないな。

・

・

・

鍵を使って1412号室の扉を開ける。

小ぎれいな部屋の中にはダブルベッドが二つあり、他にはテーブルや椅子、テレビに？笥も置いてある。そしてバスルームの中にはシャワーとトイレ。普通のホテル部屋にある物は一通り揃っている。さすがにスイートルームほど広くはないが、どうせここには寝るためくらいにしか戻らないので問題ない。

部屋に入り、とりあえず荷物を置いてテレビを地方ニュースにつけ

ると明日菜に話しかけた。明日菜と話している間にこの街の情報を得られればと思つてのことだ。

「明日菜、早速街に出てみるか？」

「そうね。少しこの街に慣れてみたいし、どんな場所なのか知つておきたいわ」

「私もそう考えていた。明日はさつきの家で話を聞いてから本格的に捜索に入るでいいか？」

「うん。さつきの家族からさつきが行きそうな場所とか分かれば捜索に役立つと思つし、それでいいわ」

「では行くか」

話は短く切り上げられ、そのすぐ後にテレビも消した。

結局ニュースからはあんまり情報は入らなかった。ちょうど食べ物を紹介するコーナーらしく、カレーの美味しい店のことをやっていたのでここにいる間に行くのもいいかもしれない。けど、さつきと関係ありそうなものはなかった。

それはそれで、さつきがまだ無事な可能性があつていいが。

その後は荷物から武器（夜のバイトでも使っている兄上にもらつた霊刀、明日菜は普通の刀）を取り出し、軽くその状態をチェックしてから私達はホテルを出た。

しかし、何なのだろう、この街の雰囲気。町並みはそれほど古くな

いのに、まるで京都のような呪術的な感じがする。

第七十七話：三咲町に到着（後書き）

三咲町に着いた素子と明日菜。

素子はひなこ霊刀まじなを使用しているのに明日菜は違うのか？ と気になる方へ。

明日菜は普通の刀でも充分強いですし、それで足りないならいつでもアーティファクト（光の剣）が使えるので本人はそれほど問題に思っていないです。

第七十八話：ちょっとお昼を食べたかっただけなのに（前書き）

今回は明日菜視点でお送りします。

第七十八話：ちょっとお昼を食べたかっただけなのに

< side : 明日菜 >

さつきが行方不明となったと聞き家を飛び出し、三咲町に着いてから明けての朝。

私と素子は起きると手早く朝食を済ませ、そのすぐ後にさつきの家に向かった。

けど、結局そこで聞いた話はあんまり役に立たなかった。さつきの家族も何も分かっていないのか、私達に来てくれたことを感謝してさつきが行きそうな場所を2、3教えてもらったら話が終わった。

話が終わったなら私と素子はまずさつきが時々遊びに行くらしい、駅前の繁華街に向かった。三咲町の繁華街はさすがに麻帆良や京都のような大都市にあるやつよりは小規模だけど、それでも結構賑わっていた。麻帆良は学園都市だからちよつと違うけど、人工の多さという点では似たようなものだ。

さて、駅前まで来たのはいいけどどこから探せばいいんだろう。さつきの親が言っていたのは定番のカラオケ、ゲームセンター、それに喫茶店など。そんなことを考えていたら素子が話しかけてきた。

「明日菜、時間もいいし、まずはお昼にしないか？」

「お昼？」

素子に時間のことを言われて腕時計を見てみれば十一時半だった。お昼には少し早い気もするけど、早すぎるという訳でもない。

「そうね・・・」

「どうしたんだ？　もしかしてまだお腹が減っていない？」

「そんなことはないけど」

実際、朝食を食べたのは六時半くらいだったからお腹の減り具合が問題じゃない。そんなことより、早くさつきのことを探しに行きたい。

「明日菜、焦る気持ちも分かるけど、腹が減っては戦はできぬ、とも言っただろう？　それに今食べれば晩ご飯まで休まずに探せるだろう？」

「あー、うん、確かにそうかもしれないわね。それに一旦探し始めたら知らずに晩ご飯の時間になっていても不思議じゃないわ」

私と素子ならそれが起きることが簡単に想像できる。

「それじゃあ、どこに行く？　適当にその辺のファストフード店で済ませる？」

私はずっとソウジ達に付き合っって高級な料理を食べてきて舌が肥えているけど、ジャンクフードを楽しむ舌もあるから素早く食べられる近くのチェーンのハンバーガー屋を提案した。

ちなみに店はWがロゴのワクドナルド。

「それもいいが、今日はカレーをにしないか？」

「カレー？」

なんでいきなりカレー？

私もカレーは嫌いじゃないからそれでもいいんだけど、なんで？

「昨日の夜、ホテルの部屋に着いたすぐ後にテレビを点けただろう？ さつきの情報があればと点けたんだが、その時にやっていたのが近場のカレー屋の特集だったんだ。少しだけ見て美味しそうだったから行ってみようかと考えていた」

「ふーん」

そう言えばそんな番組をやっていたのかも？

「まあ、それでいいわよ。それで、そのカレー屋の場所、分かっているの？ そこを探すのにあんまり時間とかかかたくないわよ」

「住所は分かっているが、さすがに行った事はないから探すのに少しかかるかもしれない。けど、地図もあるし、大丈夫だと思う。それに、最悪の場合はコンビニかなにかでおにぎりとか買えばいいし」

場所を知っているとは思っていなかったけど、案の定か。

「うーん・・・」

「やっぱり嫌か？」

「そうね・・・」

「聞かせてもらったわ！」

私が悩んでいると、突然横から私達の間割り入る大声がしてきた。

「えっ？」

「は？」

声が出た方向を見てみると鼻息を荒くした私達と同じくらいの年齢の女の人がいた。彼女は多分こっちの高校の制服である黄色いベストと青のスカートを来ていて、眼鏡をかけた青い髪の人だった。

「えっと、私達に何か用ですか？」

戸惑っている素子が女性に聞く。

「あなた達、カレーを食べに行きたいのよね！」

「え？ は、はあ・・・昨日、テレビで紹介されていた場所に行こうかと考えていました」

「そうだったの！ 私もあれを見ていたのですけど、あの店のカレーは本当に美味しいわ！ きつとこの町、いえ、この町の周辺も含めて一番のカレー屋だわ！ ひよっとすると日本一かもしれないわ！ 一生に千度は行かないと損よ！」

「一千回も行かないと駄目なの？！」

「あそこのカレーのまろやかさっ！ 舌の上でとろけるようなビー

フ！ 更に人参やじゃがいもといった一般的なカレーに入っている野菜だけに捕われない斬新さ！ それらが織りなすモーツアルトも裸足で逃げ出すほどのハーモニー！ どれをとっても素晴らしいわ！」

ガッツポーズをとって興奮しながらいかにそのカレーが美味しいかを説明する彼女。

「そ、そうですね。それは美味しそうですね・・・（汗）」

多分素子が受け答えをしていたから、もっぱら彼女が女からの集中口撃の標的になっている。

正直に言っただけ助かったわ。私じゃ、とてもあのテンションには付き合えない。

「ええ、本当に美味しいのです！ 正に至高の一品！ さあ！ あなたもそれが分かったのなら早速行きましょう！」

「は？ え、ええ?!」

説明が終わると、今度彼女は素子の腕を取りいきなり歩き始めた。そして素子は訳も分からない内に連れて行かれ、私は慌てて二人を追った。

カレー屋まで案内してくれるのはありがたいけど、これはやっぱり向こうに着いても一緒に食べることになるの？ なんかつるさそうで嫌だな・・・

・

・

・

「「ごちそうさま」」

その後、私達はシエル（食べている間に名前を覚えてもらった）の案内でカレー屋に着き、三人で食べた。

そのカレーを一言で表すと、美味かった。

シエルが絶賛していたことだけはある。

「あら、あなた達はもう終わり？」

私と素子を見て不思議そうにシエルが聞く。

「え、ええ、まあ」

私と素子の前には空のカレー皿が一つずつ。当然だけど、二人とも一人前を注文し、それを食べた。けど、異常なのがシエルだ。

彼女の前には優に五人前分の皿が積み上げられてあり、彼女の前にも食べかけの六人前目の皿がある。そして彼女はまだ食べ続けるつもりらしい。

「そう・・・あなた達、小食なのね。こんなに美味しいのに」

絶対にそんなことはない。私達は普通だ。そしてなんで私達の方が変な人のように見られないといけない。

私と素子はこれからさつきのことを探し始めないといけないから勘定を払って店を出る事に決めた。

「それではシエルさん、私達はこれからすることがありますので失礼します」

「少し残念ね。またカレーを食べたくなったらいつでも連絡して。この近くにはまだまだ隠れた名店があるから、カレー信者の同士として紹介するわ」

同士って・・・私もカレーは好きだけど、信者ってほどじゃないし、そんな風に見られるのってなんかやだ。

はあ、携帯の電話番号もいきおいに負けていつの間にか教えてたし。シエルのことは嫌いじゃないけどあの、この身の流れている血がカレーだったらどんなに幸せだろう、とでもいいそんな熱意は精神的に疲れる。

「そ、そうですね、あはは。その時はよろしくお願いします」

ちよ、ちよっと、素子、そんなこと言ったら！

「ええ！ 約束よ！」

ああ、遅かった。

シエルの嬉しそうな顔を見ると、絶対に電話してることが分かる。

「でも、私達はあんまり長くこの町にはいないと思うから、行く機会がないかも」

言質を取られそうな素子を助けようとしてそう言う。

そして素子もそれに乗りかかるように話し続ける。

「そうだな、明日菜！ すみません、シエルさん。明日菜の言う通り、私達はそれほど長くこの町に滞在する予定ではないので、また行けるかは分かりません」

「それなら仕方ないわね」

ほっ……

「少ない時間を有効的に使う為にも毎日違う店に行かないと！」

うわ、藪蛇だった。

「そうよね、素子さん！ 明日菜さん！」

「ははは、そうですね、シエルさん……はあ」

「そうね」

シエルに答えながら少し恨めしそうに素子を睨んだ。

「ではまた後で電話するわね」

「はい」

「また後でね、シエル」

短い挨拶が終わり、私と素子はまだ食べ続けるシエルを残して店を出た。

・
・
・

・

・

「ちょっと変わってたけど、いい人だったわね」

「そうだな」

「けど、素子の愛想の良さはちょっと考えものかもしれないわね」

「それは悪かったよ。でも、どうしてもシエルさんを断ることが出来なかったんだ」

「分かってるわよ、そんなの。はぁ・・・明日はどんなところに連れて行かれるんだろうね」

願わくはそこにはカレー以外の食べ物もある店であるように。

「そうだな」

しかし、この時、私と素子はシエルとの再開が予想よりもずっと早くなるとは考えてもいなかった。

第七十八話：ちょっとお昼を食べたかっただけなのに（後書き）

と言う訳でカレーの人登場の回でした。

さつきはまだ見つかりません。

月姫をやったのはもう何年も前の所為か、出来事の詳細や時間軸に差異があるかもしれません。そんな時は生温い目で見逃してくれるようお願いします。

第七十九話…やっぱりロンペニのおまじりは捨てたまんじやない (前書き)

前回はカレー。今回は…

第七十九話：やっぱりコンビニのおにぎりは捨てたもんじゃない

< side : 明日菜 >

「結局、何も手掛かりはなし・・・か」

カレー屋でシエルと別れた後、私と素子は手筈通り、さつきの搜索を始めた。

それから何時間も町を廻り、さつきが行きそうな場所で聞き込みをしたけど、ここ数日の間にさつきが姿を見せた様子はなかった。

今では日も沈み、町の街灯も光り始めている。

夕食はコンビニに行っておにぎりサンドイッチを買って近くの公園で今食べている。

買ったのは梅、おかか、ツナマヨ、明太子を各二つずつ、それとカツサンド、ハムサンド、ミックスフルーツサンド。

女子高生二人の夕食には少し多い気もするけど、ずっと動き続けていたし、これから何時間も搜索を続けるならカロリーをたくさん摂取するのは悪い事じゃない。

ミックスフルーツサンドはちょっとしたデザート用だ。あの生クリームとフルーツ、それに食パンの組み合わせが作るのは手に持つケーキの様で、密かに私の好物の一つになっているのだ。

今はそれらを公園のベンチに座って食べながら今日の成果について話している。

「ふう……」

パクついていたカツサンドを下げ、素子は一息ついた。

「まったく、さつきはどこをほつつき歩いているんだ」

素子は怒ったように悪態をつくけど、彼女の心配は隠せていない。

「ほんと、そうよね。さつきが行きそうなところは全部行ったけど、どこもさつきのことは最近見てないって言うし」

「これからはしらみつぶしに探すしかないか。覚悟していたとはいえ、なかなか応えるな……」

私も初日にいきなりさつきを見つけられるとは思っていなかったけど、こうやって何も手掛かり無しだと気分が落ちる。

「そう言うけど、素子。どうやって探すの？ あと私達にできるのはただ宛もなく町中を歩き回るくらいよ？」

「ならばそうするしかないだろう。私はさつきを見つけたら彼女に何があったのかを知るまでここを離れないぞ」

「私だってそうよ。ただ、ちゃんと言っておかないと思って思ったのよ」

「そうか。そうだな。私も今言葉にして覚悟を決め直したし、悪くない発言だった」

何日かかっても必ずさつきを見つける！

例え、この町の端から端まで探すはめになるうとも！

「けど、そうなるとこれからは根気を持って搜索に当たらないといけないわね」

ちゃんとしたペースを守らないと途中で脱落してしまうかもしれない。

「ああ、とりあえずは徹夜で搜索するのは論外になってしまったな」

確かにね。最初は徹夜を連続で2、3はいとわないとか考えてたし、それでさつきが見つつかれば今でも喜んでやる。でも、これから何日も探し続けるんならそれも現実的じゃない。

次のおにぎりに手を出しながらそんなことを考える。

「うん・・・今夜はとりあえずこの公園の周辺をさが??!??」

「なんだ、この気配は!?!」

話している途中にすぐそばからいきなりとてつもない気配が現れた。

そしてそれに続くようにその近くにまたとんでもない気配が現れる。

どちらも今の私達では敵わない存在だ。

幸い、その二つの存在は互いに用があるみたいで、私達にはまだ気づいていないらしい。

「明日菜、かなりヤバそうだ。できるだけ早くここから離れるぞ」

「うん、私もそれには賛成。巻き込まれるだけでもどんなことになるか分からないわ」

どっちにもちよっと本気を出したソウジに匹敵する存在感がある。

それだけでも彼らの危険度が分かるというもの。そして敵か味方が分からない以上、速やかにここから離れるべきだ。

「ほう・・・人間にしては冷静な判断だ。力もただの人間以上のようだ。魔術師か？」

「なっ?!」

「誰?!」

素子と一緒に公園から出ようと立ち上がった時、暗闇の中から声が響いてきた。それから少しして一人の男が声のした方向から姿を現した。

彼はトレンチコートを着ていて、下半身は暗くて分からないけど上半身はコートの下は裸みたいだ。

(変態?!?)

しかし、いくら姿が変態的でも、その力は本物。

彼から感じる力の質は少し離れている二人の内の一人名とは同じだか

ら、目の前のこいつはおそらく分身かそれに似たもの。力も幾分か低いから、こつちが本体という訳じゃないだろう。それでも私達にとっては充分脅威だけど。

「ふむ、気づかれたからには仕方がない。死んでもらおう。姫とのゲームを邪魔されてはたまらん」

「くっ!!」

「何だ、これは!」

変態男は私達を一瞥したら何かに気を取られながら攻撃を仕掛けた。変態男はどうやら召喚術を使うらしく、彼が腕を振ると影から色々な獣が出現した。

そこには魔力（おそらく）で出来た犬、狼、鷲、豹、ライオン、熊、果てはサメのような水生動物までが。それらが全部私と素子に襲いかかった。

「ちっ! 斬魔剣!!!」

「斬魔剣!」

放たれた剣技で獣が何匹か消滅する。

召喚された獣に実体が伴っていないんなら斬魔剣が一番効果ある技だ。私なら殴っただけで送り返せるかもしれないけど、確実にない以上、ここは安全に行くべきだ。

「むっ! やはりただの人間ではなかったか。退魔の技か?」

「・・・・・・・・」

「教会の手の者ではないな。技が東洋の感じがする」

「貴様には関係ないが京都神鳴流だ」

「神鳴流。その技には興味がある。今度のゲームが終わった後、取り込んでみるのもいいかもしれん」

「取り込む？ 何だそれは？」

「説明するのも億劫だ。これから死ぬお前達が気にするような事柄ではない。本来ならここでお前達を取り込んだが、そろそろ姫とのゲームが激しくなってきたからそんな暇もない。さっさと終わらせるぞ」

変態男がそう言うと、今度は何十匹の獣を呼び出した。

これは戦うのが少し辛いかもしれない。

「ちっ、行くぞ、明日菜！」

「それしかないようね！」

獣が襲いかかろうとすると私と素子は剣を構えて迎え撃つ準備をする。

「行け」

腕を振って変態男がまた獣に襲わせる合図を送る。

「はああああ!!!!」

「やあああ!!」

・

・

・

「はあ、はあ」

「まったく、次から次へと!」

獣を倒した側から湧いて出てくる!

奴の魔力は無限なの?!

戦い始めてから何分経った?

十分?

二十分?

一時間?

もう時間の感覚がなくなってきた。

獣は絶え間なく召喚され続けているし、何だか段々強くなっている気がする。

さつきも獣の中に鬼らしき姿も見たし、今はグリフオンのような幻想種と戦っている。

このままだとちょっとまずいんじゃないか？

私はとつくにアーティファクトを出しているし、素子の方は息が上がっている。

アーティファクトである光の剣を出した時、始めこそは驚かれたが、その動揺もすぐに引いた。今では疲れ出している素子をカバーするので精一杯だ。

「ふん、幻想種まで出してまだ粘るか。いいだろう。貴様達を私の敵として認めよう。向こうでは変な小僧がゲームの邪魔をしてきたし、こっちの敵が予想以上に強い。何もかも予定通りに進まん・・・それでは本気で行くとし??ぐっ、おおおおおおおお・・・」

変態男の本気宣言を聞いて身構えたが、その途中で変態男が急に苦しみ出し、闇に溶けて消え去った。

「・・・・・・・・・・」

私と素子はしばらく何が起きたのかが分からず、言葉を失って呆然と変態男が立っていた場所を見続けていた。

それから先に回復し、言葉を発したのは私だった。

「終わった……のよね？」

「確かに奴の気配は完全に消えている」

「じゃあ、私達、助かった？」

「そう……らしい」

その結論に至り、私と素子は安堵の胸を撫で下ろした。

だけど、まだ油断してはいけない。

変態男の本体が戦っていたもう一つの存在はまだ健在だ。そして変態男と戦っていても、こっちの味方になるかは分からない。だから、やっぱり出来るだけ早くここから離れた方がいいという判断は変わらない。

向こうが戦いの疲労でこっちの事を気にかける余裕がないことを祈るしかない。

素子に短く目配せしてそう伝えると、彼女は小さく頷いて立ち上がった。

それから私達は疲れた体に鞭を打ち、なるべく気配を消しながら泊まっているホテルに帰った。

・

・

・

ホテルの部屋に戻った私と素子。

そんな私達の頭の中には今夜の戦いでいっぱいだった。

とりあえず、私達は今夜生き残った。

けど、この町では確実に何かが起きている。

そしてさつきの事はこれとは無関係じゃないと靈感が囁く。

これからもこの町でこんな戦いが起きる可能性があるのなら私達だけでは力不足かもしれない。ここはやっぱりソウジ達を応援に呼んだ方がいいのかな？

第七十九話：やっぱりコンビ二のおにぎりは捨てたもんじゃない（後書き）

という訳でチート明日菜にチート素子でも裸トレンチコート男の分
身体には大分苦戦してしまいました。

作品のクロスでは力のバランスが難しいですが、この小説ではこん
な感じで行きたいと思っています。因みに不等式で表すと：

ソウジ > || アルク || 造物主 > エヴァ > 鶴子（死徒化後、エヴァとの
経験分の差） > || 二十七死徒（人間ベースの） || ナギ（バグ） > チ
ート明日菜（現在） > チート素子 > > > （越えられない壁） > > >
魔術師 || マギステル・マギ

と、私の頭の中ではこのような表があります。

第八十話：ソウジ参上

< side : 明日菜 >

「ソウジ、こっち！」

公園での事件の後、ホテルに戻った私と素子はしばらく話し合い、ソウジと相談することを決めた。

そして電話越しにソウジと話し合った結果、ソウジはこっちに来ることになった。

今は明けての翌日。私と素子はソウジを迎える為に駅に来ていて、ソウジはついさっき改札を通り、駅から出て来た。

「兄上、ここまで来てくれてありがとうございます」

ソウジは手を振りながらこっちに近づいて、目の前まで来たら素子が感謝の言葉を言う。

「気にするな。話を聞く限り、確かに危なそうだし、気になることもあった」

気になる事？

何だろ。

あれかな、昨日の倒されなかった方のやつ。

ソウジはジャックやナギのような戦闘狂じゃないけど、どこか強い

相手に飢えているようにも感じるからあいつに興味があるのかもしれない。

そういえば、私はソウジの本気って見た事ないかも？

ソウジもあんまり力を誇示とかしないし、私達の周りだと大抵は半分の實力を出さなくても倒せる。それに、普段のソウジを見るとソウジがすごく強いつて忘れがちになる。だって、ただの子煩悩な親バカなんだもん。今は小学の高学年になってる刹那達はソウジやエヴァが強いつて知っていてもそれがどれくらいなんて想像もつかないわね。

とにかく、ソウジが来たからには何も心配ないわね。これで心置きなくさつきの搜索に集中できる。もし昨日の奴に出会っても、ソウジに任せれば大丈夫でしょう。

・

・

・

< s i d e : : ソウジ >

「ふーむ・・・ここがそう、ねえ・・・」

駅から出て辺りを見渡すけど、どこにでもある中規模の都市のようだ。

まさかここがあの『月姫』の舞台である三咲町とはね。

明日菜から最初に話を聞いた時は耳を疑った。

記憶が正しければ、明日菜達が相手をしていたのはほぼ間違いなくネロ・カオスという死徒だっただろう。

そしてあいつが現れた以上、真祖の姫、直死の魔眼を持つ男、あとカレーシスターがいる可能性が高い。

『月姫』のストーリーなんてとつくの昔に忘れたが、登場人物だけは臆げに覚えている。

いや、だってここは『ネギま』の世界だし、元の世界の知識はほとんど役に立たないと思って気にしていなかった。

俺が転生した時、神様に型月の真祖の力をもらったから、まさかそれ関係か？ その力をつけるには世界もそれに準ずるものにしなければいけないとか。

それだと、この世界のどこかにアルカードや第三帝国の生き残りもいるのだろうか・・・

いやだなあ・・・アルカードやあいつらってかなりイカれているし、あの世界ってかなりグロいんだよね。

更に気になる事と言えば、どこまで型月の設定が生きてるかだな。日本のどこかで英霊を使った戦争が起きているのか、とか。どこかの城でおっかないワンコや騎士が姫を守っているのか、とか。

つたく、六百年経ってもまだ神様の悪戯に驚かされてる。

はぁ・・・まぁ、どうでもいいか。俺は俺で『ネギま』サイドで楽しくやってるし、型月やヘルシングとはなるべく関わらないように気をつけよう。

今は明日菜と素子に頼まれてここに来ているが、こいつらの用事が済んだらさっさと帰ろう。ここが本当に『月姫』の町なら、志貴がどのルートを選択するか少し気になるが、下手に介入してバッドエンドにしたくない。妹だけはどうやっても救いがなかったような記憶があるけど、果たして俺が何かした方がいいんだろうか？

救いがないといえば、なんて名前だったか、志貴の友人で吸血鬼に咬まれた娘がいたような・・・確か、開発途中でヒロインから格下げされた哀れなキャラだったか？

どんな名前だったっけ？ さ、さ、さっちゃん？

いや、さすがにそれはないな。

いくらなんでも親がそんな名前を付けたら正気を疑う。さっちゃんはおそらくあだ名か何かだろう。

えっと、さ・・・さちほ？

何か違うような・・・

うーむ・・・

何だったんだ？

気になる！ 喉に小骨が挟まっているような変な感じがする。

こりゃ思い出すまで寝付けられんかも。

「ソウジ？」

おっと、いかんいかん。ちよつとぼーっとしていたらしく、不思議に思った明日菜が声をかけてきた。

「悪い、ちよつと考え事していた」

誤摩化すように笑って明日菜の頭を撫でた。

「もう」

明日菜は少し嫌そうに俺の手を振り払ったが本気で嫌がっている様子じゃなくて、口元は僅かににやけていた。

「それで、これからどうするんだ？ 時間は・・・一時十五分か。もう昼は食べたか？」

「昼食はまだです、兄上」

「まだ食べてないわ」

「だったらまずは食べないか？ お前らさえよければ、俺としては助かるが。朝から何も食べてなくてな」

「私はそれでいいわ。素子は？」

「私もそれで構わない」

二人ともまだ食べていないらしく、まずはどこかで昼食をとることになった。

話の続きはその時に聞こう。

・

・

・

「すみませーん、トロ、ウニ、イクラ、鯛、それにうなぎの追加をお願いします！」

「はいよー！」

と言う訳でやってきた寿司屋（回らない奴）。

「兄上、卵焼きを頼んでいいでしょうか？」

「卵焼き？ 遠慮しなくてもいいぞ？ アワビでも大トロでも踊りエビでもなんでも頼んでもいいんだぞ？ なんならフグでも頼むか？」

卵焼きなんてカツパ巻と並んで値段が低い物なのに。

「あの、それではかんぴょう巻きも・・・」

そりゃあ卵焼きもかんぴょう巻きも美味いが、折角いい店に来てるんだからもつと珍しい物を頼めばいいと思うのは俺に庶民感覚が染み付いているからか？

それともいい店だからこそ卵焼きやかんぴょう巻きにこだわりが出て他じゃ味わえないのか？

その辺が分かるのってさすがは神鳴流の跡取りと言うべきか？

いや、素子が小さい頃から一緒にいたから、元々の性格だろう。素子って謙虚だからな。

素子の為にももう少しいいネタを頼んで分けてやるか。

「明日菜はどうだ？　ちゃんと食ってるか？」

「普通に食べてるよ」

そう言う明日菜の前にはハマチ、シヤケ、エンガワなどを含めて十ほどの握り寿司。

「確かにそうみたいだな・・・それでなんだっけ？　めちやくちや強い奴がいて、二人だけだと心配だったか？」

「そうよ。私と素子はその強い二人組のうちの一つの分身と戦っていたけど、私達じゃ敵わなかった。もう一人は分からないけど、少なくとも戦いたいとは思わなかったわ」

「そのもう一人の姿形は？」

「ごめん、その時は撤退することではいっばいで見る余裕がなかった」

「そうだったか。まあ、お前らの無事が一番大事だし、その判断は正しかった」

「ばつが悪そうに明日菜が謝ったが、安心させる為に彼女の背中を軽く叩いておいた。」

「もう一人の姿が分からないのは残念だが、十中八九アルクエイドだろうな。」

「ありがとう、ソウジ・・・」

「それで、友人、さつきだったか？　の手掛かりは見つかったか？」

「うん？　さつき？」

「さつきちゃん・・・さつちん？」

「まさかな。」

「まだです・・・」

「そうか・・・これからどうするんだ？」

「とにかく町中を探しまわるしかないわね。だから、その間に強い敵と出会ったらまずいと考えるとソウジを呼んだの」

ふむ、なるほどね。懸命な判断だな。

確かに俺のチートさなら大抵の敵なら問題ないだろうし、それなら心配ない。

「大体のことは分かった。それじゃあ行く場所はお前達に任せて俺はついて行く。それでいいか？」

まだここを知らない俺よりも僅かでも地理に詳しい二人に任せただろうが、二人の友人を見つけに来ているんだから二人の先導でやったほうがいい気がする。

「うん」

「はい」

第八十話：ソウジ参上（後書き）

ソウジにも忘れられているおつき。やっぱり報われないです。

第八十一話：一件落着・・・？（前書き）

待たせてしまって申し訳ありません。

今回はなんと一万文字オーバー。

そして三咲町編はほぼ終わり。次回からは麻帆良に戻ります。今は少し時間がないので、前回分も含め、感想レスは明日以降になると思います、すみません。

第八十一話：一件落着……？

<side:ソウジ>

「どっつてこうなった……」

今、俺の周りで騒ぐ奴らを見てそう呟いた。

横では酔っぱらいの金髪がビールのジョッキを片手に笑い声を上げながら一気飲みしているし、そのすぐ隣では黒髪の青年がぐったりしている。そして、少し向こうではよく知っている二人とよく知らない一人の少女たちが思い出話に花を咲かせている。

「ソージー、飲んでるー？ あはははははは！」

そんなことを言って俺に絡んでくる金髪の女性。その名前をアルクエイド・ブリュンスタッド。うん、多分そのアルクエイドだ。そしてぐったりしている男の名前は遠野志貴。その遠野志貴だ。

志貴が飲み過ぎで潰れたから俺にターゲットが移ったんだろう。

「ほらほら〜！ もっと飲めー！〜！」

彼女は俺の肩に腕を回し、エヴァがうらやむ程の胸を腕に押し付けながらジョッキを一つ俺の口元まで運ぶ。

「んぐんぐつ！ ええい、やめろ！〜！」

鬱陶しい！

ビールを一気飲みしたあと、アルクを振り払う。

「あはははっ！！！！」

そして振り払われても笑いが止まらない様子のアルク。

「はぁ・・・」

溜め息を漏らしながら、もう一度周りの惨状を見渡して思う。

どうしてこうなった・・・

* * *

「見つからないわね・・・」

「そんな簡単に見つかる訳ないだろう、明日菜」

「そうなんだけどね・・・でも、手掛かりさえも見つからないってすぐくいらいらするのよ！」

「私も分かるぞ、その気持ち。だが、怒りすぎて周りが見えず、その手掛かりを見逃しては駄目だろう」

「はぁ、そうね・・・」

俺がこっちに来て半日ほどが経った。時間も夕暮れを過ぎ、夜に差し掛かっている。

昼食を済ませた後、俺たちは町を歩き回り、さつきちゃんのことを探したが、明日菜のさつきの言葉の通りに結果は芳しくない。

だが、幸いにも件の『ヤバい奴』とも出会っていないので、とりあえず俺の出番はまだない。

先ほど俺等は簡単な夕食を済ませ、探索を再開させた。今度は駅周辺の繁華街から少し離れたオフィスビルが立ち並ぶ区画を歩き回っている。普通の女子高生であるさつきちゃんがこんな場所にいる理由はちよつと考えつかないけど、他に探す宛がない以上、どこも同じようなもんだ。

そんな時、ふと視界の端を一組の男女が横切った。男はどこにでもいるような高校生の格好をしていたが、女性は金髪で、明らかに外人だった。そしてよく見なくてもそいつが秘めている力は異常だと分かる。

（おいおい、あれつてもしかしなくてもアルクエイドと志貴じゃないか？　なんでこんな大きな町で偶然出会っただよ！）

「ソウジ・・・」

明日菜も気がついたのか、少し不安そうに俺を呼ぶ。

「ああ」

とりあえず俺も気づいていると知らせようと短く返事。

そして俺たちのやり取りを見ていた素子も視線の先を見て二人の姿

を見つける。

「あれは？」

「あれ？ 素子は見た事なかったか？ あいつがこっちに俺が呼ばれた理由だ」

「えっ、そうだったんですか？ 言われてみれば上手く隠していましたがすごい魔力です」

「だが、調子が悪そうだな。いくら隠していても、あいつならじみ出る魔力だけでも中級の悪魔以上があるはず」

やっぱり志貴に殺されただろうか。

って、あいつらこっち見てるぞ？ もしかして見られていたことに気がついた？

というか、アルクエイドー（？）はなんだか驚愕した顔で俺を見てるんだが・・・

あつ、そういえばこっちが向こうに気づいてんならあつちが気づかない道理はないよな？ 俺も魔力を抑えているが、さっき言ったようにどうしても漏れる魔力もある。それを感じ取られたんだと思う。

「ソウジ、こっち見てるわよね？」

主語が抜けてるけど、アルクエイドー（？）のことを言ってるのは当たり前だな。

「ふうむ、見てるな」

「あっ、兄上、こっち来ますよ！」

素子の言う通り、こっちを見ていた二人は少し話し合った後、こっちに歩き出した。

「ソウジ、どうするの？」

「どうするって、とりあえず話すしかないだろう。まあ、逃げるのも選択の一つだが、そうしなくてもいいように俺が来たんだし、逃げるのは癪だな」

多分あつちも話がしたいだけだろう。魔眼という秘密兵器があつても、できることなら向こうも余計な戦いは避けたいと思っている筈だし、大丈夫・・・と思う。

そんな事を考えていると二人はいよいよ俺たちの目の前まで来た。

アルクエイドと思われる女は男を守るように少し前に立ち、警戒しながら話しかけた。

「貴方、何者？ 教会の者じゃないようだけど、死徒の気配もしい。似ている気配は知っているけど、それはありえない筈よ」

単刀直入に聞いて来たな。ならば俺もそれに倣うか。

「俺か？ 鳳姫宗治。分かり易くいえば真祖だな。あと、戦う意志はないから気を楽しんでくれ」

「なっ!!!?」

「ちよっ!」

「兄上、いきなり正体を言っただ大丈夫なのですか?!」

「アルクエイド。真祖っでお前と一緒に・・・?」

端的に正体をばらすと各々が反応する。

「それはありえないわ! 真祖は私以外、全て滅んだ筈よ!」

「うーん、でもそうなんだからそうとしか言えないぞ。お前も星とのリンクが生きてるんだろ? 星に聞けば分かるんじゃないのか?」

それとも弱っているからそう言った情報のやり取りはできないのか?

「そんな馬鹿な!」

「ちよっとアルクエイド。どういうことなんだ? 俺にも分かる様に説明してくれ」

アルクエイドー(確定)が一人で驚いている横、志貴は何がどうなっているのかよく分かっていないようだ。

「志貴、吸血鬼には大体二つの種類がいると前に説明したことを覚えてる?」

「あ、ああ。確か昨日戦った奴が人間から吸血鬼になった死徒でアルクエイドは生まれてから吸血鬼の真祖・・・だっけ?」

「そうよ。そして今では残っている真祖は私一人の筈。でも、こいつも真祖だと言っ」

「アルクエイドが知らないところで生き残っていたとかじゃないのか？」

「そんな筈ないわよ。真祖は元々数が少なかったんだから全員が全員を知っているような関係だったのよ。だからこんなところで知らない真祖と出会う筈がない！」

「じゃあ、こいつは偽物ってことか？」

「それも違う・・・確かにこいつからは真祖の感じがするし、こいつの言う通り、星もこいつを真祖と認めている」

「は？　じゃあ、結局どういうことなんだ？」

「紛れも無く真祖よ。でも、そんなことある筈ない。貴方、本当に何者よ？」

あつ、志貴との話が終わったのか？

「真祖の吸血鬼としか言えないが、まあ、確かにちょっと特別だわな」

自分で言うのは痛くて恥ずかしいが、神様にチートにされたのは事実。

「特別って何よ？」

「見ず知らずのお前に全部言つと思つか？」

調子に乗り易い俺でもそこまで馬鹿じゃないよ。

本当は厨二すぎた設定で言いたくないだけだが。

「くっ……」

「それよりも、こっちは名乗っているのに、そっちは何も無しか？」

「……アルクエイド・ブリュンスタッドよ」

「遠野志貴と言います」

「ふむ、アルクエイドに志貴ね……こいつらは鳳姫明日菜、そして青山素子だ。ちなみに人間な」

「吸血鬼と人間が馴れ合っているの？　ますます貴方のことが分からないわ」

「別にどうでもいいだろ？　とにかく、俺はこいつらの用事に付き合つてここにいるだけだ。お前と敵対するつもりはない」

「それを聞いて安心したわ。はっきり言って、今貴方と戦っても勝てる気がしないもの」

「アルクエイド、こいつ、そんなに強いのか？」

なまじ、アルクエイドの実力を知っているから志貴には信じられな

いらしい。

「本当よ。例え100%の状態でも勝てるかどうか・・・」

「それほどか？」

「うん・・・ソージと言ったかしら？」

「なんだ？」

「私の邪魔をしないと云うのなら特に何も言っ事はないわ」

「そうか」

「けど、貴方程の者が必要という用事は気になるわ。もしよかったら教えてくれない？」

「さっきも言ったが、俺はこいつらに付き合っているだけだ。護衛のようなもんだ。そもそも俺が応援に呼ばれたのは多分お前の所為だぞ？」

「私の所為？」

どうしてここで自分の名前が出てくるのかが分からないようで、アルクェイドは不思議そうな表情をしている。

「お前、昨日この町の公園で戦ってなかったか？」

「ええ。確かに昨日の夜、死徒の一人と戦っていたわ」

「やっぱりな。こいつらはその時、公園にいて巻き添えを食らったらしい」

「その娘達が？　そういえば、あいつ、何かに気を取られている感じがしたわね」

アルクエイドにも納得できる要素があるらしい。

「なんとかその場は生き残ったが、この町にあんな存在がいるのなら、自分達だけでは危険と思い、俺を呼んだわけだ」

「ふーん。じゃあ、貴方自身はこの町で起きていることとは関係ない訳ね」

「よく分からんが、多分そうだろう」

「分かったわ。行くわよ、シキ」

「いいのか、アルクエイド？　唯一の同胞なんだろ？」

「いいのよ・・・じゃあね、ソージ。多分、もう会わないでしょう」

そう言うとアルクエイドはぐるりと回って離れて行くこととするが、それを呼び止める。

「あつ、ちょっと待ってくれ」

「なに？」

「さっき、この町で何かが起きていると言ったが、何なんだ？」

「吸血鬼よ」

「ここに他にもいるのか？ あと、そいつはなんだ？」

そう言えば何となく覚えてるな。

なんだっけ。アルクエイドは秋葉の兄に転生した吸血鬼を追っているんだっけ？

「この子は私の助手のようなものよ。彼も吸血鬼の事件を解決したいと言って手伝ってもらってるのよ。ちなみに、彼は私を殺すほど強いから手を出さない方がいいわよ」

「お前を殺すね・・・」

普通なら冗談にしか聞こえないことでも、俺は知っている。遠野志貴も化け物だと。

「吸血鬼の事件と言うと、町の人をグール化させている奴が出たのか？」

「そうよ。もう何十人もグールにされているのでしょね。表向きは行方不明者が例年より多くなっているだけのようだけど、たまにグールになり損ねた死体が見つかって噂になっているらしいわ」

自分たちが追っている事件を説明してくれるアルクエイド。しかし、彼女が言った『行方不明者』という単語に激しく反応する人がここに二人いた。

「ちょっと！ 行方不明ってなに！」

「え？ いきなりなによ？」

「うちの友人も数日前から行方不明や！ もっと詳しく説明してくれへんか！」

明日菜と素子の二人だ。

「そういうこと？ けど、残念ね。行方不明ならなり損なっていないでしょうけど、グールにされたならその友達はもう駄目よ。二度と人間には戻れないし、グールなら自我も残っていないでしょうね。唯一楽にさせる方法は止めを刺すしかないわ」

「そ、そんな・・・」

アルクエイドの無慈悲な言葉に二人が絶望する。

「け、けど、さつきがそうだったって分からへんやろ？ もしかして大丈夫かもしれへんやん」

「確かに普通に行方不明になっている可能性もあるわ。あと、確率はすごく低いけど、自我が残っている可能性もなくはない。けど、それでも彼女は吸血鬼になっているわ。悪い事は言わないから、あなた達は帰った方がいいわ」

「そんなこと出来ないわ！」

「明日菜の言う通りや！ うちらはさつきがどうなっても諦めへん！ 絶対に見つけて助けるんや！」

「そうよ！ あと、素子、関西弁になってる」

「あ」

明日菜に言われて、ようやく気がつく素子。そこにあんまり話していなかった志貴が声を上げた。

「あのさ、二人が言っているさつき、ってもしかして弓塚さつき？」

「え？ どうしてあんたが知ってるの？」

「えと、彼女とはクラスメートなんだけど・・・くっ、ここ数日、学校に来ていなかったけど、ただの風邪かと思っていた。まさか弓塚さんが行方不明になってたなんて！」

「あんた、さつきを知ってるの?!」

「何でもいい！ さつきについて知っていることを言ってくれ！」

「え、え？」

「頼む！」

「えっと、その、すまない・・・弓塚さんとは友達だけど、学校以外でのことはたまに遊びに行くくらいであんまり知らない。多分君たちの方がよく知っていると思う」

「そう・・・」

申し訳なさそうに志貴が何も知らないと話し、明日菜と素子の肩が落ちる。けど、明日菜だけは顔を上げて何かを思いついたかの様に志貴に話しかけた。

「あんた、志貴って名前だったっけ？」

「そうだけど」

「あんた、携帯電話持ってる？」

「あ、ああ、持ってる」

そういいながらポケットから携帯を取り出す志貴。

「それなら私達と番号の交換をして。そしてさつきについて何かを知ったら私達に報せてくれない？」

「分かった。何か分かったら必ず電話するよ」

「志貴、話は終わった？」

アルクエイドに聞かれ、志貴は明日菜と素子に確認を取り、彼女達は頭を縦に振る。

「終わったみたいだ」

「なら今度こそ行くわよ。早くロアを見つけないともっと大変なことになるわよ」

っていうか、今気がついたが、さつきちゃんがさっちゃんだったんだ

な。これがご都合主義ってやつか？
けど、それだと、彼女はほぼ間違いなく吸血鬼にされてるな。

やった事ないからちょっと賭けになるかもしれないが、俺がなんとか出来るかもしれない。だが、まずは見つけることだな。

・

・

・

< side : 志貴 >

あの不思議な三人組と別れてからしばらく。

アルクエイドの機嫌はまだ治らない。

よく分からないけど、そんなに真祖とやらがもう一人いたことが納得いかないんだろうか？

俺なら、自分が一人じゃないと分かって喜ぶと思うんだが。

あと驚いたのが一緒にいた二人の女の子が俺の友人でもある弓塚さんを探しに来ていたことだ。

言われてみれば、最近学校では弓塚さんを見ていない。でも、俺はアルクエイドと一緒にネ口ってやつを追っていて忙しかったから優先順位は低かった。それに、弓塚さんは少し大人しいが普通の代名

詞のような人だ。そんな人が非日常的な吸血鬼事件に巻き込まれるなんて誰が思う？

俺も関わってるけど、少なくとも俺は普通じゃない直死の魔眼っていう能力があるから理由がある。

「なあ、アルクェイド」

「なに？」

「やっぱり弓塚さんって吸血鬼に襲われたのか？」

「あたしはその子のことを知らないけど、普通の子なんでしょ？」

「ああ」

「だったらこの町に他の殺人鬼や人攫いがいなければ、吸血鬼に襲われたと考えた方が自然だわ」

「そうか・・・」

「くそっ！」

「こつこつ事にならないようにアルクェイドの手伝いをしているのに！！」

「シキ、ここで自分を責めてもどうにもならないわ。今はロアを見つけることに専念した方がいい」

「分かってるさ。だけどやっぱり悔しい」

「それよりも、シキ。近くにいるわ」

「いる？」

何が？

「まさか、吸血鬼か！」

ロアってやつか！

「そう、吸血鬼よ。おそらくロアじゃないけど、あいつの眷属かもしれないわ」

「そうか・・・ちっ」

親玉じゃないのは残念だが、手下でもこのうつぷんは晴らせる。

「吸血鬼はどこにいるんだ、アルクエイド？」

「向こうの路地裏のようね。覚悟はいい、シキ？」

「もちろんだ」

「じゃあ、行くわよ」

アルクエイドがそういうと、彼女は歩き出した。

* * *

< s i d e : 明日菜 >
プルプル・・・

電話?!

番号を見てみればつい先ほど登録した志貴からだった。

「もしもし、志貴?」

『ああ、明日菜か?』

「ええ、私よ。どうしたの? 何か言い忘れた事でも?」

『違う。弓塚さんが見つかった』

「はあ??!」

見つかったって、あれから三十分も経ってないわよ!

どうして向こうにそんな簡単に見つかるのよ!

「明日菜、どうしたんだ?」

「シッ、素子。今重要なところなの! ……それで、それ本当なの?」

『間違いないよ』

「だから、何が本当なんだ？ 大体誰からの電話だ？ もしかしてさっきの奴か？」

「さつきが見つかったかもしれない」

「なにっ？！ 本当か！ ちょっと代わってくれ！」

志貴の用件を素子に説明すると、彼女はあたしに詰め寄って携帯を取り上げようとした。

「ちょっと、素子！ やめてよ！」

「・・・志貴達は今どこにいるの？」

『少し説明しづらいけど、どっかのビルの路地裏にいて、今弓塚さんと睨み合っている。割と一触即発な雰囲気だから、弓塚さんと話してくれると助かる。今、電話を代わるから・・・もしもし、明日菜ちゃん？』

「さつきー！！」

「なんやと！ 明日菜！ 電話の向こうにさつきがおるんか！ うちにも話させるー！」

また素子が電話を取りに来たので仕方なく二人で聞こえる様に二人の頭で電話を挟む。

『素子ちゃんもいるんだ。志貴君から話を聞いた時、信じられなかったけど、本当に来てたんだね』

「当たり前よ！ 親友が行方不明になったんだから探しに来るのは当然でしょ！」

「明日菜の言う通りや！」

『あはは、心配させてごめんね。あと、素子ちゃんの間西弁、久しぶりに聞いたね。最近はいつも標準語だったのに』

「ねえ、さつき。今さつき達はどこらへんにいるの？ すぐに向かうわ」

『ううん、駄目だよ。二人は来ちゃ駄目』

「どうしてそんなこと言うの！」

心配してるのになぜ会っちゃいけないの！

『あのね、私化け物になっちゃったの』

「その可能性があるってことは志貴達に聞いたわ！ 私達は強いから大丈夫よ！ だから心配しないで！」

「そや！ さつきかて神鳴流のこと知つとるやろ！」

『うん、でもごめんね。私はもう普通の生活には戻れない。血を吸わないと死んじゃうし、血を吸っちゃうとその人が死んじゃう。それにね、私、人を殺してもそんなに罪悪感がないんだよ？』

「.....」

『ほら、素子ちゃんだってそんな化け物と関わらない方がいいですよ？ だから、少し寂しいけど、これでお別れ。バイバイ・・・』

「さつきー！」

さつきを思い留まらせるために彼女を呼んだけど、もう遅かった。電話はすでに切れていて、聞こえてきたのは発信音だけ。

「さつきが変なことをする前に行かないと！」

素子にそう言うけど、彼女の表情は暗い。

「だが明日菜、さつきは私達と会いたくないって・・・」

「そんなの関係ないわよ！ こんな別れ方、私は納得しない！！それにさつきを直す方法があるかもしれないでしょ！」

「しかし、アルクエイドは・・・」

「それこそ関係ないじゃない！ あんな知らない奴の言葉を信じるの？ 吸血鬼のことならソウジに聞けばいいじゃないの！」

そうよ。ソウジだって真祖だし、何かいい方法を知ってるかも！

「兄上に？」

「こんな時こそ頼るべきでしょ！ ね、ソウジ！」

「ああ。やったことないから効果があるかは分からないが、一応考えはある」

「本当か、兄上！」

素子が聞くと、ソウジはただ頷いた。

もう私達を助ける方法を考えていたなんて。やっぱりソウジは私のヒーローね！

「そうと決まれば、早く行くよ！」

「ああ、行くぞ明日菜！兄上、さつきのことをお願いします！」

「できるだけの事をする」と約束する

あとはさつきが居る場所を探すことだけけど、それは心配いらない。向こうは戦闘態勢に入っているのか、割と近い場所からすごい力を感じる。さつき達はそこにいるのだろう。

・

・

・

「さつき！！」

力を感じる場所まで急いで行くとさつきと志貴達が睨み合っていて、今にも戦い始めそうだった。けど、まだ戦っていないから、間に合

つたみたいだ。

「素子ちゃん、明日菜ちゃん・・・来ちゃったんだね。あれ、おじさんも来てたんだ」

あつ、ソウジがくずれた。

見た目がおじさんっぽくないからその反応は分からなくもないけど、ソウジは昔からさつきにおじさんって呼ばれてたから、もう慣れてもいいと思う。まあ、こういうのは理屈じゃないってことね。

「さつき、話を聞いてくれ！」

「ごめんね、素子ちゃん。でも、私はもう人間じゃないの。もう化け物として生きるしかないの。だから、私を止めようとしてるんなら、素子ちゃんでも許さないよ？」

「違うんや、さつき！」

「何が違うの、素子ちゃん？ 信じてないかもしれないからもう一度言うけど、私が化け物になってるのは本当なんだよ？ 素子ちゃんの敵だよ？」

「分かつとる！」

素子じゃ話が進まないわね。

「ちつき」

「今度は明日菜ちゃん？」

「さつき、知らないかもしれないけど、ソウジも吸血鬼なのよ？でも普通に暮らしてるでしょ？」

「おじさんが？ でもどうやって？ 昔も昼は普通に外に出てたのに」

「うん。ソウジは特別らしい。だから今は私達を信じて」

「弓塚さん、俺からも頼むよ」

「志貴君・・・」

「さつきちゃん、これからやることは試した事がないからどうなるかはわからない。すごく痛いかもしれないし、最悪死ぬかもしれない」

「ちょっと、ソウジ！ 聞いてないわよ！」

「さつきが死ぬかもしれないって！」

「それじゃあさつきにやらせる訳にはいかないじゃないの！」

「何事にもリスクはつきものだろ、それに最悪の場合だ。俺もそれができるとは思っていないが、絶対とは言い切れない。さつきちゃんにもリスクを教えておいた方がいいだろ？」

「でも！」

「いいんだよ、明日菜ちゃん」

「やっきっ？」

ソウジに止めるように言おうとするとさつきが私を止めた。

「おじさん、ちょっと聞いていいですか？」

「ああ、何でも聞いてくれ」

「おじさんの治療を受ければ私はどうなるんですか？」

「成功すれば昼は外に出られることに始まり、血を吸わなくても生きていける。しかし、今もあるさつきちゃんの不老不死は変わらないからずっとこっちで住む事は出来ないだろう」

「それっていいことばかりじゃないですか」

「しかし、言っていたように、やったことはないからどうなるかは分からない」

やっぱり危険があるならやらないほうが・・・

さつきが吸血鬼でも私も素子も気にしないし、それなら。

「分かりました。やってください」

「さつきっ?!」「さつきっ?!」

さつきの言葉に私と素子が驚く。

まさかあの大人しかったさつきがこれほどの選択で未知数のほうを選ぶとは思っていなかった。

「いいのか？」

「はい。私は理不尽に死にたくないから人を殺して血を吸っていたけど、これで死んでも、それは私の選択だから納得できる。だから、私はこれでいいんです」

そういうさつきの顔は今まで見た事のないような覚悟があった。それを見てもう彼女の考えを変える事は出来ないって分かった。

「分かった。早速やるから、こっちに来てくれ」

そういえばソウジに具体的な治療法を聞いていないけど、何をやるんだろう？

さつきも少し不安なのか、おずおずとソウジに近づいた。

そしてソウジの前まで行くとソウジはおもむろにさつきの肩を掴んだ。それからゆっくりと頭をさつきの首筋に近づけた。

「えっ？」

「あっ」

言うまでもないかもしれないが、ソウジはさつきの首筋に噛み付いて血を吸った。

これを見たら鶴子は怒るかもしれないわね。

数年前から鶴子はエヴァと同じ様なソウジの眷属になりたいと思っているからね。

「はう・・・あ、はあん／＼」

それにしても、さつきの声、色っぽいわね。

血を吸われるのって気持ちいいのかしら？

「ふう・・・」

しばらくしてソウジはさつきの首から口を離し、口の周りに付いていた血を拭った。

「兄上、今のが治療だったのですか？」

「まあな。どうやら最悪の事態にはならなかったようだし、激しい拒絶反応もないし、ひとまず安心してどこか？　どうだ、さつきちゃん、何か変化はあるか？」

「・・・」

ソウジはさつきの状態を聞くけど、さつきはまだ余韻に浸っていて目がとろ／＼としていたから聞いていなかったかもしれない。

「さつきー」

「ひゃ、ひゃいー」

「気分はどうなの？」

「え？ あ、え、喉が渴いてない！ 渴いてないよ！」
のど？」

「そうか、吸血衝動はなくなったようだな。じゃあ、無事に親の上書きが済んだっていうことだろう。副作用も特に現れていないみたいだし、これで日常生活に戻っても大丈夫だろう」

「本当ですか？」

「やったな、さつき！」

さつきの顔にはもうさつきまで浮かんでいた絶望の色が見えず、嬉しそくに確認していた。

もちろん私も素子も嬉しくてさつきに抱きついた。

けど、すぐそばに険しい表情を浮かべていた人が一人いたことを私達は気がついていなかった。

「ありえないわ！！！」

私達が喜ぶ横、アルクェイドは大声で叫ぶ。

「ゲールや死徒を他の吸血鬼の眷属に変えるのも無理だし、吸血衝動をなくすなんて、あなた、吸血鬼の存在に喧嘩売ってるの？！」

つい数十分前の光景の焼き増しを見ているようだ。

ソウジがやったことは余程信じ難いことらしい。

「ん？ まあ、いいじゃないか、出来たんだし」

そうよね。成功したんだから些細な事なんてどうでもいいじゃないの。

「それで納得できると思うの？！ 私だって理性を総動員して吸血衝動を押さえつけてると言うのに、あんたに咬まれただけでその子のがなくなった？！ ふざけてるの？！」

「だから言っただろ？ 俺は特別だ、って」

「くう！！」

「なんだったら、お前の衝動もなくせるかどうか試すか？ 真祖だから俺が咬んでも眷属にはならないだろうが、今見たように、俺の吸血鬼としての因子はどうやら上位らしいから、そこだけ上書きされるかもしれないぞ？」

「はあ？ やれるもんならやってみなさいよ！ それこそ出来るんなら見てみたいわよ」

「よし、言ったな」

まるで『言質取ったあ！！』とでも言いたそうな笑いを浮かべ、ソウジはいきなりアルクエイドの首筋に噛み付いた。

「ちょ、ちょっ、あ、あんっ！ いきなり、なに、する、のっ！」

「何って、アルクエイドの血を吸って俺の因子を植え付けてるんだろ?」

「くっ、ぶっっ! はあ、はあ……」

・

・

・

それからしばらく経ち、作業の終了したソウジはアルクエイドを離れた。彼女の顔は心なしに赤くなっていたが、気にしないでおこう。

あと、エヴァに言ったらやっぱりソウジは半殺しにされるのかな?

「……それでどうだ?」

「はあ……はあ……あんだねえ、少しは遠慮しなさいよね」

「なんのことだ?」

「それで調子のことだったかしら? 悔しいけど、確かに吸血衝動がなくなってるわ。あんだ、本当に何者よ?」

「さあてね」

「どうしても言わないつもり？ 覚えてなさいよ。ここでの用事が終わったあと、あんたのここに行つて絶対に秘密を暴くんだから！」
え？ それって何？ 麻帆良まで来るってこと？

それに、言葉にとげがあるけど、その顔は明らかに照れている。

ソウジ、またやったの？

「ははは、まあ、頭の片隅にでも留めておく。それよりも、折角さつきちゃんが悪くなったんだ。どこかでお祝いのパーティーをやるう！ もちろん、俺のおごりだ！ アルクエイドと志貴も来るだろ？」

「いいわよ。行ってやるうじゃないの！ ほら、シキ、いい店まで案内しなさい！」

「はあ？ ちょっと待てよ、アルクエイド！ もう遅いし、俺は帰らないとまた秋葉に怒られちゃう！」

「なーに硬い事言つてんだよ。ほら、早く案内しろ！ 場を盛り下げてるんじゃないわねえ！ だろ、明日菜、素子！ それに、さつきちゃん！」

「そうだな。折角の明るい雰囲気壊されてはたまらん」

「そうよ！ それに宴会なんて久しぶりなんだから、いい店を紹介しないと承知しないわよ！」

「あの、お願いできないかな、志貴君」

「弓塚さんまで・・・」

さつきちゃんも見つかったし、助けられた！

今日はいっぱい羽目を外して騒ごう。

* * *

<side:ソウジ>

というわけで、多少騒いでも許してくれそうな店までやってきてから数時間。

志貴は酒を飲まされて潰れてしまい、俺はアルクエイドに絡まれている。

助けを呼ぼうにも、明日菜と素子は我関せずを通し、さつきちゃんは苦笑を浮かべてるだけ。

まあ、吸血衝動を消されて全力を出せるアルクエイドの相手をしたくないのは分かる。死徒になっているぶん、さつきちゃんは絶対的な力の差を感じ取っているだろうし。

「ソージー、聞いてるー？ あんたの秘密、さっさとおしえろー！ あはははははー！！」

はぁ・・・

それにしても、アルクエイド、酔い過ぎだろ？

真祖なら酒に強い筈だって思うのは俺だけか？

やれやれ。

それに秘密と言っても神様チートで納得するのか？ いや、しないだろうな・・・

余計に絡んできそつだ。

まったく、成り行きとはいえ、少し早まったことをしてしまったか？

「あはははははっ！！ お酒もつと持ってこ?????い！」

空のビール瓶を振り回しながらおかわりを頼むアルクエイド。

ええい、もうヤケだ！

俺だって酔って楽しんでやる！

「オヤジ！ 店にある酒を全部持って来てくれ！ 支払いはこいつで！」

そう言いながら懐から明日菜にも渡したような万札の束。

それくらいしないと俺は酔えないから質が悪い。

「おら、アルクエイド！ コップが空だぞ！ これでも飲め！」

「おー、ソージ、ありがとー！ ソージも飲めー！」

もう何を言ってるのか分からん。

けど、無邪気に笑うアルクェイドを見てるとどうでも良くなるのは何でだろうな。

まあ、何でもいいか。

第八十一話：一件落着・・・？（後書き）

やっちまった（笑）

以外とあっさり片付いたさっちゃん問題。

そして、なんとアルクが大幅強化されてしまった。

けど、戦闘はないので、この小説には影響ないかも？ 問題はアルクを本当に麻帆良までに行かせるか。そしてソウジにからむアルクを見て憤慨するエヴァ（主に胸的な意味で）

最後にちよつと個人的な報告。

実は先日、注意欠陥障害と診断されました。これの症状を聞いた時、自分についているいるなるほど、と思いました。

そして投薬を数週間後から始めるようなので、もしかしたらその辺りから作風が変わるかもしれません。何か大きな変化があれば、多分それが原因でしょう。

それでは、また次回まで。

第八十二話：三咲町とさよなら（前書き）

お待たせしました。

次話投稿です！

第八十二話：三咲町とさよなら

< side : ソウジ >

「ここに残って大丈夫か、さつき？」

宴会の翌日、用事が終わった俺たちは早速麻帆良に帰る事にした。今は駅前でさつきと別れの挨拶をしている。

ちなみに、志貴とアルクエイドはここにいない。志貴は学校の前に一度帰らないといけなかったし、アルクエイドは知らないけどいろいろと忙しいらしい。

「うん、心配してくれてありがと、素子ちゃん。いつまでも一緒にいられないから、今は家族との時間を大切にしたいの。せめて卒業するまでここにいたいよ」

「そうか。きっとさつきは人間じゃないってことで困ることもあるだろうけど、その時は遠慮なくこっちに電話してくれ」

「うん、その時は電話するよ」

「夏休みは麻帆良に来るといいよ、さつきちゃん」

「おじさん？」

「その間に具体的な力の使い方を教える。それまで待つのが不安なら週末とかにも麻帆良まで来ればいい」

「えっ、週末？ でも、時間が足りないような」

そう考えても仕方ないな。でも、俺たちには魔法球という裏技がある！

そうすれば外で一日半という時間でも中では優に一ヶ月が過ごせる。そしてさつきはもう不老不死になっているから歳を取る心配がない。そうさつきに説明すると彼女は、はっ？ と耳を疑うような顔をした。

「加えて言うならば、その間に学校の課題もやる時間が増えていい事尽くめだぞ」

「あの、考えておきます」

「そうか。まあ、遠慮だけはするなよ？ お前はもう俺の眷属、いわば俺の家族になってるんだからな。これから長い間よろしく」

「あっ、はい、よろしくお願いします／＼」

そして何故か顔が赤くなるさつきちゃん。

風邪か？

・・・うそぞそ。うん、照れてるんだな。

そのつもりはなくても、聞きようによってはプロポーズに聞こえるし、仕方ないか？

それにもう死徒になってるから風邪なんて引きようがない。

「俺からはこれくらいだな。明日菜は別れ済んだか？」

「さつきも言ったけど、またね、さつき。今度は麻帆良で会いましよう」

「バイバイ、明日菜ちゃん」

さて、別れの挨拶が済んだか。

そろそろ電車が来る時間だし、駅に入るかね。

「うし、じゃあ行くか。またな、さつきちゃん」

「さよなら、おじさん」

短い言葉を交わし、俺たち三人はさつきと別れて改札口を通る。

それをさつきは俺たちが視界から消えるまで手を振りながら見っていた。

・

・

・

「さつきちゃんが見つかったよかったな、二人とも」

「はい、兄上」

「来てくれてありがと、ソウジ。ソウジのおかげでさつきを助けられたわ」

「礼なんか必要ないって。けど、役に立てて本当によかった」

「たまたま俺の能力でなんとかあったけど、もし何も出来なかったと考えると・・・」

「いや、まあ、大抵の問題は死徒化で解決できるような気がしないでもない。けど、さすがにすでに死んだ人を生き返らせたり、居場所が分からない人を探したりはできない。力がチートでも、俺は全知全能とは程遠い。」

「そんなことはありません。さつきは人間じゃなくなりはしましたが、これで普通の生活に戻れるのは兄上のおかげです」

「何はともあれ、これでさつきちゃんは大丈夫だろう。これでお前達も勉強に専念できるな。何せ、もう高校二年だ。受験も視野に入れないとな」

「「ぎくっ」」

勉強の話をする二人は狼狽する。

どうしたんだ？

なんでこんなに取り乱す？

明日菜はべつに勉強が苦手というほどでもなかった筈だが。

授業も数日しか欠席してないからあんまり遅れていないと思うが。

「どうして勉強と言っただけでそんなに慌てる？　もしかして、成績が落ちてるのか？」

因みに俺はまだ中学校に残っているので二人の成績は深く知らない。

「べ、別に。いつも通りよ」

「そ、そうや！　別にこの前の中間試験で順位が30下がったとかやないよっ！・・・はっ！」

「素子・・・」

「いや、別に成績が少し下がったくらいで怒ったりはしないが、大丈夫なのか？　二人とも麻帆良大学に進学したいんだろ？　確かあそこって東大と並ぶ難関だぞ。それに麻帆良の各高校からの推薦枠はそれぞれ二つだけ？　付属の高校もエスカレーターで進学できる訳じゃないし」

そうなのだ。麻帆良大学って実はすごいところだったのです。

中学生でそこに研究室を持っていた葉加瀬と超って本当に天才だ。

それにあそこで教授をやっている明石パパ。実は優秀だったのね。あの尻に敷かれた姿を思うと中々信じられないが。

「大丈夫よっ！ 今回のテストは偶々だし！ いつも十位以内だし！ 受験まで一年以上もあるし！ 心配ないわ！」

「・・・コホン。そうです。きっと期末試験では順位も回復します！ 受験の勉強が間に合わなさそうだったら兄上達の別荘も使えますし」

「老けるけどな」

「ぐっ・・・数ヶ月の時間も勉強を間に合わせる代償ならば仕方ありません」

「それに、そういうことにならないように今から頑張るのよ！（いつかソウジに吸血鬼にしてもらったから別にそうなくても気にしないけどね）」

「ん、まあ、二人が心配してないなら俺からは特に言うことないな今の態度じゃあ少し不安になるが、結構高い偏差値の高校に通っていて常にトップ10に入っているんだから言う通り、心配ないんだろう。」

「あっ、電車が来ましたよ、兄上。乗り遅れないようにしませんと！」

明らかな話題転換ありがとっ、素子。

しかし、やさしい俺は敢えてそれに乗ってやろう。

「ふむ、そうだな。とりあえずこの話は終了か」

「「ほっ……」」

そう言っつて話を纏め上げて三人で電車に乗る。

さて、今回のことでさつきちゃんは一応助かったし、アルクエイドの強化もしたから結果は上々とも言える。

眷属を増やしたことでエヴァや鶴子が煩くするかもしれないが他に解決方法が思いつかなかつたし、どうにか分かってもらうしかない。

あと残ってる問題は帰りにどんな弁当にするかを決めるだけかね。

帰りの電車で駅弁を食べるのが密かな楽しみだったりする。

平和っていいね。

第八十二話・三咲町とさよなら（後書き）

ここで麻帆良大学の優秀さが明らかに！

ラブひなでは浪人生になってしまった素子。こっちでは現役合格で
きるのでしょうか？

そして明日菜の願望が表面化。黒明日菜健在か？

第八十三話：あの先輩はこんな時からあだったのです（前書き）

お久しぶりです！

今回は学校のソウジからの一コマ

第八十三話：あの先輩はこんな時からあだったのです

<side:ソウジ>

よう、ソウジだ。

皆知っている通り、普段の俺は中等部で魔法先生をやっている。

今回はそんな俺の学園でのスバラスイ〜教師っぷりの話をしよう。

あれは、そう、三咲町から帰って来て数日後だったか？

・

・

・

あの日、俺はいつも通りに食堂で昼を済ませたあと（今回はエヴァ製（習慣の見回りをやっていた。

「せんせ〜」

「先生、今日も奥さんのラブラブ弁当？」

その途中、廊下で生徒に挨拶されたり、こつこつぶんぶんにかかわれたりもする。

「な〜にがラブラブ弁当だ。普通だろ、普通」

別にでんぶのハートがある訳でもないしタコさんウィンナーもない、至って普通の弁当だ。

「え〜？ でも、前に見た時はすごく凝ってて美味しそうだったよ？ あれは絶対に冷凍食品なんて使われてなかったね！ やっぱ愛情がなきゃできない！」

「む」

それを言われると反論できないな。確かに冷凍食品は使われていないし、おかずの種類がそれなりに多いから作るのも大変だろう。

「そんなことよりお前達はもう飯は済んだのか？」

「あーっ、ごまかした〜」

「やっぱりラブラブなんだ！」

「ああ、はいはい、ラブラブね。で、お前等はどうした？」

「むう、スルーですか、先生。中々手強いね」

「私達はこれからですよ！ 部室で皆と食べてきます！」

「うちらは飲み物の買い出し係り」

なるほど、確かにこいつらの手の中には人数分以上の飲み物がある。

「そうか。じゃあこんな所で油を売っている訳にはいかないな」

「そうですね！　じゃあ、先生、また〜」

「ばいばい、先生！」

「またね〜」

「おう、授業に遅れるなよ〜」

「「「はーい」「」」」

元気よく返事をし、少女達が離れていく。

そしてその時、バタバタした様子で俺のクラスの一人が走って来た。

「先生！」

「うん？　亞北か。どうしたんだ、そんなに慌てて」

こいつは亞北ネル。長い金髪のサイドテールをした苦学生（中一）。

ちょっと取っ付き難い感じがするが、面倒見がよく、以外と人気者だ。

「ちょっと一緒に来て！　皆が大変なの！」

「あ、ああ」

よく分からんが何か大変らしい。

亞北は俺の手を取ると走りだした。

しばらく走ったあと、俺たちは屋上のコートに出た。

そこには俺のクラスの数人と上級生が数人、険悪な表情で向かい合っていた。

「どういう状況だ？」

「あつ、先生」

「鳳姫先生?!」

「お前は内のクラスのグッドマンだな。そっちは二年の茂部英子か？ それで何があつたんだ？」

「私達が先にここを使っていたのに、先輩がいきなり来て私達を追い出そうとしたのです!」

俺が問題を聞くとグッドマンが威勢良く説明してくれた。

よく見ると彼女達の手にはボールがある。バレーでもやっていたのだろつ。

そして件の先輩のほうを見るとやっぱりボールがある。

「ふんっ! 彼女達は所詮遊びでやっていたのでしょつ? 私達はもうすぐドッジボールの地区大会が始まるのよ! 練習が必要だわ!」

「なるほど・・・けど、だからって先に使っていた後輩を追い出す権利なんかないだろうに」

「うっ・・・しかし！」

「部活に必要ななら前もって顧問の先生に相談するか生徒会にグラウンドの使用許可を申請するか、他にできることがあるだろう？」

「それはもうしました！ それで特別に体育館の使用時間も増えました。でも、僅かでも多く練習したいから、それ以外の時間で使えて、敷地が広いここを使いたいです！」

頑張ってるんだなあ・・・

その努力は認めるけど、無理矢理屋上を占拠するのは違うだろう。

「事情があるのは分かった。だが、無理矢理っていうのはいけない。グッドマン達も鬼じゃないんだ。ちゃんと事情を説明して丁寧に頼んでみたか？ そうすれば彼女達も場所を譲ってくれたかもしれない」

「それは・・・」

茂部の気まずそうな顔を見れば、問答無用にこいつらをどかさうとしたのだろう。

「あなた達、ごめんなさいね。大会が近くて少し焦っていたかもしれないわ。気を悪くさせたなら謝罪するわ。今度からはちゃんと話し合いますよ」

「先輩・・・いいえ、こちらも少し意固地になっていたわ。ただ遊ぶ場所ならここじゃなくてもよかったのに」

茂部が謝ると何故か被害者の筈であるグッドマンまで謝罪する。でも、これで一応この場は治まったか？

「先輩、今日はどうぞ屋上を使ってください。そして大会も頑張ってください！」

「あなた・・・どうもありがとう。この事は忘れないわ。これから何か困りごとがあれば遠慮なく相談して。この茂部英子と私達ドッジボール部が全力を尽くすわ！」

「「「おおおー！」「」」

パチパチパチ・・・

応援の言葉を送りながら握手をする為に手を出すグッドマン。そしてその手を取り、何かを宣言する茂部。それから沸き上がる拍手の嵐。

ちよつと大げさじゃね？

まあ、これで解決ならもう俺はいらないな。

そう考えて静かに屋上を出る。

・・・

・

・

「少し待ってください、先生！」

屋上から出て階段を下りる途中、後ろから呼ばれる。

振り向くと少し息を荒げたグッドマンと亞北がいた。

「ん？ どうした？」

「助けてくださってありがとうございます！」

頭を下げてこっちに御礼を言うグッドマン。亞北もその横で頭を下げている。

「生徒を助けるのが先生の仕事だ。いつでも遠慮せずに頼めばいいさ」

「「はいっ！」」

笑顔を浮かべて二人が返事する。

それを見て満足した俺は何度も頷きながら背を向ける。

「じゃあまたホームルームでな。授業に遅れるんじゃないぞ」

そんなことを言いながら手を振ってその場から離れる。

直接は見ていなかったが、二人がまた頭を下げながら俺を見送る気が配がした。

それにしてもグッドマン・・・

フルネームを高音・D・グッドマンといい、魔法生徒の一人である。得意魔法は影魔法。これを見た時はビビッと来たね。

なにせ、あの悪名高い『脱げ女』が俺のクラスにいたのだから。

これはやっぱりフラグか？

俺は彼女に修行を付けて『脱げ女』から助けるべきなのか？

だが、そのままにしたほうがギャグ的にいろいろ面白そうだし、このままにしておくか？

うーむ、悩むぜ・・・

第八十三話：あの先輩はこんな時からあだったのです（後書き）

今回はあの人の初登場。亞北ネルはネタです。もちろん特技は掲示板の書き込み。多分魔法生徒ではない。

二人がこれからも登場場面があるかは作者の気分次第。読者の反響も考慮するかも？

第八十四話：遅れてやってきたあの人（前書き）

遅れてすみませんでしたっ！

少し短いですがとりあえず書き上がったので投稿します！

第八十四話：遅れてやってきたあの人

<side:ソウジ>

「先生えー、さよーならー！」

「またあしたー！」

「おー、気をつけて帰れよ！」

「はーい！」

今日もいつもの放課後。

帰っていく生徒と挨拶を交わしつつ、これからの予定について考える。

（あー、今日は確かあれがあったか？）

『あれ』っていうのは週一くらいで俺が開いている魔法教室だ。

これは何年か前にうちの魔法生徒が俺の噂を聞いて教えて頼んできたことから始まり、そのことを聞いた他の生徒が加わり、今では毎回十人ほどが集まって切磋琢磨している。

勿論、今年の一人はグッドマンだ。彼女はやはり影魔法が得意なよ
うで、最近エヴァを紹介したほうがいいのかどうか迷っている。ま
あ、俺は影魔法が得意じゃないとはいえ、全く使えない訳じゃない
し、コーチだから知識と指導力があればなんとかなるだろうと思っ
てる。

そして気になる実力の方だが、流石としか言いようがない。同年代の子と比べたら飛び抜けて高い。チート存在が蔓延っているこの世界だが、それらの数が極端に少ないってことを忘れちゃいけない。そして大多数であるチートじゃない魔法使いの中ではグッドマンは上の方だ。やっぱり関東魔法協会の本部である麻帆良には優秀な人材が集まってると思うことだろうな。

「んじゃ、行くとすつか」

・

・

・

ガラガラ・・・

扉を開けて中に入るとすでにほとんどの面子が集まっていた。

「おーっす」

「先生！ 遅いですわよ！」

そうやって怒るのは委員長風が強いグッドマン。

「おいおい、グッドマン、遅いと言っても授業が終わってから十分分そこらだろ？ 俺にも先生として一日の終わりにいるいろとや

ることがあるんだよ」

時計を確認しながら反論する。

うん、まだまだセーフなはずだ。

「気にしないで、先生。高音はただ早く先生に会いたくてそわそわしていただけなんだから」

「なあっ?!」

生徒の一人が楽しげにそう指摘するとグッドマンは湯気が出そうなほど顔を赤くし、言葉を失った。

こいつの名前は佐天涙子って言って、実力は普通だが楽しい子だ。

「そうなのか？　だが、本気で俺を狙うんならまずはこわ〜いかみさんを倒さないといけないからかなりきついぞ」

「はああ?!」

「えーっ、そうなの？　先生の奥さんって前に見たけど、ちよっとおっとりしててやさしそうだったよ？　まさにこれぞ大和撫子！　って感じで！」

それはエヴァじゃなくて鶴子のほうだと思うが、これをエヴァが聞いたらどう考えるだろう？　というか、エヴァってどう見られてるんだ？

「ちよ、ちよ、ちよっと！　何を当たり前のように話を進めてるのよっ！　先生、違いますからね！　私はそんなじゃないですからっ

！」

「そうなのかあ、いやー、残念だなー。俺はグッドマンに嫌われてたのかー」

「大丈夫よ、先生！ 私は先生のことが好きだから！」

俺が悔しそうな声で悲しみを装うと佐天が乗って来て俺に抱きついてきた。

「おお、慰めてくれるのか佐天！」

「先生！」

「佐天！ お前だけが俺の味方だ！」

「ちょっと涙子さん、私だって先生のが好きですわよ！・・・ハッ！~~~~~っ！」

俺と佐天が大げさに抱き合っているとグッドマンが焦った様子で告白紛いなことを言う。そして自分が何を言っただかに気づき、また赤面する。

更に横ではにやにやしている俺や佐天、及び他の生徒を見てグッドマンはついに限界に達し、教室から脱兎の如く走り去った。

「あつ、やりすぎちゃったかな？」

俺から離れながらグッドマンが消えた扉を見ていた佐天がぽつりと漏らす。

「俺も悪ノリが過ぎたか？　だが、佐天よ、なかなかいいアドリブだったぞ！」

「いえっ！　まだまだ先生には及びません！」

ピシッとサムズアップを送り、彼女も同様に返す。

うむ、面白い生徒がいると俺も先生という仕事楽しくなるな。

さてと、そろそろグッドマンを捜しに行くかね。さすがに放置したままというのはちょっと駄目だと思う。

「それじゃ俺はグッドマンを探して連れてくる。お前達は俺が戻ってくるまで自習、もしくは習ってみたいことを考えてる。くれぐれも騒ぎになるような事をするんじゃないぞ」

「「「はーい、せんせい！」」」

「初春~~~~~！　一緒に練習しよう！」

「はい、佐天さん！」

皆の返事に満足し、俺はさっさとグッドマンを探しに教室を出た。その後ろでは生徒達がペアを組んだり、魔導書を読み出したりして各々練習を始めていた。

・・・

・

・

「うーむ・・・グッドマンは一体どこまで行ったんだ？」

グッドマンを探し始めてからかれ十五分くらい経っているけど、一向に見つかる様子がない。

教室、屋上、食堂といった、あいつがいそうな場所は回ったが、誰も見ていないと言う。一応、靴箱も確認したが、帰った様子がなかったし、多分まだ学校にいると思うが・・・

もしかや女子トイレに閉じこもってるのか？！

さすがの俺でもその秘境の中にまで捜しに行く度胸はないぞ！

仕方がない、他の皆をいつまでも待たせていたら悪いし、そろそろ戻るか。グッドマンはいずれ戻ってきた時に謝ろう。

そうして捜索を切り上げ、教室に戻ろうとした時、背中にちょっとした衝撃がして危なく転びそうになった。

「おい、ちゃんと前を向いて歩け！　今のは俺じゃなきゃ転んでたぞ！」

誰かが前方不注意でぶつかってきたと思い、怒鳴りながら振り返ったがそこにいる人物を見て驚いた。

「やっほー、ソウジ！」

そうやって笑いながら未だに俺の背中に抱きついて挨拶してきたのは少し前に知り合った女性。

「アルクエイド・・・」

「あはは、きちやった！」

うわああああ~~~~~・・・

お茶目な笑顔で言うアルクエイドが憎い！　そして少し可愛いと思っっている自分も！

もはやグッドマンのことは頭から吹っ飛んでいる。

別れる時にアルクエイドは何か言っていたが、まさか本気にここまで来るとは考えてなかった。

というか、学園の奴らは何をやってるんだよ！　こんな奴を簡単に本部の膝元まで通すなよ！

そして今から帰った時が恐くなり、背筋が凍っていく。

すまん、エヴァ。でも、世界が壊れるのが嫌ならどうにか我慢してくれ！

第八十四話：遅れてやってきたあの人（後書き）

佐天、初春はオリキャラを考えるのが面倒で少し登場させてもらいました。多分もう出て来ないでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3155k/>

オリ主のオリ主によるオリ主の為の原作ブレイク

2011年10月21日09時03分発行